仙台市文化財調査報告書第272集

元袋遺跡

—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—

発掘調査報告書Ⅱ

２００４年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第272集

元袋遺跡

—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—

発掘調査報告書Ⅱ

２００４年３月

仙台市教育委員会

表紙題字　小川邦一　筆

序　文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解、ご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

仙台市の南部に位置する富沢・大野田地区は市内でも遺跡が数多く分布する地域です。北に隣接する長町・富沢地区においては土地区画整理事業、地下鉄南北線の開業によって都市としての基盤整備が進められ、急速に開発・都市化が進行しています。こうした動きの中で開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、年毎に先人の生活文化の様相が解明されつつあることは喜ばしいところであります。現在まで継承されてきた先人たちの文化遺産を新しい「まちづくり」の中でどのように活用していくのか地域の方々と共に考えてまいりたいと存じます。

さて、この度の元袋遺跡の発掘調査は、都市計画道路「川内・柳生線」の建設に伴うもので、平成５年４月から平成７年10月にかけて実施されました。その結果、弥生時代から近世にいたるまで、連綿として続いた人々の生活の痕跡を発見いたしました。とりわけ江戸時代前期の伊達家に係わると考えられる屋敷跡の発見は、この地域の歴史の一端を解明するための一助となる大きな成果の一つであると存じます。本報告書はそれらの発掘調査成果をまとめたものであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にご協力、ご指導、ご助言いただきました多くの皆様や関係機関各位に心より感謝申し上げるとともに、文化財保護行政に対しまして、今後とも市民の皆様のご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成16年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　言

1．本書は、仙台市太白区大野田字元袋に所在する「元袋遺跡」の発掘調査報告書である。

2．「元袋遺跡」の発掘調査は都市計画道路「川内・柳生線」の建設に伴い、これに先行して実施されたものである。「元袋遺跡」は第3次発掘調査である。

3．遺構図面・写真・遺物の整理は小川淳一（遺構図・遺構写真・遺物）・主浜光朗（遺物・遺物写真）・赤澤靖章（遺物）・高橋綾子（遺構図・遺構写真・遺物・遺物写真）が行い、本文の執筆・編集は主浜光朗が担当した。

4．自然科学的諸分析や鑑定については、次の方々・機関に委託・依頼した。

○プラント・オパール分析：古環境研究所　　○樹種同定：高橋敏彦（木工舎ゆい）

○漆器塗膜分析：北野信彦（くらしき作陽大学）　○動物依存体：パリノ・サーベイ

○大型植物化石：吉川純子（古代の森研究舎）　○火葬骨分析：百々幸雄・澤田純明（東北大学大学院）

○石材鑑定：蟹沢聰史（東北大学）

5．中近世陶磁器は次の方々のご指導をいただいた。

愛知県陶磁資料館　井上喜久夫　　仙台市博物館　佐藤　洋

6．写真実測用遺物写真の撮影は㈱シン技術コンサルに委託した。

7．報告書掲載用遺物写真の撮影は㈱アート・プロフィールに委託した。

8．発掘調査の記録、資料および出土遺物の一切は仙台市教育委員会で保管しているので、活用されたい。

9．発掘調査および報告書作成に際し、次の方々と機関から多大な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

佐藤　巧（東北大学名誉教授）　手塚　均・及川規夫（東北歴史博物館）　鋤柄俊夫（大阪府文化財調査研究センター）　高橋圭次（川俣町教育委員会）　富岡直人（岡山理科大）　宮城県工業技術センター　仙台市博物館学芸室　金子浩昌（早稲田大学）

凡　例

1．本書の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原：1975、1977）を使用した。

2．本書の「周辺の遺跡」は国土地理院発行の１／25,000地形図「仙台市南西部」を複製して使用した。

3．本文および図版で使用した方位の北は真北を基準としている。

4．図版中のレベルは海抜標高を示す。

5．調査区の基準線は、道路のセンター杭No.2とNo.17を結んだ線を調査区の南北の基準線として、元袋遺跡から大野田遺跡までの調査区全体にグリッドを組んだ。因みに基準点G1は杭No.2の３m南である。
座標値はNo.2：X=－197981.26　Y=4224.7496　No.17：X=－198279.9276　Y=4196.6294である。

6．層位名は基本層をローマ数字、遺構内堆積土については算用数字を使用している。さらに細分されるものはそれぞれにアルファベットの小文字を併用している。

7．本書の検出遺構の表示については次の略号を使用し、原則として発見順に番号を付した。但し、土坑、掘立柱建物跡、性格不明遺構はⅠ区とⅡ・Ⅲ区それぞれで、発見順に番号を付した。

ＳＡ＝柱列	ＳＢ＝掘立柱建物跡	ＳＤ＝溝跡・堀跡	ＳＥ＝井戸痕
ＳＩ＝竪穴住居跡・竪穴遺構	ＳＫ＝土坑	ＳＲ＝河川跡	ＳＸ＝性格不明遺構
Ｐ＝ピット・柱穴			

8．本書の出土遺物の分類と登録には次の略記号を使用し、分類毎に登録番号を付した。

Ａ＝縄文土器	Ｂ＝弥生土器	Ｃ＝土師器（非ロクロ）	Ｃａ＝土師質土器
Ｄ＝土師器（ロクロ）	Ｅ＝須恵器	Ｆ＝丸瓦	Ｇ＝平瓦
Ｉ＝陶器	Ｊ＝磁器	Ｋａ＝剥片	Ｋｃ＝礫石器
Ｋｄ＝石製品	Ｋｅ＝石包丁	Ｋｆ＝磨製石斧	Ｋｇ＝大型板状石器
Ｋｈ＝石鏃	Ｋｉ＝石錐	Ｋｊ＝石匙	Ｌａ＝漆器類
Ｌｂ＝下駄	Ｌｃ＝木製品	Ｎａ＝古銭	Ｎｂ＝煙管
Ｎｃ＝金属製品	Ｐ＝土製品	Ｔ＝瓦質土器	

9．土師器の実測図で内面の一部のスクリーントーンは黒色処理を表している。

目　次

序　文

例　言

凡　例

Ⅰ　はじめに …… 1

　1．調査に至る経過 …… 1

　2．調査要項 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2

　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 2

　2．歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調査の方法と概要 …… 7

　1．調査の方法 …… 7

　2．調査経過と概要 …… 7

　3．整理の方法 …… 10

Ⅳ　基本層序 …… 10

Ⅴ　検出された遺構と遺物 …… 19

　1．弥生時代以前の遺構と遺物 …… 19

　　水田跡 …… 20　　遺構外出土遺物 …… 24

　2．古代～中世の遺構と遺物 …… 25

　　Ⅰ区　竪穴住居跡 …… 25　竪穴遺構 …… 33　竪穴建物跡 …… 35

　　土　坑 …… 36　その他の遺構 …… 40

　　Ⅱ・Ⅲ区　竪穴住居跡 …… 40　土　坑 …… 77

　　溝　跡 …… 96　円形周溝 …… 101

　　小溝状遺構群 …… 102

　3．近世の遺構と遺物 …… 107

　　Ⅰ区　堀　跡 …… 107　掘立柱建物跡 …… 108

　　Ⅱ・Ⅲ区　溝　跡 …… 109　堀　跡 …… 138

　　井　戸　跡 …… 192　埋設土器 …… 196

　　性格不明遺構 …… 197　掘立柱建物跡 …… 204

　　遺構外出土遺物 …… 218

Ⅵ　まとめ …… 230

Ⅶ　同定・分析 …… 241

　　プラント・オパール分析 …… 242　大型植物遺体分析 …… 248

　　花粉分析 …… 254　樹種同定 …… 258

　　漆器塗膜分析 …… 281　火葬骨分析 …… 289

　　動物依存体分析 …… 295

　写真図版 …… 301

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

平成元年4月に政令指定都市に移行した仙台市は、高速鉄道南北線の開業や、北では泉、南では長町で副都心構想による開発が進んでいる。これに呼応するように、各地区で交通渋滞緩和に向けて都市計画道路の建設、整備が実施されている。仙台市南部の太白区では、市中枢部に至る道路網の渋滞緩和と、高速鉄道南北線への接続のため、南北道の建設が急がれていた。都市計画道路「川内・柳生線」は高速鉄道長町南駅や国道286号線へ南から接続する道路として一部開通していたが、大野田地区から柳生地区の区間約1.5kmが未開通となっていた。

昭和62年、都市計画道路「川内・柳生線」の未開通部分の開通予定が決定されたことを受け、仙台市教育委員会では路線敷内の分布調査および試掘調査を実施した。昭和62年の名取川以北の大野田地区の試掘調査において周知の大野田遺跡、元袋遺跡の2遺跡の他に新たに2遺跡が確認された。それぞれ、所在する場所の小字名から王ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡と呼称することとした。昭和63年には名取川以南の柳生地区の試掘調査を実施したが、遺跡は確認されなかった。分布調査および試掘調査の結果をもとに、仙台市教育委員会は仙台市建設局道路部と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、最終的に、道路建設に先立って、記録保存のための4遺跡の発掘調査を実施することとなった。4遺跡の調査対象面積は路線幅36m、長さ約900mの約3.24haである。発掘調査は南半の王ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡から始め、終了後、順次北側の大野田遺跡、元袋遺跡の調査を行うこととした。

昭和63年王ノ壇遺跡から発掘調査を開始し、平成5年から平成7年まで行った大野田遺跡、元袋遺跡の調査をもって、7年半にわたる4遺跡の調査を全て終了した。平成8年都市計画道路「川内・柳生線」大野田－柳生間の全線が開通した。

2．調査要項

(1) 遺　跡　名：元袋遺跡（宮城県登録番号01179、仙台市登録番号Ｃ－266）
(2) 所　在　地：仙台市太白区大野田字元袋・袋東
(3) 調 査 目 的：都市計画道路「川内・柳生線」建設に伴う事前調査
(4) 調 査 主 体：仙台市教育委員会
(5) 調 査 担 当：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
(6) 調査担当職員：小川淳一（平成5～7年度）　齊野裕彦（平成5年度）　主浜光朗（平成5～7年度）
　　川名秀一（平成5～6年度）　竹田幸司（平成5年8～10月）　高橋綾子（平成7年度）
(7) 調 査 期 間：平成5年度　4月13日～10月21日
　　平成6年度　7月4日～12月6日
　　平成7年度　4月4日～10月13日
(8) 調査対象面積：5,300㎡
(9) 調 査 面 積：約3,380㎡
(10) 調 査 協 力：仙台市建設局道路部街路課　板橋次男　小林　功　橋本店

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

本遺跡はＪＲ東北本線長町駅より南西へ約１km、地下鉄長町南駅から南へ約600ｍの地点、仙台市太白区大野田字元袋、袋東地内に所在する。遺跡の南方約1.2kmには名取川が、東方2.7kmには名取川と広瀬川の合流点が望める所である。遺跡の範囲は東西約250ｍ、南北約170ｍで面積は約22,000㎡に及ぶものと推定される。

第１図　遺跡位置図

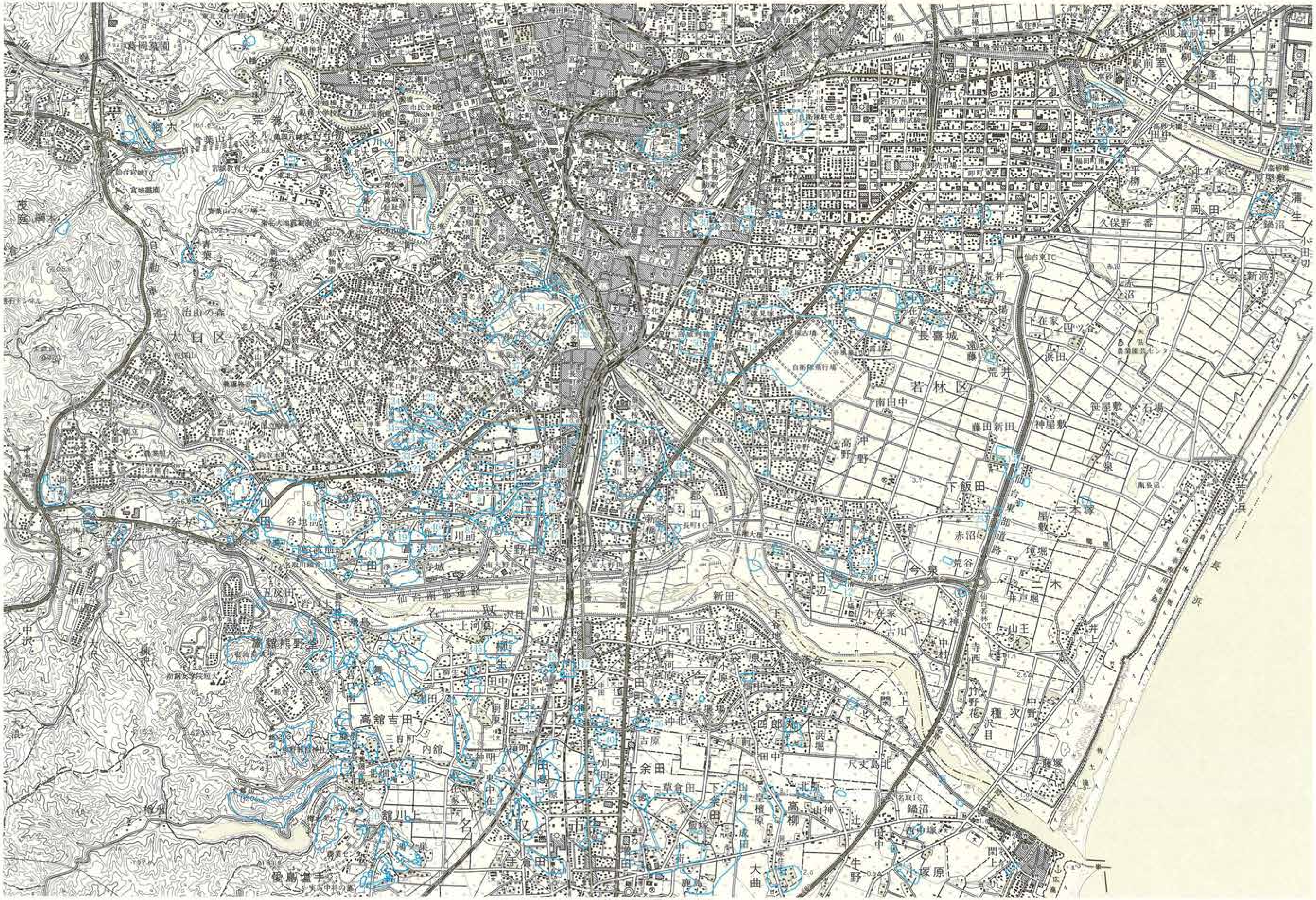
遺跡周辺の地形を概観すると、西側に南北に連なる奥羽山脈と、その東麓から派生する陸前丘陵、さらに東方に宮城野海岸平野が広がっている。仙台市南部付近では陸前丘陵と広瀬川と名取川が東流しており、その河間段丘は青葉山丘陵（最高標高212m）、広瀬川以北を七来田丘陵（標高500m前後）、名取川以南を高館丘陵（標高200m前後）と呼称されている。広瀬・名取両河川は中流域に下刻作用により、４～５段の段丘地形を発達させている。それらは古期より青葉山段丘・台原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と呼称されている。また、両河川は丘陵を貫流した後、沖積作用により宮城野海岸平野を形成している。宮城野海岸平野は地理的条件や成因、地質などから幾つかに地形区分されており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼称している。

遺跡の所在する大野田地区は宮城野海岸平野の中の郡山低地に所属する。郡山低地は北東縁と南縁を広瀬川と名取川によって画され、北西縁は長町―利府で画された扇状地性の沖積面である。当地域は標高９～10m前後で、名取川及び支流河川が形成した自然堤防とその背後の後背湿地からなっている。この自然堤防を形成した河川のひとつが西側の青葉山丘陵中の太白山付近に起源をもつ名取川の支流である笊川で、富沢地区と大野田地区の間を曲流している。笊川は改修以前には流路を変じつつ頻繁に氾濫を繰り返していたことが知られている。左岸の富沢地区は古くから水田として利用され、右岸の大野田地区は水田あるいは畑として利用されてきた地域である。本遺跡は笊川が南へ大きく流れを変える地点の南岸、馬の背状に東西に延びる自然堤防上に位置する。南へ大きく袋のように開く地形が「袋」の地名の由来といわれ、周辺には「元袋」のほか、「袋前」「袋東」の地名が残っている。遺跡周辺は水田、畑、宅地等であったが近年開発が進み、歴史的環境が残っていた田園地帯の面影は見られなくなっている。

2．歴史的環境

元袋遺跡の所在する名取川下流域には仙台市内でも数多くの遺跡が分布しており、近年の開発の進展に伴い比較的多くの発掘調査が行われている地域である。これまでの調査で旧石器時代から現代まで連綿と続く人々の生活の様相が次第に解明されてきている。

旧石器時代の遺跡としては青葉山丘陵から南に張り出した小支丘端部に上ノ原山遺跡、山田上ノ台遺跡があり、



第２図　周辺の遺跡

上ノ原山遺跡では約３万年前に降下した「川崎スコリア層」の上位と下位から石器が発見されており、山田上ノ台遺跡からは後期旧石器時代の石器が発見されている。また、冲積地では笊川の左岸に位置する富沢遺跡で後期旧石器時代の森林が発見され、当時の焚き火跡と考えられる炭化物の集中部や石器、樹木、トウヒなどの種子やシカの糞などが発見され、すでにこの時期には冲積地まで人々の生活の場が広がっていたことが明らかになっている。

縄文時代では丘陵地から冲積地まで広範囲な地域に遺跡の分布が見られる。前述の小支丘端部や低位の段丘上に茂庭けんとう城跡、人来田遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上野遺跡、三神峯遺跡等の遺跡がある。早期後半から前期前葉にかけての集落跡が北前遺跡、三神峯遺跡で発見され、前期末葉から中期末葉にかけての集落跡が人来田遺跡、北前遺跡、山田上ノ台遺跡、上野遺跡で発見された。特に山田上ノ台遺跡では中期末葉の竪穴住居跡が38軒発見され、大規模な集落跡であることから、保存して整備活用を図る計画が進められている。後期後葉では茂庭けんとう城跡で竪穴住居跡が発見されている。低地には自然堤防上や自然堤防から後背湿地にかけて、多数の遺跡が確認されている。下ノ内浦遺跡、山口遺跡、六反田遺跡、下ノ内遺跡、大野田遺跡、伊古田遺跡、王ノ壇遺跡、鍛冶屋敷Ａ遺跡等の遺跡がある。早期前葉では下ノ内浦遺跡で竪穴住居跡・落とし穴等の遺構と押型文土器が発見され、早期末葉には山口遺跡で土器が発見されており、丘陵地と同時期に低地でも集落が営まれていたことが明らかになった。中期中葉には六反田遺跡で竪穴住居跡が発見されている。末葉から後期初頭には下ノ内遺跡、六反田遺跡で竪穴住居跡が発見されている。下ノ内遺跡の竪穴住居跡の中には３軒の敷石住居がある。後期前葉には下ノ内浦遺跡で配石墓を中心とした墓域が発見され、大野田遺跡では盛土の上面及び下層から配石墓・配石遺構を中心とした遺構が発見され、300点以上という多数の土偶や祭祀に関係する遺物が発見されている。後期中葉から後葉には鍛冶屋敷Ａ遺跡で竪穴住居跡や配石遺構が発見され、伊古田遺跡、王ノ壇遺跡、さらに郡山低地東部の郡山遺跡で遺構と遺物が発見されている。名取川下流にある高田Ｂ遺跡では後期中葉の竪穴住居跡が１軒発見されている。後期後葉では王ノ壇遺跡で遺物が発見され、笊川下流の東方の北目城跡と名取川を中流域まで逆上った丘陵上にある茂庭けんとう城跡から竪穴住居跡が発見されている。晩期になると遺跡数は減少し、名取川の中流域の茂庭地区で梨野Ａ遺跡で土坑墓が発見されているほか、低地の山口遺跡、郡山遺跡等で遺構や遺物が発見されている。

弥生時代には、遺跡数は減少するが丘陵部から低湿地まで広範囲な遺跡の分布が見られる。丘陵上には土手内遺跡があり竪穴住居跡が発見されている。段丘部には船渡前遺跡があり遺物包含層が発見されている。低地の自然堤防上から後背湿地にかけて下ノ内浦遺跡、富沢遺跡、山口遺跡等の遺跡があり、自然堤防上の下ノ内浦遺跡では土

No.	遺跡名	立地	種別	年代	No.	遺跡名	立地	種別	年代
1	山田上ノ台遺跡	段丘	集落跡	旧石器(前・後)・縄文(早・中・後)・平安・近世	26	後河原遺跡	自然堤防・後背湿地	水田跡	弥生・奈良・平安・中世・近世
2	北前遺跡	段丘	集落跡	旧石器(前・後)・縄文(早・中)・平安・近世	27	栗遺跡	自然堤防	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安
3	人来田遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)・弥生	28	清水遺跡	自然堤防	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
4	三神峯遺跡	丘陵	集落跡	縄文(前・中)・平安	29	郡山遺跡	自然堤防	官衙跡・寺院跡	縄文(後・晩)・弥生(中)・古墳・奈良・平安
5	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・水田跡	縄文(早・晩)・弥生	30	陸奥国分寺跡	段丘	寺院跡	奈良・平安
6	上野遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)・奈良・平安	31	陸奥国分尼寺跡	段丘	寺院跡	奈良・平安
7	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(中・晩)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	32	富沢遺跡	自然堤防・後背湿地	包含地・水田跡	旧石器(後)・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
8	下ノ内浦遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(早・前・後)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	33	三神峯古墳群	丘陵	円墳	古墳
9	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(中・晩)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	34	土手内横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓群	古墳（末）
10	金剛寺貝塚	段丘	貝塚	縄文(前・後・晩)	35	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳（中）
11	船渡前遺跡	段丘	包含地	縄文・弥生・奈良・平安	36	裏町古墳	丘陵麓	前方後円墳	古墳
12	高田Ｂ遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・包含地	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	37	一塚古墳	丘陵麓	円墳	古墳（中）
13	藤田新田遺跡	浜堤	集落跡	弥生・古墳・平安	38	二塚古墳	丘陵麓	前方後円墳	古墳
14	南小泉遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	39	兜塚古墳	段丘	前方後円墳	古墳（中）
15	西台畑遺跡	自然堤防	集落跡・包含地	縄文・弥生(中)・古墳・奈良・平安・中世	40	中田南遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文(晩)・弥生(中)・古墳・奈良・平安・中世
16	大野田遺跡	自然堤防	祭祀跡・集落跡	縄文(後・晩)・弥生(中)・古墳・奈良・平安	41	御堂平遺跡	谷底平野	集落跡	縄文・平安・中世
17	安久東遺跡	自然堤防	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	42	山田条里遺跡	冲積平野	水田跡・屋敷跡	縄文・平安・近世・近代
18	安久遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(晩)・弥生・奈良・平安・中世	43	南ノ東遺跡	冲積平野・自然堤防	散布地	弥生・平安
19	鍛冶屋敷Ａ遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(後・晩)・奈良・平安	44	茂ケ崎城跡	丘陵	城館跡	中世
20	鍛冶屋敷前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(後・晩)・奈良・平安	45	柳生台畑遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	古墳・奈良・平安・中世
21	原遺跡	段丘	円墳・集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	46	富沢館跡	自然堤防	城館跡	中世
22	今泉遺跡	自然堤防	集落跡・城館跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	47	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文(後)・弥生・古墳・奈良・平安・中世
23	土手内遺跡	丘陵	集落跡	縄文・弥生・古墳	48	元袋遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
24	芦ノ口遺跡	丘陵	集落跡	縄文(早)・弥生・古墳	49	北目城跡	自然堤防	城館跡・集落跡	縄文(後)・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
25	下飯田遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	古墳・奈良・中世安	50	若林城跡	自然堤防	円墳・集落跡・城館跡	古墳・平安・中世・近世

表１　周辺の遺跡地名表

坑墓・竪穴遺構等が発見されている。後背湿地に立地する富沢遺跡、山口遺跡からは水田跡が発見されている。さらに郡山低地東部の西台畑遺跡では甕棺墓が発見されている。また、名取川下流にある高田Ｂ遺跡、中在家南遺跡では埋没した河川跡から多量の土器や石器と共に農耕具を中心とした多量の木製品が発見された。これらに伴う集落跡は明らかではないが、後背湿地周辺の自然堤防上や段丘縁辺部に存在すると考えられている。

古墳時代には、さらに遺跡の分布範囲が海岸近くの浜堤上にまで広がっている。高塚古墳をみると、丘陵頂部から麓にかけて円墳群である三神峯古墳群、前方後円墳である裏町古墳、二塚古墳、円墳である一塚古墳等があり、さらに原遺跡では方墳１基と円墳12基の古墳が発見されている。ほとんどの古墳には埴輪が伴っている。原遺跡では人物埴輪が発見されており、一塚古墳、二塚古墳では石室と石棺が確認されている。低地の自然堤防上には笊川を挟んで北側に兜塚古墳、教塚古墳、金岡古墳等があり、南側には前方後円墳である鳥居塚古墳のほか前方後円墳と考えられる春日社古墳、円墳の王ノ壇古墳を含む大野田古墳群がある。これらの古墳には埴輪が葺かれているものが多い。この埴輪を焼成した窯跡として富沢窯跡がある。この時期の集落跡は丘陵上の土手内遺跡の他、自然堤防上に六反田遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡等がある。富沢遺跡からは水田跡が発見され、王ノ壇遺跡から山口遺跡にかけての地域では古墳時代後半から奈良時代にかけての畑耕作の天地返しや、畝の痕跡と考えられる小溝状遺構群が広範囲に発見されている。一方、郡山遺跡では多賀城以前の大規模な官衙跡が発見され、Ⅰ期・Ⅱ期の２時期にわたって造営されており、Ⅱ期官衙には寺院（郡山廃寺）が付属していたことが判明している。その他に丘陵斜面には窯跡や横穴墓群が多数みられる。金山窯跡、土手内窯跡は７世紀代の須恵器窯である。金山窯跡は発掘調査は行われていないが、土手内窯跡は３基調査され、地下式の窖窯であることが確認された。製品が発見されていないため、焼成されていた須恵器の詳細は不明であり、製品の供給地についても不明であるが、郡山遺跡との関連が考えられている。横穴墓と重複しており横穴墓が窯跡を壊して構築されていた。土手内横穴墓群から東方へ続く丘陵斜面には、二ツ沢横穴墓群・茂ケ崎横穴墓群・大年寺山横穴墓群・宗禅寺横穴墓群・愛宕山横穴墓群が造営され、総数は100基を超えるものと考えられている。

奈良・平安時代には自然堤防上に山口遺跡・下ノ内浦遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・六反田遺跡があり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数発見されている。この時期の竪穴住居跡の特徴として住居跡の方向が真北を向くものが多く、奈良時代のものは住居の北壁にカマドが付設され、平安時代には住居の東壁に付設されるという一定の規格性が認められる。生産域として、富沢遺跡では水田跡が発見され、王ノ壇遺跡・大野田古墳群・大野田遺跡・六反田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡等で奈良時代から平安時代の小溝状遺構群が発見されている。

中世には王ノ壇遺跡で12世紀から14世紀にわたる武士の屋敷跡が発見された。屋敷跡は大溝で区画され、多数の掘立柱建物跡・井戸跡・池跡の他、火葬墓・土葬墓等の宗教関連遺構も発見されている。屋敷跡と同時期に機能した幹線道路跡（推定：奥大道）が屋敷跡の西側で約360ｍにわたって発見され、屋敷跡への枝道も発見した。その他に屋敷跡として山口遺跡・下ノ内遺跡・富沢遺跡で掘立柱建物跡・土坑・井戸跡・竪穴遺構・溝跡が発見され、生産域としては富沢遺跡・山口遺跡で水田跡が発見されている。また、城館跡として、丘陵上に茂ケ崎館跡、笊川右岸に富沢館跡がある。

近世では、山田条里遺跡から屋敷跡の一部と考えられる堀跡と掘立柱建物跡が発見されている。堀には入り口や洗い場と考えられる部分もある。仙台市博物館所蔵の『名取郡北方山田村絵図』（文政４年（1821））に「ヤチヤシキ」と「観世音」と描かれた地点があり、堀は「ヤチヤシキ」の西堀に、掘立柱建物跡は「観世音」と推定され、絵図と調査成果が対応している。元袋遺跡周辺は、名取郡北方三十一ヶ村に数えられる大野田村に属し、戸数45、神社２、仏堂１、古壇１があると記録されている。元袋遺跡より東方約1.7kmには北目城、北西約4.4kmには仙台城本丸、北東約2.8kmには若林城が位置している。

Ⅲ　調査の方法と概要

1．調査の方法

調査区の設定：都市計画道路「川内・柳生線」は、元袋遺跡にかかる部分では南北の直線道であり、その路線幅は36m、長さは約150mである。旧笊川への新たな架橋工事のため先行して工事側へ引き渡すために試掘を行い、旧笊川の影響で遺構の検出されない部分、笊川から道路のセンター杭No.２までの約30mを引き渡し、調査区はそれ以南とした。調査区の基準線は道路のセンター杭を使用し、南北の基準線を設定後調査区全体に３ｍメッシュのグリッドを組んだ。グリッド南北基準線は国家座標ＧＮから４°30′東偏している。グリッド名は東西を西から東にアルファベットで、南北を北から南へアラビア数字で表わし、両者の組み合わせによって呼称することとした。調査を開始した平成５年４月には路線敷き内の地権者の移転が完了していなかった部分があったため、その部分を除いて調査に着手し、移転完了の進捗に合わせて調査区を拡張することとして調査を開始した。調査区内の東西方向の切り回し前の水路を避け、水路以北と以南に調査区を分け、水路以北をⅠ区とし、更に南側を便宜的に南北に分けてⅡ区、Ⅲ区とした。グリッド南北列では、Ⅰ区が１～９、Ⅱ区が９～24、Ⅲ区が25～38である。尚、Ⅰ区、Ⅱ区の境の水路が北東方向のため、Ⅰ、Ⅱ区の境は調査区を斜めに横切るという形になっている。

調査の記録：検出された遺構は、３ｍメッシュのグリッド杭を使用して基準線を設定し、簡易遣り方測量により作図した。調査区全体を縮尺１／40の平面図、縮尺１／20の土層断面図を作成し、各遺構は縮尺１／20を基本として平面図、土層断面図を作成し、必要により縮尺１／10の遺構細部の実測図を作成した。また、近世の柱穴群については縮尺１／40の図面を基に１／100の図を作り、調査期間中に建物を把握することに努めた。

記録写真は、遺跡全景、調査区全景、遺構の検出・調査過程・全景・細部・断面、遺物の出土状況など必要に応じて撮影した。遺跡全景、調査区全景については空中写真を業者に委託して撮影したものもある。主として、35mm版の白黒及びカラーリバーサル写真を用い、状況に応じて６×７版の白黒及びカラーリバーサル写真を撮影した。調査の進行状況は随時35mmカラープリントで撮影した。

2．調査経過と概要

平成５年４月13日から調査を実施した。地権者の移転との絡みもあり、調査区北部のⅠ区とⅡ・Ⅲ区の西半部から調査を開始した。この地区の調査終了後、Ⅱ・Ⅲ区東半部の調査を実施することとした。調査区の西側に隣接する地区で昭和62年度に発掘調査が実施され、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物、中世と考えられる溝跡が検出されていることから、同様の時期の遺構検出を予想して調査に入った。近世、中世、古代の遺構面が確認され、さらに調査区北側では弥生時代の遺構面が検出され、４面の調査を行った部分がある。調査は平成７年10月13日に終了した。以下、年度毎に調査の作業概要と調査成果の概要を記す。

調査概要

平成５年度：Ⅰ区～Ⅱ・Ⅲ区西半部の近世から古代の調査・Ⅰ区及びⅡ区北半部の弥生時代の調査

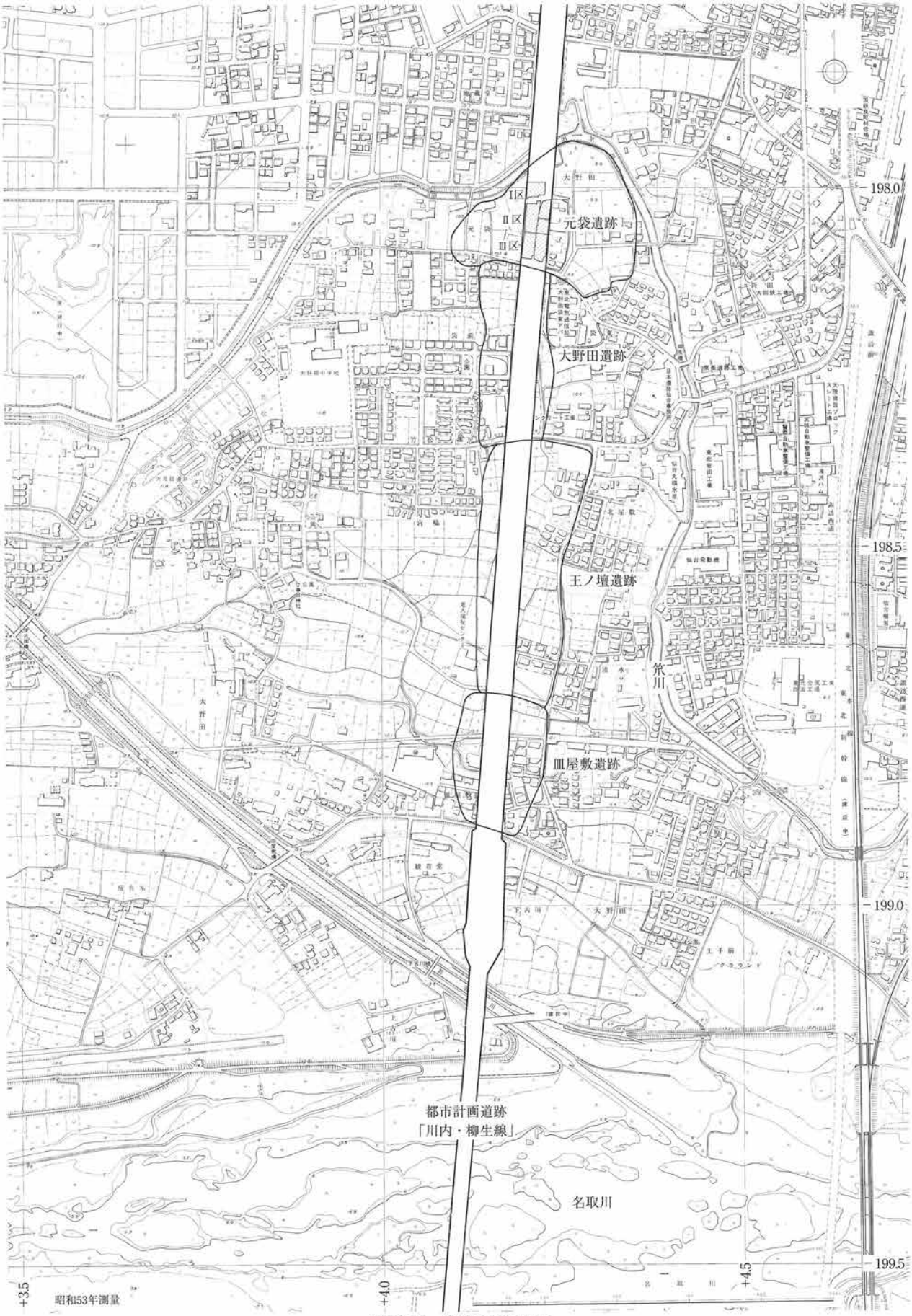
平成６年度：Ⅱ区東半部の北半部の近世から弥生時代の調査

平成７年度：Ⅱ区東半部の南半部・Ⅲ区東半部の近世から古代の調査

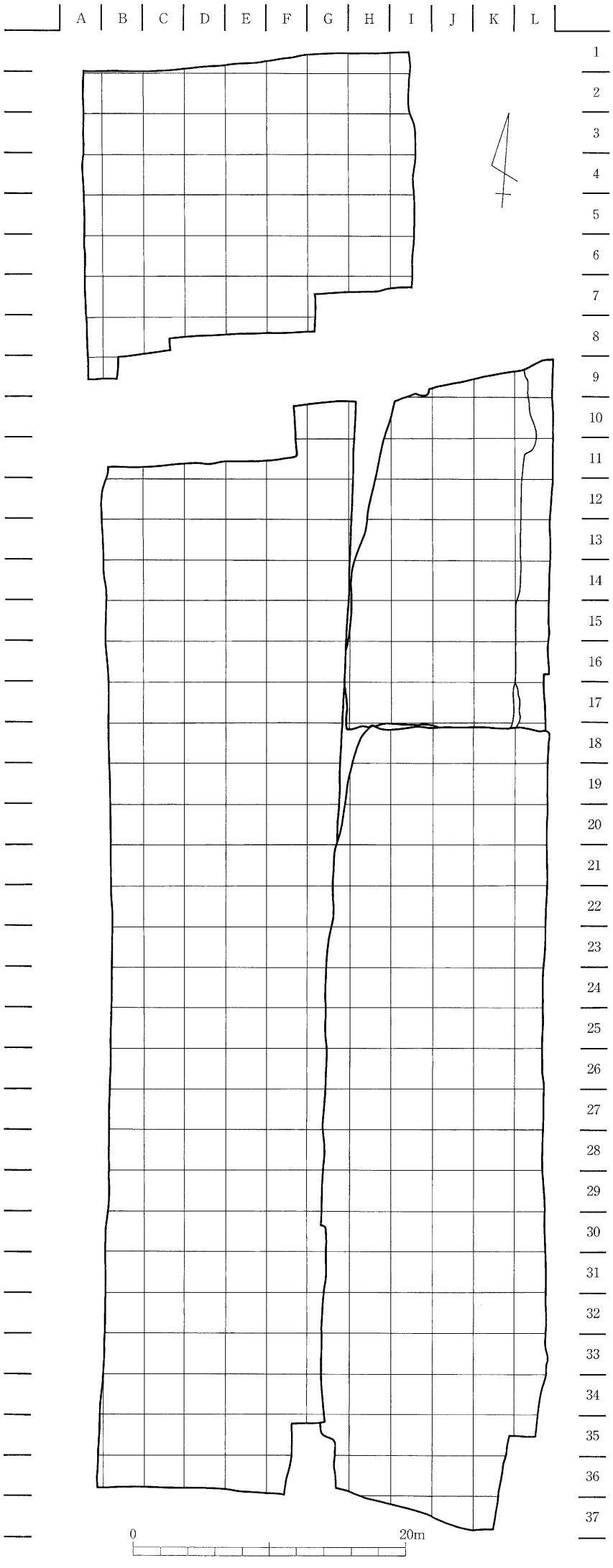
調査成果

Ⅰ区：［近世］河川跡１条・区画溝１条・掘立柱建物跡１棟・土坑７基　［中世］竪穴建物跡１基　［古代］竪穴住居跡６軒・竪穴遺構１基・土坑８基　［弥生］水田跡

Ⅱ区：［近世］掘立柱建物跡18棟・柱跡４列・土坑30基・井戸跡２基・埋設土器１基・性格不明遺構（池跡）１基　［中世］土坑９基・ピット群　［古代］竪穴住居跡21軒・土坑７基・溝跡３条・小溝状遺構群・円形周溝２


Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
元袋遺跡
大野田遺跡
王ノ壇遺跡
笊川
皿屋敷遺跡
都市計画道跡
「川内・柳生線」
名取川
198.0
198.5
199.0
199.5
+3.5
+4.0
+4.5
昭和53年測量

第３図　調査区位置図


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
20m

第4図　グリット配置図

基　［弥生］水田跡

Ⅲ区：［近世］区画溝３条・掘立柱建物跡12棟・柱跡４列・土坑28基・溝跡１条　［中世］ピット群　［古代］土坑１基・溝跡１条・小溝状遺構群

調査成果の公表と普及・啓発活動

現地説明会：調査成果を公表するため、平成７年９月２日、同時期に実施されていた大野田古墳群の調査成果の公表と同時に、中・近世の遺構と遺物を主体とした現地説明会を実施した。Ⅱ・Ⅲ区の東半部で検出された屋敷跡を中心として説明した。

見学会・発掘体験学習：調査期間中の見学の希望については、調査に支障のない限りにおいて全てに対応した。団体での見学としては、東北福祉大学・長町南小学校教員・長町南小学校・鹿野小学校・通町小学校・山田中学校・柏木市民センター・北上市埋蔵文化財センターなどがある。

３．整理の方法

遺構の整理：遺構の実測図は区毎・時代毎に整理した後、遺構の種類毎に、各遺構毎の点検・整理を行い、時代毎に遺構配置図を作成し、合成して各時代毎の全体遺構配置図を作成した。遺構の登録・表示は略号とアラビア数字で表した。土坑以外の遺構については全体の通し番号とし、土坑はⅠ区とⅡ・Ⅲ区でそれぞれ通し番号を付けた。

報告書の遺構図の縮尺は、全体図（１／100・１／300）、各遺構（１／60）を基本としているが、遺構の規模・特徴など必要に応じて適宜に用いている。

遺物の整理：出土した遺物には土器、陶器、磁器、土製品、木製品、金属製品、石器、石製品、瓦、動物依存体、植物依存体などがある。製品類については、原則として１／４以上残存しているものについては実測図を作成することとし、必要に応じてそれ以下の残存率でも実測図を作成した。破片は拓本・写真・登録集計のいずれかの記録保存とした。報告書の遺物実測図の縮尺は、１／３を基本としているが、遺物の大きさ・特徴など必要に応じて２／３・１／２・１／４・１／６の縮尺を用いたものもある。木製品、石製品、金属製品、動植物依存体などの一部については、同定・分析を依頼した。

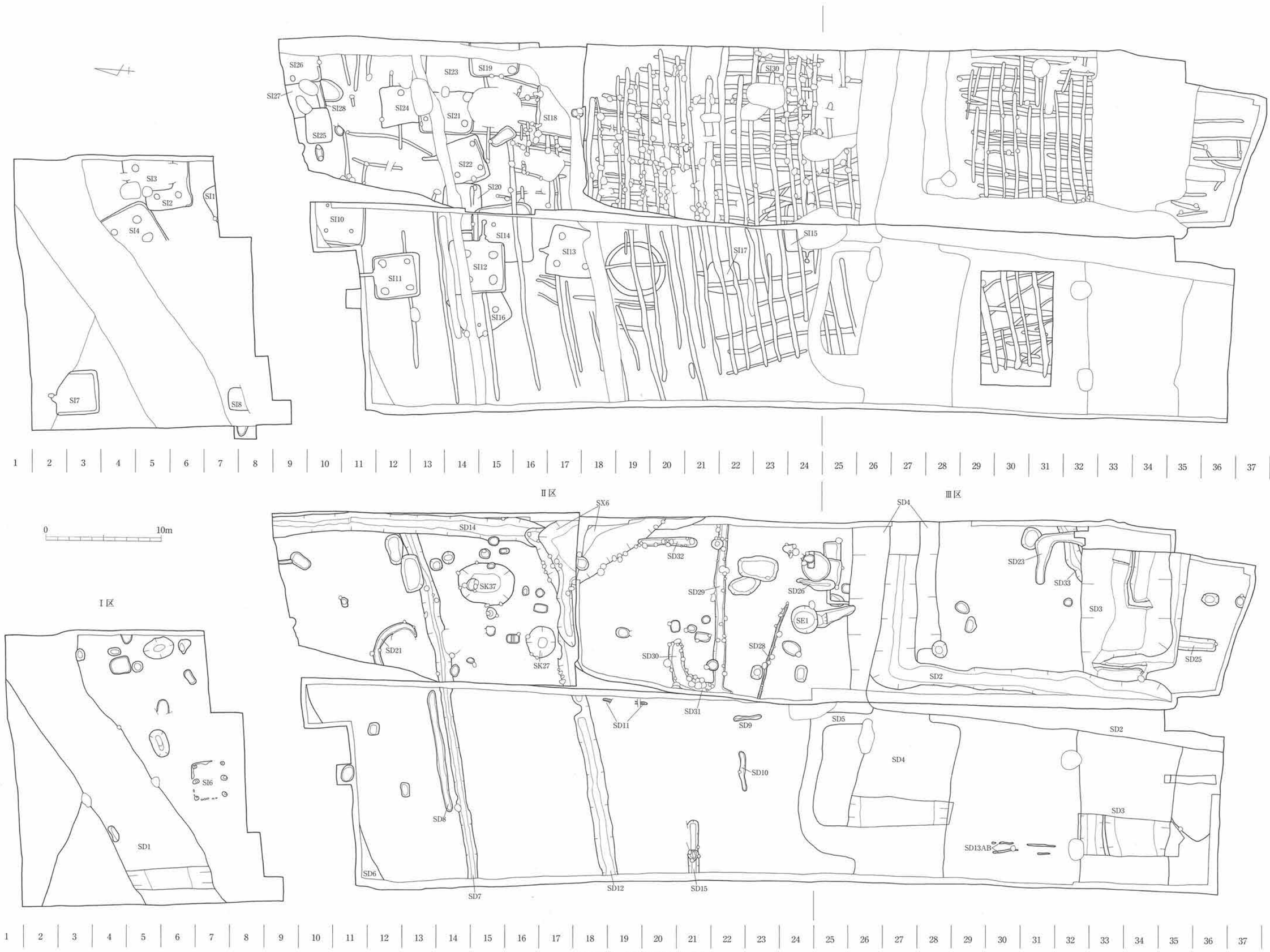
Ⅳ　基本層序

今回の調査は、前述のように３カ年に渡って行われ、調査区を南北に分断する東西方向の水路を挟んで北側のⅠ区と南側のⅡ・Ⅲ区の状況が大きく異なっていた。調査した部分によって土色・土性に若干の相違はみられるがⅠ区ではⅠ～ⅩⅢ層まで12枚、Ⅱ・Ⅲ区では大別Ⅰ～ⅩⅢ層まで13枚、細別23枚の層が確認された。Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区の状況が違うため、各々記述する。

Ⅰ区

Ⅰ層：シルト層で構成される層で、色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）である。粘性・しまりともに無い。層厚は20～60cmで、西側ほど厚くなる。現在の表土で、畑の耕作土である。調査区全体に分布しており、砂礫を含み、部分的に攪乱を受けている。

Ⅱ層：シルト層で構成される層で、色調は浅黄色（2.5Y7/3）である。粘性・しまりともに無い。層厚は30cm前後であるが、一部50cmを超える部分もある。調査区全体に分布しており、酸化鉄を多量に含んでいる。この層の上面が中世から古代の遺構の検出面である。


M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38
SI26
SI27
SI28
SI25
SI24
SI23
SI19
SI21
SI18
SI22
SI20
SI30
SI10
SI14
SI13
SI15
SI17
SI12
SI11
SI16
SI3
SI2
SI1
SI4
SI7
SI8
0
10m
I区
SI6
SD1
Ⅱ区
SX6
SD14
SD32
SK37
SD29
SD26
SE1
SD21
SK27
SD30
SD28
SD31
SD11
SD9
SD10
SD8
SD6
SD7
SD12
SD15
Ⅲ区
SD4
SD23
SD33
SD3
SD25
SD2
SD5
SD13AB

第５図　遺構配置図（1）

M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37
I区
II区
III区
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
SB8
SB9
SB10
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB20
SB22
SB23
SB24
SB25
SB26
SB27
SB29
SB30
SA1
SA2
SA3
SA4
SA5
SA6
SA7
SA8

第6図　遺構配置図（2）

Ⅲ層：粘土層で構成される層で、色調はにぶい黄色（2.5Y6/3）である。粘性・しまりともに強い。層厚は10～20cmである。調査区全体に分布しており、酸化鉄を多量に含んでいる。

Ⅳ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調は暗褐色（10YR3/3）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は10～20cmである。調査区全体に分布している。炭化物を含み、層の下部にⅤ層の土壌をブロック状に含んでいる。Ⅴ層との理面が乱れている。弥生時代の水田層と考えられる。

Ⅴ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は20～25cmである。酸化鉄を含み、一部灰黄色（2.5Y7/2）粘土となっている部分がある。弥生時代の遺物包含層である。

Ⅵ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）である。粘性は強く、しまりは無い。層厚は10～25cmと場所によって一定しない。

Ⅶ層：粘土層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR5/2）である。粘性は強く、しまりは無い。層厚は10～40cmと場所によって一定しない。

Ⅷ層：シルト質粘土層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は10cm前後であり、南側に向かってレベルが高くなっている。

Ⅸ層：シルト質粘土層で構成される層で、色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は40cm前後と厚くなっている。

Ⅹ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。粘性はややあり、しまりは強い。層厚は10～15cmである。炭化物を含んでいる。

ⅩⅠ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調は灰黄色（2.5Y6/2）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は５～15cmと一定しない。砂粒を含み、灰色（5Y6/1）粘土をブロック状に多量に含んでいる。

ⅩⅡ層：粘土質シルト層で構成される層で、色調はにぶい黄色（2.5Y6/3）である。粘性はややあり、しまりは無い。層の下面まで確認していないため層厚は不明である。

Ⅵ層以下は深掘区のみで確認されたもので、層の分布範囲は明らかではない。

Ⅱ・Ⅲ区

Ⅰ・Ⅱ層は盛土層あるいは整地層で構成される層である。

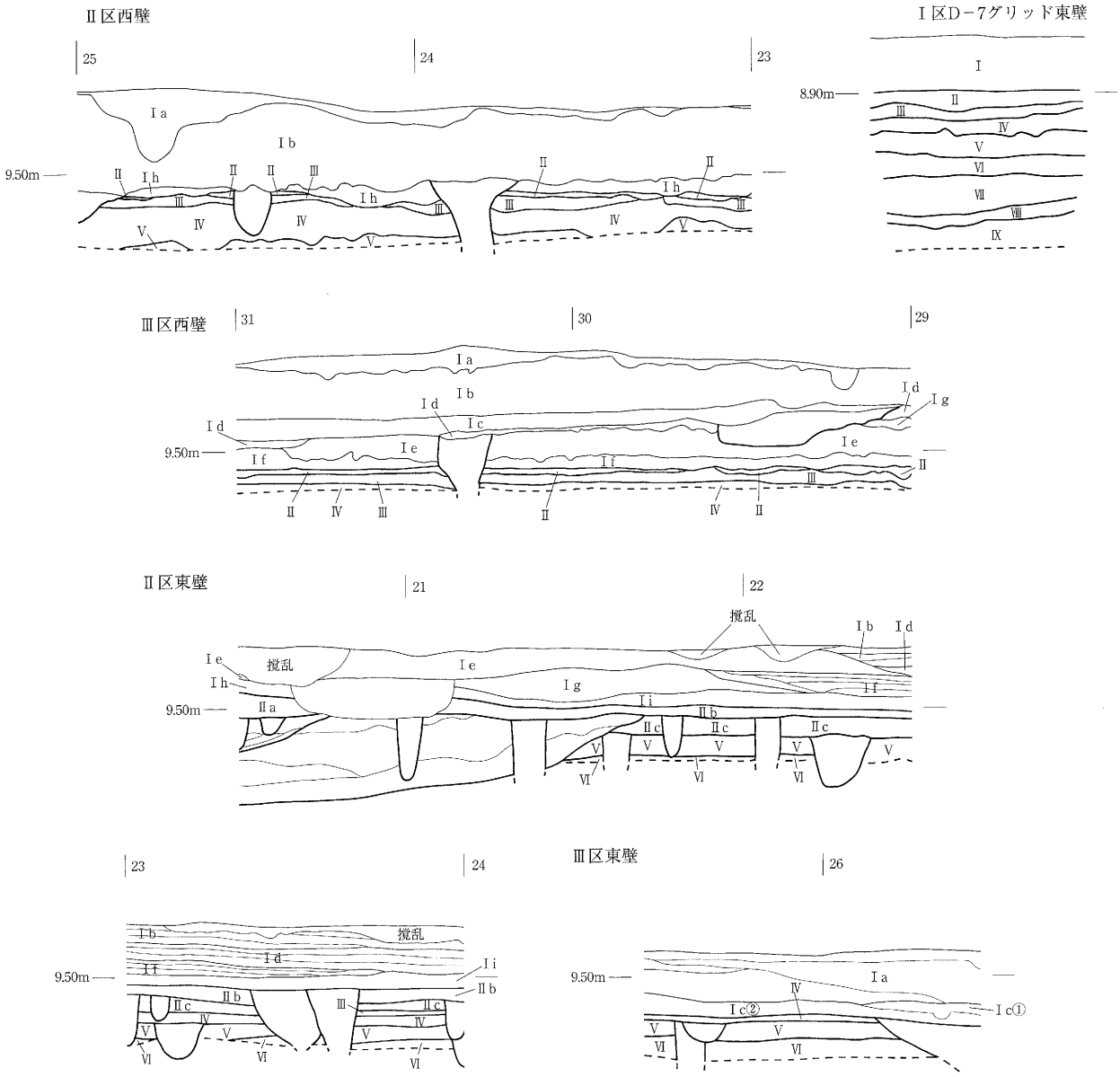
Ⅰ層：主に砂質シルト層～粘土層で構成されており、さらに10層に細分される。大部分は盛土整地された土層である。

Ⅰa層：シルト層で構成される層で、全体的な色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）である。粘性・しまりともに無い。層厚は20～50cmと一定しない。18ライン以北および24ライン以南に分布する。現在の地表で、宅地および畑の耕作土である。西側では下面に礫を含む整地層となっており、移転前の家屋が建っていた部分は特に厚くなっている。

Ⅰb層：シルト層で構成される層で、全体的な色調は褐色（10YR4/6）である。粘性・しまりともに無い。層厚は20～60cmと一定しない。東半部では22～24ライン付近西半部では19～29ライン付近に分布する。現在の地表で東半部では版築状に盛土された整地層であり、西半部では畑の耕作土になっている。

Ⅰc層：シルト層～・砂質シルト層で構成される層で、東半部ではさらにc①、c②の２層に細分される。SD３堀跡とSD４堀跡の間にのみ分布する整地層である。西半部ではシルト層で構成される層で、全体的な色調は明黄褐色（10YR6/6）である。粘性は無いが、しまりはややある。層厚は10～30cmで、南側が厚くなっている。版築状の整地層になっている。

Ⅰc①層：砂質シルト層で構成される層で、全体的な色調は灰黄褐色（10YR5/2）である。粘性・しまりともに無い。層厚は10～20cmである。層中に灰オリーブ色（5Y5/2）細砂・褐色（10YR4/6）シルトをブロック状に含んで



第７図　基本層序

Ⅰ区基本層

No.	土　色	土　性	粘	締	備　考
Ⅰ	10YR5/3　にぶい黄褐	シルト			砂、石、カクラン含む、現表土、耕作土。
Ⅱ	2.5Y7/3　浅黄	シルト	無	無	酸化鉄を多く含む。
Ⅲ	2.5Y6/3　にぶい黄	粘土	有	有	酸化鉄を多く含む。
Ⅳ	10YR3/3　暗褐	粘土質シルト	やや有	無	炭化物含み、層下部にⅤ層をブロック状に含む。層の下面が乱れている。縄文土器片を含む。
Ⅴ	10YR6/3　にぶい黄橙	シルト質粘土	やや有	無	酸化鉄を含み、2.5Y7/2　灰黄粘土の部分有。
Ⅵ	10YR6/4　にぶい黄橙	シルト質粘土	有	無	
Ⅶ	10YR5/2　灰黄褐	粘土	有	無	
Ⅷ	10YR4/2　灰黄褐	シルト質粘土	やや有	無	
Ⅸ	10YR5/2　にぶい黄褐	シルト質粘土	やや有	無	
Ⅹ	10YR4/2　灰黄褐	粘土質シルト	やや有	有	炭化物含む。
Ⅺ	2.5Y6/2　灰黄	粘土質シルト	やや有	無	砂、灰色粘土ブロック状に多く含む。
Ⅻ	2.5Y6/3　にぶい黄	粘土質シルト	やや有	無	

いる。

Ⅰc②層：シルト層～砂質シルト層で構成される層で、全体的な色調は褐色（10YR4/4）である。粘性は無いが、固くしまっている。層厚は10～20cmである。上面に暗褐色（10YR3/3）シルトを層状に含んでいる部分がある。

Ⅰc①層・Ⅰc②層はSD４堀跡を埋め、SD２溝跡を作る段階で形成された整地層で、調査区南部ではSD３堀跡の最上層として埋め、整地している。

Ⅰd層：シルト層～シルト質粘土層で構成される層である。東半部はシルト層で構成される層で、色調は暗灰黄色（2.5Y5/2）である。粘性はないが、固くしまっている。層厚は20cm前後である。Ⅰb層同様版築状に盛土された整地層となっている。西半部はシルト質粘土層で構成され、色調は暗黄褐色（10YR4/2）である。粘性・しまりともに無い。層厚は５～15cmである。SD３堀跡・SD４堀跡の掘り込み面となっている。

Ⅰe層：シルト層・粘土層で構成される層で、東半部はシルト層で構成され、色調は暗黄褐色（10YR4/2）である。

Ⅱ・Ⅲ区東壁基本層

No.	土　色	土　性	粘	締	備　考
Ⅰa	10YR5/4　にぶい黄褐	シルト	無	無	18ライン以北、24ライン以南の現地表。宅地、畑地。
Ⅰb	10YR4/6　褐	シルト	無	無	22～24の現地表。10YR3/4、5/4　シルトを互層状に含み版築状に盛土された層。Ⅰd、Ⅰf層と共に上部に家屋の主屋が建つ。
Ⅰc①	10YR5/2　灰黄褐	砂質シルト	無	無	5Y5/2　細砂、10YR4/6　シルトブロック含む。
Ⅰc②	10YR4/4　褐	シルト～砂質シルト	無	大（固い）	上面に10YR3/3　シルトを層状に含む部分有り。
※Ⅰc①・Ⅰc②はＳＤ４を埋めてＳＤ２を作る段階で形成された整地層で、調査区南部ではＳＤ３の埋土の最上層として埋め、整地している。					
Ⅰd	2.5Y5/2　暗灰黄	シルト	無	有	Ⅰb、Ⅰf層同様、版築状に盛土整地された層。
Ⅰe	2.5Y5/2　暗灰黄	シルト	無	無	10YR6/8　シルトブロック含む。
Ⅰf	10YR5/3　にぶい黄褐	砂質シルト	無	有	Ⅰb、Ⅰd層同様、版築状に盛土整地された層。
Ⅰg	10YR5/4　にぶい黄褐	シルト	無	やや有	20～21ラインのみに分布。
Ⅰh	10YR3/4　暗褐	シルト	無	有	
Ⅰi	10YR4/3　にぶい黄褐	シルト	無	無	
Ⅱa	10YR4/2　灰黄褐	シルト	無	有	炭化物粒、10YR5/3、6/8　シルトブロック、5Y5/6　シルト土粒斑に含む。
Ⅱb	10YR3/3　暗褐	シルト	無	大	5Y5/6　シルト土粒斑に含む。
Ⅱc	2.5Y3/2　黒褐	シルト	無	大	5Y5/6　シルト土粒斑に多量に含む。
Ⅲ	10YR2/3　黒褐	シルト	無	有	
Ⅳ	10YR6/8　明黄褐	シルト	無	有	10YR6/2　シルトブロック、10YR3/3　シルト小ブロック含む。
Va	10YR3/3　暗褐	シルト	無	有	
Vb	10YR3/4　暗褐	シルト	無	有	10YR5/6　シルト小ブロック含む。
Ⅵ	10YR5/6　黄褐	シルト	やや有	やや有	

Ⅱ・Ⅲ区西壁基本層

No.	土　色	土　性	粘	締	備　考
Ⅰa	10YR4/3　にぶい黄褐	シルト	無	有	下面に石を含む現在の整地層。
Ⅰb	10YR4/6　褐	シルト	無	無	32ライン以北は10YR5/2　シルト質粘土粘性やや有締有の土層と版築状の整地層になる。下面に炭化物層。
Ⅰc	10YR6/6　明黄褐	シルト	無	やや有	ＳＤ３が埋まった後の整地層。32ライン以北10YR6/1　SiltyClay粘性やや有締有の土層と版築状の整地層下面に10YR3/1　SiltyClayブロック含む。
Ⅰd	10YR4/2　灰黄褐	シルト質粘土	無	無	ＳＤ３・４の堀り込み面。
Ⅰe	10YR6/3　にぶい黄橙	粘土	無	やや有	10YR3/3　Clay、10YR6/6　SiltyClayブロック含む人為的堆積土、ピットの堀り込み面、下面が凸凹する。
Ⅰf	10YR5/2　灰黄褐	シルト質粘土	やや有	有	酸化鉄、炭化物含む。耕作土？
Ⅰg	10YR5/4　にぶい黄褐	シルト	無	やや有	
Ⅰh	10YR3/4　暗褐	シルト	無	有	10YR8/1　灰白色火山灰を層状に含む。
Ⅱ	10YR2/2　黒褐	粘土	無	有	
Ⅲ	10YR5/3　にぶい黄褐	粘土	やや有	やや有	マンガン粒多量に含む。
Ⅳ	10YR3/3　暗褐	粘土	やや有	有	マンガン粒多量に含み、上面でSD、ピットを検出。
Ⅴ	10YR6/2　灰黄褐	粘土	有	やや有	上面で小溝状遺構群検出。

粘性・しまりともに無い。層厚は20cm前後である。層中に明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック含んでいる。22ライン以北の現在の表土で、畑の耕作土になっている。西半部は粘土層で構成され、色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）である。粘性は無いが、しまりはややある。層厚は20cm前後である。28～31ラインに分布し、層中に暗褐色（10YR3/3）粘土・明黄褐色（10YR6/6）シルト質粘土を含む整地層で、ピットの掘り込み面となり、下面が凸凹している。

Ⅰf層：砂質シルト層・シルト質粘土層で構成される層で、東半部は砂質シルト層で構成される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）である。粘性は無いが、しまりはある。層厚は20cm前後である。Ⅰb層・Ⅰd層同様に版築状に盛土された整地層である。西半部はシルト質粘土層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR5/2）である。粘性はややあり、しまりはある。層厚は5～20cmである。28～32ラインに分布し、酸化鉄を含んでいる。畑の耕作土と考えられる。

Ⅰg層：シルト層で構成される層で、全体的な色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）である。粘性はなく、しまりはややある。東半部では層厚は30cm前後で20～21ライン付近、西半部では層厚は10cm前後で29ライン付近のみに分布する。

Ⅰh層：シルト層で構成される層で、全体的な色調は暗褐色（10YR3/4）である。粘性はなく、しまりはある。東半部では層厚は15～20cmで21ライン以北、西半部では層厚は5～20cmで21～25ライン付近に分布し、灰白色（10YR8/1）シルト（火山灰）を層状に含む部分がある。

Ⅰi層：シルト層で構成される層で、全体的な色調はにぶい黄褐色（10YR4/3）である。粘性・しまりともに無い。東半部では層厚20cm前後で21～24ラインにかけて分布しており、西半部では確認されない。

Ⅱ層：東半部ではシルト層、西半部は粘土層で構成される層で、さらに3層に細分される。

Ⅱa層：東半部ではシルト層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。粘性は無いが、固くしまっている。層厚は30cm前後で19～20ライン付近に分布している。層中に炭化物、にぶい黄褐色（10YR5/3）・明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック、オリーブ色（5Y5/6）シルトを斑状に含んでいる。西半部では粘土層で構成され、色調は黒褐色（10YR2/2）である。粘性は無いが、固くしまっている。層厚は5～10cmで、28～32ラインにかけて分布しているが、以北でも散見される程度に分布している。

Ⅱb層：東半部ではシルト層、西半部は粘土層で構成される層で、東半部の色調は暗褐色（10YR3/3）である。粘性は無いが、固くしまっている。層厚は10cm前後で21～25ライン付近に分布し、層中にオリーブ色（5Y5/6）シルトを斑状に含んでいる。この層の上面がピット、SX6性格不明遺構（新）の掘り込み面となっている。西半部の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）である。層厚は5～10cmで21～32ラインにかけて断続的に分布している。層中にマンガン粒を多量に含んでいる。この層の上面が中世遺構の掘り込み面となっている。

Ⅱc層：東半部はシルト層、西半部は粘土層で構成される層で、東半部の色調は黒褐色（2.5Y3/2）である。粘性は無いが、固くしまっている。層厚は5～20cmで21～23ライン付近に分布し、層中にオリーブ色（5Y5/6）シルトを斑状に多量に含んでいる。この層の上面がPit、SX6（古）の掘り込み面となっている。西半部の色調は暗褐色（10YR3/3）である。層厚は15～35cmで18～35ラインにかけて断続的に分布し、北側に向かって厚くなっている。層中にマンガン粒を多量に含んでいる。この層の上面が中世遺構の検出面となっている。

Ⅲ層：東半部はシルト層、西半部は粘土層で構成される層で粘性は西半部で強く、しまりは東半部が強い。東半部の色調は黒褐色（10YR2/3）である。層厚は5～10cmで23～29ラインにかけて部分的に島状に分布している。西半部の色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）である。層厚は20cm前後で22～32ラインにかけて分布している。

Ⅳ層：東半部はシルト層、西半部は粘土層で構成される層で全体的に粘性は弱く、しまりは強い。東半部の色調は明黄褐色（10YR6/8）である。層厚は10cm前後で22～32ラインにかけて分布しており、層中に暗褐色（10YR3/3）・

灰黄褐色（10YR6/2）シルトブロックを含んでいる。西半部の色調は暗褐色（10YR3/3）である。層厚は10cm前後で14ライン以北で確認された。層中に炭化物・黒褐色（10YR2/3）シルトブロックを少量含む。

Ⅴ層：東半部はシルト層、西半部は粘土層で構成される層で粘性は西半部が強く、しまりは東半部が強くなっている。東半部はさらに2層に細分される。西半部の色調は灰黄褐色（10YR6/2）である。層厚は25cm前後で21ライン以北で確認された。

Ⅴa層：シルト層で構成される層で、色調は暗褐色（10YR3/3）である。粘性は無いが、しまりはある。層厚は10～15cmで28～32ラインにかけて分布している。東半部ではこの層の上面が古代の遺構の掘り込み面となっている。

Ⅴb層：シルト層で構成される層で、色調は暗褐色（10YR3/4）である。粘性は無いが、しまりはある。層厚は15cm前後で21～32ライン付近まで分布している。層中に黄褐色（10YR5/6）シルトの小ブロックを含んでいる。

Ⅵ層：東半部では21ライン以南で確認されており、東半部の北側および西半部では深掘区でのみ確認されている。東半部ではシルト層で構成される層で、色調は黄褐色（10YR5/6）である。粘性・しまりともにややある。層厚は20～30cmである。深掘区では、粘土質シルト層で、色調は暗褐色（10YR3/3）である。粘性はあるが、しまりはない。層厚は10～30cmである。弥生時代の水田層と考えられ、Ⅰ11～14グリッド西端以北が水田域であると考えられる。Ⅰ区Ⅳ層に対応するものと考えられる。

Ⅶ層：東半部ではSD3堀跡以南で、東半部の北側および西半部では深掘区でのみ確認されている。東半部ではシルト層で構成される層で、色調は黄褐色（10YR5/8）である。粘性・しまりともに無い。層厚は20～50cmと南側が厚くなっている。深掘区では、シルト質粘土層で、色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）である。粘性はややあり、しまりは無い。にぶい黄褐色（10YR5/4）の色調を示す部分がある。層厚は20～50cmである。Ⅰ区Ⅴ層に対応するものと考えられる。

Ⅷ層：粘土層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR5/2）である。粘性はあり、しまりは無い。層厚は10～30cmである。Ⅰ区Ⅶ層に対応するものと考えられる。

Ⅸ層：砂質シルト層で構成される層で、色調は黄褐色（2.5Y5/3）である。粘性・しまりともに無い。層厚は20～70cmと南西側が厚くなっている。以下の層は部分的にグライしている。

Ⅹ層：シルト質粘土層で構成される層で、色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は10～25cmである。炭化物を含む。グライしている部分は特に粘性が強い。Ⅰ区Ⅷ層に対応するものと考えられる。

Ⅺ層：シルト質粘土層で構成される層で、色調はにぶい黄橙色（10YR5/4）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は15～35cmである。Ⅰ区Ⅸ層に対応するものと考えられる。

Ⅻ層：シルト質粘土層で構成される層で、色調は灰黄橙色（10YR4/2）である。粘性はややあり、しまりは無い。層厚は20cm前後である。炭化物を含む。グライしている部分は特に粘性が強い。Ⅰ区Ⅹ層に対応するものと考えられる。

ⅩⅢ層：粘土層で構成される層で、色調は暗緑灰色（10GY4/1）である。粘性はあり、しまりは無い。層上部のみの検出のため層厚は不明である。

Ⅴ　検出された遺構と遺物

1．弥生時代以前の遺構と遺物

Ⅰ区のⅣ～Ⅴ層・Ⅱ区のⅥ層で弥生時代の遺構と遺物が検出された。Ⅰ区のⅣ層・Ⅱ区のⅥ層で水田跡が検出され、Ⅰ区のⅣ～Ⅴ層で弥生土器が出土した。その他に上層の遺構内・外の堆積土中から縄文土器、弥生土器、石器

等が出土した。

水田跡

Ⅰ区南半Ａ～Ｉ－２～９グリッドのⅣ層上面、Ⅱ区北半Ｂ～Ｊ－９～15グリッドで水田跡を確認した。水田層はやや粘質のある粘土質シルト層で、層の下面が乱れており、下部にⅤ層をブロック状に含んでいる。畦畔と段が検出された。畦畔はⅠ区で７条、Ⅱ区で２条の計９条、段はⅠ区で３か所、Ⅱ区で４か所の計７か所である。畦畔の方向は１～５・７は南東－北西方向に平行し、６・９は南西－北東の方向である。

畦畔１：上端幅2.2～2.8m、下端幅2.5～2.9m、高さは３～５cmで方向はＮ－50°－Ｗである。下層のⅤ層上面で幅1.2～1.8mの疑似畦畔が確認された。

畦畔２：上端幅約1.15m、下端幅1.7m、高さは３～10cmで方向はＮ－39°－Ｗである。下層のⅤ層上面で幅1.2mの疑似畦畔が確認された。

畦畔３：上端幅0.45～0.8m、下端幅0.7～1.3m、高さは３～６cmで方向はＮ－42°－Ｗである。調査区北壁から３mのところまでが畦畔でさらに南へ1.5mの長さで、段差となっている。

畦畔４：上端幅0.7～1.0m、下端幅2.0～2.2m、高さは４～10cmで北側の傾斜が緩くなっている。方向はＮ－51°－Ｗである。調査区北壁から２mのところまでが畦畔でさらに南へ３mの長さで、段差となっており、南端で上端幅0.5mの畦畔となる。下層のⅤ層上面で幅1.05～1.7mの疑似畦畔が確認された。この疑似畦畔の方向はＮ－24°－Ｗである。

畦畔５：上端幅約0.5m、下端幅約0.75m、高さは２～５cmで方向はＮ－48°－Ｗである。畦畔６に85°の角度で取りついている。下層のⅤ層上面で幅0.85～0.95mの疑似畦畔が確認された。

畦畔６：上端幅約1.3m、下端幅約２m、高さは２～4.5cmで方向はＮ－36°－Ｅである。畦畔４の南半の段差からほぼ90°の角度で延びており、畦畔５、畦畔７が取りついているものと考えられる。下層のⅤ層上面で幅0.9～0.95mの疑似畦畔が確認された。

畦畔７：上端幅0.15～0.3m、下端幅0.35～0.55m、高さは２～３cmで方向はＮ－37°－Ｗである。畦畔６に74°の角度で取りついている。

畦畔８：上端幅0.7～１m、下端幅1.2～1.5m、高さは３～４cmで方向はＮ－32°－Ｗである。この畦畔の西側は幅約１mの溝状の落ち込みになっている。

畦畔９：上端幅0.75～0.9m、下端幅約1.2m、高さは３～６cmで方向はＮ－52°－Ｅである。

段差１：Ｂ・Ｃ－３グリッドで検出され、比高差は３cm前後で西側が高くなっている。方向はＮ－60°－Ｅである。畦畔４の東側の段差の延長である可能性がある。

段差２：畦畔３の西側で検出され、比高差は２cm前後で西側が高くなっている。方向はＮ－40°－Ｅである。

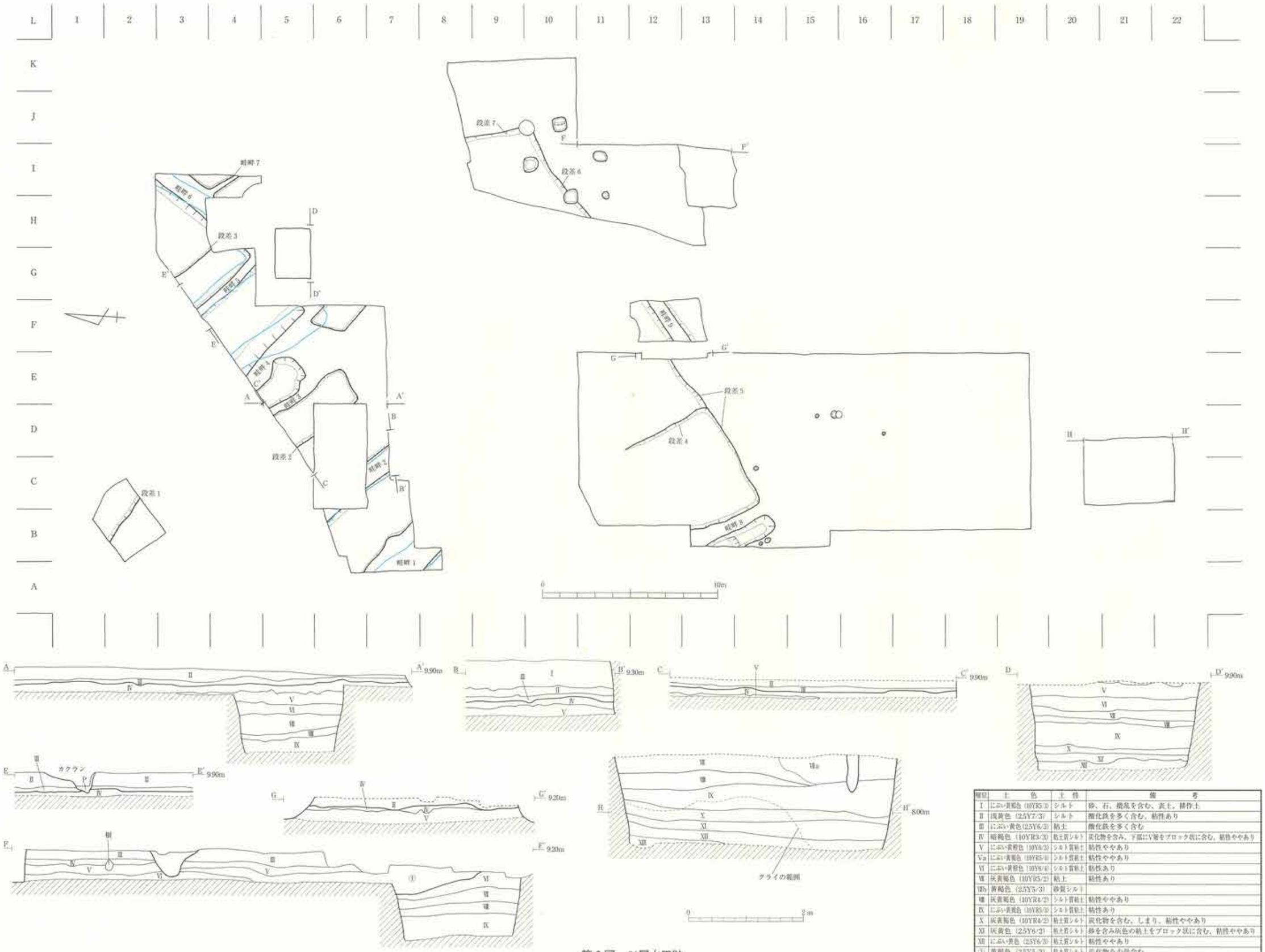
段差３：畦畔５の東側で検出され、比高差は２cm前後で西側が高くなっている。方向はＮ－43°－Ｗである。位置的に畦畔６に75°の角度で取りついているものと思われる。

段差４：畦畔８の東側で検出され、比高差は南側の段差５に取りつく部分で６cm程であるが、北へ行くに従って低くなる。方向はＮ－33°－Ｗである。

段差５：畦畔８、段差４と直行するような形で検出された。比高差は２から４cm程である。方向はＮ－52°－Ｅである。

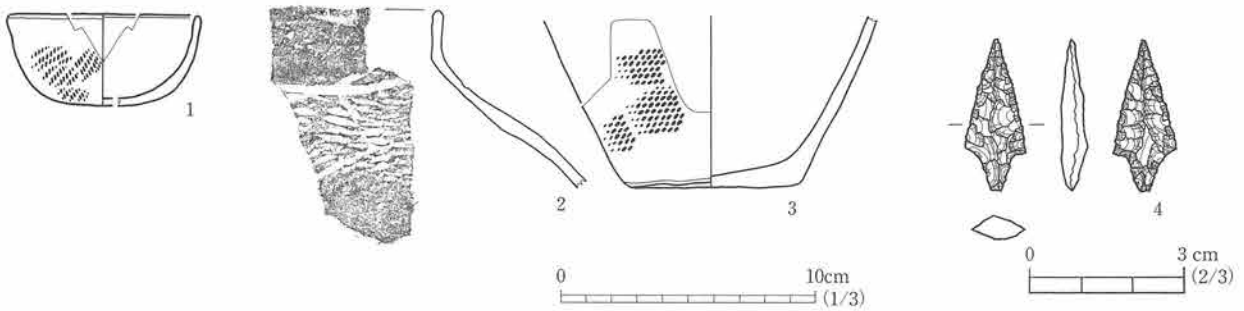
段差６：段差５の北東に延長するような形で検出された。比高差は４から６cm程である。方向はＮ－52°－Ｅと段差５と同じである。

段差７：段差６が北に折れ曲がるような形で検出された。比高差は３から４cm程である。方向はＮ－14°－Ｗである。



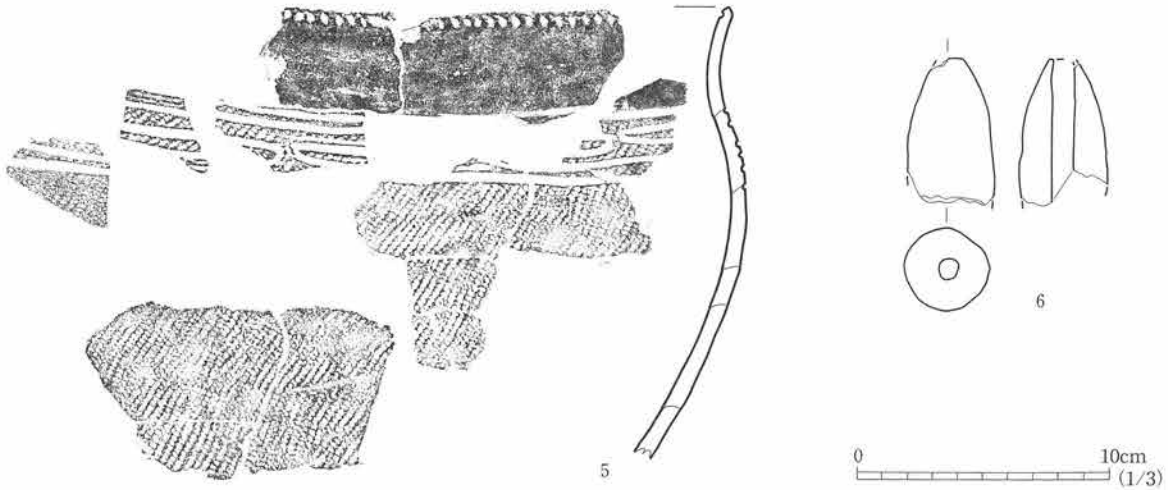
層位	土色	土性	備考
Ⅰ	にぶい黄橙色（10YR5/3）	シルト	砂、石、機亮を含む、表土、耕作土
Ⅱ	浅黄色（2.5Y7/3）	シルト	酸化鉄を多く含む、粘性あり
Ⅲ	にぶい黄色（2.5Y6/3）	粘土	酸化鉄を多く含む
Ⅳ	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物を含み、下部にV層をブロック状に含む、粘性ややあり
Ⅴ	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト質粘土	粘性ややあり
Va	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	粘性ややあり
Ⅵ	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト質粘土	粘性あり
Ⅶ	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	粘性あり
Ⅶb	黄褐色（2.5Y5/3）	砂質シルト	
Ⅷ	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	粘性ややあり
Ⅸ	にぶい黄橙色（10YR5/3）	シルト質粘土	粘性あり
Ⅹ	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を含む、しまり、粘性ややあり
Ⅺ	灰黄色（2.5Y6/2）	粘土質シルト	砂を含み灰色の粘土をブロック状に含む、粘性ややあり
Ⅻ	にぶい黄色（2.5Y6/3）	粘土質シルト	粘性ややあり
①	黄褐色（2.5Y5/3）	粘土質シルト	炭化物を少量含む

第8図　Ⅳ層水田跡



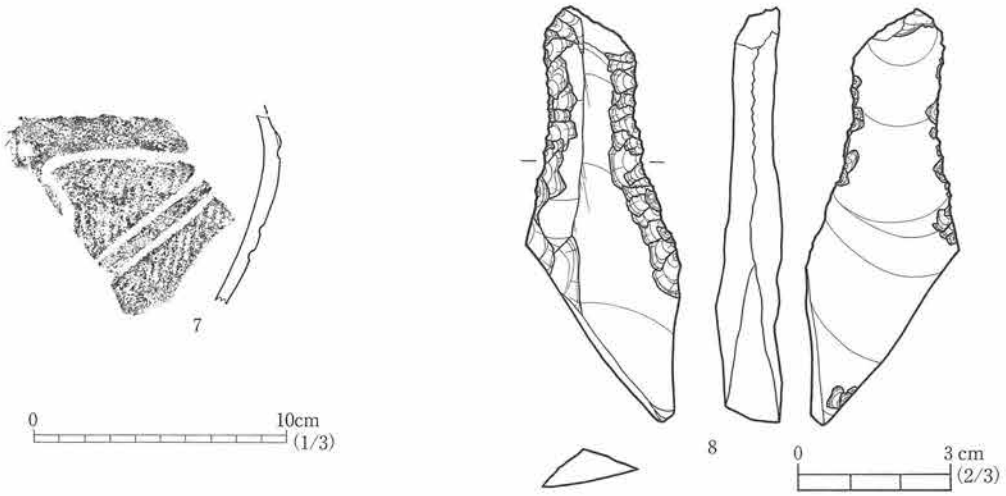
No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	Ⅰ区Ⅳ層	弥生土器・鉢	縄文（LR）	ミガキ		336-18	B-53
2	Ⅰ区Ⅳ層	弥生土器・壺	縄文・一本沈線	ナデ・一本沈線		334-19	B-5
3	Ⅰ区Ⅳ層	弥生土器・甕	縄文（LR）・ナデ・波状文	ミガキ	底・ナデ	334-20	B-6·2

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ(cm)	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
4	Ⅰ区Ⅳ層	石鏃	3	1.2	0.5	0.8	珪質頁岩		417-6	Kh-6



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
5	Ⅰ区Ⅴ層上面	縄文土器・深鉢	沈線文・縄文（RL）・刻目文	沈線文・ナデ		334-3	A-3

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
6	Ⅱ区東Ⅴ層	土錘	ナデ　孔径0.9cm	(5.9)	3.5		(48)	380-8	P-9



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
7	Ⅰ区Ⅶ層	縄文土器・深鉢	隆線文・沈線文・刺突文・不明縄文	ミガキ		334-1	A-1

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ(cm)	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
8	Ⅰ区Ⅶ層中	不定形	8.3	3.1	1.3	23	珪質頁岩		417-13	Ka-5

第９図　遺構外出土遺物（1）

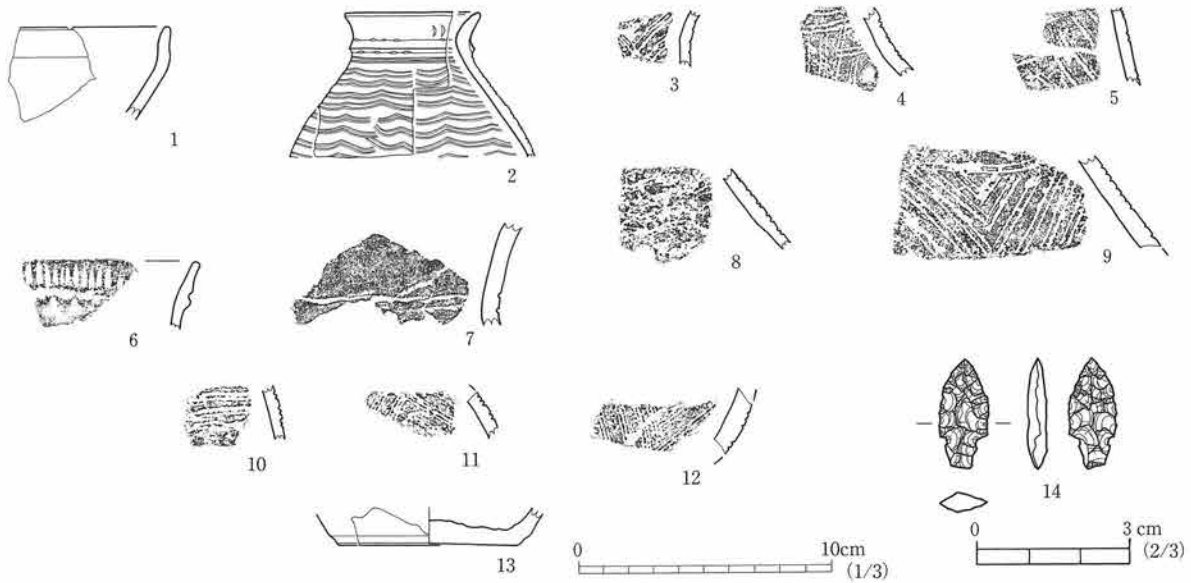
土層断面での土層の状況、下層の巻き上げの状況などの検討から、畦畔９が北側の水田跡の耕作域と南側の非耕作域を画する畦畔であると考えられる。

区画は16区画が確認されたが規模が明らかになった区画はない。Ⅰ区では畦畔１・２・３・４・５・６・段差１・２・３の配置から一辺が１～４ｍ程度の区画が窺える。Ⅱ区では畦畔８・段差４・５から一辺が６ｍ程度の区画が推定されるが、依存状況が悪く詳細は不明である。標高はⅠ区で8.85～8.65ｍで、Ⅱ区は8.95～9.05ｍである。Ⅰ区は南西側がやや高く、北及び北東側に傾斜し、Ⅱ区は南側がやや高く、北側へ傾斜しており、上層の傾斜とはやや異なっている。

Ⅳ層から出土した遺物には弥生土器と石器がある。弥生土器は水田跡出土ということもあって、完形品や器形を推定できるような大形の破片は少ない。石器には剥片石器、礫石器がある。

遺構外出土遺物

Ⅴ・Ⅶ層中及び遺構検出面から縄文土器、土製品、弥生土器、石器、石製品などが出土している。そのうち、縄文土器、土錘、石器、弥生土器及びⅠ区遺構検出面出土の土師器、陶器を図示した。



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）		
1	Ⅰ区検出面	陶器	天目茶碗	鉄釉。古瀬戸。	瀬戸	15C			(3.8)	368-3	I-392

No.	遺構・層位	種別・器種	外　　面	内　　面	備　　考	写真図版	登録番号
2	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	連弧文２段	ミガキ		334-19・20	B-6
3	Ⅰ区検出面	不明	重山形文（二本一描沈線）	ナデ		336-15	B-50
4	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	重山形文二本一描沈線	ナデ		336-11	B-46
5	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	重山形文二本一描沈線	ミガキ		336-16	B-51
6	Ⅰ区検出面	弥生土器・甕	刻目文・交互刺突文	ナデ		336-14	B-49
7	Ⅰ区検出面	弥生土器・甕	三本一描沈線	ナデ		336-12	B-47
8	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	連弧文（二本一描沈線）	ナデ		336-9	B-44
9	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）	マメツ		336-7	B-42
10	Ⅰ区検出面	不明	二本一描沈線	ナデ		336-8	B-43
11	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	重山形文三本一描沈線	ナデ		336-10	B-45
12	Ⅰ区検出面	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）	ナデ		336-13	B-48

No.	遺構・層位	種別・器種	外　　面	底　　面	内　　面	備　　考	写真図版	登録番号
13	Ⅰ区検出面	土師器・甕		回転糸切り痕				D-70

No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　　材	備　　考	写真図版	登録番号
14	Ⅰ区検出面	アメリカ石鏃	(2.3)	(0.9)	0.4	0.7	黒曜岩		417-4	Kh-4

第10図　Ⅰ区遺構外出土遺物

2．古代～中世の遺構と遺物

古代～中世の遺構と遺物はⅠ区とⅡ・Ⅲ区に別けて記述する。遺構番号については原則としてⅠ区から発見順に番号を付しているが、特に土坑と性格不明遺構については、Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区でそれぞれに通し番号を付している。

Ⅰ区

Ⅰ区では古代～中世と考えられる遺構は全てⅡ層上面で確認されている。遺構は竪穴住居跡７軒、竪穴遺構１基、竪穴建物跡１基、土坑８基、性格不明遺構１基がある。土坑は中世以降の時期のもの７基についてもここで一括して記述する。

竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡

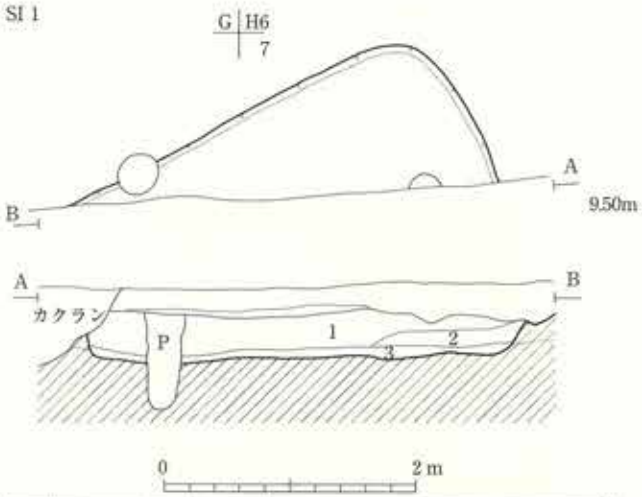
遺構の確認：G・H－７グリッドで確認された。遺構の大部分が南側の調査区外に延びており、確認されたのは北東コーナー部分のみである。ピットと重複しており、本遺構が古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、北西壁で2.9m以上あり、隅丸の方形を基調とした平面形であると考えられる。

堆積土：３層確認された。灰黄褐色シルト層である。

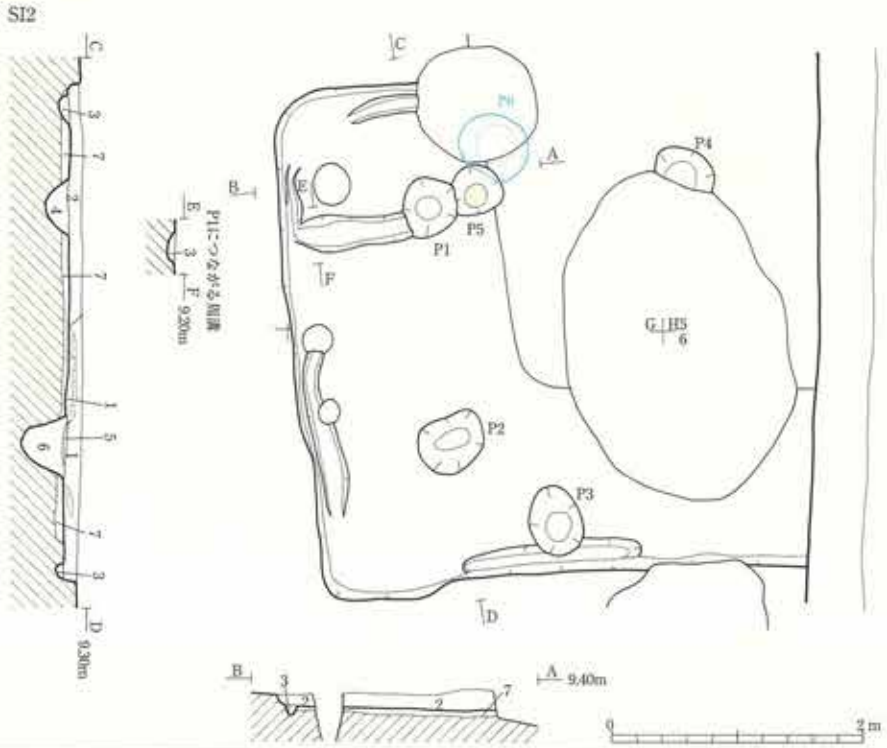
壁：壁高は残存状況の良い北西壁で22cmである。床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦である。



No.	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）シルトを多く含む、粘性ややあり
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）シルトを小ブロック状に含む
3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）シルトを帯状に含む

第11図　SI1竪穴住居跡



層位	No.	土　色	土　性	備　考
	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	浅黄（10YR7/3）シルトを含み部分的に炭化物、焼土、酸化鉄を含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	浅黄（10YR7/3）シルトを含み部分的に炭化物、焼土を含む
掘溝	3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄、土器片を含む
P1	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	浅黄（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土器片を含む
P2-1	5	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、灰、焼土を多く含む
P2-2	6	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	浅黄（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、粘性ややあり
貼床	7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	浅黄（10YR7/3）シルトを多く含み、酸化鉄を含む、粘性ややあり

ピット№	No.	土　色	土　性	備　考
P3	1	灰褐色（10YR5/1）	粘土質シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ21cm
P4掘り方	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む　深さ14cm
柱痕	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを少量含む　深さ14cm
P5掘り方	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR4/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ8cm
柱痕	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	浅黄（2.5YR7/3）酸化鉄を含む　深さ8cm
P6掘り方	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを含み、焼土を多く含む　深さ11cm

第12図　SI2竪穴住居跡

周溝：検出されなかった。

柱穴：床面検出部分でピットは検出されなかった。

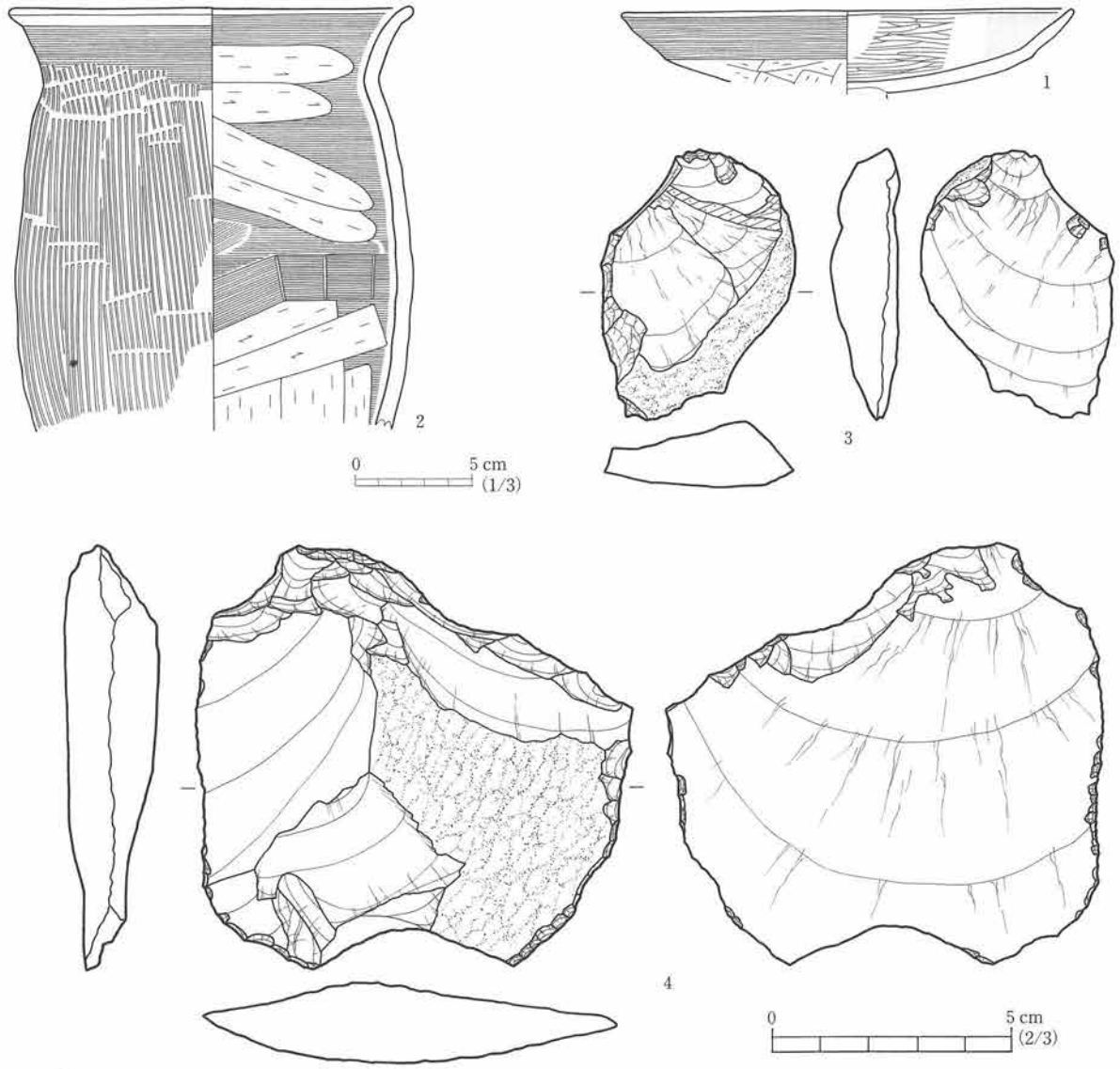
カマド：遺構検出部分では検出されなかった。

出土遺物：堆積土中より、少量の弥生土器片、須恵器片が出土した。

SI 2 竪穴住居跡

遺構の確認：G～I－5・6グリッドで確認された。遺構は東側の調査区外に延びている。SI 3・4・9竪穴住居跡、SK 1・3・7土坑、ピットと重複しており、SI 4・9竪穴住居跡より新しく、他の遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西4.2m以上、南北4.1mの隅丸の長方形を基調とした平面形であると考えられる。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI3 1層	土師器・高坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理			C-3
2	SI2 1層	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ・ケズリ			C-2

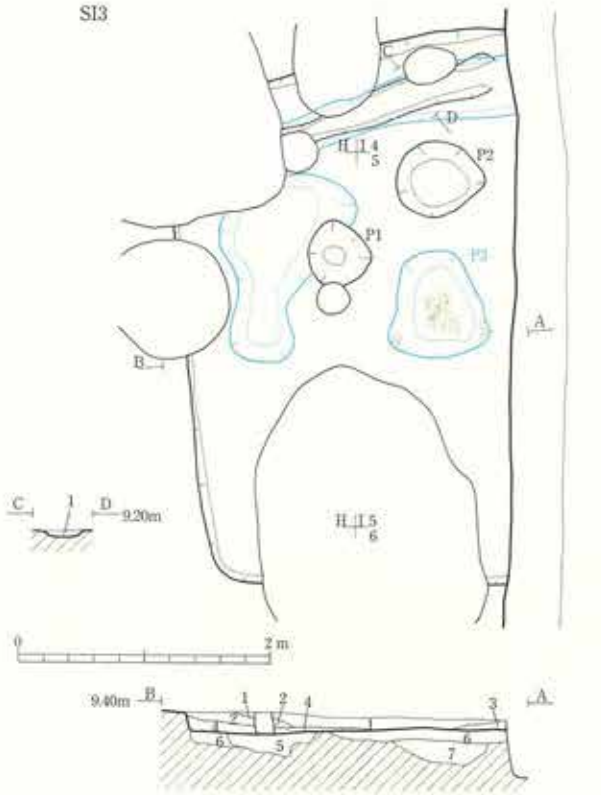
No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
3	SI2 1層	不定形	5.2	4.1	1.4	1.4	流紋岩		417-14	Ka-7
4	SI2 1層	大型板状石器	9	9.2	2	142	デイサイト		418-11	Kg-1

第13図　SI2竪穴住居跡出土遺物

堆積土：２層確認された。黄褐色系シルト～粘土質シルト層である。炭化物、焼土を多く含む部分がある。
壁：壁高は残存状況の良い南壁で10cmである。床面から急角度で立ち上がる。
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦であるが幾分南側及び東側へ傾斜している。掘り方はほぼ住居全面に認められ、深さは床面から４～７cmである。
周溝：北・西・南の壁際にそれぞれ、60cm、130cmと60cm、145cmの長さで検出された。幅は10～40cm、床面からの深さは４～10cm、断面形は「U」字形である。西壁の北側のものはピットから壁まで延びる幅25cm、深さ７cmの溝に接続している。
柱穴：床面検出部分で５個のピットが検出された。Ｐ５に柱痕跡が認められたが他のピットでは確認されなかった。規模や配置、埋土の状況からＰ１・２・４が柱穴であると考えられる。柱痕跡が認められたＰ５についても柱穴である可能性がある。また、床面下で１個のピットを検出した。
カマド：遺構検出部分では検出されなかった。
出土遺物：堆積土中及び掘り方埋土中より、弥生土器片、土師器片、須恵器片、剥片石器が出土している。また、Ｐ１から大型板状石器が出土した。

SI３竪穴住居跡

遺構の確認：Ｈ・Ｉ－４～６グリッドで確認された。遺構は東側の調査区外に延びている。SI２・９竪穴住居跡、SK２・３・４・５・７土坑、ピットと重複しており、SI２・９竪穴住居跡より新しく、他の遺構より古い。
平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西2.8m以上、南北約3.7mの隅丸の方形を基調とした平面形であると考えられる。
堆積土：４層確認された。黄褐色系のシルト層である。炭化物、焼土を含んでいる。
壁：壁高は残存状況の良い北壁で17cmである。床面から急角度で立ち上がる。
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦であるが住居跡の中央部がやや低くなっている。掘り方はほぼ住居全面に認められ、深さは床面から10～20cmで、住居跡の壁沿いが中央部に比べて深くなっている。特に周溝部分と西壁付近に顕著な部分がある。
周溝：北壁から約20cm離れて180cmの長さで検出された。幅は25cm、床面からの深さは５cm前後、断面形は浅い皿形である。
柱穴：床面検出部分で２個のピットが検出された。柱痕跡は認められなかった。柱穴であるか不明である。
カマド：遺構検出部分では検出されなかった。

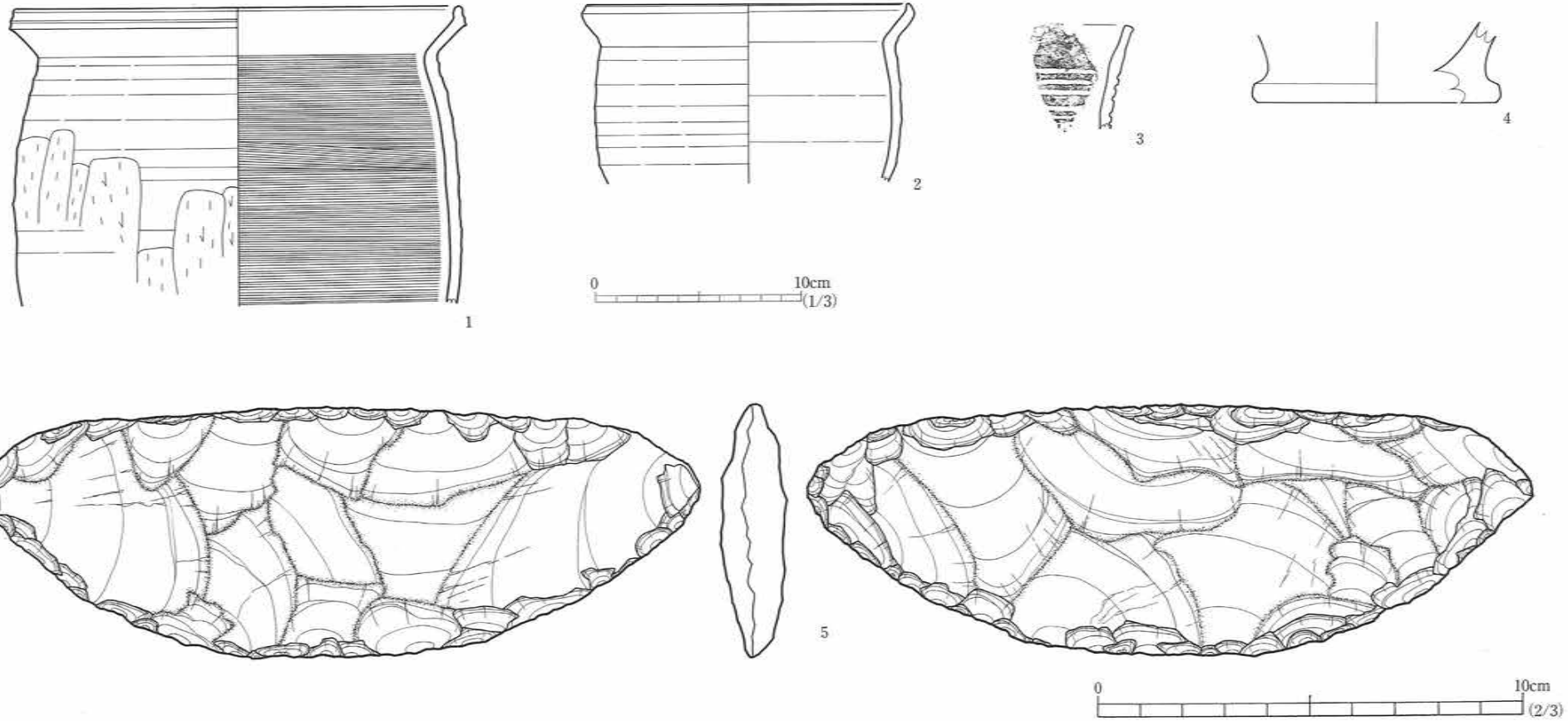


層位	No.	土色	土性	備考
1	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に含み、焼土、酸化鉄を含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に多く含み、炭化物、焼土を多く含む
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に多く含み、焼土を多く含む
	4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に多く含み、酸化鉄、土師器片を含む
掘り方	5	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄、土師器片を含む
貼床	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄、土師器片を含む
P3-1	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト質（10YR6/4）シルトを含み、焼土、土師器片を含む
周溝	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土師片を含む

ピット計測表（cm）

No.	1	2
深さ	45	31

第14図　SI3竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI3 16層	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ・ロクロハケメ			D-1
2	SI3 1層	土師器・甕	ロクロナデ		ロクロナデ			D-2
3	SI3 P1 1層	縄文土器・深鉢	沈線文		ナデ		334-2	A-2

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
4	SI3	陶器	瓶子	横方向ナデ	不明	不明		11.4	(3.9)	369-8	I-427

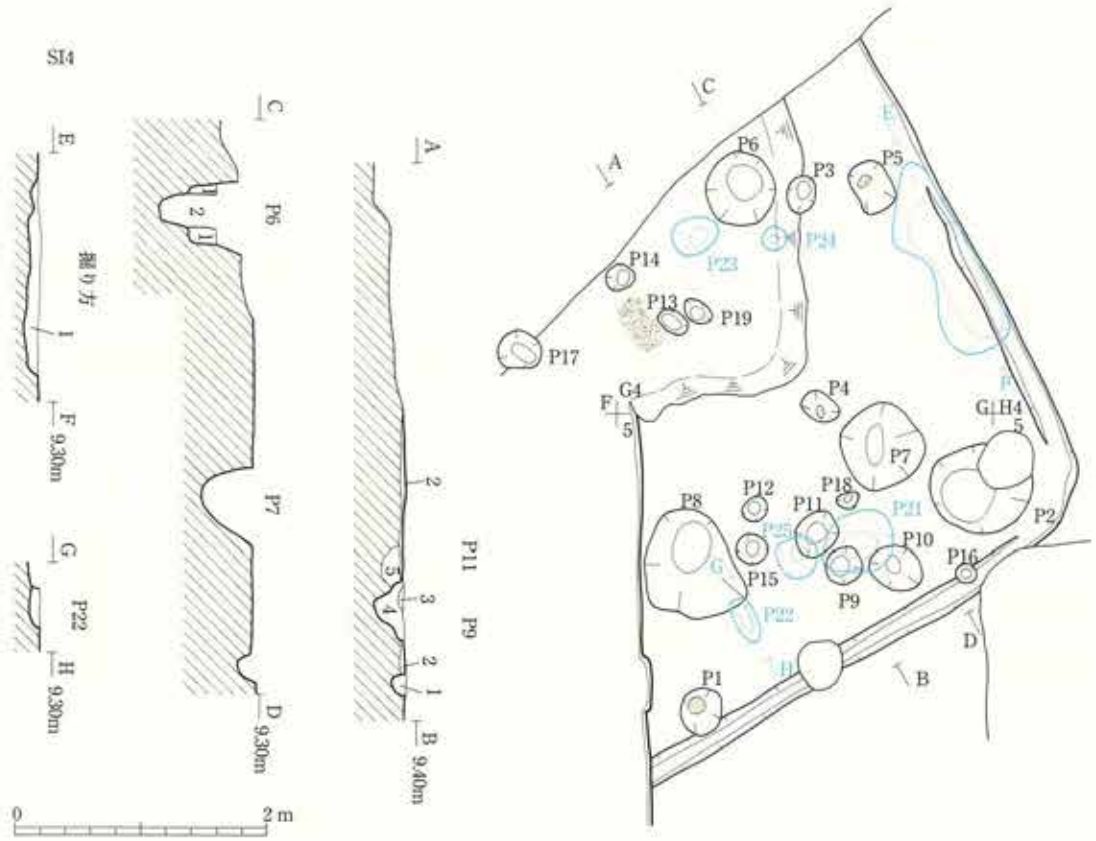
No.	遺構・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	登録番号
5	SI3 1層	石包丁未製品	6	17.4	1.1	184	頁岩		418-9	Ke-1

第15図　SI3竪穴住居跡出土遺物

その他の施設：床面中央付近に焼け面が３か所検出された。35cm×25cmの部分１か所と10cm×20cmの部分の２か所である。この部分の床面下でピットが検出されているが直接の関係は不明である。
出土遺物：堆積土中及び掘り方埋土から土師器片、須恵器片が出土した。また、堆積土から石庖丁の未製品が出土した。

SI４竪穴住居跡

遺構の確認：Ｆ～Ｈ－３～５グリッドで確認された。SI２竪穴住居跡、SK９・13土坑、SD１堀跡、ピットと重複しており、SK13土坑より新しく、他のすべての遺構より新しい。また、住居跡西半と中央部を表土除去の際の掘



層位	No.	土　色	土　性	備　考
周溝	1	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む
貼床	2	浅黄色（2.5Y7/3）	シルト	炭化物、酸化鉄を多く含む
P9	3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒を含む
	4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む
P11	5	褐色（10YR4/4）	シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土器片を含む
掘り方	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり

ピットNo.	No.	土　色	土　性	備　考
P22	1	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土器片を含む
P1掘り方	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）シルトを小ブロック状を含む　深さ38cm
柱痕	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ38cm
P2	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土器片を少し含む　深さ50cm
P3				深さ32cm
P4掘り方	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ51cm
柱痕	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ51cm
P5掘り方	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ19cm
柱痕	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	酸化鉄を含む。　深さ19cm
P6	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含み、炭化物を多く含む
P7	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、土器片を含む、粘性ややあり
P8	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR5/4）シルトを小ブロック状に含み、土器片を含む、粘性あり
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR5/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性あり

ピットNo.	No.	土　色	土　性	備　考
P10	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり
P12	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ8cm
P13	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ14cm
P14	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ19cm
P15	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ25cm
P16	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ8cm
P17	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、炭化物を含む、粘性ややあり　深さ10cm
P18	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含み、土器片を含む　深さ8cm
P19	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり　深さ9cm
P21	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり
P23	1	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ17cm
P24	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ14cm
P25	1	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む　深さ19cm

第16図　SI4竪穴住居跡

削によって削平してしまい、壁と堆積土は残存状況は良くない。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西４ｍ以上、南北４ｍ以上の隅丸の方形を基調とした平面形であると考えられる。

堆積土：削平のため周溝内部に残存するのみである。

壁：削平のためほとんど確認されなかった。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦であるが削平のために床面が残存しない部分もある。

掘り方はほぼ住居全面に認められ、深さは床面から５cm前後である。東壁際の一部が不整形に深くなっている。

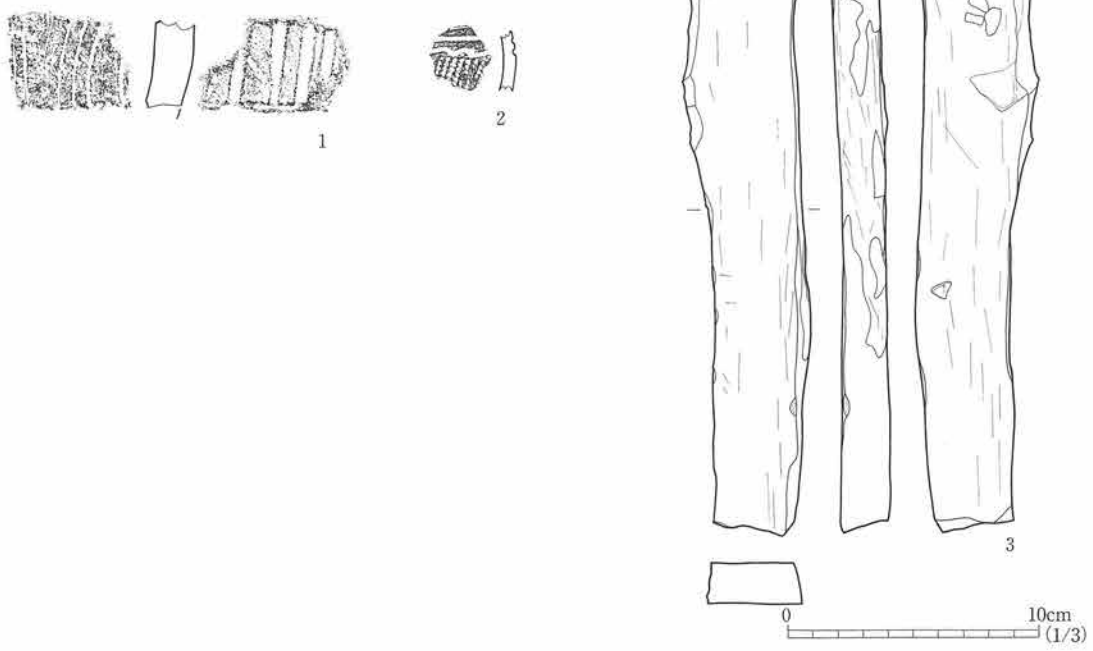
周溝：南壁沿い及び東壁の南半部で検出された。幅は15～20cm、床面からの深さは５～10cm、断面形は「U」字形である。

柱穴：床面検出部分で14個、床面が削平された部分で５個のピットが検出された。また、床面下で５個のピットが検出された。柱痕跡はP１・４・５で認められたが、他のピットでは認められなかった。ピットの規模・配置からP６・７は柱穴と考えられる。P８・17も柱穴の可能性がある。他のピットは柱穴であるか不明である。また、床面下のピットと柱穴との関係は不明である。

カマド：遺構検出部分では検出されなかった。

その他の施設：住居跡中央付近に45cm×20cmの長方形の焼土の広がりが検出された。床面が削平された部分であり、住居との直接の関係は不明である。

出土遺物：床面及びピット、周溝、掘り方埋土から弥生土器片、土師器片、須恵器片、礫石器が出土した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI4	縄文土器・深鉢	櫛歯状沈線文	格子状の沈線文		334-4	A-4
2	SI4　1層	弥生土器・鉢	沈線・縄文（RL）	ミガキ		334-22	B-7

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
3	SI4　1層	砥石	26.1	4.4	2	370	頁岩		428-14	Kd-168

第17図　SI4竪穴住居跡出土遺物

SI 7 竪穴住居跡

遺構の確認：B・C－2・3グリッドで確認された。SR 1 河川跡と重複しており、本遺構より新しい。SR 1 河川跡によって削平され、住居跡北側部分の堆積土・壁・カマドは検出されなかった。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西約3.8m、南北3.7m以上の隅丸の方形を基調とした平面形であると考えられる。

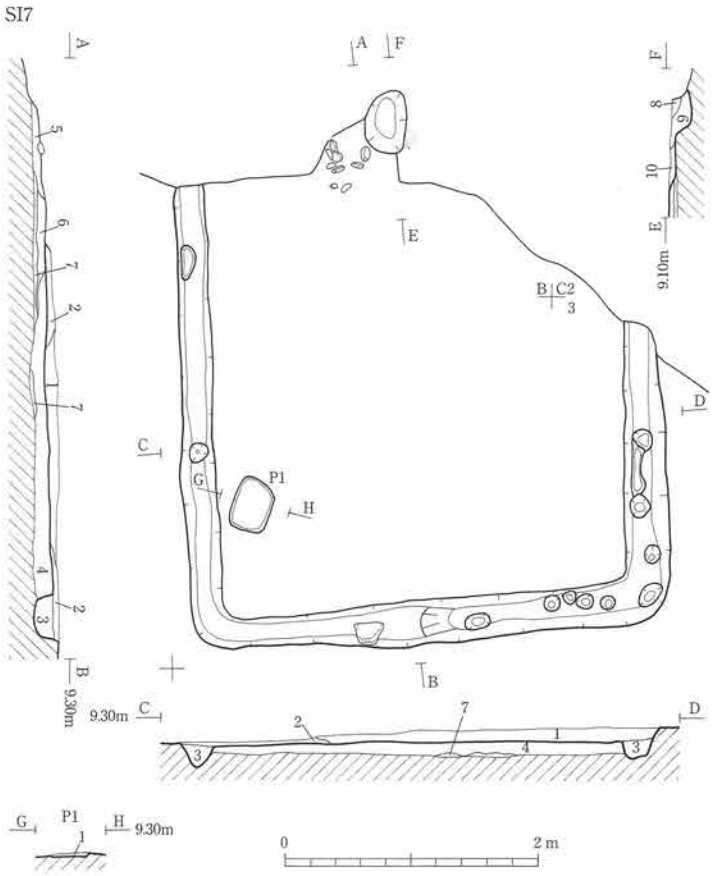
堆積土：3層確認された。褐色系のシルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い東壁で10cm程で、残存状況は良くない。周溝底面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦であるが北西側に緩やかに傾斜している。掘り方は住居跡全面に認められるが、貼床の締まりがやや弱く、ほぼ完形の土師器が出土するなど、掘り方底面を直接床面としていたことも考えられ、床面が2面である可能性がある。

周溝：住居跡検出部分では全周している。幅25～35cm、床面からの深さは6～12cmで南辺中央部で段になり東側に一段低くなっている。断面形は逆台形である。また、周溝底面がピット状になる部分がある。掘り方底面を床面としていた場合には周溝は付設されていたかどうか不明である。

柱穴：床面検出部分で検出されたピットは1個のみである。位置、深さなど柱穴とは考えられない。柱穴は不明で



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	黒褐色土をブロック状に含む、しまりややあり
周溝	3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黒褐色土を含む
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黒色土、黄褐色土をブロック状に含む
貼床	5	褐色（10YR4/6）	砂質シルト	
	6	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	黒色土をブロック状に含む
	7	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂質シルト	

層位	No.	土色	土性	備考
カマド掘り方	8	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物を含む（煙道　埋土の可能性あり）
	9	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土を含む
	10	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	黒色土をブロック状に含む

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	シルト質粘土、ややしまりあり、粘性あり

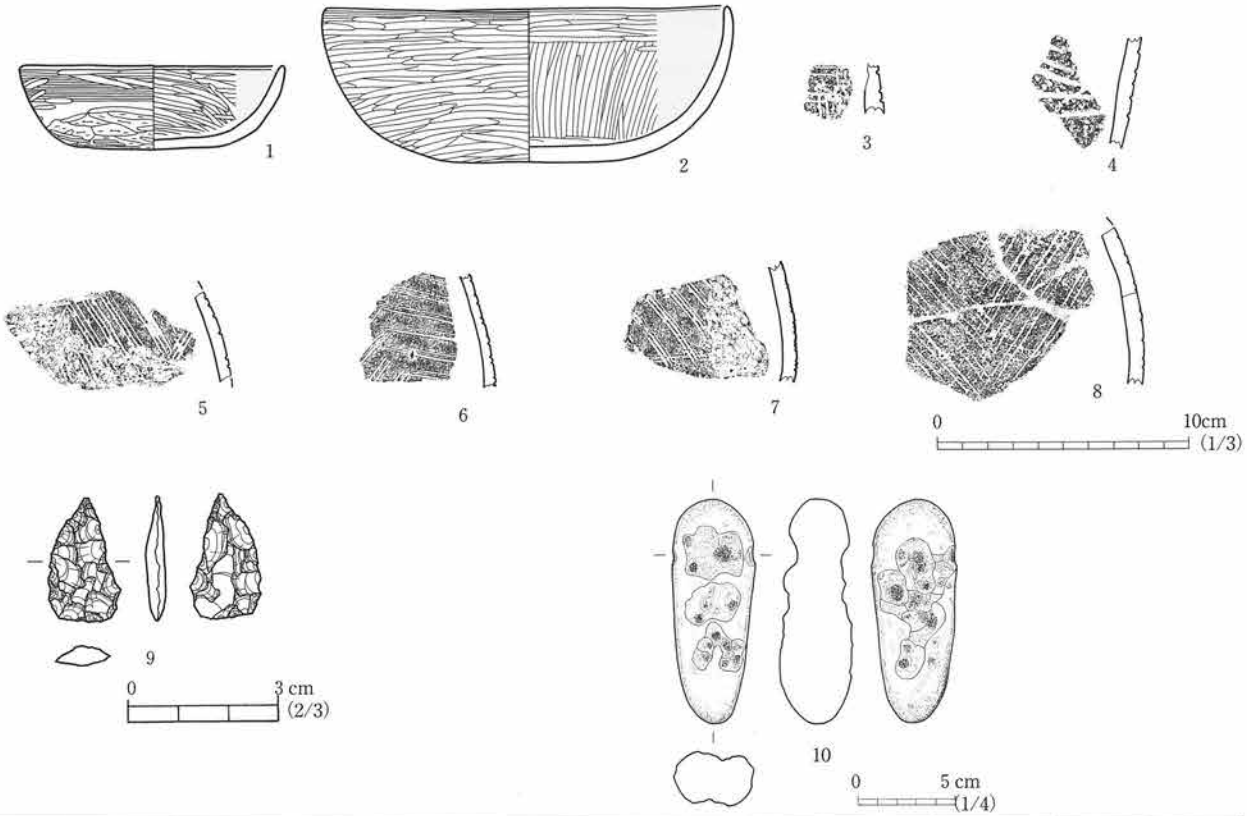
第18図　SI7　竪穴住居跡

ある。

カマド：SR１河川跡によって削平された住居跡北壁中央に付設されていたものと考えられ、カマド掘り方の一部と考えられるピットが検出された。焼け面の痕跡は確認されなかったが、内部には焼土・炭化物が含まれており、周囲には焼土・炭化物のブロックや礫が散在している。

その他の施設：周溝南辺の中央やや西寄りに偏平な川原石が検出された。カマドの反対側にあり何らかの施設である可能性がある。

出土遺物：堆積土、床面、堀方埋土から弥生土器片、土師器、石器、石製品が出土している。特に床面から石製品、Ｐ１とその周辺から白雲母が出土している。掘り方埋土から土師器が出土した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI7	土師器・坏	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理		337-1	C-1
2	SI7　1層	土師器・埦	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理		337-8	C-5
3	SI 7	弥生土器・不明	二本一描沈線	マメツ		335-4	B-14
4	SI7　1層	弥生土器・甕	沈線・縄文（LR）	マメツ		334-24	B-9
5	SI7	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）	ナデ		335-3	B-13
6	SI7　1層	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）	ナデ		335-2	B-12
7	SI7　1層	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）	ミガキ		334-25	B-10
8	SI7　1層	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）	ナデ		335-1	B-11

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
9	SI7　1層	石鏃	2.5	1.4	0.4	1	流紋岩		417-1	Kh-1
10	SI7	礫石器	11.8	4.3	3.7	150.5	デイサイト質凝灰岩	凹石	419-2	Kc-2

第19図　SI7　竪穴住居跡出土遺物

SI９竪穴住居跡

遺構の確認：Ｈ・Ｉ－５・６グリッド、SI２竪穴住居跡の床面下の精査中、掘り方底面でSI２竪穴住居跡掘り方と違ったプランが確認された。SI２竪穴住居跡の掘り方プランとも違っており、SI２・３竪穴住居跡より古い竪穴住居跡のものであると判断され、SI９竪穴住居跡とした。床面より上の部分は既に削平されており掘り方のみの検出

である。東側は調査区外に延びている。

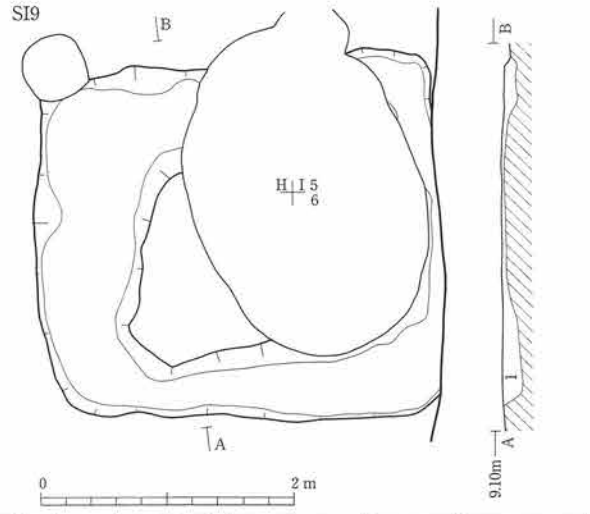
平面形・規模：残存する部分では東西3.1m以上、南北3.0mの不整な隅丸の方形を基調とした平面形である。

堆積土：掘り方埋土１層のみの確認である。灰黄褐色の粘土質シルト層である。

掘り方底面：掘り方は住居跡中央部分は浅く、壁際が深くなっている。

柱穴：掘り方底面ではピットは検出されず、柱穴は不明である。

出土遺物：遺物は出土していないが、SI２・３竪穴住居跡出土遺物として取り上げた遺物のなかに、本来は本遺構に属する遺物が含まれている可能性がある。



No.	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙(10YR7/3)シルトを斑状に含み、土器片を含む、粘性ややあり

第20図　SI9　竪穴住居跡

竪穴遺構

SI８竪穴遺構

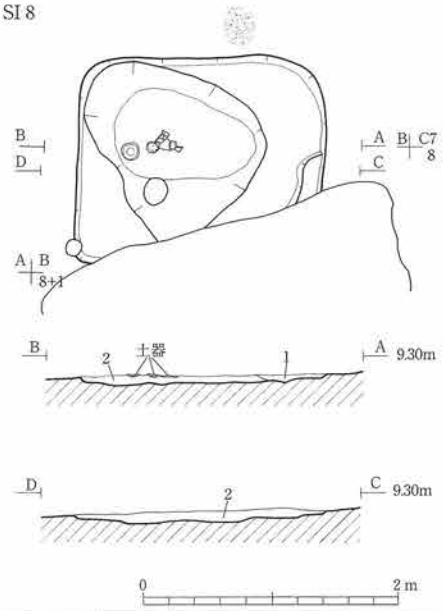
遺構の確認：Ｂ－７・８グリッドで確認された。畑の耕作によって削平され、遺構南東部分は検出されなかった。本遺構は竪穴住居跡として調査したが、規模が小さい点、柱穴、炉やカマドが検出されなかったこと等から竪穴遺構として報告する。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西約1.95m、南北約1.6mの隅丸の方形を基調とした平面形であると考えられる。

堆積土：２層確認された。褐色系のシルト層である。炭化物・黒色土粒・黄褐色土粒をブロック状に多量に含んでおり、人為的に埋め戻された様な状況を示している。

壁：壁高は残存状況の良い東壁で５cm程で、残存状況は良くない。床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方底面を直接底面としている。底面中央から北西部に５cm程の段差で一段深く堀り込まれている部分があり、南東部には３cm程のテラス状に一段高い部分がある。



No.	土　色	土 性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黒色土をブロック状に少量含む（この層の分布はSI８北東部だけ）
2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に多く含む、炭化物を含む

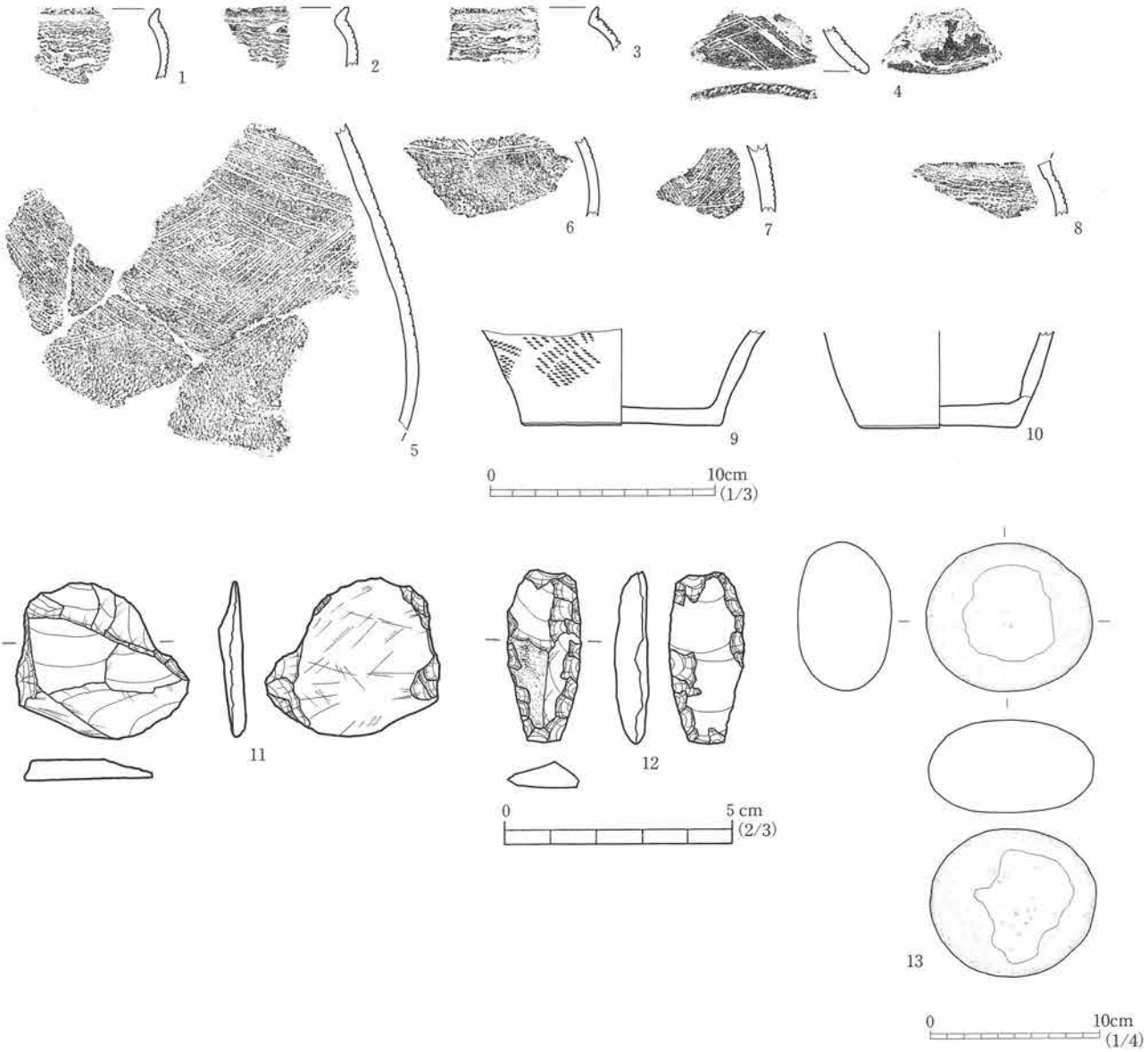
第21図　SI8竪穴遺構

周溝：住居跡検出部分では検出されなかった。

柱穴：床面でピットは検出されなかった。

その他の施設：本遺構との関係は不明であるが、住居跡の北壁の外側に30cm×25cmの楕円形に焼土が分布する範囲がある。

出土遺物：検出面及び堆積土中から縄文土器片、弥生土器片、土師器片、石器が出土している。特に弥生土器の底部片が一括で底面よりやや浮いた状態で出土しており、遺構に伴うものかとも考えられる。また、遺構周辺及び上面から剥片が30数点出土し、底面から石庖丁の破片と思われる磨製石器片が出土した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI8 1層	弥生土器・甕	波状文（二本一描沈線）	ナデ		335-12	B-22
2	SI8 1層	弥生土器・甕	波状文（二本一描沈線）	ナデ		335-10	B-20
3	SI8	弥生土器・甕	波状文（二本一描沈線）	ナデ		336-20	B-56
4	SI8 1層	弥生土器・蓋	重山形文（二本一描沈線）・縄文（LR）	二本一描沈線		335-8	B-18
5	SI8	弥生土器・壺	重菱形文（二本一描沈線）・縄文（LR）	ナデ		335-6	B-15
6	SI8 1層	弥生土器・壺	二本一描沈線	ナデ		335-5	B-16
7	SI8 1層	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）	マメツ		335-7	B-17
8	SI8 1層	不明	波状文	ミガキ		335-11	B-21
9	SI8 1層	弥生土器・甕	縄文（LR）	ミガキ	底面 木葉痕	334-15	B-1
10	SI8 1層	弥生土器・甕	縄文	ミガキ	底面 木葉痕	334-16	B-2

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
11	SI8 1層	石包丁	3.5	3.8	0.6	7.5	頁岩	磨製石器	418-10	Ke-2
12	SI8 1層	不定形	3.9	1.6	0.8	4.8	流紋岩		417-12	Ka-4
13	SI8 1層	磨石	9.8	8.8	5.5	720	安山岩		419-3	Kc-5

第22図　SI8　竪穴遺構出土遺物

竪穴建物跡

SI 6 竪穴建物跡

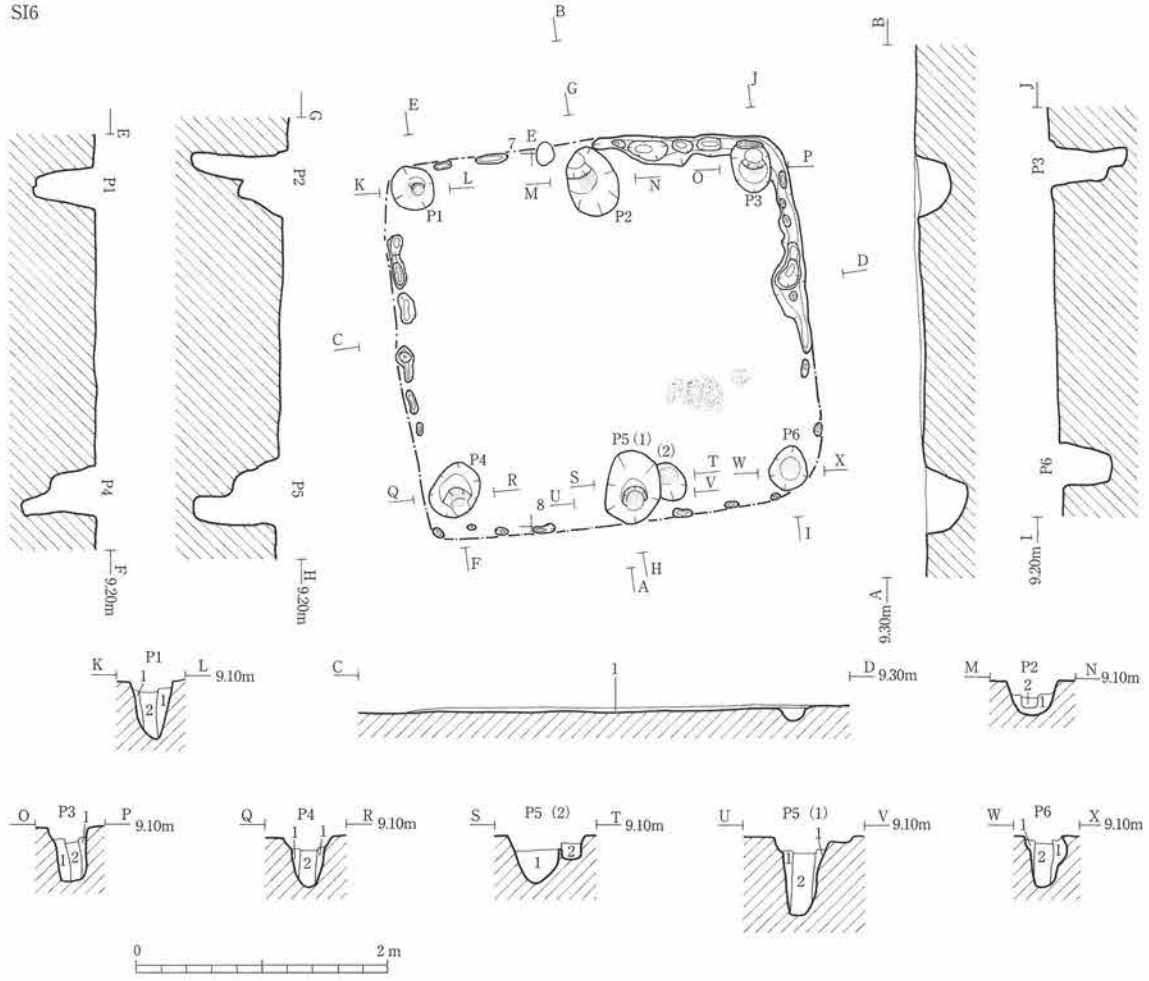
遺構の確認：D・E－6～8グリッドで確認された。畑の耕作によって削平され、壁は検出されなかった。

平面形・規模：東西3.3m、南北3.1mのやや歪んだ隅丸の方形である。

堆積土：1層のみが確認された。床面の中央を中心に僅かに残存していた。黒褐色の粘土質シルト層である。

床面：掘り方底面を直接床面としている。ほぼ平坦であるが、南西側に緩やかに傾斜している。

周溝：北東コーナー付近にのみ検出された。幅10～23cm、床面からの深さは3～5cmである。周溝の底面に径10cm程度のものから5cm×20cm程度で深さ3～10cmの小規模なピットが検出された。小規模なピットは遺構の壁際と考えられる部分に並んでおり、本来周溝が全周していたものと考えられる。



層位	No.	土色	土性	備考
1	1	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に少量含み、炭化物を多量含む、しまりあり、粘性ややあり

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトを多く含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状にP5(1)より少量含む、炭化物を含む、粘性あり
P2～P4	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、酸化鉄を含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に1層より少量含み、炭化物を含む、粘性ややあり

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P5 (1)	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、酸化鉄を含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、酸化鉄を含む、粘性ややあり
P5 (2)	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、酸化鉄を含む、粘性ややあり
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、粘性ややあり
P6	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、酸化鉄を含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトをブロック状に含む

第23図　SI6竪穴遺構

柱穴：壁際の床面で7個のピットが検出された。全てに柱痕跡が認められた。Ｐ５は２個のピットが重複している。Ｐ５（２）以外のピットが柱穴と思われる。あるいはＰ５（２）は柱穴の作り替えとも考えられる。
その他の施設：遺構東南部の床面に60cm×30cmの範囲の中に３か所の焼け面が検出された。遺構の中央から外れているが炉跡であると考えられる。
出土遺物：堆積土、ピットから弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土した。

土　坑

SK１土坑

Ｈ・Ｉ－６グリッドで確認された。SI２竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は１ｍ×1.2ｍの不整形で、深さは19cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は大きく凸凹している。遺物は堆積土中から少量の土師器片、須恵器片が出土した。

SK２土坑

Ｉ－４・５グリッドで確認された。遺構の東半部が調査区外に延びている。SI３竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は１ｍ×0.8ｍ以上の楕円形を基調とした形で、深さは６cmと残存状況は良くない。断面形は浅い皿形である。堆積土は単層である。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は土師器片、須恵器片が出土した。

SK３土坑

Ｈ－５グリッドで確認された。SI２・３竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は径約１ｍの不整な円形で、深さは22cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は土師器片、須恵器片、石器が出土した。

SK４土坑

Ｈ－４・５グリッドで確認された。SI３竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は1.85ｍ×1.5ｍの不整な長方形で、北東のコーナー部は丸くなっている。深さは50cmである。堆積土は２層確認された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハングしている部分がある。底面は平坦であるが、北側がやや深くなっている。遺物は土師器片、須恵器片が出土した。

SK５土坑

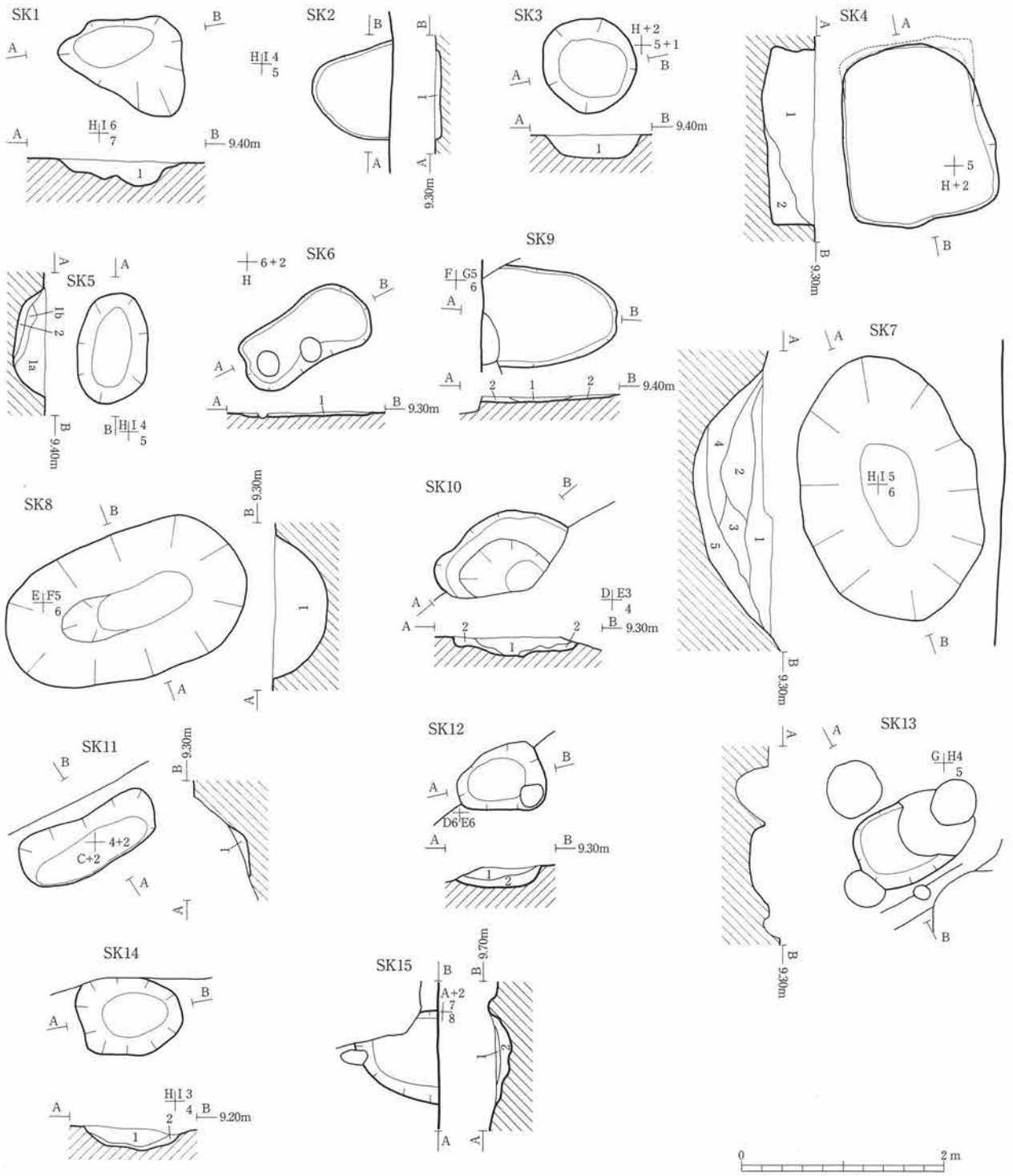
Ｈ・Ｉ－４グリッドで確認された。SI３竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は1.1ｍ×0.7ｍの楕円形で、深さは32cmである。堆積土は２層確認され、３層に細分された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、南側がやや深くなっている。遺物は土師器片、須恵器片が出土した。

SK６土坑

Ｇ・Ｈ－６・７グリッドで確認された。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.3ｍ×1.0ｍの不整な隅丸長方形で、中央部がやや括れている。深さ約５cmと残存状況は良くない。断面形は浅い皿形である。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土した。

SK７土坑

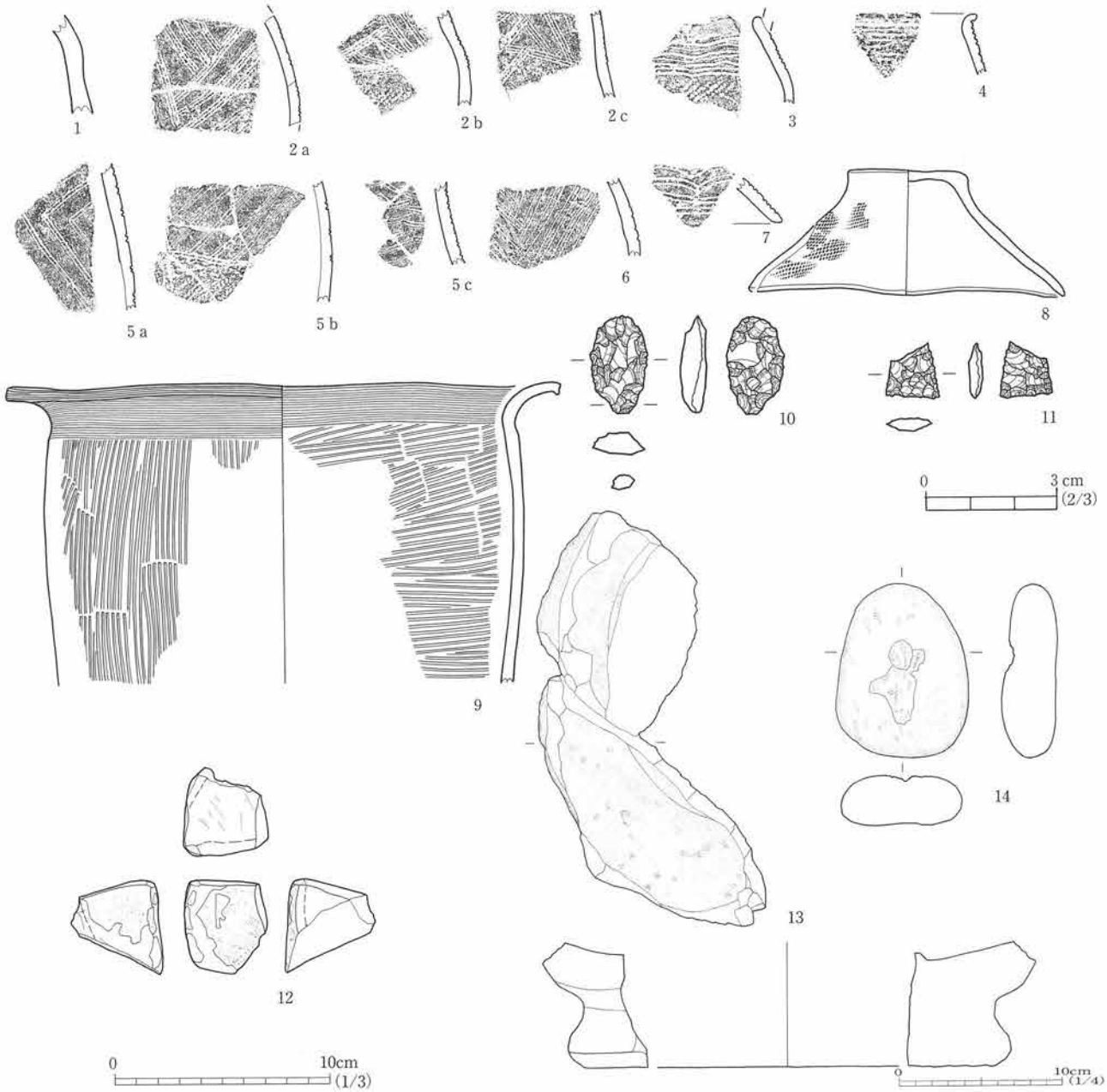
Ｈ・Ｉ－５・６グリッドで確認された。SI２・３竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は2.7ｍ×1.75ｍの不整な楕円形である。深さは75cmと残存状況は良い。堆積土は５層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、やや北側が低くなっている。遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片、石器、石製品が出土した。



遺構	No.	土色	土性	備考
SK1	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	浅黄（2.5Y7/3）シルトを斑状に含み、酸化鉄膜を小ブロック状に含む
SK2	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトを多く含み灰黄褐色（10YR5/2）シルトを小ブロック状に含む、酸化鉄を斑状に含み、炭化物を少量含む
SK3	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトを小ブロック状に含み土器片を少量含む
SK4	1	黄褐色（10YR4/3）	シルト	明黄褐（10YR7/6）シルトを小ブロック状に含み灰黄褐（10YR5/2）シルトを斑状に含む、酸化鉄を斑状に多く含む
	2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質シルト	灰黄褐（10YR5/2）シルトを部分的に小ブロック状に含む
SK5	1a	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む
	1b	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを小ブロック状に含む、炭化物を多く含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトを多く含む
SK6	1	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）シルトを小ブロック状に含み、炭化物、焼土、を多く含む
SK7	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/2）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/2）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む
	3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/2）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、炭化物を帯状に含む
	4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/2）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、粘性、しまりややあり
	5	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR7/2）シルトを小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、炭化物を多量に含む

遺構	No.	土色	土性	備考
SK8	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む、黄褐色は整際に多い、炭化物を含む、人為的に埋められたと考えられる、底面には炭化物の層が認められた（厚さ1cmほど）
SK9	1	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	炭化物を含む
	2	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	黒色土をブロック状に少量含む、炭化物を含む
SK10	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
SK11	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	粘性ややあり
SK12	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む、炭化物を含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黒色土をブロック状に含む
SK14	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む、炭化物を含む
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む、炭化物を含む
SK15	1	黄褐色（2.5Y5/3）	シルト	黒褐色土をブロック状に少量含む
	2	黒褐色土（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に多く含む、炭化物を含む

第24図　I区　土坑



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　徴	産　地	時　期	法　量 口　径	法　量 底　径	法　量 器　高	写真図版	登録番号
1	SK8　1層	陶器	甕		常滑					370-7	I-446

No.	遺構・層位	種別・器種	外　面	内　面	備　考	写真図版	登録番号
2a	SK6　1層	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ		335-14	B-24
2b	SK6　1層	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ		335-14	B-24
2c	SK6　1層	弥生土器・壺	重山形文（三本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ			B-24
3	SK9	弥生土器・鉢	波状文・縄文（LR）	ナデ		335-15	B-25
4	SK15　2層	弥生土器・甕	沈線	マメツ		335-17	B-27
5a	SK15	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ		335-9	B-19
5b	SK15	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ		335-9	B-19
5c	SK15	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）・縄文（LR）	マメツ		335-9	B-19
6	SK15　2層	弥生土器・壺	重菱形文（二本一描沈線）	ナデ		335-16	B-26
7	SI5　1層	弥生土器・蓋	連弧文（二本一描沈線）	ナデ		334-23	B-8
8	SK15　2層	弥生土器・蓋	縄文（LR）	ナデ	天井部　木葉痕	334-17	B-3
9	SK7	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ			C-4

No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
10	SK12　1層	ドリル	2.8	1.3	0.6	1.6	流紋岩		417-7	Ki-1
11	SK8	石鏃	(1.4)	(1.2)	0.3	0.4	黒曜岩		417-2	Kh-2
12	SK7	砥石	4.4	3.9	4.1	66.5	デイサイト質凝灰岩		425-4	Kd-50
13	SK12	礫石器	11.1	9.7	3	560	安山岩	凹石・磨石	423-2	Kd-24
14	SK8	礫石器	10.6	8.1	3.4	476	安山岩	凹石	419-1	KC-1

第25図　Ⅰ区　土坑出土遺物

SK 8 土坑

E・F－5・6グリッドで確認された。平面形は2.45m×1.45mの不整な楕円形である。深さは50cmと残存状況は良い。断面形はすり鉢形である。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、西壁の傾斜は中位で変わっている。底面に凸凹はない。遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片、石器が出土した。

SK 9 土坑

G－5・6グリッドで確認された。SI 4 竪穴住居跡、SX 1 性格不明遺構、ピットと重複しており、本遺構が古い。また、西半部を表土除去の際の掘削によって削平してしまい、東半部のみが確認された。平面形は1.0m以上×1.3m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは5cmと残存状況は良くない。断面形は浅い皿形である。堆積土は2層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は弥生土器片が出土した。

SK10土坑

D－3グリッドで確認された。SD 1 堀跡、SR 1 河川跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.4m以上×0.85m以上の不整な楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは32cmである。堆積土は2層確認された。壁は6cmの高さで、底面から急角度で立ち上がる。底面は二段になっており、中央部が一段目より26cm深くなっている。一段目、二段目ともに底面は平坦である。遺物は土師器片が出土した。

SK11土坑

C－4グリッド、SD 1 堀跡の壁面で確認された。SD 1 堀跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.45m以上×0.55m以上の楕円形あるいは隅丸長方形を基調としたものであると考えられる。深さは33cm以上である。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK12土坑

E－5グリッドで確認された。SD 1 堀跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は0.9m以上×0.7m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは21cm以上である。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は縄文土器片、土師器片、石器が出土した。

SK13土坑

G・H－5グリッド、SI 4 竪穴住居跡の床面下で確認された。SI 4 竪穴住居跡およびそのピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.85m以上×0.8mの楕円形あるいは隅丸長方形を基調としたものであると考えられる。深さは15cm以上である。堆積土は2層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK14土坑

H・I－3グリッドで確認された。SD 1 堀跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.0m×0.75m以上の不整な楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは20cmである。堆積土は2層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は凸凹している。遺物は弥生土器片が出土した。

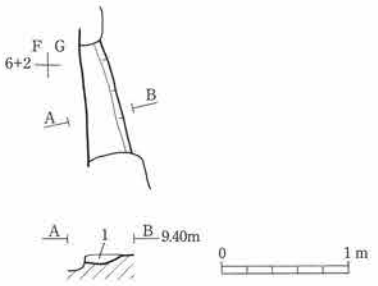
SK15土坑

I区A－8グリッド西壁で断面が確認され、調査区を拡張して確認したものである。遺構東半部は調査区西側溝によって削平され、さらに北東部を攪乱により削平されている。平面形は0.85m以上×0.95mの楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは18cmである。堆積土は2層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は凸凹している。遺物は弥生土器片、土師器片が出土した。

その他の遺構

SX１性格不明遺構

Ⅰ区Ｇ－６グリットで確認された。SK９土坑、ピットと重複しており、本遺構が古い。また、遺構の西側は表土除去の際の掘削によって削平してしまい、東側のみ残存している。平面形・規模は不明であるが、0.9m×0.35m以上の方形を基調としたものであると考えられる。深さは６cmである。堆積土は１層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、南側へ緩やかに傾斜している。遺物は、土師器片が僅かに出土した。



遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SX1	1	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	黒色土をブロック状に含む

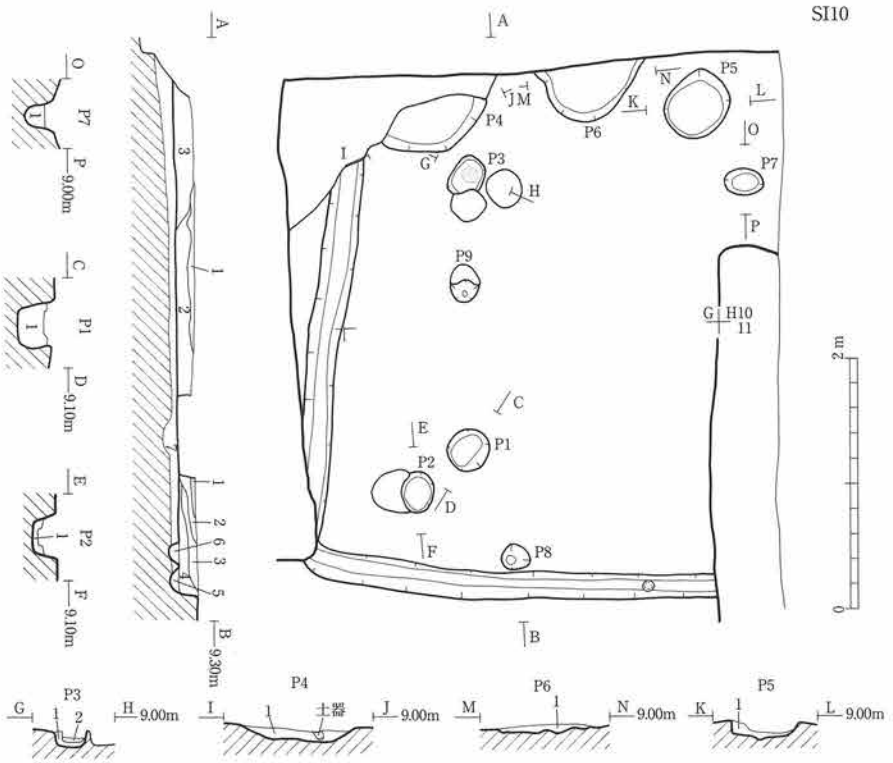
第26図　Ⅰ区SX1性格不明遺構

Ⅱ・Ⅲ区

Ⅱ・Ⅲ区では古代～中世と考えられる遺構は竪穴住居跡21軒、土坑９基、溝跡15条、円形周溝２条、小溝状遺構群がある。土坑は古代～中世のものだけではなく、近世のものおよび時期の不明なものについてもここで一括して記述する。総数は74基である。また、溝跡の実測図はこの項で近世の溝跡まで掲載する。

竪穴住居跡

SI10竪穴住居跡



層位	No.	土　色	土　性	備　考
	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量含む
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黒色土をブロック状に少量含む
	4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量含む
周溝	5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P8	6	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を含む、粘性ややあり
掘り方	7	淡黄色（2.5Y8/4）	粘土質シルト	褐灰色（10YR4/1）シルトをブロック状に含む、粘性ややあり

層位	No.	土　色	土　性	備　考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土、酸化鉄を含む、粘性ややあり
P2	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み酸化鉄を含む、粘性ややあり
P3	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を少量含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	炭化物を少量含む、粘性ややあり
P4	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、炭化物、焼土、土器片を含む、粘性ややあり
P5	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、炭化物、焼土、土器片を含む、粘性ややあり
P6	1	にぶい黄橙色（10YR7/4）	シルト	焼土、炭化物を多く含み、土器片を含む
P7	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、酸化鉄を含む、粘性ややあり
P9	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を含む、粘性ややあり、床下で検出、深さ35cm

第27図　SI10竪穴住居跡

遺構の確認：F～H－10・11グリッドで確認した。遺構は東・北・西側の調査区外に延びている。SD６堀跡と重複しており、本遺構が古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、東西3.8m以上×南北4.35m以上の方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はN－16°－Eである。

堆積土：５層確認された。黒褐色～灰黄褐色のシルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い南壁で17cmである。周溝底面から急角度で立ち上がる。

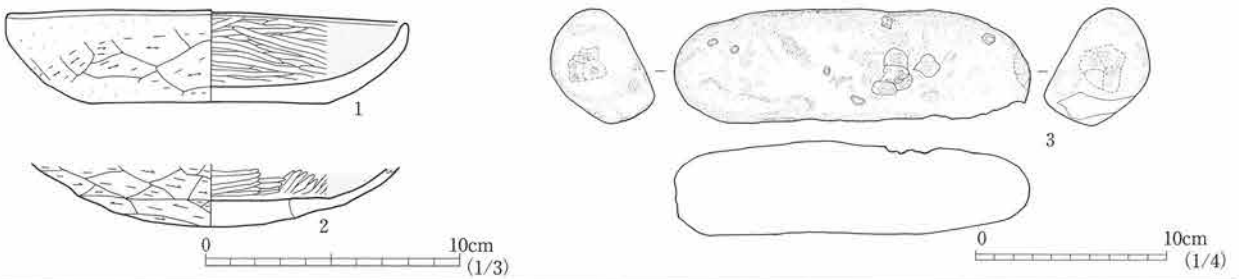
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡検出部分全面に認められ、深さは床面から５～15cmで、住居跡北側に向かって深くなっている。

周溝：住居跡検出部分では全周している。幅18～28cm、床面からの深さは５～７cmで北側がやや浅くなっている。

柱穴：床面で８個のピットが検出された。Ｐ３で柱痕跡が認められたが他のピットでは確認されなかった。規模や配置からＰ１・３が柱穴の可能性がある。住居跡東壁の位置が不明のため壁からの距離が明らかではないが、Ｐ７も柱穴の可能性がある。Ｐ９は床面下で検出されたものである。

カマド：遺構検出部分では検出されなかったが、Ｐ４・５・６に多量の炭化物、焼土が含まれていることから、住居の北壁に付設されていた可能性がある。

出土遺物：堆積土中および床面、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器片、石器が出土した。そのうち土師器坏２点、礫石器１点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI10	土師器・坏	ケズリ	ミガキ・黒色処理		337-3	C-22
2	SI10	土師器・坏	ケズリ	ミガキ・黒色処理			C-21

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
3	SI10 P7	礫石器	18.5	6	4.9	775	石英質凝灰岩	凹石・敲石	419-4	Kc-6

第28図　SI10竪穴住居出土遺物

SI11竪穴住居跡

遺構の確認：E・F－12・13グリッドで確認した。煙道の先端部分が北側の調査区外に延びている。ＳＫ14土坑、小溝状遺構、ピットと重複しており、本遺構は小溝状遺構より新しく、ＳＫ14土坑、ピットより古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、竪穴部分は東西3.85m×南北4.05mの方形である。西壁を基準とした方向はN－13°－Wである。

堆積土：大別して６層確認された。にぶい黄褐色系の粘土質シルト層である。

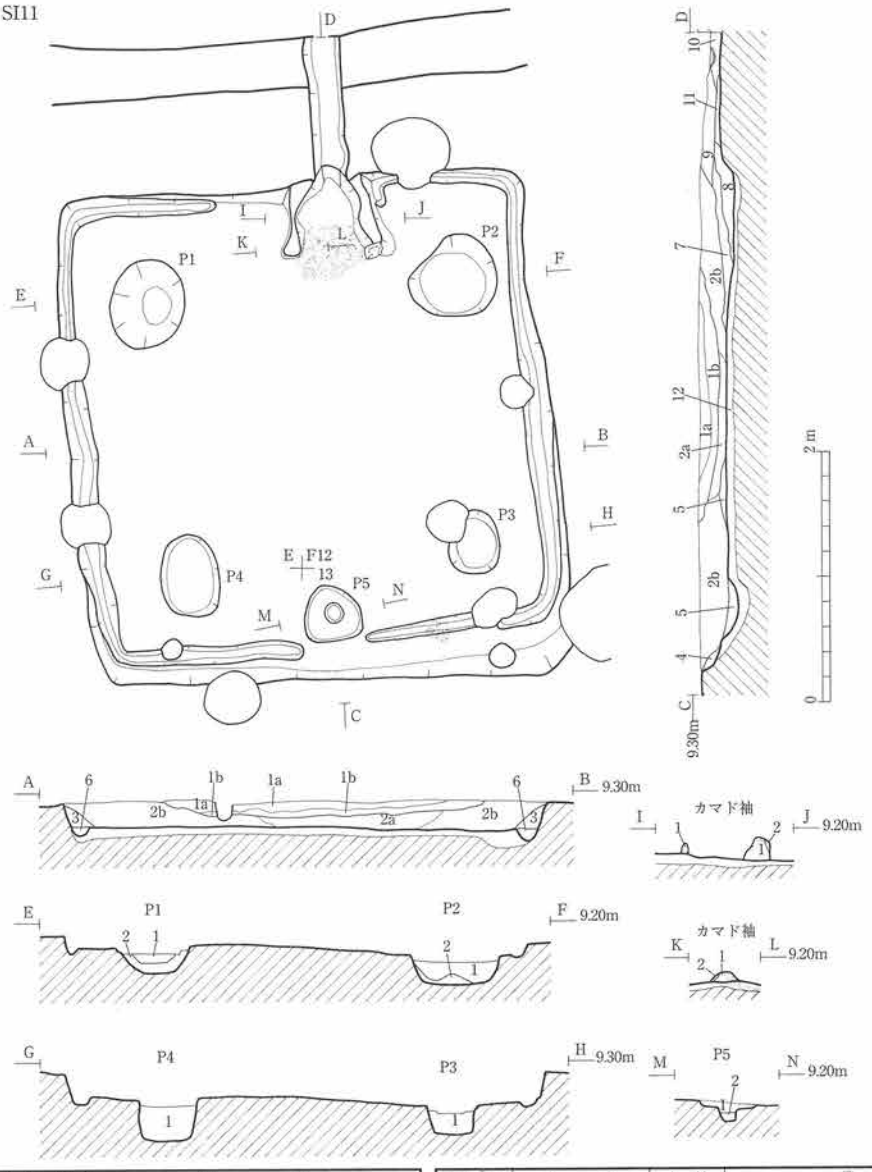
壁：壁高は残存状況の良い北東壁で26cmである。周溝底面から急角度で立ち上がるが、南壁には緩やかに立ち上がる部分もある。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。細かい凸凹はあるがほぼ平坦であり、カマドに向かって緩やかに傾斜している。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは床面から５～15cmで、住居跡の東・南・西壁際が溝状に深くなっている。特に東・南壁際が顕著である。

周溝：北壁中央部、南壁中央部を除いてほぼ全周している。東壁の南寄りから南西コーナーにかけて壁際から離れ、周溝が途切れる部分では壁の下端から20cm離れている。幅12～25cm、床面からの深さは４～11cmで底面は緩やかに波うっている。

柱穴：床面で５個のピットが検出された。何れのピットにも柱痕跡は認められなかった。規模や配置からＰ１・２・３・４が柱穴の可能性がある。

カマド：北壁中央やや東寄りに付設されている。燃焼部、煙道部が検出されたが、煙道は調査区外に延びており、

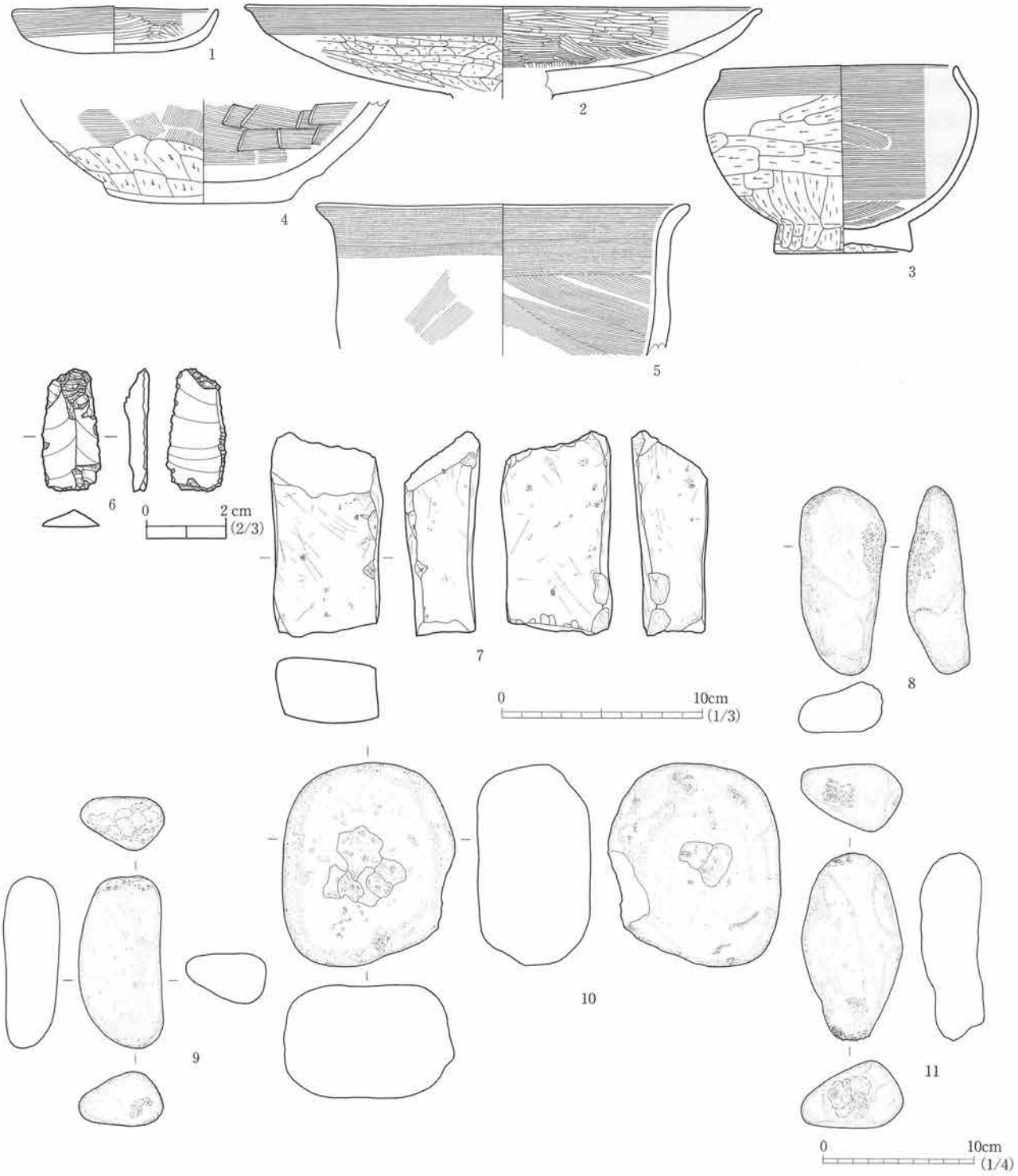


層位	No.	土色	土性	備考
	1a	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土を斑状に多く含む、粘性ややあり
	1b	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
	2a	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む。炭化物・焼土を含む、粘性ややあり
	2b	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土をごく少量含む、粘性ややあり
	3	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む、粘性ややあり
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黄褐色土をやや多く含み炭化物を少量含む、粘性ややあり
周溝	6	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、炭化物を含む、粘性ややあり
	7	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含み、炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
	8	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	焼土ブロックを多く含む、粘性ややあり
カマド	9	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	炭化物、焼土ブロックを多く含む
	10	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	炭化物を多く、焼土を少量含む
	11	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	焼土ブロックを少量含む
掘り方	12	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、炭化物、焼土粒を部分的に多く含む、粘性ややあり

層位	No.	土色	土性	備考
カマド袖	1	にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘土質シルト	灰黄褐色土を少量含む、粘性ややあり
	2	にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘土質シルト	灰黄褐色土を多く含む

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土、炭化物を含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を多く含み、土器片を含む、粘性ややあり
P2	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含む、炭化物、焼土を多く含む、粘性ややあり
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を多く含み、炭化物、焼土を少量含む、粘性ややあり
P3	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含み、炭化物を少量含む、粘性ややあり
P4	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
P5	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含み、炭化物、土器片を含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を少量含む、粘性ややあり

第29図　SI11竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI11	土師器・坏	ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ・黒色処理		337-4	C-24
2	SI11	土師器・高坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理		337-9	C-26
3	SI11	土師器・高台付埦	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・黒色処理		337-11	C-25
4	SI11	土師器・鉢	ナデ・ケズリ	ナデ・ヘラナデ			C-23
5	SI11	土師器・甕	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ			C-6

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
6	SI11	不定形	3.1	1.4	0.7	2	珪化凝灰岩		417-16	Ka-108
7	SI11	砥石	10.4	5.5	3.5	330	デイサイト質凝灰岩		425-6	Kd-55
8	SI11 床面	礫石器	12.5	5.7	3.8	340	デイサイト質凝灰岩	敲石	419-6	Kc-8
9	SI11 周溝	礫石器	11.5	5.5	3.5	340	流紋岩	敲石	419-5	Kc-7
10	SI11 2層	礫石器	13.4	11.5	7.5	2010	安山岩	凹石	419-7	Kc-9
11	SI11 2層	礫石器	12.5	6.7	4.5	455	石質凝灰岩	敲石	419-8	Kc-10

第30図　SI11竪穴住居跡出土遺物

煙道の先端部と煙出しピットは不明である。燃焼部は幅50cm、奥行き65cmで、右側の側壁は20cm、左側の側壁中央部は後世のピットによって損なわれているが、15cmの高さで残存している。燃焼部の手前側の幅50cm、奥行き45cmの焼け面を中心に側壁が火熱を受けて赤変している。右側の袖部の先端部に礫が検出されており、焼けていることから袖部の補強に用いられたものでものであると考えられる。

その他の施設：住居跡の南東コーナー付近の床面から周溝にかけて、焼け面が検出され、炭化物、焼土が見られた。性格については不明である。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器片、石器、石製品が出土した。そのうち土師器坏、高坏、台付鉢各１点、甕２点、剥片石器１点、礫石器４点、石製品１点を図示した。

SI12竪穴住居跡

遺構の確認：Ｅ～Ｇ－14・15グリッドで確認した。SI14・16竪穴住居跡、SK18土坑、SD７・８溝跡、小溝状遺構、ピットと重複しており、本遺構はSI14・16竪穴住居跡、SK18土坑、小溝状遺構より新しく、SD７・８溝跡、ピットより古い。

平面形・規模：平面形は東西4.65ｍ×南北4.75ｍの方形であるが、西辺がやや狭くなっている。南壁を基準とした方向はＥ－１°－Ｓである。

堆積土：４層確認された。暗褐色～灰黄褐色系のシルト層である。炭化物、焼土を含んでいる。

壁：壁高は残存状況の良い南東壁で17cmである。周溝底面から急角度で立ち上がる。SI14・16竪穴住居跡の堆積土を壁としている部分がある。

床面：掘り方底面を直接床面としているが、この大部分はSI14・16竪穴住居跡の堆積土である。住居跡東側から西側中央にかけて、掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている部分もある。平坦である。掘り方の深さは床面から５～15cmで、住居跡の東側が深くなっている。

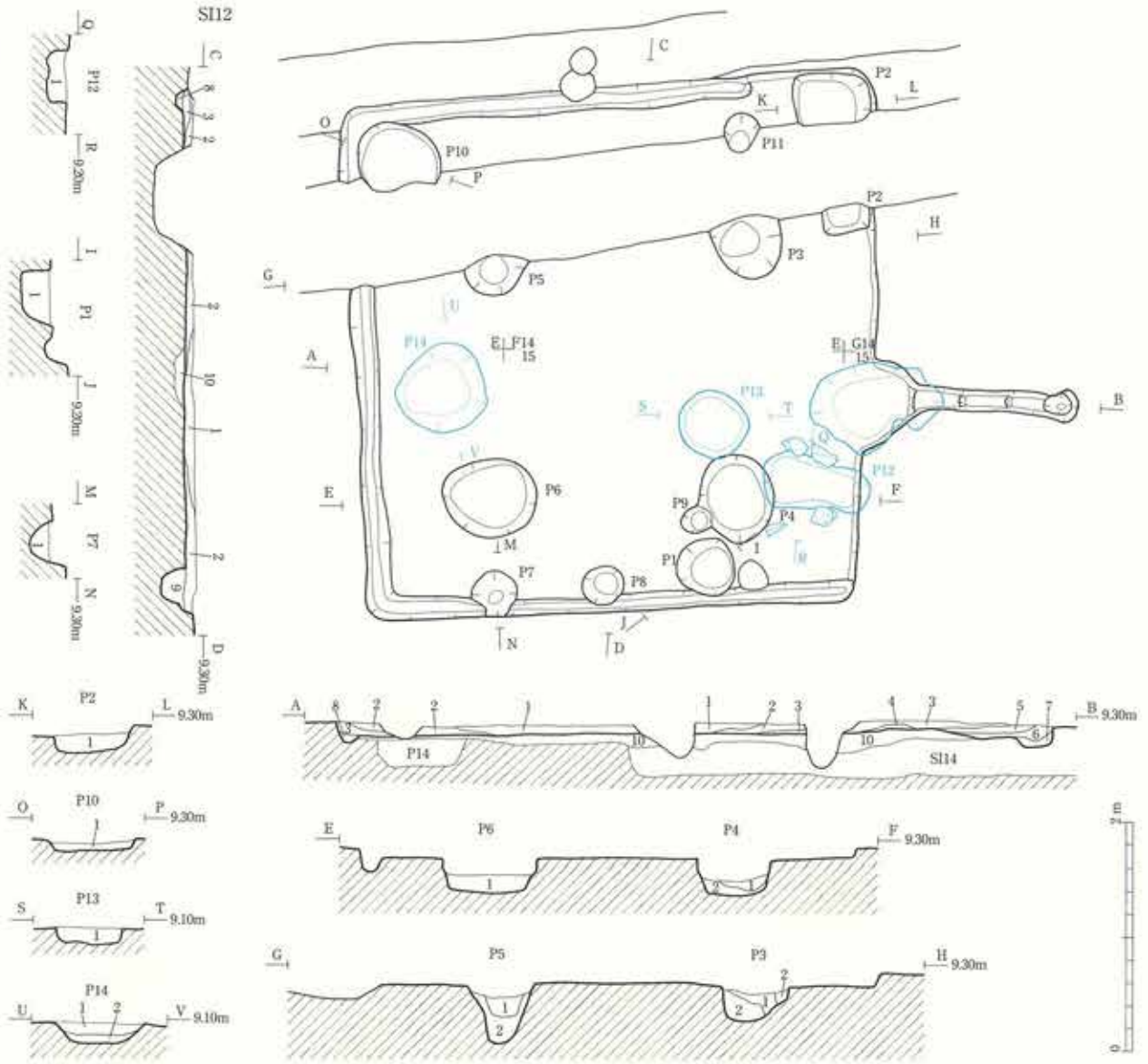
周溝：東壁および北壁の東寄りを除いて、南壁、西壁、北壁の壁際で検出されている。幅13～25cm、床面からの深さは４～６cmである。周溝底面のレベルは南西コーナー付近が最も高くなっている。

柱穴：床面で10個のピットが検出された。何れのピットにも柱痕跡は認められなかった。規模や配置からＰ３・４・５・６が柱穴の可能性がある。Ｐ14は床面下で検出されたものである。

カマド：東壁中央やや南寄りに付設されている。燃焼部、煙道部、煙出しピットが検出された。燃焼部は幅80cm、奥行き40cmで、住居跡東壁から外側へ張り出している。燃焼部の手前側の床面から焼け面が観察され、側壁および奥壁、煙道の中部付近まで火熱を受けて赤変している。煙道部は長さ115cm、幅18cmで、先端に向かって二段の段が付けられている。深さは先端に向かってそれぞれ５cm、８cm、13cmである。煙出しピットは直径30cm、深さ15cmである。カマドの掘り方は115cm×85cmの不整な楕円形で、住居跡東壁から65cm程張り出し、煙道部まで達している。

その他の施設：床面下でカマド掘り方の右脇と手前にピットが検出された。Ｐ12は長辺の上端周辺に礫が並べられており、内部に炭化物、焼土が多量に含まれていることから、古い段階に住居に付設されていたカマドの掘り方と袖の補強として用いられていた礫であると考えられる。また、Ｐ13は炭化物、焼土が多量に含まれており、カマドに関係するものである可能性がある。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器片、石器、石製品が出土した。そのうち土師器坏８点、甕６点、剥片石器１点、石製品１点を図示した。

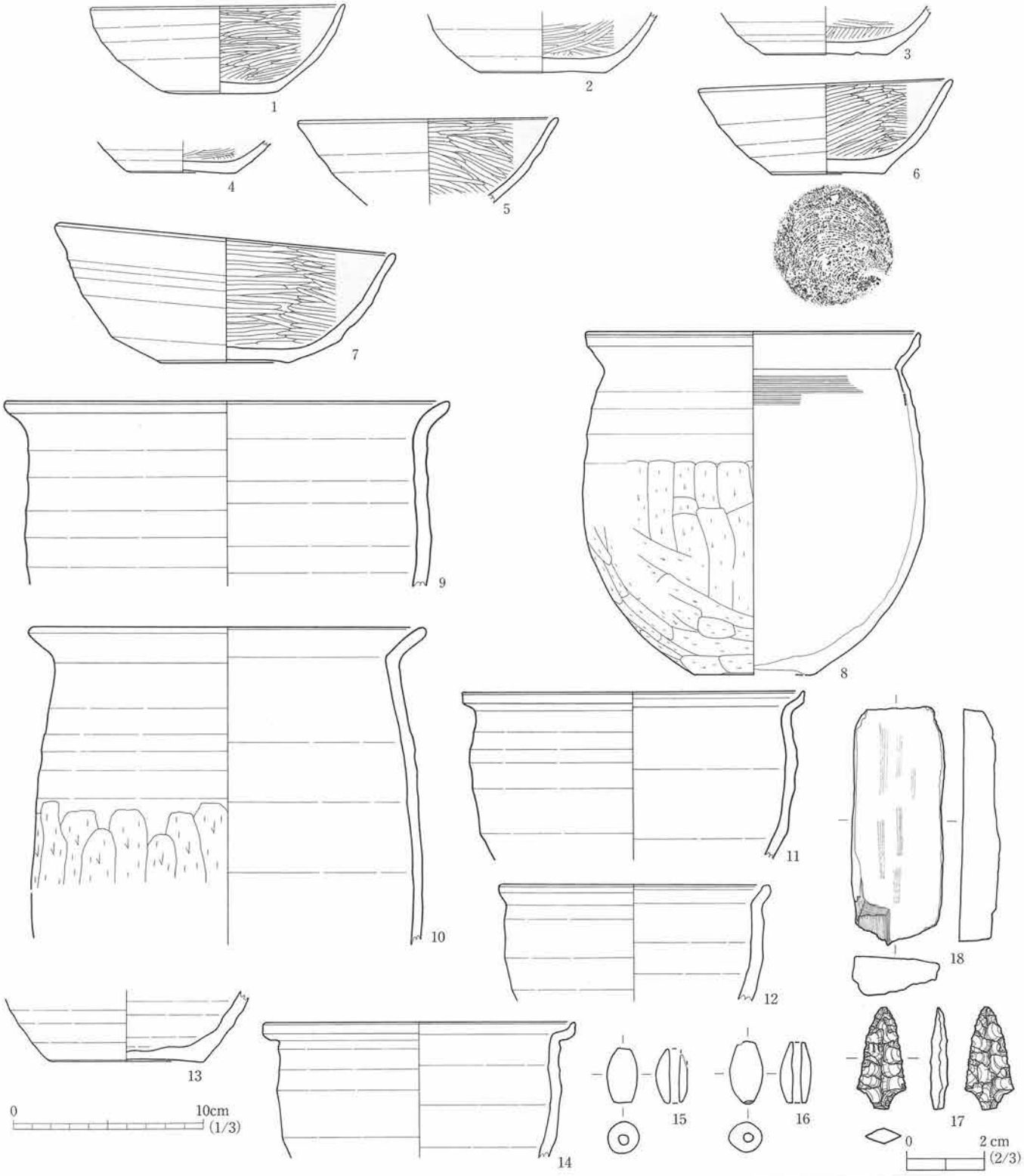


層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土粒をわずかに含む
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土粒を多く含む
	4	黒褐色（10YR3/1）	シルト	焼土ブロックを多量に含む
	5	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	炭化物を多く含む。焼土粒を含む
	6	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黒色土をブロック状に多く含む。炭化物、焼土粒を含む
	7	黒褐色（10YR3/2）	シルト	畑出し
周溝	8	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に多く含む。粘性ややあり
P8	9	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土と黒色土をブロック状に含む
掘り方	10	暗褐色（10YR3/3）	シルト	にぶい黄褐色土をブロック状に含む。炭化物、焼土粒を含む

ピット№	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黒色土、黄褐色土をブロック状に多く含む。炭化物、焼土粒を多く含む。粘性ややあり
P2	1	黒褐色（10YR3/3）	シルト	下部に黄褐色土をブロック状に含む。
P3	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黒色土をブロック状に含む。粘性ややあり
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む。粘性ややあり

ピット№	No.	土色	土性	備考
P4	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む。炭化物を含む。粘性ややあり
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む。粘性ややあり
P5	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	粘性ややあり
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む。粘性ややあり
P6	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む。粘性ややあり
P7	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	
P9	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含み、炭化物を含む。粘性ややあり。深さ19cm
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む。粘性ややあり。深さ19cm
P10	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に含む。炭化物、焼土粒を含む
P11	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙色土を少量含む。土器片を含む床下　深さ38cm
P12	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土をかブロック状に含む。焼土粒は多く、炭化物、土器片を含む。粘性ややあり
P13	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黄褐色土、炭化物、焼土粒を多く含む、土器片を多く含む
P14	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙色土、炭化物、焼土粒をブロック状に含む、土器片を含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土粒を少量含む

第31図　SI12竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI12 床面	土師器・坏	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理		342-5	D-60
2	SI12 貼床	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理			D-55
3	SI12 P14	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理			D-61
4	SI12 P5	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理			D-57
5	SI12 P14	土師器・坏	ロクロナデ		ミガキ・黒色処理			D-63
6	SI12	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-5	D-66
7	SI12	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-6	D-67
8	SI12	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ	ケズリ	ロクロナデ・ロクロハケメ		342-2	D-58
9	SI12	土師器・甕	ロクロナデ		ロクロナデ			D-59
10	SI12	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ		342-3	D-64
11	SI12 カマド	土師器・甕	ロクロナデ		ロクロナデ			D-56
12	SI12 貼床	土師器・甕	ロクロナデ		ロクロナデ			D-54
13	SI12 P14	土師器・甕	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			D-62
14	SI12	土師器・甕	ロクロナデ		ロクロナデ			D-53

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
15	SI12	土錘	ミガキ　孔径0.5cm	2.9	1.6		7.0	380-5	P-4
16	SI12	土錘	ミガキ　孔径0.5cm	3.3	1.7		7.6	380-6	P-5

No.	遺構・機種	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
17	SI12 P6	石鏃	(2.0)	(1.3)	0.5	1.2	珪質頁岩		417-5	Kh-5
18	SI12 P5	砥石	12.7	4.9	2.1	192	珪化木		425-7	Kd-56

第32図　SI12竪穴住居跡出土遺物

SI13竪穴住居跡

遺構の確認：F・G－16～18グリッドで確認した。SD12溝跡、小溝状遺構、ピットと重複しており、本遺構は小溝状遺構より新しく、SD12溝跡、ピットより古い。

平面形・規模：平面形は東西4.35m×南北４m以上の方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はN－17°－Eである。

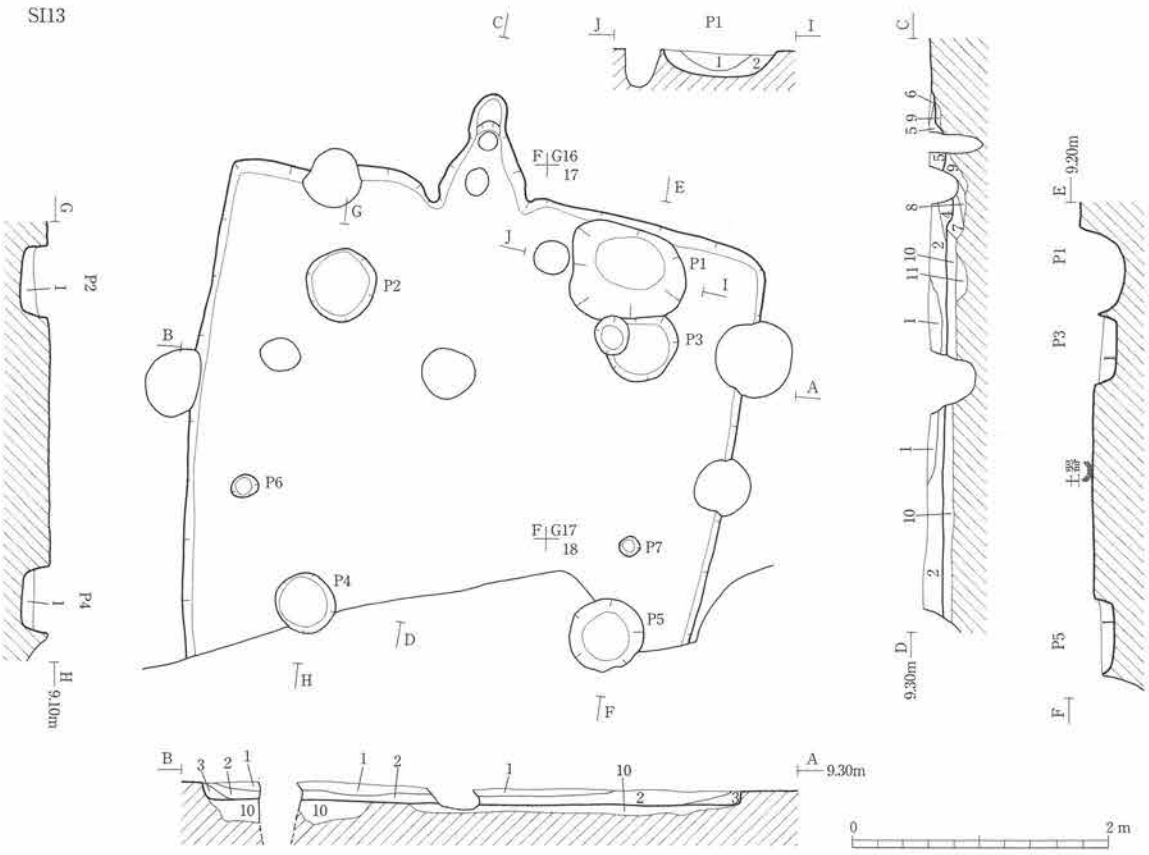
堆積土：３層確認された。黒褐色～灰黄褐色系のシルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い西壁で18cmである。床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としているが、掘り方底面を直接床面としている部分もある。平坦である。掘り方の深さは床面から５～20cmで、住居跡の西側、特に西壁際が深くなっている。

周溝：遺構検出部分では検出されなかった。

柱穴：床面で６個のピットが検出された。何れのピットにも柱痕跡は認められなかった。規模や配置からＰ２・３・４・５が柱穴の可能性がある。Ｐ７は床面下で検出されたものである。



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐色土、黒色土をブロック状に少量含む
	3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黒色土をブロック状に含む
カマド	4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土粒を含む
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を多く含む、粘性ややあり
	6	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
カマド掘り方	7	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	炭化物、焼土を含む
	8	にぶい褐色（7.5YR5/3）	シルト	焼土を含む
	9	褐色（7.5YR4/3）	シルト	炭化物、焼土ブロックを多く含む
貼床	10	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黄褐色土、炭化物を含む。粘性ややあり
掘り方	11	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐色土を多く含む。粘性ややあり

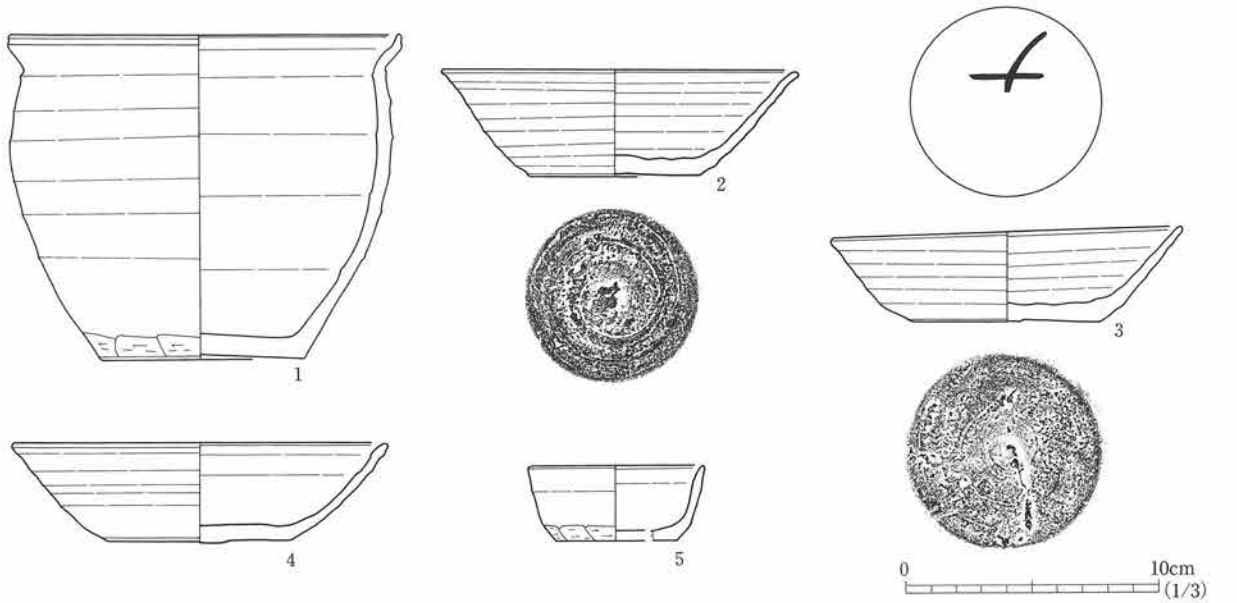
ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	粘性ややあり
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む、粘性ややあり
P2	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む、粘性ややあり
P3	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む、粘性ややあり
P4	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む、粘性ややあり
P5	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黒色土をブロック状に少量含む、粘性ややあり
P6	1	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄褐色土を少量含む　深さ12cm
P7	1	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄褐色土を少量含む、床下で検出　深さ10cm

第32図　SI13竪穴住居跡

カマド：北壁中央やや西寄りに付設されている。燃焼部、煙道部が検出された。煙出しピットは削平のためか検出されなかった。燃焼部は幅55cm、奥行き60cmで、住居跡北壁から外側へ張り出している。側壁の手前部分は左側の袖が壁から10cm、右側の袖が5cm程度残存して床面に張り出している。燃焼部の手前側の床面から焼け面が観察され、側壁および奥壁が火熱を受けて赤変している。煙道部が検出されたのは長さ20cmと短い。幅は18cm、深さは4cmである。カマドの掘り方は燃焼部手前から煙道部にまで達している。

その他の施設：カマド右脇の壁際に検出されたP1が住居内の位置、規模等から貯蔵穴であると考えられる。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器、石器、石製品が出土している。特に東側の床面から須恵器坏が3点重なって出土している。そのうち土師器甕1点、須恵器坏4点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI13	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ	回転糸切り	ロクロナデ		342-4	D-65
2	SI13	須恵器・坏	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ		342-6	E-1
3	SI13	須恵器・坏	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	墨書あり	342-7	E-2
4	SI13	須恵器・坏	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ		342-8	E-3
5	SI13	須恵器・坏	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	ロクロナデ		342-11	E-4

第34図　SI13竪穴住居跡出土遺物

SI14竪穴住居跡

遺構の確認：F・G－14～16グリッドで確認した。SI12竪穴住居跡、SK18土坑、SD12溝跡、小溝状遺構、ピットと重複している。本遺構は全ての遺構より古い。位置的にSI20竪穴住居跡と重複関係にあるものと考えられるが、直接の重複は確認できなかった。遺構は平成5年度・6年度の調査区にまたがって検出され、調査区間に断絶が認められる。

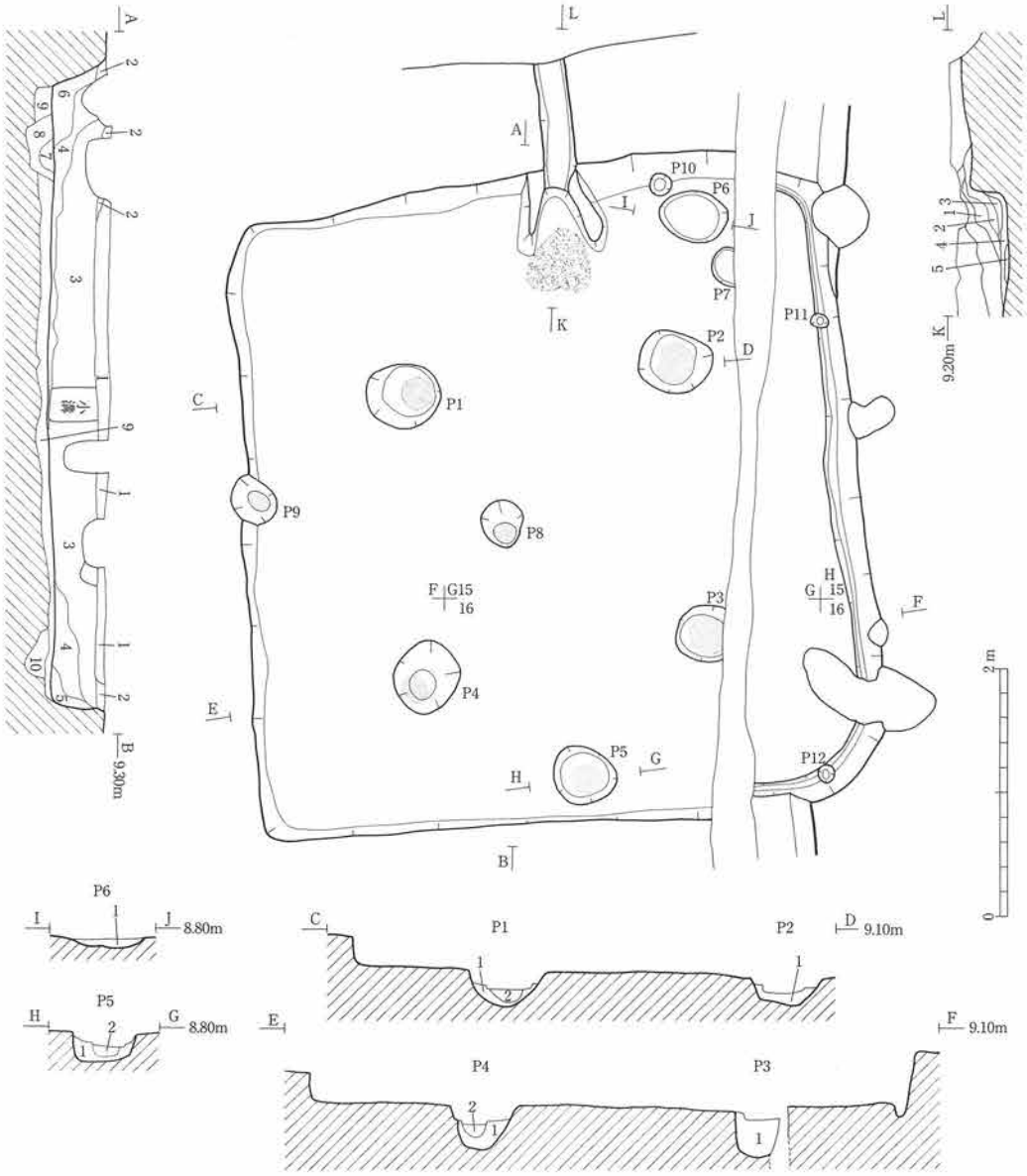
平面形・規模：平面形は東西5.05m×南北5.45mのやや歪んだ方形であるが、南辺が広くなっており、南東コーナーが隅丸状になっている。西壁を基準とした方向はN－0°－Eである。

堆積土：6層認められた。3層上面で小溝状遺構、ピットが掘り込まれており、1、2層はSI12竪穴住居跡構築以前に埋められた土層であるものと考えられる。

壁：壁高は残存状況の良い東壁で47cm、1年次分では南壁で42cmである。床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡全面に認められ、掘り方の深

SI14



層位	No.	土色	土性	備考
	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に少々含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙色土を多く含む、焼土、粘土少々含む
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色土シルトをブロック状に含み、にぶい黄橙色土を多く含み、酸化鉄を含む、人為的堆積土の可能性？
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色土シルトを小ブロック状に含み、黄橙色を多く含む
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色土シルトを多く含む
	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色土シルトを多く含む、焼土を部分的に含む
カマド	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土を多く含む、袖石あり、袖石の掘り方か？
	8	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	炭化物、焼土を小ブロック状に含む、カマドの掘り方か？
貼床	9	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土、焼土を少量含む
掘り方	10	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	灰黄褐色土をブロック状に含む

層位	No.	土色	土性	備考
カマド	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色シルトを小ブロック状に含み、黄橙色土を多く含む、又焼土ブロックを含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色シルトを小ブロック状に含み、黄橙色土を多く含む、又炭化物を少量含む
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色シルトを小ブロック状に含み、黄橙色土を多く含む、又炭化物、焼土を多く含む
	4	暗褐色（7.5YR4/3）	シルト	炭化物、焼土、灰炭を多く含む、（カマド内堆積物）
	5	明赤褐色（5YR5/8）		焼土ブロック

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土、酸化鉄を多く含む
	2	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土を少量含む、炭化物を含む
P2	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙色土を含む、土器片を含む
P3	1	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土を含む
P4	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙色土、炭化物を含む
	2	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土、炭化物を含む
P5	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙色土を含む
	2	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土、炭化物を少量含む
P6	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	灰黄褐色土、砂を含み、土器片を含む
P8掘り方	1	褐灰色（10YR5/1）	シルト	にぶい黄橙色土を含む
柱痕	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を少量含む
P9	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を含む
P10	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を含む

ピット計測表（cm）

No.	7	11	12
深さ	6	16	10

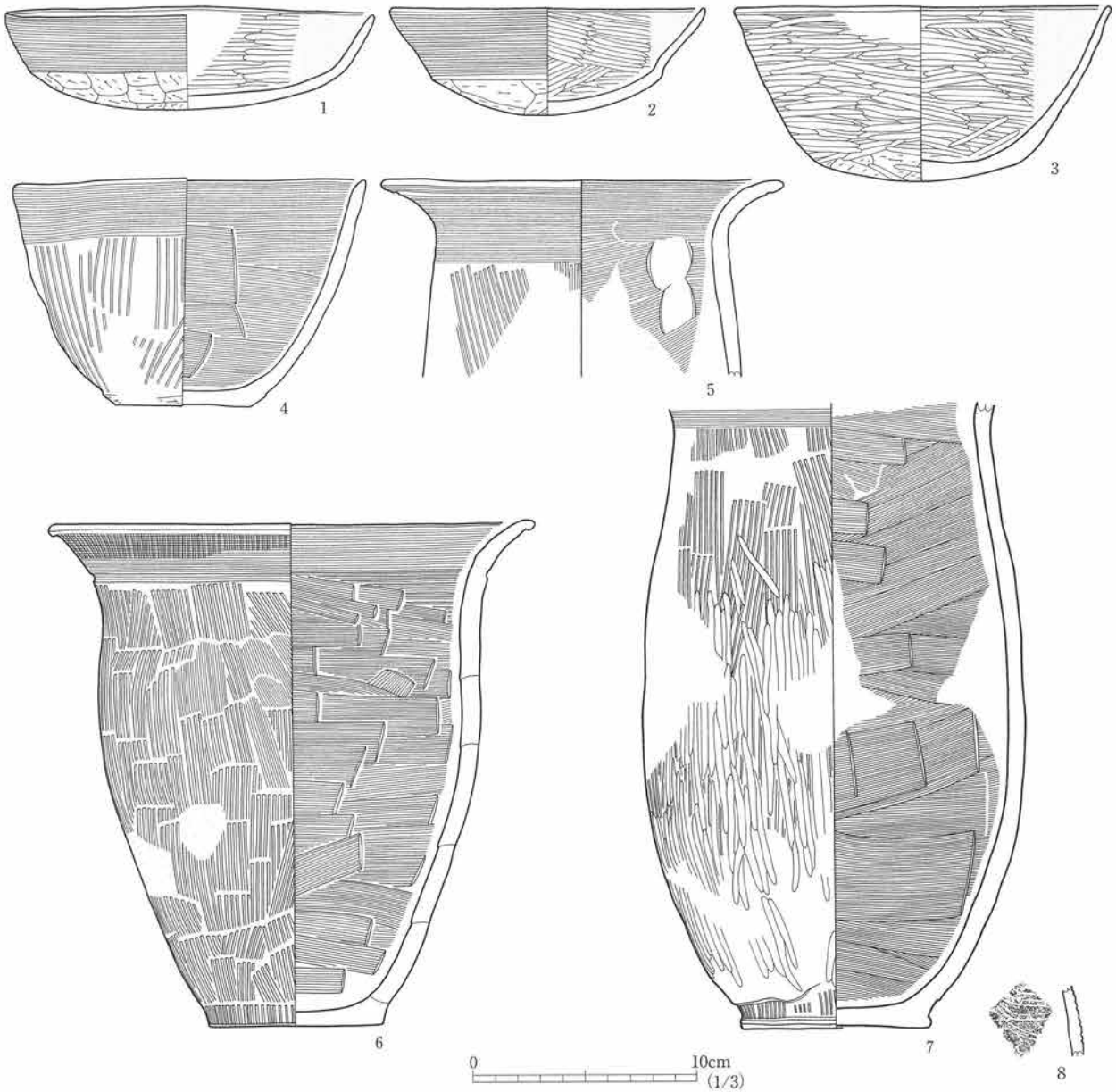
第35図　SI14竪穴住居跡

さは床面から５～25cmで、住居跡の壁際が深くなっている。

周溝：平成５年度の調査では遺構検出部分で検出されなかったが、平成６年度の調査部分で検出されている。幅15～25cm、床面からの深さは３～５cmである。

柱穴：床面で12個のピットが検出された。Ｐ１・２・３・４・５・８・９に柱痕跡が認められた。規模や配置からＰ１・２・３・４が柱穴の可能性がある。また、Ｐ５についてもカマドの反対側の位置にあり、柱穴の可能性がある。Ｐ７は床面下で検出されたものである。

カマド：北壁中央に付設されている。燃焼部・煙道部が検出された。煙出しピットはSD12溝跡による削平のため

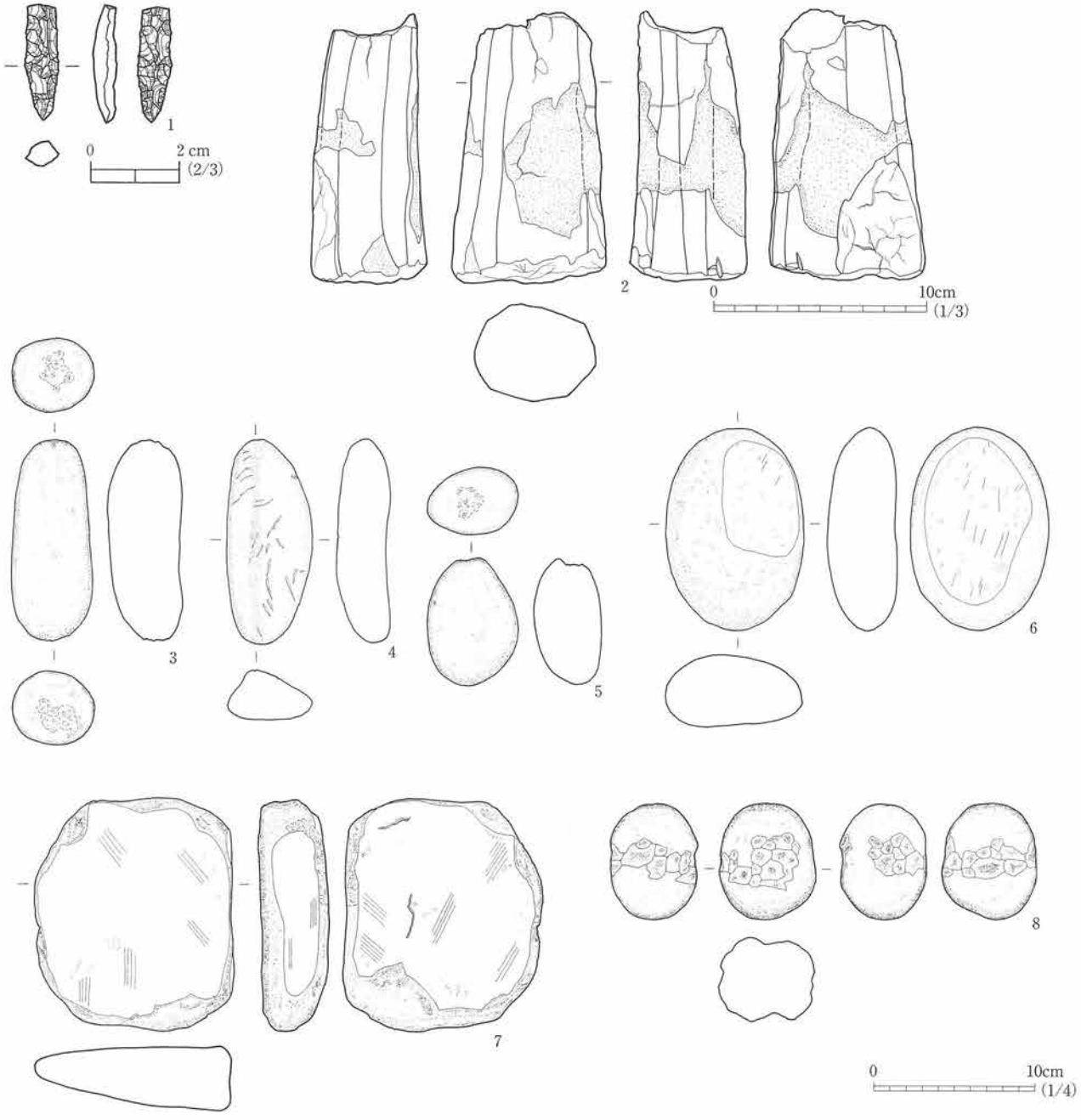


No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI14	土師器・坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理		337-7	C-36
2	SI14	土師器・坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理		337-5	C-31
3	SI14	土師器・鉢	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理		337-17	C-30
4	SI14	土師器・鉢	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ		337-16	C-27
5	SI14	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・オサエメ			C-32
6	SI14	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ		338-6	C-28
7	SI14	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ナデ・ヘラナデ		338-7	C-29
8	SI14	弥生土器・不明	二本一描沈線	マメツ		335-13	B-23

第36図　SI14竪穴住居跡出土遺物（1）

検出されなかった。燃焼部は幅40cm、奥行き45cmで、奥壁は住居跡の壁より15cm程内側に入り込んでいる。燃焼部の手前側の床面から焼け面が観察され、側壁および奥壁が火熱を受けて赤変している。左側の袖の基部に礫が入れられている。煙道部が検出されたのは100cmの長さで、幅は25cm、深さは10cm、先端に向かって底面のレベルは緩やかに上がっている。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器片、石器・石製品が出土した。



No.	遺構・器種	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
1	SI14	ドリル	(2.7)	(0.8)	0.6	1.2	珪質頁岩		417-8	Ki-2
2	SI14	支脚	12.7	4.9		340	デイサイト質凝灰岩	焼けて脆い	425-8	Kd-57
3	SI14　3層	礫石器	12.6	5.1	4.5	460	安山岩	敲石	419-10	Kc-12
4	SI14　床面	礫石器	12.7	5.3	3.1	158	デイサイト質凝灰岩	線刻礫	419-12	Kc-15
5	SI14　2層　P4	礫石器	7.9	5.7	4.2	240	安山岩	敲石	419-9	Kc-11
6	SI14	礫石器	12.6	8.6	4.4	750	安山岩	磨石	419-13	Kc-18
7	SI14　掘り方	礫石器	14.5	12.2	4.2	1195	安山岩	凹石・磨石	421-4	Kc-40
8	SI14　P2	礫石器	7.2	6	5.6	220	デイサイト	凹石	419-11	Kc-13

第37図　SI14竪穴住居跡出土遺物（2）

特にカマド脇の床面から土師器がまとまって出土している。石製品には断面を八角形に整えた、支脚と考えられるものがあり、火熱を受けて脆弱化している。そのうち土師器坏２点、鉢２点、甕３点、石製品１点、石器８点を図示した。

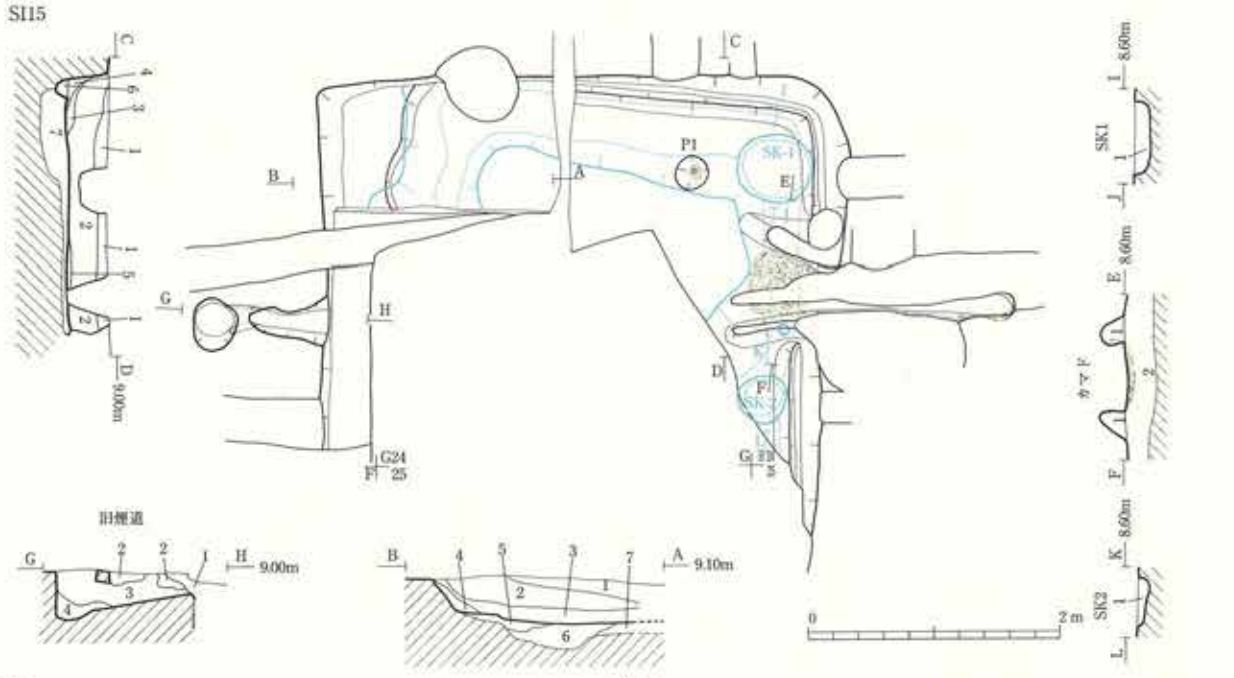
SI15竪穴住居跡

遺構の確認：F～H－24・25グリッドで確認した。小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。遺構は後世の攪乱によって、遺構中央部から南半の大部分が削平されている。また、１年次・３年次の調査区にまたがって検出され、調査区間に断絶が認められる。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西4.2m×南北3.7m以上の方形を基調としたものであるが、北東コーナーが隅丸状になっている。北壁を基準とした方向はE－5°－Sである。

堆積土：５層認められた。１年次・３年次で若干の違いがあるが、攪乱部分が水溜状になっていたことと、１年次の調査後の道路工事の影響があるものと思われる。

壁：壁高は残存状況の良い北壁で37cmである。北壁は床面から急角度で立ち上がるが、東壁、西壁は緩やかな角度で立ち上がる。



C－D

No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物粒、焼土粒を若干含む、しまり、粘性あり
2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物粒、焼土粒、多く含む、しまり、粘性あり
3	黒褐色（5YR2/1）	シルト	焼土粒、灰の層
4	にぶい黄褐色（25YR6/4）	シルト	壁の崩落土
5	極暗赤褐色（2.5YR2/2）	シルト	炭化物、焼土粒、灰の層、カマド前面の堆積物
6	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）、黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを含む、しまり、粘性あり
7	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）、黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを含む

A－B

No.	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む、粘性ややあり
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に多く含む、粘性ややあり
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む、粘性ややあり
4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	粘性ややあり
5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	炭化物、焼土粒を少量含む、粘性ややあり
6	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を多量に含む
7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を少量含む

遺構	No.	土　色	土　性	備　考
旧畑道	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土粒をわずかに含む
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を多く含む、粘性ややあり
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を多量に含む、粘性ややあり
	4	黒色（10YR1.7/1）	粘土質シルト	炭化物層。粘性ややあり
SK1	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒を含む、にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトのブロック含む
SK2	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒を含む、にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトのブロック含む
カマド	1	黄褐色（2.5YR5/4）	砂質シルト	カマド袖
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを含む

ピット計測表（cm）

No.	1
深さ	46

第38図　SI15竪穴住居跡

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦であるが、北西部に段があり西壁際が高くなっている。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは床面から５～25cmで、住居跡の壁際が深くなっている。

周溝：１年次の調査では遺構検出部分で検出されなかったが、２年次の調査部分で検出されている。幅10～25cm、床面からの深さは10cm前後である。周溝上端部分が床面より高く土手状になっており、北側では西に向かって幅が狭くなっている。

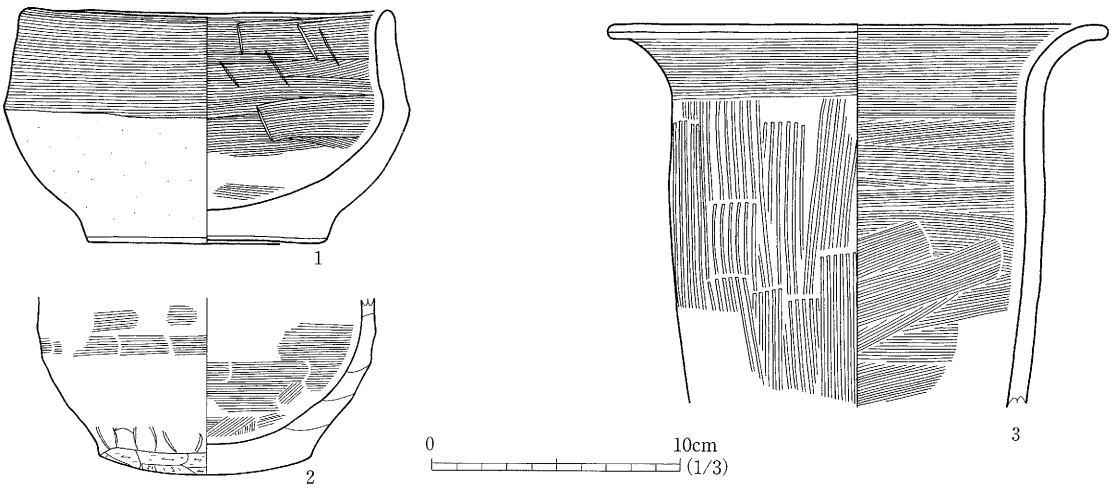
柱穴：床面でピットが１個検出された。柱痕跡が認められている。規模や配置、柱痕跡が認められたことからＰ１は柱穴の可能性がある。その他の柱穴については不明である。

カマド：東壁及び西壁に付設されている。西壁のものは煙道部のみが確認されており、東壁のものより古い段階のカマドの一部であると考えられる。東壁に付設されているカマドでは、燃焼部、煙道部が検出された。煙道部の先端はピット状になっていない。小溝状遺構による削平のため煙道部の大部分と燃焼部の一部が削平されている。燃焼部は幅70cm、奥行き70cmである。燃焼部の床面から焼け面が観察され、側壁および奥壁が火熱を受けて赤変している。奥壁と煙道部に段差等の明瞭な境はない。住居跡の壁から先端までの長さは1.45mで、先端部分の壁はオーバーハングしている。幅は削平のため不明である。底面のレベルは先端に向かって緩やかに上がっている。

西壁の古いカマドは煙道部のみが残存している。攪乱のためこの部分の堆積土を除去して床面を検出できなかったため、燃焼部は確認されていない。煙道部の長さは0.8mで、幅は10～40cm、煙出しピットとの境で深さ30cmであるが、煙出しピットとの境は10cmの長さで天井が残存し、トンネル状になっている。煙出しピットは35cm×45cmの楕円形で深さは40cmである。堆積土中には多量の炭化物、焼土粒が含まれている。

その他の施設：掘り方底面で２基の土坑が検出された。何れも堆積土中に焼土を含んでいる。土坑の性格は不明である。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、ピット、掘り方埋土、土坑から土師器が出土した。そのうち土師器鉢１点、甕２点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI15	土師器・鉢	ヨコナデ	ヘラナデ		337-13	C-9
2	SI15	土師器・甕	ナデ・ケズリ・オサエメ	ナデ	底ケズリ	337-12	C-8
3	SI15　１層	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ			C-7

第39図　SI15竪穴住居跡出土遺物

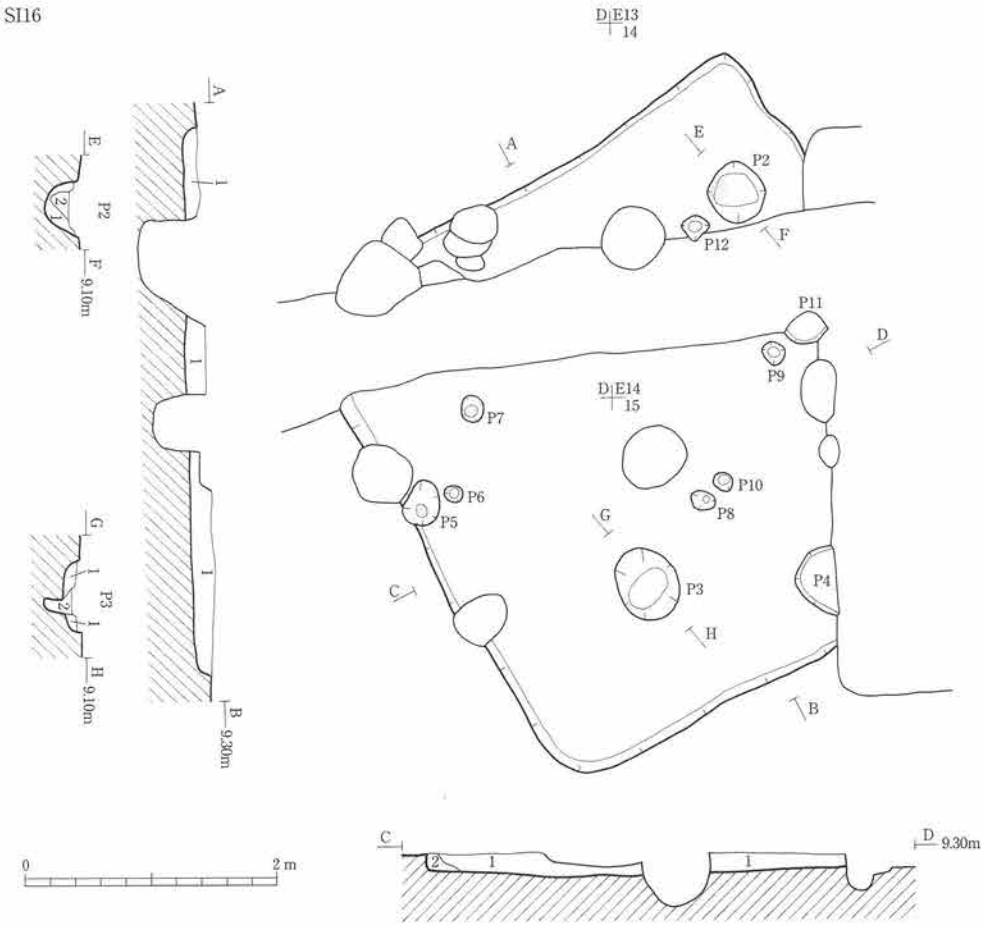
SI16竪穴住居跡

遺構の確認：Ｄ～Ｆ－14・15グリッドで確認した。SI12竪穴住居跡、SD７・８溝跡、小溝状遺構群、ピットと重

複しており、本遺構は全ての遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西4.25m×南北4.45mの方形を基調としたものであると考えられる。南コーナーが隅丸状になっている。北壁を基準とした方向はE－28°－Nである。

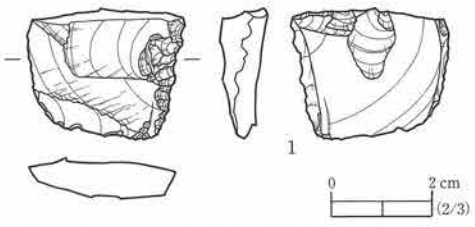
堆積土：2層認められた。黄褐色系のシルト層である。



No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含む
2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙色土を多く含む

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P2	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙色土を少量含み、炭化物、土器片を含む
P3	1	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土を多く含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を少量含み、炭化物を含む
P4	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙色土を含む　深さ5cm
P5掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	深さ12cm
柱痕		灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	深さ12cm
P6		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物を含む

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P7掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	
柱痕		灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	
P8		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物を含む
P9		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物を含む　深さ14cm
P10掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	
柱痕		灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	炭化物を含む
P11		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含む、地土を少量含む、粘性ややあり　深さ13cm
P12掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	
柱痕		灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	炭化物を含む



No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
1	SI16	不定形	2.6	3.1	0.9	7.1	珪質頁岩		417-17	Ka-111

第39図　SI16竪穴住居跡・出土遺物

壁：壁高は残存状況の良い北壁で15cmである。床面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦であるが、住居跡中央部のレベルがやや低くなっている。

周溝：検出されなかった。

柱穴：床面で11個のピットが検出された。Ｐ２・５・７・10・12に柱痕跡が認められた。

規模や配置からＰ２・３が柱穴の可能性がある。また、Ｐ５についても柱穴の可能性がある。（Ｐ１は欠番である。）

カマド：住居跡検出部分では検出されなかった。東壁に付設されているものと考えられ、SI12竪穴住居跡によって削平されたものと考えられる。

出土遺物：堆積土中および床面、ピットから土師器片、須恵器片、石器が出土した。そのうち石器１点を図示した。

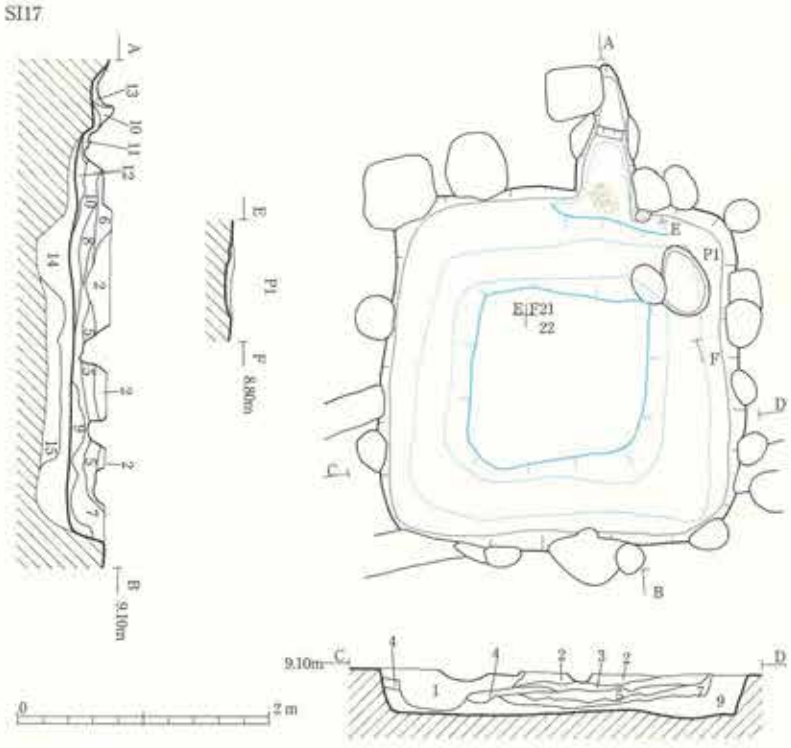
SI17竪穴住居跡

遺構の確認：Ｅ・Ｆ－21・22グリッドで確認した。小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。

平面形・規模：平面形は東西2.9m×南北2.95mの隅丸方形である。西壁を基準とした方向はＮ－10°－Ｅである。

堆積土：９層認められた。黒色～黄褐色の粘土層である。

壁：壁高は残存状況の良い北東コーナー付近の壁で31cmである。床面から急角度で立ち上がる。



層位	No.	土色	土性	備考
1	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土	
2	2	暗黄褐色（10YR6/6）	粘土	黒褐（10YR3/2）粘土をブロック状に含む、しまりややあり、粘性ややあり
3	3	黒褐色（10YR3/1）	粘土	しまりあり、粘性あり
4	4	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	にぶい黄褐（10YR5/4）粘土のブロックを含む、しまり、粘性あり
5	5	黒色（10YR1.7/1）	粘土	黒褐（10YR3/2）粘土を含む、炭化物、焼土を含む、しまり、粘性あり
	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土	にぶい黄橙（10YR3/2）粘土を縞状り状に含む、しまりあり、粘性あり
6	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土	炭化物含む、しまりややあり、粘性あり
7	8	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	にぶい黄橙（10YR6/3）シルト質粘土を縞状り状に含み、炭化物、焼土、マンガン粒を含む
8	9	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	にぶい黄橙（10YR6/3）のブロックを含む、しまりややあり、粘性ややあり
9	10	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	にぶい黄橙（10YR6/4）のブロックを縞状り状に含む、焼土を含む、しまりややあり

層位	No.	土色	土性	備考
カマド	11	黒褐色（10YR3/2）	粘土	炭化物、焼土を含む、しまりあり、粘性あり
	12	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	炭化物、焼土を多量に含む、粘性ややあり、カマドの崩落土
煙道	13	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土	炭化物を含む
掘り方	14	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土	黒褐（10YR2/2）粘土をブロック状に多量に含む、粘性ややあり
	15	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土	黒褐（10YR2/2）粘土をブロック状に少量に含む、しまりあり、粘性あり

ピットNo.	土性	備考
P1	粘土	にぶい黄橙（10YR6/3）粘土粒を少量含む、粘性ややあり

第41図　SI17竪穴住居跡

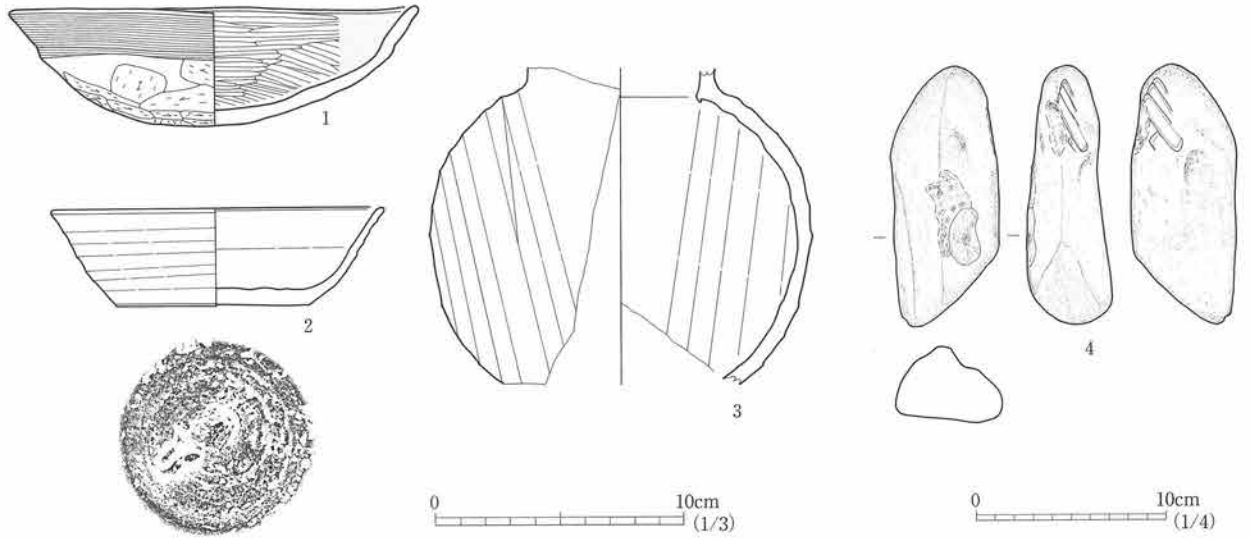
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。凸凹がみられる。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは5～25cmで壁際のレベルがやや低くなっている。

周溝：検出されなかった。

柱穴：床面で1個のピットが検出されたが、柱穴と考えられるものはなかった。

カマド：北壁中央のやや東寄りに付設されている。燃焼部、煙道部が検出された。煙道部の先端はピット状になっていない。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmである。住居跡北壁から外側へ張り出している。側壁の手前部分右側の壁面に礫が立てられており、袖が住居跡内に設けられていたものと思われる。燃焼部の床面から焼け面が観察され、側壁および奥壁が火熱を受けて赤変している。奥壁と煙道部に段差があり、煙道部の長さは50cm、幅はピット、小溝状遺構による削平のため不明であるが25cm以上である。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、掘り方埋土から土師器、須恵器、石器が出土した。そのうち土師器坏1点、須恵器坏1点、長頸瓶1点、礫石器1点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI17	土師器・坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理		337-6	C-33

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
2	SI17	須恵器・坏	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ		342-9	E-6
3	SI17	須恵器・壺	ロクロナデ		ロクロナデ		342-12	E-7

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
4	SI17 1層	礫石器	13.8	5.6	4.4	280	デイサイト質凝灰岩	凹石・敲石	419-14	Kc-19

第42図　SI17竪穴住居跡出土遺物

SI18竪穴住居跡

遺構の確認：I～K－16～18グリッドで確認した。SD12溝跡、SX6性格不明遺構、小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構は小溝状遺構群より新しく、他の遺構より古い。

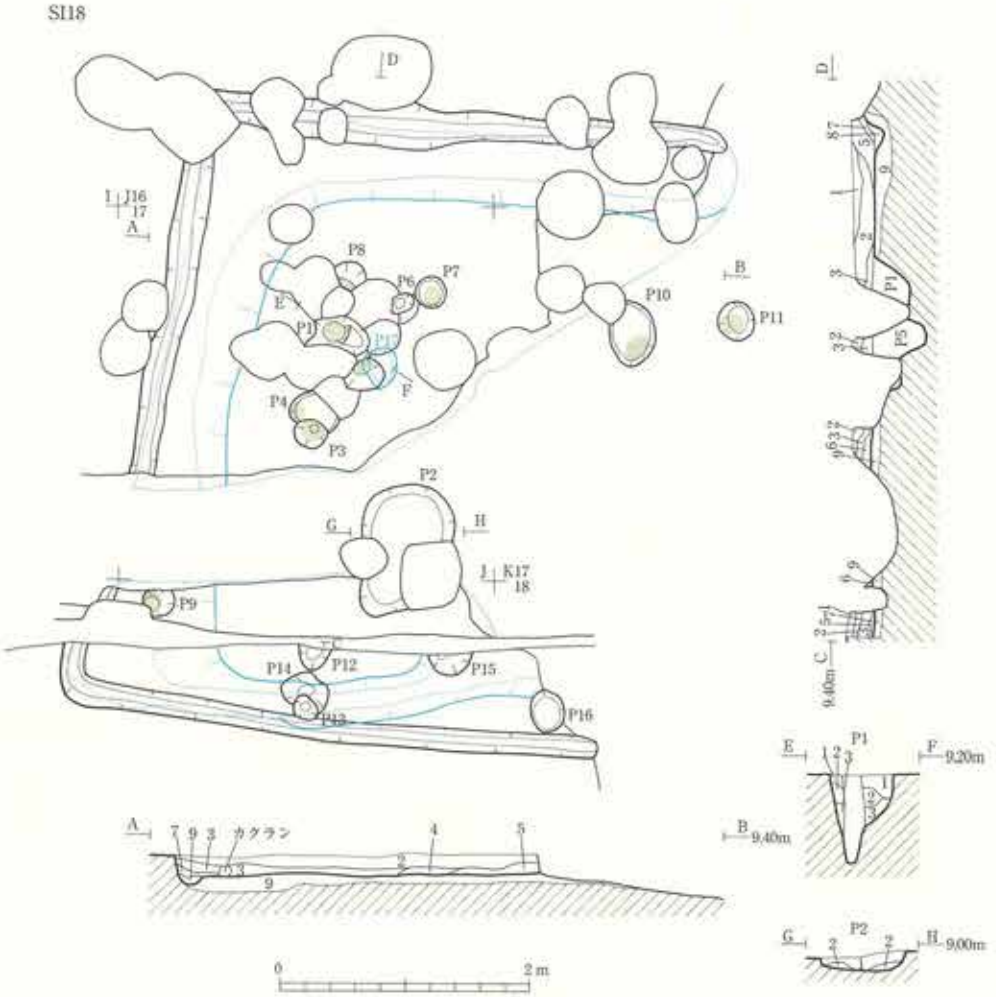
平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西4.7m以上×南北5m以上の隅丸方形を基調としたものであると考えられる。北壁を基準とした方向はE－9°－Sである。

堆積土：7層認められた。黒褐色～褐色の粘土質シルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い南西部で11cmである。周溝底面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分もみられる。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは4～24cmで壁際が溝状に低くなっている。

周溝：住居跡検出部分では全周している。幅18～30cm、床面からの深さは4～10cmで、南西部分が深くなっている。



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒、マンガン粒、しまりややあり、粘性あり
	2	黒褐色（7.5YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒、多量、しまりややあり、粘性あり
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、少量、しまりややあり、粘性ややあり
		褐色（10YR4/4）		
	4	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	しまりややあり
	5	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒、少量、しまり、粘性ややあり
	6	黒褐色（7.5YR3/2）	粘土質シルト	炭化物多量、焼土ブロック、褐色（10YR4/6）粘土震降り、粘性あり
	7	暗褐色（10YR3/3）	シルト	粘性ややあり

層位	No.	土色	土性	備考
周溝	8	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物少量、粘性ややあり
	9	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	
		暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）		

ピット計測表（cm）

No.	12	14	15	16	17
深さ	10	14	34	19	22

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	黒褐（10YR3/2）粘土質シルトと小ブロック状に多く含む、炭化物、焼土粒を含む、しまり、粘性ややあり
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり
	3	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり
	4	黒褐色（10YR3/2）	シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土粒を含む、粘性ややあり
P2	1	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	炭化物多量、粘性あり
	2	暗褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物多量、粘性ややあり
P3掘り方		褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	暗褐（10YR3/3）粘土質シルトブロックを含む、深さ31cm
柱痕		にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	深さ31cm
		暗褐色（10YR3/3）		
P4掘り方		褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	暗褐（10YR3/3）粘土質シルトを含む、深さ12cm
柱痕		褐色（10YR4/4）	シルト	深さ12cm
		暗褐色（10YR3/3）		
P5掘り方		褐色（7.5YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む
		褐色（10YR4/4）		
柱痕		暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物を含む

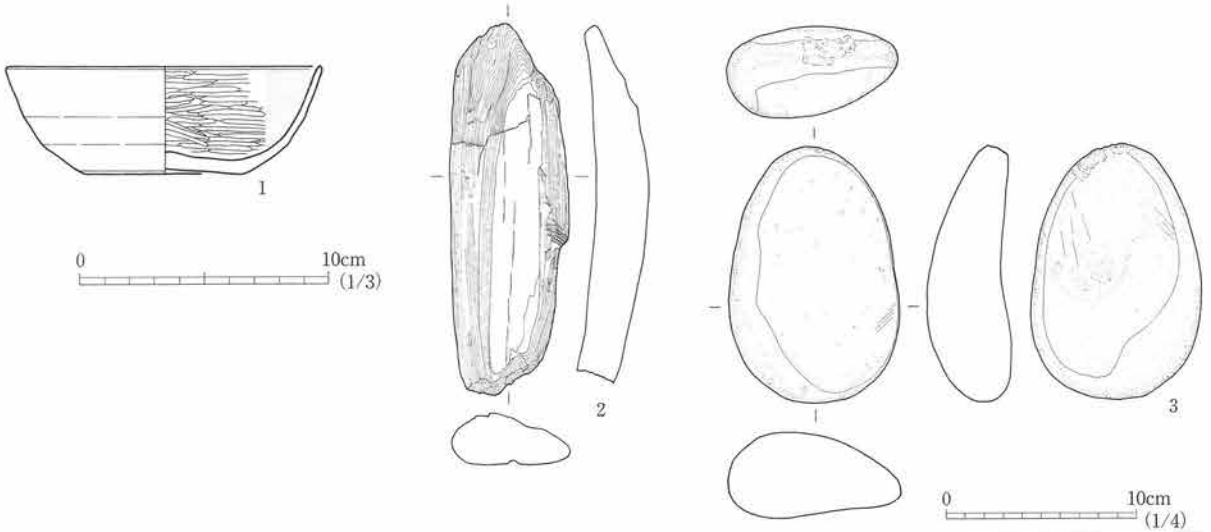
ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P6		にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	深さ19cm
P7掘り方		褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトブロック、炭化物を含む　深さ18cm
柱痕		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土粒を含む、深さ18cm
P8掘り方		褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒若干含む　深さ33cm
柱痕		褐灰色（10YR4/1）	シルト	炭化物、焼土粒を含む、深さ33cm
		褐色（10YR4/4）		
P9掘り方		オリーブ褐色（2.5Y4/3）	シルト	炭化粒、炭化物、暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルトブロックを含む　深さ15cm
柱痕		暗赤褐色（2.5YR3/2）	シルト	深さ15cm
P10掘り方		暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	深さ19cm
柱痕		暗褐色（10YR3/3）	シルト	深さ19cm
		褐色（10YR4/6）		
P11掘り方		暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	深さ19cm
柱痕		暗褐色（10YR3/3）	シルト	深さ19cm
P17		黒褐色（7.5YR3/1）	粘土質シルト	

第43図　SI18竪穴住居跡

柱穴：床面で16個のピットが検出された。Ｐ１・３・４・５・７・８・９・10・11に柱痕跡が認められた。配置、規模等からＰ１・10あるいは11が柱穴と考えられるが、その他の柱穴は不明である。Ｐ17は床面下から検出された。

カマド：住居跡検出部分では検出されなかった。東壁に付設されているものと考えられ、SX６性格不明遺構によって削平されたものと考えられる。

出土遺物：堆積土中および床面、周溝、ピット、掘り方埋土から土師器、須恵器、石器が出土した。そのうち土師器坏１点、石製品１点、礫石器１点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI18	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理			D-3

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
2	SI18　2層	礫石器	19.6	6.3	2.7	358	珪化木	砥石	420-1	Kc-20
3	SI18	礫石器	13.5	9.1	4.7	745	デイサイト	磨石・敲石	421-3	Kc-41

第44図　SI18竪穴住居跡出土遺物

SI19竪穴住居跡

遺構の確認：Ｋ・Ｌ－14～16グリッドで確認した。遺構は西側のみが確認されていた。東側に調査区を拡張したが、遺構はさらに東側の調査区外へ延びている。SD14溝跡、SK25土坑、小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構は小溝状遺構群より新しく、その他の遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西3.35m以上×南北4.45mの隅丸方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はＮ－５°－Ｅである。

堆積土：４層認められた。暗褐色～黒褐色のシルト～粘土質シルト層である。層No.１の下部に灰白色火山灰が含まれている。全体に炭化物、焼土が多く含まれている。

壁：壁高は残存状況の良い北西部で21cmである。床面から急角度で立ち上がるが、南東部では緩やかに立ち上がる部分もみられる。

床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦である。

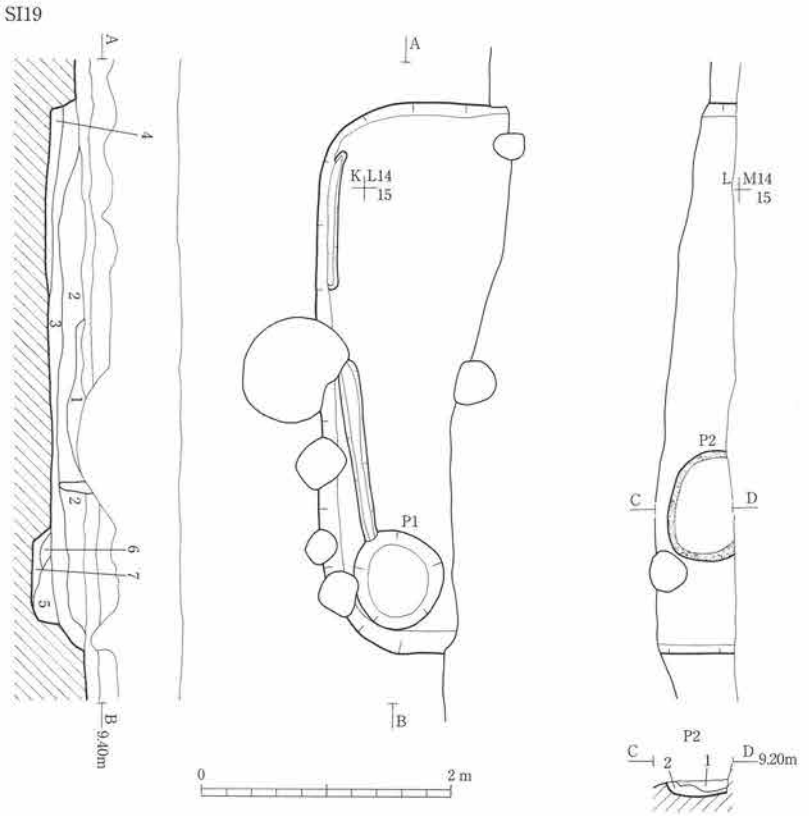
周溝：住居跡検出部分では西壁際のみで検出された。西辺中央部で途切れるが北西コーナーからＰ１まで約300cmの長さで検出された。途切れた部分から南側は西壁から離れ、Ｐ１との接続部分では西壁の下端から18cm離れている。幅７～17cm、床面からの深さは４cm前後である。

柱穴：床面で２個のピットが検出された。いずれも柱穴とは考えられず、柱穴は不明である。

カマド：住居跡検出部分では検出されなかった。東壁あるいは北壁に付設されているものと考えられ、調査区外の東壁に付設されているものかSD14溝跡によって削平されたものと考えられる。

その他の施設：床面で２個のピットが検出された。何れも堆積土中に炭化物、焼土を多量に含み、特にＰ２は壁面が火熱をうけて赤変している。

出土遺物：堆積土中およびピットから土師器、須恵器、石器が出土した。



層位	No.	土　色	土　性	備　考
	1	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土粒、層下部に灰白色火山灰、しまりあり
	2	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土粒、粘性ややあり
	3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒、粘性あり
	4	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒、しまりややあり、粘性あり
P1	5	黒褐色（10YR3/1）	シルト質粘土	炭化物、焼土多量、粘性あり
	6	褐色（10YR4/4） 褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物粒、焼土若干、粘性あり
	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	褐灰（10YR4/1）粘土、小ブロック、炭化物含む、粘性ややあり

ピットNo.	No.	土　色	土　性	備　考
P2	1	暗赤褐色（5YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土、焼土塊多量
	2	褐色（7.5YR4/3）	粘土質シルト	炭化物若干あり

第45図　SI19竪穴住居跡

SI20竪穴住居跡

遺構の確認：Ｈ・Ｉ－14・15グリッドで確認した。遺構の残存状況が悪く、平成５年度の調査区では検出されなかったため、西側の状況は不明である。SI22竪穴住居跡、SD７溝跡、小溝状遺構、ピットと重複しており、本遺構はＳＩ22竪穴住居跡、小溝状遺構より新しく、他の遺構より古い。位置的にＳＩ14竪穴住居跡と重複関係にあると考えられるが、確認されなかった。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西4.2m以上×南北3.35mの隅丸方形を基調としたものであると考えられる。北壁を基準とした方向はＥ－５°－Ｓである。

堆積土：３層認められた。２・３層はカマド内の堆積土である。

壁：壁高は残存状況の良い北壁で５cmと残存状況は良くない。底面から急角度で立ち上がる。

床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦である。

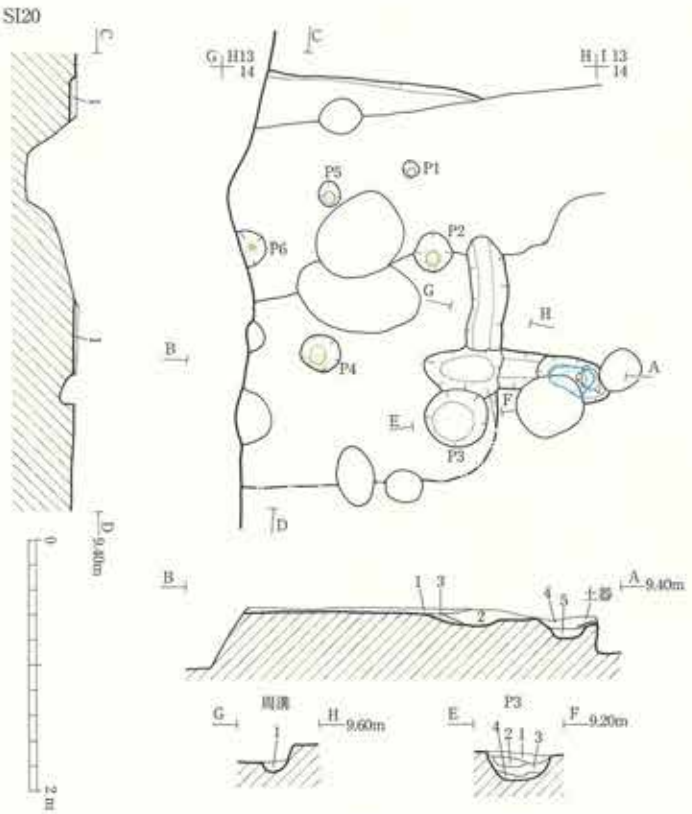
周溝：住居跡検出部分では東壁際、カマドの北側のみで検出された。幅30cm、床面からの深さ８cmである。

柱穴：床面で３個のピットが検出された。また、SD７溝跡底面で３個のピットが検出され、これらも本住居に伴うピットと考えられるため、計６個のピットが検出された。Ｐ２・４・６に柱痕跡が確認され、Ｐ１・５は柱痕跡のみが確認されたものと考えられる。位置的にＰ１は柱穴と考えられるが、他の柱穴は不明である。

カマド：東壁の南寄りに付設されている。燃焼部、煙道部、煙出しピットが検出された。燃焼部は両袖が検出されていないが、幅40cm、奥行き65cm、深さ10cmの浅いピット状になっており、住居跡Ｐ３によって一部壊されている。燃焼部には焼け面は観察されなかった。奥壁と煙道部に段差があり、煙道部の長さは30cm、幅は30cmで先端に向かって細くなる。煙出しピットは後世のピットに削平されているが30cm×60cm以上の楕円形で深さは20cmである。

その他の施設：床面で検出されたピットのうちＰ３は多量の炭化物、焼土粒が含まれており、カマドに関係する施設の可能性がある。

出土遺物：堆積土中およびカマド、ピットから土師器、須恵器、石器が出土した。そのうち土師器甕２点、須恵器蓋１点、甕１点を図示した。

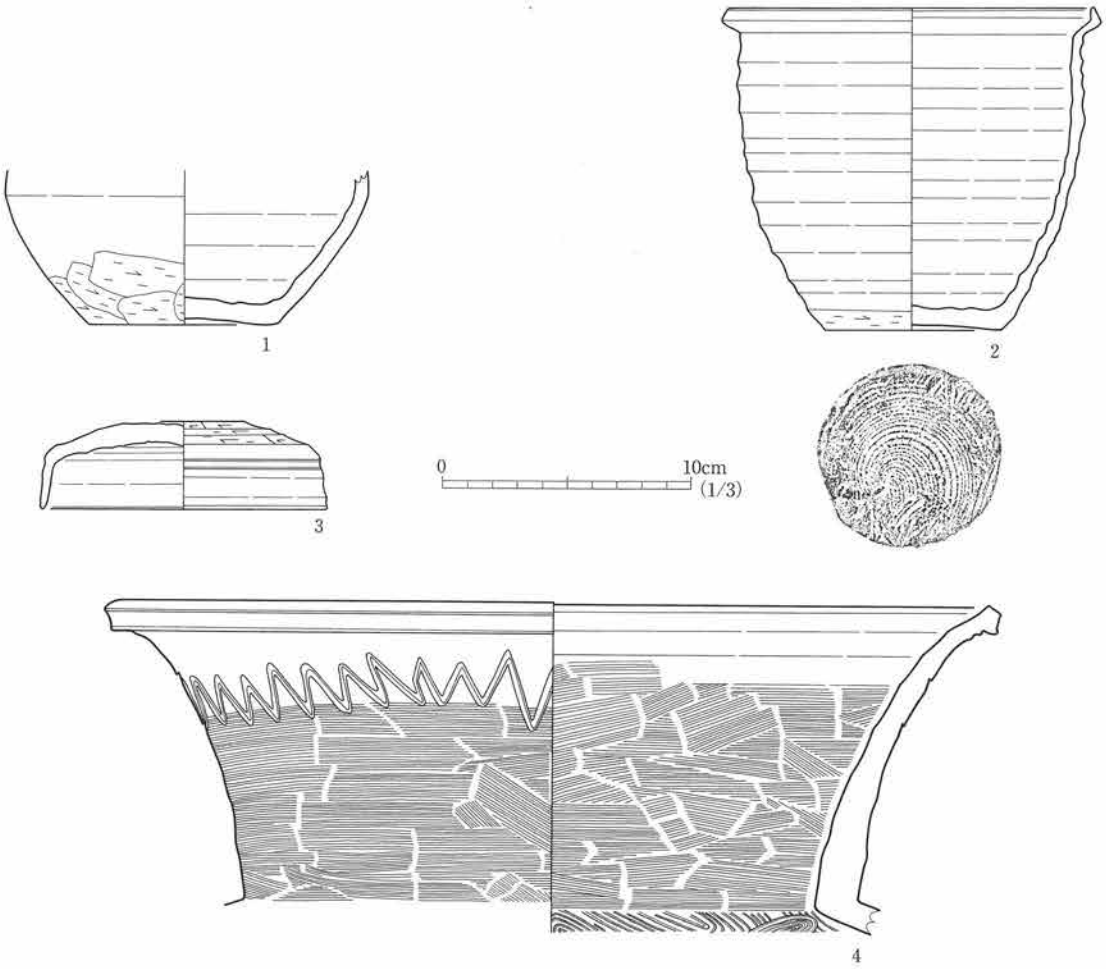


No.	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR6/4）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む。焼土粒含む。粘性ややあり
2	暗褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む。焼土粒含む
3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	
4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土、大型須恵器片、土師器等、土器片を含む
5	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物、焼土を若干含む

No.	土　色	土　性	備　考
周溝	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を少量含む

ピットNo.	No.	土　色	土　性	備　考
P1		灰褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）粘土質シルトをブロック状に含む。粘性ややあり。深さ34cm
P2掘り方		褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	ブロック状に混入。粘性ややあり。深さ12cm
		灰黄褐色（10YR5/2）		
		にぶい黄褐色（10YR7/4）		
P3	1	暗褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土粒土器片を含む
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土粒含む、土器片あり
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土粒、部分的に含む
	4	褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	粘性ややあり
P4		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）粘土質シルトブロックを少し含む。粘性ややあり。深さ58cm
P5		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）粘土質シルトを少し含む。粘性ややあり。深さ46cm
P6掘り方		灰褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR7/4）粘土質シルトをブロック状に含む。粘性ややあり。深さ45cm
柱痕		暗灰色（10YR5/1）	粘土質シルト	炭化物を含む。深さ43cm

第46図　SI20竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外　面	底　面	内　面	備　考	写真図版	登録番号
1	SI20	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ	ナデ	ロクロナデ		341-13	D-4
2	SI20	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ	回転糸切り	ロクロナデ		341-14	D-5
3	SI20	須恵器・蓋	ロクロナデ・ヘラケズリ		ロクロナデ		343-2	E-11
4	SI20	須恵器・甕	ロクロナデ・ナデ・波状文		ロクロナデ・ナデ・当て具痕		343-1	E-10

第46図　SI20竪穴住居跡出土遺物

SI21竪穴住居跡

遺構の確認：J・K－13・14グリッドで確認した。SI23竪穴住居跡、SD７溝跡、SK30・35・36・37土坑、小溝状遺構、ピットと重複しており、本遺構はSI23竪穴住居跡、小溝状遺構より新しく、その他の遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西3.3m×南北4.6m以上の隅丸方形を基調としたものであると考えられる。北壁を基準とした方向はＥ－２°－Ｓである。

堆積土：４層認められた。２・３層はカマド内の堆積土である。

壁：壁高は残存状況の良い西壁で８cmと残存状況は良くない。底面から急角度で立ち上がる。

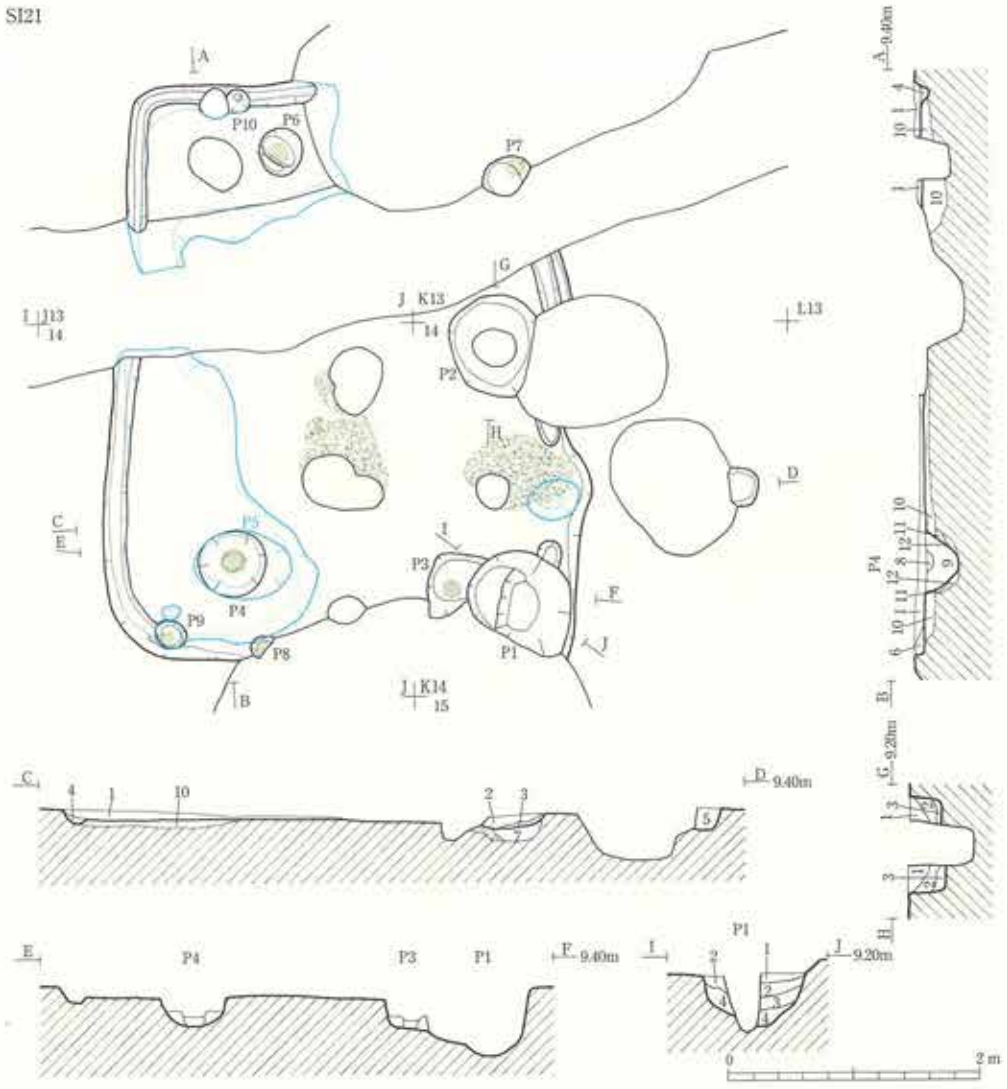
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡中央部を除く西半部に認められ、深さは４～20cmで北側が低くなっている。

周溝：住居跡検出部分では南壁際、カマドの部分を除いて全周している。幅15～20cm、床面からの深さは３～10cmである。東側の周溝は住居跡東壁から５～10cm離れている。

柱穴：床面で８個のピットが検出された。また、SK36土坑底面で１個のピットが検出され、これも本住居に伴う

ピットと考えられるため、計9個のピットが検出されたことになる。P3・4・6・7・8・9・10に柱痕跡が確認された。配置、規模からP3・4・6は柱穴と考えられるが、他の柱穴については不明である。P5は床面下で検出され、P4と重複している。

カマド：東壁の南寄りに付設されている。燃焼部、煙出しピットが検出された。燃焼部は両袖が検出されていないため規模は不明だが、幅55cm、奥行き10cmで住居跡東壁から外側へ張り出している。燃焼部と考えられる場所に



層位	No.	土色	土性	備考
カマド	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物、焼土粒を含む、灰白色火山灰を含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	多量の灰、炭化物、焼土粒含む、粘性ややあり
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土粒を少し含む
周溝	4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトをブロック状に少し含む、地山か？
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物を多量に含む、土器片を含む
	6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト小ブロック含む（崩落土？）
カマド掘り方	7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土を含む
P4掘り方	8	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土多い、粘性ややあり
柱痕	9	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土多い、粘性ややあり
掘り方	10	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト、炭化物、焼土、土器片を含む
P5	11	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土少し含む
	12	暗褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土多い、粘性ややあり

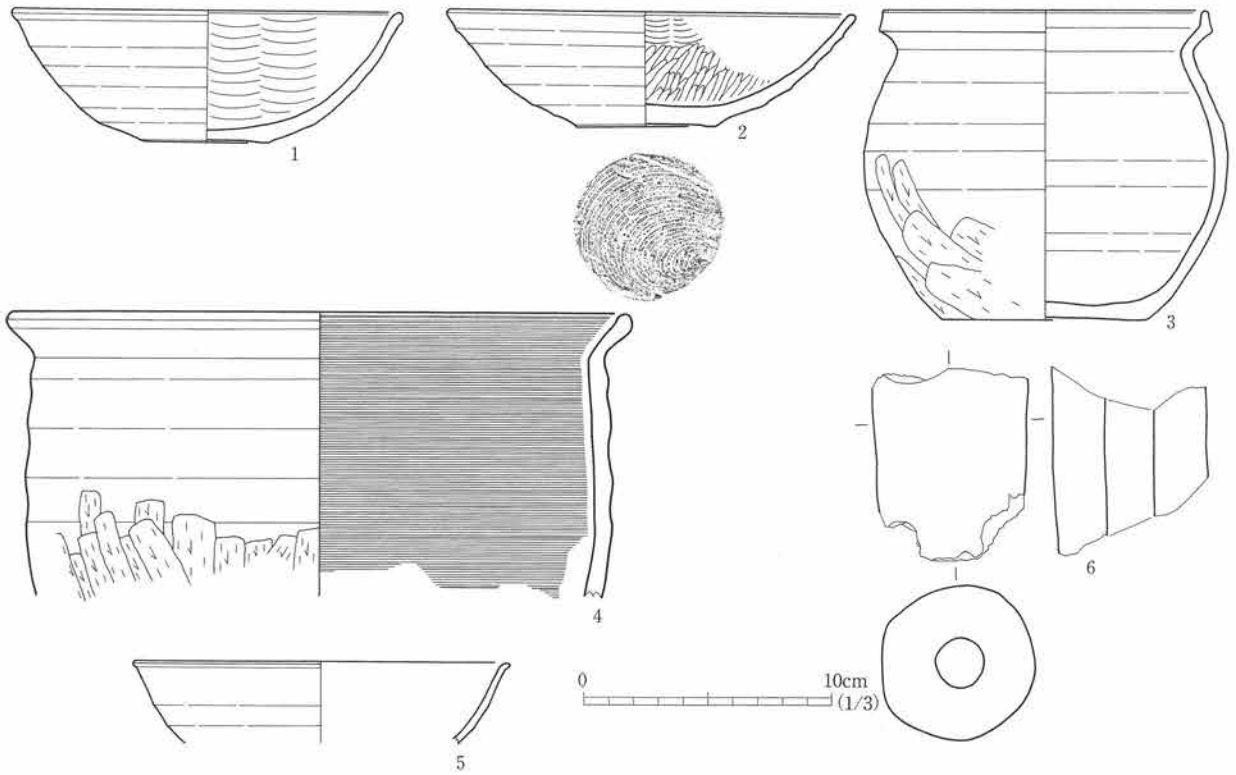
ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土あり、粘性ややあり
	2	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土多い、しまりややあり
	3	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土あり、粘性ややあり
	4	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘土質シルト	炭化物、粘性ややあり
P2	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	焼土を多く含む、粘性ややあり
	2	暗褐色（10YR3/3）		焼土を少し含む、粘性ややあり
	3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	粘性ややあり
P3掘り方		暗褐色（10YR3/4）	シルト	灰黄褐（10YR4/2）シルトを含む、炭化物、焼土多く含む
柱痕		暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土、マンガン含む
P4掘り方		にぶい黄褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	黒（10YR5/4）粘土質シルトをブロック状に含む、粘性ややあり、深さ22cm
柱痕		暗褐色（7.5Y3/4）	粘土質シルト	黒（10YR5/4）粘土質シルトをブロック状に含む、粘性ややあり、深さ22cm
P7掘り方		にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土含む、しまりややあり、深さ15cm
柱痕		暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物、焼土含む、深さ15cm
P8掘り方		にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	深さ25cm
柱痕		暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	しまりあり、深さ25cm
P9掘り方		にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	深さ17cm
柱痕		暗灰黄色（2.5Y4/2）		しまりあり、深さ17cm
P10掘り方		オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘土質シルト	しまり、粘性ややあり、深さ24cm
柱痕		黒色（10YR2/2）	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/4）粘土質シルトをブロック状に含む、粘性ややあり、深さ24cm

第48図　SI21竪穴住居跡

は幅65cm、奥行き90cmの焼け面が観察されている。煙道部はSK35土坑によって削平され検出されなかったが、煙出しピットの先端部が検出されている。検出された長さは25cm、幅は30cm、深さ11cmで先端部が深くなっている。焼け面の奥側に掘り方と思われるピットが検出された。

その他の施設：床面中央部２か所の焼け面が検出された。硬く焼け締まっている状態ではないが、出土遺物のなかに羽口が見られることから鍛冶関係の痕跡の可能性もある。カマドを挟んで検出されたＰ１・２は位置や規模等から貯蔵穴と考えられる。

出土遺物：遺構検出面、堆積土中、床面、ピット、カマド、掘り方埋土から緑釉陶器、土師器、須恵器、土製品が出土した。そのうち緑釉陶器碗１点、土師器坏２点、甕１点、羽口１点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI21	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-3	D-9
2	SI21　検出面	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-2	D-7
3	SI21　床面	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ	ナデ	ロクロナデ		341-15	D-8
4	SI21　検出面	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		回転ヘラナデ			D-6

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径	法量 底径	法量 器高	写真図版	登録番号
5	SI21	陶器	碗	尾北窯か　緑釉	東濃	10C代か	14.8		(3.2)	369-5	I-424

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
6	SI21　検出面	羽口	ヘラケズリ　孔径　1.9cm	(7.7)	6.2		(244.0)	381-1	P-6

第48図　SI21竪穴住居跡出土遺物

SI22竪穴住居跡

遺構の確認：Ｈ～Ｊ－13～15グリッドで確認した。SI20竪穴住居跡、SD７溝跡、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。また、煙出しピットは後世の攪乱により上部が削平されている。

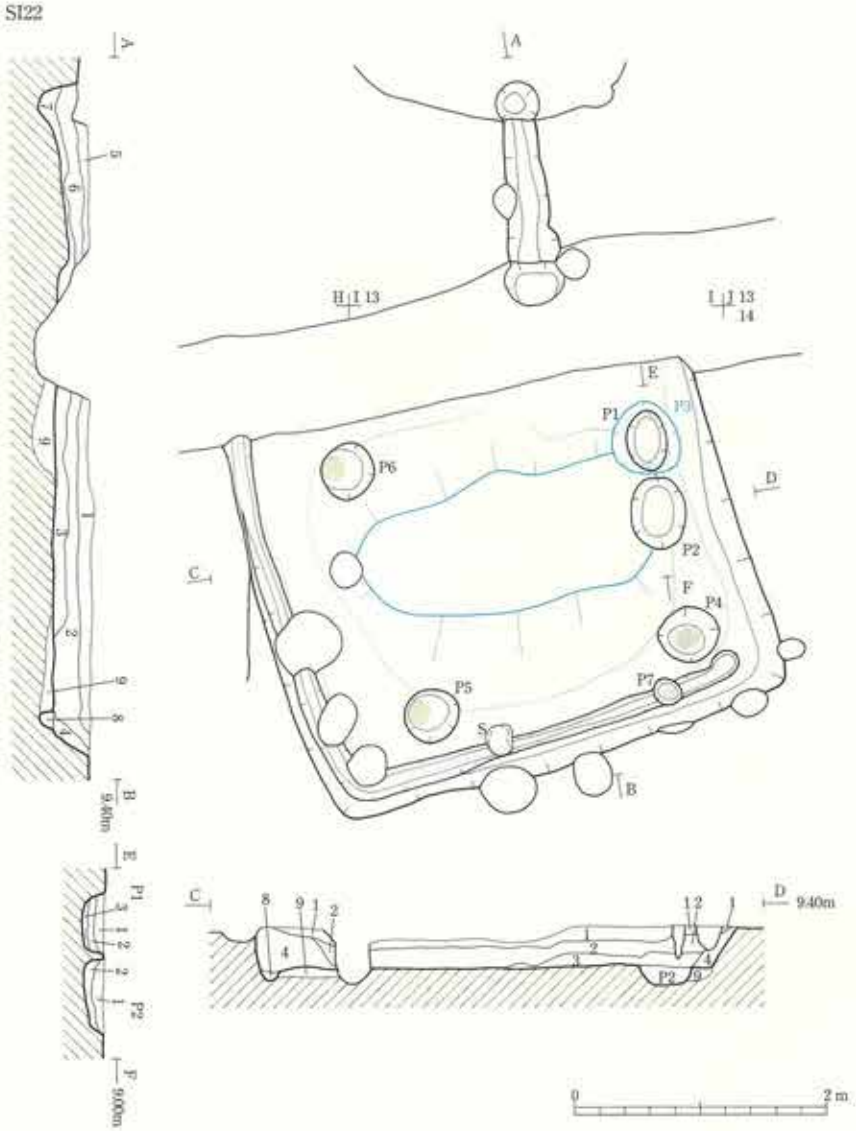
平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西3.9m×南北3.1m以上の隅丸方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はＮ－15°－Ｗである。

堆積土：4層認められた。暗褐色～にぶい黄褐色のシルト～粘土質シルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い東壁で32cmである。西壁は底面から急角度で立ち上がっているが、南壁、東壁は緩やかに立ち上がっている。

床面：住居跡中央部分は掘り方底面を直接床面としている。壁際周辺は掘り方埋土を貼床とし、その上面を床面としている。平坦である。掘り方は深さ5～15cmで北側が低くなっている。

周溝：住居跡検出部分では西壁際、南壁際で検出された。幅10～20cm、床面からの深さは3～8cmである。南側の周溝は住居跡南壁から5～10cm離れている。



No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）		灰黄褐色（10YR5/2）シルトを小ブロック状に含む。炭化物少量含む。（鉄滓あり）しまりややあり
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	灰黄褐色（10YR5/2）シルトを小ブロック状に含む。炭化物、焼土粒少量含む。しまりややあり
3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を含む。しまりややあり。粘性ややあり
4	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	褐色（10YR4/6）粘土質シルトをブロック状に多く含む。しまりややあり。粘性ややあり（壁溝埋土か？）
5	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土ブロックを多く含む
6	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土を小ブロック状に含む
7	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土ブロックを多量に含む。粘性ややあり
8	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む。粘性ややあり
9	オリーブ褐色（2.5Y3/3） 黒色（2.5Y3/1）	シルト	部分的に、炭化物、焼土含む。しまりあり。粘性ややあり

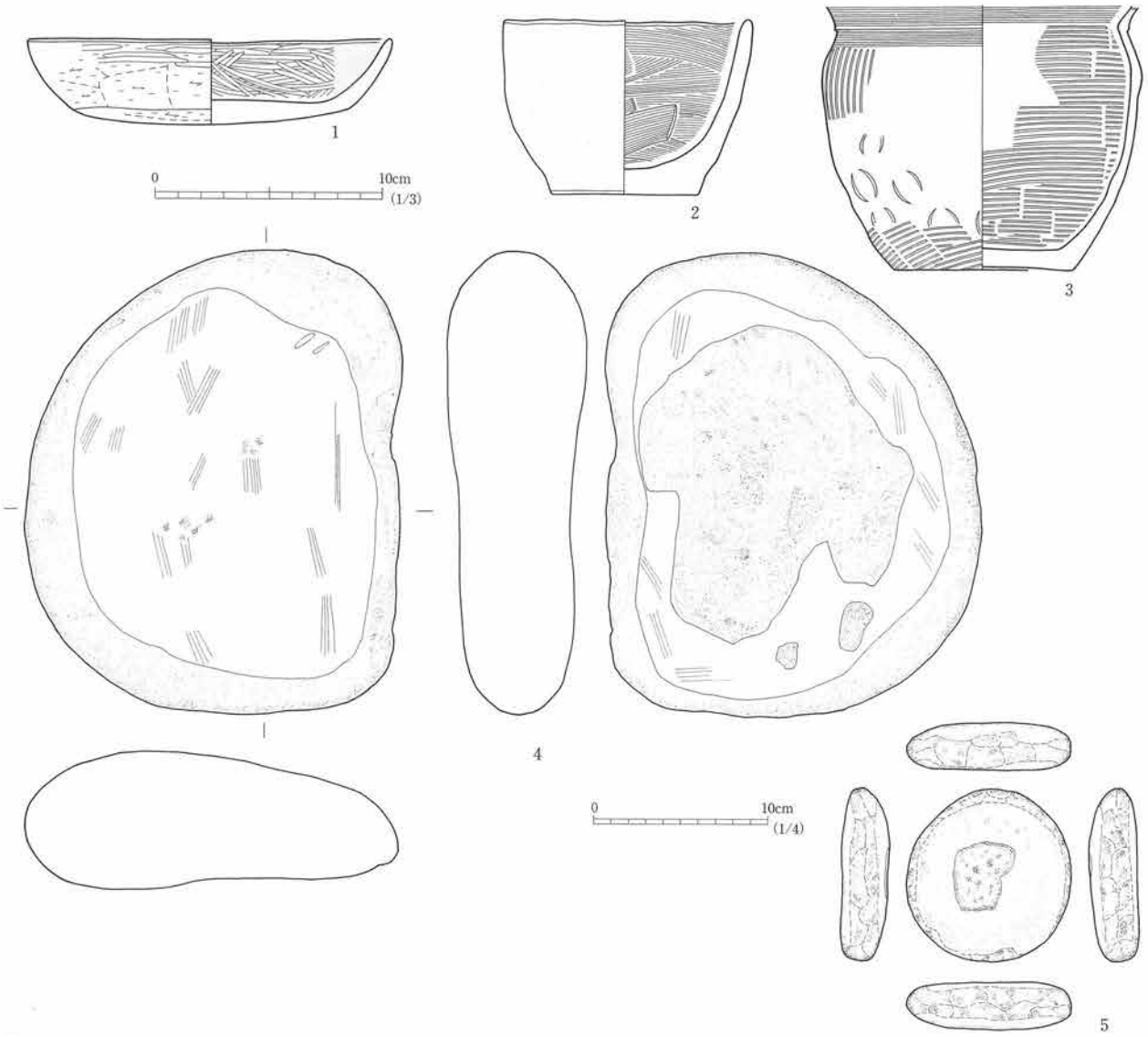
ピット No.	No.	土色	土性	備考
P1	1	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土、多量に含む。粘性あり
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	炭化物、焼土、多量に含む。粘性あり
	3	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト質粘土	炭化物少量含む。粘性あり
P2	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	炭化物、焼土塊含む。粘性あり
	2	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト質粘土	炭化物、焼土、No.1より大きな塊含む。粘性あり
P3	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	灰黄褐（10YR4/2）粘土質シルトを多く含む。炭化物、焼土、黒色粒子含む。粘性ややあり
P4掘り方		にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	灰黄褐（10YR4/2）粘土質シルトを多く含む。炭化物、焼土。あまり堅しまらない。粘性ややあり
柱痕		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	酸化鉄を含む。粘性ややあり
P5掘り方		にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	酸化鉄を含む。粘性ややあり
柱痕		にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	酸化鉄をやや多く含む。粘性ややあり
P6掘り方		にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	酸化鉄を含む。粘性ややあり。
柱痕		にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	酸化鉄をやや多く。粘性ややあり。
P7掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）粘土質シルトをブロック状に含む。粘性ややあり
柱痕		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、少量含む。粘性ややあり

第50図　SI22竪穴住居跡

柱穴：床面及び床面下から７個のピットが検出された。Ｐ１と床面下のＰ３は重複している。Ｐ４・５・６に柱痕跡が確認された。配置、規模からＰ１・４・５・６が柱穴と考えられる。

カマド：北壁の東寄りに付設されている。煙道部、煙出しピットが検出された。燃焼部はSD７溝跡によって削平されているため不明だが、幅50cm、奥行き35cmのピットがSD７溝跡の北壁面で検出された。燃焼部の掘り方と考えられる。煙道部はSD７溝跡から115cmの長さで幅は25～40cm、深さは17～33cmで先端に向かって細くなり、底面のレベルは低くなる。煙出しピットは上部が削平されているが、径35cm、深さ40cmである。

出土遺物：堆積土中および床面、ピット、掘り方埋土中から土師器、須恵器、石器が出土した。なかでも偏平な礫石器が住居南辺の周溝に被せたような状況で検出された。そのうち土師器坏１点、甕１点、鉢１点、礫石器２点を図示した。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI22	土師器・坏	ケズリ・ミガキ・マメツ	ミガキ・黒色処理		337-2	C-12
2	SI22	土師器・鉢	マメツ	ナデ・ヘラナデ	底面ナデ	337-15	C-11
3	SI22	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ・オサエメ	ヨコナデ・ハケメ	底面網代痕	337-14	C-10

No.	遺構・器種	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
4	SI22 床面	礫石器	26.8	21.7	8.1	7,480	デイサイト	磨石・凹石	421-6	Kc-44
3	SI22	礫石器	10	9.6	2.7	280	デイサイト質凝灰岩	敲石・凹石	420-2	Kc-21

第51図　SI22竪穴住居跡出土遺物

SI23竪穴住居跡

遺構の確認：Ｊ～Ｌ－13～15グリッドで確認した。調査区の東側を拡張したがさらに東側の調査区外に延びており、全体は確認できなかった。SI21竪穴住居跡、SD７・14溝跡、SK30・35・37土坑、SX５性格不明遺構、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西4.5m以上×南北5.15mの方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はＮ－６°－Ｅである。

堆積土：５層認められた。にぶい黄褐色～暗褐色の粘土質シルト層である。

壁：壁高は残存状況の良い南壁で37cmである。周溝底面から急角度で立ち上がっている。

床面：住居跡中央部分は掘り方底面を直接床面としている。壁際周辺は掘り方埋土を貼床とし、その上面を床面としている。平坦である。掘り方は深さ５～30cmで北側が浅くなっており、南側は一段深くなっている。

周溝：住居跡検出部分ではカマド部分を除いて検出された。幅15～30cm、床面からの深さは６～10cmである。

柱穴：床面で８個のピットが検出された。SD14溝跡西壁で１個のピットが検出され、これも本住居に伴うピットと考えられるため、計９個のピットが検出されたことになる。Ｐ１・２は重複している。また、Ｐ10・11もＰ１と重複している。Ｐ５・10・11に柱痕跡が確認された。配置、規模からＰ５と10あるいは11が柱穴と考えられる。他の柱穴は不明である。Ｐ12・13・14は床面下での検出である。

カマド：北壁の中央部に付設されている。燃焼部、煙道部が検出された。煙出しピットはSX５性格不明遺構によって削平されているため検出されなかった。燃焼部は袖は残存していないが、幅90cm、奥行き100cm、奥壁の高さ10cmの底面に段が付く掘り込みが検出された。掘り込み手前から幅70cm、奥行き135cmの焼け面が検出され、掘り込み底面の段の手前に径40cmの硬く焼け締まった部分がみられる。煙道部はＳＤ７溝跡とＳＸ５性格不明遺構の間で残存部が検出された。幅42cm、深さは25cmで、検出された長さは80cmであるが住居跡の壁面からの長さは140cm以上になる。

その他の施設：カマド左脇に検出されたＰ１は貯蔵穴であると考えられる。

出土遺物：堆積土中および床面、ピット、掘り方埋土中から土師器、須恵器、石器が出土した。そのうち土師器坏１点、高杯１点、甕４点、須恵器高台付坏１点、礫石器１点を図示した。

SI24竪穴住居跡

遺構の確認：Ｊ・Ｋ－12・13グリッドで確認した。SI21竪穴住居跡、SK36土坑、SX５性格不明遺構、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。また、位置的にSD７溝跡との重複も考えられるが、直接の重複関係は不明である。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は南北3.8m以上×東西3.4mの方形を基調としたものであると考えられる。北壁を基準とした方向はＥ－３°－Ｎである。

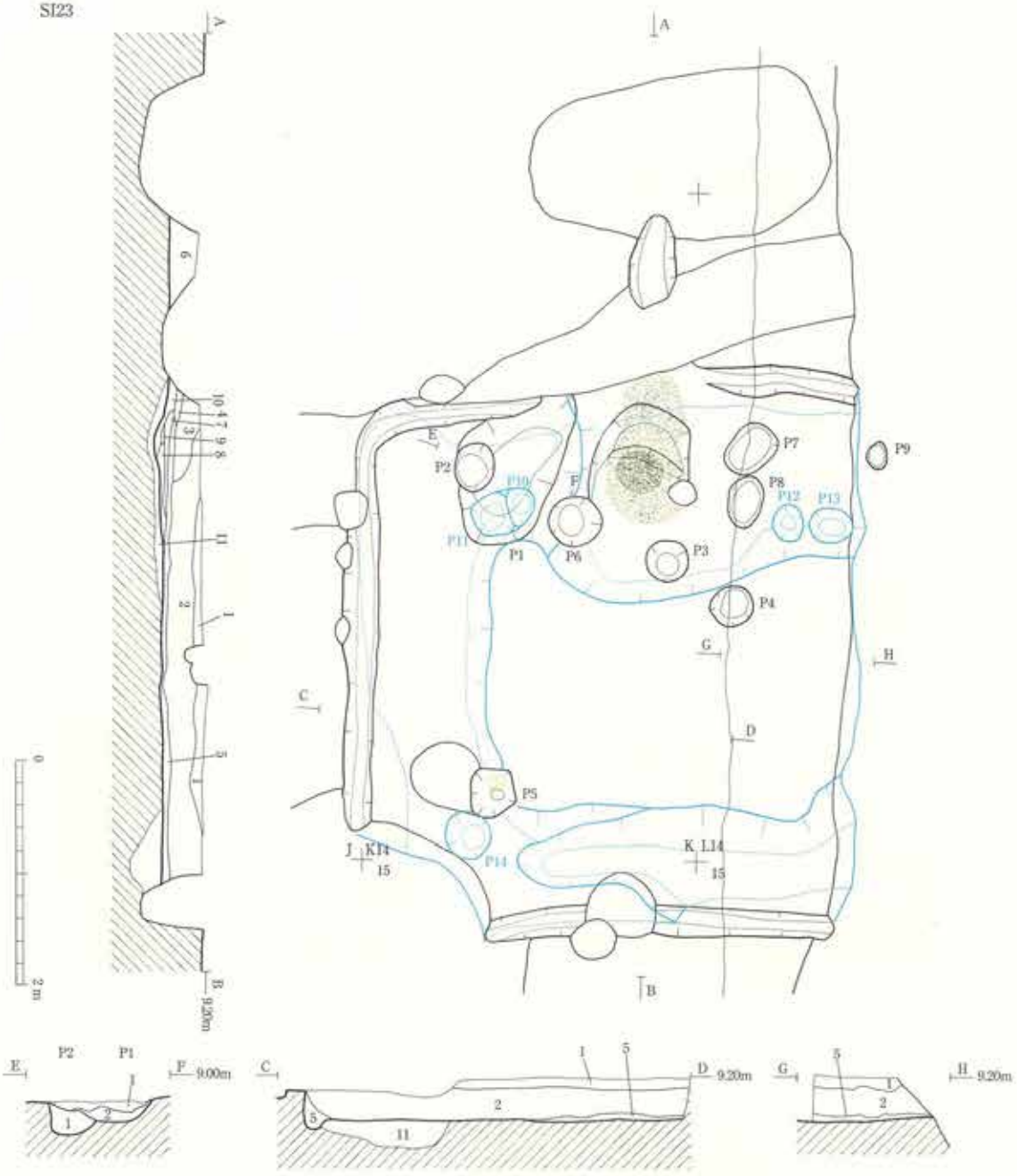
堆積土：３層認められた。暗褐色～褐色のシルト～粘土質シルト層である。全体に炭化物、焼土粒を含んでいる。

壁：壁高は残存状況の良い西壁で12cmである。周溝底面から急角度で立ち上がっている。

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは10～15cmである。

周溝：住居跡検出部分では検出されなかった。

柱穴：床面で５個のピットが検出された。SK36土坑底面で３個のピットが検出され、これも本住居に伴うピットと考えられるため、計８個のピットが検出されたことになる。Ｐ６・７に柱痕跡が確認された。配置、規模からＰ６・７が柱穴と考えられる。他の柱穴は不明である。Ｐ９は床面下での検出である。



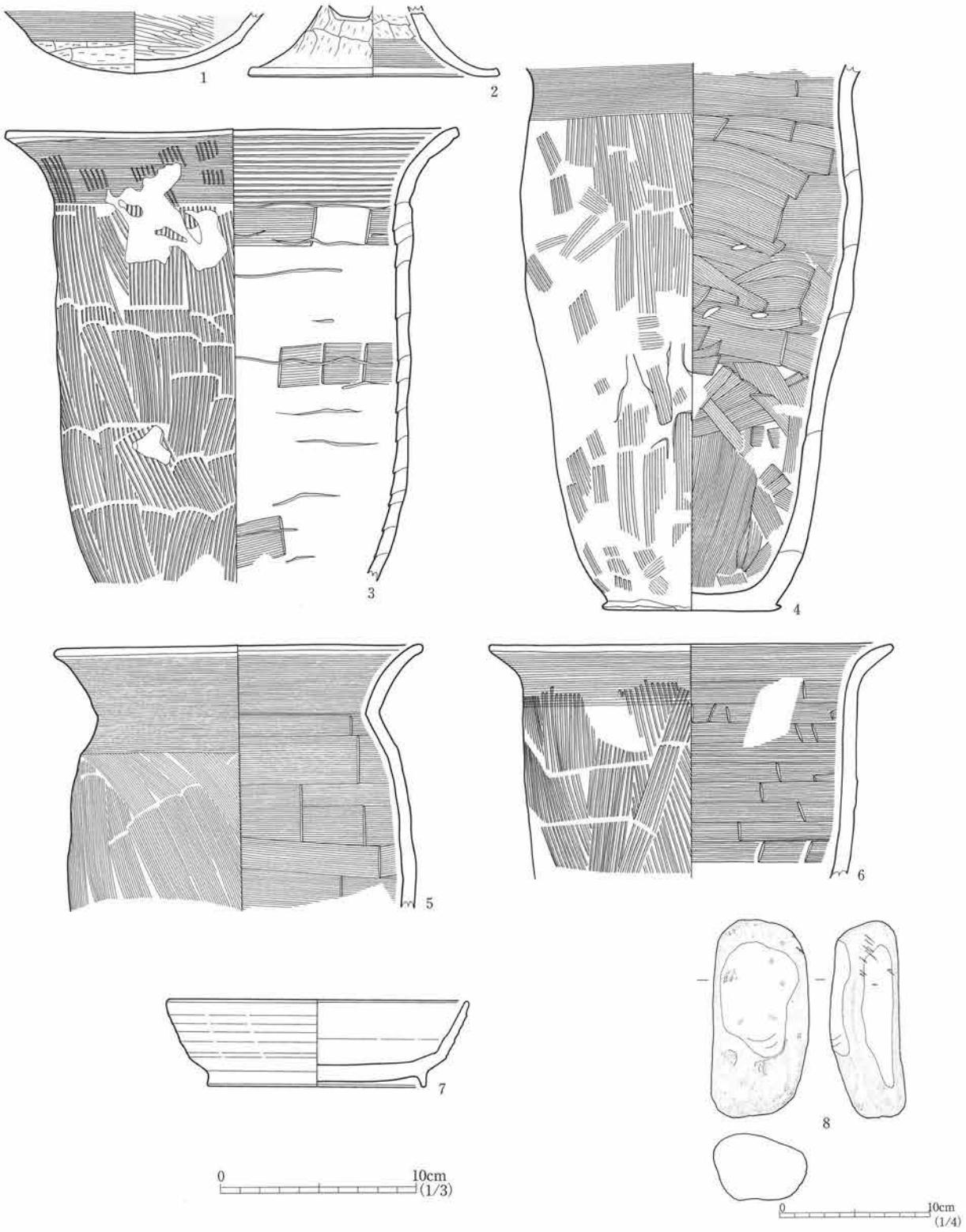
層位	No.	土色	土性	備考
	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を少量含む、しまりややあり、粘性あり
	2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	灰黄褐（10YR4/2）粘土質シルトをブロック状に含み、にぶい黄橙（10YR6/4）粘土質シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土、骨を含む、粘性ややあり
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
	4	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
	5	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土、砂岩片（カマド被石のこわれたものか）を含む
カマド	7	暗赤褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	焼土、下面に炭化物の層、粘性あり
	8	明赤褐色（5YR5/6）	シルト	焼土（下面焼けてしまっている）焼土塊
	9	褐色（7.5YR4/4）	シルト	炭化物、焼土粒を含む、粘性ややあり
	10	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	焼土多量、粘性ややあり
掘り方	11	暗褐色（10YR3/4） 灰黄褐色（10YR4/2） 褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	しまりあり

ピットNo.	No.	土色	土性	備考
P1	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土を多く含む、粘性ややあり
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黒褐（10YR3/1）砂質シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
P2	1	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	焼土ブロックを多く含む、粘性ややあり
P3		褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土、灰を多量に含む、粘性ややあり、深さ24cm
P4		褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土、灰を多量に含む、粘性ややあり、深さ24cm
P5掘り方		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）粘土質シルトをブロック状に含む、炭化物少量、深さ66cm
柱痕		灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	焼土をやや多く含む、深さ66cm
P6掘り方		にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）粘土質シルトをブロック状に含む、粘性ややあり、深さ8cm
柱痕		にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	やや炭化物を多く含む、深さ26cm
P13掘り方		にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘土質シルト	黒褐（10YR2/2）粘土質シルト、小ブロック状に含む、粘性ややあり、深さ30cm
柱痕		黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	炭化物、焼土少量、粘性ややあり、深さ30cm

ピット計測表（cm）

No.	6	7	8	9	12	13	14
深さ	26	10	18	13	51	44	41

第52図　SI23竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI23	土師器・坏	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理			C-13
2	SI23	土師器・高坏	ケズリ	ヨコナデ・ケズリ		337-10	C-18
3	SI23　床面	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ヘラナデ・積上痕		338-3	C-16
4	SI23	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ・積上痕	床面木葉痕	338-4	C-17
5	SI23	土師器・甕	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		338-2	C-15
6	SI23	土師器・甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ			C-14

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
7	SI23	須恵器・高台付坏	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ		342-14	E-9

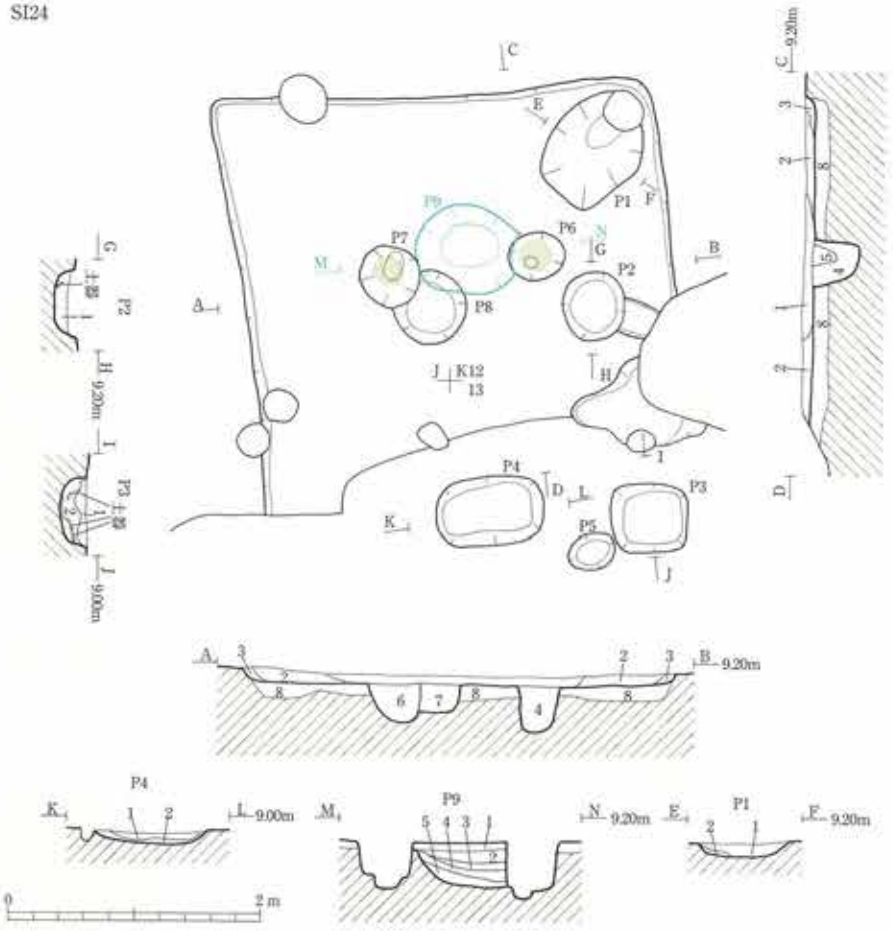
No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
8	SI23	礫石器	13.2	6.4	4.7	595	デイサイト	線刻　磨石	420-3	Kc-22

第53図　SI23竪穴住居跡出土遺物

カマド：東壁の中央部に付設されている。燃焼部の手前側一部が検出された。燃焼部の奥側から煙道部・煙出しピットはSX５性格不明遺構、SK36土坑によって削平されているため検出されなかった。燃焼部の残存部分は幅80cm、奥行き90cmの範囲で、深さ６～10cmの掘り込みとして検出された。掘り込みには炭化物・焼土が多量に含まれていた。

その他の施設：カマド右脇に検出されたＰ３は壁際に土師器坏が重なった状態で出土しており、貯蔵穴であると考えられる。また、カマドの左側に検出されたＰ２は多量の炭化物、焼土が含まれ、カマドの方向に向かって浅い溝が付けられていることからカマドに関係したものである可能性がある。

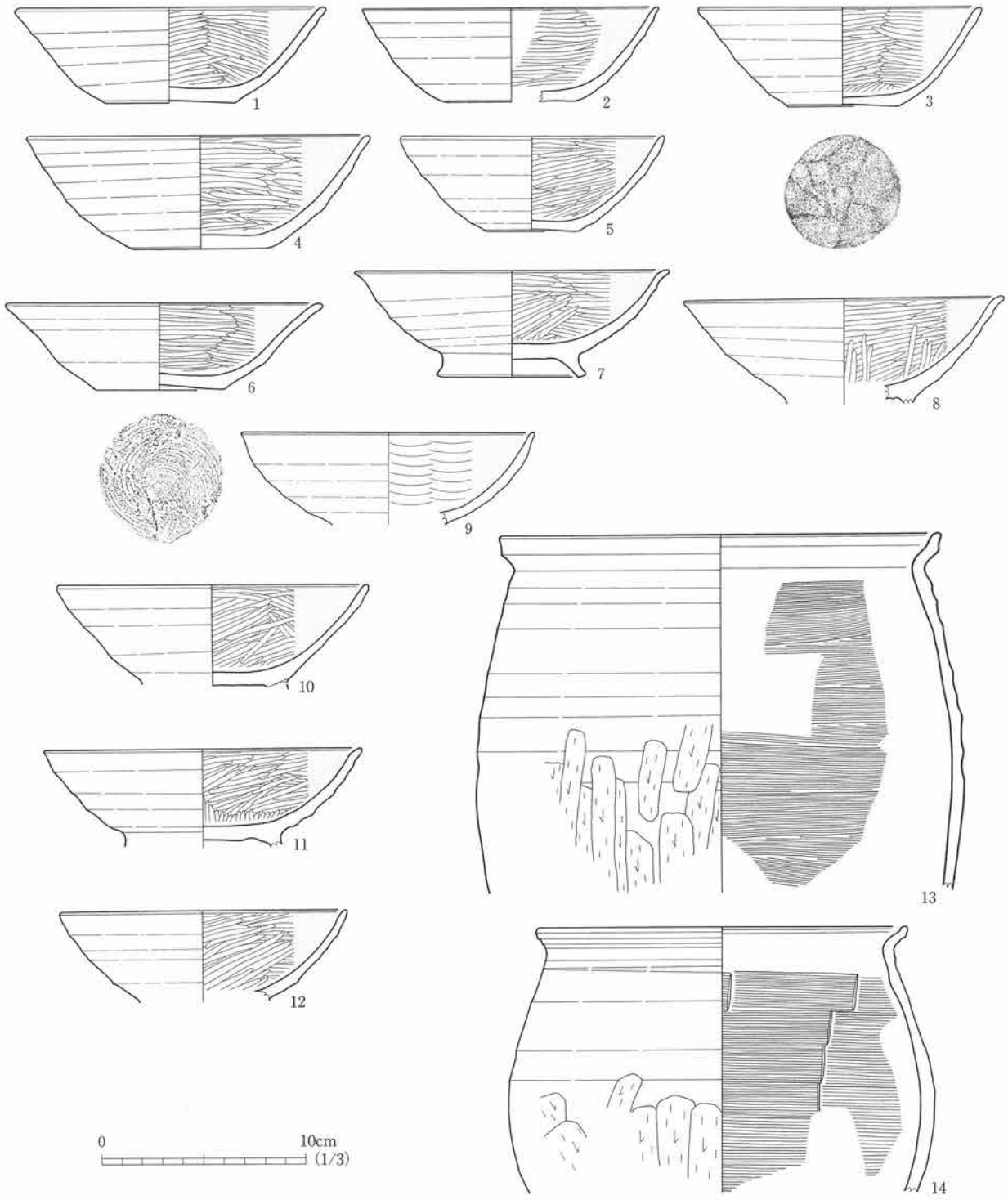
出土遺物：堆積土中および床面、ピット、掘り方埋土中から土師器、須恵器、石器が出土した。そのうち土師器坏６点、高台付坏６点、甕２点を図示した。



層位	No.	土　色	土　性	備　考
	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土、しまり、粘性ややあり
	2	褐色（10YR4/4） 暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土少量、しまり、粘性ややあり
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物少量、しまりややあり
P4掘り方	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物を少量含む、しまりややあり
P4柱痕	5	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物を少量含む、しまりややあり
P5掘り方	6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物を少量含む、しまりややあり
P5柱痕		褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物を少量含む、しまりややあり
P8	7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土多量、土器片（ロクロ）、坏、多量、粘性ややあり
掘り方	8	暗褐色（10YR3/3） 黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物少量、しまりあり、粘性ややあり

ピット№	No.	土　色	土　性	備　考
P1	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土、少量、土器片含む
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	褐色（10YR4/4）シルトを含む
P2		暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土、土器片含む、粘性ややあり
P3	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物、焼土、少量含む、粘性ややあり
	2	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物をブロックに含み、土器を多く含む、粘性ややあり
P4	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	炭化物、焼土多い
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土、少量含む、粘性ややあり
P5	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土を多く含む、しまりややあり
P9	1	暗褐色（10YR3/4） 黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、少量、しまりあり、粘性あり、掘り方埋土
	2	褐色（7.5YR4/3）	シルト	炭化物、少量、しまり、粘性ややあり
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物、少量、しまりややあり
	4	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	炭化物、焼土、少量、しまり、粘性ややあり
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、灰少量、しまりややあり、粘性ややあり

第54図　SI24竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外　面	底　面	内　面	備　考	写真図版	登録番号
1	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-5	D-14
2	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理			D-12
3	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理		339-6	D-17
4	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理		339-4	D-13
5	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理			D-19
6	SI24	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-8	D-21
7	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-9	D-15
8	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-10	D-16
9	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ		ミガキ・黒色処理			D-18
10	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ	回転糸切り・ナデ	ミガキ・黒色処理		339-7	D-20
11	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ナデ	ミガキ・黒色処理		341-11	D-22
12	SI24	土師器・高台付坏	ロクロナデ		ミガキ・黒色処理		339-9	D-23
13	SI24	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ・ナデ			D-10
14	SI24	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ・ヘラナデ			D-11

第55図　SI24竪穴住居跡出土遺物

SI25竪穴住居跡

遺構の確認：Ⅰ・Ｊ－10グリッドで確認した。SI27・28竪穴住居跡、ピットと重複しており、本遺構はSI27・28竪穴住居跡より新しくピットより古い。

平面形・規模：平面形は東西2.95m×南北2.2mの長方形であるが、西辺・南辺が僅かに弧状になっている。東壁を基準とした方向はＮ－４°－Ｗである。

堆積土：１層のみ認められた。褐色の粘土質シルト層である。炭化物、焼土粒を含んでいる。

壁：壁高は残存状況の良い北西壁で６cmと残存状況は良くない。床面から急角度で立ち上がっている。

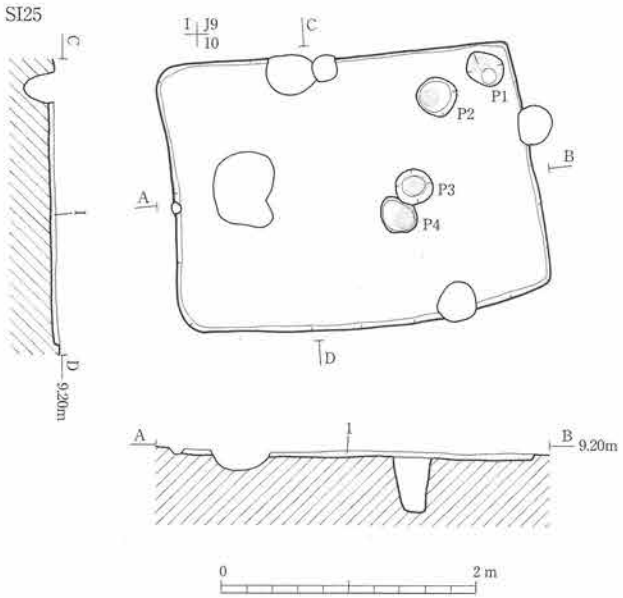
床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦である。床面のレベルは北側に向かって緩やかに傾斜している。

周溝：検出されなかった。

柱穴：床面で４個のピットが検出された。全てのピットに柱痕跡が確認された。配置、規模からＰ２が柱穴と考えられる。他の柱穴は不明である。

カマド：検出されなかった。

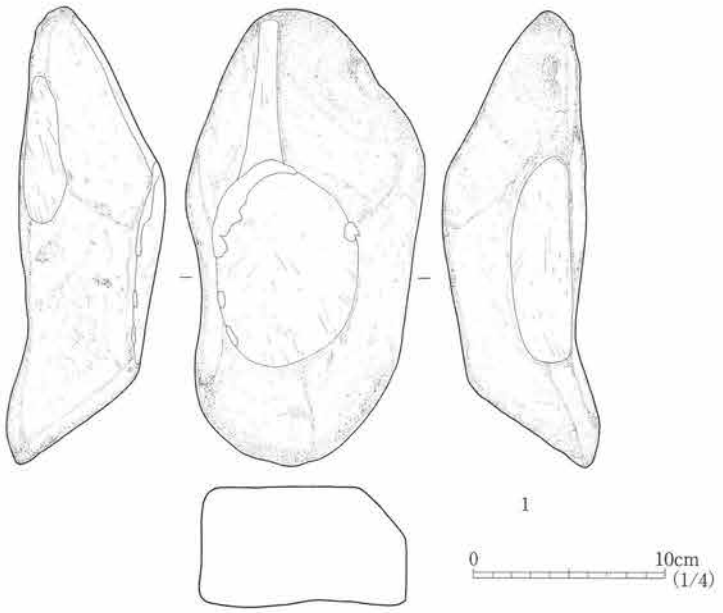
出土遺物：堆積土中および床面、ピットから土師器片、石器が出土した。そのうち礫石器１点を図示した。



No.	土　色	土 性	備　考
1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒若干、しまりややあり
	オリーブ褐色（25Y4/3）		

ピットNo.	土　色	土 性	備　考
P1掘り方	オリーブ褐色（25Y4/4）	粘土質シルト	しまりややあり、深さ51cm
	褐色（10YR4/6）		
柱痕	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	深さ51cm
P2掘り方	褐色（10YR4/4）	シルト	深さ14cm
	オリーブ褐色（25Y4/6）		
柱痕	暗褐色（10YR3/3）	シルト	深さ14cm
P3掘り方	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物を含む、粘性ややあり、深さ45cm
柱痕	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物含む、深さ45cm
P4掘り方	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	しまりややあり、深さ16cm
	褐色（10YR4/6）		
柱痕	褐色（10YR4/4）	シルト	深さ16cm

第56図　SI25竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SI25	礫石器	24.2	12.5	7.6	1.730	デイサイト質凝灰岩	磨石	420-5	Kc-23

第57図　SI25竪穴住居跡出土遺物

SI26竪穴住居跡

遺構の確認：K・L－9・10グリッドで確認した。遺構は北側、東側の調査区外に延びており、水路によって削平されている。SI27・28竪穴住居跡、SX４性格不明遺構、SD14溝跡、ピットと重複しており、本遺構はSI27・28竪穴住居跡より新しく他の遺構より古い。

平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西２ｍ以上×南北３ｍ以上の方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はＮ－５°－Ｗである。

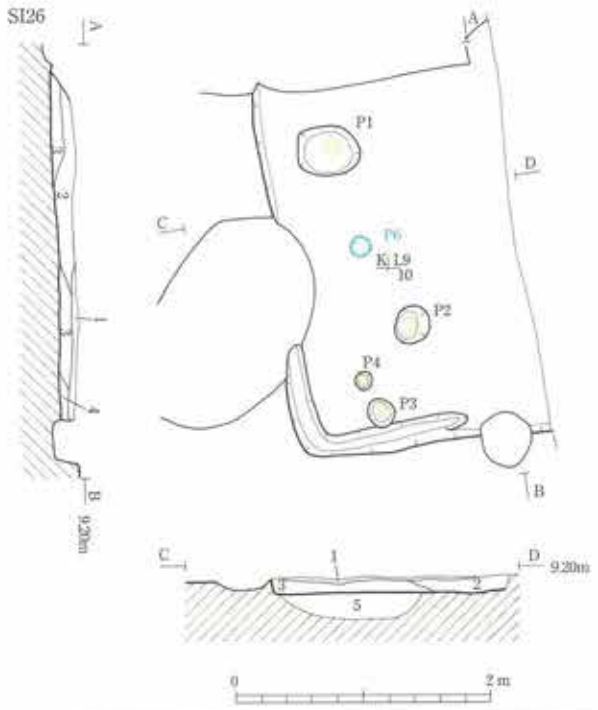
堆積土：４層認められた。暗褐色のシルト～粘土質シルト層である。炭化物、焼土粒を含んでいる。

壁：壁高は残存状況の良い南西コーナー付近で14cmである。床面から急角度で立ち上がっている。

床面：西壁際周辺は掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。その他の部分は掘り方底面を直接床面としている。平坦である。床面のレベルは北側に向かって緩やかに傾斜している。掘り方は深さ20cm前後である。

周溝：住居跡北西コーナー付近にのみ検出された。幅15～20cm、深さ５cm前後である。

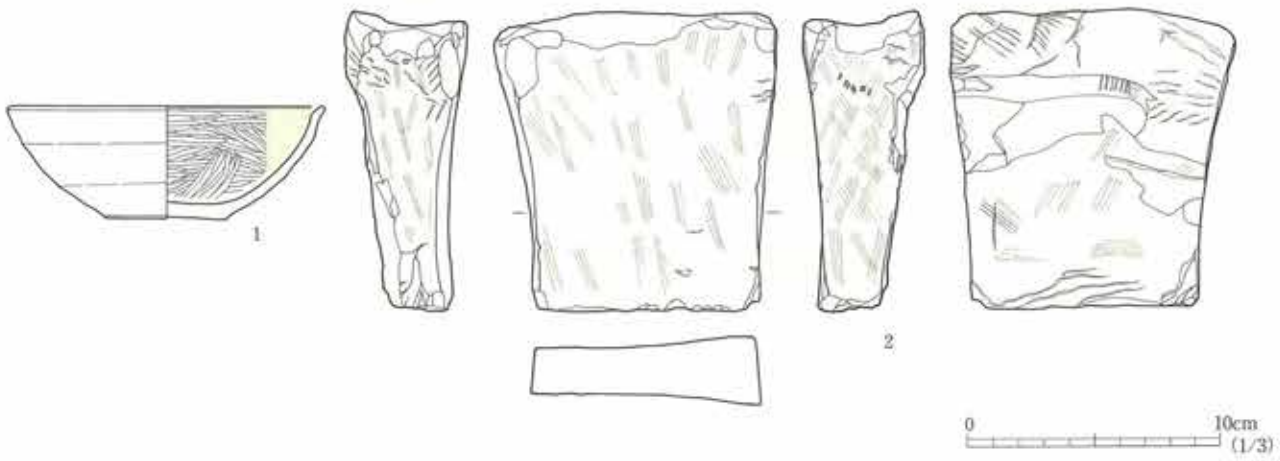
柱穴：床面で５個のピットが検出された。全てのピットに柱痕跡が確認された。配置、規模からＰ２が柱穴と考えられ、Ｐ１も可能性がある。他の柱穴は不明である。Ｐ４は柱痕跡のみの検出である。Ｐ６は床面下での検出である。



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土粒を含む、しまりあり
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、褐（10YR4/4）シルトブロック、しまりあり、粘性ややあり
	3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒、褐（10YR4/6）シルトブロック、しまりややあり
	4	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	焼土粒若干、しまりややあり
掘り方	5	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトをブロック状に含む

ピット№	土色	土性	備考
P1掘り方	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	土器片含む、粘性あり、深さ34cm
柱痕	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物を含む、粘性あり、深さ34cm
P2掘り方	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	焼土粒を含む、深さ38cm
柱痕	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	焼土粒を掘り方より多く含む、粘性あり、深さ38cm
P3掘り方	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	粘性ややあり、深さ39cm
柱痕	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	焼土粒を含む、粘性ややあり、深さ39cm
P4柱痕	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	粘性ややあり、深さ51cm

第58図　SI26竪穴住居跡



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI26　検出面	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-10	D-24

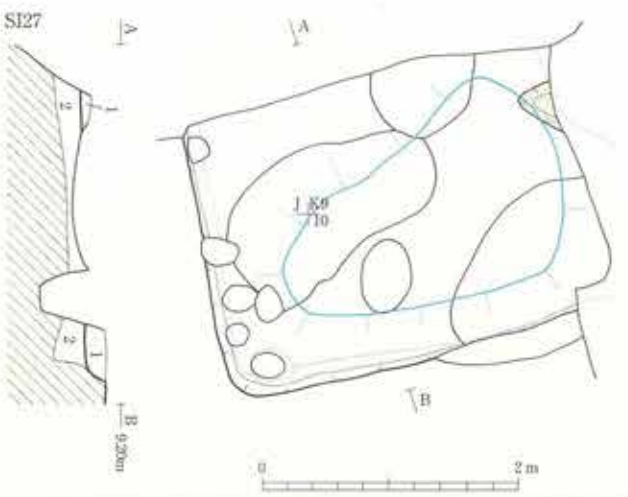
No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
2	SI26	砥石	12	11.2	4.8	750	頁岩	現から転用	426-1	Kd-65

第59図　SI26竪穴住居跡出土遺物

カマド：住居跡検出部分では検出されなかった。
出土遺物：検出面および堆積土中、床面、ピット、掘り方埋土から土師器片、須恵器片、石製品が出土した。そのうち土師器坏１点、石製品１点を図示した。

SI27竪穴住居跡

遺構の確認：Ｊ・Ｋ－９・10グリッドで確認した。遺構は北側の調査区外に延びており、水路によって削平されている。SI26・28竪穴住居跡、SK40・41土坑、SX４性格不明遺構、ピットと重複しており、本遺構はSI28竪穴住居跡より新しく他の遺構より古い。
平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西3.1m以上×南北2.3m以上の方形を基調としたものであると考えられる。西壁を基準とした方向はＮ－５°－Ｗである。
堆積土：１層のみ認められた。暗褐色のシルト層である。焼土粒を含んでいる。
壁：壁高は残存状況の良い南壁で16cmである。南壁は床面から緩やかな角度で立ち上がっており、西壁は急角度で立ち上がっている。



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロックに含む
掘り方	2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）を小ブロック状に含む、炭化物を含む、粘性ややあり

第60図　SI27竪穴住居跡

床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。床面のレベルは北側に向かって緩やかに傾斜している。掘り方は住居跡全面に認められ、深さは10～25cmで、中央部がやや浅く壁際が深くなっている。
周溝：住居跡検出部分では検出されなかった。
柱穴：ピットは検出されなかった。
カマド：住居跡検出部分では検出されなかったが、SI26竪穴住居跡と重複する東側に焼土が詰まった窪みが検出されている。壁面の一部が火熱を受けて赤変していることも考えると、カマドに関係したものである可能性がある。
出土遺物：検出面および堆積土中、床面、掘り方埋土から土師器片、須恵器片が出土した。

SI28竪穴住居跡

遺構の確認：Ｊ・Ｋ－10グリッドで確認した。SI26・28竪穴住居跡、SX４性格不明遺構、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。
平面形・規模：全体の平面形・規模は不明であるが、平面形は東西2.7m以上×南北0.7m以上の隅丸方形を基調としたものであると考えられる。南壁を基準とした方向はＥ－10°－Ｎである。
堆積土：２層認められた。にぶい黄褐色のシルト層である。
壁：壁高は残存状況の良い南西コーナー付近で20cmである。床面から緩やかな角度で立ち上がっている。
床面：掘り方底面を直接床面としている。平坦である。

層位	No.	土色	土性	備考
	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトをやや多く含む
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを多く含む
周溝	3	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを含む、粘性ややあり、周溝

ピット計測表

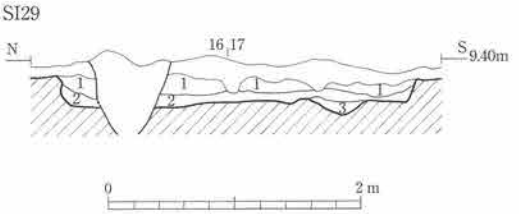
No.	1
深さ	14

第61図　SI28竪穴住居跡

周溝：南壁際に130cmの長さで検出された。幅15cm前後、床面からの深さは３～５cmである。
柱穴：床面で１個のピットが検出されたが、柱痕跡は認められず、位置的に柱穴とは考えられない部分にあることから柱穴とは考えられない。
カマド：住居跡検出部分では検出されなかった。
その他の施設：住居跡検出部分の東側で、40cm×25cmの範囲に焼土がまとまって検出され、焼け面も確認された。カマドに関係したものである可能性がある。
出土遺物：検出面および堆積土中、床面、掘り方埋土から土師器片、石器片が出土した。

SI29竪穴住居跡

遺構の確認：Ｌ－16・17グリッド東壁の断面で確認した。平面では確認できなかった。
平面形・規模：平面形は不明であるが、南北の壁の間隔は2.85mである。壁の方向は不明である。
堆積土：２層認められた。
壁：断面での壁高は北壁で25cmである。床面から急角度で立ち上がる。
床面：掘り方底面を直接床面としている。小さな凸凹がみられる。
周溝：確認されていない。
柱穴：確認されていない。
カマド：確認されていない。
出土遺物：堆積土中から土師器片が出土した。



層位	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、明黄褐（10YR6/8）シルト粒を含む、粘性あり、しまりややあり
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒を含む、しまりややあり
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	床面の窪み、粘性ややあり
		褐色（10YR4/4）		

第62図　SI29竪穴住居跡

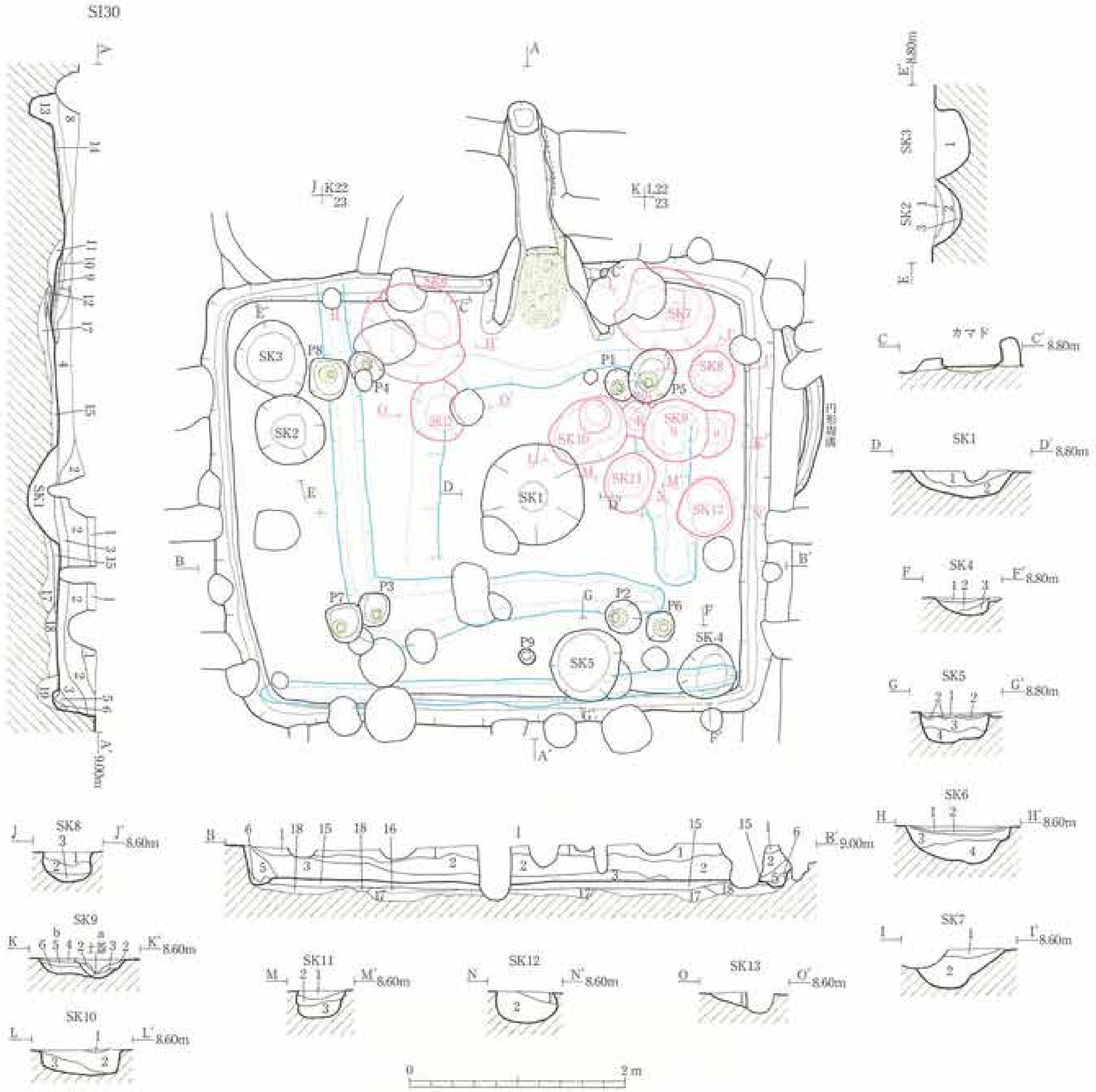
ＳＩ30竪穴住居跡

遺構の確認：Ｊ～Ｌ－22～24グリッドで確認した。ＳＫ65・66土坑、小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構は全ての遺構より古い。また、本遺構東側で検出された円形周溝とも重複関係が考えられ、直接の関係は不明であるが形態を考えると本遺構より古いものであると考えられる。
平面形・規模：平面形は東西5.3m×4.25mの隅丸長方形であるが、東辺がやや広く、南辺がやや狭くなっている。東壁を基準とした方向はＮ－５°－Ｅである。
堆積土：５層認められた。黒褐色～にぶい黄褐色のシルト層である。３～５層には炭化物、焼土粒、焼土ブロックを含んでいる。
壁：壁高は残存状況の良い北壁で39cmである。周溝底面から急角度で立ち上がる。
床面：掘り方埋土を貼床とし、上面を床面としている。平坦である。掘り方は住居跡全面に認められ、貼り床の厚

遺構	No.	土色	土性	備考
SK9（a）	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	灰のブロック、焼土粒を多く含む
	2			灰黄褐（10YR5/2）粘土質シルトの小ブロック含む、灰層
	3	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	黄褐（2.5Y5/3）砂質シルトブロック、褐褐（10YR3/3）シルトブロック含む
SK9（b）	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物粒含む
	5			にぶい黄褐（10YR4/3）粘土質シルトを小ブロック含む、焼土粒含む、灰層
	6	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）粘土質シルトを小ブロック含む、炭化物粒、焼土ブロック含む
SK10	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物含む、焼土ブロック、焼土粒含む
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	黄褐（2.5Y5/4）砂質シルトの小ブロック含む、炭化物粒、焼土ブロック含む
	3	灰黄褐色（2.5Y5/4）	砂質シルト	黄褐（2.5Y5/4）砂質シルトの小ブロック含む、炭化物粒含む

遺構	No.	土色	土性	備考
SK11	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物含む、焼土ブロック含む
	2			I-1の小ブロックわずかに含む、焼土粒含む、灰層
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	
SK12	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物含む、焼土ブロック、焼土粒含む
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	I-1の小ブロック含む、炭化物、焼土粒、焼土ブロック、非常に多い
SK13	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黄褐（2.5Y5/4）（砂質シルト）のブロック、褐（10YR4/6）（シルト）の小ブロック、炭化物粒を含む

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ	29	26	55	25	49	35	55	41	12	34



層位	No.	土色	土性	備考
	1	黒褐色（10YR3/2） 黄褐色（10YR5/6）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトの粒子を含む（黄褐（10YR5/6）シルト）
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黒褐（10YR3/2）シルトのブロックを多く含む
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトのブロックを含む
	4	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	炭化物粒、焼土粒、焼土の小ブロック、黒色（10YR2/2）シルトのブロックを含む
	5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物粒を含む
周溝	6	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	黄褐（10YR5/6）→にぶい黄褐（10YR3/2）シルト。黄褐（10YR5/8）シルトの土ブロックを含む
カマド	7	黄褐色（2.5Y5/4）	砂質シルト	炭化物粒、焼土ブロックを含む。カマド、天井部崩落土
	8	にぶい赤褐色（5YR4/3）	シルト	炭化物ブロック、焼土ブロックを多く含む。黄褐色（2.5Y5/4）粘土質シルトのブロックを含む。構造物、カマド壁、天井の崩落土（焼土ブロック）
	9	灰層		
	10	暗褐色（5YR3/2） 赤褐色（5YR4/6）	砂質シルト	炭化物粒、焼土粒を含む
	11	暗赤褐色（5YR3/2）	シルト	[illegible]
	12	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	上面（暗灰黄（2.5Y4/2）と炭化物）は焼けている。固い
	13	黄褐色（2.5Y5/4）	粘土質シルト	焼土ブロック、炭化物ブロックを多く含む。構造物、天井の崩落土
貼床	14	黒色（10YR2/1）	シルト	炭化物層、焼土ブロックを多く含む。構造物、天井の崩落土
	15	黄褐色（2.5YR5/6）	砂質シルト	黒褐（10YR3/2）シルトのブロックを含む。部分的には黄褐（10YR5/6）砂質シルトと黒褐（10YR3/2）シルトが層状に（互層）になっている。固くしまっている
掘り方	16	黒褐色（10YR2/2）	シルト	灰黄褐（10YR4/2）シルトのブロックをわずかに含む。古い掘り方埋土
	17	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黒（10YR3/2）シルトの小ブロックを含む。古い掘り方埋土
	18	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	黒（10YR3/2）シルトのブロックを斑に含み、及び黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを斑に含む。炭化物粒、焼土粒含む（新しい掘り方埋土）
	19	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトのブロック含む（新しい掘り方埋土）

遺構	No.	土色	土性	備考
SK1	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土粒を含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物粒含む
SK2	1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）シルトのブロックを含む。炭化物、焼土粒を含む
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物粒含む
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	
SK3	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	[illegible]
SK4	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/3）シルトのブロックを含む。炭化物粒、焼土粒を含む
	2	暗オリーブ褐色（2.5Y3/2）	粘土質シルト	焼土、灰ブロックを多量に含む（灰が多い）
	3	黄褐色（2.5Y5/4）	シルト	炭化物粒、焼土ブロック多い
SK5	1	黒褐色（2.5Y3/1）	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/3）シルトのブロックを含む。炭化物粒、焼土粒を含む
	2			灰層（住居生活層）1、2は住居跡の堆積土。3の土坑の埋土が、落ち込んで堆積した層
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	黒褐（10YR2/3）シルトをブロック状に含む。焼土ブロックをわずかに含む
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	焼土ブロックを多く含む
SK6	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土ブロック含む。住居跡の堆積土
	2	黒色（2.5Y3/2）	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/4）シルトのブロックを含む。住居跡の堆積土
	3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	炭化物粒、焼土ブロックを含む
	4	暗オリーブ灰色（2.5G4/1）	粘土質シルト	
SK7	1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	[illegible]
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	褐（10YR4/6）シルトの小ブロック含む。灰黄褐（10YR4/2）粘土質シルトブロック含み、炭化物含む。西半分はグライ化している
SK8	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土ブロック、焼土粒含む
	2		粘土質シルト	灰層、Ⅰ-1の小ブロックわずかに含む。焼土ブロックを含む
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	

第63図　SI30竪穴住居跡

さは５～６cmと浅く、掘り方埋土の下部の状況、掘り方底面の状況から、本住居跡は北辺を除いた三辺が拡張されていることが判明した。拡張前の規模は東西3.3～3.5m×南北3.25～3.45mと考えられ、西辺が幅25～30cm、南辺が幅25～60cm、東辺では幅35cm以上で周溝状に掘り込まれている部分がある。この部分から西辺では１m、南辺では0.3～0.6m、東辺で0.6m拡張されている。また、住居跡南壁際には幅20～30cm、深さ５～10cmの溝状の掘り込みが検出された。拡張後の新しい周溝の掘り方と考えられる。

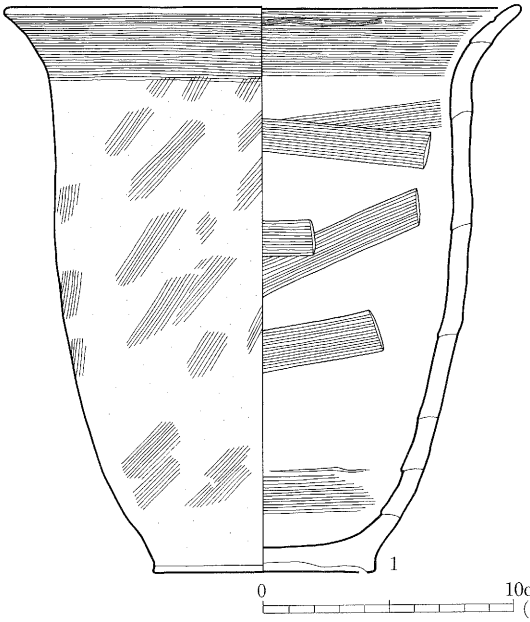
周溝：カマド部分を除いて全周している。幅は15～30cm、床面からの深さは４～10cmで、南東・南西コーナー部分のレベルが最も高く北側へ緩やかに傾斜している。また、周溝内の堆積土上面の中央部に幅４～５cmの落ち込みが観察された。住居跡の壁面を支える板壁等の痕跡である可能性がある。

柱穴：床面で８個のピットが検出された。全てのピットに柱痕跡が確認された。Ｐ１・５、３・７、４・８が重複関係にあり、Ｐ５、７、８が新しい。新しいものが外側にあることから重複関係のないＰ２・６についても、Ｐ６が外側にあることから、Ｐ６が新しく、Ｐ２が古いものと考えられる。柱穴としてはＰ１・２・３・４とＰ５・６・７・８が組み合うものと考えられ、柱をＰ１・２・３・４からＰ５・６・７・８に建て替えたものと考えられる。Ｐ10は床面下で検出された。

カマド：北壁の中央部のやや東寄りに付設されている。燃焼部・煙道部・煙出しピットが検出された。燃焼部は幅90cm、奥行き80cmの範囲であるが、右側の袖はピットによって削平されている。燃焼部の底面に幅45cm、奥行き80cmの焼け面が検出された。特に燃焼部の手前側が硬く焼け締まっている。また、側壁全面が火熱を受けて赤変している。燃焼部奥壁と煙道部の境は段になっている。煙道部は後世の遺構による削平によって残存状況はよくないが、長さ105cm、幅30～45cm、深さは５～25cmで先端に向かって深くなっており、壁は赤変してオーバーハングしている。煙出しピットは径25cm、深さ45cmである。側壁は赤変している。

カマドの断ち割り精査をしたところ、燃焼部の焼け面が下層でも検出され、２時期の焼け面が確認された。柱穴の立て替えに伴ってカマドも作り替えたものと考えられる。

その他の施設：床面で検出されたＰ９はカマドの反対側に位置し、住居跡の出入り口に関する施設のピットである可能性がある。その他に、床面および貼床下から土坑が検出された。床面からは５基検出され、SK２・３土坑は重複しており、SK２土坑が新しい。SK５土坑は下部の堆積土の上に人為的に土を入れて埋め戻している。埋め戻



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SI30	土師器・甕	ヨコナデ・ナデ・マメツ	ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ・積上痕	底面剥落	338-5	C-19

第64図　SI30竪穴住居跡出土遺物

した土は硬く締まっており、さらに埋め戻した土が落ち込んだ所に住居の床面の土が堆積している。その他の土坑の堆積土にも炭化物、焼土が多量に含まれている。貼床下から８基検出されている。カマドの左側に２基、右側に６基と住居北東部に集中している。SK６・９土坑は新旧２時期の土坑が重複している。SK６土坑は床面下３cm程で確認された。下部の堆積土の上に人為的に土を入れて埋め戻している。埋め戻した土は硬く締まっており、さらに埋め戻した土が落ち込んだ所に住居の貼床の土が堆積している。その他の土坑にも堆積土中に炭化物、焼土が多量に含まれているものがある。

出土遺物：堆積土中および床面、カマド、掘り方埋土中から土師器、須恵器片が出土した。そのうち土師器甕１点を図示した。

土坑

前述したように古代～中世の土坑だけではなく、Ⅱ・Ⅲ区から検出された土坑74基全てについて記述する。なお、当初は78基の土坑を確認したが、SK８・27の２基の土坑は、調査中に井戸跡であることが判明したことから、井戸跡として扱ったため、この項の記述から除き、SK56・57の２基はピットの重複であると判断されたことから欠番とした。

SK１土坑

Ｅ・Ｆ－35・36グリッドで確認された。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.3m×1.1mの楕円形で、深さは39cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、急角度で立ち上がる部分もある。底面はややすり鉢状に凹んでいる。遺物は土器片が出土した。

SK２土坑

Ｄ－35グリッドで確認された。遺構の東側は削平のため西側のみが確認された。平面形は1.85m以上×1.2mの不整な長方形を基調としたものであると考えられる。深さは33cmである。堆積土は２層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、やや南側に傾斜しており、中央が1.5m以上×0.45mで深さ20cmの溝状に落ち込んでいる。遺物は土器片が出土した。

SK３土坑

Ｂ・Ｃ－33グリッドで確認された。SD３堀跡、ピットと重複しており、ピットより古くSD３堀跡より新しい。平面形は1.9m×1.35mの楕円形で、深さは46cmである。堆積土は２層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は土器片が出土した。

SK４土坑

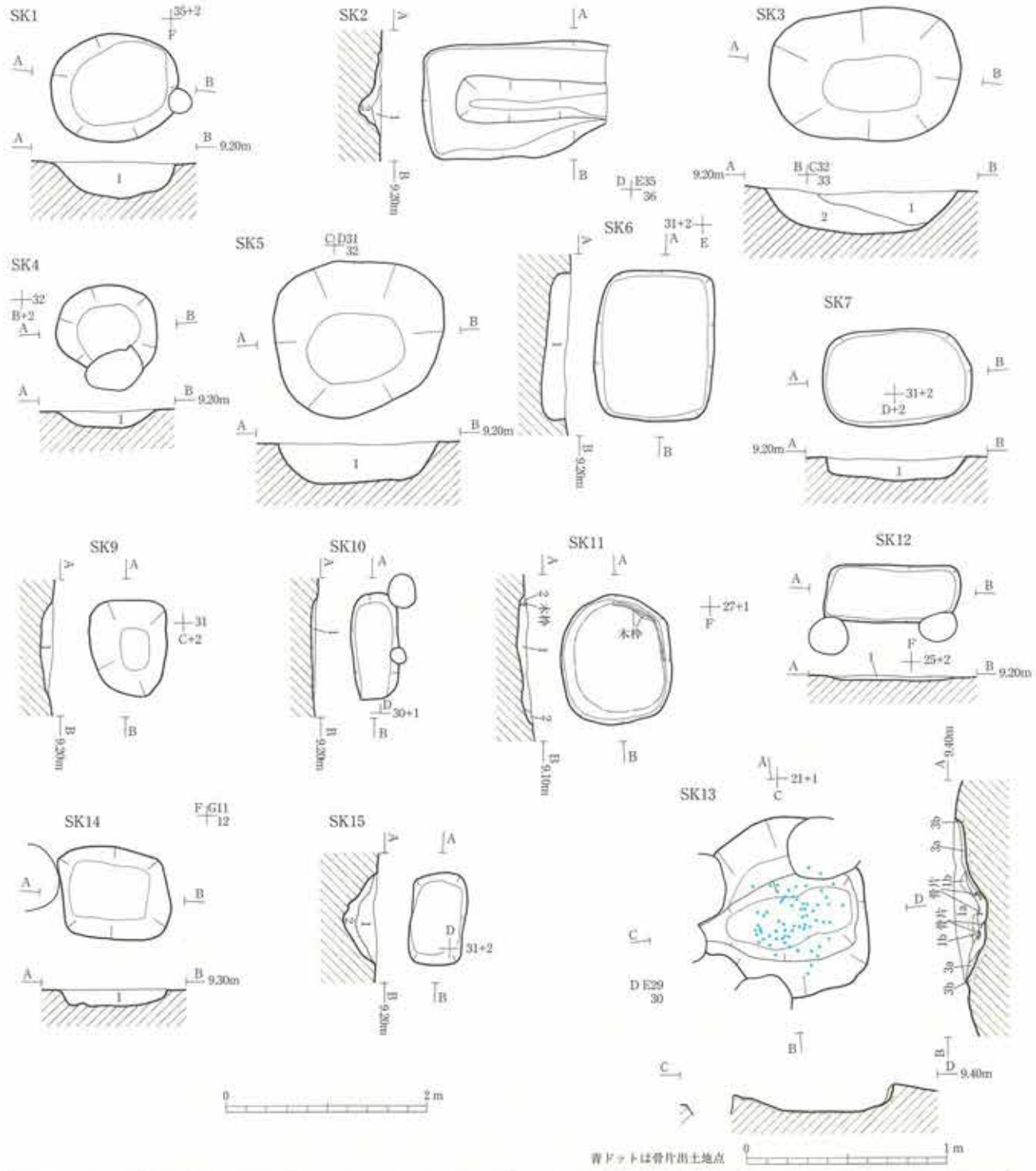
Ｂ・Ｃ－31・32グリッドで確認された。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は径約１mの円形を基調としたものであると考えられる。深さは15cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK５土坑

Ｃ・Ｄ－32グリッドで確認された。平面形は1.7m×1.6mの不整な円形で、深さは45cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK６土坑

Ｄ・Ｅ－31・32グリッドで確認された。平面形は1.55m×1.15mの隅丸長方形で、深さは27cmである。堆積土は単層である。壁は底面からやや急角度で立ち上がるが、オーバーハングする部分もある。底面は平坦である。遺物は出土していない。



遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SK1	1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	粘土質シルト	酸化鉄、礫、砂を含む。粘性ややあり
SK2	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	炭化物、木片、砂を含む。グライ化している部分があり、粘性ややあり
	2	にぶい黄色（2.5Y6/3）	砂	グライ化した粘土、細部片を含む
SK3	1	暗灰黄色（2.5YR5/2）	砂質シルト	褐灰（10YR5/1）シルトを多く含む。炭化物を含む
	2	黄灰色（2.5Y6/1）	粘土質シルト	酸化鉄を含む。下方がややグライ化している。粘性ややあり
SK4	1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	粘土質シルト	砂、酸化鉄を含み、部分的に炭化物を含む。粘性ややあり
SK5	1	褐灰色（10YR5/1）	粘土質シルト	炭化物、砂、酸化鉄を含む。粘性ややあり
SK6	1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄を含む。下方がややグライ化している。粘性ややあり
SK7	1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	粘土質シルト	黄褐色砂、灰黄褐色土を小ブロック状に含む。粘性ややあり
SK9	1	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	黄褐色砂、酸化鉄を含む。粘性ややあり

遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SK10	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄を多く含む。粘性ややあり
SK11	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	炭化物、種子（ウリ？）、石、砂、酸化鉄を含む。粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黄褐色砂を含み、炭化物を少量を含む。粘性ややあり、締り方
SK12	1	黄灰色（2.5Y4/1）	シルト質粘土	炭化物、黄褐色砂を含む、粘性ややあり
SK13	1a	灰黄褐色（10YR5/3）	シルト	黒褐色土、焼土ブロックをやや多く含む。焼土を多量に含む。炭化物を少量含む
	1b	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	焼土を多く含む。下からの加熱の影響か
	2	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	黒褐色土、炭化物、灰を多量に含む。焼土を少量含む。骨を多量に含む
	3a	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土を含み骨片を少量含む。火熱の影響で非常に固くなっている
	3b	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	火熱の影響で焼けている。SK13下の土
SK14	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	黒褐色土、にぶい黄褐色土をブロック状に含む。酸化鉄を含む。粘性ややあり
SK15	1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	酸化鉄を多く含み、炭化物、焼土を少量含む。粘性ややあり
	2	黒色（10YR2/1）		炭化物・灰層、暗灰黄（10YR5/2）粘土質シルトを極少量含む。粘性ややあり

第65図　II・III区　土坑（1）

SK 7 土坑

D－31グリッドで確認された。平面形は1.45m×1.0mの隅丸長方形で、深さは21cmである。堆積土は単層である。大部分の壁は底面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分もある。底面は平坦である。遺物は須恵器片が出土した。

SK 9 土坑

C－30・31グリッドで確認された。位置的にSD13B溝跡と重複関係にあると考えられるが、溝跡が途切れているため、新旧関係は不明である。平面形は0.95m×0.75mの不整な楕円形で、深さは14cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK10土坑

C・D－29・30グリッドで確認された。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.05m×0.5mの不整な長方形である。深さは5cmであるが、削平され、南側の壁は残存していない。残存する壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK11土坑

E－27グリッド、SD 4 堀跡の堆積土上面で確認された。SD 4 堀跡より本遺構が新しい。平面形は1.3m×1.05mの不整な楕円形の掘り方の内側に、掘り方の北東側に寄せて1.1m×0.85mのほぼ掘り方平面形と相似形の掘り込みがある。深さは15cmである。堆積土は単層である。壁は底面から急角度で立ち上がる。遺構検出時に壁に沿って竹製の枠と考えられるものが全周していたが、残存状況が悪く遺構の精査時に取り上げることは出来なかった。底面は平坦である。遺物は肥前の白磁片、竹製の枠の一部、植物の種子が出土した。

SK12土坑

E・F－25グリッドで確認された。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.35m×0.6mの隅丸長方形である。深さは5cmであるが、壁の立ち上がりはほとんど無い。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は須恵器片、土師器片、剥片石器が出土した。

SK13土坑

B・G－21グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。遺構検出時、中央の焼土が輪郭より上位で検出されたことから、遺構中央が盛り上がった形で検出された。ピットによる削平のため、平面形、規模の詳細は不明だが0.9m×0.85m以上の隅丸方形を基調とした平面形であると思われる。深さは15cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。壁面は火熱を受け堅く焼け締まっている。堆積土は3層確認されたが、1層は焼土ブロックが含まれ、その状況は下からの火熱の影響を受けた痕跡を示している可能性がある。2層には焼土粒、灰、炭化物が多量に混入し、特に骨片が多量に含まれている。3層は火熱の影響で非常に堅く締まっている。壁の外側2～3cmまで火熱の影響で地山が赤変している。底面は中央部が溝状に深くなり、東西の壁際が中央より約10cm浅くなる二段構成となっている。壁同様に火熱の影響で赤変しているが壁ほど顕著に焼け締まってはいない。出土した人骨は200点以上に及び下顎骨や歯等も見られる。人骨以外の遺物は出土していない。

SK14土坑

F－12グリッドで確認した。SI11竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は1.1m×0.95mの不整な長方形である。深さは16cmである。堆積土は単層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

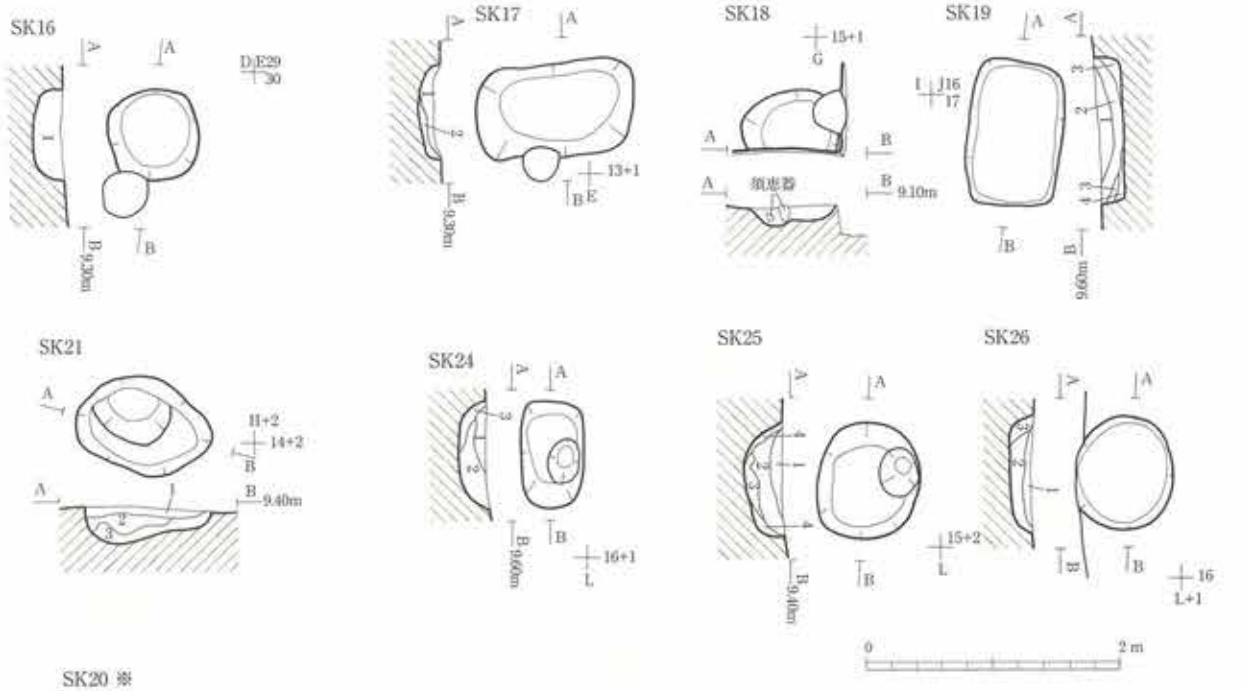
SK15土坑

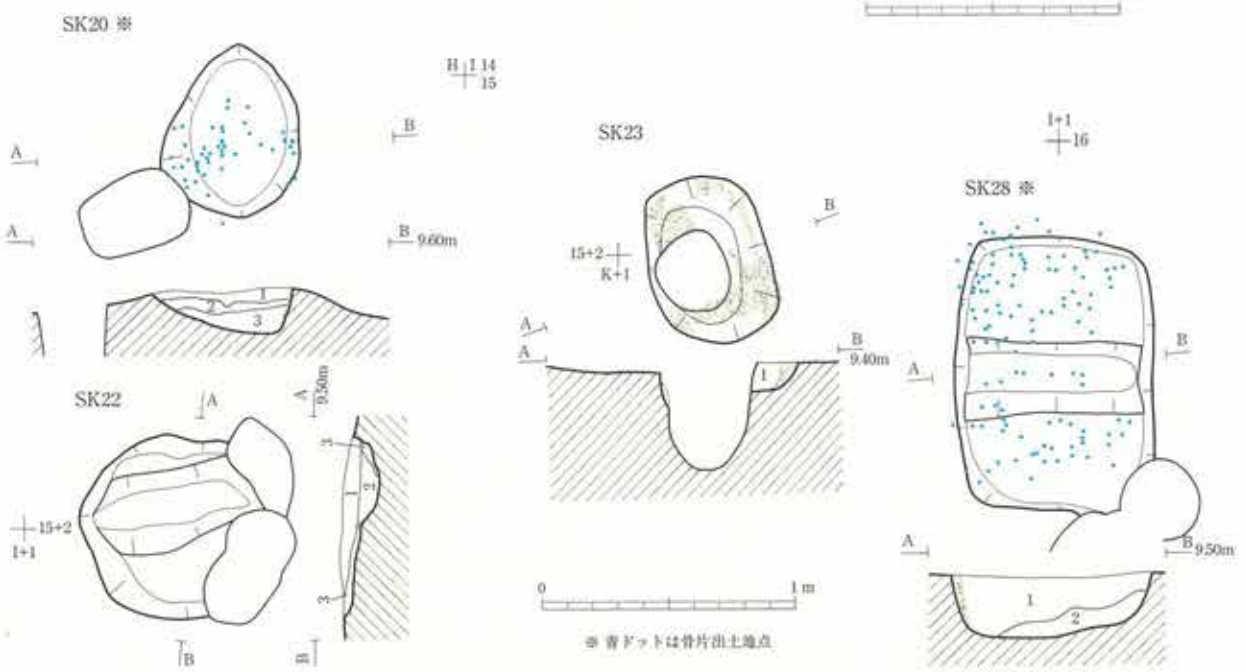
C・D－31グリッドで確認した。平面形は0.95m×0.55mの隅丸長方形である。深さは41cmである。堆積土は2層確認され、2層は炭化物層である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は中央部が窪むすり鉢状になってい

る。遺物は出土していない。

SK16土坑

D－30グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は直径0.75mの隅丸正方形に近い不

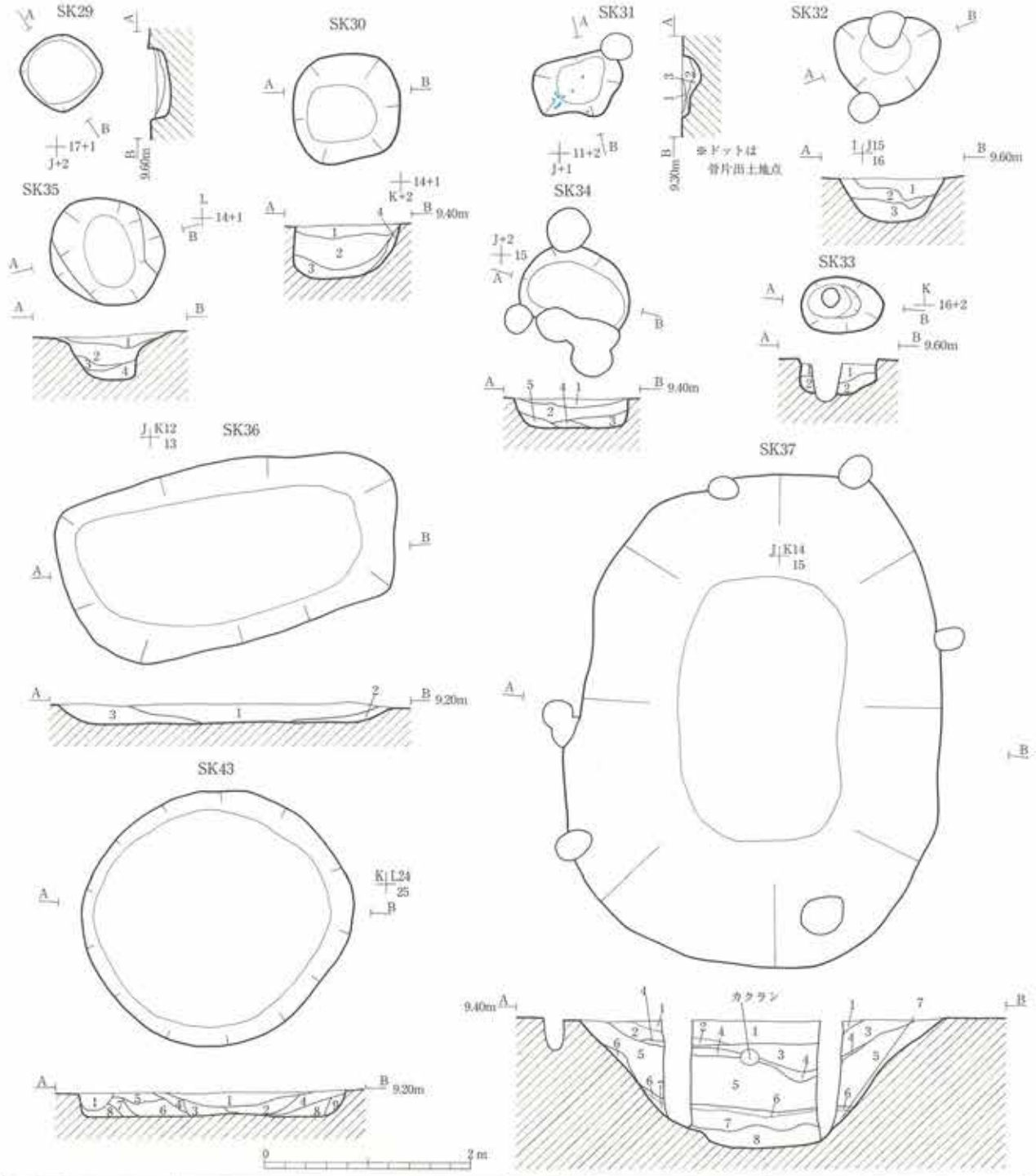




遺構	No.	土色	土性	備考
SK16	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐色土、黄褐色土を小ブロック状に含み、石を少量含む
SK17	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む
	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
SK18	1	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	にぶい黄橙色土を極少量含み、炭化、整化物を含む、土器を多く含む
SK19	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、黄褐色土を小ブロック、焼土塊を含む
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	黄褐色土粒を縞状に含む炭化物あり、しまりややあり、粘性あり
	4	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物若干あり、しまりややあり、粘性あり
SK20	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	炭化物、焼土ブロック、骨片を含む
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、骨片を多く含む、焼土を少量含む
	3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	炭化物、焼土粒、骨片を少量含む
SK21	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	にぶい褐色（10YR5/3）シルトブロック、焼土塊（焼けた粒）、炭化物を含む、しまりややあり
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む、粘性ややあり
	3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を含む、粘性あり
SK22	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、骨片を多く含む、しまりあり
	2	黒色（7.5YR1.7/1）	粘土質シルト	炭化物層、炭化物、骨片を多く含む、粘性あり
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物若干あり、しまり、粘性あり

遺構	No.	土色	土性	備考
SK23	1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	炭化物、焼土、焼礫片多く含む
SK24	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土含む、粘性あり
	2	褐灰色（10YR4/1） 黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物、焼土塊多く含む、粘性あり
	3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	粘性あり
SK25	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土含む、粘性あり
	2	黒褐色（10YR3/1） 褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物を多く、焼土含む、しまりややあり、粘性ある
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物含む、粘性あり
	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物含む、しまり、粘性ややあり
SK26	1	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、灰、多く含む、粘性ややあり
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、焼土少量含む、しまり、粘性ややあり
	3	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物、灰少量含む、しまり、粘性ややあり
SK28	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、焼土粒含む、しまりあり
	2	黒色（7.5YR1.7/1）	粘土質シルト	炭化物、焼土塊、骨片多く含む

第66図　II・III区　土坑（2）



遺構	No.	土色	土性	備考
SK29	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、焼土若干含む、粘性ややあり
	2	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄含む、粘性ややあり
SK30	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒含む、しまりあり
	2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化含、にぶい黄橙（10YR6/4）粘土質シルトブロックを含む、しまりややあり
	3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物含む、しまり、粘性ややあり
	4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物含む、しまり、粘性ややあり
SK31	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土、骨片含む、しまりあり
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土、骨片多く含む、しまりあり
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土少量含む、しまり、粘性ややあり
SK32	1	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土含む、しまりあり
	2	黄褐色（2.5Y5/3）	シルト	焼土、酸化鉄、しまり、粘性ややあり
	3	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土若干含む、しまり、粘性ややあり
SK33	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物、焼土、にぶい黄橙（10YR7/3）シルトブロックを含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2） 褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	炭化物若干含む、しまりややあり、粘性あり
SK34	1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	炭化物、焼土、しまりややあり。
	2	オリーブ褐色（2.5Y4/3）	シルト	炭化物、焼土粒、にぶい黄橙（10YR7/4）粘土質シルトブロックを含む、しまりややあり
	3	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、灰含む、粘性ややあり
	4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物、焼土粒含む
	5	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	炭化物、灰含む、粘性ややあり

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SK35		1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、焼土、しまり、粘性ややあり
		2	褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土多く含む、しまり、粘性ややあり
		3	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	炭化物、にぶい黄橙（10YR4/6）粘土を小ブロック含む
		4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭土質、にぶい黄橙（10YR4/6）粘土を含む、しまりややあり、粘性あり
SK36		1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物、焼土、2層、3層のブロックを含む
		2	黒色（7.5YR2/1）	シルト	炭化物・灰層
		3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土若干含む
SK37	1	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	暗黄褐（10YR3/4）シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土、少量含む
		2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物、灰多量に含む
	2	3	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に少量含む
	3	4	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物、灰多量に含む、暗黄褐（10YR3/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり
	4	5	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	炭化物、にぶい黄橙（10YR6/4）シルトをブロック状に多く含む、粘性ややあり
	5	6	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物、灰を多量に含む、粘性ややあり
		7	黒褐色（2.5YR3/1）	粘土	木片を含む、にぶい黄橙（10YR6/4）シルトを小ブロック状に含む、粘性ややあり、木材片出土
	6	8	褐灰色（10YR4/1）	砂	
SK43		1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物粒含む、自然堆積層
		2	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物粒含む、人為的埋土
		3	黒色（2.5Y2/1）	シルト	炭化物粒含む、人為的埋土
		4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	人為的埋土
		5	明黄褐色（10YR6/8）	シルト	人為的埋土
		6	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	人為的埋土
		7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	人為的埋土
		8	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	人為的埋土
		9	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	壁の崩落土、人為的埋土

第67図　II・III区　土坑（3）

整な円形である。深さは27cmである。堆積土は単層である。壁は底面からやや急角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK17土坑

D・E－13グリッドで確認した。ピット、小溝状遺構群と重複しており、ピットより古く、小溝状遺構群より新しい。平面形は1.2m×0.8mの隅丸長方形である。深さは17cmである。堆積土は2層確認された。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。遺物は土器片が出土した。

SK18土坑

F－15グリッド、SI14竪穴住居跡床面で確認した。SI14竪穴住居跡より本遺構が古い。SI14竪穴住居跡周溝によって削平され、南側は残存しない。平面形は0.75m×0.45m以上の円形を基調としたものであると考えられる。深さは26cmである。堆積土は単層である。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は中央が低いすり鉢状になっている。遺物は堆積土中から土師器、須恵器が出土しており、土師器坏、須恵器長頸壺を図示した。

SK19土坑

J－16・17グリッドで確認した。平面形は1.15m×0.75mの長方形である。深さは24cmである。堆積土は4層に分けられ、炭化物、焼土が含まれる。遺物は出土しなかった。

SK20土坑

H－14・15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.7m×0.55mの不整な楕円形である。深さは18cmである。壁は底面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分もある。壁は火熱を受けて赤変し焼け締まっている部分がある。堆積土は3層確認されたが、焼土ブロック、炭化物、骨片を多量に含んでいる。底面はほぼ平坦であるが、東側が低くなっている。骨片以外の遺物は出土しなかった。

SK21土坑

H－14グリッドで確認した。SD7溝跡、ピットと重複しており、ピットより古く、SD7溝跡より新しい。平面形は1.1m×0.8mの不整楕円形である。深さは北側で35cm、南側で15cmと北側が深い。壁は北側は底面から急角度で立ち上がるが、南側は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層確認された。炭化物、焼土が含まれる。底面には約15cmの段があり、南側が高い。遺物は出土しなかった。

SK22土坑

I－15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.75m×0.75m以上の不整な円形を基調としたものと考えられる。深さは15cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は3層確認された。1、2層には炭化物、焼けた骨片が多量に含まれる。底面の中央が幅30cm、深さ6cmの溝状に一段低くなっている。堆積土中に多量の焼土は含まれるが壁や底面は火熱を受けて赤変したり、焼け締まった部分は見られない。骨片以外の遺物は確認面で陶器の皿が出土した。

SK23土坑

K－15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.7m×0.5mの楕円形である。深さは17cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。壁は火熱を受け、焼け締まっている部分がある。堆積土は2層確認されたが、2層には焼土、壁の焼けた破片、炭化物が多量に含まれ、少量ではあるが骨片が含まれる。底面は平坦である。壁同様火熱を受け、焼け締まっている部分がある。骨片以外の遺物は出土しなかった。

SK24土坑

K－15・16グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.85m×0.5mの隅丸長方形である。深さは24cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、急角度で立ち上がる部分もある。堆積土は3層確認された。炭化物、焼土塊を含んでいる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK25土坑

K－15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.95m×0.8mの不整な楕円形である。深さは30cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は4層確認された。炭化物、焼土が含まれる。底面は凸凹はないが中央が低いすり鉢状になっている。遺物は出土しなかった。

SK26土坑

L－15グリッドで確認した。SD14溝跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は0.95m×0.8mの楕円形である。深さは20cmである。壁は底面から急角度で立ち上がるが、緩やかに立ち上がる部分もある。堆積土は3層確認された。炭化物、焼土、灰が含まれる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK28土坑

I－16グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.1m×0.8mの隅丸長方形を基調としたものと考えられる。深さは29cmである。壁は底面から急角度で立ち上がり、火熱を受けて赤変市堅く焼け締まった部分がある。堆積土は2層確認された。炭化物、焼土が含まれ、特に2層には焼土塊、多量の骨片が含まれる。底面は平坦だが、中央は幅30cm前後、深さ10cmの溝状に深くなっている。底面は火熱を受け、焼け締まった部分は見られない。骨片以外の遺物は出土しなかった。

SK29土坑

J－16・17グリッドで確認した。平面形は一辺0.7mの隅丸方形である。深さは18cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK30土坑

K－13・14グリッドで確認した。平面形は1.1m×1.05mの隅丸方形である。深さは55cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は4層確認された。炭化物が多量に含まれる。底面は平坦である。遺物は土器片が出土した。

SK31土坑

J－11グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.9m×0.55mの隅丸長方形であるが、南壁に張出す部分がある。深さは20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は3層確認された。炭化物、焼土が含まれ、特に2層には骨片が多量に含まれる。底面は北側が深く、南側から張出部にかけて浅くなっている。壁、底面共に火熱を受けて焼け締まった部分は見られない。骨片以外の遺物は出土しなかった。

SK32土坑

I・J－15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.0m×0.9m以上の不整な円形を基調としたものであると考えられる。深さは46cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は3層確認された。炭化物、焼土が含まれる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK33土坑

J－16グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.8m×0.55mの楕円形である。深さは37cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。炭化物、焼土が多量に含まれる。底面は平坦であるが東側に傾斜している。遺物は出土しなかった。

SK34土坑

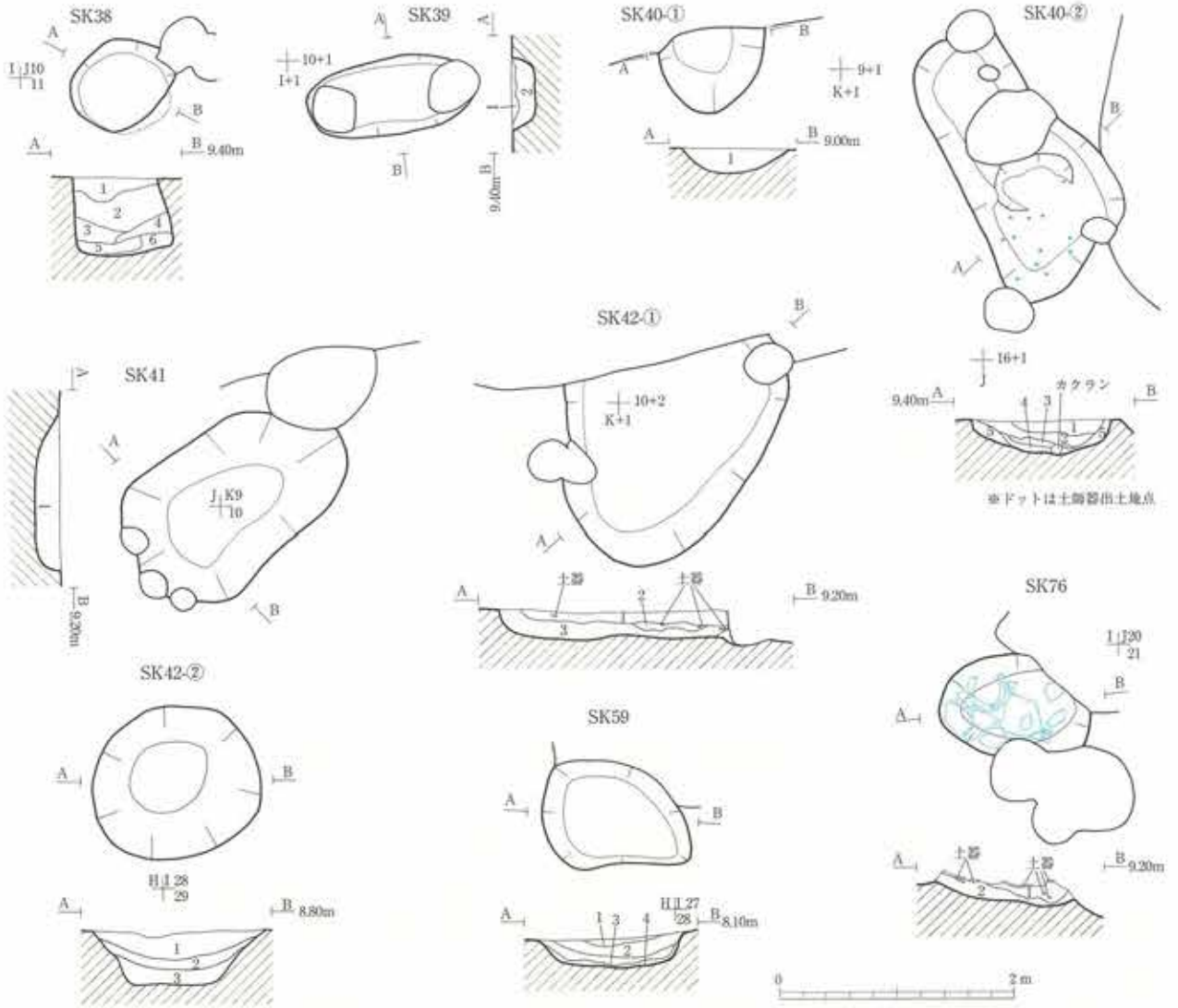
J－14・15グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.1m×0.7m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは30cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は5層確認された。炭化物、焼土が含まれる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK35土坑

K－14グリッドで確認した。平面形は1.15m×1.1mの不整な円形である。深さは45cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は4層確認された。炭化物、焼土が含まれる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK36土坑

J・K－13グリッドで確認した。SD7溝跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は3.35m×1.8mの隅丸長方形である。深さは30cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層確認された。底面は平坦である。遺物は剥片石器、礫石器が出土した。



遺構	No.	土色	土性	備考
SK38	1	褐色（10YR4/4）	シルト	灰黄褐色（10YR4/2）シルト、炭化物、焼土粒ブロックを含む、しまりややあり
	2	褐色（7.5YR4/4）	シルト	暗褐（10YR3/3）シルト暗降り、焼土粒、若干含む、しまり、粘性ややあり
	3	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒若干含む、粘性あり
	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	炭化物含む、しまりややあり
	5	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト質粘土	炭化物、焼土粒若干含む、粘性あり
	6	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘土質シルト	炭化物若干含む、しまり、粘性ややあり
SK39	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	しまりややあり
	2	オリーブ褐色（2.5Y4/3）	シルト	炭化物若干含む、しまりややあり
		黄褐色（2.5Y5/4）		
SK40-①	1	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物、焼土ブロックを多く含む
SK40-②	1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む、しまりあり
	2	オリーブ褐色（2.5Y4/3）	シルト	炭化物粒、灰白色火山灰を含む
	3	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	多量の炭化物、焼土を含む、粘性あり
	4	暗灰黄色（10YR4/2）	シルト	炭化物粒、焼土粒を少量含む、粘性ややあり
	5	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘土質シルト	炭化物少量含む、しまり、粘性ややあり

遺構	No.	土色	土性	備考
SK41	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	明黄褐（10YR7/6）シルトをブロック状に多く含む、炭化物を少量含む
SK42-①	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物、酸化鉄を含む、しまりややあり
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、焼土を多量に含む部分がある
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物、にぶい黄褐（10YR5/4）粘土質シルト小ブロックを含む
SK42-②	1	黒色（2.5GY2/1）	粘土	
	2	暗緑灰色（7.5GY3/1）	粘土	オリーブ灰（7.5GY5/1）粘土粒混入多い
	3	緑灰色（7.5GY5/1）	粘土	地山ブロックを含む
SK59	1	オリーブ灰色（5GY2/1）	粘土質シルト	
	2	暗緑灰色（10G3/1）	粘土質シルト	
	3	暗オリーブ灰色（5GY3/1）	粘土質シルト	
	4	暗緑灰色（10G4/1）	粘土質シルト	地山ブロックを含む
SK76	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	褐（10YR4/4）シルトの小ブロックを含む、［暗褐（10YR3/4）土ににぶい黄褐（10YR4/3）粒含む］土器多く含む
	2	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）に暗褐（10YR3/4）粒を含む

第68図　II・III区　土坑（4）

SK37土坑

Ｊ・Ｋ－14～12グリッドで確認した。ピット、SK23・34土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は4.8m×3.65mの楕円形である。深さは1.15mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、全体にすり鉢状になっている。堆積土は大別６層確認された。水分が多く、木材、木片等植物遺体が含まれる。底面に凸凹はないが、中央がやや低くなっている。遺物は陶磁器、木製品、漆製品、砥石等の石製品、根固石と考えられる二面に使用痕のある礫、古銭等が出土した。

SK38土坑

Ｊ－10・11グリッドで確認した。小溝状遺構群、ピットと重複しており、小溝状遺構群より新しく、ピットより古い。平面形は上端が東西0.8m×南北0.7mの不整楕円形で、下端が径0.7mの円形となっている。深さは66cmで壁は急角度で立ち上がるが、東壁はオーバーハングしている。堆積土は６層確認されており、炭化物・焼土粒を含んでいる。底面は平坦である。遺物は土師器、須恵器が出土した。

SK39土坑

Ｉ－10グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。両端がピットによって削平されており、全体の平面形は不明であるが、東西1.3m以上×南北0.7mの楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは19cmで壁は急角度で立ち上がる。堆積土は２層確認されている。底面は平坦である。遺物は土師器、須恵器が出土した。

SK40-①土坑

調査時ＳＫ40土坑の番号を二つの土坑に付けてしまったため、それぞれ①、②とし、本遺構は①としたものである。Ｋ－９グリッドで確認した。SI27竪穴住居跡、SK41土坑と重複しており、本遺構が新しい。遺構北側は調査区外に延びており、既に削平されているため遺構全体は不明であるが、平面形は0.9m×0.75m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。炭化物、焼土ブロックが含まれる。底面は中央が低く、すり鉢状になっている。遺物は砥石が出土した。

SK40-②土坑

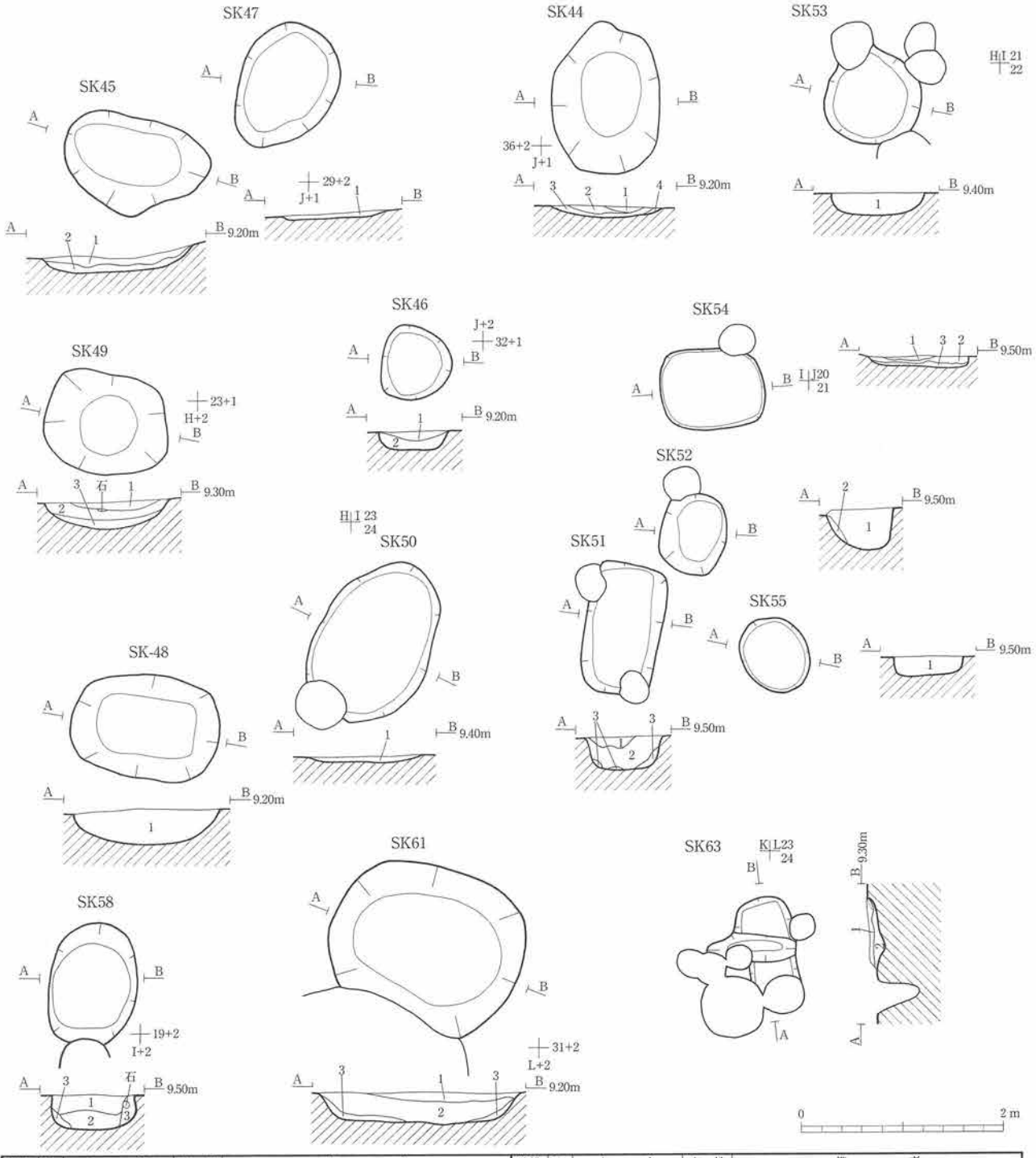
調査時SK40土坑の番号を二つの土坑に付けてしまったため、それぞれ①、②とし、本遺構は②としたものである。Ｉ・Ｊ－15・16グリッドで確認した。SK32・37土坑、小溝状遺構群、ピットと重複しており、小溝状遺構群より新しく、ピットより古い。平面形は東西2.4m×南北1.25mの不整な隅丸長方形である。深さは27cmで壁は緩やかな角度で立ち上がる。堆積土は５層確認され、炭化物・焼土とともに、灰白色火山灰が含まれている。底面は凸凹があり、中央に６cmの段差がみられる。遺構検出面で、土師器坏が12点まとまって出土した。

SK41土坑

Ｊ・Ｋ－９・10グリッドで確認した。SI27竪穴住居跡、SK40-①土坑、ピットと重複しており、本遺構はSI27竪穴住居跡より新しく、SK40-①土坑、ピットより古い。平面形は2.1m×1.3mの不整な楕円形である。深さは20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層であるが、人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は礫石器が出土した。

SK42-①土坑

調査時SK42土坑の番号を二つの土坑に付けてしまったため、それぞれ①、②とし、本遺構は①としたものである。Ｋ－11・12グリッドで確認した。SI26・28竪穴住居跡、ピットと重複しており、本遺構が最も古い。全体の平面形は不明であるが、東西1.95m×南北1.75m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは20cmで壁は緩やかな角度で立ち上がる。堆積土は３層確認され、炭化物・焼土を含む部分がある。底面は平坦である。遺物は土師器、石製品が出土した。



遺構	No.	土色	土性	備考
SK44	1	黒色（10YR2/1）		灰層、焼土粒多量に含む、煙管の雁首出土
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	木炭、焼土粒含む、しまりあり
	3	黒褐色（10YR3/1）		灰層、焼土粒多量に含む
	4	褐色（10YR6/4）	シルト	壁崩落土
SK45	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物わずかに含む、酸化鉄、マンガン粒含む、しまりあり
	2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	酸化鉄含む
SK46	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物、マンガン粒含む、しまりあり
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	
SK47	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物わずかに含む、酸化鉄、マンガン粒含む、しまりあり
SK48	1	黒褐色（10YR3/2） 明黄褐色（10YR6/8） にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	人為的埋土
SK49	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物多量に含む、にぶい黄褐（10YR4/3）シルトのブロックを含む
	2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物、灰を含む
	3	黒色（10YR2/1）	シルト	炭化物含む、上層より灰を多く含む
SK50	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物粒を含む
SK51	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	人為的埋土
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	人為的埋土
	3	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	人為的埋土

遺構	No.	土色	土性	備考
SK52	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトのブロックを含む、炭化物粒を含む
	2	明黄褐色（10YR6/8）	シルト	暗褐（10YR3/3）シルトの小ブロック、灰黄褐（10YR6/2）シルトのブロックを含む、人為的埋土
SK53	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物粒を含む、人為的埋土
SK54	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物粒を含む、人為的埋土
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂質シルト	人為的埋土
	3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	人為的埋土
SK55	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物粒を含む、灰黄褐（10YR5/2）シルトのブロックを含む
SK58	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物粒、にぶい黄褐（10YR5/3）シルトのブロックを含む、人為的埋土
	2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物粒を含む、人為的埋土
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物、マンガン粒含む、人為的埋土
SK61	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黄褐（10YR5/8）シルト、暗褐（10YR3/3）シルトのブロックを含む（志野の皿／完形出土）
	2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	灰黄褐（10YR5/2）砂質シルト、黒褐（10YR3/2）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを含む、人為的埋土
	3	黒褐色（10YR2/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトのブロックを含む、人為的埋土
SK63	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	焼土ブロックを多く含む、にぶい黄橙（10YR6/4）の小ブロックを含む、人為的埋土と考えられる
	2	黒色（10YR2/1）	シルト	炭化物、灰、骨片を多量に含む、底面は焼けて固くなっている部分がある

第69図　II・III区　土坑（5）

SK42②土坑

調査時SK42土坑の番号を二つの土坑に付けてしまったため、それぞれ①、②とし、本遺構は②としたものである。H・I－28グリッドで確認した。SD４堀跡と重複しており、本遺構が新しい。規模は1.45m×1.4mの円形である。深さは55cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、上端から15～20cmで傾斜が更に緩やかに変わる。堆積土は３層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK43土坑

K－24・25グリッドで確認した。SK70・71土坑、SD26溝跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は2.6m×2.5mの円形である。深さは31cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は９層確認された。１層は自然堆積層で、以下の層は人為的な堆積状況である。底面には細かい凸凹がある。遺物は出土しなかった。

SK44土坑

J－36グリッドで確認した。平面形は1.5m×1.05mの不整な楕円形である。深さは13cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は４層確認された。炭化物、灰が多量に含まれる。底面は平坦である。煙管の雁首が出土した。

SK45土坑

I・J－29グリッドで確認した。平面形は1.45m×１mの不整な楕円形である。深さは26cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層確認された。底面は平坦であるが、北西側が低くなっている。遺物は出土しなかった。

SK46土坑

J－32グリッドで確認した。平面形は0.75m×0.7mの不整な円形である。深さは19cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK47土坑

J－29グリッドで確認した。平面形は1.3m×0.95mの楕円形である。深さは13cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦であるが、西側が低くなっている。遺物は出土しなかった。

SK48土坑

H－24グリッドで確認した。平面形は1.45m×1.05mの隅丸長方形である。深さは35cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面から壁面にかけて薄い灰層が見られる部分があるが、人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK49土坑

H－23グリッドで確認した。平面形は1.2m×１mの不整な隅丸長方形である。深さは33cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。炭化物、灰が含まれる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK50土坑

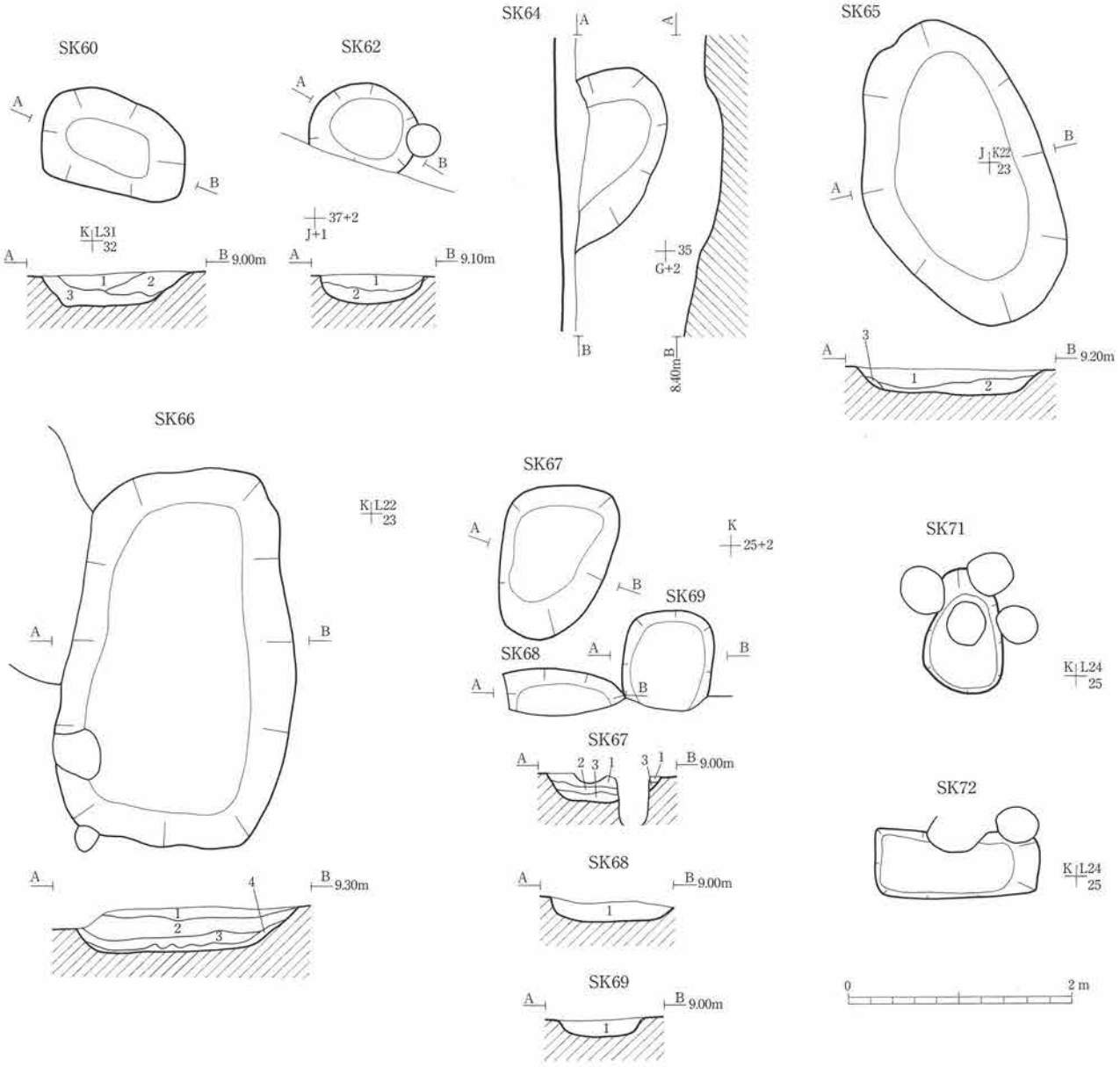
H・I－24グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.65m×1.15mの楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは８cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、浅い皿状になっている。堆積土は単層であるが、炭化物を含む。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK51土坑

I－21・22グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.3m×0.75mの隅丸長方形である。深さは32cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は３層確認された。人為的な堆積堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土していない。

SK52土坑

Ⅰ－21グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.8m×0.65mの楕円形である。深さは40cmである。壁は東側は底面から急角度で立ち上がるが、西側は緩やかに立ち上がる。堆積土は２層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は陶器の皿、土師質の焼塩壺、剥片石器が出土した。



遺構	No.	土色	土性	備考
SK60	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土質シルト、にぶい黄橙（10YR6/3）細砂をブロック状に含む
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐（10YR5/6）粘土質シルト、にぶい黄橙（10YR6/3）細砂をブロック状に含む
	3	黒褐色（10YR2/2）	シルト	褐（10YR4/4）粘土質シルト、灰黄褐（10YR4/2）細砂をブロック状に含む、炭化物多い
SK62	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄褐（10YR4/2）シルト、黄褐（10YR5/8）シルトのブロックを含む、人為的埋土
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	褐（10YR4/6）シルトのブロックを含む、人為的埋土
SK64	1	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	地山粒多量に含む、底面より漆器、皿出土、人為的埋土
SK65	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	
	2	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	黄褐（10YR5/8）地山粒混入多い
	3	黄褐色（10YR5/8）	シルト	壁の崩落土
SK66	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	オリーブ黒（7.5Y3/2）シルトブロックを含む、人為的埋土
	2	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト、暗オリーブ灰（5GY3/1）シルトの土のブロック含む、酸化鉄集積層を下面に層状に含む、人為的埋土、グライ化している
	3	暗オリーブ灰色（5GY3/1）	シルト	暗オリーブ灰（2.5GY4/1）の土をわずかに含む、人為的埋土、グライ化している
	4	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	細砂	暗オリーブ灰（5GY3/1）の土をわずかに含む、人為的埋土、グライ化している

遺構	No.	土色	土性	備考
SK67	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）		にぶい黄褐（10YR5/4）シルト（地山）ブロック、黒褐（2.5Y3/1）シルト（近世整地層）ブロックの混合
		黒褐色（2.5Y3/1）		
	2	にぶい黄色（2.5Y6/4）	細砂	
	3	にぶい黄色（10YR6/4）		にぶい黄褐（10YR5/4）シルト（地山）ブロック、黒褐（2.5Y3/1）シルト（近世整地層）ブロックの混合
		黒褐色（2.5Y3/1）		
SK68	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）		にぶい黄褐（10YR5/4）シルト（地山）ブロック、黒褐（2.5Y3/1）シルト（近世整地層）ブロックの混合
		黒褐色（2.5Y3/1）		
SK69	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）		にぶい黄褐（10YR5/4）シルト（地山）ブロック、黒褐（2.5Y3/1）シルト（近世整地層）ブロックの混合
		黒褐色（2.5Y3/1）		
SK71	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）		にぶい黄褐（10YR5/4）シルト（地山）ブロック、黒褐（2.5Y3/1）シルト（近世整地層）ブロックの混合
		黒褐色（2.5Y3/1）		
SK72	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物含む

第69図　Ⅱ・Ⅲ区　土坑（6）

SK53土坑

H－21・22グリッドで確認した。ピット、SD29溝跡と重複しており、ピットより古く、SD29溝跡より新しい。平面形は0.95m×0.95m以上の不整な円形を基調としたものであると考えられる。深さは22cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。炭化物が含まれるが人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK54土坑

I－20・21グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1m×0.8mの隅丸長方形である。深さは11cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は3層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK55土坑

I－21・22グリッドで確認した。平面形は0.75m×0.6mの楕円形である。深さは18cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は単層である。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK58土坑

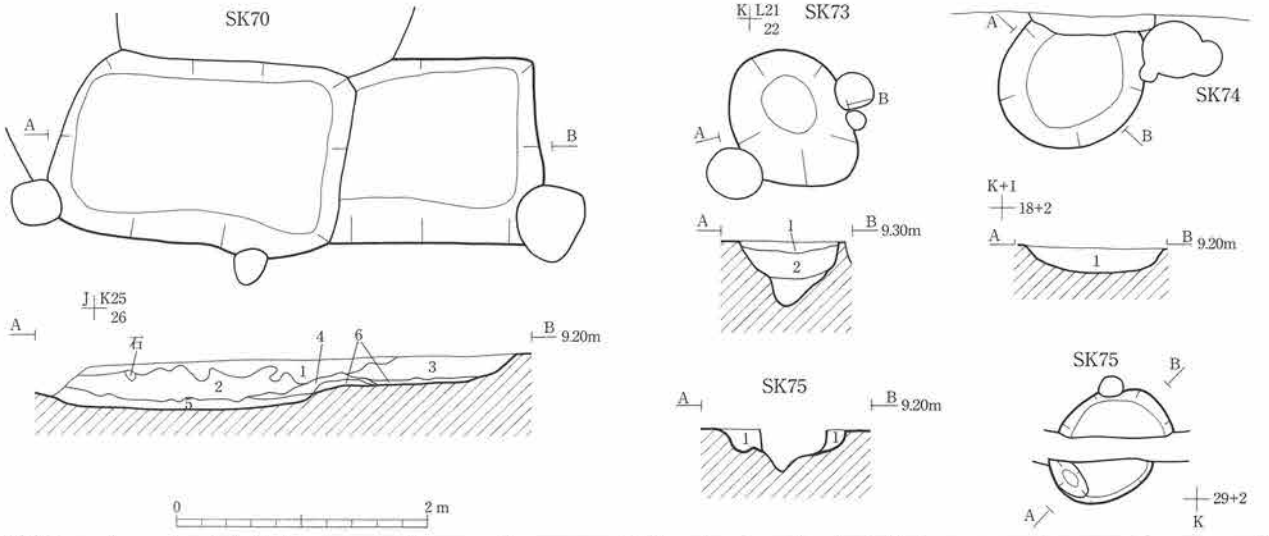
I－19グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は1.1m以上×0.85mの楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは38cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は3層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦であるが、壁面との境は丸みを持つ。遺跡は土器片が出土した。

SK59土坑

SD4堀跡を掘り下げる途中、H・I－27グリッドで確認した。SD4堀跡が埋まりきる前に掘り込まれたものと考えられる。平面形は1.15m×1mの不整な楕円形をである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は4層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK60土坑

K・L－31グリッドで確認した。SD23溝跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.35m×0.9mの楕円形で



遺構	No.	土色	土性	備考
SK70	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	ほとんどの土が整地層〔黄褐（10YR5/6）シルトブロック〕である、人為的埋土
	2	褐色（10YR4/6）	シルト	地山〔褐（7.5YR4/6）シルト〕、整地層〔灰黄褐（10YR4/2）シルト〕、〔黄褐（10YR5/6シルト〕のブロックを含む、人為的埋土
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	整地層〔黄褐（10YR5/6）〕〔灰黄褐（10YR4/2）〕シルトのブロックを含む、人為的埋土
	4	オリーブ黒（5Y3/1）	シルト	人為的埋土
	5	暗オリーブ灰（5GY3/1）	シルト	粘土質シルトと砂のブロックを含む、人為的埋土
	6	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山〔暗褐（10YR3/4）シルト〕のブロックを多く含む、人為的埋土

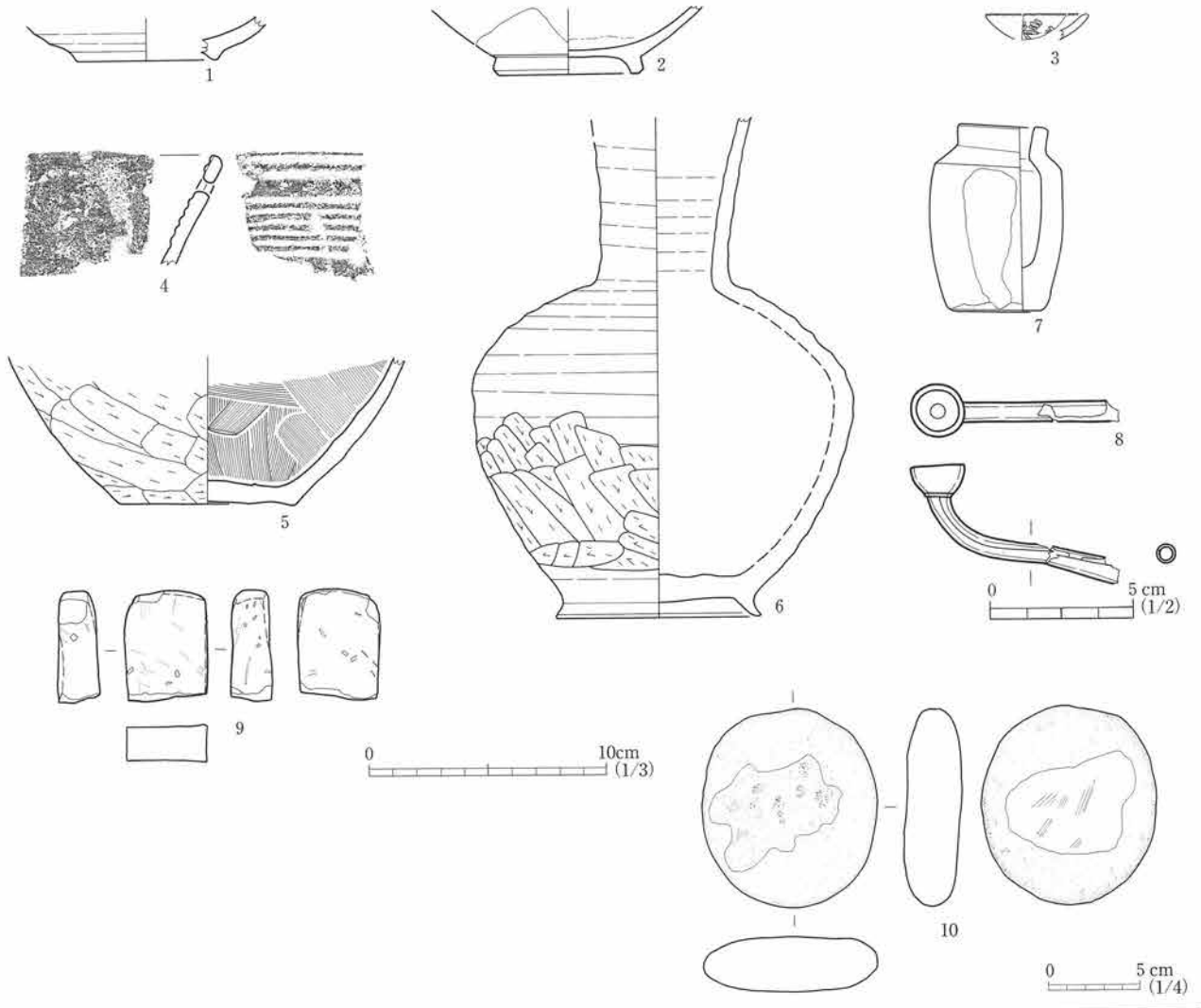
遺構	No.	土色	土性	備考
SK73	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐（10YR5/6）シルト、にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、オリーブ（5Y5/4）シルトのブロックを含む、人為的埋土
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	オリーブ褐（2.5Y4/3）黄褐（10YR5/8）、黒褐（10YR2/2）、シルトのブロックを含む、人為的埋土
SK74	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山粒が多量に含まれている、人為的埋土
SK75	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	焼土混入多い

第71図　II・III区　土坑（7）

ある。深さは32cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。人為的な堆積堆積状況である。底面は平坦である。遺物は土師質土器が出土した。

SK61土坑

K・L－31グリッドで確認した。SD23溝跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.9m×1.45m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは31cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は陶器の皿、茶壺？が出土した。



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SK22 検出面	陶器	丸皿	志野 灰釉	美濃	16c末～17c初		5.8	(1.8)	367-4	I-369
2	SK36	陶器	皿	灰釉陶器 重ね焼跡 刷毛塗り	猿投			5.8	(2.8)	369-14	I-435
3	SK11 1層	磁気 白磁	紅猪口	型押し	肥前	18c か19c	4.4		(1.1)	376-8	J-85

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
4	SK58	縄文土器・深鉢	穿孔・ミガキ	沈線文		334-6	A-6

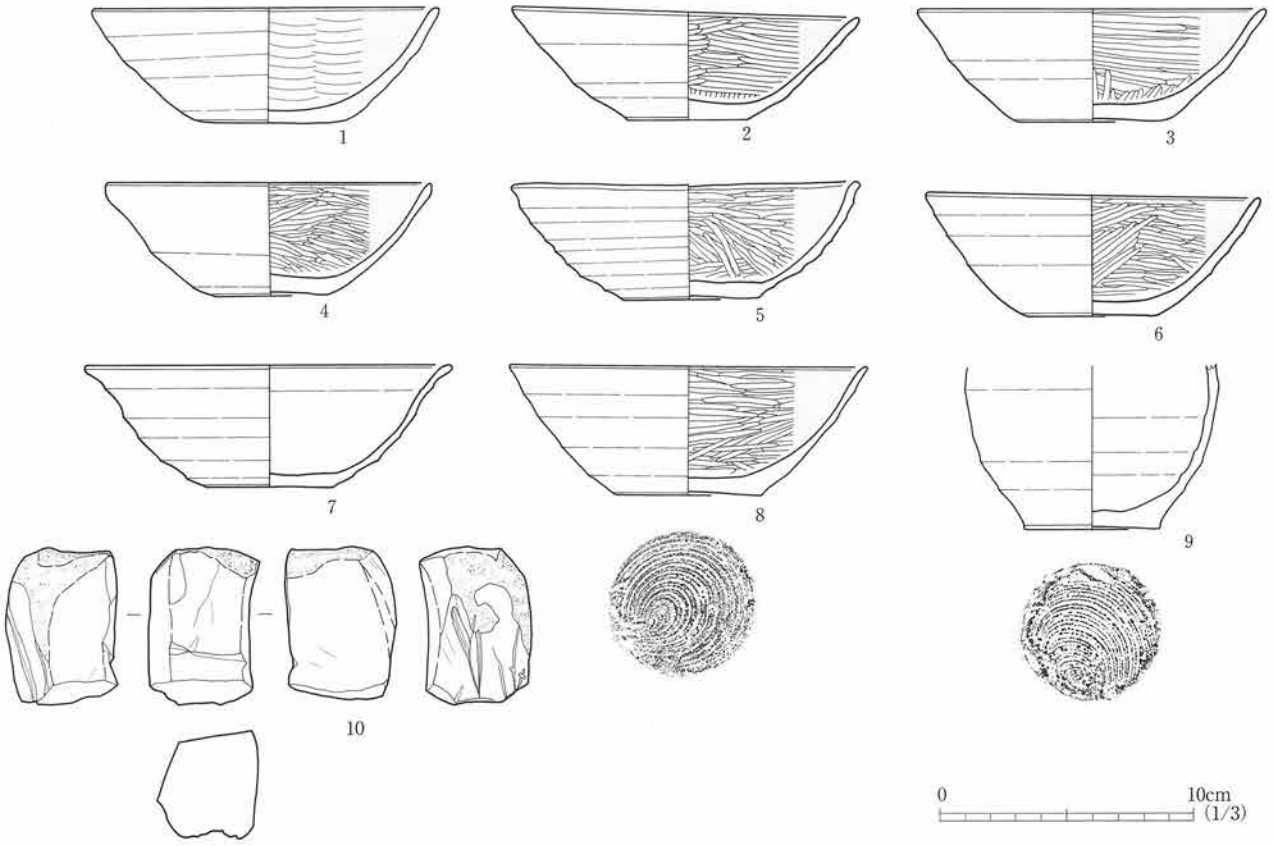
No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
5	SK18 1層	土師器・甕	ケズリ	ケズリ	ナデ・ヘラナデ		338-8	C-34
6	SK18 1層	須恵器・高台付長頸壺	ロクロナデ・ヘラケズリ	ナデ	ロクロナデ	自然釉	342-13	E-8

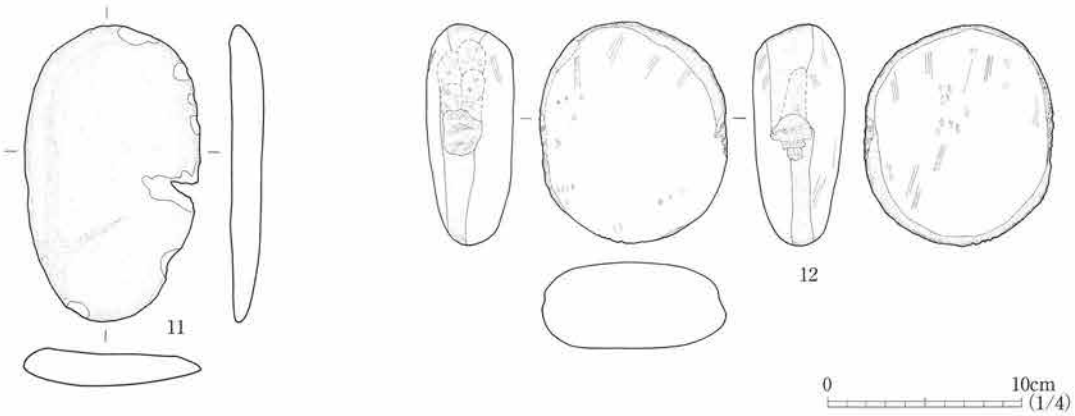
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
7	SK52	土師質土器	壺	小型壺 内面に墨付着？	在地	江戸時代	3.7	4.0	8.0	344-7	Ca-16

No.	遺構・層位	種別	特徴	全長(cm)	火皿径(cm)	羅宇口径(cm)	吸口(cm)	写真図版	登録番号
8	SK44 1層	雁首	補強帯有。全体に寒食が著しい。羅宇口付近は欠損がひどく下方に折れ曲がっている	(5.7)	1.3	(0.5)		431-17	Nb-19

No.	遺構・器種	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	登録番号
9	SK52	砥石	4.7	4.5	1.8	50.5	デイサイト質凝灰岩		425-9	Kd-58
10	SK12	凹石・磨石	11.1	9.7	3	560	安山岩		420-5	KC-24

第72図 II・III区 土坑出土遺物（1）





No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-12	D-27
2	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-2	D-50
3	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-3	D-51
4	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-15	D-48
5	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-14	D-47
6	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-1	D-49
7	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		341-4	D-52
8	SK40	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-13	D-46
9	SK32	土師器・甕	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			D-25

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
10	SK40	砥石	6.3	4.4	4.4	178	デイサイト質凝灰岩		426-3	Kd-67
11	SK42	石皿	15.6	9.3	1.6	250	デイサイト質凝灰岩		420-10	KC-30+31
12	SK41　検出面	磨石・敲石	11.7	9.7	4.6	815	デイサイト		420-7	KC-27

第73図　II・III区　土坑出土遺物（2）

SK62土坑

Ｊ－37グリッドで確認した。南側の調査区外に延びているため、遺構の全体は不明である。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は１ｍ×0.7ｍ以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは27cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は２層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦であるが、壁面との境は丸みを持つ。遺物は出土しなかった。

SK63土坑

Ｋ・Ｉ－23グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は0.8m以上×0.55mの隅丸長方形を基調としたものであると考えられる。西側に20cm以上の幅で25cmの張出がある。深さは18cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は２層確認された。１層は焼土を含んでいるが、人為的な堆積状況である。２層は炭化物、灰、骨片を多量に含んでいる。底面は平坦であるが、中央が幅25cm、深さ10cmの溝状に深くなり、張出部に続いている。底面から壁面にかけて、火熱を受けて赤変しており、堅く焼け締まっている部分がある。張出部分は煙出しであると考えられる。骨片以外の遺物は出土しなかった。

SK64土坑

Ｇ－34グリッドで確認した。SD２溝跡、SD３堀跡と重複しており、SD２溝跡より古く、SD３堀跡より新しい。平面形は1.6ｍ×0.7ｍ以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは44cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は漆器の皿が出土した。

SJ65土坑

Ｊ・Ｋ－22・23グリッドで確認した。SK66土坑と重複しており、本遺構が新しい。平面形は2.85ｍ×1.7ｍの不整な楕円形である。深さは33cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。底面は平坦である。遺物は中国産の青磁片が出土した。

SK66土坑

Ｋ－22～24グリッドで確認した。SK65土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は3.45ｍ×2.1ｍの隅丸方形である。深さは38cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は４層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は煙管の吸口と雁首が出土した。

SK67土坑

Ｊ－25グリッドで確認した。ピット、SD27溝跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.4ｍ×１ｍの不整な楕円形である。深さは28cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。人為的な堆積堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK68土坑

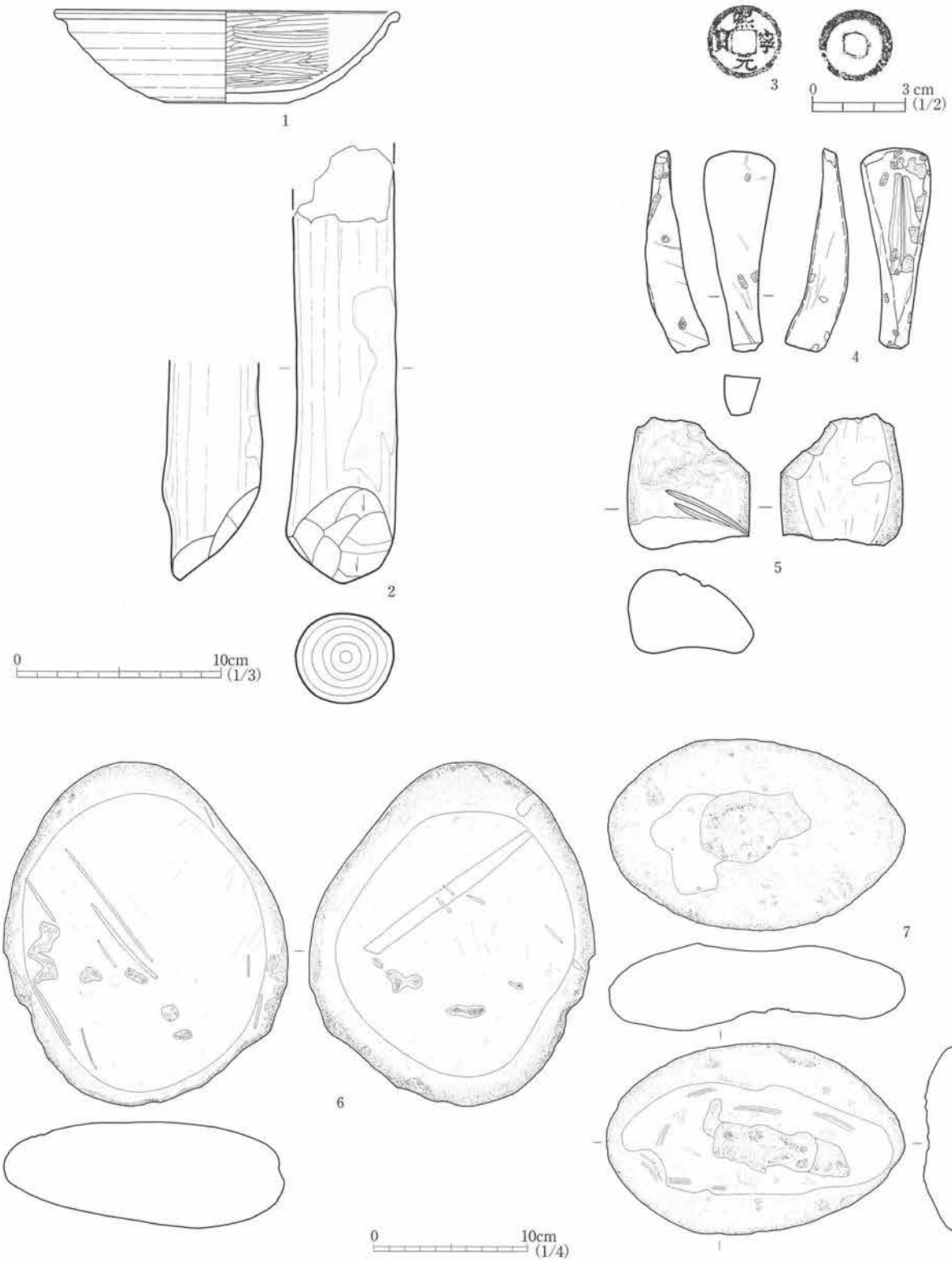
Ｊ－26グリッドで確認した。SD４堀跡、SD22溝跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.05m以上×0.4m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは19cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK69土坑

Ｊ－25・26グリッドで確認した。SD４堀跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は0.9m以上×0.8mの隅丸長方形を基調としたものであると考えられる。深さは15cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK70土坑

Ｊ～Ｌ－25グリッドで確認した。ピット、SK43土坑、SD26溝跡と重複しており、本遺構が古い。平面形は3.95m以上×1.6m以上の隅丸長方形を基調としたものである。深さは35cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SK37	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-11	D-26

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
2	SK37 5種	加工木	下端部に加工痕あり、全長（21.7）幅5.3		404-3	Lc-73

No.	遺構・層位	種別	特徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
3	SK37 4層	銅製品 銭貨	熙寧元宝（宋） （初鋳年 1068年）	2.4	2.8	429-9	Na-9

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
4	SK37	砥石	10	3.4	2.1	65	デイサイト質凝灰岩		426-2	Kd-66
5	SK37	磨石	(6.5)	6.1	4.1	125	デイサイト質凝灰岩		420-6	KC-26
6	SK37	凹石・磨石	22.5	18.5	6.7	3,800	デイサイト		420-8	KC-28
7	SK37 5層	凹石・磨石	19.2	12.6	5.4	1,665	安山岩		420-9	KC-29

第74図　II・III区　土坑出土遺物（3）

堆積土は6層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦であるが、東側が西側より15～20cm浅くなっている。遺物は出土しなかった。

SK71土坑

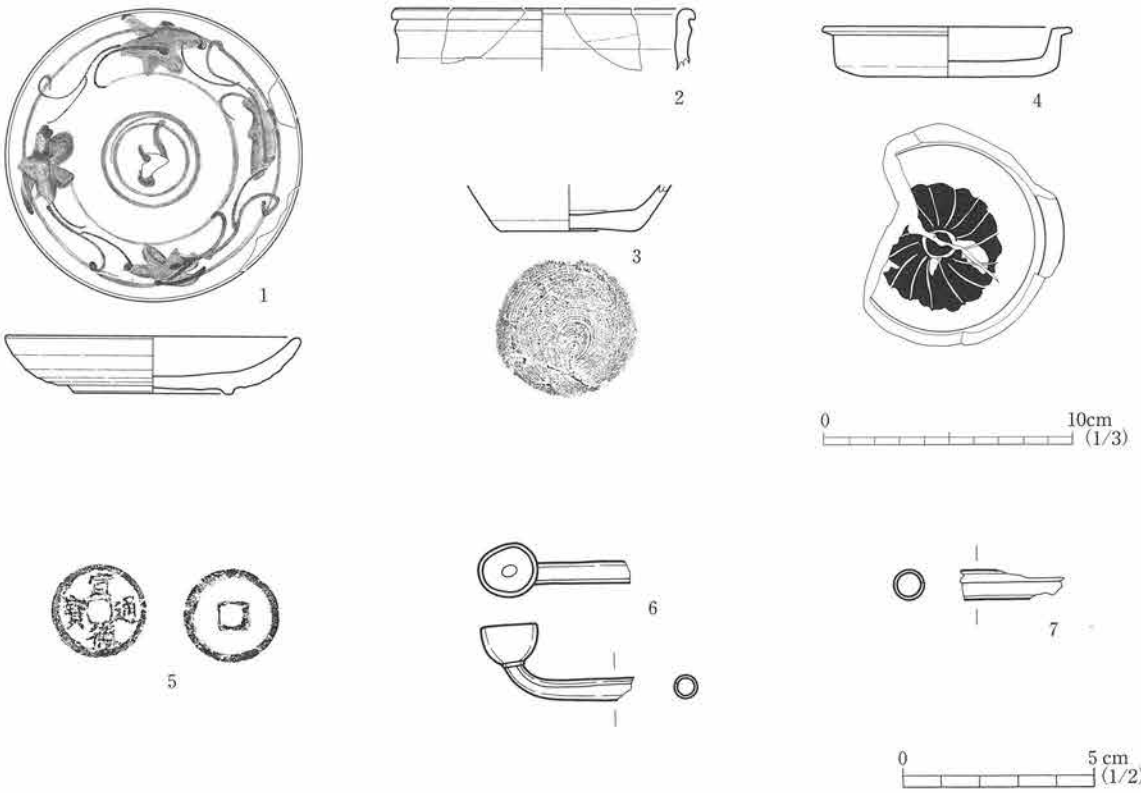
K－24・25グリッドで確認した。SK72土坑、ピットと重複しており、ピットより古く、ＳＫ72土坑より新しい。平面形は東西0.7m×南北1.15mの不整楕円形である。深さは21cmで壁は緩やかな角度で立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK72土坑

K－24・25グリッドで確認した。SK71土坑、ピットと重複しており、本遺構が古い。全体の平面形は不明であるが東西1.5m以上×南北0.6mの長方形を基調としたものであると考えられる。深さは21cmで壁は急角度で立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK73土坑

K・L－22グリッドで確認した。ピット、SD29溝跡と重複しており、ピットより古く、SD29溝跡より新しい。



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）		
1	SK61	陶器	皿	志野織部、長石釉、鉄釉で文様	美濃	17c前半	11.8	6.1	2.3	367-6	I-372
2	SK61	陶器	茶壺？	鉄釉（外面及び内面口縁部）古瀬戸	瀬戸	14cか15c	11.7		(2.5)	367-5	I-371
3	SK60	土師質土器	皿	底部回転糸きり、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代		5.4	(1.8)	343-13	Ca-6

No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	樹　種	写真図版	登録番号
4	SK64　1層	漆器　Ⅲ	口縁部はほぼ水平に鍔状に広がる、内外面黒色漆塗仕上げ、内面中央に赤色漆で文様（菊葉文）あり、文様は全体を漆で丸く塗った後に、針描きで花弁の輪郭を区画している、中央の花芯は暗赤色漆塗、口径10.0cm　底径7.0cm　器高2.0cm	ブナ属	389-1	La-62

No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
5	SK66	銅製品　銭貨	宣徳通宝（明）　（初鋳年1433年）	2.5	2.5	432-7	Na-63

No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口（径）	写真図版	登録番号
6	SK66　1層	雁首	腐食が著しい、　Nb18と同一か	(3.9)	1.5	(0.6)		433-15	Nb-17
7	SK66　1層	吸口	Nb17と同一か	(2.7)		(0.8)		433-16	Nb-18

第75図　II・III区　土坑出土遺物（5）

平面形は1.2m×0.8m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは43cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。人為的な堆積状況である。底面は平坦であるが、壁面との境は丸みを持つ。遺物は出土しなかった。

SK74土坑

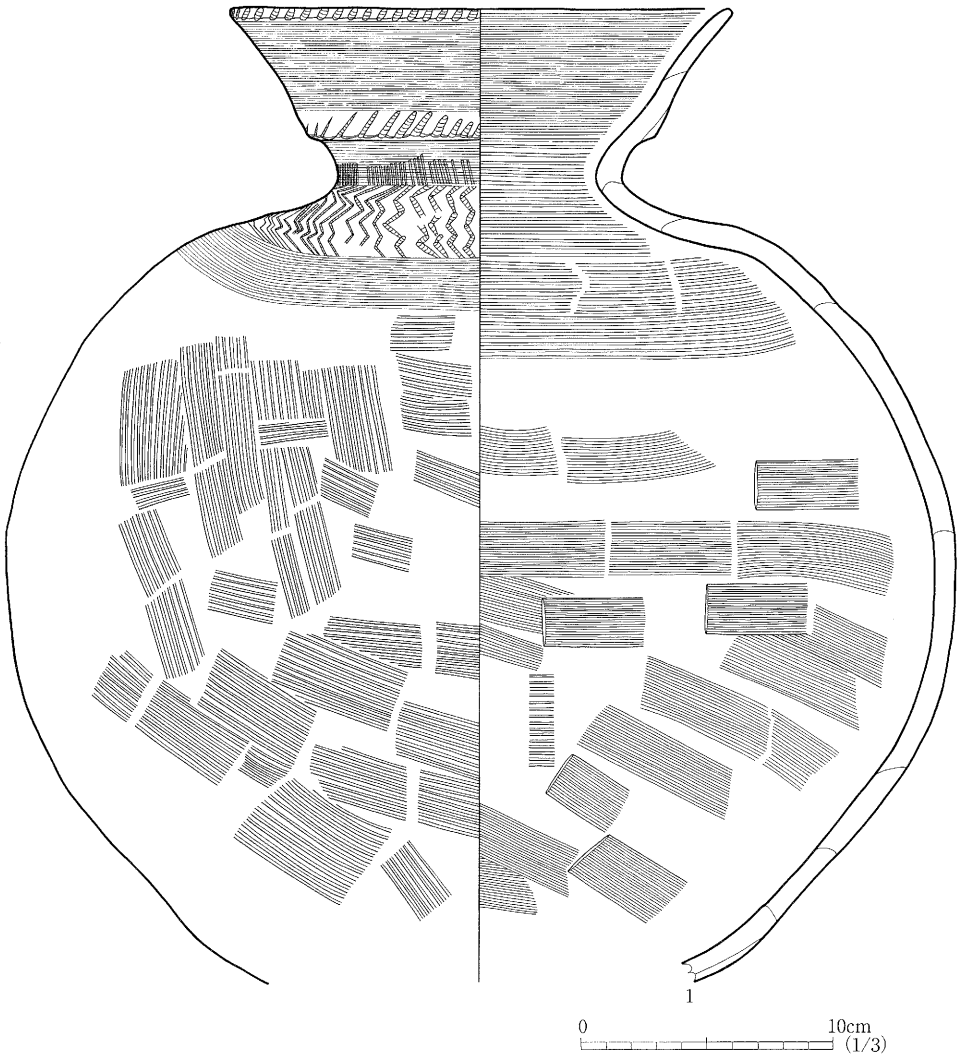
K－18グリッドで確認した。ピットと重複しており、ピットより古い。また、SX6性格不明遺構掘り下げ作業中に遺構が確認されたことから、SX6性格不明遺構より新しい。平面形は1.1m×0.8m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは21cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。人為的な堆積状況である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK75土坑

J－29グリッドで確認した。小溝と重複しており、本遺構が古い。平面形は1.05m×0.8mの楕円形である。深さは20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦であるが南端が浅く凹んでいる。遺物は出土しなかった。

SK76土坑

I－21グリッドで確認した。V層に掘り込まれたものであるが、確認面が掘り込み面より下がってしまい、遺構内部の遺物が堆積土の上に浮いた状態で検出された。小溝状遺構群、ピットと重複しており、本遺構が古い。全体



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SK76 1層	土師器・壺	キザミ・ヨコナデ・ハケメ・刺突文	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ヘラナデ		338-1	C-40

第76図 II・III区 土坑出土遺物（4）

の平面形は不明であるが東西1.3m×南北0.9m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは10cmで残存状況は良くない。壁は緩やかな角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。Ⅴ層・Ⅵ層のブロック・土粒を含んでいる。底面はやや凸凹がみられる。出土遺物には土師器の一括資料がある。大型の壺である。Ⅴ層上面からの畑の耕作によって横倒しに潰れて動いたものと思われ、上にⅤ層が乗っている状態であった。この土師器壺1点を図示した。

溝跡

SD11溝跡

G－18～20グリッドで確認した。ピット、小溝と重複しており、本遺構が古い。確認した長さは4mであるが、2mに渡って削平により途切れている。方向はN－0°－Eである。上幅は20cmで、深さは7cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD15溝跡

B～D－21グリッドで確認した。小溝、SK13土坑、ピットと重複しており、本遺構が古い。確認した長さは3.6mで、方向はE－0°－Nである。西側の調査区外に延びている。上幅は80～90cmで、深さは22～25cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層確認された。底面はほぼ平坦であり、傾斜は見られない。遺物は出土しなかった。

SD19溝跡

F・G－21・22グリッドで確認した。小溝、SI17竪穴住居跡と重複しており、本遺構が古い。確認した長さは3mで、SI17竪穴住居跡から東へ延びている。方向はE－0°－Nである。平成4年度の調査区で確認したが、東側の平成6年度の調査区では検出されなかった。上幅は70～85cmで、深さは6～12cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面はほぼ平坦であるが、やや東へ傾斜している。規模と確認した位置関係からSD15溝跡との関係が考えられる。遺物は出土しなかった。

SD26溝跡

J・K－24・25グリッドで確認した。ピット、SK43土坑、SD27溝跡と重複関係にあり、SD27溝跡より新しく、他の遺構より古い。確認した長さは3.4mで、方向はN－10°－Eである。上幅は40～95cmで、南側が広い。深さは17～26cmで南側が深い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD27溝跡

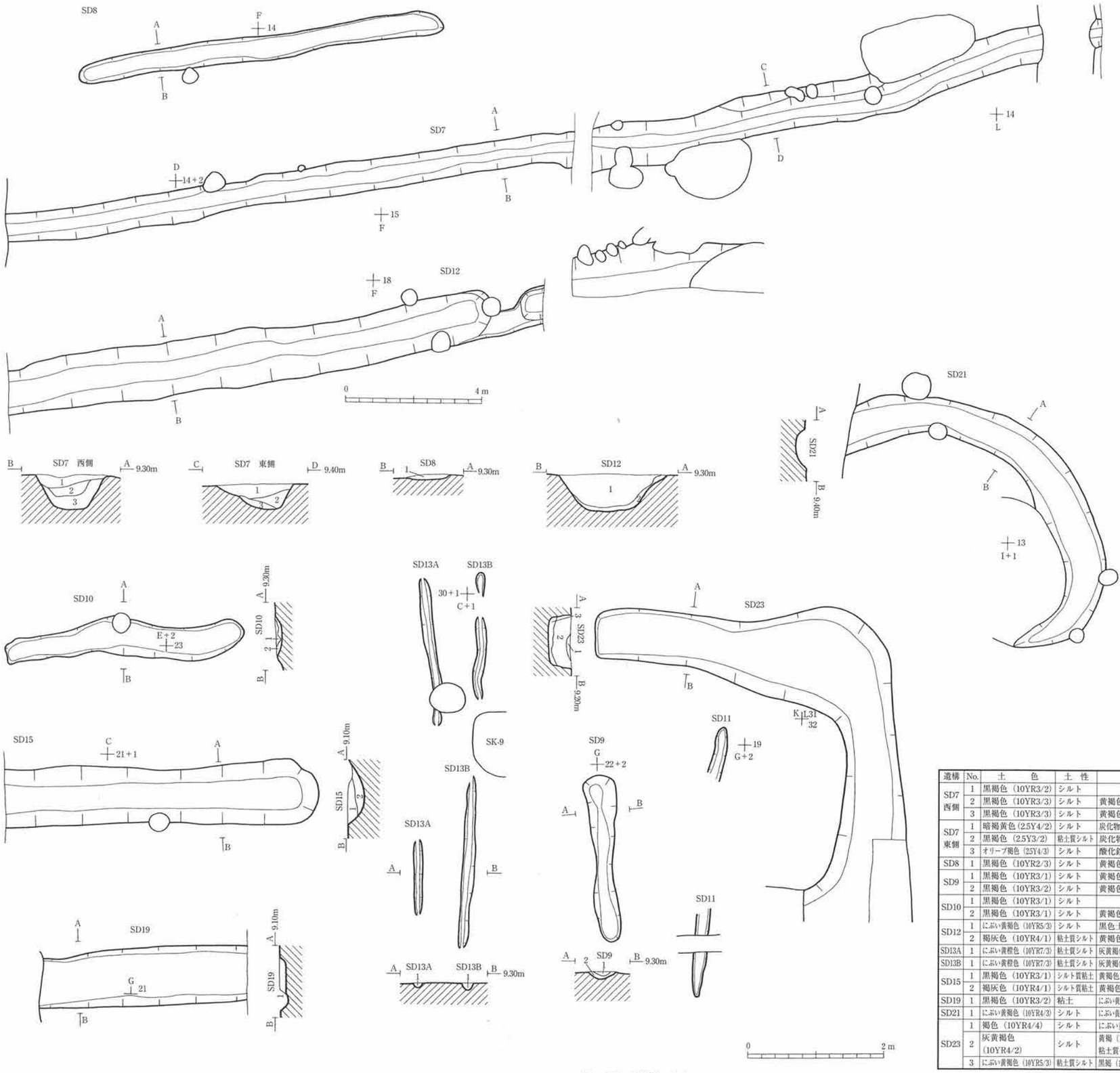
J・K－24・25グリッドで確認した。SD4堀跡、SK67・68土坑、SD26溝跡と重複関係にあり、SK67・68土坑より新しく、他の遺構より古い。確認した長さはSD4堀跡から北へ2.1m、更に東へ1.25mである。上幅は20～30cmである。深さは6～10cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD28溝跡

G～J－23・24グリッドで確認した。ピットと重複しており、本遺構が古い。平成3年度の調査区のG－23グリッド西半部では確認されていない。確認した長さは8.7mで、やや湾曲しているが、方向はE－20°－Sである。上幅は20～30cmである。深さは8～12cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

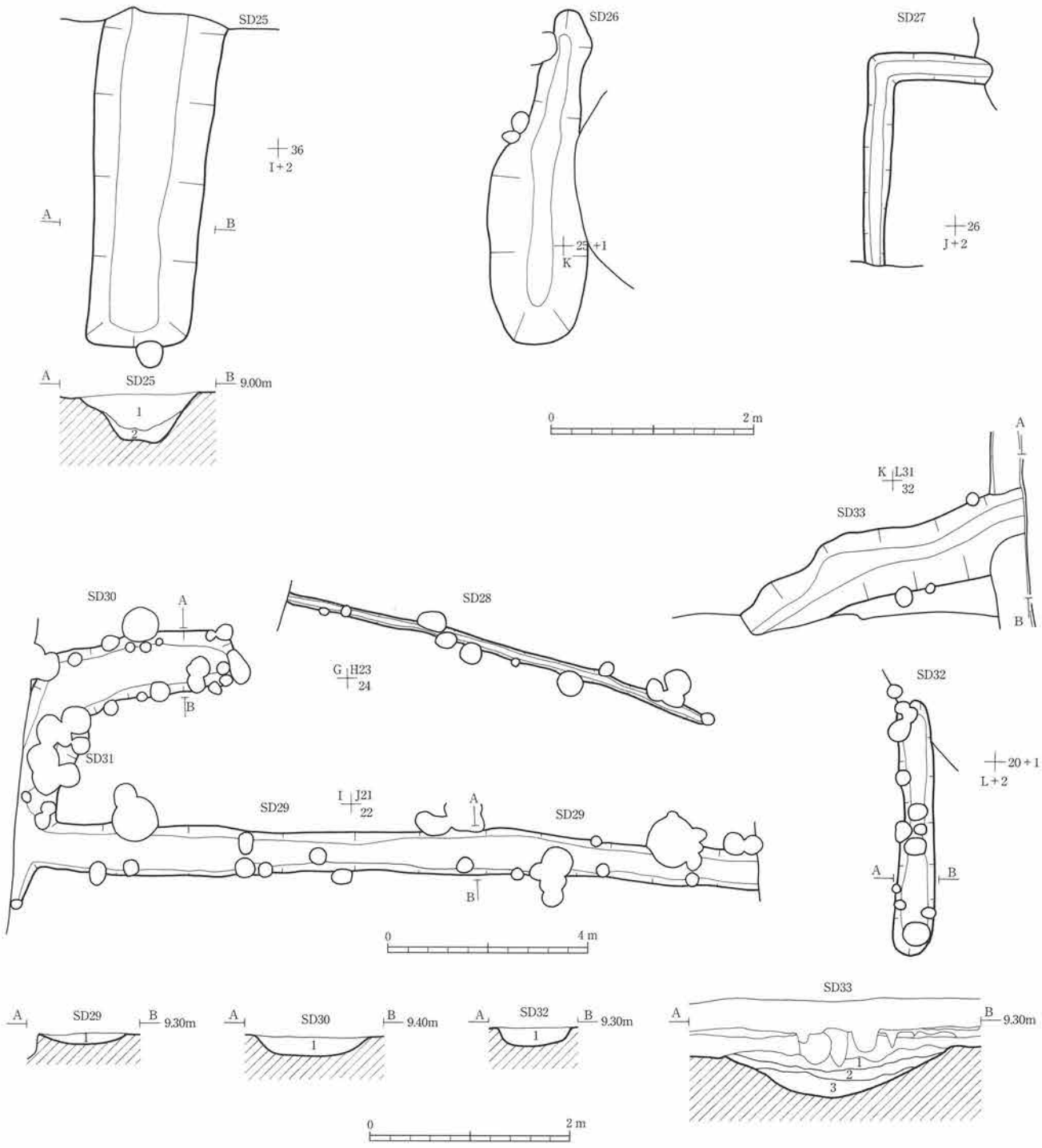
SD29溝跡

G～L－22グリッドで確認した。東側は調査区外に延びている。西側はSD31溝跡と接しているが、新旧関係は



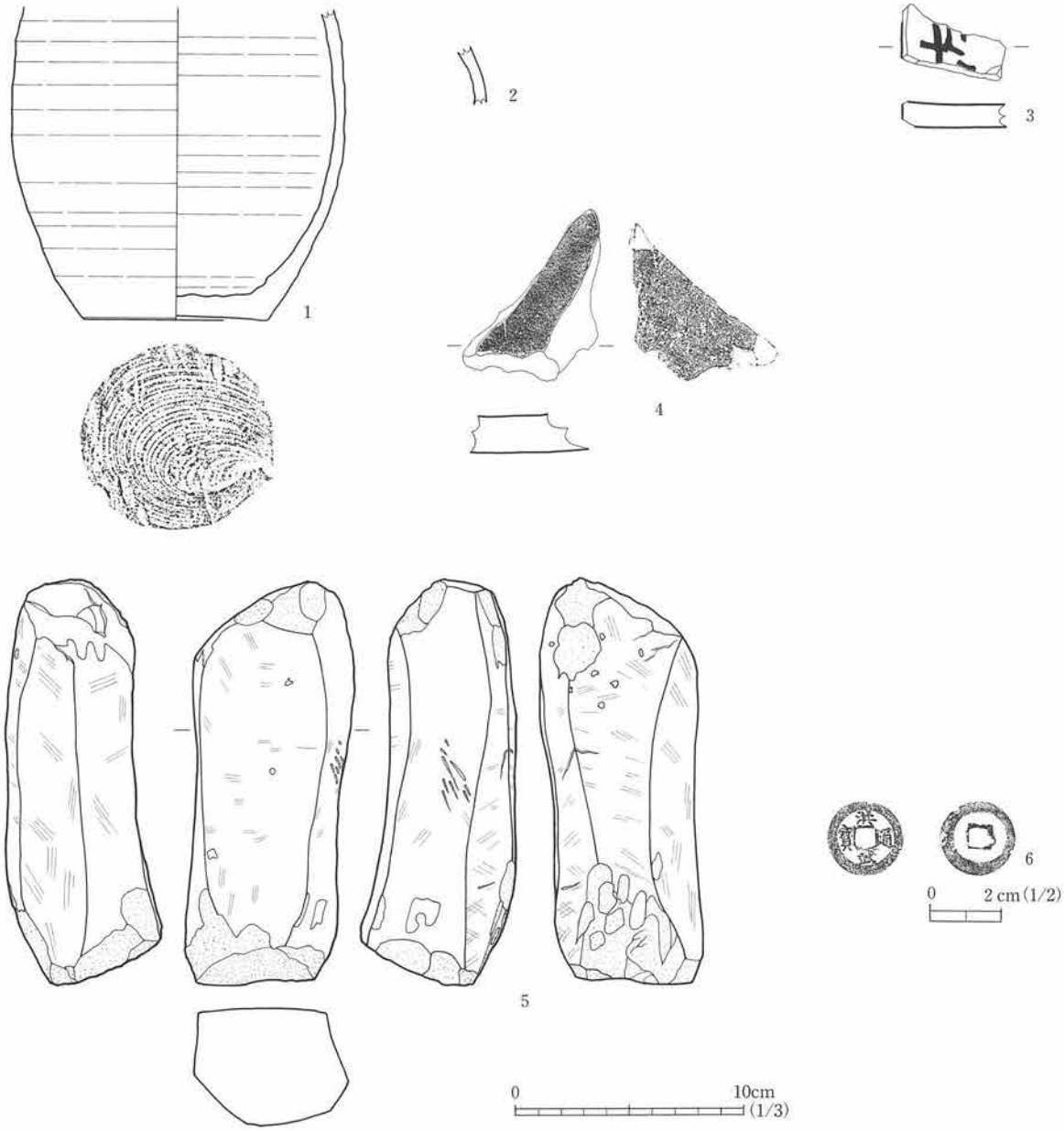
第77図　溝跡（1）

遺構	No.	土色	土性	備考
SD7 西側	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	
	2	黒褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む
	3	黒褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
SD7 東側	1	暗褐黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物粒、焼土粒、酸化鉄、礫を含む、しまりややあり
	2	黒褐色（2.5Y3/2）	粘土質シルト	炭化物、酸化鉄を含む、しまり、粘性ややあり
	3	オリーブ褐色（25Y4/3）	シルト	酸化鉄、風化礫を含む、しまりややあり
SD8	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
SD9	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
SD10	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	
	2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含む
SD12	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	黒色土をブロック状に多量に含む
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む、粘性ややあり
SD13A	1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	粘土質シルト	灰黄褐色、黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
SD13B	1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	粘土質シルト	灰黄褐色、黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
SD15	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト質粘土	黄褐色土を細かなブロック状に多く含む、粘性ややあり
	2	褐灰色（10YR4/1）	シルト質粘土	黄褐色土をブロック状に多く含む、粘性ややあり
SD19	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土のブロックを多く含む、しまり、粘性あり
SD21	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）粘土質シルトブロック、炭化物あり、しまりあり
SD23	1	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）砂をブロックに含む、人為的埋土
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐（10YR5/6）粘土質シルト、にぶい黄橙（10YR6/4）粘土質シルトをブロック状に含む、人為的埋土
	3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	黒褐（10YR3/2）シルトをブロック状に含む、人為的埋土



遺構	No.	土色	土性	備考
SD25	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	明褐（7.5YR5/8）シルト、灰黄褐（10YR6/2）シルト、灰黄褐（10YR4/2）、にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルトのブロックを含む、人為的堆積土
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐（2.5Y5/3）シルト、褐（10YR4/4）シルトを斑状に含む、層上面に部分的に薄く灰が堆積している、人為的堆積土
SD26	1	にぶい黄褐色（10YR2/3）	砂質シルト	明黄褐（10YR6/8）シルト粒を含む
SD28	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）シルトと黄褐（10YR5/6）シルトのブロックを含む、人為的堆土
SD29	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルト、地山粒混入多い
SD30	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）シルトと黄褐（10YR5/6）シルトのブロックを含む、人為的堆土
SD32	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
SD33	1	褐色（10YR4/6）	砂質シルト	
	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	層下面に粗砂〔にぶい黄褐（10YR5/4）〕を多く含む

第78図　溝跡（2）



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SD12	土師器・甕	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		342-1	D-28
2	SD31　1層	須恵器・長頸壺	ロクロナデ		ロクロナデ	猿投	343-6	E-16

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
3	SD24	平瓦		墨書あり	燻し瓦	381-10	G-13
4	SD24　1層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-14

No.	遺構・層位	種別	特徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
6	SD12	銅製品　銭貨	洪武通宝（明）	2.2	2.1	427-8	Na-8

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
5	SD12	砥石	17.8	7	5.2	1.087	デイサイト質凝灰岩	酸化鉄付着あり	426-4	Kd-68

第79図　溝跡出土遺物（1）

不明で、一連のものである可能性も考えられる。ピットと重複しており、本遺構が古い。確認した長さは14.4mで、方向はE－10°－Sである。上幅は0.7～1.1mである。深さは8～13cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦で東側へ緩やかに傾斜している。遺物は出土しなかった。

SD30・31溝跡

G～I－20～22グリッドで確認した。調査時には異なる溝跡として2つの番号を付したが、重複関係が確認されなかったため、一連の遺構とした。SD31溝跡とした部分は西側の平成3年度の調査区のG－20・21グリッドでは確認されていない。東側はSD29溝跡と接しているが、新旧関係は不明で、一連のものである可能性も考えられる。ピットと重複しており、本遺構が古い。SD31溝跡とした部分は南北方向でH－21グリッドで屈曲し、東西方向のSD30溝跡とした部分となる。確認した長さは南北方向が5.2m、東西方向が3.8mである。南北方向の部分は不明だが、東西方向の上幅は1.1～1.4mである。深さは12～31cmで、東端が深い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦で東側へ緩やかに傾斜している。遺物はSD31溝跡部分から土器が出土した。

SD32溝跡

L－19～21グリッドで確認した。ピット、SX6性格不明遺構と重複しており、本遺構が古い。確認した長さは6.9mで、方向はN－3°－Eである。上幅は55～80cmである。深さは19～25cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層で、人為的堆積状況である。遺物は出土しなかった。

SD33溝跡

K・L－32グリッドで確認した。小溝、SD23溝跡、SD3堀跡、ピットと重複しており、本遺構が古い。確認した長さは6mで、SD3堀跡から東へ延びている。方向はE－18°－Nである。東側の調査区外へ延びている。上幅は1～1.1mで、深さは24～30cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は3層確認された。底面はほぼ平坦であるが、やや西へ傾斜している。遺物は出土しなかった。

その他の溝跡

その他に古代以前と考えられる溝跡が小溝状遺構群と重複して4条確認した。G・H－23グリッドに1条、H～J－36・37グリッドに3条である。いずれも小溝より古い。小溝と同様の規模で上幅20～30cm、深さ15～25cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦で、方向は一定しない。遺物は出土しなかった。

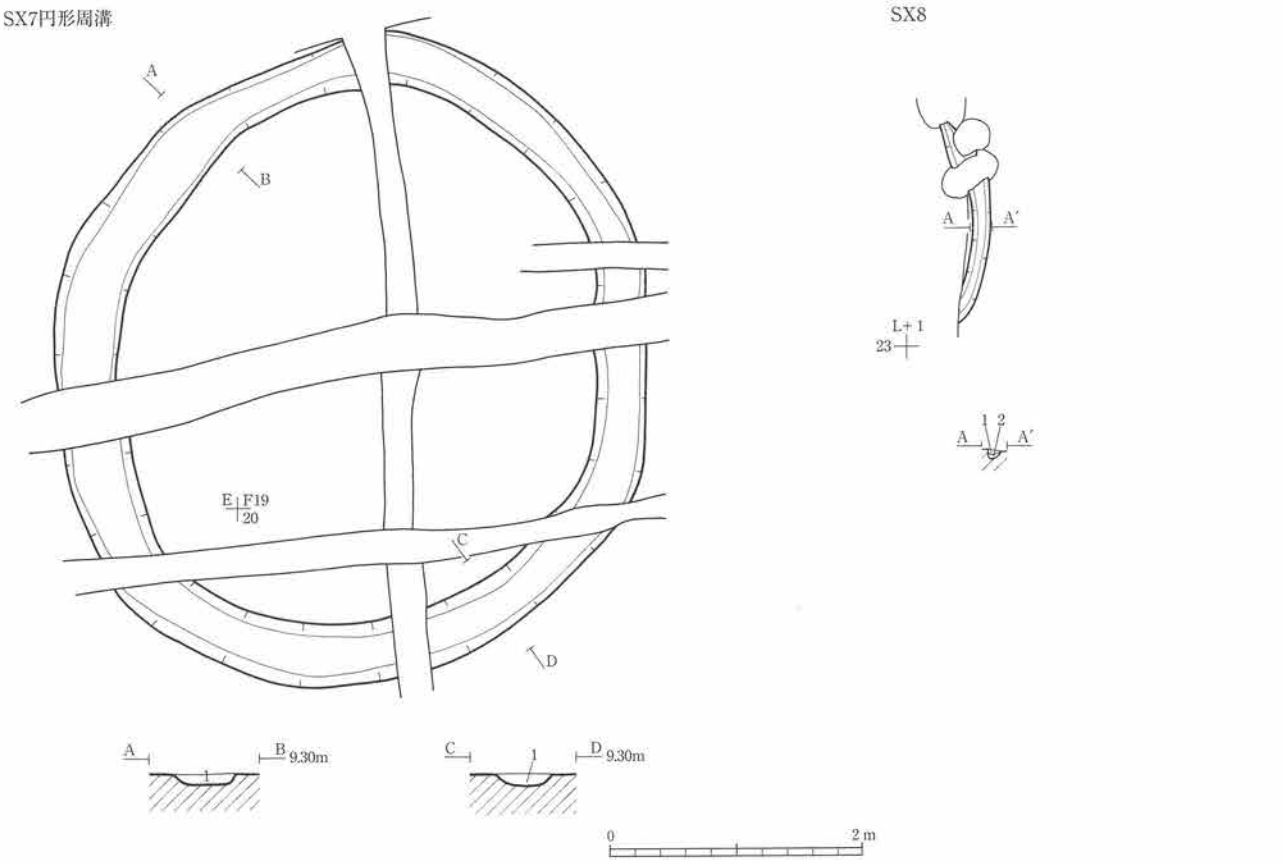
円形周溝

SX7円形周溝

E～G－18～20グリッドで確認した。ピット、小溝と重複しており本遺構が古い。平面形は外周で5.3m×4.7mの楕円形である。溝の上幅は40～55cmである、深さは5～11cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦であるがゆるやかな凸凹がある。遺物は土器片が出土した。

SX8円形周溝

L－23グリットで確認した。ピット、小溝と重複しており本遺構が古い。位置的にSIⅠ30竪穴住居跡と重複しているものと考えられ、SI30竪穴住居跡確認時には本遺構が確認されなかったことから、本遺構がSI30竪穴住居跡より古いものと考えられる。平面形は外周で直径約2.5mの円形を基調としたものであると考えられる。確認した長さは1.7mである。深さは5～9cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



土　色	土　性	備　考
黒褐色（10YR2/3）	粘土	褐色（10YR4/6）粘土のブロックを含む、底面ほど多い

No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	2層の土をブロック状に含む
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	

第80図　円形周溝

小溝状遺構群

小溝状遺構群はⅡ区およびⅢ区で確認した。Ⅰ区には分布しない。小溝状遺構群の分布状況はⅡ区北半部およびⅢ区南半部では希薄であり、Ⅱ区南半部～Ⅲ区北半部では濃密で重複関係も顕著である。ＳＤ３堀跡とＳＤ４堀跡の間の平成５年度の調査区ではＣ～Ｆ－29～31グリッドに調査区を設定して小溝状遺構群を調査した。これらの小溝状遺構群は方向と重複関係から３群に分けられる。

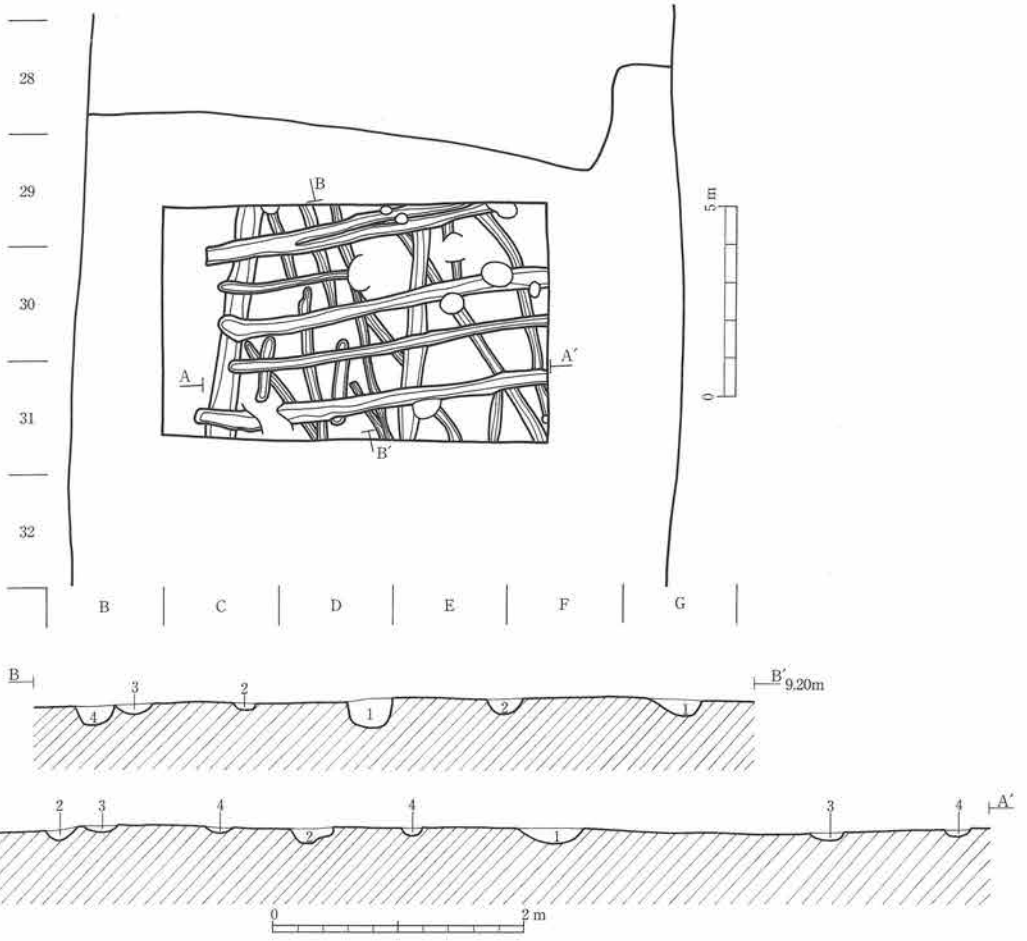
第１群

Ⅱ区からⅢ区中央部にかけて分布する東西方向の小溝状遺構群である。SD３堀跡以南には分布しない。また、16ライン以北では分布が希薄で、11ライン以北には分布しない。21ライン以南では東側の調査区外に延びており、以北では東西の調査区外に延びている。古墳時代から古代の遺構との重複関係は、SI14・15・16・17・20・30竪穴住居跡、SK75・76土坑、SD11・15・19・33溝跡、SX７円形周溝、第２・３群の小溝状遺構群より新しく、SI11・12・13・18・19・21・24竪穴住居跡、SK38・40②土坑、SD９・10溝跡より古い。また、中世以降の遺構により削平されている部分が多い。上幅20～88cm、深さは６～47cmである。方向は調査区西側でＥ－２～５°－Ｎとなっているが、中央付近でＥ－０～８°－Ｓに湾曲する。小溝の間隔は16ライン以南で、小溝が途切れて確認されなかった部分や蛇行して接近した部分を除くと心々間で60～175cmである。16ライン以北では３ｍ以上の部分もある。断面形はＵ字形のものが多いが、Ⅲ形、台形のものも見られる。堆積土はⅤ層主体で、Ⅵ層の混入の状況で２～３層に分層される。底面は平坦であるが、緩やかな起伏が見られる。また、底面に鋤等の工具痕（耕作痕）は見られ

なかった。遺物は土器片が少量出土した。

第２群

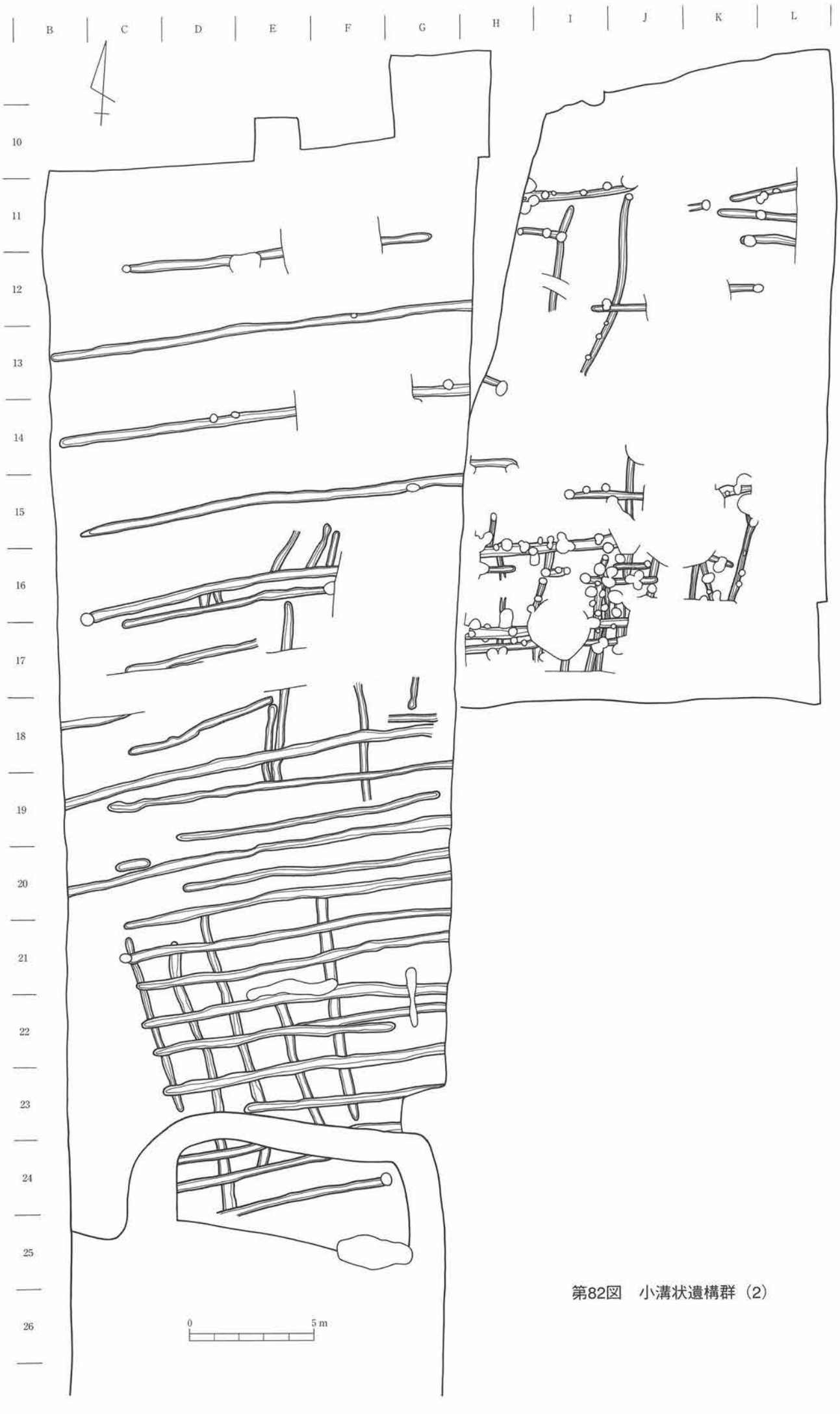
Ⅱ区からⅢ区にかけて分布する南北方向の小溝状遺構群である。Ｃ～Ｋラインに分布し、SD３堀跡以南には分布しない。また、21ライン以北では分布が希薄で、11ライン以北には分布しない。特に平成５年度の調査区では16ライン以北では確認されず、平成７年度の調査区では18～21ラインにかけて１条のみしか確認されない。古墳時代から古代の遺構との重複関係は、SI15・17竪穴住居跡、第３群小溝状遺構群より新しく、SI18・21竪穴住居跡、SK40②土坑、SD10溝跡、第１群小溝状遺構群より古い。また、中世以降の遺構により削平されている部分が多い。上幅15～70cm、深さは５～22cmである。方向はＮ－15°－Ｅ～Ｎ－８°－Ｗであるが、西方向のものはＣ～Ｆ－21グリッド以南のもののみである。小溝の間隔は小溝が途切れて確認されなかった部分や蛇行して接近した部分を除くと心々間で55cm～3.25mである。平成７年度調査区の22ライン以南の間隔が広くなっている。断面形はＵ字形のものが多いが、Ⅲ形のものも見られる。堆積土はＶ層主体で、Ⅵ層の混入の状況で２～３層に分層されるが、単層のものが多い。底面は平坦であるが、緩やかな起伏が見られる。また、底面に鋤等の工具痕（耕作痕）は見られなかった。遺物は土器片、土製品が少量出土した。



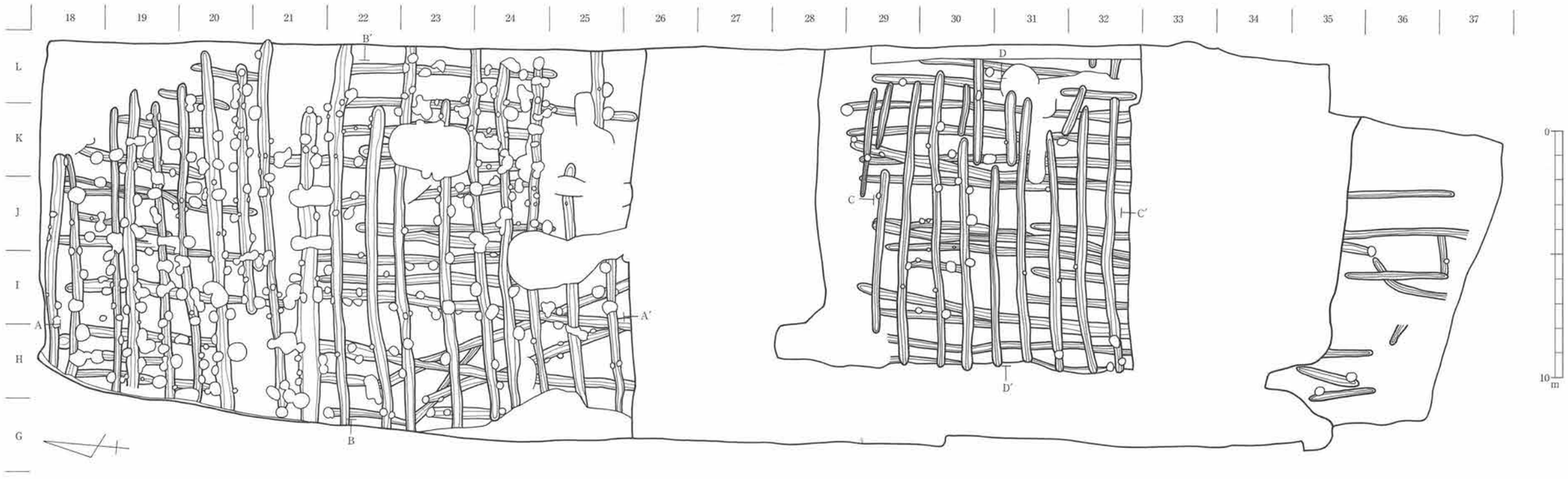
No.	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土を（検出面の上）ブロック状に含む、しまりややあり、粘性あり
2	黒褐色（10YR3/3）	粘土	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土をブロック状に含む、底面に行くほどブロックが大きく多くなる、しまりややあり、粘性あり
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土を（検出面の上）ブロック状に含む、しまりややあり、粘性あり
4	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	にぶい黄褐（10YR5/3）粘土を（検出面の上）ブロック状に含む、どの溝にも耕作痕あり、しまりややあり、粘性あり

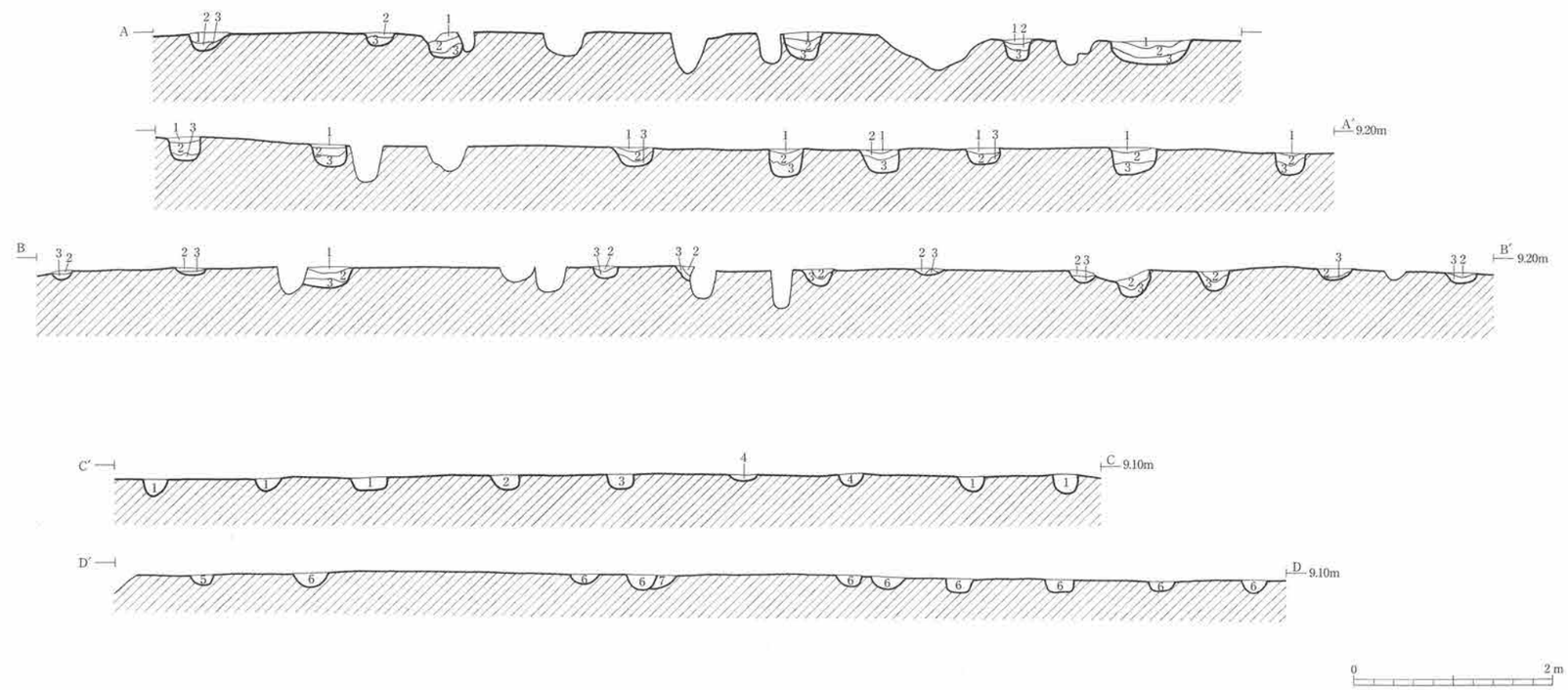
No.	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	にぶい黄橙（10YR7/4）シルト質粘土（古代面の検出面）をブロック状に含む（底面の方ほどブロックが大きく多い）
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	にぶい黄橙（10YR7/4）シルト質粘土を含む、しまり、粘性ややあり
3	褐色（10YR4/4）	シルト質粘土	しまりややあり、粘性あり
4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	黒褐（10YR2/2）粘土をブロック状に含む、粘性あり

第81図　小溝状遺構群（1）



第82図　小溝状遺構群（2）





第83図　小溝状遺構群（3）

A－A′，B－B′

No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐（10YR3/2）主体ににぶい黄褐（10YR4/3）粒多く混ざる
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	暗褐（10YR3/4）シルトとにぶい黄褐（10YR4/3）小ブロック含む
3	にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトのブロックに暗褐（10YR3/2）シルト小ブロック含む

C－C′

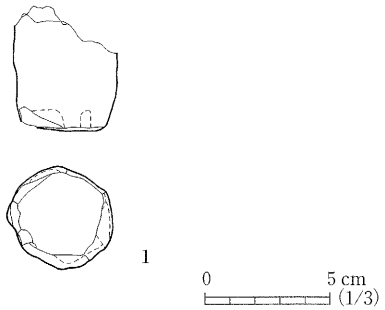
No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	褐（10YR4/4）シルトブロックを含む
3	褐色（10YR4/4）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトブロックを含む
4	褐色（10YR4/4）	シルト	

D－D′

No.	土　色	土　性	備　考
5	褐色（10YR4/4）	シルト	
6	褐色（10YR4/4）	シルト	
7	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	

第３群

Ⅱ区からⅢ区中央部にかけて分布する南北方向の小溝状遺構群である。平成５年度の調査区ではＣ～Ｆ－29～31グリッドに設定した調査区のみで確認され、SD４堀跡以北では確認されなかった。20～21ラインでは途切れている。古墳時代から古代の遺構との重複関係は、ＳＩ15・30竪穴住居跡、SD33溝跡、SX８円形周溝より新しく、第１・２群小溝状遺構より古い。また、中世以降の遺構により削平されている部分が多い。上幅10～56cm、深さは４～20cmである。方向はＮ－23°－Ｅ～Ｎ－23°－Ｗであるが、Ｈ～ＬラインではＮ－０～５°Ｅにおさまる。小溝の間隔は小溝が途切れて確認されなかった部分や蛇行して接近した部分を除くと心々間で55cm～185cmである。断面形はＵ字形のものと、浅いⅢ形のものがある。堆積土はⅤ層主体で、Ⅵ層の混入の状況で２層に分層されるが、単層のものが多い。底面は平坦であるが、緩やかな起伏が見られる。また、底面に鋤等の工具痕（耕作痕）は見られなかった。遺物は土器片が少量出土した。



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区小溝	支脚？		(5.0)	(4.0)		(64.5)	380-21	P-11

第84図　小溝状遺構群出土遺物

３．近世の遺構と遺物

Ⅰ区ではⅡ層上面で確認した。古代の遺構と同じ面である。Ⅱ・Ⅲ区ではⅢ層上面で確認した。

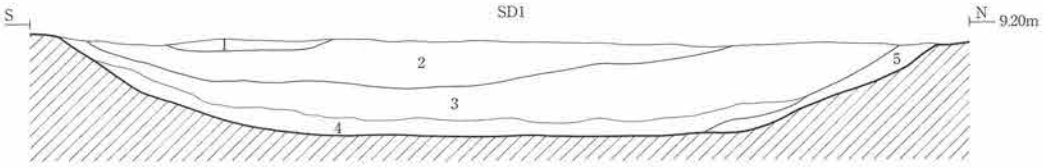
Ⅰ区

Ⅰ区では堀跡１条、掘立柱建物跡１棟を確認した。その他に多数のピットを検出したが、建物は確認できなかった。

堀跡

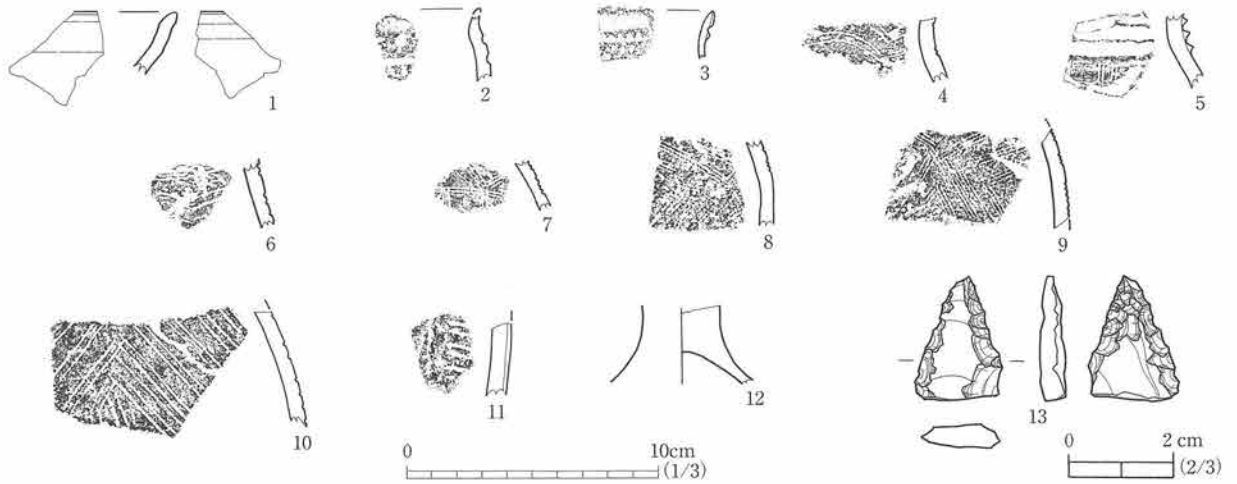
SD１堀跡

Ａ～Ｉ－１～７グリッドで確認した。SR１河川跡、SI４竪穴住居跡、SK10～12・14土坑、ピットと重複しており、本遺構が最も新しい。確認した長さは28.5mである。方向はＥ－25°－Ｎである。上幅は5.3～6.8mである。底面までの掘り下げは調査区の東西の壁際のみで行った。深さは0.8～1.1mである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は東側で６層、西側で５層確認された。東側では北側の壁が検出されていないため、西側の堆積状況を図示した。底面は平坦である。東西でのレベル差は見られない。遺物は陶磁器片、土師器片、須恵器片、弥生土器



層位	No.	土色	土性	備考
1	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黒色土をブロック状に含む
2	2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	

層位	No.	土色	土性	備考
3	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	粘性ややあり
	4	暗褐色（10YR3/4）	シルト質粘土	灰色粘土をブロック状に含む、粘性ややあり
4	5	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む、粘性ややあり



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径（m）	法量 底径（m）	法量 器高（m）	写真図版	登録番号
1	SD1	陶器	皿	灰釉	瀬戸美濃？	16C以降				367-3	I-365

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
2	SD1 1層	弥生土器・不明	刺突文・沈線文	ナデ		335-24	B-35
3	SD1 1層	弥生土器・鉢	刺突文	ナデ		336-3	B-38
4	SD1 1層	弥生土器・壺	連弧文（二本一描沈線）	マメツ		335-18	B-29
5	SD1 1層	弥生土器・壺	隆線文（二本一描沈線）	ナデ		336-2	B-37
6	SD1 1層	弥生土器・壺	連弧文（二本一描沈線）	マメツ		335-20	B-31
7	SD1 1層	弥生土器・壺	三本一描沈線	ナデ		336-1	B-36
8	SD1 1層	弥生土器・不明	三本一描沈線	ナデ		335-21	B-32
9	SD1 1層	弥生土器・壺	三本一描沈線	ナデ		335-22	B-33
10	SD1 1層	弥生土器・壺	重山形文（二本一描沈線）	ナデ		336-4	B-39
11	SD1 壁際	弥生土器・甕	二本一描沈線			336-5	B-40
12	SD1 1層	弥生土器・高杯	マメツ		脚部	334-18	B-4

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
13	SD1 1層	石鏃	（2.0）	（1.7）	（0.5）	1.9	流紋岩		417-3	Kh-3

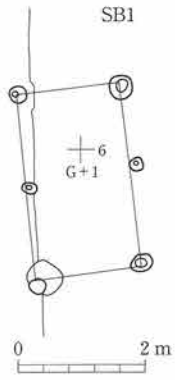
第85図　SD1堀跡土層断面・出土遺物

片、石器が出土した。

掘立柱建物跡

SB 1 掘立柱建物跡

Ⅰ区の中央部やや東寄りG－5・6グリッドで確認した。SI 4 竪穴住居跡、SK 9 土坑、SX 1 性格不明遺構と重複しており、本遺構が新しい。桁行南北 2 間（総長約2.9m）、梁行 1 間（柱間約1.65m）の南北棟である。桁行柱列の方向はN－2°－Wである。柱穴堀方は径18～40cmの円形を基調としたものである。掘り方の深さは30～65cmである。柱痕跡が確認されたものは径 8 ～20cmの円形のものである。



第86図　Ⅰ区SB1掘立柱建物跡

Ⅱ・Ⅲ区

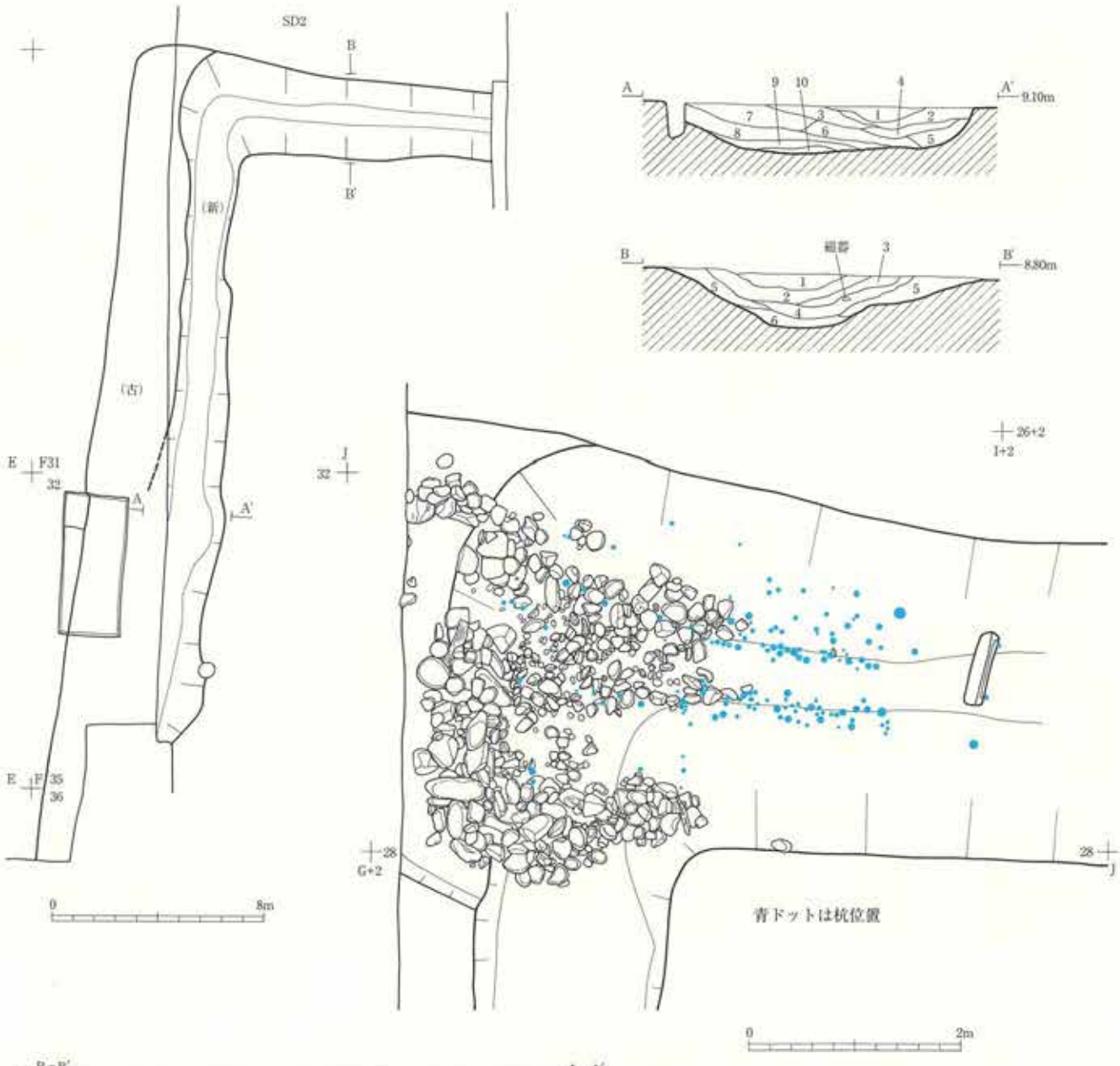
Ⅱ・Ⅲ区では溝跡12条、堀跡２条、井戸跡４基、埋設土器１基、掘立柱建物跡30棟、性格不明遺構６基の遺構が確認された。溝跡、掘立柱建物跡の中には中世のものが含まれている可能性があるが、ここで一括して記述する。

溝跡

溝跡については、SD16～20および24は欠番とした。

SD２溝跡

F～K－26～36グリッドで確認した。F・G－36からF・G－26グリッドにかけて直線的に延び、F・G－26グ



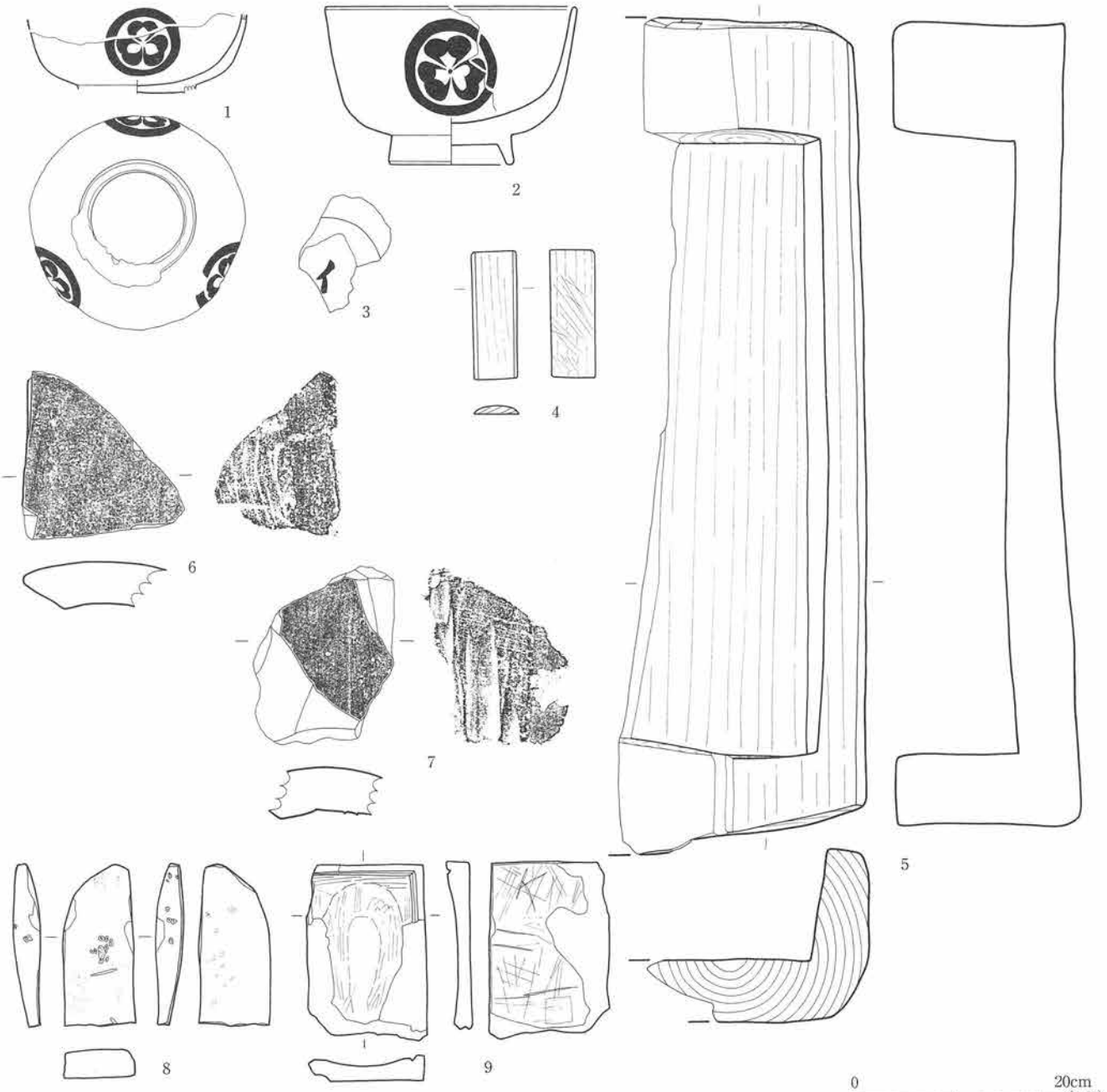
B－B'

No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	砂	微～粗砂
2	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂	微砂～2mm大の礫
3	黄灰色（2.5Y4/1）	粘土	砂～粗砂を含む
4	暗灰黄色（2.5Y4/2）	砂	微～粗砂
5	黄灰色（2.5Y4/1）	粘土	微～細砂を含む
6	黄灰色（2.5Y4/1）	砂	微～粗砂

A－A'

No.	土色	土性	備考
1	明褐色（7.5YR5/6）	砂	細砂～粗砂
2	灰褐色（7.5YR5/2）	砂	微砂～粗砂
3	褐灰色（7.5YR4/1）	粘土	細砂～粗砂を含む
4	褐灰色（7.5YR5/1）	砂	微砂～粗砂を含む、2mm大の礫少々含む
5	黄褐色（10YR5/6）	粘土	地山（壁）崩落土
6	褐灰色（7.5YR4/1）	砂	褐灰（7.5YR4/1）の粘土塊を含む
7	黒褐色（7.5YR3/1）	粘土	細砂～粗砂を含む
8	黒褐色（7.5YR3/1）	粘土	微砂～粗砂を含む
9	黒褐色（7.5YR3/1）	砂	細砂～礫を含む
10	褐灰色（7.5YR4/1）	粘土	細砂～礫を含む

第87図　SD2溝跡



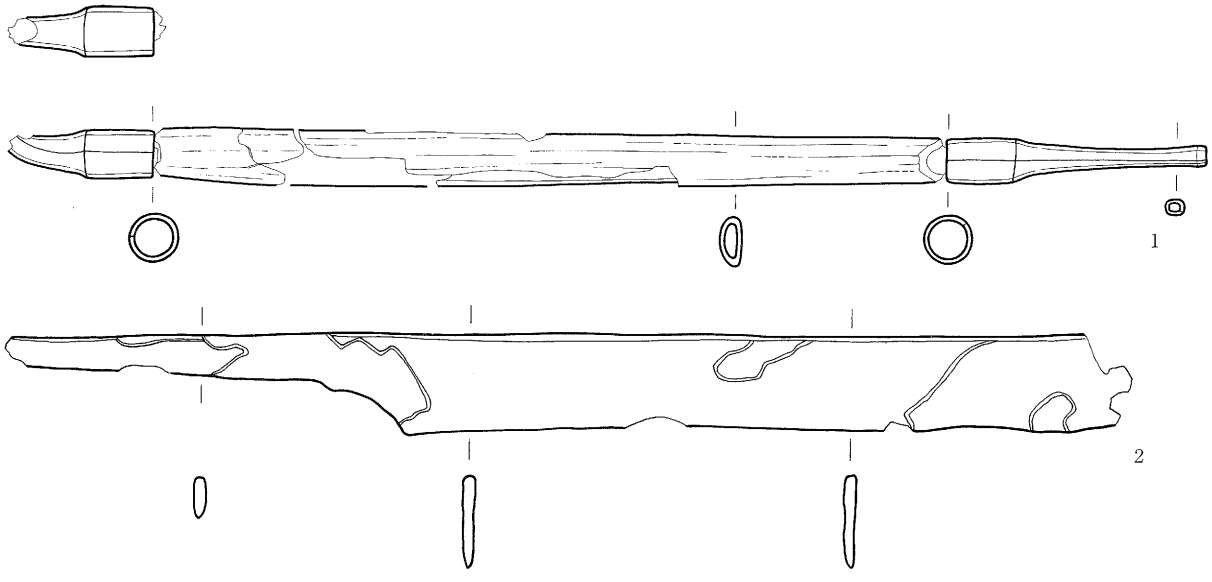
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
1	SD2 底面	漆器 椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様（3単位）、内面赤色漆仕上げ、高台部欠損	ブナ属の一種	385-6	La-31
2	SD2 底面	漆器 椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様（3単位）、内面赤色漆仕上げ	ブナ属の一種	385-7	La-32
3	SD2 底面	漆器 蓋	内外面赤色漆仕上げ、摘み外面に黒漆で「イ」の銘有、木部劣化の為断面計測不可能	ブナ属の一種	385-10	La-35
4	SD2 底面	不明	長さ6.1cm 幅2.1cm 厚さ0.4cm 表面、縁辺ともによく磨かれている、裏面に細かい刃物痕、全体的に黒色（漆等を塗った可能性も有）板目材	不明 広葉樹（散孔材？）	394-8	Lc-16
5	SD2 底面	アクヌキの槽	長さ79.7cm 幅（25.6）cm 高さ17.7cm 断面は逆台形、芯持材	スギ	400-5	Lc-49

No.	遺構・層位	種別・器種	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
6	SD2 底面	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	ケズリ・燻し瓦		F-4a
7	SD2 底面	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦		F-4b

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
8	SD2 底面	砥石	7.8	3.4	1.3	55	デイサイト質凝灰岩		427-7	Kd-102
9	SD2 底面	硯	8.6	5.8	1.1	95.5	頁岩		422-8	Kd-15

第88図　SD2溝跡出土遺物（1）

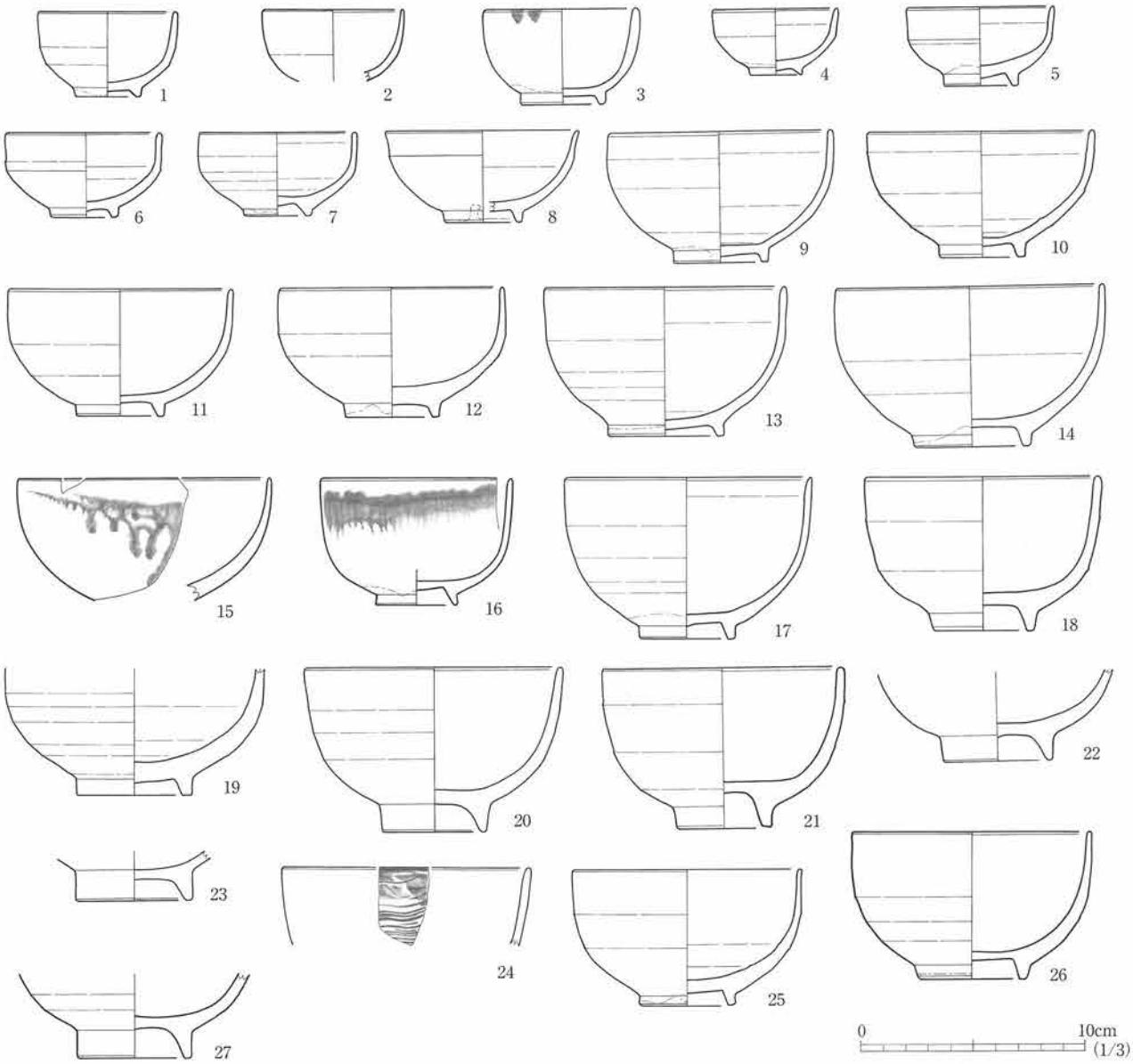
リッドでほぼ直角に曲がり、東へ延びる。F・G－33～35グリッドでSD３堀跡と重複し、屈曲部から東へ延びる部分はSD４堀跡と重複しており、本遺構が新しい。南側、東側共に調査区外へ延びている。確認した長さは南北方向に延びる部分で31.5m、方向はN－10°－E、東西方向に延びる部分で17.5m、方向はE－5°－Sである。新旧２時期の変遷がある。南北方向に延びる部分では新期の溝が旧期の溝の東側へ移動している。東西方向の部分では同一ヶ所に重なっている。南北方向に延びる部分は平成５年度と平成７年度の調査区境にあたり、平成５年度の調査では遺構の確認のみで、掘り下げを行っていない。そのため、遺構の大部分が平成５年度の調査区内に入っている旧期の溝跡の詳細は不明である。新期の溝跡は南北方向の部分で、上幅2.2～1.4mで、深さは35～50cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦であり、南から北へ若干の傾斜が見られる。東西方向の部分では上幅3.7～2.6mで、深さは50～60cmである。屈曲する部分が広く、東へ向かって徐々に狭くなる。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は南北方向の部分では10層確認された。東西方向の部分では６層確認された。堆積土中には砂が多く含まれている。内部に水流があったためと考えられる。底面は平坦でほぼ水平である。屈曲する部分では底面から西壁にかけて拳大から人頭大の礫を敷き、礫の部分から東へ2.5mまで杭を打ち、更にその東には、アク抜き用のフネを杭で止めて水を堰止めるためと考えられる施設を設けている。これは洗い場として設けられた河棚の痕跡であると考えられる。旧期の溝跡は南北方向の部分では上幅は最も広い部分で2.8m以上である。東西方向の部分はほぼ新期の溝跡と重複、一体化しているが、調査区東端では上幅が3.1mと新期の溝跡より広くなっている。底面は屈曲部分では凸凹が著しく、水流で削られた痕跡であると考えられる。東へ延びる部分では平坦であるが、新期の溝跡のフネを用いた水を堰止める施設付近から東へ徐々に傾斜し、調査区東端では新期の溝跡より50cm低い。遺物は溝跡の屈曲部から東へ延びる部分から出土したものが大部分である。そのため、遺物の取り上げは新期の溝跡の層位に基づいており、SD２ℓ１・ℓ２、配石出土遺物＝新期の溝跡出土遺物、SD２ℓ３出土遺物＝旧期の溝跡出土遺物である。陶磁器類、木製品、金属製品（煙管・古銭等）がある。しかし、遺物からは新旧の溝跡の間的な差は明確ではない。



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口（径）	写真図版	登録番号
1	SD2　底面	煙管	雁首、吸口に鍍金の痕跡有	(31.3) 雁首　(3.8) 羅宇　(20.7) 吸口　(6.8)		1.3	0.5	396-5	Nb-28 Lc-38

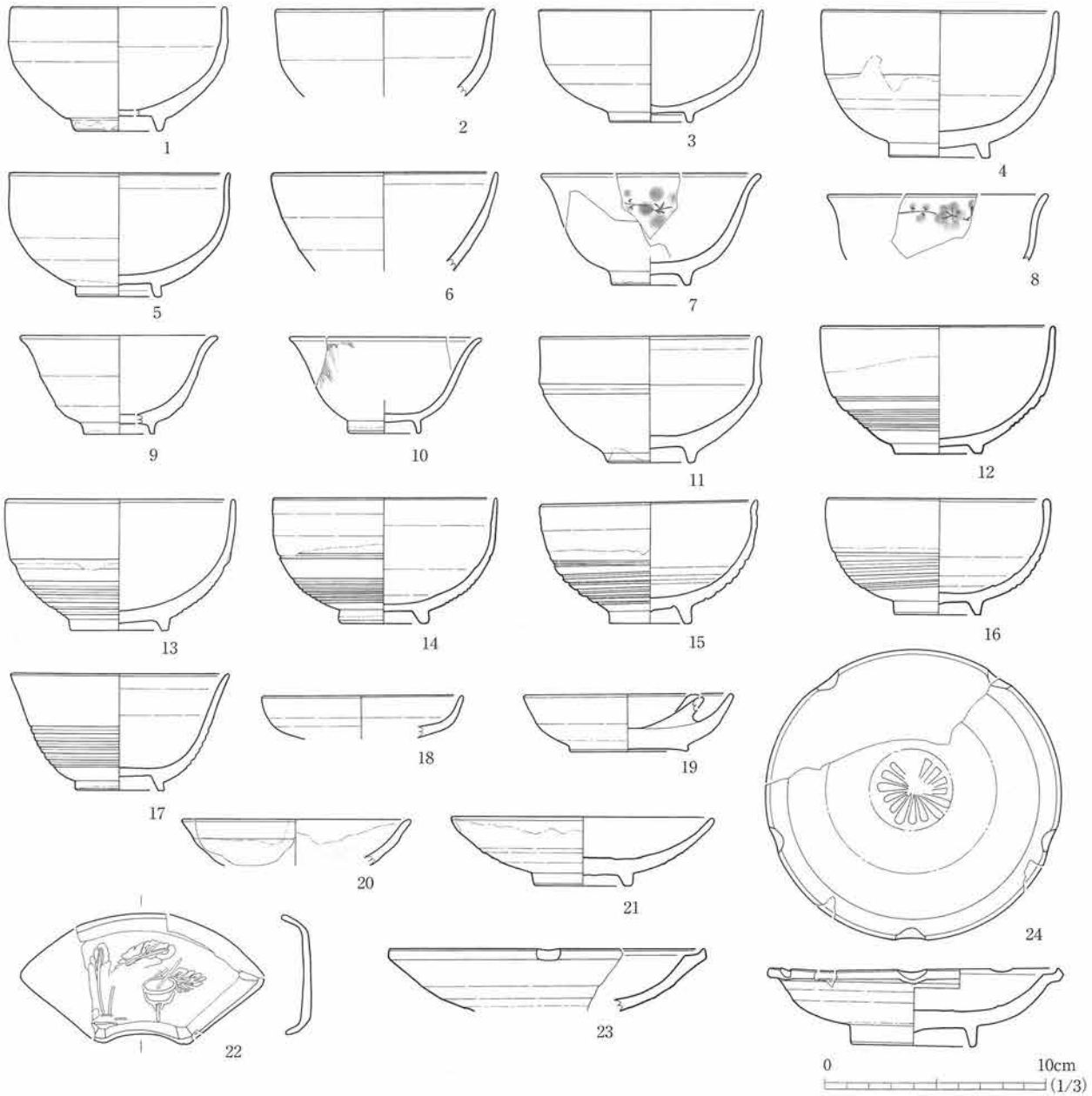
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考	写真図版	登録番号
2	SD2　底面	刀	(29.5)	2.7	0.5	(55)			Nc-1

第89図　SD2溝跡出土遺物（2）



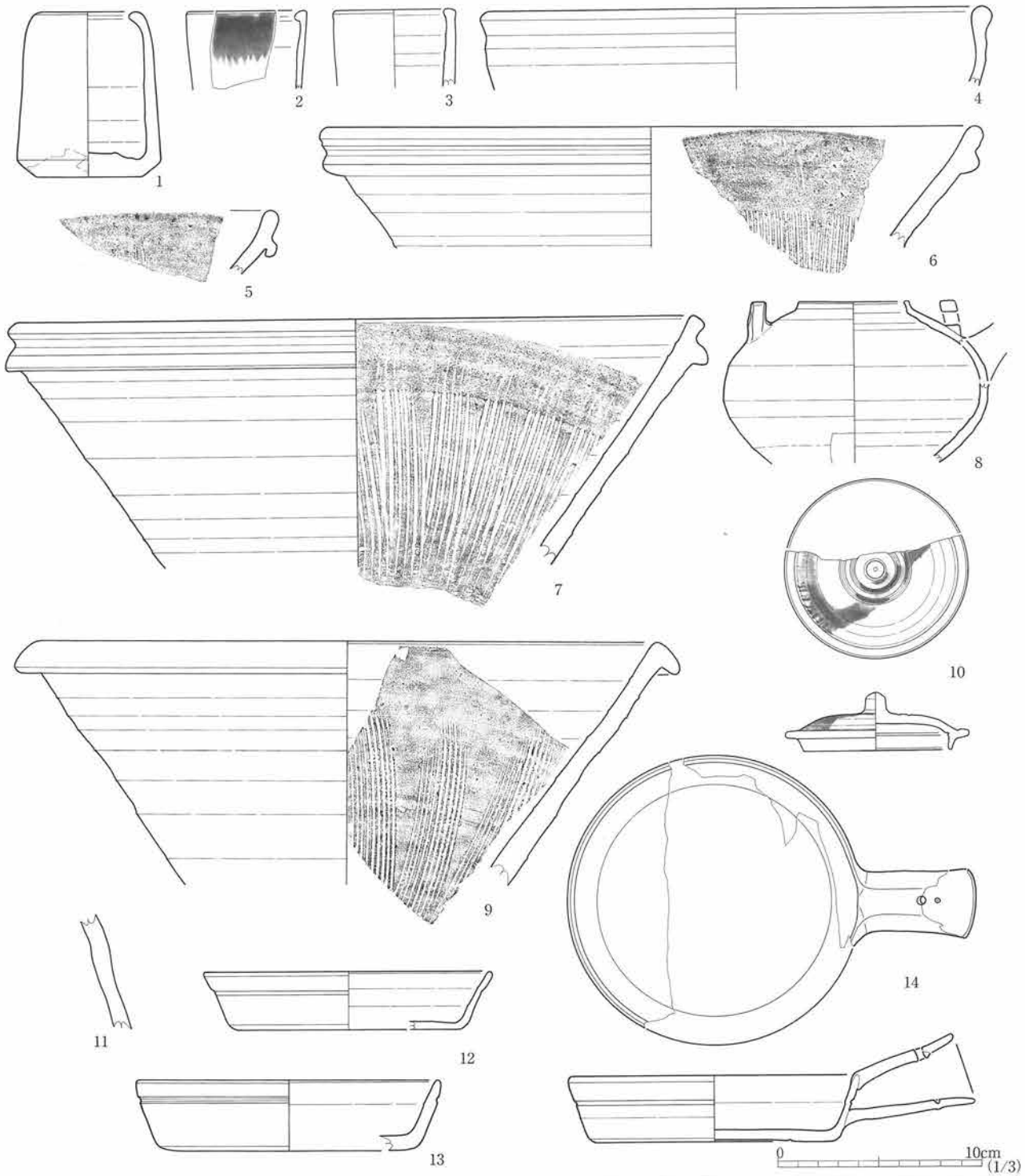
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量			写真図版	登録番号
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	SD2 3層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	18C後半以降	6.0	2.8	3.8	355-1	I-178
2	SD2 3層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	19C後半以降	6.1		(3.2)	355-3	I-180
3	SD2 3層	陶器	小碗	灰釉、呉須絵	瀬戸美濃	18C末	7.0	3.8	4.3	352-3	I-135
4	SD2 3層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	19C後半以降	5.4	2.3	3.0	355-5	I-182
5	SD2 3層	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C後半?	6.4	3.2	3.5	355-4	I-181
6	SD2 3層	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	19C後半?	6.9	2.9	3.8	355-6	I-183
7	SD2 3層	陶器	小碗	灰釉	大堀相馬	18C後半以降	6.8	2.9	3.8	355-2	I-179
8	SD2 3層	陶器	小碗	灰釉、高台内露胎	大堀相馬	19C中頃以降	8.4	3.3	4.1	353-8	I-154
9	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	9.9	4.2	5.9	353-11	I-157
10	SD2 3層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	18C後半以降	10.1	3.8	5.6	353-13	I-159
11	SD2 3層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	18C後半	10.0	3.9	5.7	353-5	I-151
12	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	9.8	4.2	5.8	353-9	I-155
13	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.8	5.2	6.7	353-6	I-152
14	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	12.0	5.1	7.2	354-5	I-167
15	SD2 3層	陶器	碗	灰釉に飴釉流し	大堀相馬	18C	11.2		(5.5)	353-12	I-158
16	SD2 3層	陶器	碗	白濁釉に緑釉流し、高台付露胎	大堀相馬	19C前半	8.4	5.7	3.6	353-10	I-156
17	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	11.0	4.2	7.3	353-7	I-153
18	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	10.6	4.0	6.9	352-7	I-140
19	SD2 3層	陶器	碗	淡青色釉、内面に目跡あり	小野相馬	18C前半以降		5.1	(5.7)	352-2	I-147
20	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	11.4	4.6	7.4	352-5	I-138
21	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	10.6	4.0	7.2	352-6	I-139
22	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		4.9	(4.0)	352-9	I-143
23	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.2	(2.2)		I-141
24	SD2 3層	陶器	碗		肥前	18C	10.8		3.5	357-4	I-224
25	SD2 3層	陶器	碗	灰釉、丁寧なつくり	大堀相馬	18C前半?	10.2	4.2	6.1	353-14	I-160
26	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.6	6.1	4.8		
27	SD2 3層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.2	(3.8)		

第90図　SD2溝跡出土遺物（3）



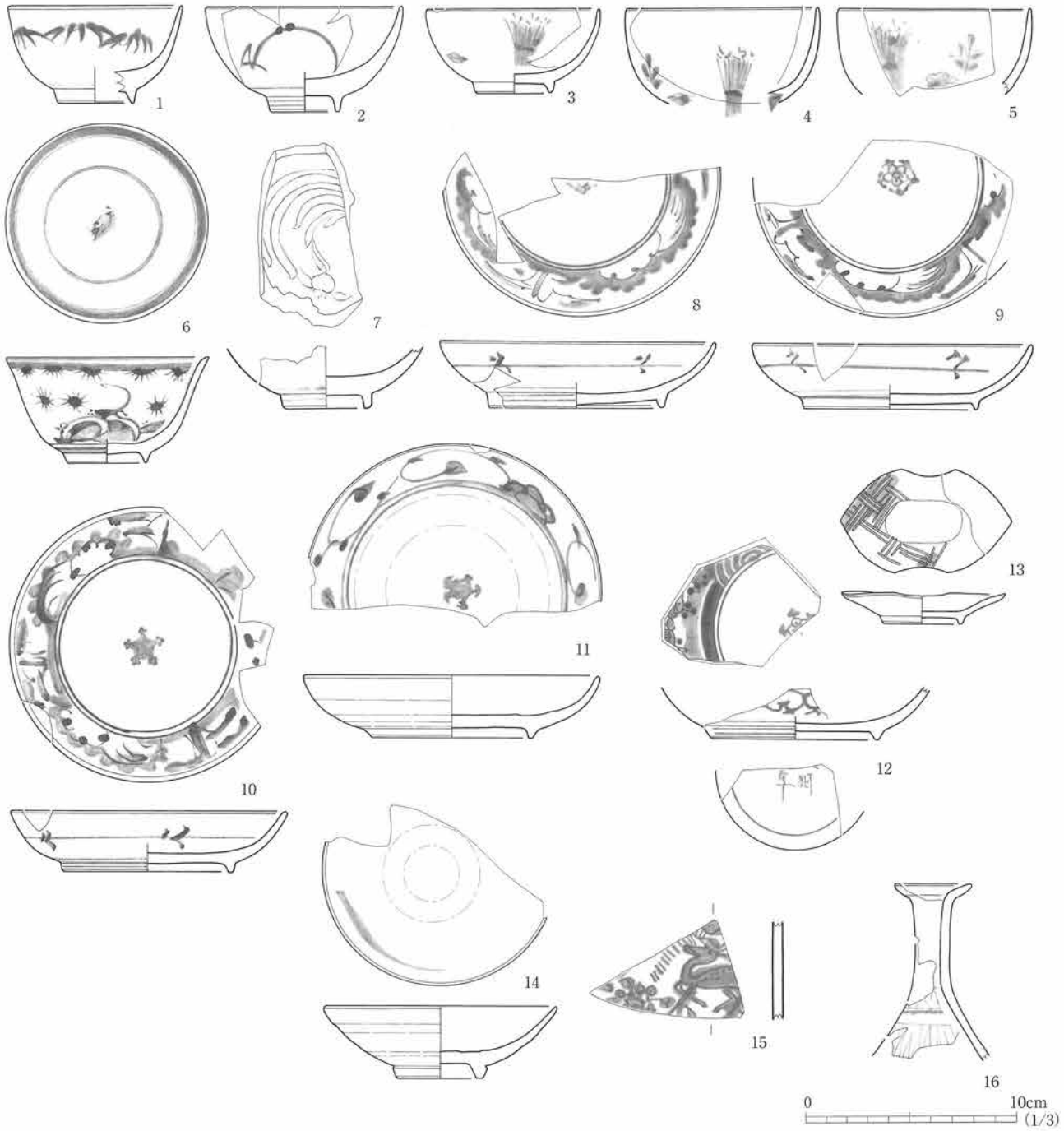
No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD2　3層	陶器	碗	灰釉、畳付研磨	大堀相馬	18C前半以降	9.8	4.1	5.4	354-3	I-165
2	SD2　3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	9.9		(4.0)		I-163
3	SD2　3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.2	3.8	5.2	354-2	I-164
4	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）	大堀相馬	18C前半以降	10.7	4.5	6.8	354-11	I-173
5	SD2　3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.0	3.9	5.7	354-1	I-161
6	SD2　3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.2		(4.5)		I-162
7	SD2　3層	陶器	碗	灰釉、折枝梅花文、畳付釉なし	瀬戸美濃	19C前半	10.0	3.4	5.1	352-2	I-134a
8	SD2　3層	陶器	碗	折枝梅花文	瀬戸美濃	19C前半	(10.0)		(3.0)	352-2	I-134b
9	SD2　3層	陶器	碗	白濁釉、高台内露胎	大堀相馬	19C前半	8.8	3.2	4.5	354-13	I-175
10	SD2　3層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し	大堀相馬	19C前半	8.7	3.3	4.4	354-12	I-174
11	SD2　3層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半	10.1	4.0	5.8	354-15	I-177
12	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）内部底部の炭化物付着	大堀相馬	18C前半	10.6	3.9	5.8	354-9	I-171
13	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）	大堀相馬	18C前半以降	10.4	4.4	6.0	354-8	I-170
14	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）	大堀相馬	18C前半	10.0	3.8	5.8	354-7	I-169
15	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）	大堀相馬	18C前半以降	9.8	3.9	5.5	354-10	I-172
16	SD2　3層	陶器	碗	掛け分け（上半灰釉、下半鉄釉）	大堀相馬	18C前半以降	10.0	3.9	5.3	354-6	I-168
17	SD2　3層	陶器	碗	わら灰釉？	大堀相馬	19C前半	9.8	3.9	5.4	354-14	I-176
18	SD2　3層	陶器	皿	白濁釉	大堀相馬	18C前半以降	9.1		(1.9)		I-187
19	SD2　3層	陶器	灯明皿	淡青色釉、底部回転糸切り	小野相馬	18C以降	9.4	5.2	2.6	352-10	I-145
20	SD2　3層	陶器	緑釉小皿	灰釉（口縁部）、外面内面に炭化物付着（灯明皿として使用か？）	瀬戸	15C初	10.4		(2.1)	357-2	I-222
21	SD2　3層	陶器	皿	青緑釉（内面及び外面の口縁部まで）、蛇の目釉剥ぎ	肥前	17C後半	11.9	4.6	3.1	352-4	I-137
22	SD2　3層	陶器	皿	鉄釉、型押し成形、扇形の皿、残存不良、(8.5)×6.0	大堀相馬	19C			1.4	355-9	I-186
23	SD2　3層	陶器	皿	輪花、見込み蛇の目釉剥ぎ	小野相馬	18C	14.2		(2.7)	353-3	I-148
24	SD2　3層	陶器	皿	輪花、見込みに菊花状の印花文、蛇の目釉剥ぎ	小野相馬	19C	13.4	5.7	3.6	353-1	I-146

第91図　SD2溝跡出土遺物（4）



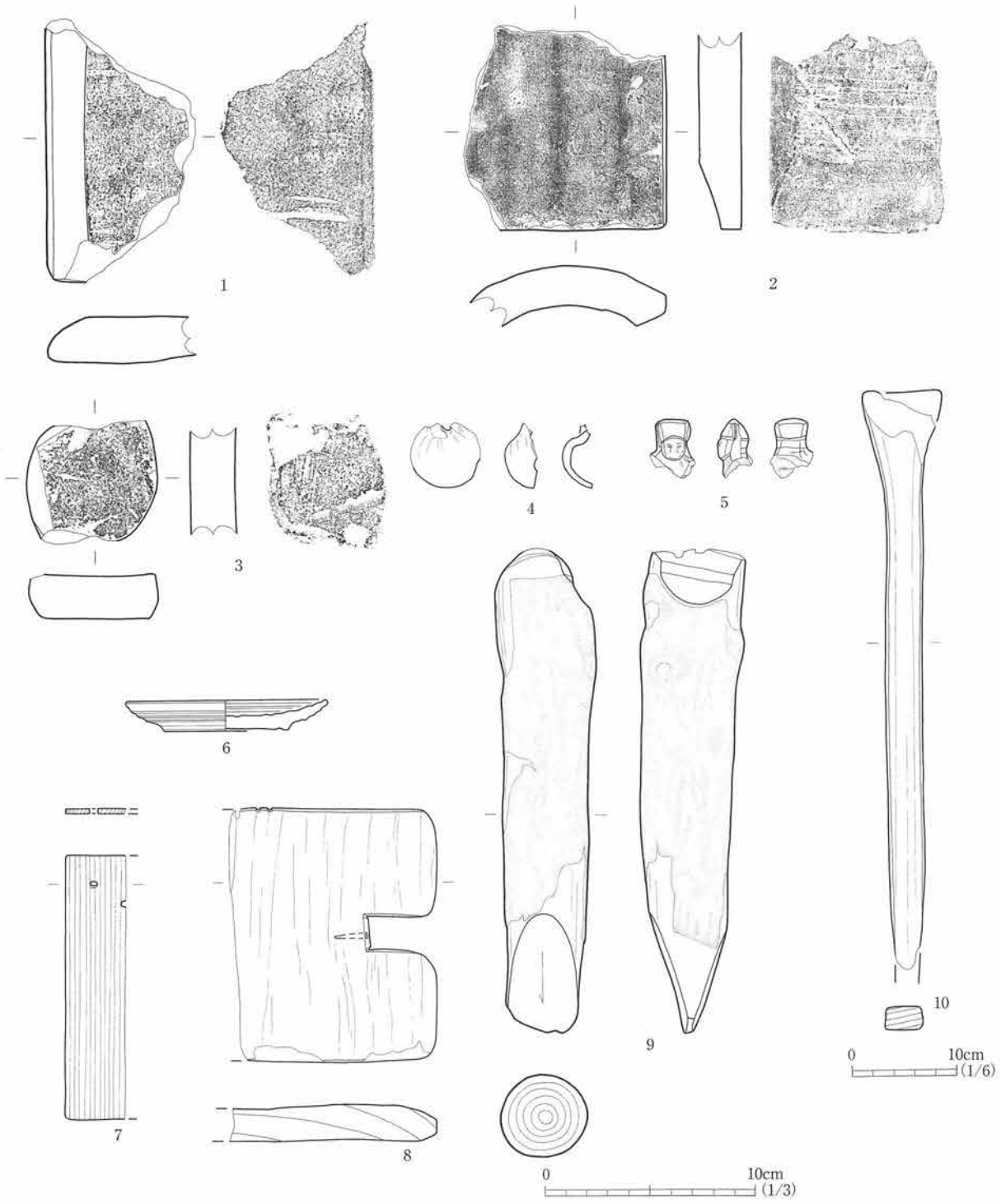
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 3層	陶器	灰吹き	淡青色釉、とても珍しい	小野相馬	17C後半	4.5	5.2	8.2	366-7	I-352
2	SD2 3層	陶器	灰吹き	白濁釉に緑釉流し	大堀相馬	19C後半	(5.8)		(3.9)	355-10	I-188
3	SD2 3層	陶器	香炉	内外面灰釉、古瀬戸	瀬戸	15C初	5.7		(3.9)	351-12	I-132
4	SD2 3層	陶器	甕	灰釉	小野相馬？	18C	25.0		(3.9)	353-4	I-149
5	SD2 3層	陶器	擂鉢	擂目5条以上	堤？	18C？	(31.0)		(3.2)	355-13	I-204
6	SD2 3層	陶器	擂鉢	擂目9条	堤？	18C以降	(31.6)		(6.0)	355-11	I-203
7	SD2 3層	陶器	擂鉢	擂目5条	不明	江戸時代	34.2		(12.3)	355-16	I-205
8	SD2 3層	陶器	土瓶	白濁釉、外面下部に露胎部分に炭化物付着	大堀相馬	18C後半以降	5.4		(8.0)	355-7	I-184
9	SD2 3層	陶器	擂鉢	擂目9条	岸窯系	17C後半以降	(32.6)		(12.1)	355-12	I-202
10	SD2 3層	陶器	蓋	灰釉に飴釉流し	大堀相馬	18C後半以降	8.9		2.9	355-8	I-185
11	SD2 3層	陶器	甕		常滑					370-11	I-449
12	SD2 3層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(14.1)	(11.0)	2.9	355-15	I-207
13	SD2 3層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(14.8)	(12.8)	3.5	355-14	I-206
14	SD2 3層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	14.0	(11.8)	3.3	356-1	I-208

第92図　SD2溝跡出土遺物（5）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 3層	磁器	小碗	染付、外面：紫束文	肥前	18C～19C	9.3		(4.3)	372-8	J-25
2	SD2 3層	磁器	小碗	染付、くらわんか手	肥前	18C～19C	9.4	3.4	5.1	372-10	J-27
3	SD2 3層	磁器	小碗	染付、外面：紫束文、漆つぎ	肥前	18C～19C	8.3	3.7	4.1	372-5	J-22
4	SD2 3層	磁器	小碗	染付、外面：紫束文	肥前	18C～19C	9.3		(4.7)	372-6	J-23
5	SD2 3層	磁器	小碗	染付、外面：紫束文	肥前	18C～19C	9.3		(4.3)	372-7	J-24
6	SD2 3層	磁器	小碗	染付	瀬戸美濃	19C前半～中	9.7	3.8	5.2	372-11	J-28
7	SD2 3層	磁器	小碗	染付、内面：かぶ文？くらわんか手	肥前	18C	9.3	4.2	(3.1)	372-9	J-26
8	SD2 3層	磁器	皿	染付、内面：コンニャク印判（五弁花）、漆つぎ	肥前	18C前半	13.2	8.4	3.2	373-4	J-34
9	SD2 3層	磁器	皿	染付、内面：コンニャク印判（五弁花）、二重圏線、くらわんか手	肥前	18C前半	13.4	8.4	3.2	373-3	J-33
10	SD2 3層	磁器	皿	染付、内面：コンニャク印判（五弁花）、漆つぎ、くらわんか手	肥前	18C	13.3	8.2	3.9	373-1	J-31
11	SD2 3層	磁器	皿	染付、内面：蛇の目釉剥ぎ、（漆付着）、コンニャク印判（五弁花）	肥前	18C	13.3	8.2	3.9	373-2	J-32
12	SD2 3層	磁器	皿	染付、内面：コンニャク印判（五弁花）、高台内に墨あり、「大明口年」	肥前	18C前半		8.0	(2.6)	373-5	J-35
13	SD2 3層	磁器	皿	染付、型押し変形皿、瑠璃釉	肥前	17C前半	7.8×5.0	3.8×2.3	1.5	373-7	J-37
14	SD2 3層	磁器	皿	染付、蛇の目釉剥ぎ	肥前	17C前半～18C	11.3	4.2	3.5	372-13	J-30
15	SD2 3層	磁器	皿	染付、芙蓉手？	中国	17C前半			(0.5)	372-12	J-29
16	SD2 3層	磁器	瓶	染付、外面：網目文	肥前	17C後半	3.6		(8.7)	373-6	J-36

第93図　SD2溝跡出土遺物（6）

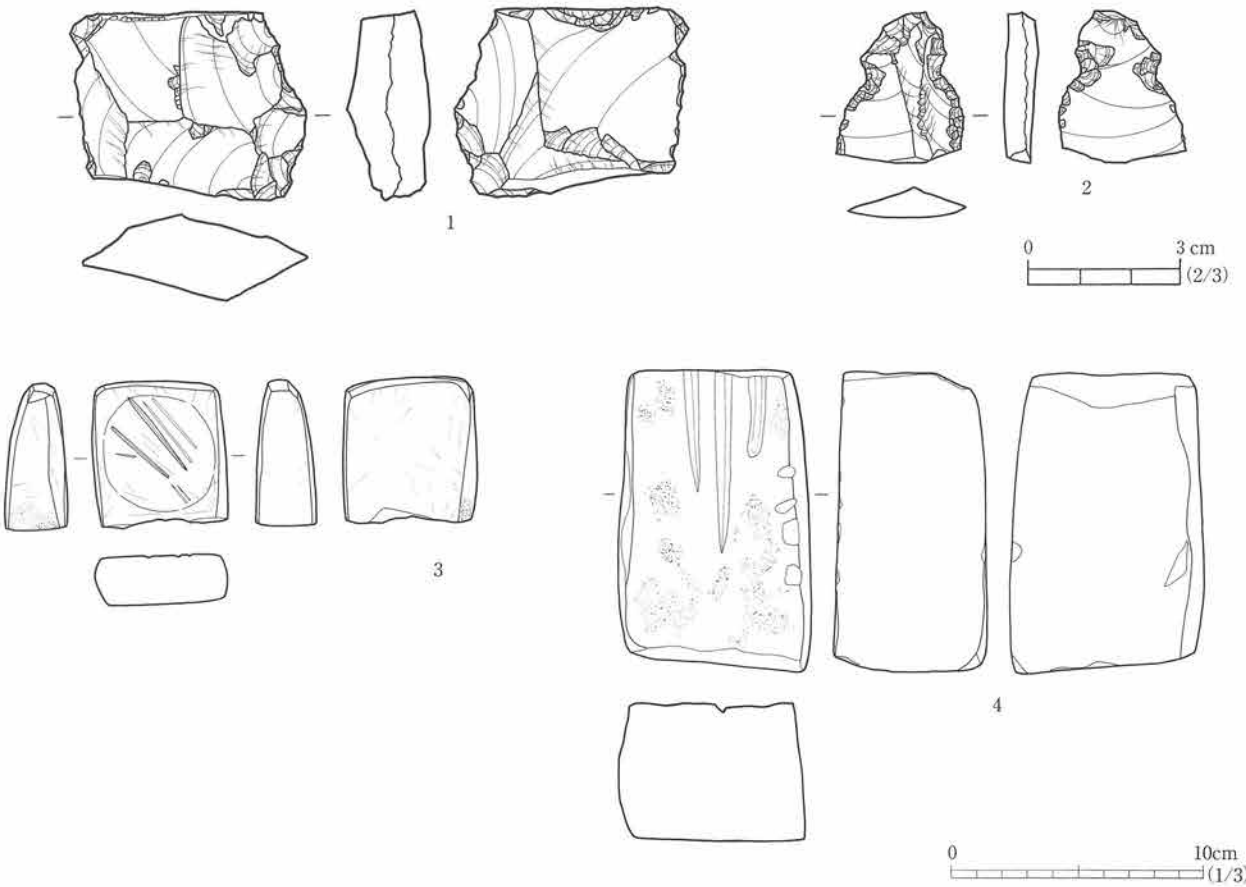


No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
1	SD2 3層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-2
2	SD2 3層	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦	381-6	F-5
3	SD2 3層	平瓦			磨き目あり・砥石に転用か？燻し瓦	382-3	G-1

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
4	SD2 3層	土鈴		(2.3)	(3.05)	(5.35)	(6.8)	380-23	P-24
5	SD2 3層	堤人形	人形の顔	(2.8)	(2.1)		(5.4)	380-14	P-45

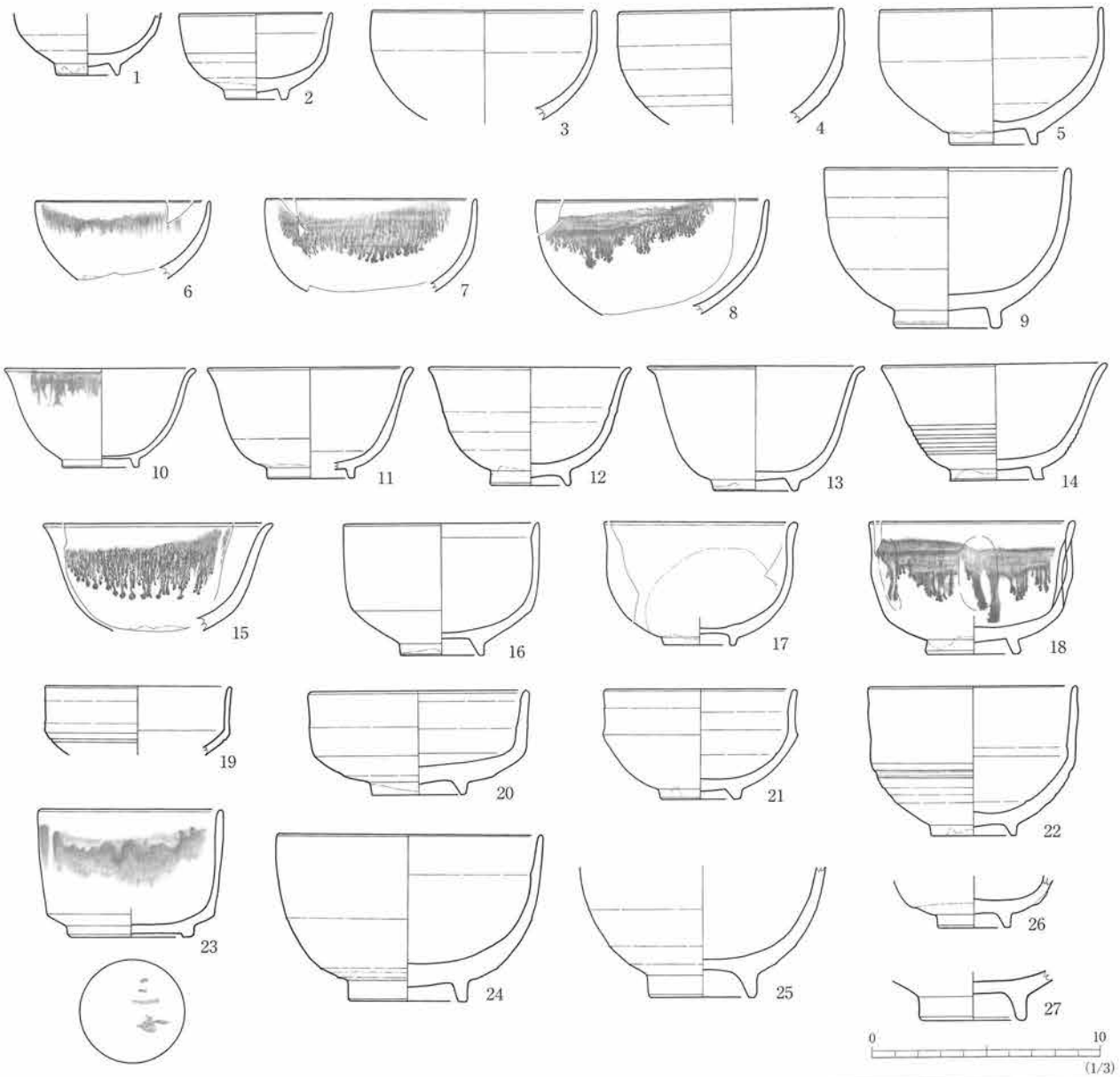
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
6	SD2 3層	皿	ほぼ完形、口径9.6cm 底径6.0cm 器高1.5cm 内外面とも木挽き痕 明瞭	ブナの一種	394-9	Lc-15
7	SD2 3層	不明	長さ12.8cm 幅（2.9）cm 厚さ0.2cm 上部に2穴有、（2穴とも貫通）、柾目材	スギ	401-3	Lc-54
8	SD2 3層	不明	長さ12.2cm 幅（9.8）cm 厚さ1.7cm 中央部に長さ1.5cmの穴あり、柾目材	スギ	401-4	Lc-55
9	SD2 3層	加工木	上、下端部に加工痕あり、長さ（23.3）cm 幅、径4.2cm	イチイ	402-2	Lc-57
10	SD2 3層	不明	長さ（37.2）cm 幅2.4cm 厚さ1.5cm 柾目材	モミ属	401-2	Lc-56

第94図　SD2溝跡出土遺物（7）



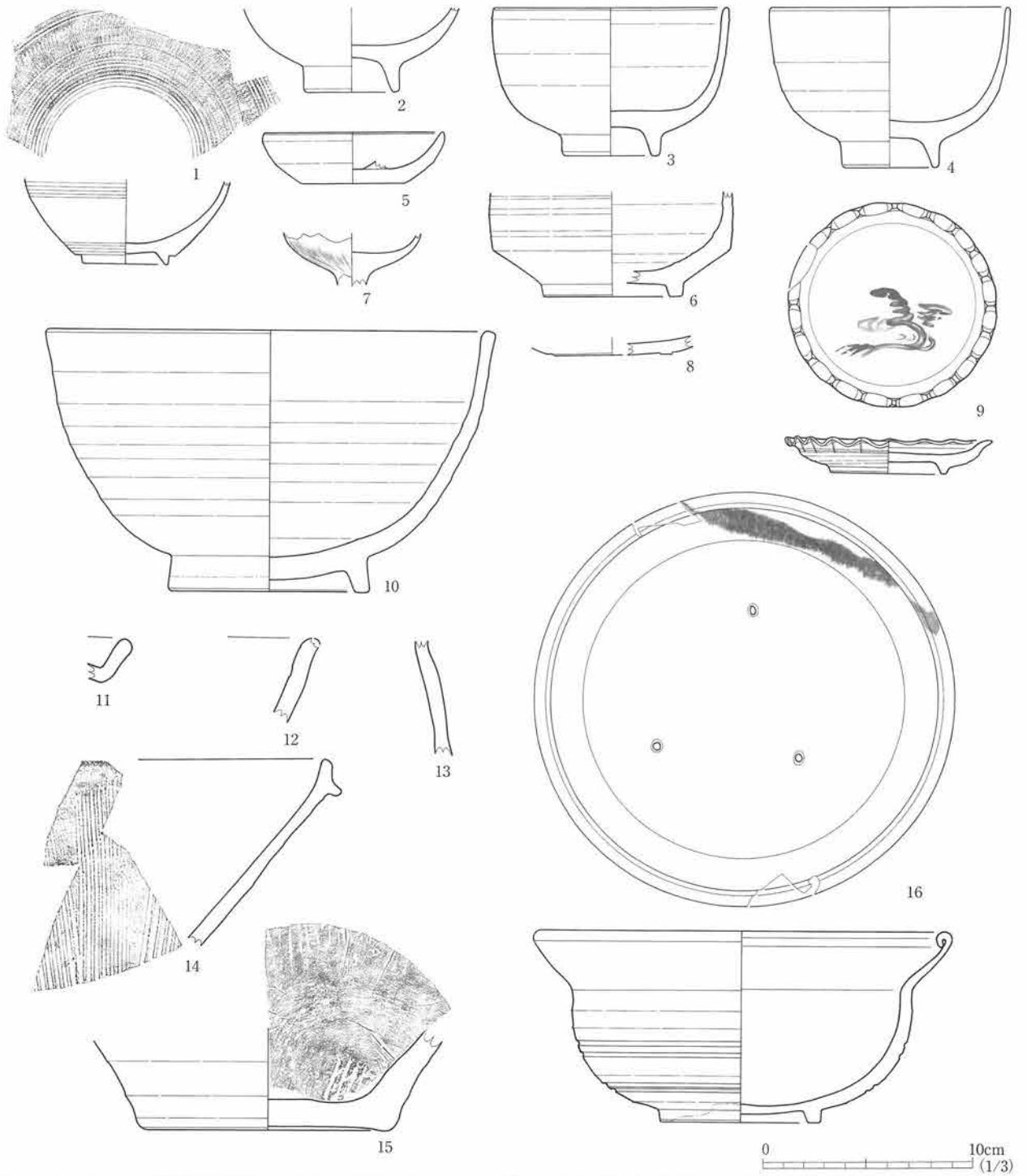
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD2　3層	不定形	3.7	4.7	1.6	30	珪質頁岩		418-4	Ka-170
2	SD2　3層	石匙	(3.0)	(2.5)	0.7	4.1	珪質頁岩		417-11	Kj-1
3	SD2　3層	砥石	5.9	5.3	2.5	110	デイサイト質凝灰岩		427-9	Kd-109
4	SD2　3層	砥石	12.2	7.7	6	1.015	砂質凝灰岩		427-8	Kd-104

第95図　SD2溝跡出土遺物（8）



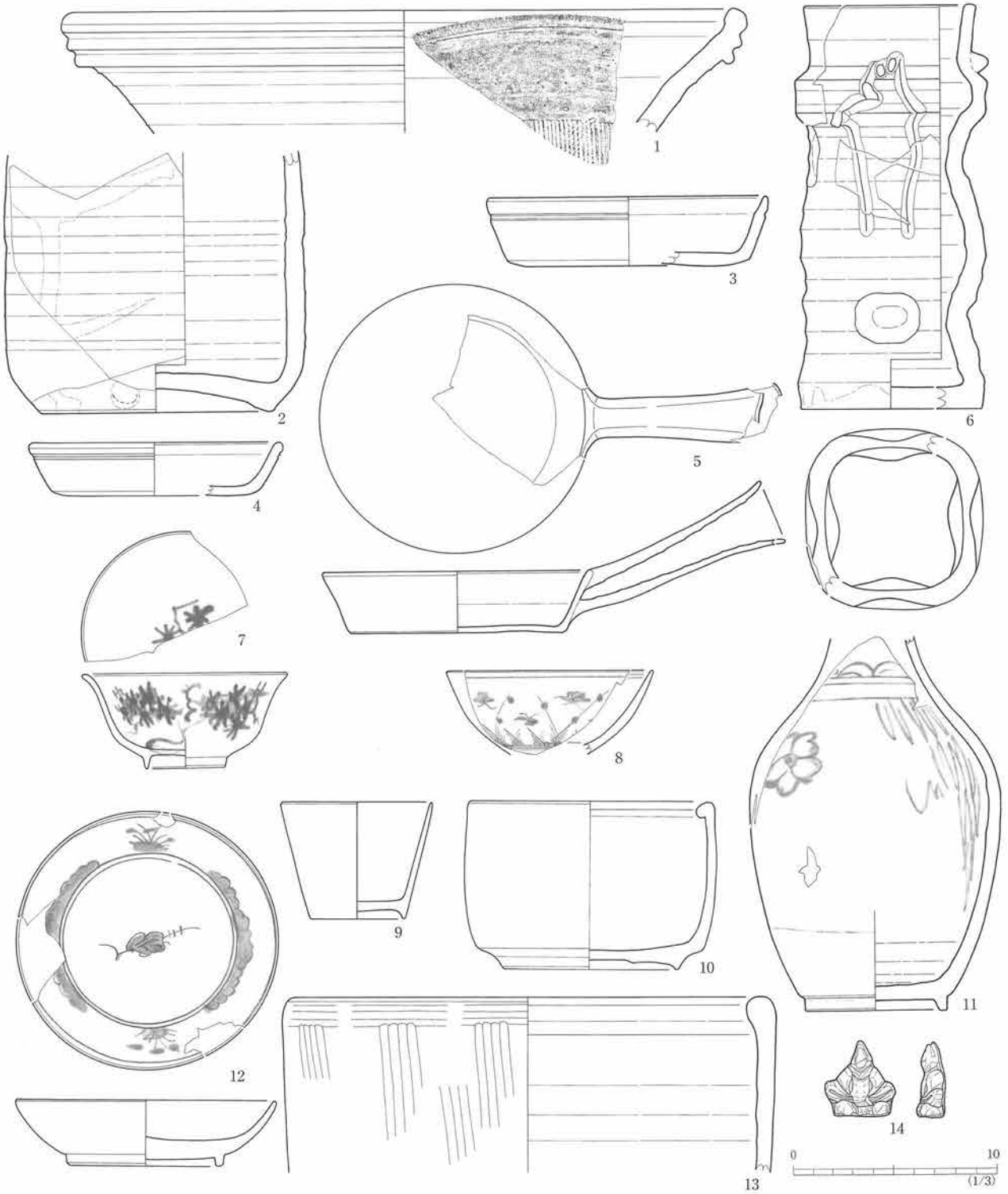
No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD2　2層	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C		2.9	(2.8)		I-69
2	SD2　2層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	18C後半？	6.7	2.7	3.9	347-15	I-70
3	SD2　2層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.0		(4.9)	349-5	I-94
4	SD2　2層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	10.0		(5.1)		I-72
5	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、高台部露胎	大堀相馬	18C前半以降	4.9	4.0	6.1	348-2	I-73
6	SD2　2層	陶器	小碗	白濁釉に緑釉流し	大堀相馬	19C前半	7.8		(3.5)	347-14	I-68
7	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し、内面に飴釉	大堀相馬	18C後半以降	9.4		(4.2)	348-4	I-75
8	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し、内面の一部に飴釉	大堀相馬	18C	10.4		(5.4)	348-3	I-74
9	SD2　2層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	18C前半以降	10.9	4.8	7.2	348-1	I-71
10	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し	大堀相馬	19C前半	8.4	3.3	4.5	348-12	I-84
11	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉？	大堀相馬	19C前半	9.2	3.9	5.0	349-1	I-88
12	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉、高台部露胎	大堀相馬	19C前半	8.8	3.5	5.3	349-3	I-90
13	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	19C前半	9.4	3.7	5.6	348-14	I-86
14	SD2　2層	陶器	碗	白濁した紫色の釉	大堀相馬	19C前半～	9.8	3.9	5.2	348-15	I-87
15	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し、体部下半、露胎の部分有	大堀相馬	19C前半	10.2		(4.9)	348-11	I-83
16	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、畳付研磨	大堀相馬	18C	8.4	3.6	6.0	348-7	I-78
17	SD2　2層	陶器	碗	掛け分け（上半：灰釉、下半：黒釉）高台と畳付に鉄釉	大堀相馬	19C前半？	8.6	5.5	3.2	348-13	I-85
18	SD2　2層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し、体部に凹み有（5ヶ所）	大堀相馬	18C中頃	9.0	6.0	4.0	348-5	I-76
19	SD2　2層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C	8.3		(3.1)		I-81
20	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、高台部露胎	大堀相馬	18C	9.5	4.2	4.7	348-6	I-77
21	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、畳付研磨	大堀相馬	18C前半以降	8.5	3.5	5.0	348-8	I-79
22	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、体部下半に沈線	大堀相馬	18C	9.3	3.8	6.8	348-9	I-80
23	SD2　2層	陶器	碗か鉢	白濁釉に飴釉流し、高台裏に墨書「三□？」有、口縁部及び内面近くが釉なし、蓋ものか？	大堀相馬	19C前半	8.2	4.6	5.7	349-2	I-89
24	SD2　2層	陶器	碗	淡青色釉	小野相馬	18C前半以降	11.6	5.1	7.5	350-8	I-113
25	SD2　2層	陶器	碗	灰釉、貫入が細かい	肥前	17C後半以降	(10.9)	4.7	(5.9)	347-10	I-63
26	SD2　2層	陶器	小碗	灰釉	京信楽	18C		3.7	(2.3)	347-9	I-59
27	SD2　2層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		4.8	(2.2)		I-65

第96図　SD2溝跡出土遺物（9）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 2層	陶器	碗	黒釉、飛鉋、漆つぎ	大堀相馬	19C前半		4.1	(4.1)	348-10	I-82
2	SD2 2層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		4.7	(4.1)	347-13	I-67
3	SD2 2層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	11.2	4.5	7.3	347-11	I-64
4	SD2 2層	陶器	碗	灰釉、内面に目跡	肥前	17C後半以降	11.4	4.4	7.8	347-12	I-66
5	SD2 2層	陶器	灯明皿	鉄釉	岸窯系	18C後半	8.6	5.0	2.5	350-1	I-103
6	SD2 2層	陶器	鉢	鉄釉	堤	19C		6.6	(5.2)	350-3	I-106
7	SD2 2層	陶器	仏飯具	灰釉、飴釉流し	大堀相馬	18C半ば以降			(2.6)		I-93
8	SD2 2層	陶器	皿?	灰釉、ケズリ出し輪高台	古瀬戸	15C後半		(5.8)	(0.9)	357-3	I-223
9	SD2 2層	陶器	皿	灰釉、ひだ皿、型押し成形、鉄絵	大堀相馬	19C前半	10.0	5.6	1.7	349-4	I-91
10	SD2 2層	陶器	鉢	淡青色釉、見込みに目跡（5ヶ所）	小野相馬	18C前半以降	21.8	9.8	12.9	350-9	I-112
11	SD2 2層	陶器	擂鉢	口縁部、鉄釉	瀬戸美濃	18C			(2.2)		I-104
12	SD2 2層	陶器	甕?		在地					370-8	I-447
13	SD2 2層	陶器	甕		常滑					370-9	I-448
14	SD2 2層	陶器	擂鉢	擦目8条以上	不明	18C?			(9.1)	350-5	I-108
15	SD2 2層	陶器	擂鉢	内部底部磨耗が著しい	不明（岸窯類系）			11.5	(5.1)	350-2	I-105
16	SD2 2層	陶器	擂鉢	白濁釉に緑釉流し、飴釉、漆つぎ、目跡3ヶ	大堀相馬	19C前半	20.2	7.9	9.4	349-6	I-92

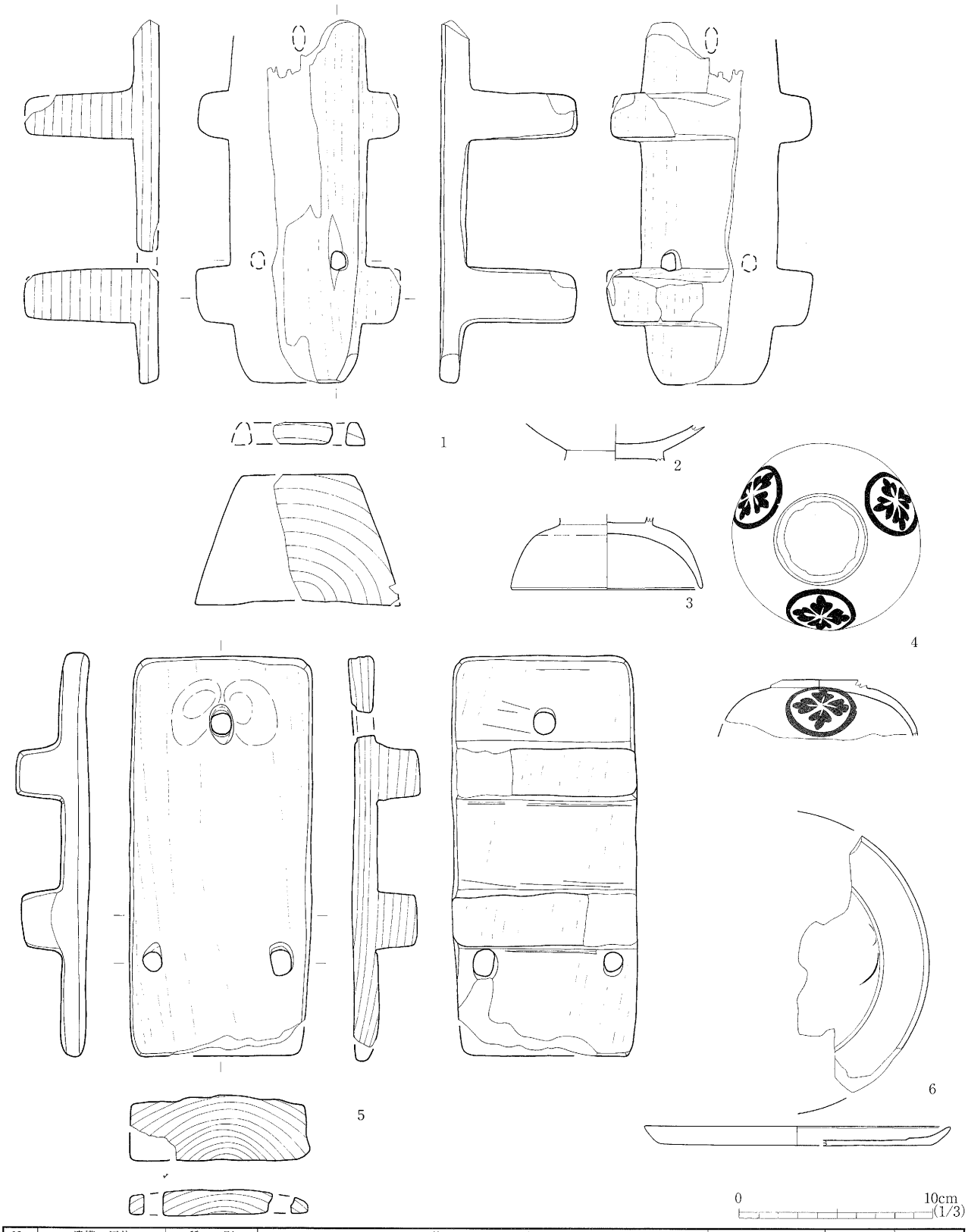
第97図　SD2溝跡出土遺物（10）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 2層	陶器	擂鉢		堤	19C	(33.8)		(6.2)	350-4	I-107
2	SD2 2層	陶器	甕	鉄釉に飴釉流し、重ね焼きの跡有	岸窯系？	17～18C		11.5	(13.5)	349-8	I-102
3	SD2 2層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(13.7)	(11.9)	3.5	350-7	I-110
4	SD2 2層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(12.3)	(10.2)	2.7		I-111a
5	SD2 2層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(12.4)	(10.6)	3.1	350-6	I-109
6	SD2 2層	陶器	花入れ	鉄釉、耳付き、耳は2個単位か？体部上半と下半に凹み有（4単位と推定）	岸窯系？	17C中頃	8.6	9	20.2	349-7	I-101
7	SD2 2層	陶器	碗	染付	瀬戸美濃	19C前半	10.2	4.0	4.8	371-15	J-15
8	SD2 2層	陶器	碗	染付、漆つぎ	肥前	17Cか18C	(10.2)		(4.2)	371-16	J-16
9	SD2 2層	陶器	猪口		肥前	19C前半	7.5	4.7	5.9	372-2	J-18
10	SD2 2層	陶器	香炉	蛇の目高台（蛇釉），高台に砂付着，見込みに砂付着	肥前	17C前半	12.3	8.5	8.4	372-3	J-20
11	SD2 2層	陶器	瓶	染付	肥前	17C後半以降		12.4	(18.8)	372-4	J-21
12	SD2 2層	陶器	皿	染付、くらわんか手	肥前	18C	13.0	7.8	3.3	372-1	J-17
13	SD2 3層	瓦質土器	手焙り	口縁部にミガキ、体部縦方向のナデ調整、内面炭化物付着、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	23.4		(8.8)	378-8	T-20

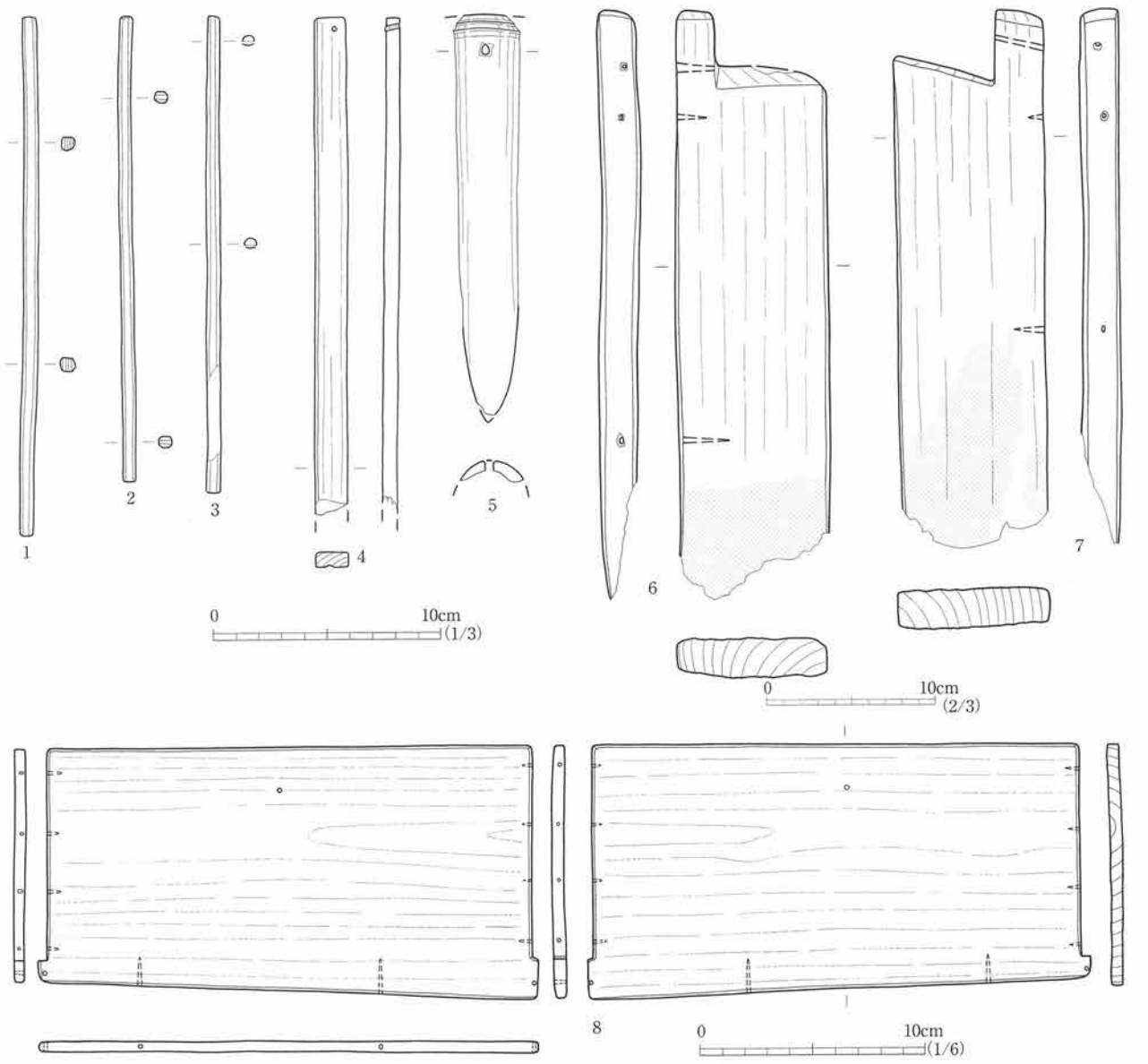
No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
14	SD2 2層	堤人形	お内裏様	3.75	3.5	1.2	10.8	380-15	P-20

第98図　SD2溝跡出土遺物（11）



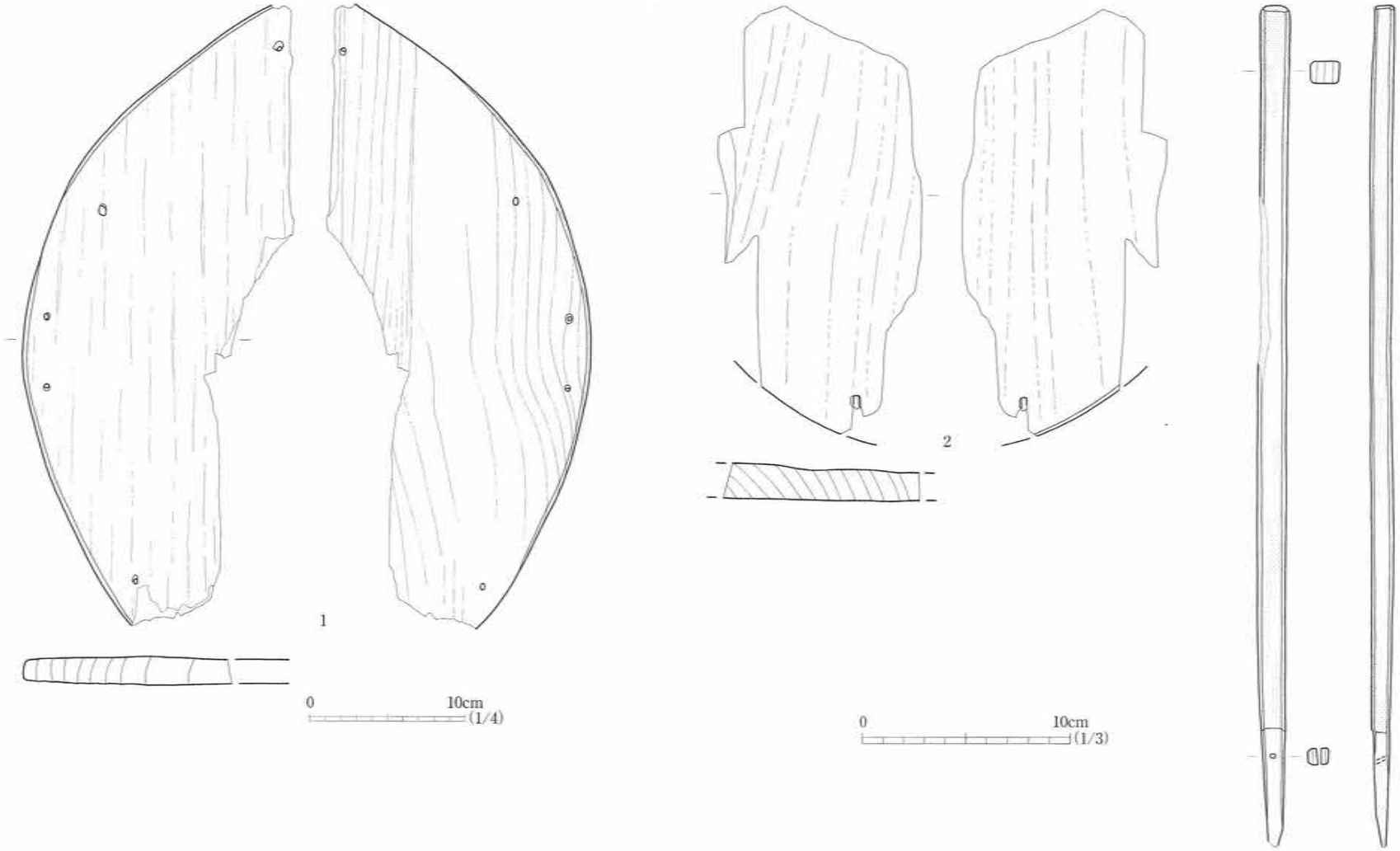
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD2　2層	連歯下駄	欠損、板目材、台幅が狭い割りに歯部が高い、歯部は下が広い台形である、横緒穴は後歯の前、台部長19.1cm　台幅（4.7）cm　高さ6.7cm	モクレン属	392-5	Lb-21
2	SD2　2層	漆器　椀	内外面赤色漆塗り仕上げ	ブナ属の一種	385-9	La-34
3	SD2　2層	漆器　蓋	内外面黒色漆塗り仕上げ	ブナ属の一種	385-11	La-36
4	SD2　2層	漆器　蓋	外面黒色漆の上に赤色漆で文様有（３単位）、内面赤色漆塗仕上げ	ブナ属の一種	385-4	La-29
5	SD2　2層	連歯下駄	ほぼ完形、板目材、指圧痕残る、横緒穴から鼻緒が引っ張られたような痕が残る、横緒穴は後歯の後、台部長20.9cm　台幅8.4cm　高さ3.3cm	スギ	393-1	Lb-22
6	SD2　2層	漆器　皿	内外面黒色漆塗仕上げ、内面黒漆塗仕上げの上に赤漆で文様有、内面周縁部に金箔？有	ブナ属の一種	388-2	La-56

第99図　SD2溝跡出土遺物（12）



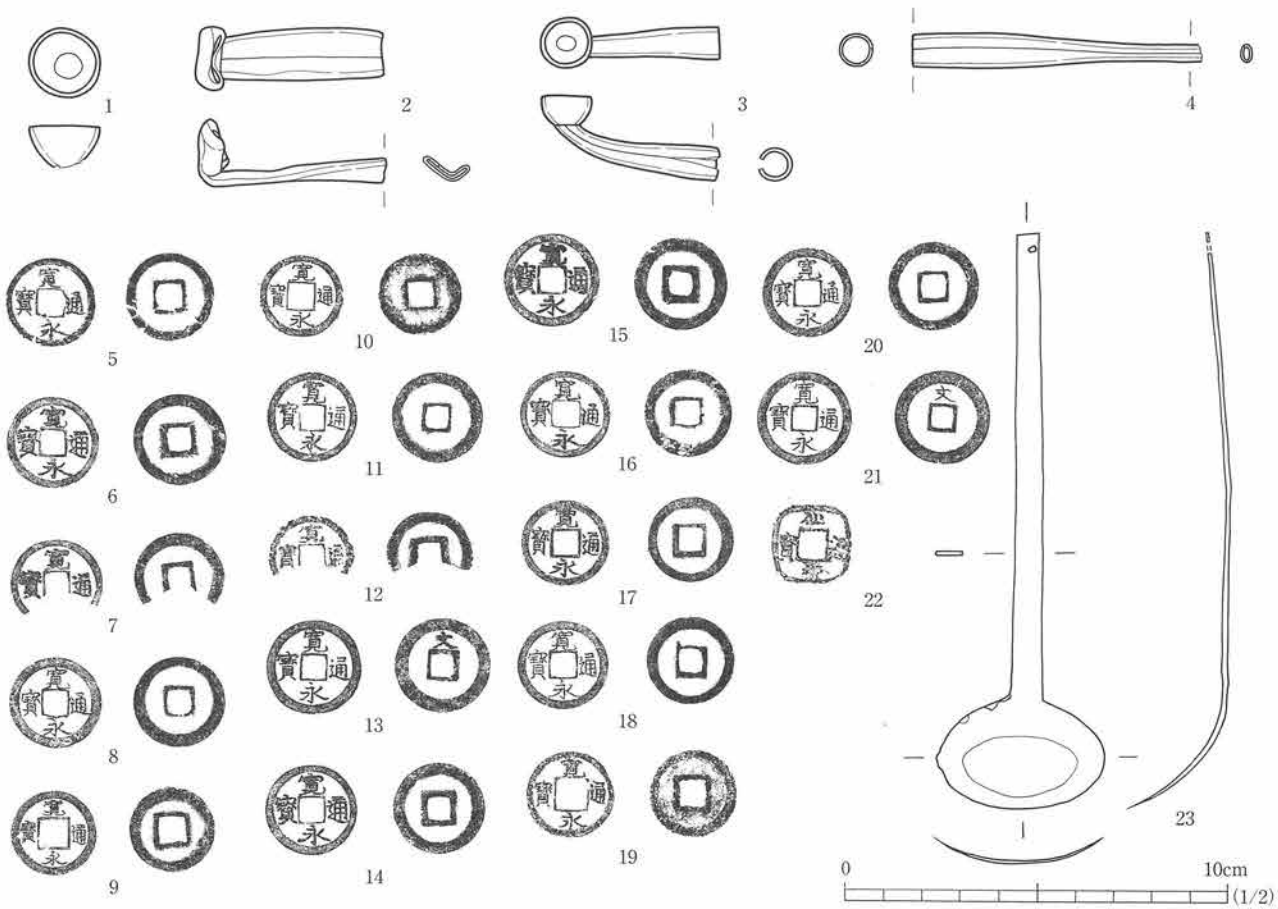
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD2　2層	箸	ほぼ完形、長さ23.2cm　最大径0.7cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-2	Lc-10
2	SD2　2層	箸	完形、長さ20.9cm　最大径0.6cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-3	Lc-11①
3	SD2　2層	箸	黒漆塗、長さ（21.3）cm　最大径0.7cm　断面→楕円形	ヒノキ属	416-3	Lc-11②
4	SD2　2層	不明	長さ（22.3）cm　幅1.5cm　厚さ0.7cm　上部に径0.2cmの木釘入り、柾目材	ヒノキ属類似種	416-1	Lc-9
5	SD2　2層	不明竹製品	長さ15.9cm　幅3.0cm　厚さ（0.65）cm　上部中央に穴（貫通、径約0.4cm）有	竹	394-6	Lc-12
6	SD2　2層	不明	長さ（35.2）cm　幅9.0cm　厚さ2.3cm　片側面に釘穴3有（上部1穴は貫通）下部加工面に焼こげ痕有、柾目材	スギ類似種	399-4	Lc-45b①
7	SD2　2層	不明	長さ（32.1）cm　幅8.9cm　厚さ2.3cm　片側面に釘穴3有（上部2穴は貫通し、木釘1.4cm残存）	ヒノキ属類似種	399-4	Lc-45b②
8	SD2　2層	枠	長さ44.3cm　幅22.9cm　厚さ1.0cm　釘穴有（表面3、側面2、上部4、下部4）	スギ	400-1	Lc-46

第100図　SD2溝跡出土遺物（13）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD2　2層	円形板	(35.4)cm×(15.4)cm　厚さ1.7cm　断面に焼けこげ痕有、柾目材	マツ属複維管束亜属	399-4	Lc-45a
2	SD2　2層	円形板	(20.4)cm×(9.9)cm　厚さ1.2cm　柾目材		399-4	Lc-45b③
3	SD2　2層	柄杓の柄	長さ40.0cm　幅1.4cm　厚さ1.2cm　柾目材	ヒノキ属	416-5	Lc-13

第101図　SD2溝跡出土遺物（14）

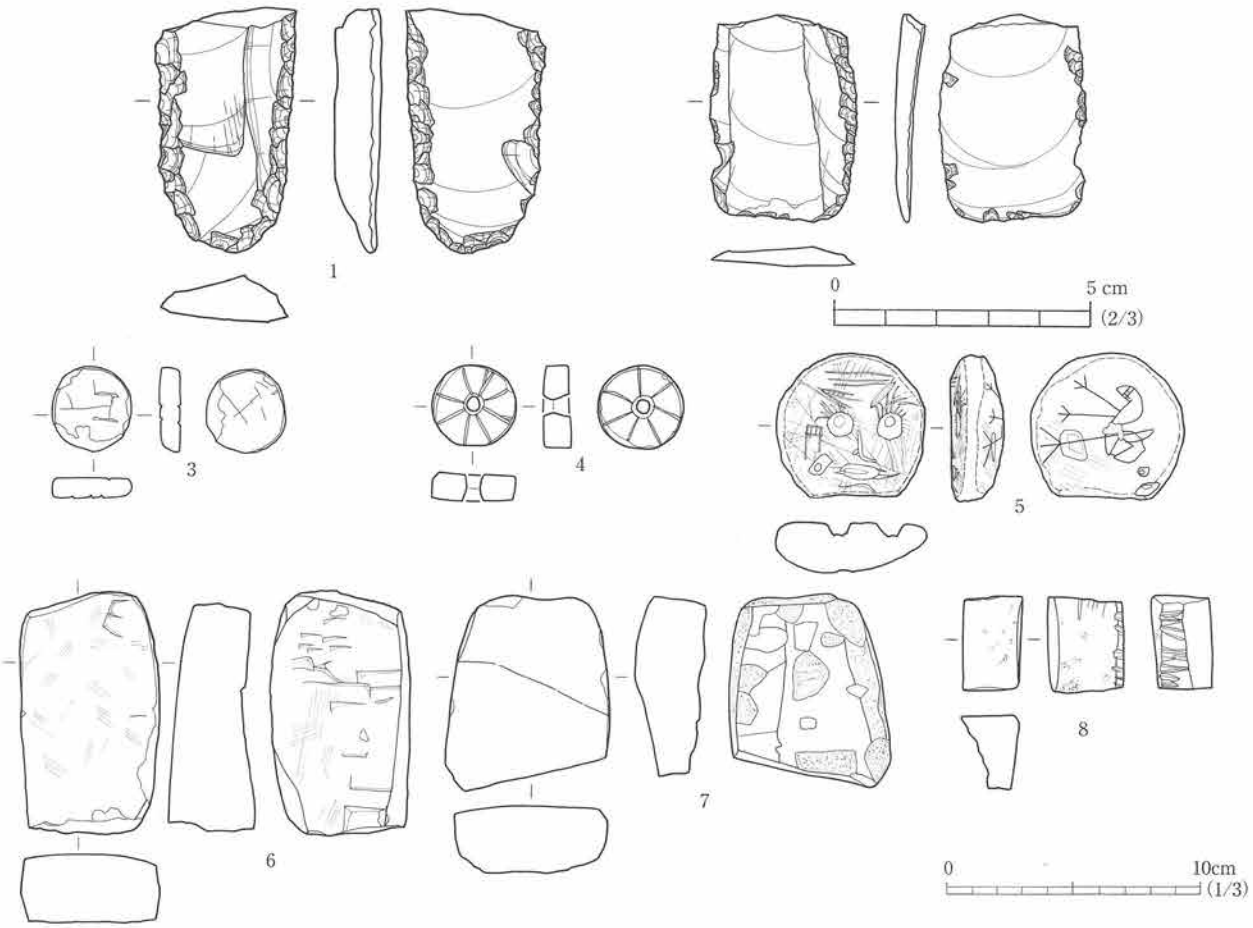


No.	遺構・層位	種　別	特　徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
1	SD2　2層	煙管　雁首	火皿のみ残存、全面に鍍金の痕跡有	(1.9)	1.7				Nb-3
2	SD2　2層	煙管　雁首	全体がつぶれて変形、Nb-7と同一か？	4.9	1.5×0.8	0.2×1.0		433-4	Nb-5
3	SD2　2層	煙管　雁首	全面に鍍金の痕跡有	4.7	1.3	0.8		433-3	Nb-4
4	SD2　2層	煙管　吸口	吸口先端部破損、一部に鍍金の痕跡有、Nb-5と同一か？	(7.6)		0.8	(0.5×0.3)	433-6	Nb-7

No.	遺構・層位	種　別	特　徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
5	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	1.45	430-3	Na-21
6	SD2　2層	銅製品　銭貨	（古）寛永通宝	2.4	3.45	430-4	Na-22
7	SD2　2層	銅製品　銭貨	（古）寛永通宝	2.4	(2.85)	430-5	Na-23
8	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.4	2.25	430-6	Na-24
9	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.2	1.75	430-7	Na-25
10	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.4	4.0	430-8	Na-26
11	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.2	1.4	430-9	Na-27
12	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	(1.5)	430-10	Na-28
13	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.5	4.8	430-11	Na-29
14	SD2　2層	銅製品　銭貨	（古）寛永通宝	2.4	3.4	430-12	Na-30
15	SD2　2層	銅製品　銭貨	（古）寛永通宝	2.5	3.1	430-13	Na-31
16	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	2.55	430-15	Na-33
17	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	2.3	430-16	Na-34
18	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	2.65	430-17	Na-35
19	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.3	3.05	430-18	Na-36
20	SD2　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.4	2.55	431-2	Na-38
21	SD2　1層		（新）寛永通宝	2.5	3.25	431-1	Na-37
22	SD2　2層		仙台通宝	2.1	1.35	430-14	Na-32

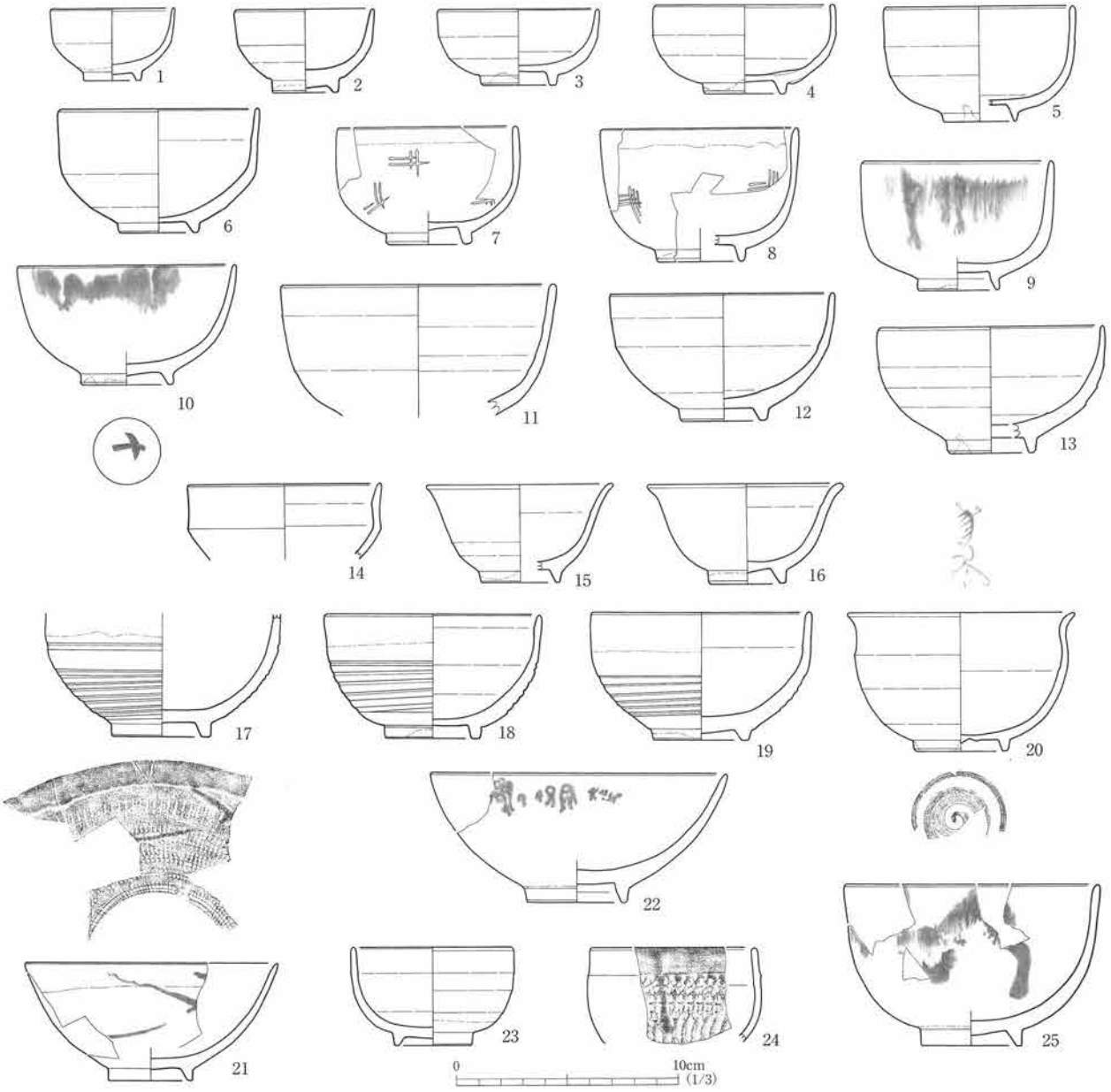
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考	写真図版	登録番号
23	SD2　2層	匙	15.7	4.4	0.2	13			Nc-5

第102図　SD2溝跡出土遺物（15）



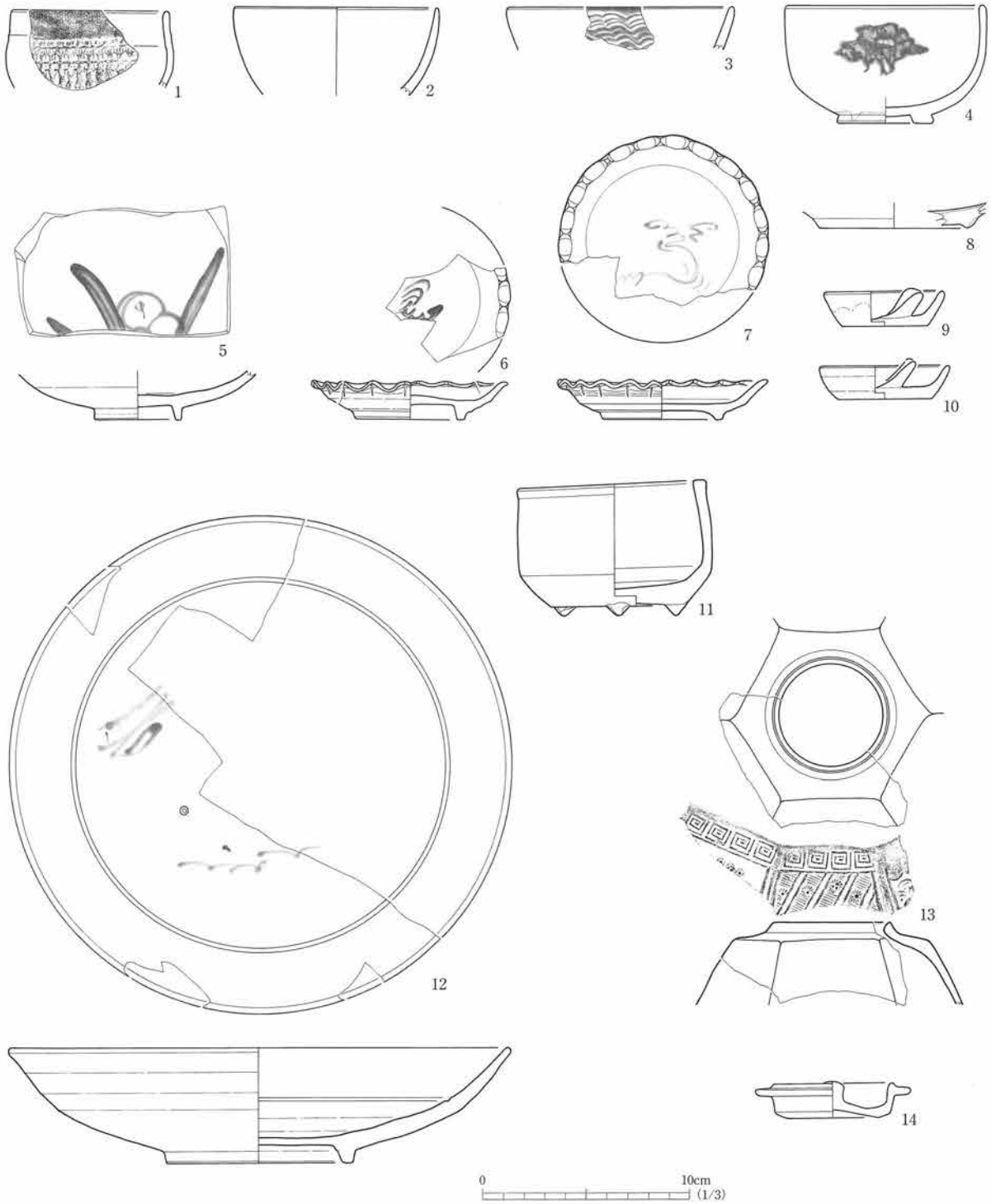
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD2　2層	不定形	(4.9)	2.7	1	15	頁岩		418-1	Ka-156
2	SD2　2層	不定形	(4.1)	2.9	0.6	6	珪質頁岩		418-2	Ka-157
3	SD2　2層	石製品	3.4	3.1	0.9	5.9	デイサイト質凝灰岩		422-2	Kd-2
4	SD3　2層	紡錘車	3.3	3.3	1.1	12.8	デイサイト質凝灰岩		422-4	Kd-4
5	SD2　2層	石製品	5.9	6	2.2	62	凝灰岩頁岩		422-3	Kd-3
6	SD2　2層	砥石	9.8	5.5	3.4	316	デイサイト質凝灰岩		427-2	Kd-94
7	SD2　2層	砥石	7.8	6.3	2.8	196	デイサイト質凝灰岩		427-1	Kd-93
8	SD2　2層	砥石	3.8	2.4	2.9	39	デイサイト質砂岩		427-10	Kd-111

第103図　SD2溝跡出土遺物（16）



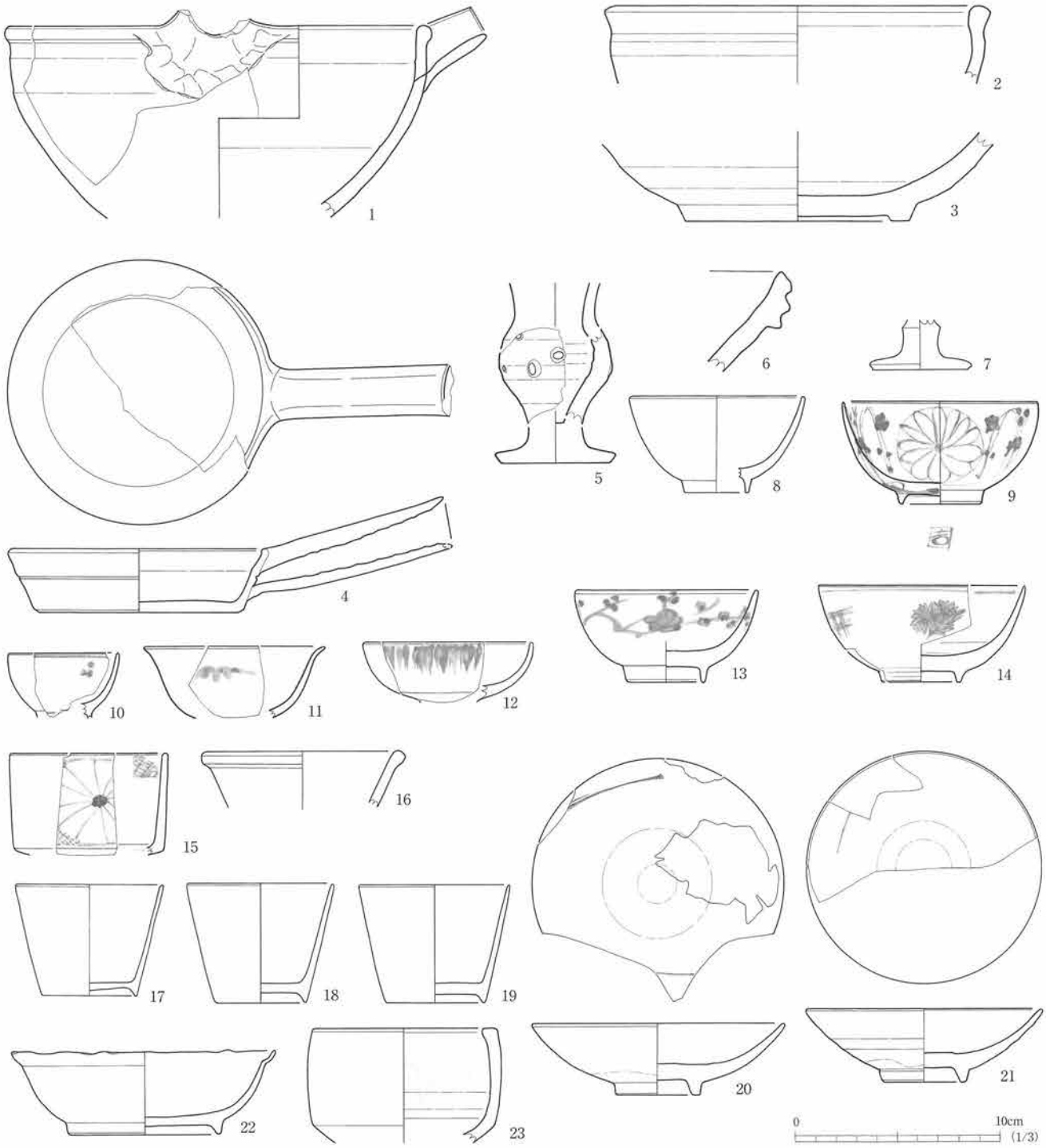
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 1層	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	18C後半？	5.5	2.5	3.3	346-5	I-32
2	SD2 1層	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C後半	6.0	2.8	3.8	346-4	I-31
3	SD2 1層	陶器	小碗	灰釉	大堀相馬	18C？	7.1	3.2	3.5		I-9
4	SD2 1層	陶器	小碗	灰釉	大堀相馬	18C	7.8	3.5	4.0	346-3	I-29
5	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉、高台内露胎	大堀相馬	18C後半以降	8.4	3.3	5.2		I-30
6	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	18C後半	9.0	3.6	5.6	345-9	I-20
7	SD2 1層	陶器	碗	掛け分け（口縁部から内面白濁釉、体部は青黒色釉、井桁状の文様）高台と畳付けに鉄釉	大堀相馬	19C前半？	8.0	3.8	5.3	345-6	I-17
8	SD2 1層	陶器	碗	掛け分け（口縁部から内面白濁釉、体部は青黒色釉、井桁状の文様）高台と畳付けに鉄釉	大堀相馬	19C前半	8.8	3.9	6.1	345-7	I-18
9	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉に飴釉流し、高台内露胎	大堀相馬	18C後半	8.7	3.8	5.9	345-3	I-14
10	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉に緑釉流し、高台裏に墨書「十」か、高台部露胎	大堀相馬	19C前半	9.8	4.0	5.4	345-4	I-15
11	SD2 1層	陶器	碗	灰釉	大堀相馬	18C前半以降	12.2		(5.9)		I-23
12	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、貫入が細かい	大堀相馬	18C前半以降	10.0	3.3	5.8	345-8	I-19
13	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、高台露胎	大堀相馬	18C前半以降	10.0	3.7	5.7	345-2	I-13
14	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、貫入が細かい	大堀相馬	18C前半以降	8.5		(3.4)		I-22
15	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	19C前半	8.3	3.5	4.5	345-10	I-24
16	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	19C前半	8.7	3.4	4.5	346-2	I-28
17	SD2 1層	陶器	碗	掛け分け（上半：灰釉、下半：鉄釉）	大堀相馬	18C前半以降		4.2	(5.4)	345-12	I-26
18	SD2 1層	陶器	碗	掛け分け（上半：白濁釉、下半：鉄釉）	大堀相馬	18C半ば以降	9.5	4.1	5.6	345-11	I-25
19	SD2 1層	陶器	碗	掛け分け（上半：白濁釉、下半：鉄釉）	大堀相馬	18C後半以降	9.8	4.0	5.8	346-1	I-27
20	SD2 1層	陶器	碗	白濁釉、見込みに鉄絵	大堀相馬	19C前半	10.0	4.1	6.2	345-13	I-21
21	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、飴釉流し、飛鉋	大堀相馬	19C前半～半ば頃末	11.2	3.8	5.4	345-5	I-16
22	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、貫入が細かい	大堀相馬	18C前半以降	8.5		(3.4)	345-1	I-12
23	SD2 1層	陶器	小碗	灰釉、漆つぎ？	美濃	18C	7.1	3.3	4.5	344-15	I-4
24	SD2 1層	陶器	碗	鉄茶碗、黒釉（内面及び口縁部）	瀬戸美濃	18C	7.5		(4.3)	344-14	I-2b
25	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、飴釉流し	小野相馬？	18C前半～19C前半	11.5	4.6	7.3	347-7	I-56

第104図　SD2溝跡出土遺物（17）



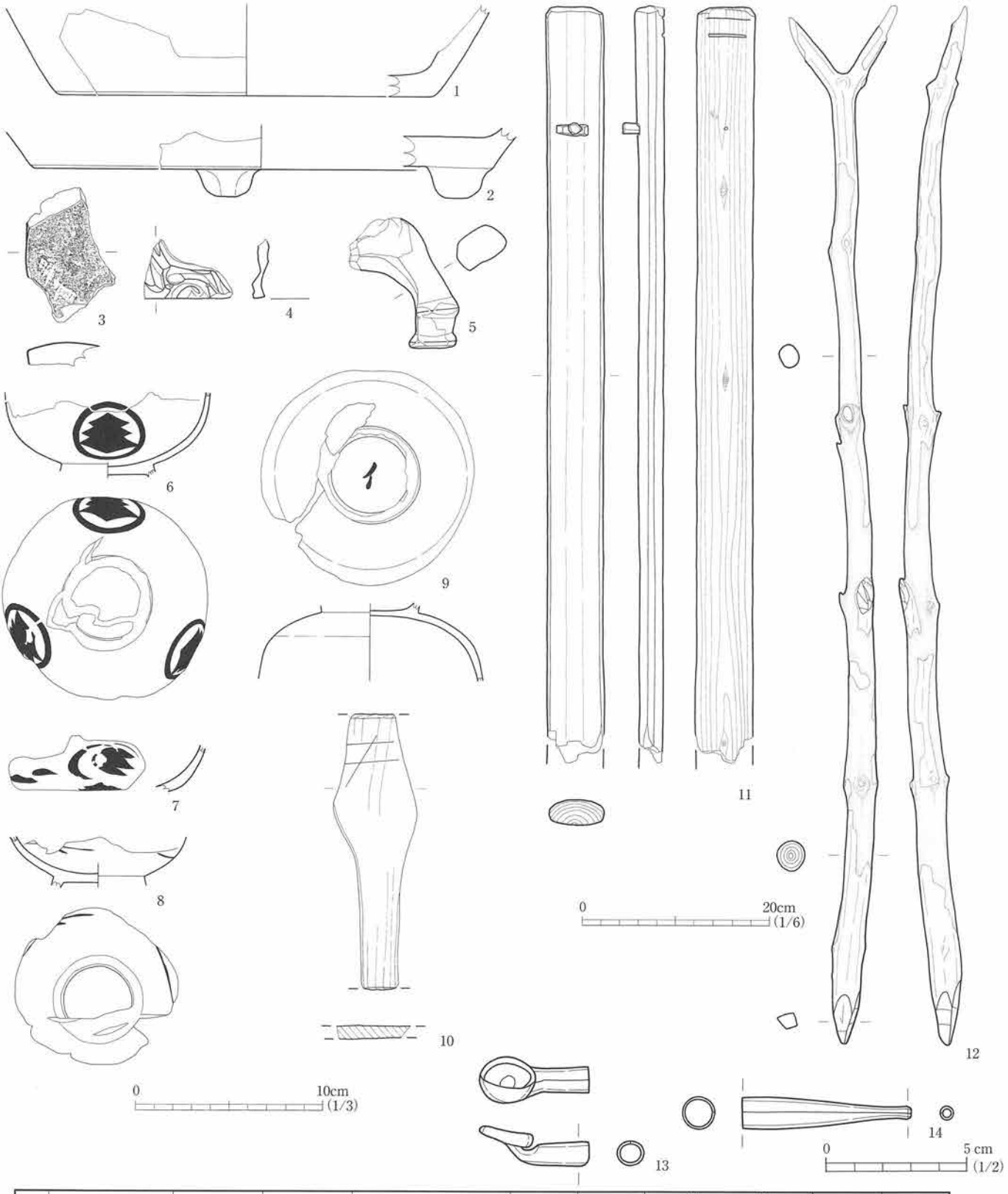
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量			写真図版	登録番号
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	SD2 1層	陶器	碗	鎧茶碗、黒釉（内面及び口縁部）	瀬戸美濃	18C	(7.6)		(3.7)	344-14	I-2a
2	SD2 1層	陶器	碗	灰釉	瀬戸美濃？	17C後半？	9.5		(4.3)		I-7
3	SD2 1層	陶器	碗	刷毛目文、現川焼か？	肥前	18C以降	(10.6)		(2.1)	357-5	I-225
4	SD2 1層	陶器	碗	灰釉、蛇の目高台、1ヶ所に鉄絵	京信楽	18C以降	9.4	5.7	4.5	344-16	I-8
5	SD2 1層	陶器	皿	灰釉、鉄絵	大堀相馬	18C末～19C		4.1	(2.4)	346-8	I-33
6	SD2 1層	陶器	皿	鉄絵、ひだ皿、かぶ文	大堀相馬	19C前半？	(9.4)	5.2	1.8	346-7	I-35
7	SD2 1層	陶器	皿	鉄絵、ひだ皿、かぶ文	大堀相馬	19C前半？	10.0	5.7	1.9	346-9	I-36
8	SD2 1層	陶器	皿	灰釉、高台内輪トチン痕、大窯1期	瀬戸美濃	16C		(7.0)	(1.2)	344-13	I-1
9	SD2 1層	陶器	灯明皿		堤	19C	5.6	4.0	1.6	347-3	I-49
10	SD2 1層	陶器	灯明皿		堤	19C	6.0	4.4	1.6	347-4	I-50
11	SD2 1層	陶器	香炉	全面施釉、三脚	堤？	江戸時代	8.9	6.3	6.5	347-6	I-51
12	SD2 1層	陶器	中皿	わら灰釉？鉄絵（風景）	大堀相馬	18C後半以降	24.0	9.0	5.6	346-6	I-34
13	SD2 1層	陶器	壺	六角形の壺か、鉄釉、型押しによる文様	大堀相馬	19C前半	5.6		(3.9)	346-10	I-37
14	SD2 1層	陶器	蓋	青釉、土瓶または急須の蓋	大堀相馬	19C前半	7.4		1.8	347-2	I-39

第105図　SD2溝跡出土遺物（18）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 1層	陶器	片口	灰釉	美濃？	18C後半以降	(20.8)		(10.4)	344-18	I-11
2	SD2 1層	陶器	甕	灰釉	瀬戸美濃	18C？	18.0		(3.9)		I-6
3	SD2 1層	陶器	鉢	鉄釉	堤	19C前半		9.0	(4.7)	347-5	I-53
4	SD2 1層	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	(12.4)	9.8	3.2	356-9	I-219
5	SD2 1層	陶器	仏花瓶	鉄釉（黒釉）に長石釉散らし	美濃	18C後半以降			(4.7)	344-17	I-10
6	SD2 1層	陶器	擂鉢		堤	19C前半					I-52
7	SD2 1層	陶器	仏飯具	灰釉	大堀相馬	18C		5.1	(2.5)	347-1	I-38
8	SD2 1層	磁器	小碗	染付？	肥前	18C	9.6	3.2	4.8	371-4	J-4
9	SD2 1層	磁器	碗	染付、外面：菊花文、高台裏に銘『吉』有	肥前	18C	9.7	4.1	5.1	371-2	J-2
10	SD2 1層	磁器	小坏	染付	肥前	17C	(5.4)	(2.7)	(3.2)	371-6	J-6
11	SD2 1層	磁器	小碗	染付	肥前	17C後半	(9.6)		(3.5)	371-5	J-5
12	SD2 1層	磁器	仏飯具	染付、外面：雨降文、内面口縁部付近に異化物付着	肥前	18C	(8.4)	(2.7)	(3.0)	371-14	J-14
13	SD2 1層	磁器	碗	染付、外面：梅樹文	肥前	18C後半	9.1	4.0	4.6	371-1	J-1
14	SD2 1層	磁器	碗	染付、内面・コンニャク印判、くらわんか手	肥前	18C	10.2	3.8	4.8	371-3	J-3
15	SD2 1層	磁器	碗	半筒碗、染付、外面に菊文	肥前	18C後半	(7.8)			371-7	J-7
16	SD2 1層	磁器	碗	漆つぎのあと、玉縁口縁、内面に型押し文様（文様構成は不明）	中国	14C後半か15C前半	(10.0)		(2.8)	376-15	J-92
17	SD2 1層	磁器	猪口		肥前	19C前半	7.3	4.7	5.6	371-11	J-11
18	SD2 1層	磁器	猪口		肥前	19C	7.3	4.5	6.0	371-12	J-12
19	SD2 1層	磁器	猪口	漆つぎ	肥前	19C前半	7.4	4.8	5.9	371-13	J-13
20	SD2 1層	磁器	皿	染付、内面：折れ松葉文？蛇の目剥ぎ	肥前	18C後半以降	12.5	4.2	3.6	371-8	J-8
21	SD2 1層	磁器	皿	染付、見込み蛇の目剥ぎ	肥前	17C後半～18C	11.6	4.2	3.7	371-9	J-9
22	SD2 1層	磁器	鉢	輪花、口縁部に鉄釉	肥前	18C	13.0	7.4	4.2	371-10	J-10
23	SD2 1層	土師質土器	香炉	内面：ロクロナデ、施釉焦げ有、外面：丁寧なミガキ	在地	江戸時代	9.0			344-6	Ca-15

第106図　SD2溝跡出土遺物（19）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 1層	瓦質土器	鉢	胎土に白色針状物質含む	在地	18C～19C前半		(20.0)	(4.4)		T-19
2	SD2 1層	瓦質土器	鉢	脚付き，胎土に白色針状物質含む	在地			(24.6)	(3.9)		T-18

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
3	SD2 1層	丸瓦	ナデ	剥離	燻し瓦		F-1

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
4	SD2 1層	堤人形	人形の下部	(3.2)	(4.7)		(8.4)	380-16	P-44
5	SD2 1層	土偶	脚	(7.0)			(76.0)	380-20	P-28

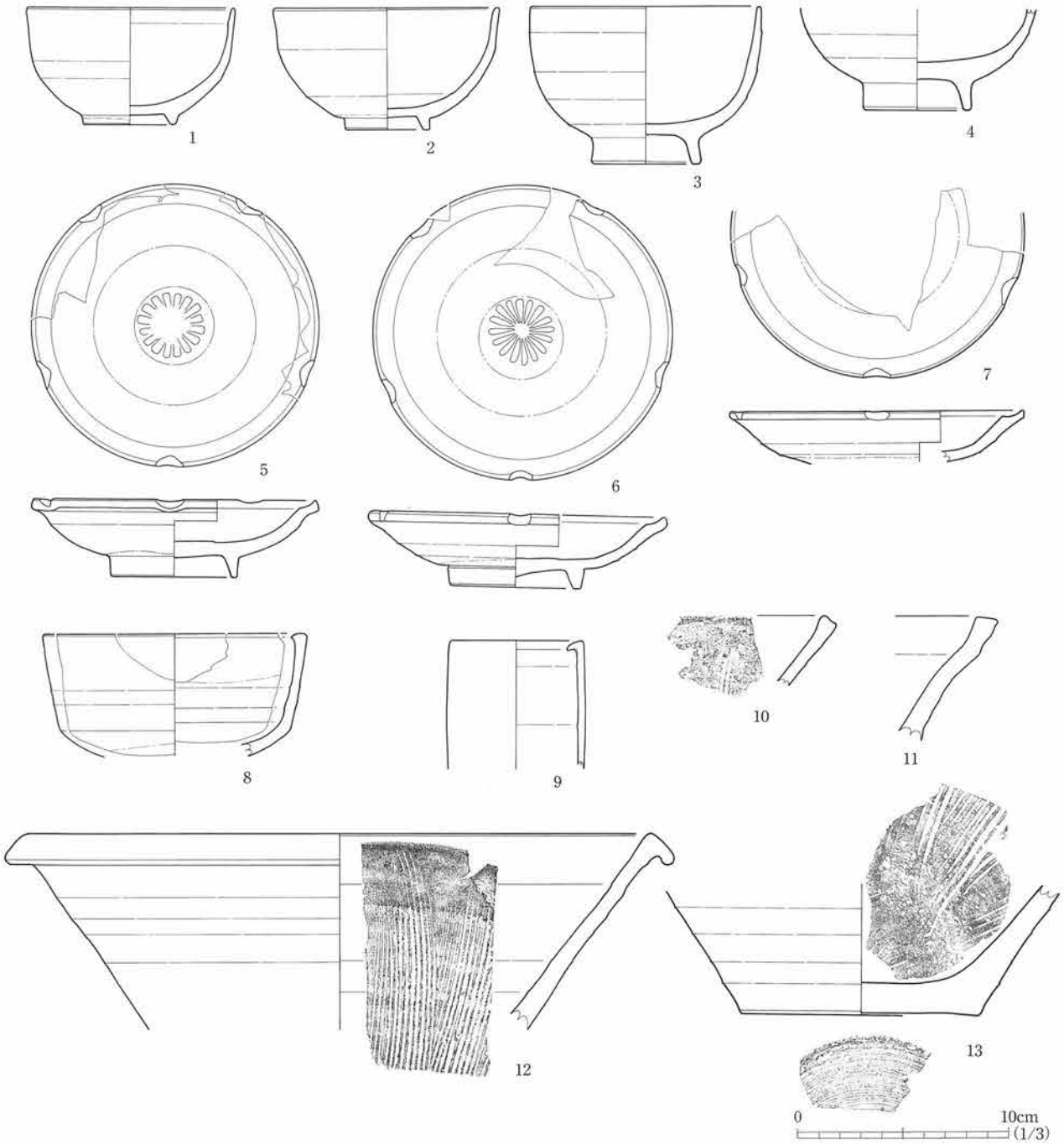
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
6	SD2 1層	椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様（三階菱？）有、（3単位）、内面赤色漆塗仕上げ	ブナ属の一種	385-5	La-30
7	SD2 1層	椀	内面赤漆仕上げ、外面黒漆仕上げ、その上に赤色漆で文様有	ブナ属の一種	389-3	La-64
8	SD2 1層	椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様わずかに有、内面赤色漆塗り仕上げ	ブナ属の一種	385-8	La-33
9	SD2 1層	蓋	内外面赤色漆塗り仕上げ、摘み外面に黒色で（「イ」）の銘有	ブナ属の一種	388-5	La-59
10	SD2 1層	不明	長さ14.8cm 幅（4.5）cm 厚さ0.75cm 板目材		394-4	Lc-7
11	SD2 1層	不明	長さ（81.9）cm 幅（6.2）cm 厚さ3.1cm 上部に刃物痕有	スギ	401-1	Lc-51
12	SD2 1層	加工木	上部二又になっている、下端部に加工痕有、全長（112.2）cm幅、径3.4cm	イチイ	400-4	Lc-50

No.	遺構・層位	種別	特徴	全長(cm)	火皿径(cm)	羅宇口径(cm)	吸口径(cm)	写真図版	登録番号
13	SD2 1層	煙管 雁首	全面に鍍金の痕跡有、火皿、羅宇口がつぶれている	3.9	1.9×1.1	0.7×0.9		433-1	Nb-1
14	SD2 1層	煙管 吸口	全面に鍍金の痕跡有	5.9		1.1	0.4	431-2	Nb-2

第107図　SD2溝跡出土遺物（20）

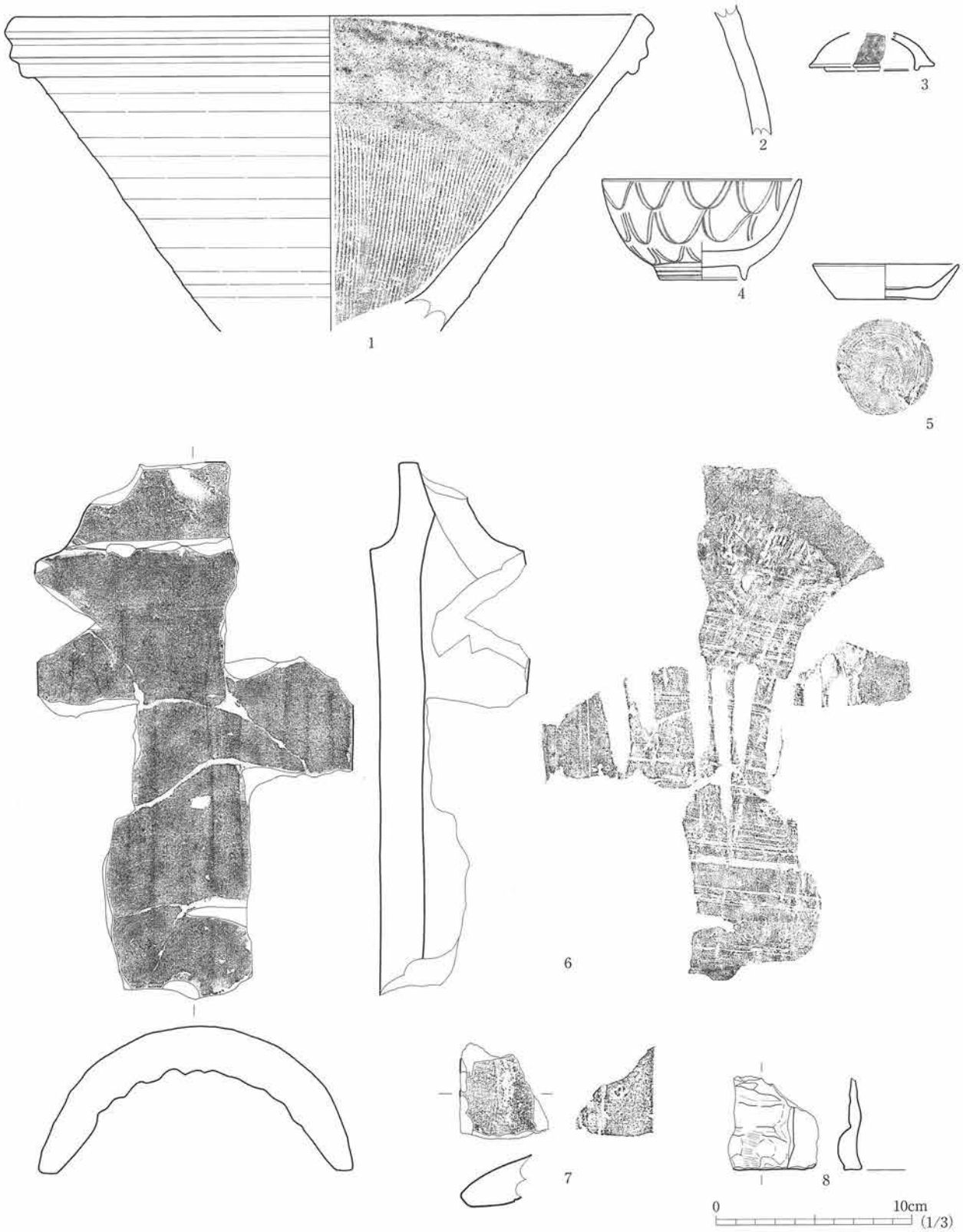
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD2　1層	砥石	8.9	3.8	1.6	89	デイサイト砂岩		427-13	Kd-118
2	SD2　1層	砥石	8.4	4.1	2	68	デイサイト質凝灰岩		427-3	Kd-97
3	SD2　1層	砥石	8.8	5.2	2.8	118	デイサイト質凝灰岩		427-4	Kd-98
4	SD2　1層	砥石	11	5.4	2.3	282	デイサイト質凝灰岩		427-12	Kd-117
5	SD2　1層	砥石	8.5	7.6	2.8	240	デイサイト質凝灰岩		427-11	Kd-115
6	SD2　1層	砥石	11.9	5.3	3.8	490	デイサイト質凝灰岩		427-6	Kd-100
7	SD2　1層	砥石	9.2	5.4	4.1	390	デイサイト質凝灰岩		427-14	Kd-119
8	SD2（古）1層	砥石	11.4	4.5	3.1	232	砂質凝灰岩		427-5	Kd-99
9	SD2（古）	砥石	10.7	6	2.8	162	デイサイト質凝灰岩		426-13	Kd-85

第108図　SD2溝跡出土遺物（21）



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD2　配石中	陶器	碗	白濁釉	大堀相馬	18C後半以降	9.8	4.2	5.5	351-6	I-123
2	SD2　配石中	陶器	碗	わら灰釉	大堀相馬	18C	10.4	3.9	5.8	351-5	I-122
3	SD2　配石中	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	10.8	4.8	7.5	351-11	I-131
4	SD2　配石中	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.1	(4.8)		I-130
5	SD2　配石中	陶器	皿	輪花、見込みに菊花状の印花文、蛇の目釉剥ぎ	小野相馬	18C	13.5	5.9	3.7	351-1	I-115
6	SD2　配石中	陶器	皿	輪花、見込みに菊花状の印花文、蛇の目釉剥ぎ	小野相馬	18C	14.0	3.5	6.2	351-2	I-116
7	SD2　配石中	陶器	皿	輪花、見込みに菊花状の印花文、蛇の目釉剥ぎ	小野相馬	18C	13.8		(2.4)	351-3	I-118
8	SD2　配石中	陶器	香炉	淡青色釉（外面及び内面口縁部）	小野相馬？	18C	12.4		(5.8)	351-4	I-121
9	SD2　配石中	陶器	灰吹き？	灰釉、内面も施釉	大堀相馬	18C	6.2		(6.1)	351-7	I-124
10	SD2　配石中	陶器	擂鉢		岸窯系	17C中頃				347-8	I-58
11	SD2　配石中	陶器	擂鉢		岸窯系？	17C中頃？					I-126
12	SD2　配石中	陶器	擂鉢		岸窯系	17C後半以降	31.3		(9.3)	351-9	I-127
13	SD2　配石中	陶器	擂鉢	擂目８条以上	不明	江戸時代		11.2	(6.2)	351-10	I-129

第109図　SD2溝跡出土遺物（22）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD2 配石中	陶器	擂鉢	擂目17条、外面：重ね焼きの際の窯道具の垂の跡	堤	19C	33.2		(16.4)	352-1	I-128
2	SD2 配石中	陶器	甕		常滑					370-11	I-450
3	SD2 配石中	磁器	蓋	染付、小型の壺か鉢、急須の蓋か	肥前	18C？	(6.5)	(4.7)	(2.0)	373-9	J-39
4	SD2 配石中	磁器	碗	染付、外面：二重網目文、くらわんか手	肥前	18C後半	10.2	4.6	5.2	373-8	J-38
5	SD2 配石中	土師質土器	皿	内外面 炭化物付着（灯明皿として使用か）、底部回転糸切り	在地	江戸時代	7.5	5.0	1.8	343-14	Ca-7

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
6	SD2 配石中	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦	381-4	F-3
7	SD2 配石中	丸瓦	ナデ	布目痕	燻し瓦		F-2

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
8	SD2 配石中	堤人形	人形の下部	(4.8)	(4.6)		(17.2)	380-17	P-34

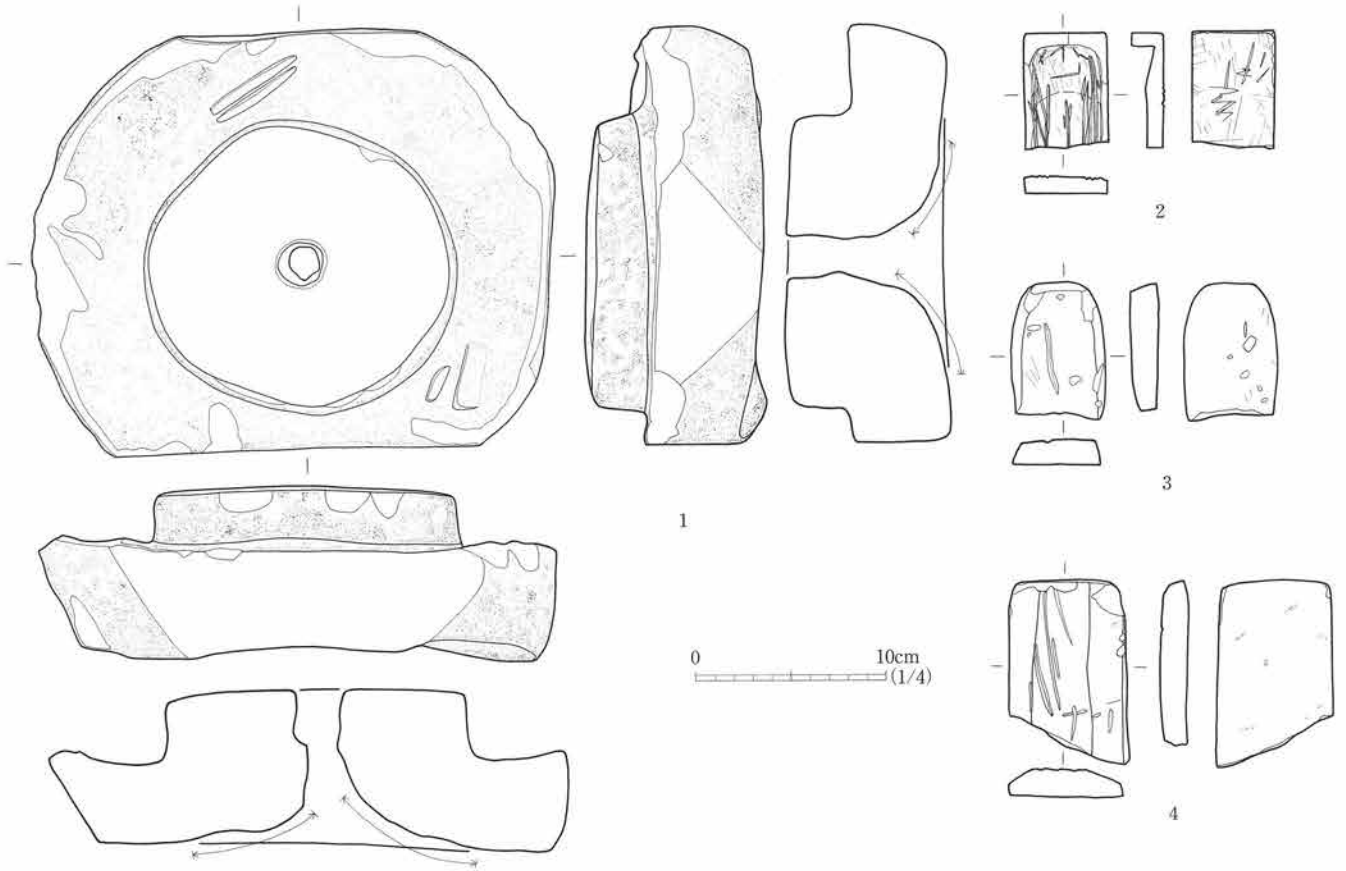
第110図　SD2溝跡出土遺物（23）

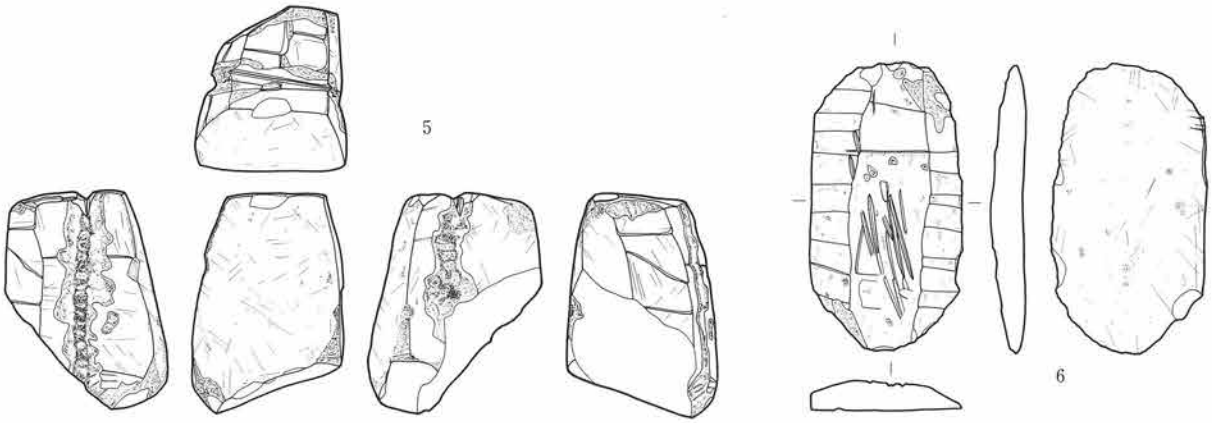
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD2　配石中	箸	完形、長さ19.5cm　最大径0.6cm　断面→四角形	スギ	416-4	Lc-17①
2	SD2　配石中	箸	完形、長さ23.3cm　最大径0.6cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-4	Lc-17②
3	SD2　配石中	箸	完形、長さ（14.0）cm　最大径0.5cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-4	Lc-17③
4	SD2　配石中	箸	黒漆塗、長さ（19.6）cm　最大径0.6cm　断面→四角形	イネ科　タケ亜種	416-4	Lc-17④

No.	遺構・層位	種　別	特　徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
5	SD2　配石中	煙管　雁首		1.3	1.1			433-5	Nb-6

No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
6	SD2　配石中	砥石	5.8	5.8	0.9	40	デイサイト質砂岩		426-15	Kd-87
7	SD2　配石中	砥石	6.2	4.4	2.6	89	デイサイト質凝灰岩		426-16	Kd-88
8	SD2　配石中	砥石	5.2	6	2	99	デイサイト質凝灰岩		426-18	Kd-90
9	SD2　配石中	砥石	10.3	4.8	2.6	140	デイサイト質凝灰岩		426-14	Kd-86
10	SD2　配石中	砥石	15	4.6	1	73	デイサイト質凝灰岩		426-17	Kd-89
11	SD2　配石中	砥石	10.3	6.2	2.6	222	砂質凝灰岩		427-17	Kd-124
12	SD2　配石中	砥石	12.9	6.4	3.2	466	デイサイト砂岩		427-16	Kd-123

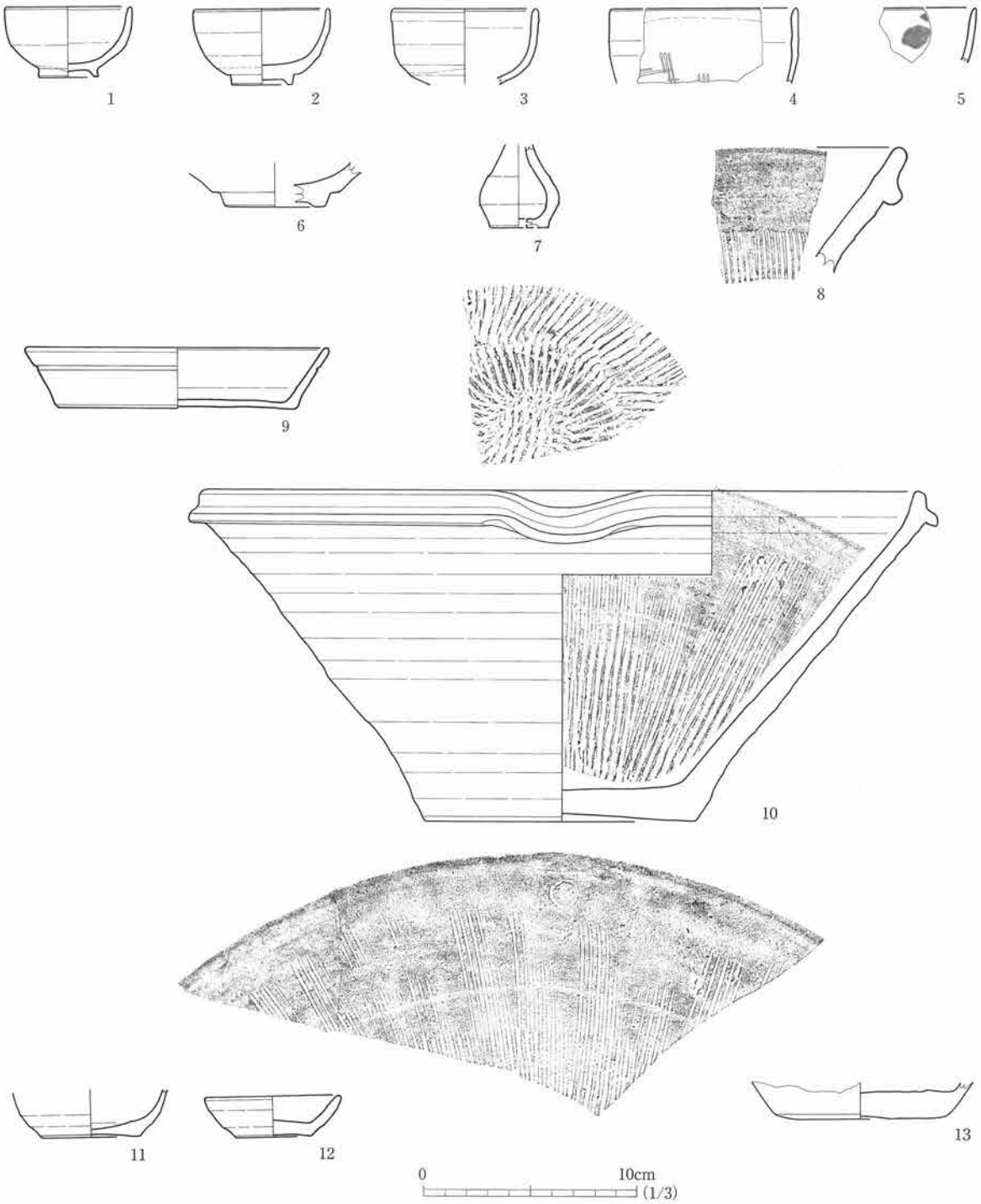
第111図　SD2溝跡出土遺物（24）





No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD2　配石中	石臼	(22.1)	(9.3)		6.280	安山岩		452-2	Kd-48
2	SD2　配石中	硯	4.2	3.3	0.7	21.4	頁岩		422-7	Kd-12
3	SD2　配石中	砥石	5.6	3.7	1.2	36	デイサイト砂岩		427-21	Kd-135
4	SD2　配石中	砥石	7.4	4.6	1.1	62	デイサイト質凝灰岩		427-15	Kd-120
5	SD2　配石中	砥石	8.8	6.1	6.6	350	デイサイト質凝灰岩		426-19	Kd-92
6	SD2　配石中	砥石	11.1	6.1	1.3	116	デイサイト質凝灰岩		426-12	Kd-84

第112図　SD2溝跡出土遺物（25）



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD2　層不明	陶器	小坏	白濁釉	大堀相馬	18C後半以降	6.0	2.8	3.3	356-6	I-215
2	SD2　層不明	陶器	小坏	灰釉	瀬戸美濃	17C後半以降	6.3	2.8	3.6	356-4	I-212
3	SD2　層不明	陶器	小坏	灰釉	美濃	18C	6.9		(3.6)		I-213
4	SD2　層不明	陶器	小坏	掛け分け（口縁部から内面白濁釉、体部は青黒色釉）井桁状の文様	大堀相馬	19C前半？	(8.8)		(3.6)	356-5	I-214
5	SD2　層不明	陶器	碗	色絵（緑）	京信楽	18C前半				356-2	I-210
6	SD2　堆積土	陶器	天目茶碗	内面鉄釉、外面底部露胎、ケズリ出し輪高台	瀬戸美濃	17C初		(4.7)	(2.1)	356-3	I-211
7	SD2　層不明	陶器	小壺	鉄釉、底部窄孔あり	堤？	19C前半？		(2.6)	(3.9)	357-1	I-220
8	SD2　層不明	陶器	擂鉢	擂目6条以上	堤？	18C以降				356-7	I-217
9	SD2　層不明	陶器	焙烙	鉛釉（透明釉）	堤	19C前半	14.0	10.8	2.9	356-8	I-218
10	SD2　層不明	陶器	擂鉢	擂目5条、注ぎ口内面に刻印（○）	産地不明	17C代以降	34.0	12.6	15.6	356-10	I-216
11	SD2	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代		4.6	(2.2)	343-15	Ca-8
12	SD2	土師質土器	皿	内外面の口縁部に炭化物付着（灯明皿として使用か？）	在地	江戸時代	6.3	3.4	2.0	343-16	Ca-9

No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	樹　種	写真図版	登録番号
13	SD2　層中	皿？	底径8.2cm　器高（1.7）cm　内面木挽き痕有、外面底部調整有	ブナ属の一種	394-10	Lc-18

第113図　SD2溝跡出土遺物（26）

SD２溝跡出土陶器　時期別集計表（産地別）

時　　期	古瀬戸	瀬戸美濃	美　濃	肥　前	大堀相馬	小野相馬	岸窯系	堤	京信楽	唐　津	在　地	不　明	計
13世紀後半～14世紀前半											1		1
15世紀	3												3
16世紀前半		1											1
16世紀末～17世紀初頭			2										2
16世紀～17世紀		1	1										2
17世紀										1		1	2
17世紀前半		2											2
17世紀中頃～後半		2	3	29		1	15		1				51
17世紀後半～18世紀初頭				2									2
17世紀後半～18世紀				1									1
17世紀～18世紀							1						1
18世紀		5	4	7	58	16		6	10			3	109
18世紀前半					37	5			1				43
18世紀中頃～後半		1	1		68	2			1				73
18世紀後半～19世紀前半					1	1							2
18世紀～19世紀		2											2
19世紀					2			5				1	8
19世紀前半～中頃		2			51	1		18					72
江戸時代		1			1		1	1			1	3	8
不明					1							1	2
合　　計	3	17	11	39	219	26	17	30	13	1	2	9	387

SD５溝跡

C～G－24～26グリッドで確認した。上面でプランを確認し、一部を掘り下げたのみで、遺構全体の掘り下げは行わなかった。SD４堀跡の北側に弧状に張り出す状況になっているが、重複関係はなく、SD４堀跡と同時にその支流のように機能していたものと考えられる。上幅１～2.5mで、西側でSD４堀跡に接続する部分がやや幅が広く、東側で接続する部分が狭くなっている。深さは一部を掘り下げたのみであるため全体は不明だが、掘り下げた部分では55cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。２層は人為的堆積状況である。底面は中央が凹む船底形である。掘り下げた部分では遺物は出土しなかった。

SD７溝跡

B～L－31～15グリッドで確認した。ピット、小溝、SI12・14・16・20～23竪穴住居跡、SK21・36土坑、SD14溝跡と重複しており、ピット、SK36土坑、SD14溝跡より古く、他の遺構より新しい。東西の調査区外に延びている。確認した長さは31.5mで、方向はE－10°～20°－Nで、東へ行くほど北へ向かう。上幅は0.85～1.5mで、東側が広くなる。深さは35～50cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は３層確認された。底面は平坦であるが緩やかな起伏があり、傾斜は見られない。土器片が出土した。

SD８溝跡

D～G－13・14グリッドで確認した。ピット、SI12・16竪穴住居跡と重複しており、ピットより古く竪穴住居跡より新しい。確認した長さは10.7mで、方向はE－10°－Nである。SD７溝跡と平行している。上幅は55～75cmである。深さは５～８cmと浅い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦であるが、やや東へ傾斜している。遺物は出土しなかった。

SD９溝跡

F・G－22・23グリッドで確認した。小溝と重複しており、本遺構が新しい。確認した長さは2.45mで、方向はN－５°－Wである。上幅は25～45cmで北側が広い。深さは３～12cmで北側が深い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD10溝跡

D・F－22・23グリッドで確認した。小溝と重複しており、本遺構が新しい。確認した長さは3.5mで、やや蛇行しているが、方向はE－２°－Nである。上幅は35～60cmである。深さは５cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層確認された。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD12溝跡

B～I－17～19グリッドで確認した。ピット、SX6性格不明遺構、小溝と重複しており、ピット、SX6性格不明遺構より古く、小溝より新しい。西側は調査区外に延びており、東側はSX6性格不明遺構に削平されている。確認した長さは21mで、方向はE－8°－Nである。上幅は1.5mであるが、G－18グリッドで幅65cmとくびれている。深さはくびれた部分で25～30cm、くびれ部分から西側は55～60cm、東側が40～47cmとくびれ部分を境に西側がやや深い。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、くびれ部分は急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。人為的堆積状況である。底面は平坦である。くびれ部分から西側は底面は東へ緩く傾斜し、東側も同様に東へ傾斜している。遺物は土器片が出土した。

SD13溝跡

C－30～32グリッドで確認した。東西に2条途切れながら平行している。ピットと重複しており、本遺構が古い。位置的にSK4・9土坑との重複も考えられるが、確認されなかった。西側をA、東側をBとした。Aは確認した長さは4.95mで、やや蛇行している。方向はN－5°－E、深さは3～6cm、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層で、底面は平坦である。Bは確認した長さは5.55m、やや蛇行している。方向はN－7°－E、深さは3～8cm、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層で、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD14溝跡

L－9～17グリッドで確認した。ピット、SX6性格不明遺構、小溝、SD7溝跡、SI19、23、26竪穴住居跡と重複しており、ピット、SX6性格不明遺構より古く、他の遺構より新しい。確認した長さは23.5mで、方向はN－5°－Eである。深さは45～75cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は7層確認された。上層の1～3層は人為的堆積状況である。底面は平坦であるが、L－11グリッドで段が付き、北側が15cm高くなる。南から北へ緩やかに傾斜するが、段の部分から北は、逆に南へ向かう傾斜になる。遺物は土器片が出土した。

SD21溝跡

H・I－12・13グリッドで確認した。西側は平成3年度の調査区のF－12グリッドでは確認されなかったことから、Hグリッドの範囲内に納まる遺構であると考えられる。ピットと重複しており、本遺構が古い。また、南側の一部は攪乱によって削平されている。確認した長さは6.6mで、弧状になっている。上幅は50～70cmで、深さは8～16cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SD23溝跡

K・L－31・32グリッドで確認した。SD3堀跡から北側へL字状に張り出しており、重複関係は確認できなかった。SK60・61土坑と重複関係にあり、本遺構が新しい。確認した長さはSD3堀跡から北へ4.2m、更に西へ4.3mである。上幅は0.7～1.5mで屈曲部が広くなっている。深さは15～33cmで、北側の東西方向の部分が深い。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は3層確認された。人為的堆積状況である。底面は平坦であるがSD3堀跡側から先端部に向かって緩やかに傾斜している。遺物は磁器片が出土した。

SD25溝跡

I－35・36グリッドで確認した。ピット、SD3堀跡と重複しており、本遺構が古い。確認した長さはSD3堀跡から南側へ3.4mで、方向はN－8°－Eである。上幅は1.0～1.25mである。深さは42～57cmで、SD3堀跡側が深くなる。堆積土は2層確認された。人為的堆積状況である。底面は平坦であるがSD3堀跡側へ緩やかに傾斜している。本遺構はSD3堀跡を構築する際の作業用通路として掘り込まれたものである可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

堀跡

調査当初は溝跡として精査を開始したが、調査中、遺構の規模や調査区周辺の状況から、SD１・３・４・６溝跡の４条を堀跡とした。

SD３堀跡

Ｂ～Ｌ－32～35グリットで確認した。SD23溝跡が本遺構から北側へＬ字状に張り出しているが、重複関係は確認できなかった。SD２・25・33溝跡、SK３・８・64土坑、小溝と重複しており、SD２溝跡、SK３・８・64土坑より古く、SD25・33溝跡より新しい。確認した長さは32mで、方向はＥ－５°－Ｓである。上幅は9.2～7.8mであるが、Ｇ・Ｈ－34・35グリットでは南側の上端が約３mに渡って内側に屈曲し、幅は5.4m前後に狭く、くびれる形になる。ちょうどこの部分がSD２溝跡に削平されており、本来は5.8m前後になるものと考えられる。平成５年度の西側の調査では遺構上面でプランの確認と一部の掘込みのみを行ない、平成７年度の東側の調査では全面の掘込み精査を行った。

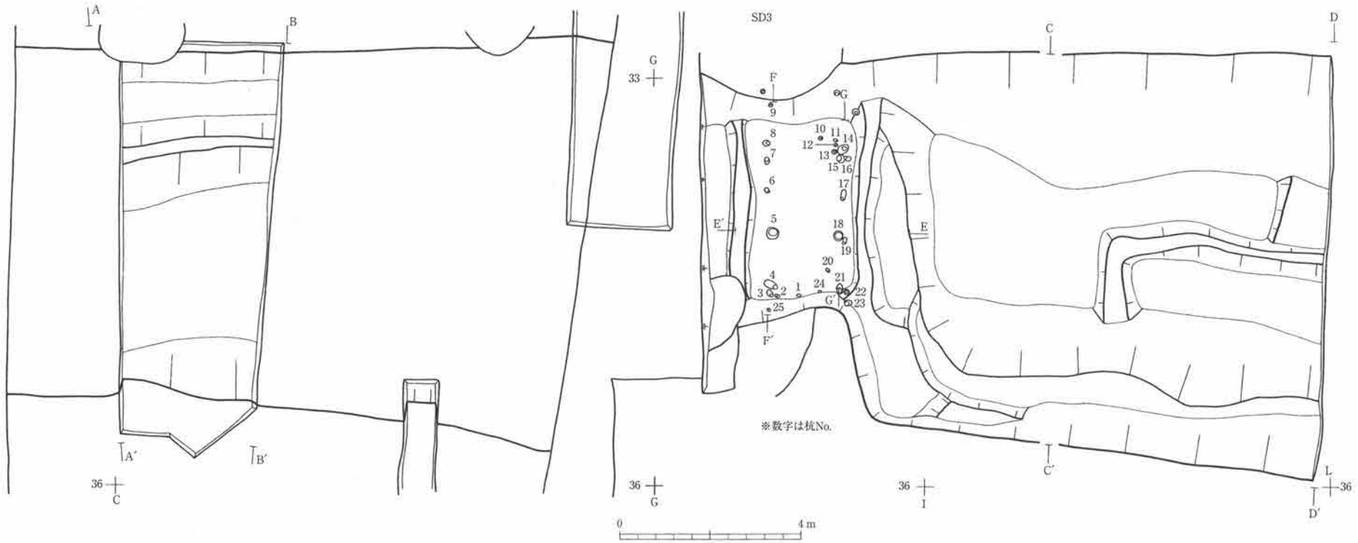
西側の状況：上面では確認されなかったが、掘り下げた部分で南北に２時期の堀の重複を確認した。北側の堀が新しく、南側の堀が古い。北側の堀は上幅2.3～2.8m以上で、深さは１～1.05mである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は４層確認された。底面は平坦である。南側の堀は上幅5.75～5.9m以上で、深さは1.5m以上である。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、北側の壁の中位には幅10～35cmの段が設けられている。堆積土は４層確認された。底面は平坦であるが、中央付近に杭が打ち込まれていた。下端線の方向はＮ－０°－Ｗであり、やや上面で確認されている方向と異なっていることから、底面はやや蛇行している可能性がある。この西側の２条の堀で東側の堀と一体になるものは、その規模から南側の堀である可能性が高いと考えられるが、北側の堀が掘り下げた部分の東西からどの様に延びているかは不明である。

東側の状況：深さは幅が狭くなっている部分で１～1.15m、その東側で2.1～2.15mと幅の広い部分が深くなっている。壁は底面から緩やかに立ち上がるが、深い部分と浅い部分の境と浅い部分の壁は急角度で立ち上がっている。堆積土は全体が一様ではないが、６～10層確認された。上層は人為的堆積状況である。底面は平坦であるが、深い部分では３段の段差があり、段差の縁に下端幅70～90cm、上端幅20～50cm、高さ25～42cmの畝状の高まりが検出された。また、浅くなっている部分では南北方向に平行する２列の杭列が検出された。東側が17本、西側が11本である。杭列の間隔は1.45～1.65mで、列の中での杭の間隔は0.4～1.2mである。杭は太いもので直径25cmあり、細いもので５cmである。これらの杭列はSD３堀跡に架けられていた橋の橋杭であると考えられる。この杭列の両外側にも下端幅40～65cm、上端幅10～35cm、高さ10～23cmの畝状の高まりが検出された。

遺物は、陶磁器類、木製品、漆製品、木材、金属製品、土器類、土製品、瓦類、石製品、獣骨類等多種のものが出土した。特に木製品は遺存状態が良く、種類、数量も多い。遺物の取り上げに際しては上位（土層断面図Ｃ－Ｃ′でNo.１～３・７・８）のものをℓ1、中位（同No.４～６・９～15）のものをℓ2、下層（同No.16・17）のものをℓ3として取り上げた。遺物の図示は取り上げた層毎に全ての種類の遺物を示した。

SD３堀跡出土陶器　時期別集計表（産地別）

時　期	古瀬戸	瀬戸美濃	美　濃	肥　前	大堀相馬	岸窯系	堤	京信楽	唐　津	常　滑	不　明	計
15世紀	3	4										7
16世紀										1		1
16世紀前半		1	1									2
16世紀後半		1	1									2
17世紀				5		2			1			8
17世紀前半			6						1			7
17世紀中頃～後半			1	3		17						21
17世紀後半～18世紀前半				1								1
18世紀					7		3	2			1	13
18世紀前半以降					3							3
19世紀			1									1
19世紀前半		1					1					2
江戸時代				1								1
不明							1					1
合　計	3	7	10	10	10	19	5	2	2	1	1	70



A－A′(a)

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト質粘土	しまりあり、自然堆積土
2a	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	明黄褐（10YR6/6）砂のブロック含む、黒色粘土を少量ブロック状に含む、南側は層が薄い、しまり、粘性ややあり、人為的堆積土
2b	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト質粘土	黒褐（10YR3/2）粘土をブロック状に北側ほど多く含み、砂っぽくなる、しまり、粘性ややあり、北側からの崩落土
3	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	レンズ状に堆積、炭化物の筋がレンズ状に2段階堆積している、南側のたちあがり部分に黒褐（10YR3/2）粘土のブロックが入り込んでいる、しまりやあり、粘性あり、自然堆積土（水が流れてた）この層より骸骨出土
4	暗灰黄色（2.5Y4/2）	砂	黒褐（10YR3/2）粘土をブロック状に含む、人為的に埋められた土

A－A′(b)

No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	自然堆積土、しまりややあり
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	黒褐（10YR2/2）粘土ブロックを縞状に含む、南側ほど厚く堆積しており南側より埋めたと思われる、にぶい黄褐（10YR5/3）粘土をブロック状に含む、層の中間にブロックを含まない層があり、水が入っている時期となくなっている時期と2段階に埋められている、人為的堆積土、粘性ややあり
3	褐灰色（10YR4/1）	粘土	北側のみ堆積、2層に分かれるが、西壁ではっきりしない、東壁では、2層に分けられる、粘性あり、自然堆積層、この層より天目茶碗が出土している
4a	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	灰（10YR4/1）粘土のブロックを含む、中央部に厚く堆積している、土器No.4出土、溝が機能しなくなり埋めたものと思われる、人為的堆積土、しまり、粘性あり
4b	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土	灰（10YR4/1）粘土のブロックを含む、南側からの埋め戻しの土、上部に炭化物の層が、層状に堆積しており、水が流れている期に埋め戻されたと思う、しまり、粘性あり
5	オリーブ黒色（10YR3/1）	粘土	底面へ行くほど黒褐（10YR2/2）砂質シルトに変化する、北側より石の流れ込みがある（中央部に多く堆積している）この層の中央部で杭群（水利施設）が検出されている、植物遺存体、動物遺存体を含む、土器No.1～3出土、自然堆積層、A－A′(a) 3と似ている、しまり、粘性ややあり
6	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	黒褐（10YR3/2）粘土のブロックを含む、南側からの崩落土、しまりあり、粘性ややあり
7	黒褐色（10YR3/1）	粘土	灰色（10Y4/1）粘土のブロックを含む、北側からの崩落土、しまりあり、粘性ややあり

B－B′(a)

No.	土色	土性	備考
1a	黒褐色（10YR2/1）	シルト質粘土	西壁より広い範囲で堆積、自然堆積土、しまりあり
1b	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土	自然堆積層、しまり、粘性ややあり
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	西壁の2b層は北側の底面に少量残っている
3	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	レンズ状に堆積、炭化物の筋がレンズ状に2段階堆積している、南側立ち上がり部分に黒褐（10YR3/2）粘土のブロックが入り込んでいる、自然堆積土（水が流れていた）この層より骸骨出土、しまりややあり、粘性あり
4	暗褐色（2.5Y4/2）	砂	黒褐（10YR3/2）粘土をブロックに含む、埋め戻しの土

B－B′(b)

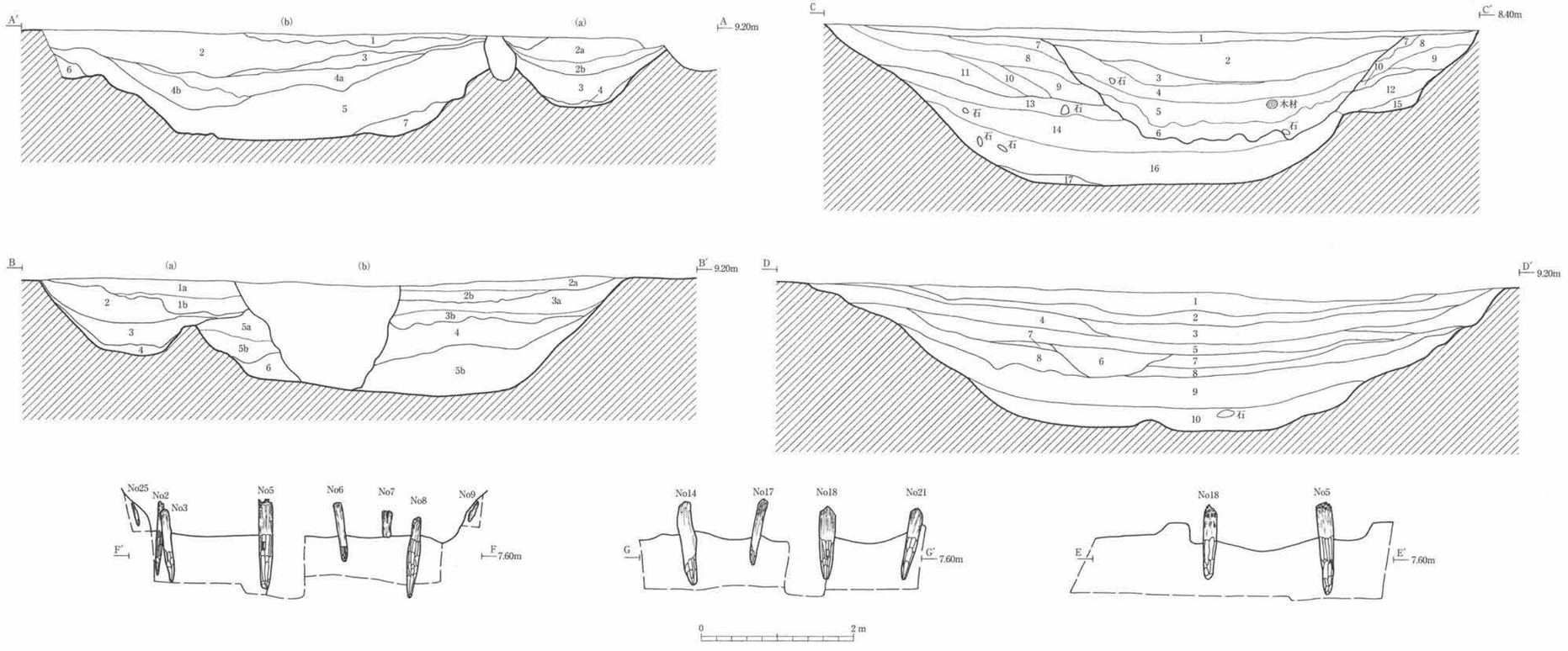
No.	土色	土性	備考
2a	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	黒褐（10YR2/2）粘土をブロック状に上部と底面に含む（南側ほど厚く堆積）南側から埋め戻したと思われる、人為的堆積土、にぶい黄褐（10YR5/3）粘土を底面にブロック状に含む、層の中間にブロックを含まない層があり、水が入っている時期となくなってからの時期と2段階に埋め戻されている、しまり、粘性ややあり
2b	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土	黒褐（10YR3/2）粘土を底面にブロック状に含む、人為堆積土、しまり、粘性ややあり
3a	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	底面に黒褐（10YR3/2）粘土のブロックを含む
3b	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	自然堆積層
4	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	灰（10Y4/1）粘土のブロックを含む、中央部に厚く堆積している、人為堆積土、土器No.4出土、溝が機能しなくなり、堆積したと思われる、しまり、粘性あり
5a	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	自然堆積層、しまりあり、粘性ややあり
5b	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土	底面へ行くほど黒褐（10YR2/2）砂質シルトに変化する、北側より石の流れ込みがある（中央部に多く堆積している）この層の中央部で杭群（水利施設）が検出されている、植物遺存体、動物遺存体を含む、土器No.1～3出土、自然堆積層、SD3（a）3と似ている、しまり、粘性ややあり、A－A′(b) の5層と同じ
6	黒褐色（10YR3/1）	粘土	灰（10Y4/1）粘土のブロックを含む、北側からの崩落土、しまりあり、粘性ややあり、A－A′(b) の7層と同じ

C－C′

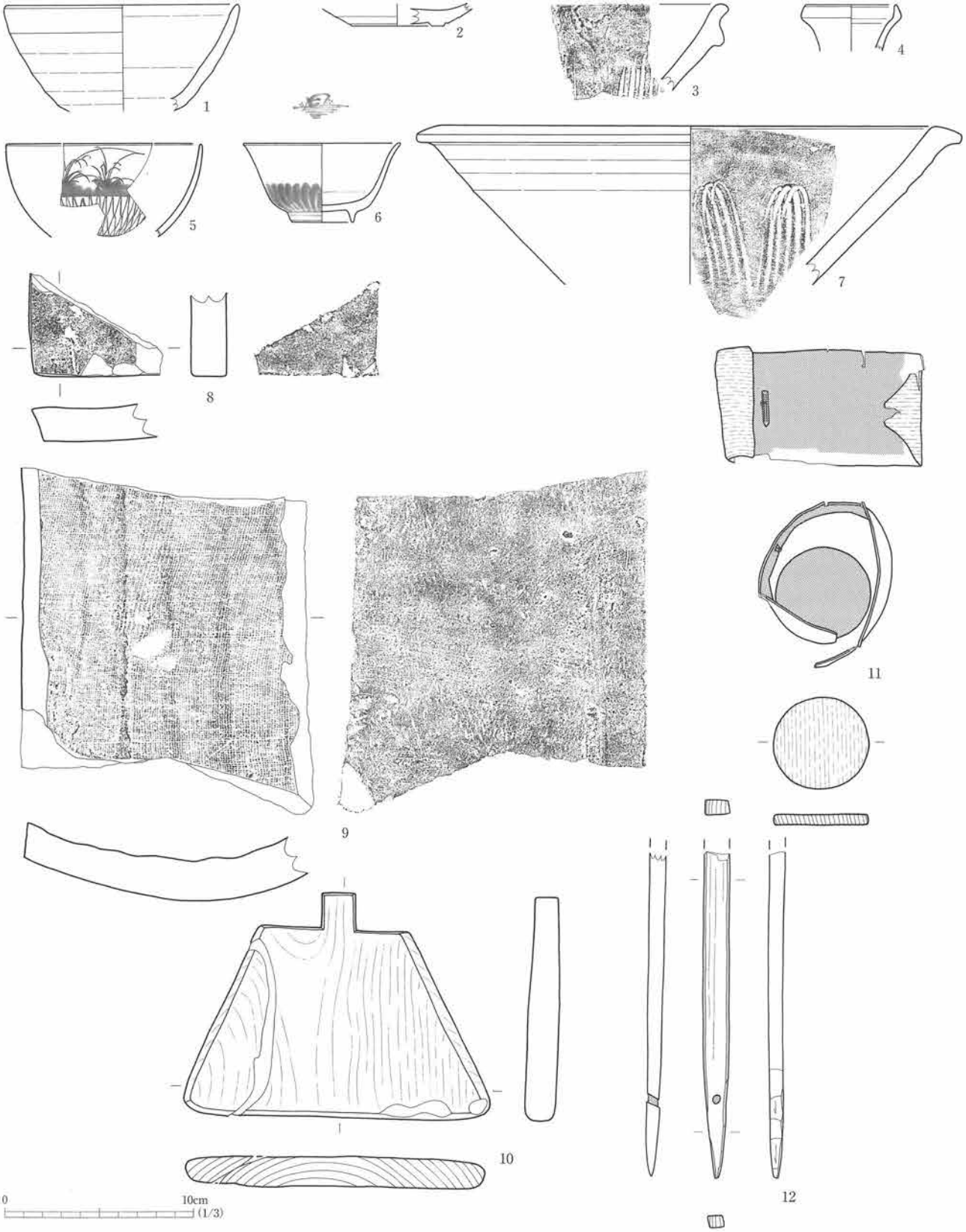
層位	No.	土色	土性	備考
1層	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質シルト	酸化鉄少量、マンガン粒含む、人為的埋土、遺物取り上げ＝1層
2層	2	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	酸化鉄、マンガン粒含む、遺物取り上げ＝1層
3層	3	灰オリーブ色（5Y5/2）	粘土質シルト	酸化鉄含む、遺物取り上げ＝1層
	4	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	層上面に植物遺存体層が堆積している、暗オリーブ（5Y4/4）灰を層状に含む、遺物取り上げ＝2層
	5	灰色（5Y4/1）	粘土質シルト	灰オリーブ（7.5Y4/2）をブロック状に含む、遺物取り上げ＝2層
	6	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘土質シルト	灰オリーブ（7.5Y4/2）をブロック状に含む、遺物取り上げ＝2層
4層	7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒含む、遺物取り上げ＝1層
	8	灰黄褐色（10YR6/2）	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒含む、北側層のみ、遺物取り上げ＝2層
	9	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	酸化鉄含む、遺物取り上げ＝2層
	10	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	層上面に酸化鉄、マンガン粒を含む、北側層のみ、遺物取り上げ＝2層
	11	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	層上面に酸化鉄、マンガン粒を含む、北側層のみ、遺物取り上げ＝2層
5層	12	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	遺物取り上げ＝2層
	13	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土質シルト	遺物取り上げ＝2層
	14	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	暗緑灰（10GY4/1）のブロックをわずかに含む、遺物取り上げ＝2層
	15	オリーブ黒色（10Y3/2）	粘土質シルト	暗緑灰（10GY4/1）のブロックを多く含む、遺物取り上げ＝2層
	16	オリーブ黒色（7.5Y2/2）	粘土質シルト	暗緑灰（10GY3/1）、緑黒（10G2/2）、暗緑灰（10GY4/1）を縞状に含む、縞状に堆積している、層の両側面には、地山ブロックが堆積している、遺物取り上げ＝3層
	17	暗緑灰色（10GR3/1）	粘土質シルト	灰オリーブ（7.5Y5/2）粗砂をブロック状に含む、遺物取り上げ＝3層

D－D′

No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰黄（10YR5/2）シルトを斑に含む、人為的埋土
2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	暗灰黄（2.5Y5/2）を層中心部～下部にかけて帯状に含む、層中心部に酸化鉄層が形成されている、暗灰黄（2.5Y4/2）砂質シルトをブロック状に含む、人為的埋土
3	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	黒褐（10YR3/1）粘土質シルト、黒褐（10YR4/4）粘土質シルト、暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト、灰オリーブ（7.5Y4/2）粘土質シルトが縞状に薄く堆積している、植物遺存体を含む層が互層になっている
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	黒褐（10YR3/4）粘土質シルトを層下部に、黄褐（10YR5/6）シルトをブロック状に含む
5	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	褐（10YR6/4）粘土質シルトを斑状に含む
6	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土質シルト	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）微砂～細砂、暗灰黄（2.5Y5/2）粘土質シルト、オリーブ黒（5Y3/1）粘土質シルトのブロックを含む
7	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	灰オリーブ（7.5Y4/2）粘土質シルト、オリーブ黒（5Y3/2）粘土質シルトの層が縞状に薄く堆積している
8	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	灰（5Y4/1）粘土質シルト、灰オリーブ（5Y4/2）粘土質シルトのブロックを含む、層理面（下部）に凸凹がある
9	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	灰オリーブ（7.5YR4/2）粘土質シルト、暗オリーブ灰（2.5GY4/1）粘土質シルトのブロックを斑に含んでいる
10	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	灰オリーブ（5YR4/2）が縞状に薄く堆積している、暗緑灰（10GY4/1）粘土質シルトを層下部に、ブロック状に含む、植物遺存体（菱の実）を多量に含む



第114図　SD3堀跡

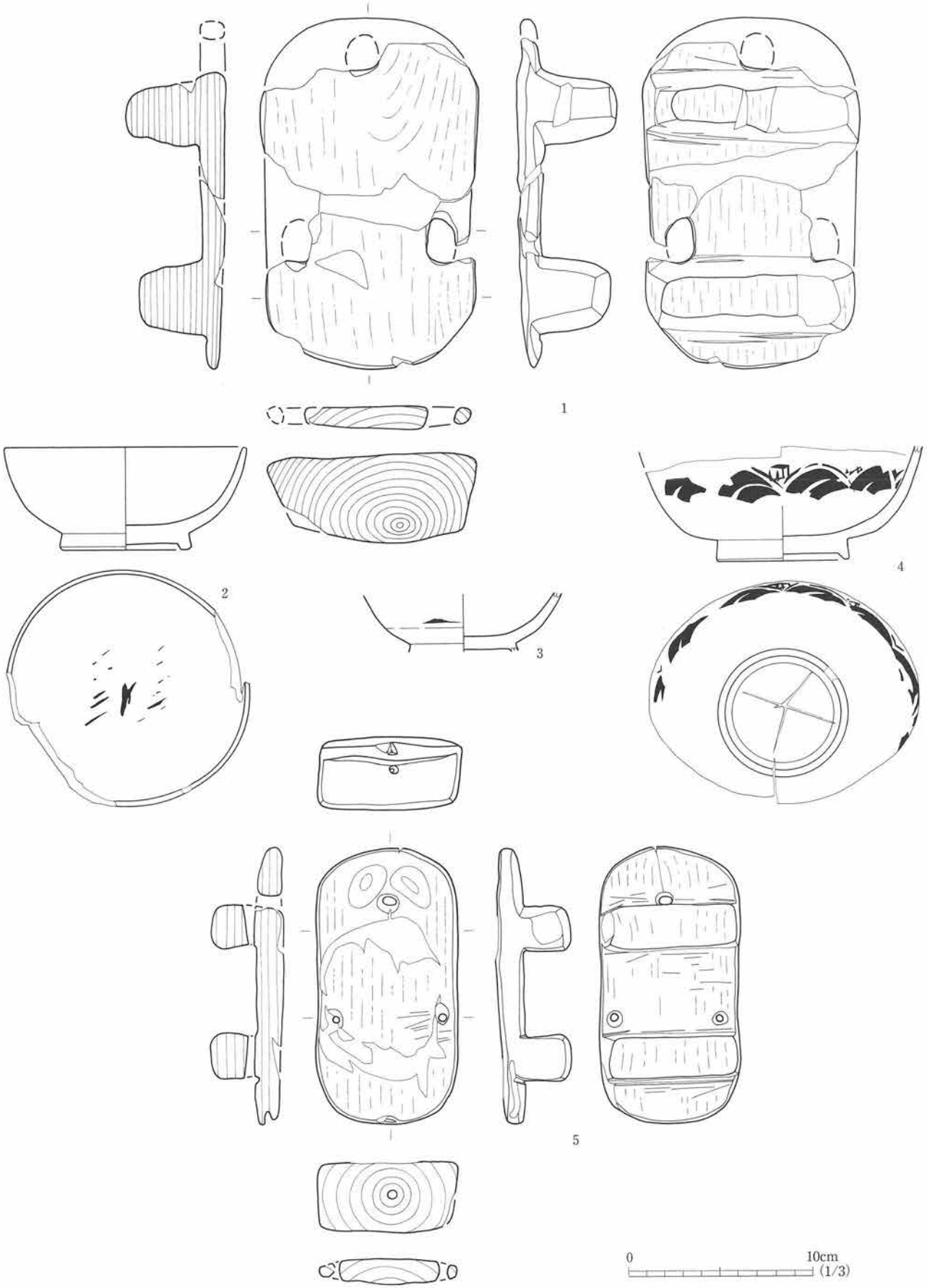


No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD3 3層	陶器	天目茶碗	鉄釉、古瀬戸	瀬戸	15C	12.3		(5.7)	358-8	I-253
2	SD3 3層	陶器	平碗	ケズリ出し、輪高台	瀬戸	15C後半		(4.9)	(1.2)	358-7	I-252
3	SD3 3層	陶器	擂鉢	擂目5条以上	不明(堤焼?)	18C?					I-255
4	SD3 3層	陶器	瓶類	鉄釉	大堀相馬	18C以降	4.8		(2.5)	358-9	I-254
5	SD3 3層	磁器	碗	染付、外面:草花文、網目文	肥前	17C後半~末	(10.4)		(5.0)	374-3	J-50
6	SD3 3層	磁器	碗	染付、焼きつぎ	瀬戸美濃	19C前半	8.3	3.4	4.3	374-2	J-49
7	SD3 3層	瓦質土器	擂鉢	擂目5~6条(擂目上端が閉じている)、折縁口縁、口縁部ヨコナデ	在地	16C代	28.9		(8.5)	377-12	T-4

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
8	SD3 3層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-7
9	SD3 3層	平瓦	縄叩き目からナデ	布目痕、ナデ	側面ケズリ・古代瓦	382-7	G-6

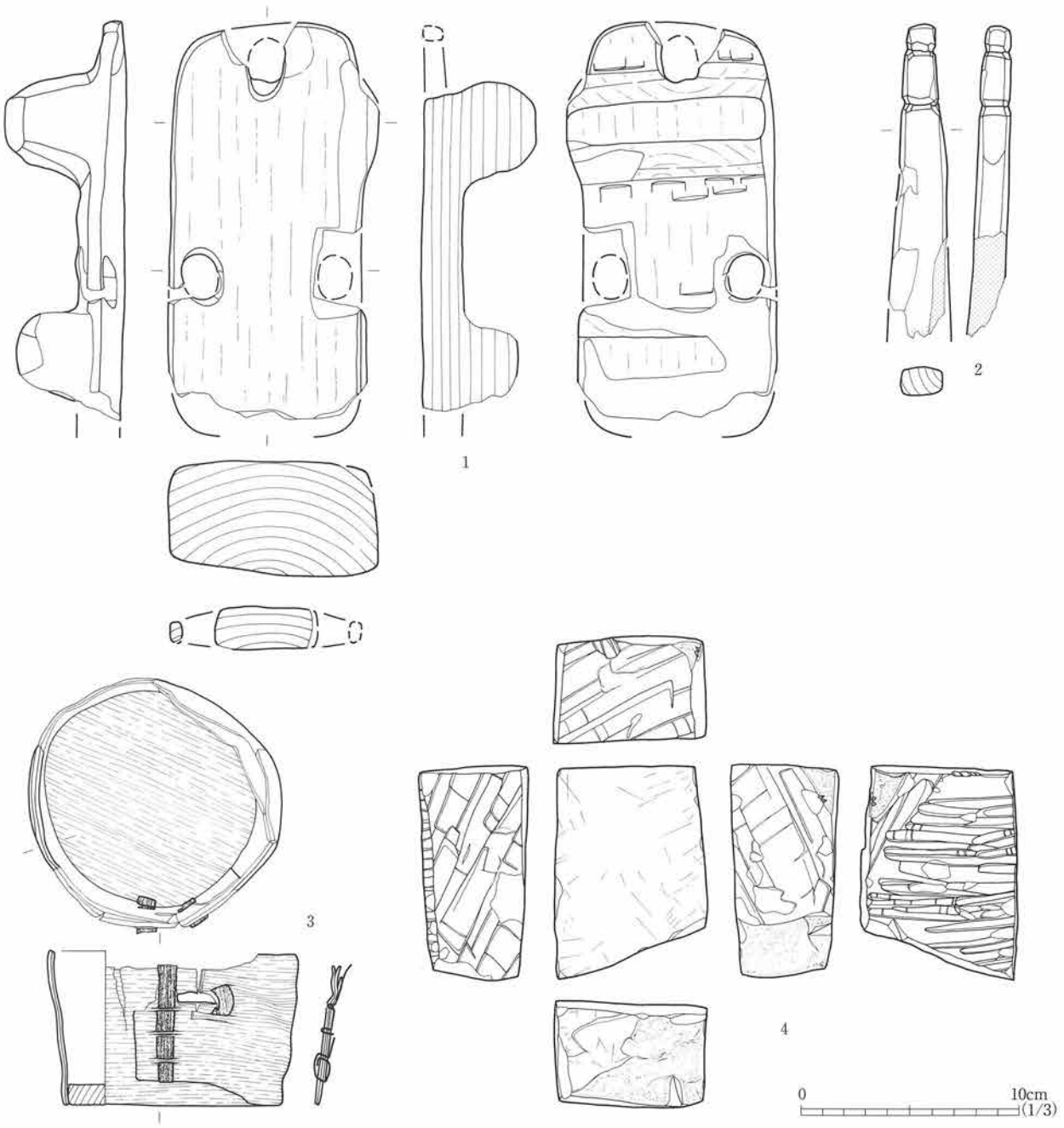
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
10	SD3 底面	差歯下駄の歯	完形、板目材、歯底面に砂利付着、歯部上幅8.0cm 歯部下幅16.0cm 高さ10.1cm	ケヤキ	391-5	Lb-13
11	SD3 5層	曲物(漆入れ容器)	側板:高さ6.2cm 厚さ0.1cm 底板:底径4.9×5.0cm 厚さ0.6cm	ヒノキ属	394-2	Lc-5
12	SD3 5層	柄杓の柄	長さ(17.4)cm 幅1.4cm 厚さ0.8cm 黒漆塗りか?下部に釘穴1ヶ所有、(木釘)柾目材	ヒノキ属	395-5	Lc-24

第115図　SD3堀跡出土遺物（1）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　3層	連歯下駄	欠損、芯持ち材、横緒穴は楕円形に近く、後歯の前、台部長（18.2）cm　台部幅11.9cm　高さ5.4cm	コシアブラ	391-2	Lb-10
2	SD3　3層	漆器　椀	内外面黒漆の上に赤色漆の文様わずかに有、口径13.4cm　底径7.3cm　器高5.9cm	ブナ属の一部	385-1	La-26
3	SD3　3層	漆器　椀	外面黒色漆塗の上に赤色漆で文様有、内面赤色漆仕上げ、底部外面に線刻数条有、底径（6.0）cm　器高（3.3）cm	ブナ属の一部	385-3	La-28
4	SD3　3層	漆器　椀	外面黒色漆塗の上に濃淡赤色漆で文様有、内面茶褐色漆仕上げ、底部外面に十字の線刻有、底径（6.3）cm　器高（7.2）cm	ブナ属の一部	385-2	La-27
5	SD3　3層	連歯下駄	完形（表面欠損）芯持ち材（芯は抜いてある）、指圧痕残る、横緒穴は後歯の前、台部長15.2cm　台部幅7.7cm　高さ4.0cm	モクレン属	392-2	Lb-16

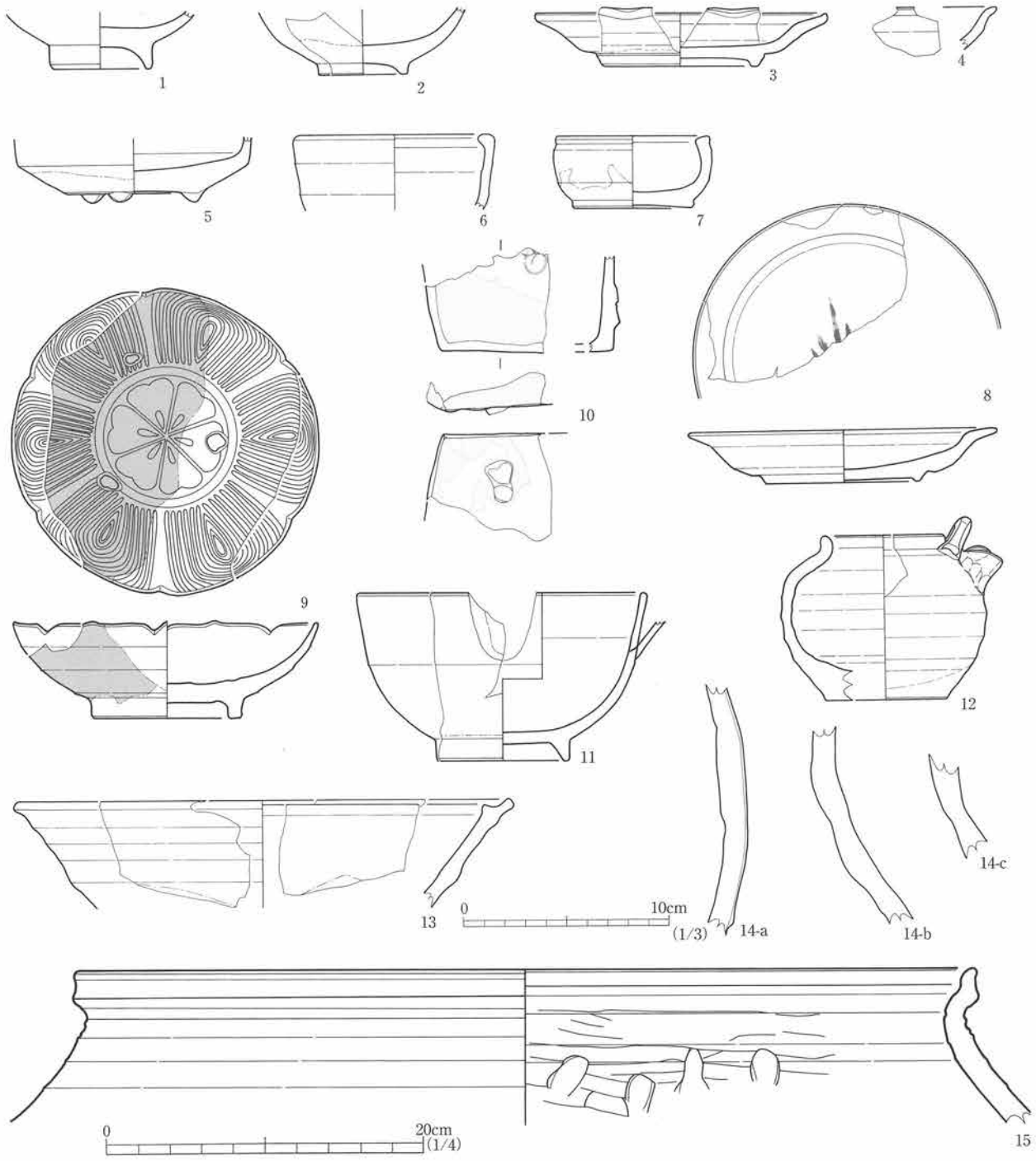
第116図　SD3堀跡出土遺物（2）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　3層	連歯下駄	欠損、板目材、前緒穴・横緒穴ともに楕円形に近い、横緒穴は後歯の前、台部長（18.6）cm 台部幅9.0cm　高さ5.5cm	クリ	391-3	Lb-11
2	SD3　3層	木錘	長さ（14.8）cm　幅2.1cm　厚さ1.5cm　上端付近に2本の溝有、下部欠損、断面-隅丸長方形、柾目材	クリ	395-4	Lc-23
3	SD3　（古）3層	曲物	側板：高さ7.3cm×厚さ0.3～0.4cm　底板：底径10.2cm×9.4cm　厚さ1.0cm　2列前内4段後内2段綴じ、底板はめ込み、柾目材	マツ属複維管束亜属の一種・ヒノキ属の一種	394-1	Lc-4

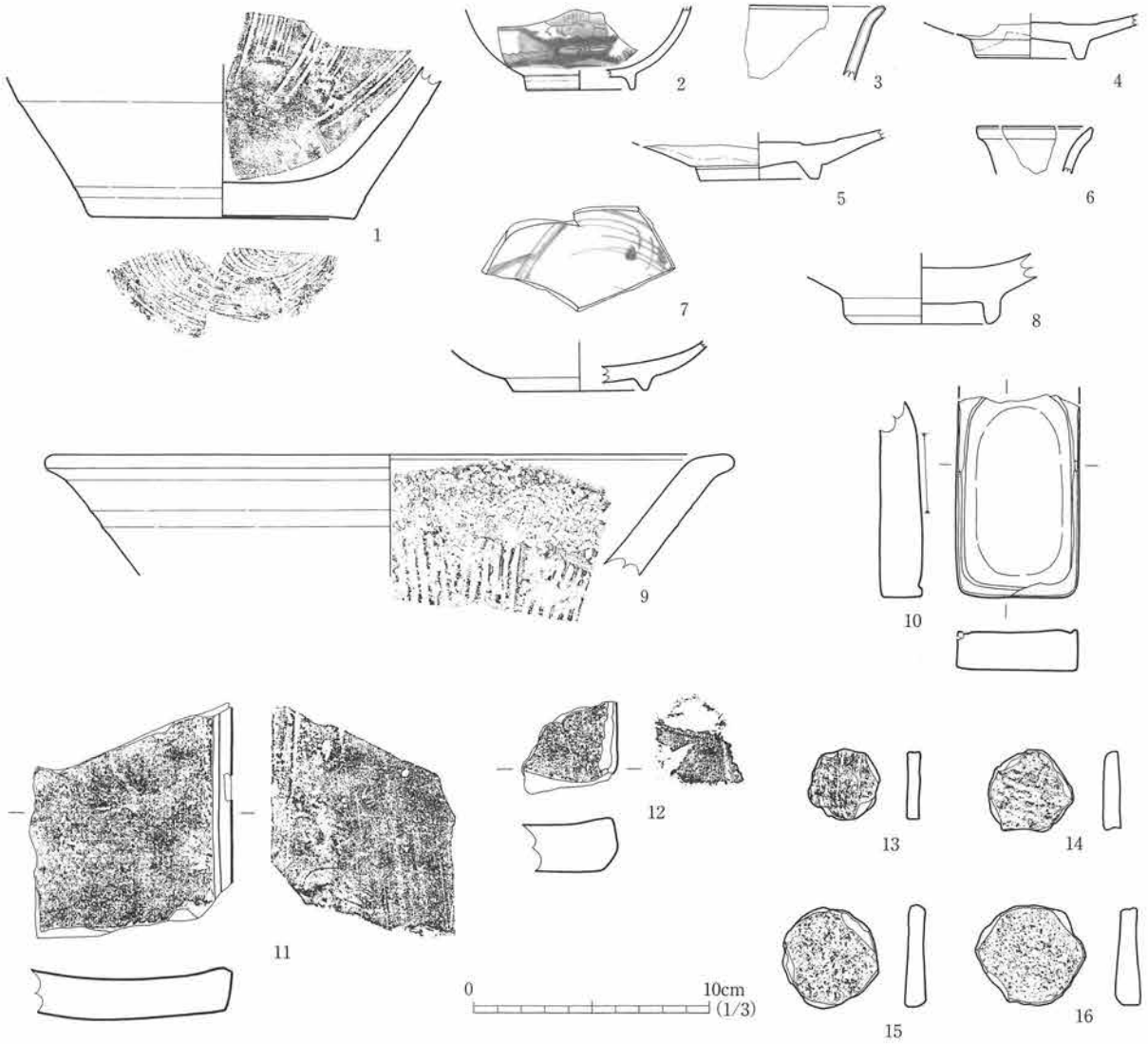
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
4	SD3　3層	砥石	10	7.2	4.9	585	デイサイト		427-22	Kd-137

第117図　SD3堀跡出土遺物（3）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD3 2層	陶器	碗	灰釉、目跡3ケ	肥前	17C後半以降		4.7	(2.8)		I-243
2	SD3 2層	陶器	碗	灰釉	唐津？	17C		4.2	(3.2)	358-1	I-244
3	SD3 2層	陶器	皿	輪花皿、御深井釉、目跡有、高台部露胎	美濃	17C前半～中	12.8～14.0	7.4	2.6～2.8	357-10	I-237
4	SD3 2層	陶器	端反皿	灰釉、大窯1期	瀬戸美濃	15C末				357-13	I-240
5	SD3 2層	陶器	香炉？	三脚、鉄釉、焼きが甘い	岸窯系	17C中～後半		6.2	(3.1)	358-5	I-248
6	SD3 2層	陶器	香炉	鉄釉、口縁部のみ灰釉	岸窯系？	17C後半	9.6		(3.7)	358-3	I-246
7	SD3 2層	陶器	香炉？	灰釉	岸窯系？	17C後半	7.5	5.8	3.5	358-4	I-247
8	SD3 2層	陶器	皿	折縁皿、志野釉調、長石釉、鉄絵で文様、高台露胎	美濃	16C末～17C初	14.8	7.4	2.6	357-4	I-238
9	SD3 2層	陶器	皿	器汁分け（鉄釉と灰釉）、型押しの輪花皿、目跡3ケ	瀬戸美濃	17C前半～中	14.8	7.0	4.2～4.7	357-15	I-242
10	SD3 2層	陶器	向付	青織部、鉄絵、脚付	美濃	17C初～前半			(1.5)	357-11	I-236
11	SD3 2層	陶器	片口	灰釉	大堀相馬	18C以降	14.0	6.3	8.2		I-250
12	SD3 2層	陶器	水注	灰釉、吊り耳付水注	岸窯系	17C後半	5.8	(5.8)	8.0	358-2	I-245
13	SD3 2層	陶器	御目付大皿？	灰釉、漆つぎ、古瀬戸	瀬戸	15C中～後半	(23.6)		(5.2)	357-8	I-234
14	SD3 2層	陶器	甕		常滑					370-13	I-452
15	SD3 2層	陶器	甕		白石窯		47.0		(10.0)	370-12	I-451

第118図　SD3堀跡出土遺物（4）

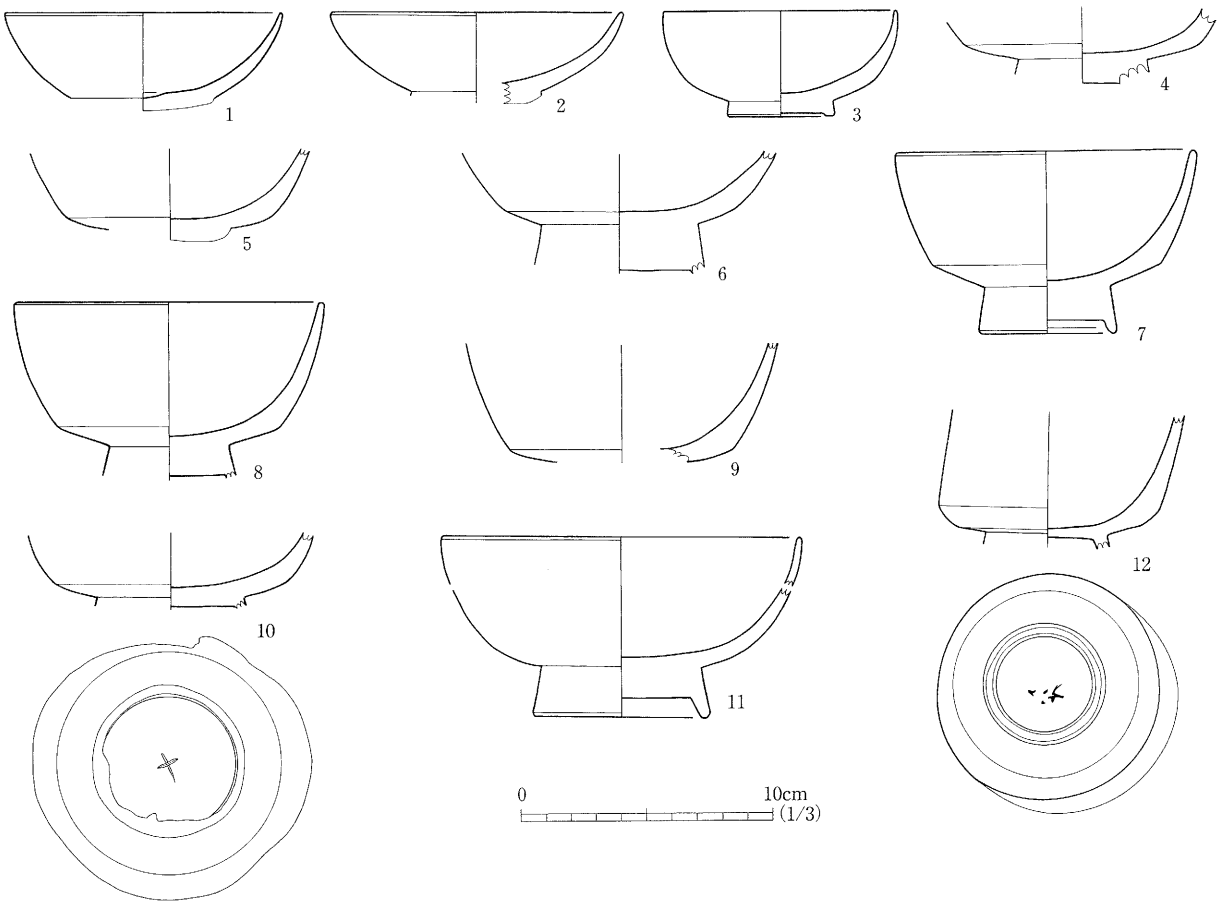


No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD3 2層	陶器	擂鉢	擂目6条	岸窯系	17C後半以降		11.2	(6.5)	358-6	I-251
2	SD3 2層	磁器	碗	染付、外面：草花文	肥前	17C後半		(4.6)	(3.5)	373-12	J-43
3	SD3 2層	磁器	碗	伝世品か？龍泉窯系？	中国	14C				376-16	J-93
4	SD3 2層	磁器	皿	見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前	17C後半		4.4	(1.9)		J-46
5	SD3 2層	磁器	皿	見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前	17C後半		5.0	(2.0)	374-1	J-47
6	SD3 2層	磁器	瓶	染付	肥前	17C	(4.9)		(2.0)		J-48
7	SD3 2層	磁器	皿	染付、畳付に付着	肥前	17C中～後半		(5.6)	(2.1)		J-45
8	SD3 2層	磁器	碗		中国	15C後半以降		5.8	(3.0)	377-10	J-107
9	SD3 2層	瓦質土器	擂鉢	擂目4条	在地	16C	29.0		(5.2)	377-11	T-1
10	SD3 2層	瓦質土器	硯	中央部磨耗著しい	在地	江戸時代	長さ(8.6)	幅5.1	厚み1.7		T-39

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
11	SD3 2層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-5
12	SD3 2層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-4

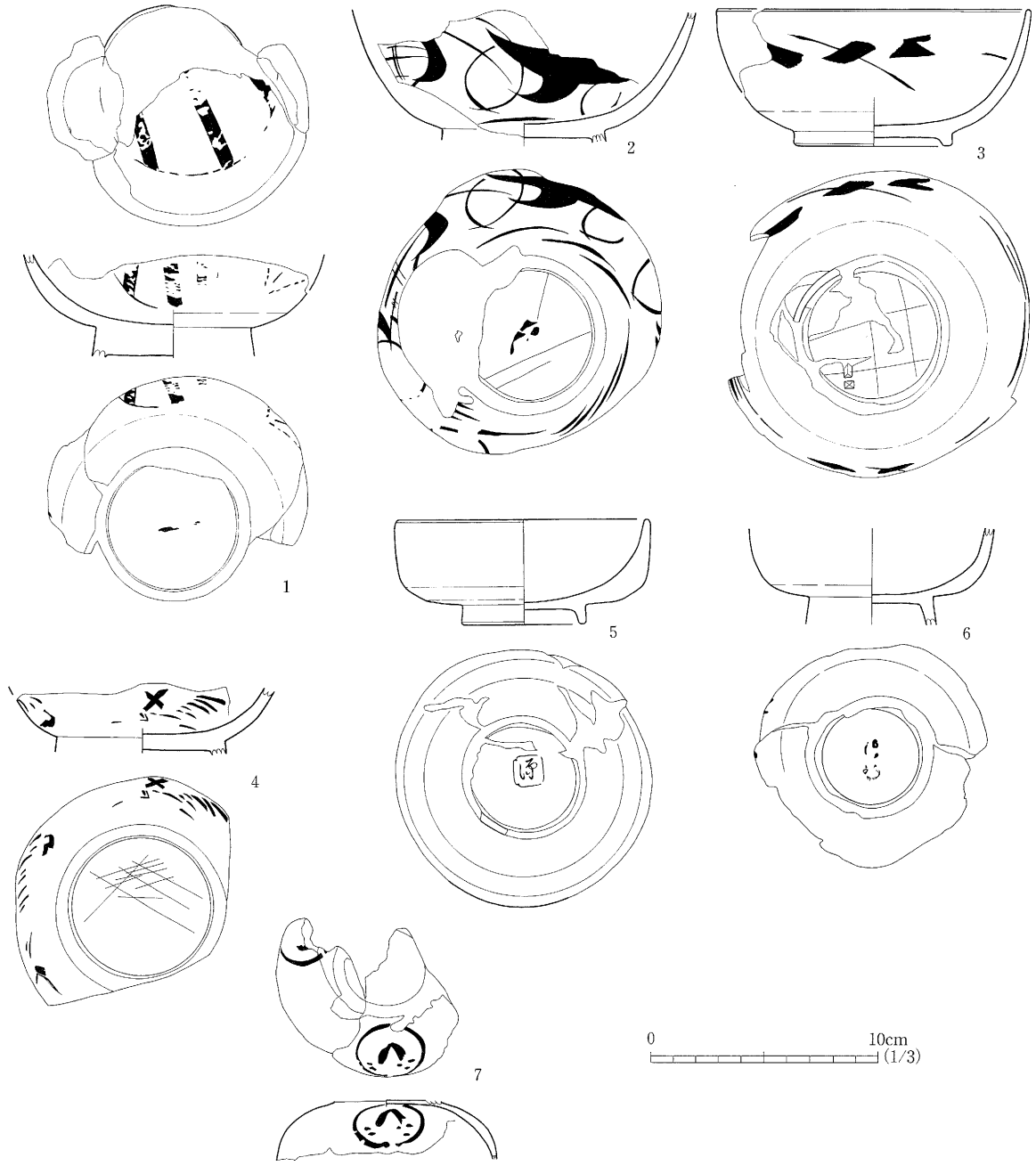
No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
13	SD3 2層	土製円盤	沈線文	2.95	2.8	0.5	5.0	379-3	P-36
14	SD3 2層	土製円盤	マメツ	3.4	3.5	0.7	10.0	380-1	P-38
15	SD3 2層	土製円盤	マメツ	4.2	4.6	1.1	22.6	379-4	P-37
16	SD3 2層	土製円盤	マメツ	4.3	4.0	0.9	20.0	380-2	P-39

第119図　SD3堀跡出土遺物（5）



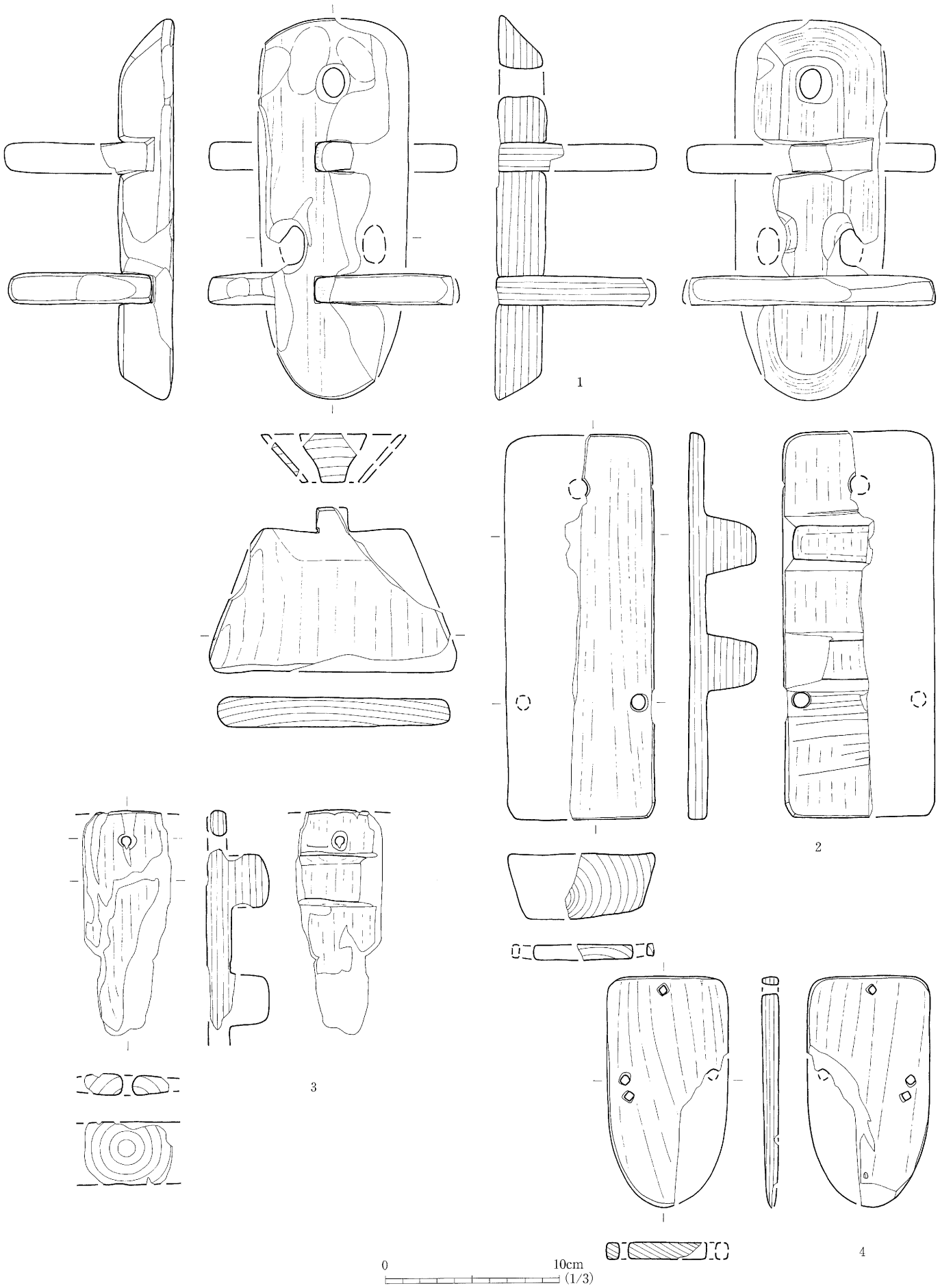
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　2層	漆器　椀	外面黒漆仕上げ、内面赤色漆仕上げ、底部内面及び口縁の一部に焼痕有、高台欠損、口径11.0cm　器高（3.8）cm	ブナ属の一種	384-9	La-23
2	SD3　2層	漆器　椀	外面黒漆仕上げ、内面赤色漆仕上げ、底部内面に焼痕有、高台欠損、口径11.7cm　底径（5.0）cm　器高（3.7）cm	ブナ属の一種	384-11	La-25
3	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆の文様わずかに有、内面赤色漆仕上げ、口径9.4cm　底径4.2cm　器高4.25cm	ブナ属の一種	384-5	La-19
4	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面に黒色漆の文様わずかに有、底径（5.2）cm　器高（3.0）cm	ブナ属の一種	383-6	La-12
5	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、高台部欠損、器高（3.9）cm	ブナ属の一種	384-6	La-20
6	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆の文様わずかに残る、内面茶褐色仕上げ、内面底部に線刻2条有、底径（6.8）cm　器高（4.9）cm	ブナ属の一種	384-3	La-17
7	SD3　2層	漆器　椀	内外面黒色漆仕上げ、底部外面に黒色漆の上に赤色漆の文様わずかに有、口径12.0cm　底径5.6cm　器高7.4cm	ブナ属の一種	383-8	La-14
8	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面に黒色漆の上に赤色漆の文様わずかに有、高台及び外面の一部に焼痕有、口径12.4cm　底径（5.4）cm　器高（7.0）cm	ブナ属の一種	384-8	La-22
9	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、高台部欠損、器高（4.8）cm	ブナ属の一種	384-10	La-24
10	SD3　2層	漆器　椀	外面赤色漆仕上げ、内面茶褐色仕上げ、底部外面は赤色漆の上に「×」の線刻有、割れ面に焼痕有、かなり使い込まれている椀である、底径（7.1）cm　器高（6.3）cm	ブナ属の一種	384-1	La-15
11	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆でわずかに有、内面茶褐色漆塗仕上げ、内面底部に焼痕有、口径14.4cm　底径7.1cm　器高（7.3）cm	ブナ属の一種	383-7	La-13
12	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面に赤色漆の上に黒漆の文様有、ゆがみ大、底径（4.7）cm　器高（5.5）cm	ブナ属の一種	383-2	La-8

第120図　SD3堀跡出土遺物（6）



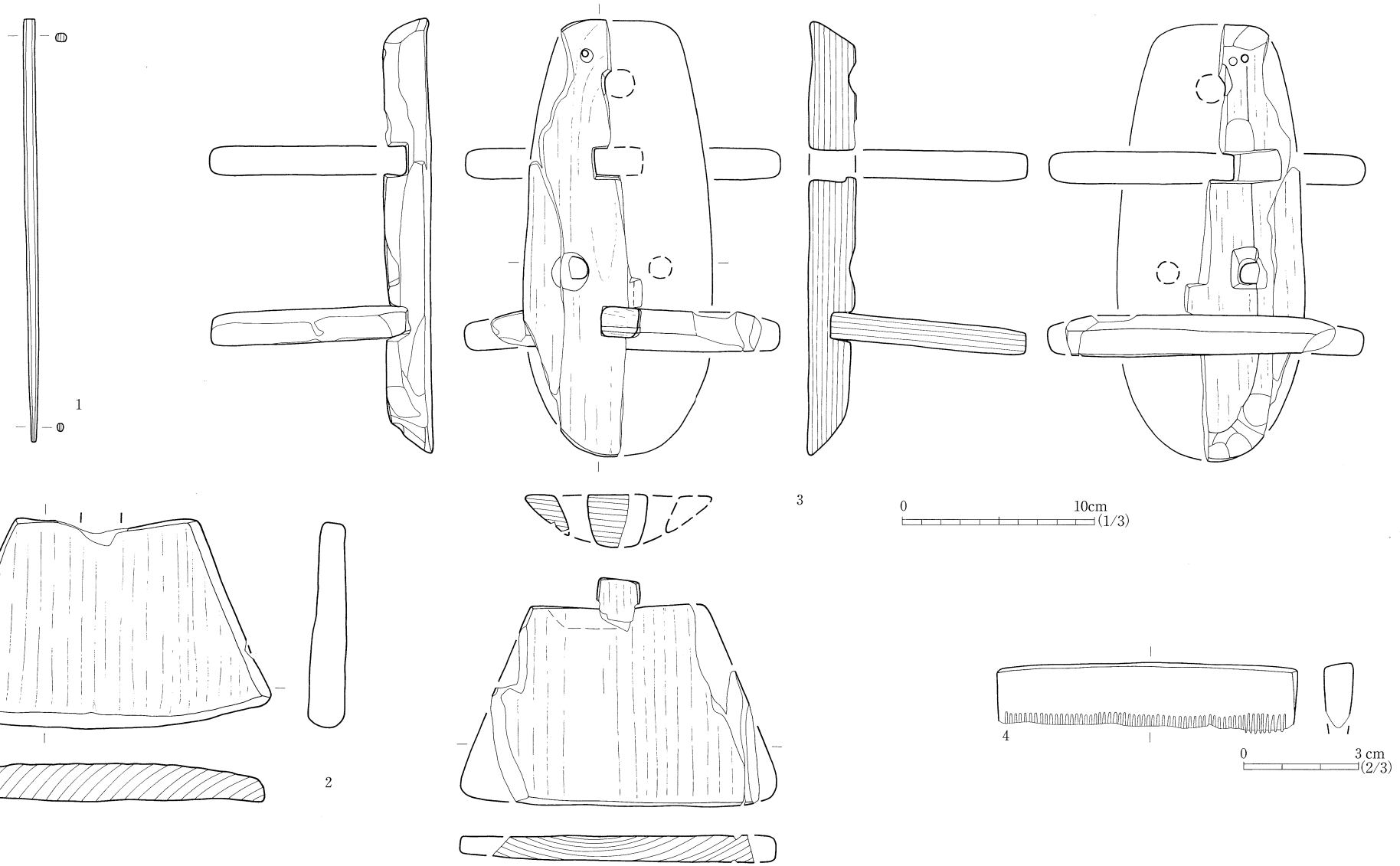
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　2層	漆器　椀	内外面黒漆色の上に赤色漆で三引両文風の文様有、外面は三引両文風の文様と竹笹風の文様で構成（二単位）、底径（7.1）cm　器高（4.6）cm	ブナ属の一種	383-3	La-9
2	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に濃淡の赤色漆で文様有、内面茶褐色漆塗仕上げ、底面外面は黒色漆の上に赤色漆で線刻有、底部外面に線刻有、内面底部及び断面に焼痕有、底径（7.3）cm　器高（5.9）cm	ブナ属の一種	383-5	La-11
3	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様、内面茶褐色漆塗仕上げ、底面外面に＃状の線刻有、口径13.5cm　底径7.1cm　器高6.3cm	ブナ属の一種	384-2	La-16
4	SD3　2層	漆器　椀	内外面黒漆色の上に赤色漆の文様有、内面は剥落多く文様不明瞭外面底部に線刻数条有、底径（7.8）cm　器高（3.0）cm	ブナ属の一種	384-7	La-21
5	SD3　2層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面は赤色漆の上に赤色漆？で「源」の銘有、口径11.2cm　底径5.6cm　器高4.7cm	ブナ属の一種	383-1	La-7
6	SD3　2層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色の文様わずかに有、内面赤色仕上げ	ブナ属の一種	384-4	La-18
7	SD3　2層	漆器　蓋	外面黒色漆の上に銀白色に近い顔料で文様残る（三単位）、内面赤色漆塗り仕上げ、底径（4.7）cm　器高（2.7）cm	ブナ属の一種	383-4	La-10

第121図　SD3堀跡出土遺物（7）



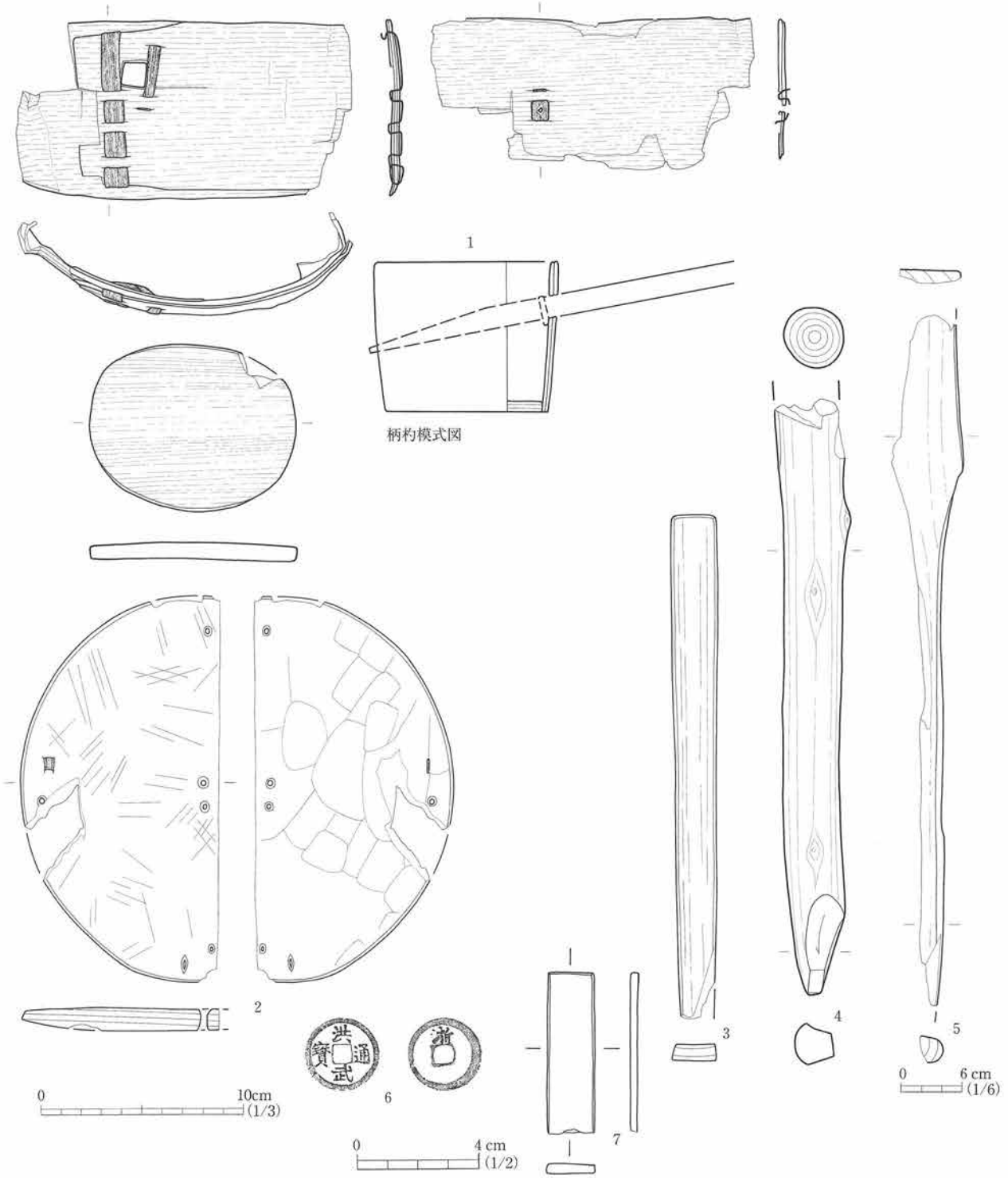
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　2層	露卯下駄	台部欠損、前歯後歯欠損、台部・歯部共に板目材、台部長22.3cm　台部幅（7.6）cm　高さ9.3cm　歯部（差歯）	台-モクレン　歯-ケヤキ	391-7	Lb-15
2	SD3　2層	連歯下駄の歯	欠損、板目材、作りが丁寧、横緒穴は後歯の後、台部長22.5cm　台部幅（4.6）cm　高さ4.0cm	広葉樹（散孔材）	391-1	Lb-9
3	SD3　1層	連歯下駄	欠損、芯持ち材	ヤナギ属	390-3	Lb-7
4	SD3　2層	不明	欠損	ヤマグワ	393-2	Lb-23

第122図　SD3堀跡出土遺物（8）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　2層	箸	完形　長さ22.2cm　最大径0.7cm　断面→楕円形	ヒノキ属	416-6	Lc-21
2	SD3　2層	差歯下駄の歯	ホゾの部分欠損、ナナメ材	モクレン属	391-4	Lb-12
3	SD3　2層	露卯下駄	台部欠損、前歯無し、台部・差歯ともに板目材、前緒近くに小穴２つ有（補修穴か？）うち１つは貫通していない、台部前歯が入る部分に段有、後歯ホゾ部分に木楔のようなもの有、台部長22.8cm　台部幅（6.2）cm　高さ11.4cm	台-モクレン　歯-ケヤキ	390-4	Lb-8
4	SD3　2層	櫛	幅7.1cm　柾目材	コナラ属コナラ亜種コナラ節	393-5	Lc-2

第123図　SD3堀跡出土遺物（9）

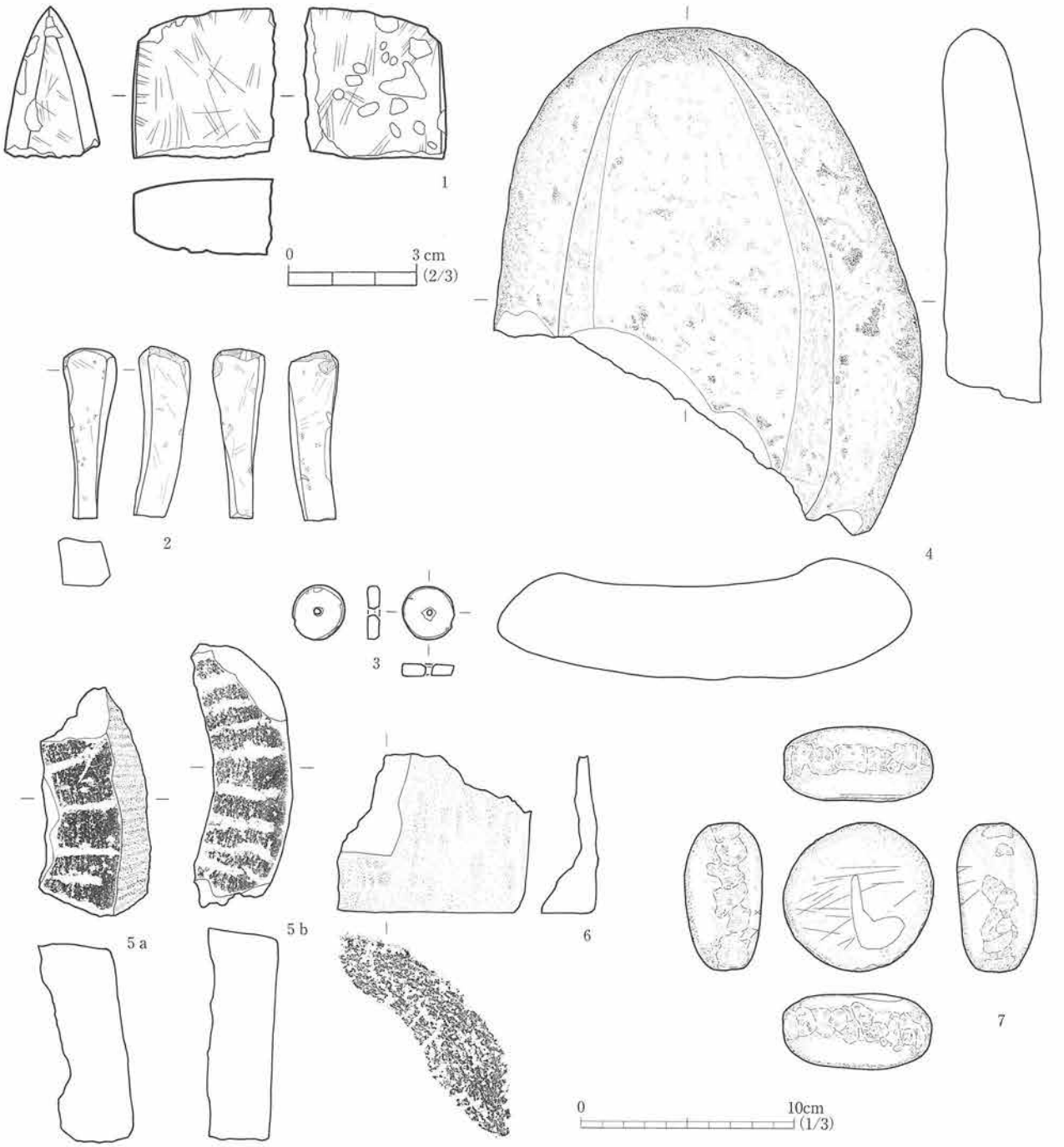


No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
1	SD3 2層	曲物（柄杓）	側板：高さ8.9cm 厚さ0.4cm 底板：底径：10.3×8.3cm 厚さ0.3cm 2列前内4段後内2段 綴じ、底板はめ込み	マツ属複維管束亜属の一種	393-6	Lc-3
2	SD3 2層	円形板	19.1cm×(9.8)cm 厚さ1.3cm 中央に2ヶ所、周縁に4ヶ所小孔有、樹皮摘み全面に焼焦げ痕有、板目材	カツラ	395-3	Lc-22
3	SD3 2層	不明	長さ (25.0)cm 幅2.3cm 厚さ0.9cm 板目材	ヒノキ属	400-2	Lc-48
4	SD3 層中	加工木	下端部に加工痕有、全長 (29.7)cm 幅・径3.3cm		395-9	Lc-25
5	SD3 2層	不明	長さ (69.1)cm 幅7.1cm 柾目材	コナラ属コナラ亜種コナラ節		Lc-89

No.	遺構・層位	種別	特徴	外径 (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
6	SD3 3層	銅製品 銭貨	洪武通宝（明） （初鋳年 1368年）	2.4	3.15	431-11	Na-48

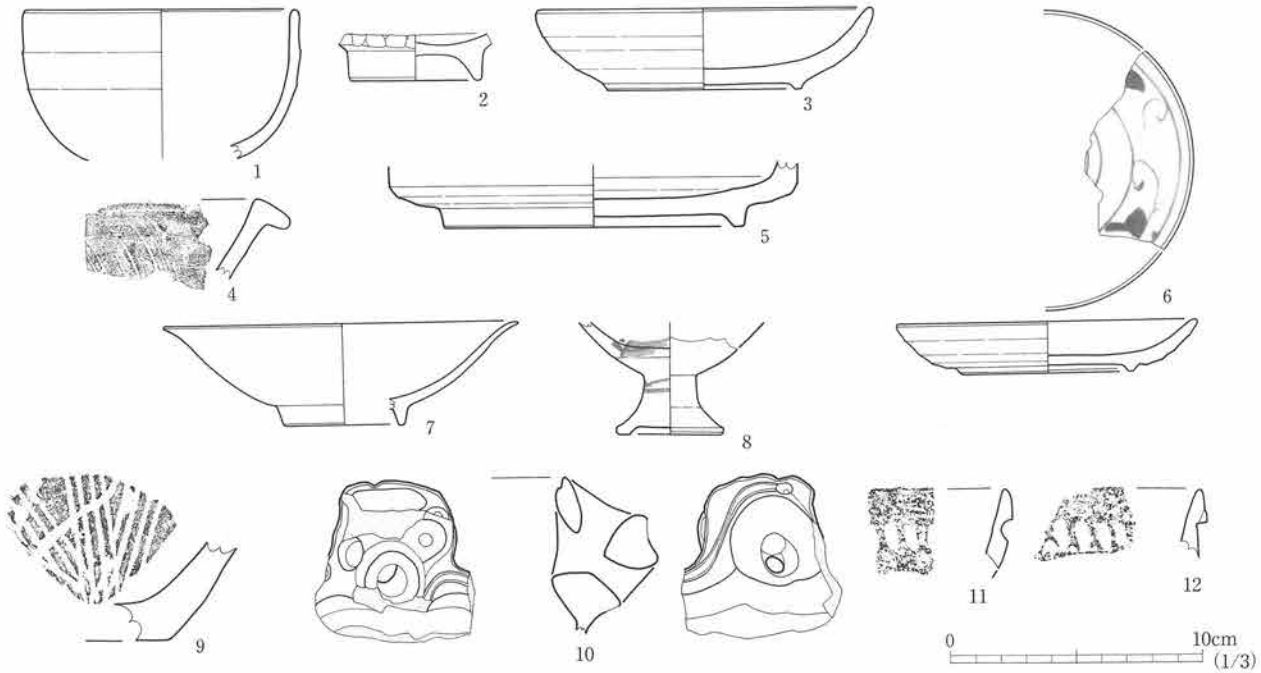
No.	遺構・層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	写真図版	登録番号
7	SD3 2層	板状鉄製品	5.4	1.6	0.3	18			Nc-3

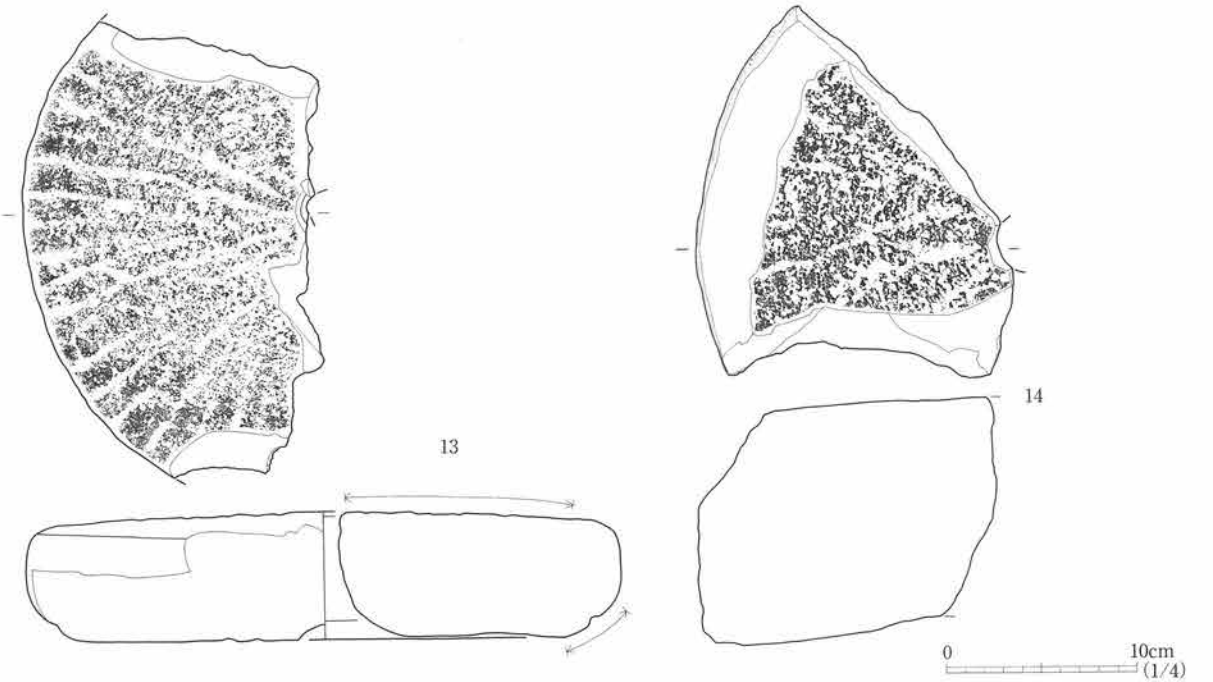
第124図 SD3堀跡出土遺物（10）



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD3　2層	磨製石	(3.6)	3.2	(2.2)	37	岩		418-7	Kf-1
2	SD3　2層	砥石	8.1	2.5	2.2	50	デイサイト質凝灰岩		428-1	Kd-139
3	SD3　2層	紡錘車	2.6	2.4	5.5	2.9	凝灰質頁岩		422-5	Kd-5
4	SD3　2層	石皿	(24.2)	20.1		(2300)	安山岩		423-7	Kd-32
5a・b	SD3　2層	石臼				(655)	安山岩		423-6	Kd-31
6	SD3　5層	石臼	(19.0)	(7.6)		250	安山岩			Kd-29
7	SD3　2層	敲石	7.1	7.1	3.7	150	デイサイト	線刻	421-7	Kc-46

第125図　SD3堀跡出土遺物（11）



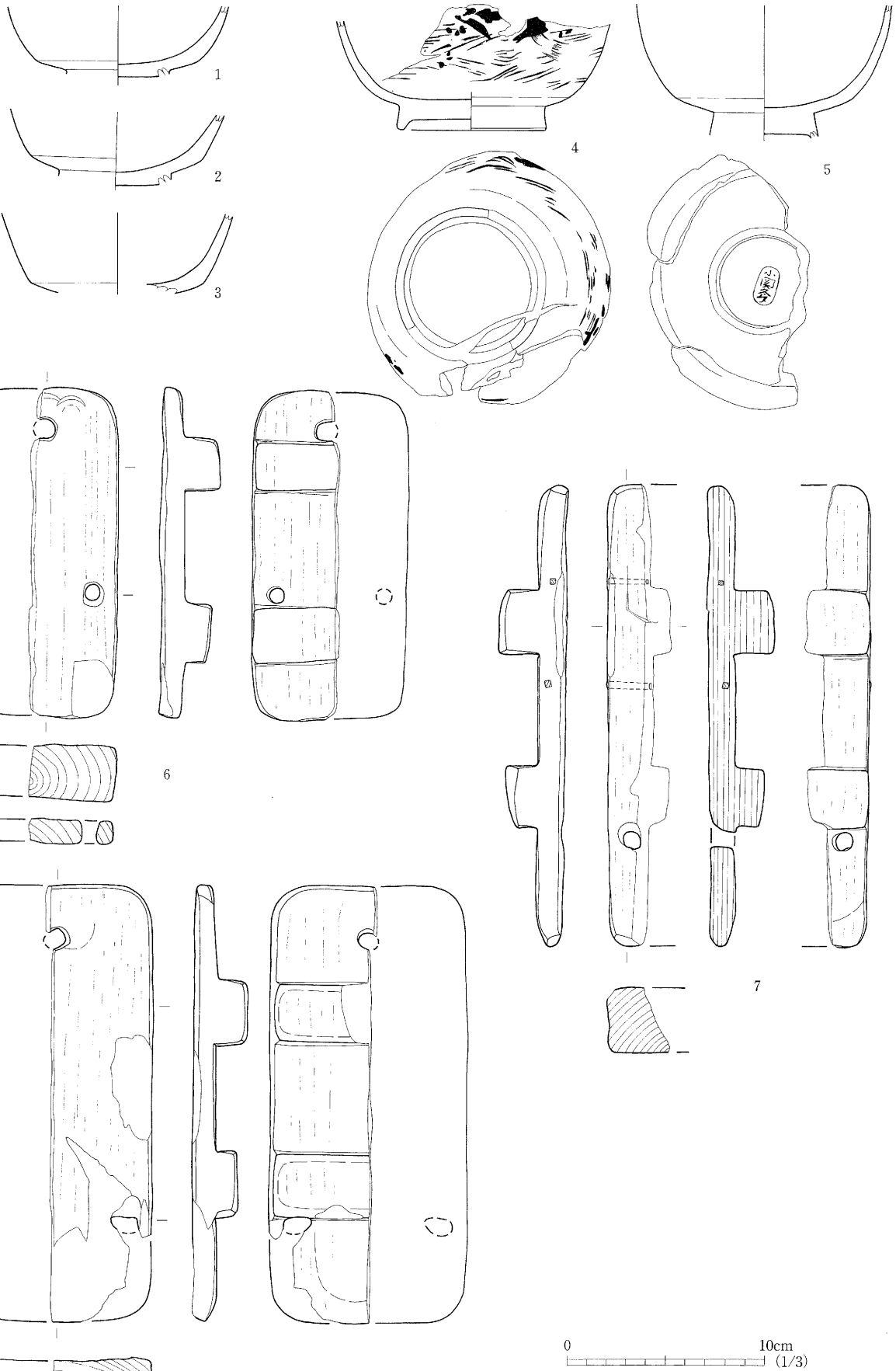


No.	遺構・層位	種別	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD3 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	11.0		(6.0)		I-230
2	SD3 1層	陶器	碗	灰釉、体部を打ち欠き高台だけ残存、(高台部のみを蓋として使用したものか)	肥前	17C後半～18C前半		4.9	(1.9)		I-261
3	SD3 1層	陶器	丸皿	志野、漆つぎ、高台の裏露胎、大窯	美濃	16C末	13.4	7.6	3.3	357-6	I-228
4	SD3 1層	陶器	擂鉢	擂目6条	岸窯系	17C後半					I-232
5	SD3 1層	陶器	鉢	円筒形の胴、内面及び体部下半に施釉、高台付近は露胎	肥前	17C後半		12.0	(2.5)		I-263
6	SD3 1層	陶器	皿	志野織部、長石釉、鉄釉で文様	美濃	17C前半	12.0	6.9	2.1	357-7	I-229
7	SD3 1層	磁器	皿	漆つぎ	中国(景徳鎮)	16C末	14.0	4.6	4.0	373-11	J-41
8	SD3 1層	磁器	仏飯具	染付	肥前	17C後半		4.2	(4.5)	373-10	J-40
9	SD3 1層	瓦質土器	擂鉢	擂目4条、小製品	在地	16C～17C				379-1	T-37

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
10	SD3 1層	縄文土器・深鉢	隆線文・沈線文・刺突文・貫通孔	沈線文・刺突文		334-13	A-13
11	SD3 1層	不明	刺突文	マメツ		335-19	B-30
12	SD3 1層	不明	隆線文・刺突文	ナデ		335-23	B-34

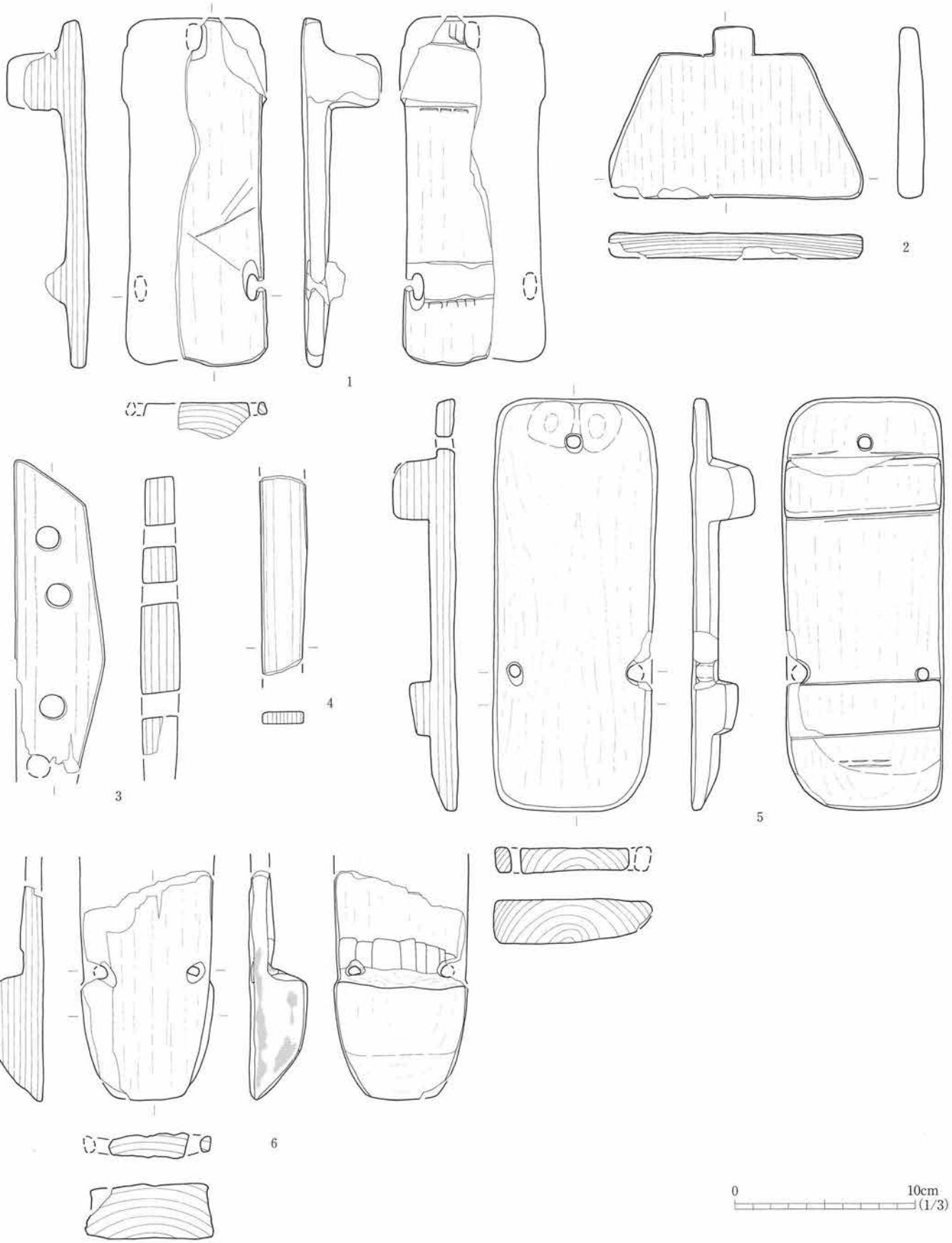
No.	遺構・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	登録番号
13	SD3 2層	石臼	(31.2)		6.75	(3200)	安山岩		423-5	Kd-27+28
14	SD3 2層	石臼	(35.0)		12.0	(4300)	安山岩		423-8	Kd-33

第126図　SD3堀跡出土遺物（12）



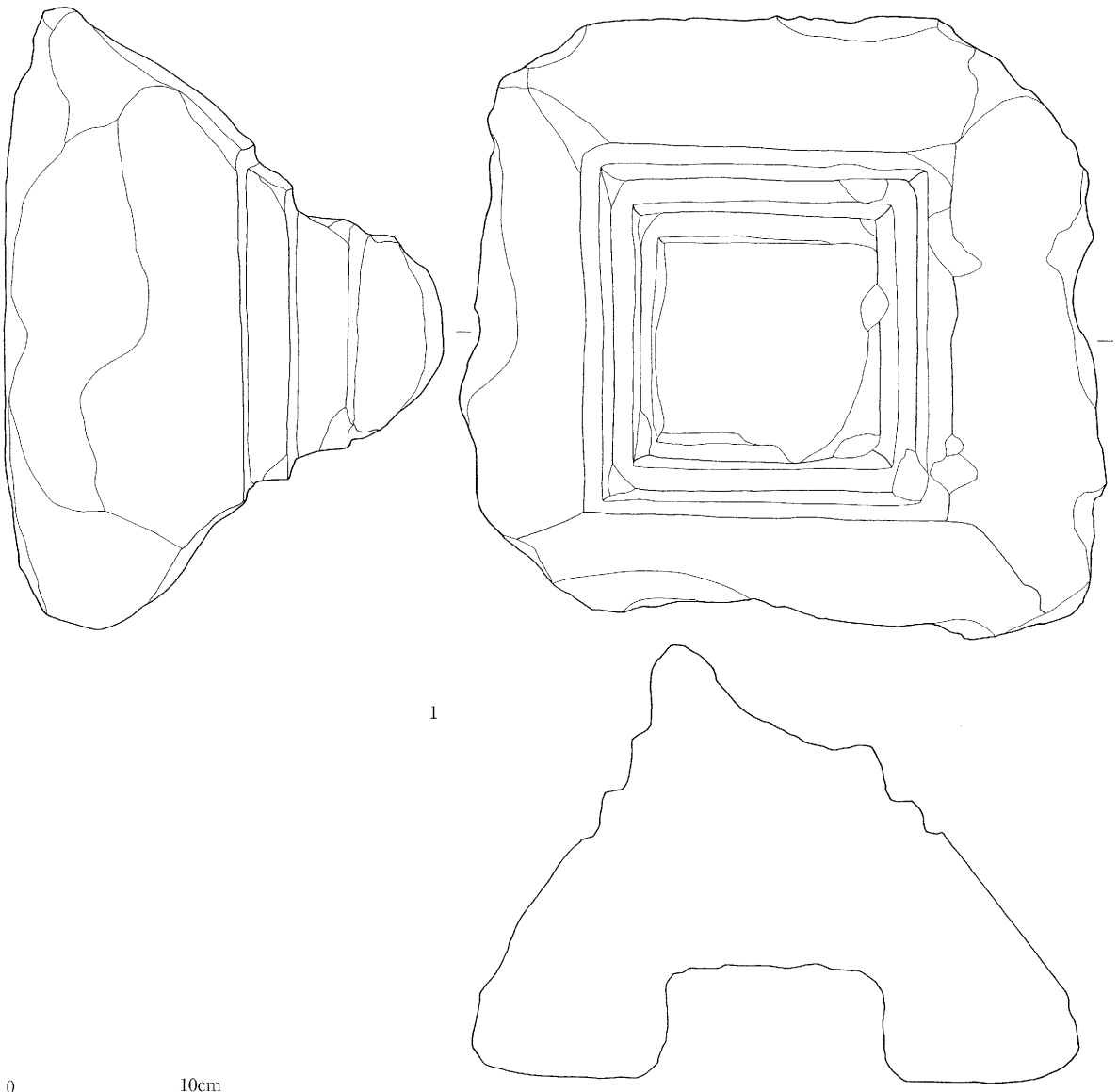
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　1層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面は黒色漆の上に赤色漆の文様（銘？）わずかに有	ブナ属の一種	382-11	La-4
2	SD3　1層	漆器　椀	外面漆剥落、内面赤色漆塗、底部外面黒色漆塗	ブナ属の一種	382-12	La-5
3	SD3　1層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ	ブナ属の一種	388-7	La-61
4	SD3　1層	漆器　椀	外面黒漆の上に赤色漆で全面に文様、内面茶褐色漆塗仕上げ、底径7.5cm　器高（6.3）cm	ブナ属の一種	382-9	La-3
5	SD3　1層	漆器　椀	内外面赤色漆塗仕上げ、底部外面は黒色漆の上に赤色漆で「小関入○」の銘有、底径（5.5）cm　器高（6.7）cm	ブナ属の一種	382-8	La-1
6	SD3　1層	連歯下駄	欠損、柾目材、指圧痕残る、後歯磨耗著しい、横緒穴は後歯の前、台部長16.9cm　台部幅（4.5）cm　高さ2.9cm　台部形状長方形　歯部形態垂直	マツ属複維管束亜属	389-6	Lb-1
7	SD3　1層	連歯下駄	欠損、補修のためか前歯の前後２ヶ所に木釘が打ってある、横緒穴は後歯の後、台部長23.6cm　台部幅（3.3）cm　高さ3.3cm	ヒノキ属	389-7	Lb-2
8	SD3　1層	連歯下駄	欠損、板目材、横緒穴は後歯の後、台部長22.3cm　台部幅（5.0）cm　高さ2.3cm	スギ	389-8	Lb-3

第127図　SD3堀跡出土遺物（13）



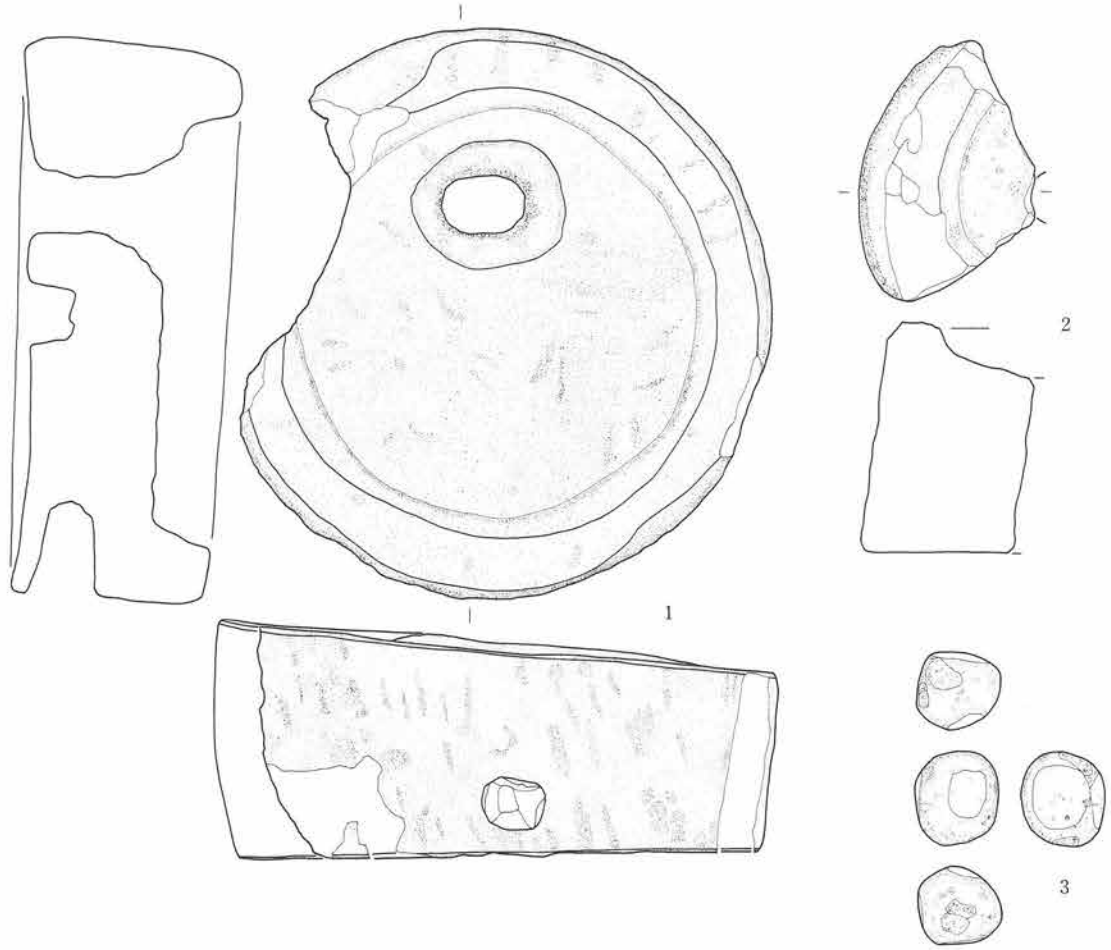
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3　1層	連歯下駄	欠損、板目材、全体に焼痕残る、横緒穴は後歯の中、台部長19.6cm　台部幅（5.2）cm　高さ3.4cm	ハリギリ	389-9	Lb-4
2	SD3　1層	差歯下駄の歯	欠損、板目材、歯部上幅19.6cm　歯部下幅（5.2）cm　高さ8.0cm	ケヤキ	391-6	Lb-14
3	SD3　1層	不明	長さ（16.4）cm　幅5.0cm　厚さ2.2cm　3穴の直径1.4～1.5cm、1穴破壊、板目材	クリ	395-1	Lc-19
4	SD3　1層	不明	長さ（11.1）cm　幅（2.6）cm　厚さ0.7cm　柾目材	ヒノキ属	395-2	Lc-20
5	SD3　1層	連歯下駄	完形、板目材、指圧痕残る、後歯の磨耗著しい、横緒穴は後歯の前、台部長29.5cm　台部幅8.9cm　高さ3.4cm	ヒノキ属	390-2	Lb-6
6	SD3　1層	連歯下駄	欠損、板目材、後歯は台端部から裁いている、後歯圧痕と横緒穴に赤色漆残っている、台部長（12.6）cm　台部幅（7.3）cm　高さ3.1cm	モクレン属の一種	390-1	Lb-5

第128図　SD3堀跡出土遺物（14）



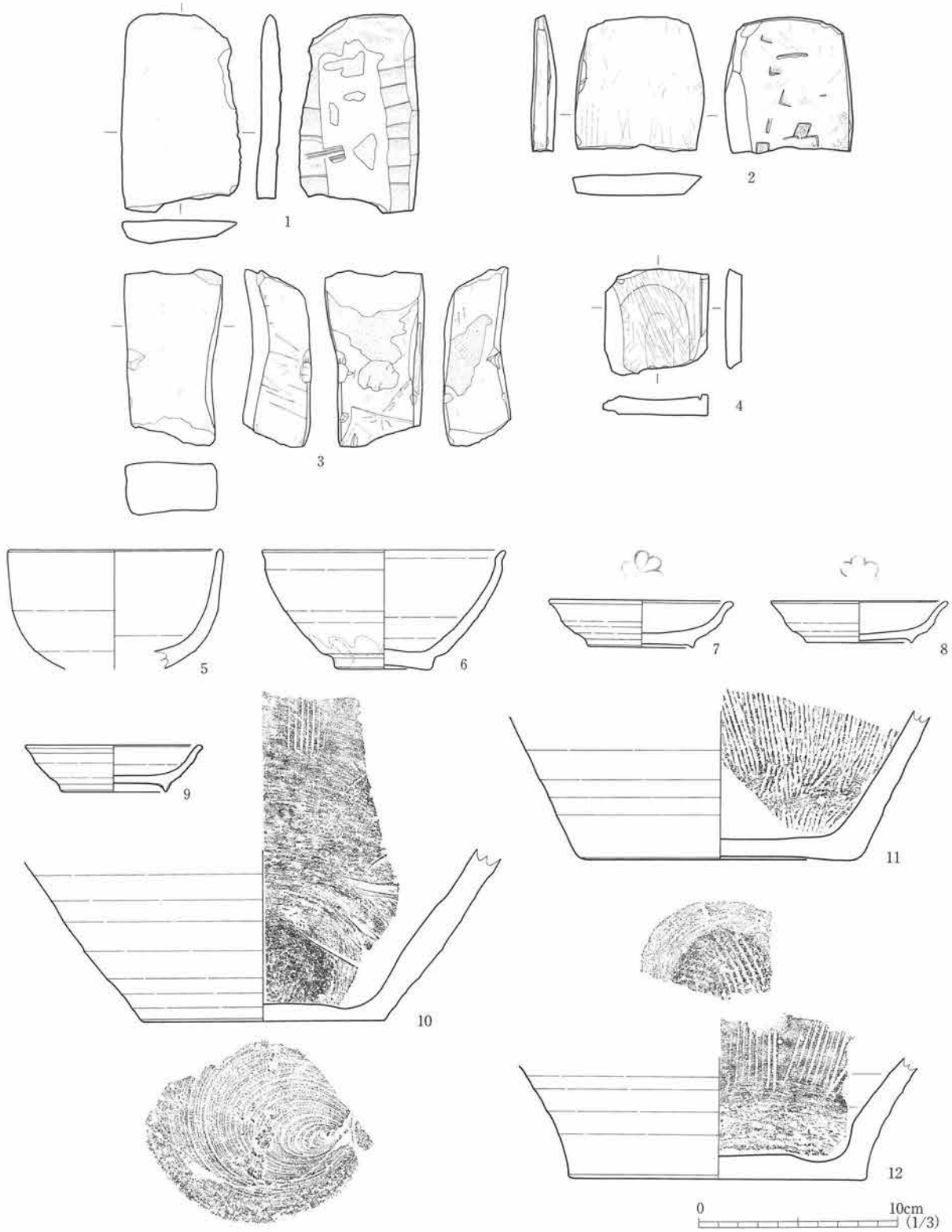
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD3　1層	宝筐印塔	36.8	34.9		20000	安山岩		422-13	Kd-22

第129図　SD3堀跡出土遺物（15）



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD3　1層	石臼	(30.0)	(10.4)		7,000	安山岩		423-9	Kd-30+47
2	SD3　1層	石臼	(19.4)	(12.1)		1,500	安山岩		423-3	Kd-25
3	SD3　1層	磨石	5.0	4.5	4.1	43			421-8	Kc-47

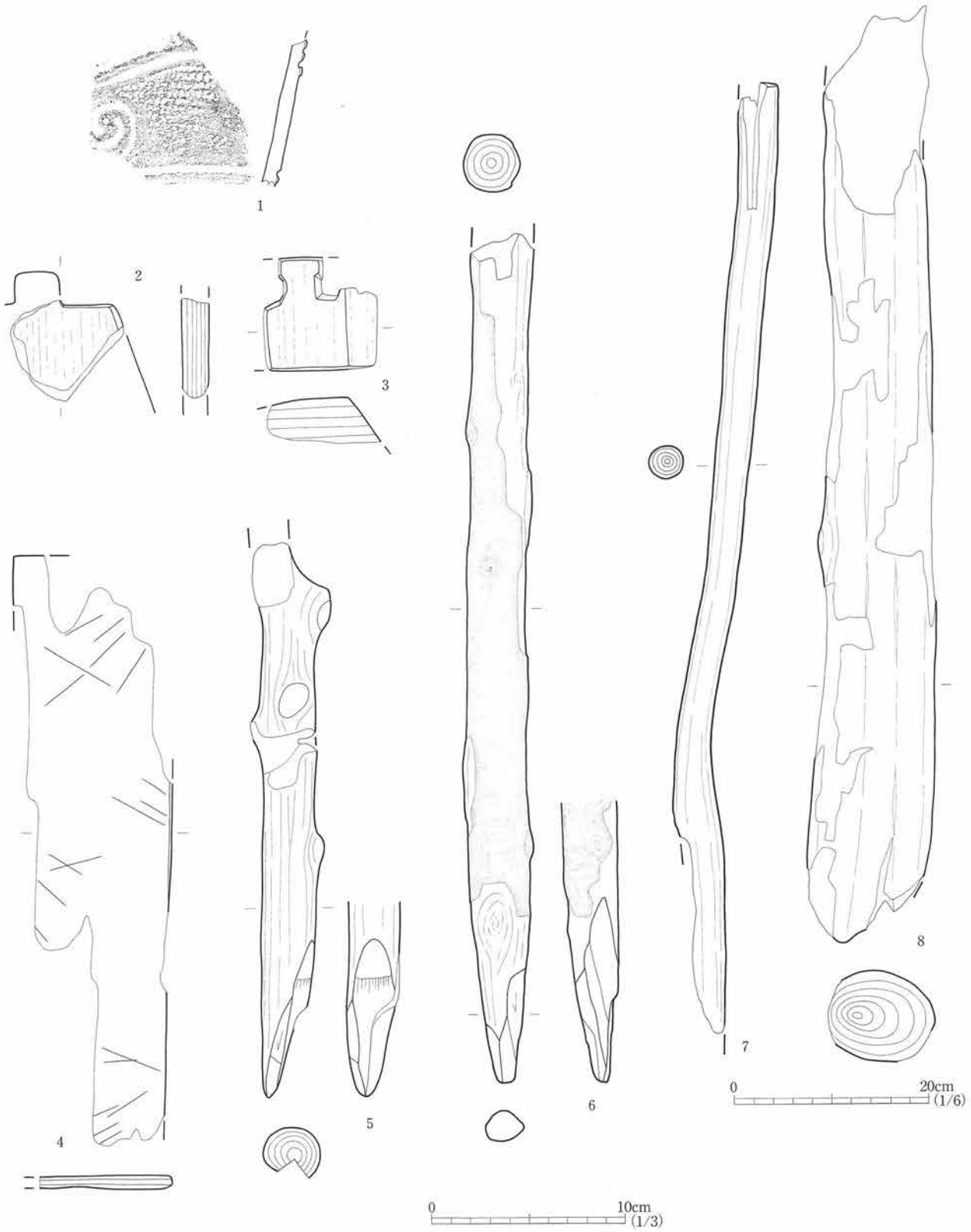
第130図　SD3堀跡出土遺物（16）



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD3　1層	砥石	11.1	5.9	1	106	デイサイト砂岩		427-18	Kd-131
2	SD3　1層	砥石	6.8	6.9	1.2	89	デイサイト		427-19	Kd-133
3	SD3　1層	砥石	9.6	5	2.7	168	デイサイト質凝灰岩		427-20	Kd-134
4	SD3　1層	硯	5.4	5.1	0.8	32.6	頁岩		422-9	Kd-16

No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）		
5	SD3	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	10.9		(6.1)		I-262
6	SD3	陶器	天目茶碗	鉄釉、鉄釉の上に鉄化粧（高台も鉄化粧）、内反り高台、内面茶せんずりの痕、大窯Ⅰa期、I-257、I-258を中に入れた形で出土	瀬戸美濃	15C末	8.9	5.4	2.1	358-10	I-256
7	SD3	陶器	端反皿	灰釉、全面施釉、印花文、高台裏に輪トチンの痕、大窯Ⅰb期、天目茶碗（I-256）と入れ子になって出土	瀬戸美濃	15C末	8.9	5.0	2.4	358-11	I-257
8	SD3	陶器	端反皿	灰釉、全面施釉、印花文、高台裏に輪トチンの痕、大窯Ⅰb期、天目茶碗（I-256）と入れ子になって出土	瀬戸美濃	15C末	9.0	5.0	2.4	358-12	I-258
9	SD3	陶器	端反皿	灰釉、全面施釉、大窯Ⅰb期	瀬戸美濃	16C初	8.8	5.2	2.4	358-13	I-259
10	SD3	陶器	擂鉢	擂目8条	岸窯系？	17C中頃		12.4	(8.8)	366-16	I-363
11	SD3	陶器	擂鉢		堤？	18C？		13.4	(7.6)		I-265
12	SD3	陶器	擂鉢	擂目8条、内面底部付近の磨耗著しい、外面底部付近に炭化物付着、擂鉢機能の後で鍋として使用？	岸窯系	17C中頃		15	(6.3)	358-14	I-264

第131図　SD3堀跡出土遺物（17）



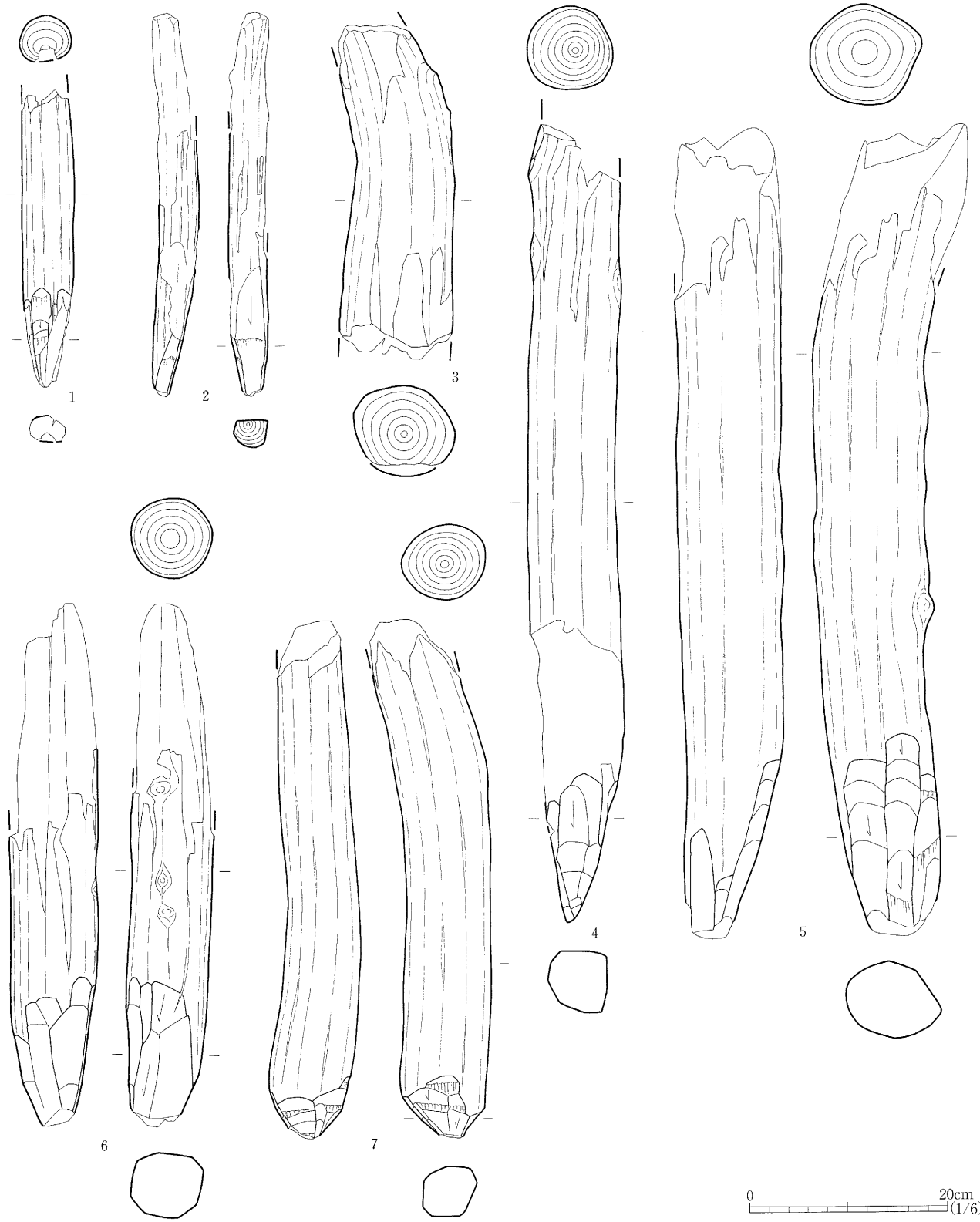
No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SD3	縄文土器・深鉢	縄文（RLR）・隆線文・刺突文	ミガキ		334-14	A-14

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
2	SD3	差歯下駄の歯	欠損	ケヤキ	393-3	Lb-25
3	SD3	不明	5.8×（5.8）cm　厚さ（2.4）cm　板目材	モクレン属	395-6	Lc-26
4	SD3	不明	長さ（40.8）cm　幅（10.9）cm　厚さ0.9cm　擦痕有、板目材			Lc-76
5	SD3	杭材	杭（No.6）、全長（28.7）cm　幅・径3.6cm		408-2	Lc-96
6	SD3	杭材	杭（No.4）、全長（44.1）cm　幅・径3.3cm		407-3	Lc-94
7	SD3	杭材	杭（No.5）、全長（98.0）cm　幅・径4.0cm		408-1	Lc-95
8	SD3	杭材	橋杭、全長（96.8）cm　幅・径12.4cm			Lc-131

第132図　SD3堀跡出土遺物（18）

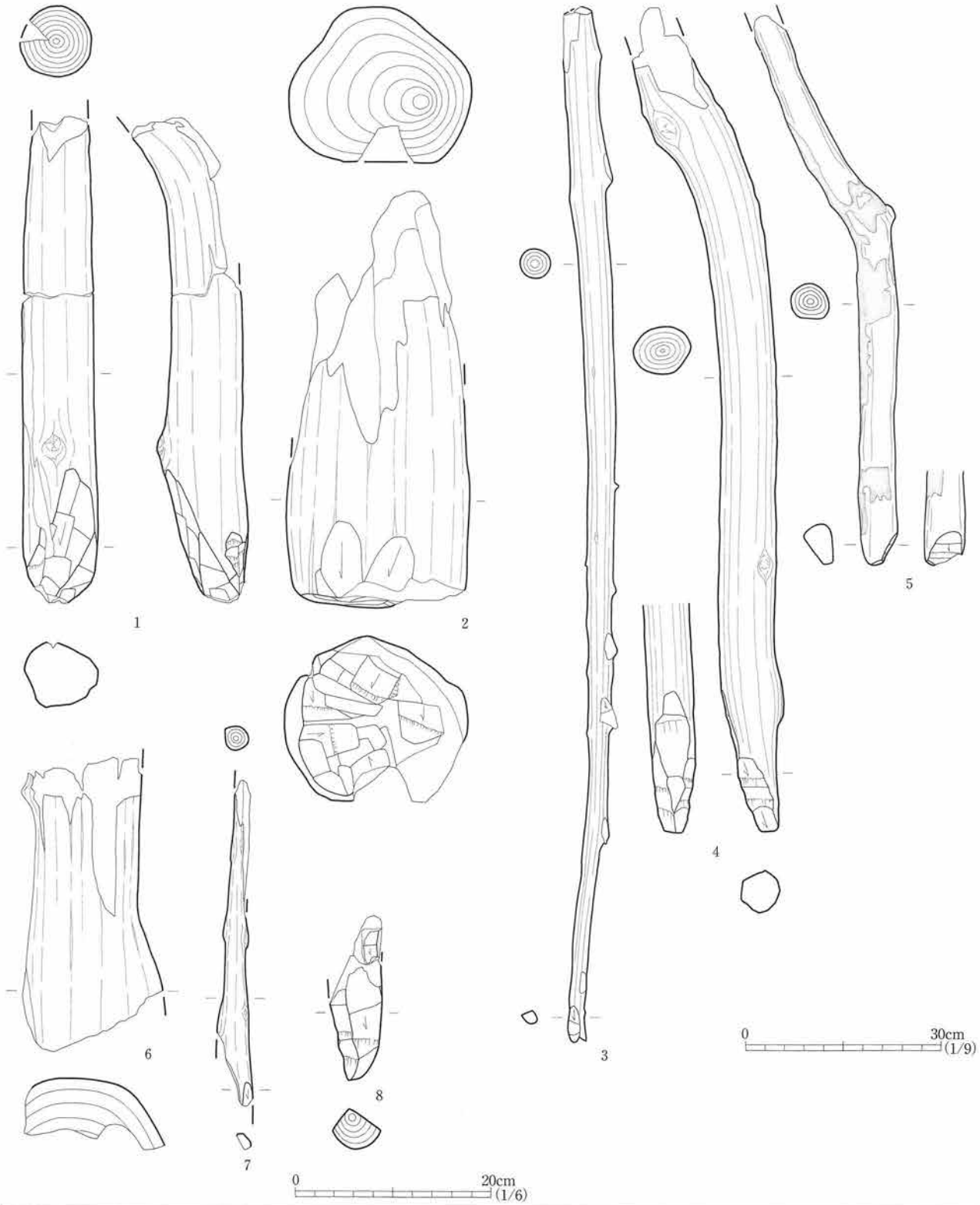
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.15）、全長（44.1）cm　幅・径13.5cm	広葉樹（散孔材？）	411-6	Lc-119
2	SD3	杭材	杭（No.13）、全長（56.4）cm　幅・径12.9cm	クリ	408-7	Lc-103
3	SD3	杭材	杭（No.3）、全長（75.0）cm　幅・径7.1cm		407-2	Lc-93
4	SD3	杭材	杭（No.7）、全長（69.9）cm　幅・径2.6cm		408-6	Lc-97
5	SD3	杭材	橋杭（No.23）、全長（32.7）cm　幅・径9.1cm	ニワトコ	414-3	Lc-127
6	SD3	杭材	橋杭（No.20）、全長（35.7）cm　幅・径4.9cm	クリ		Lc-124
7	SD3	杭材	橋杭（No.1）、全長（49.7）cm　幅・径5.0cm	クリ	408-8	Lc-104
8	SD3	杭材	橋杭（No.9）、全長（27.6）cm　幅・径4.8cm	クリ類似種	411-2	Lc-112

第133図　SD3堀跡出土遺物（19）



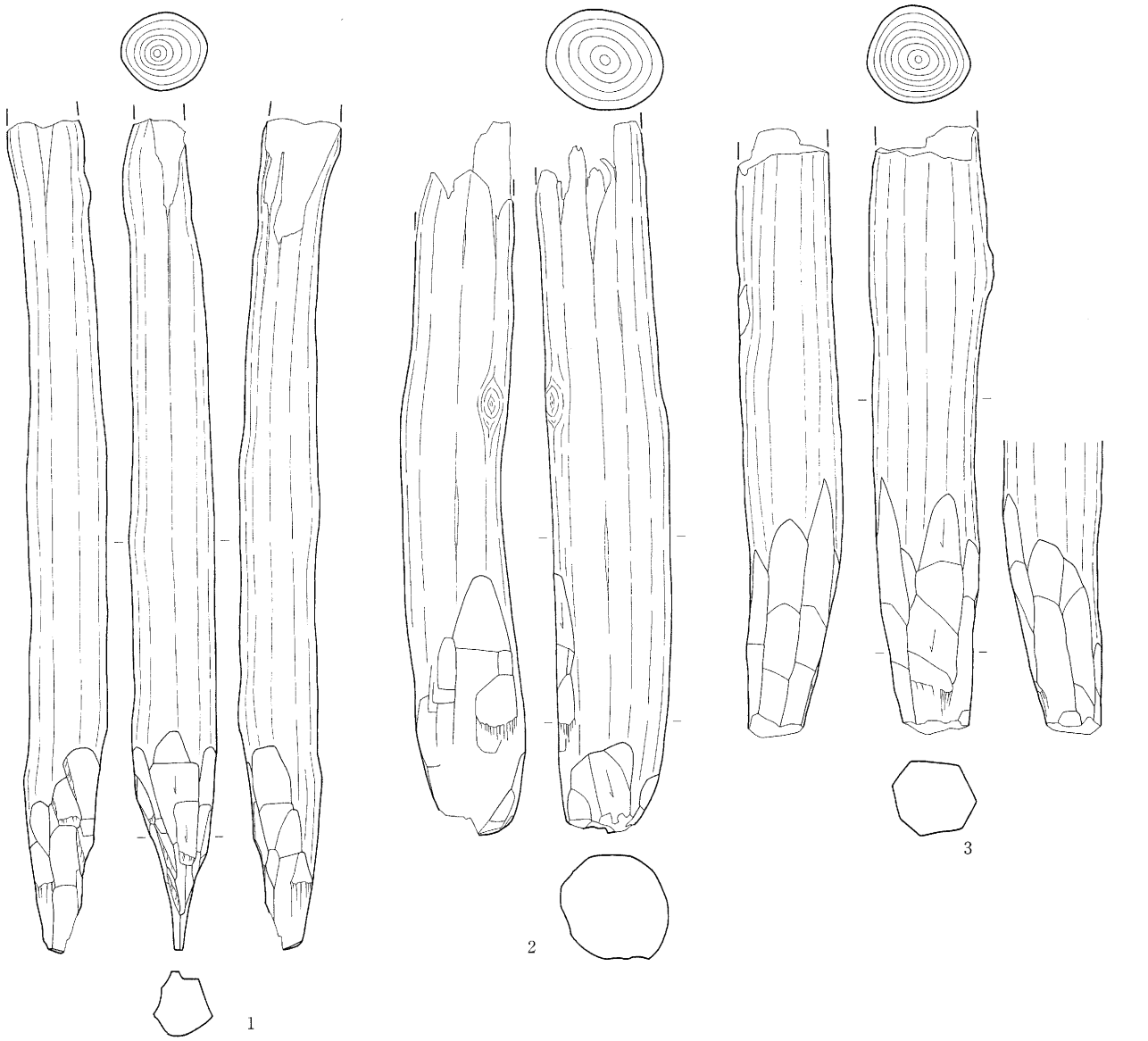
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.24）、全長（39.6）cm　幅・径4.2cm	クリ	414-4	Lc-129
2	SD3	杭材	橋杭（No.25）、全長（30.7）cm　幅・径5.4cm	クリ	414-5	Lc-128
3	SD3	杭材	橋杭（No.7）、全長（34.6）cm　幅・径11.9cm	ヤマグワ	410-3	Lc-110
4	SD3	杭材	橋杭、全長（82.6）cm　幅・径9.2cm		415-2	Lc-134
5	SD3	杭材	橋杭（No.17）、全長（83.6）cm　幅・径11.4cm	トネリコ属の一種	412-2	Lc-121
6	SD3	杭材	橋杭（No.17）、全長（83.6）cm　幅・径11.4cm	トネリコ属の一種	411-7	Lc-120
7	SD3	杭材	橋杭（No.22）、全長（53.6）cm　幅・径9.4cm	クリ	414-2	Lc-126

第134図　SD3堀跡出土遺物（20）



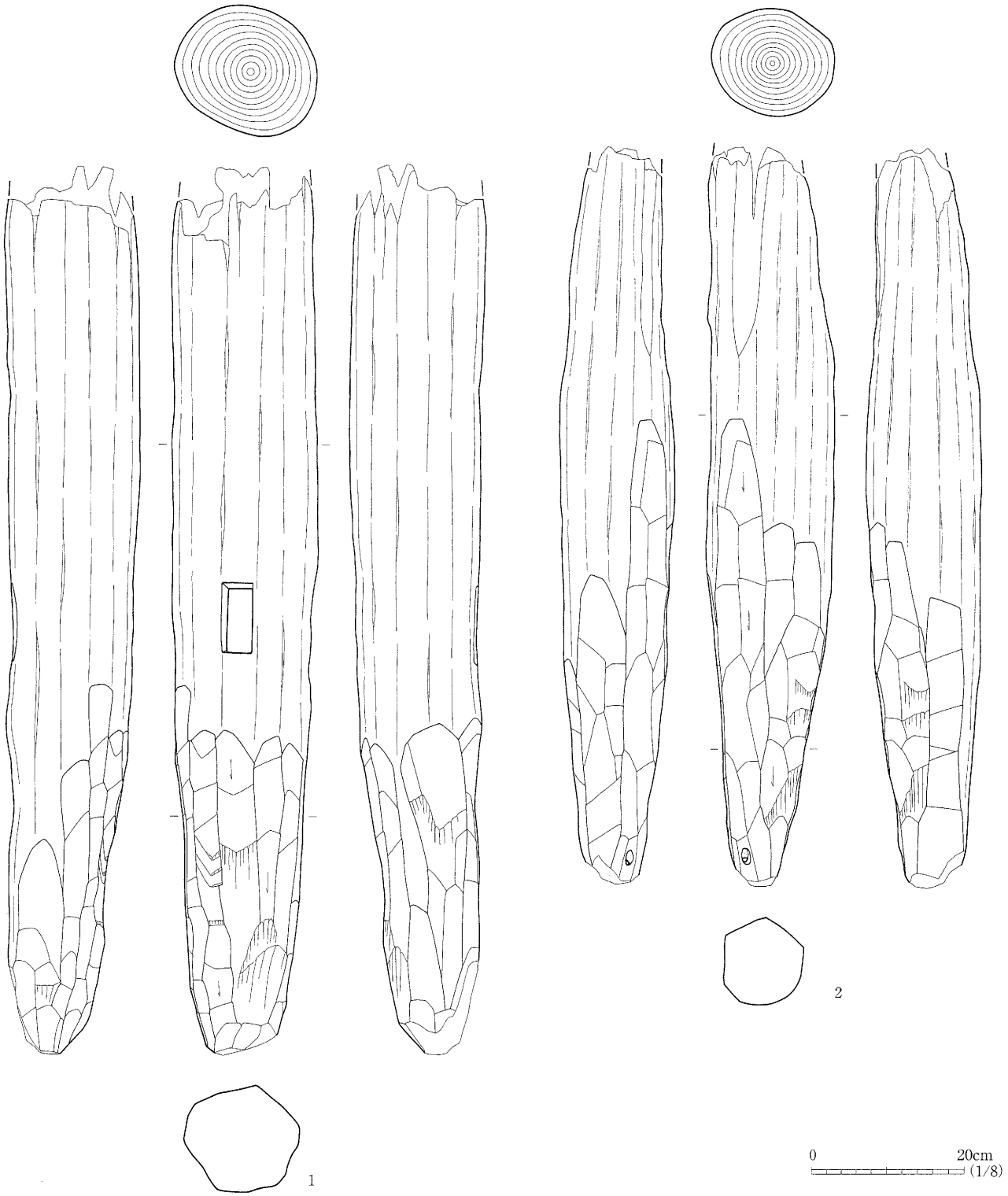
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.19）、全長（50.3）cm　幅・径7.6cm	ヤナギ属の一種	413-2	Lc-123
2	SD3	杭材	橋杭（No.14）、全長（43.2）cm　幅・径18.8cm		411-5	Lc-117
3	SD3	杭材	杭（No.11）、全長（159.3）cm　幅・径5.6cm		408-4	Lc-101
4	SD3	杭材	杭（No.2）、全長（84.3）cm　幅・径6.0cm		407-4	Lc-92
5	SD3	杭材	杭（No.10）、全長（127.4）cm　幅・径9.1cm		408-3	Lc-100
6	SD3	杭材	橋杭（No.14）、全長（30.4）cm　幅・径14.3cm		411-4	Lc-116
7	SD3	杭材	橋杭（No.12）、全長（33.8）cm　幅・径2.5cm	クリ		Lc-115
8	SD3	杭材	橋杭（No.10）、全長（17.1）cm　幅・径5.3cm	ヤナギ属の一種	411-3	Lc-113

第135図　SD3堀跡出土遺物（21）



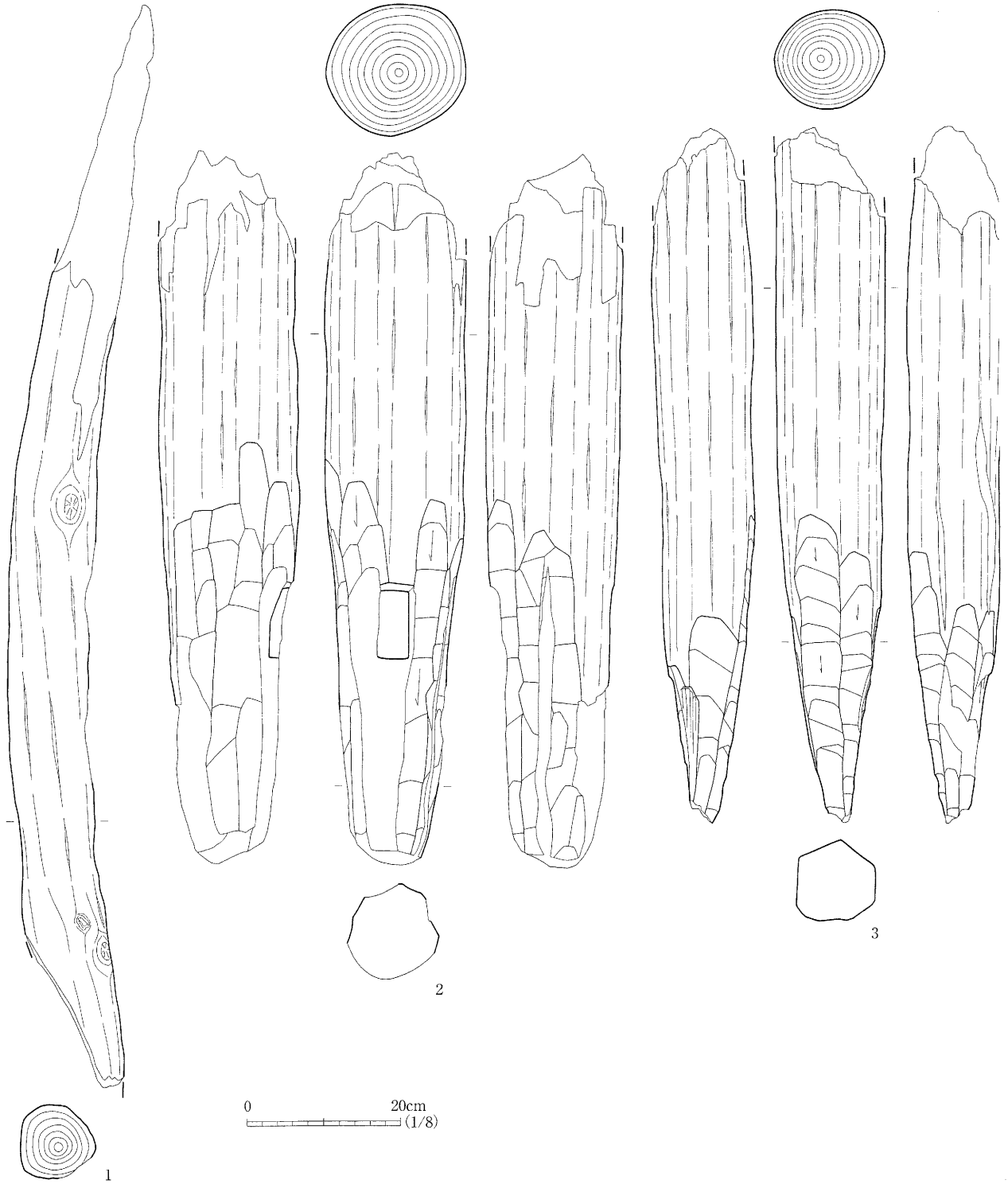
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.2）、全長（99.5）cm　幅・径10.5cm	クリ	409-1	Lc-105
2	SD3	杭材	橋杭（No.4）、全長（84.6）cm　幅・径14.2cm	クリ	409-3	Lc-107
3	SD3	杭材	橋杭（No.3）、全長（72.0）cm　幅・径12.3cm	広葉樹（散孔材）	409-2	Lc-106

第136図　SD3堀跡出土遺物（22）



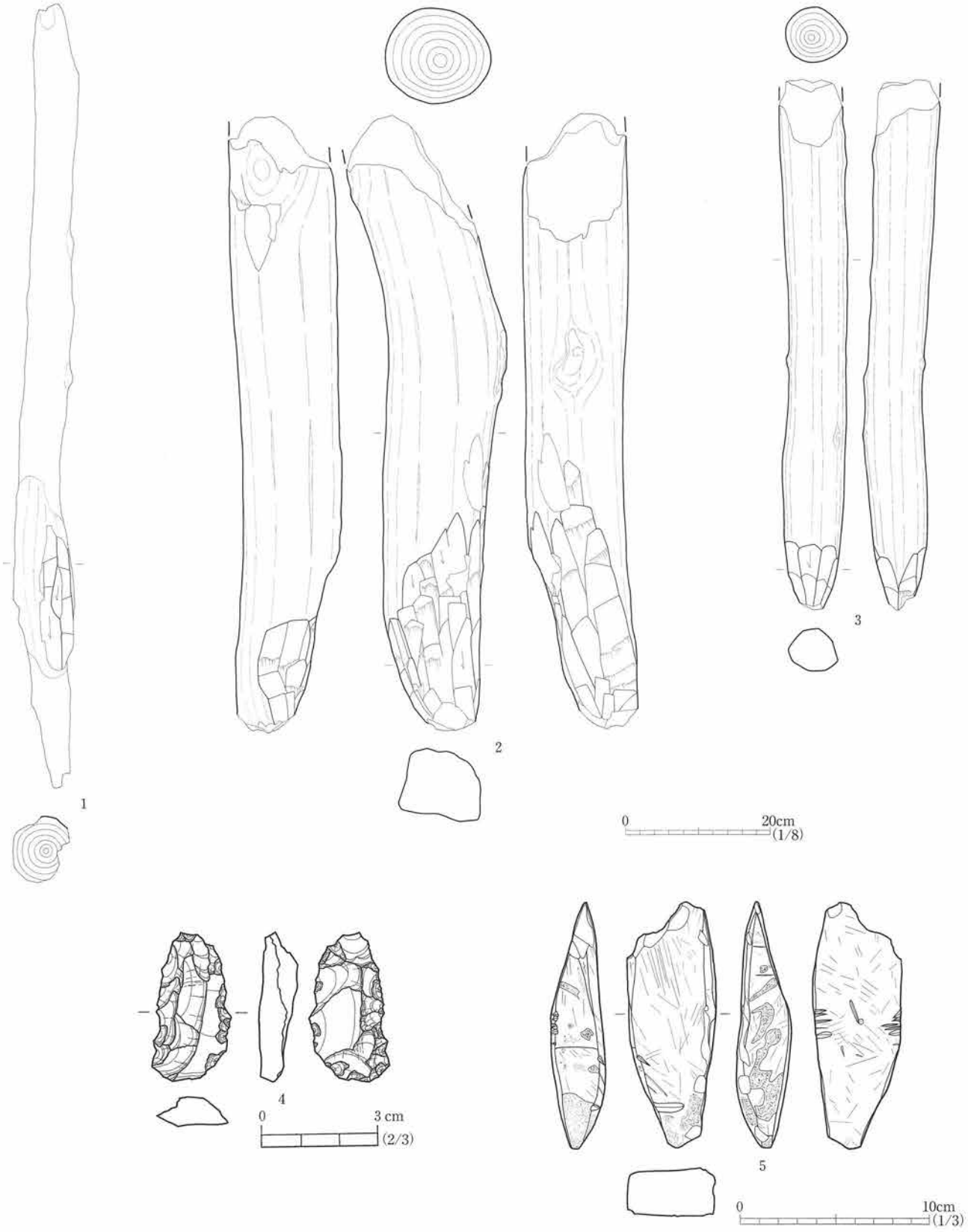
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.5）、全長（119.4）cm　幅・径19.2cm	クリ	410-1	Lc-108
2	SD3	杭材	橋杭（No.8）、全長（99.4）cm　幅・径116.8cm　先端部に加工穴（焼け痕有）	クリ	411-1	Lc-111

第137図　SD3堀跡出土遺物（23）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橋杭（No.5）、全長（143.9）cm　幅・径11.0cm		415-1	Lc-130
2	SD3	杭材	橋杭（No.18）、全長（94.6）cm　幅・径18.6cm	クリ	413-1	Lc-122
3	SD3	杭材	橋杭（No.21）、全長（92.4）cm　幅・径14.6cm	クリ	414-1	Lc-125

第138図　SD3堀跡出土遺物（24）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD3	杭材	橛杭（No.11）、全長（111.4）cm　幅・径7.9cm	カヤ	411-8	Lc-114
2	SD3	杭材	橛杭（No.14）、全長（87.7）cm　幅・径15.1cm		412-1	Lc-118
3	SD3	杭材	橛杭（No.6）、全長（75.4）cm　幅・径9.0cm	クリ	410-2	Lc-109

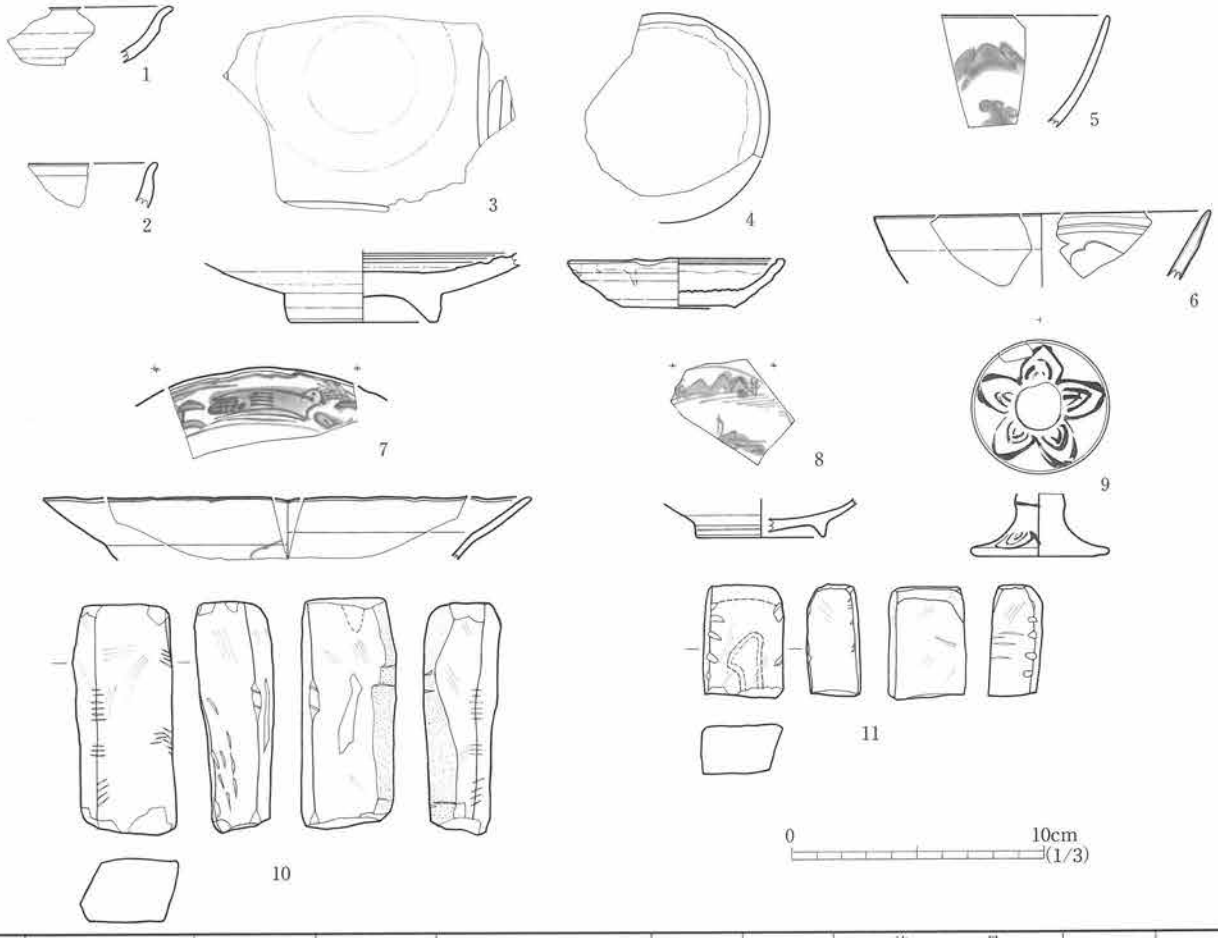
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
4	SD3	不定形	4	2.1	1	6.2	珪化凝灰岩			Ka-155
5	SD3	砥石	13.2	4.7	2.8	210	デイサイト質凝灰岩		428-15	Kd-169

第139図　SD3堀跡出土遺物（25）

SD 4 堀跡

A～L－26～29グリットで確認した。SD 2 ・22溝跡、SK11・42・59・68・69土坑、SX 1 ・ 2 性格不明遺構、ピット、小溝と重複している。SD 2 溝跡、SK11・42・59土坑、SX 1 ・ 2 性格不明遺構より古く、その他の遺構より新しい。また、G・H－26グリッドでは遺構の北側に別の溝跡と考えられる部分が確認されたが、SD 4 堀跡によって削平され、詳細は不明である。確認した長さは32mで、方向はE－6°－Sである。上幅は7.5～8.0mであるが、SD 3 堀跡と同様にG・H－28・29グリットでは南側の上端が約 6 mに渡って内側に屈曲し、幅は5.8m前後に狭く、くびれる形になる。ちょうどこの部分がSD 2 溝跡に削平されており、本来は 6 m前後になるものと考えられる。平成 5 年度の西側の調査では遺構上面でプランの確認と一部の掘込みのみを行ない、平成 7 年度の東側の調査では全面の掘込み精査を行った。遺構の北壁の輪郭が平成 5 年度の調査時のラインと平成 7 年度の調査時のラインがずれ、西側がやや南にずれる様な形になっている。

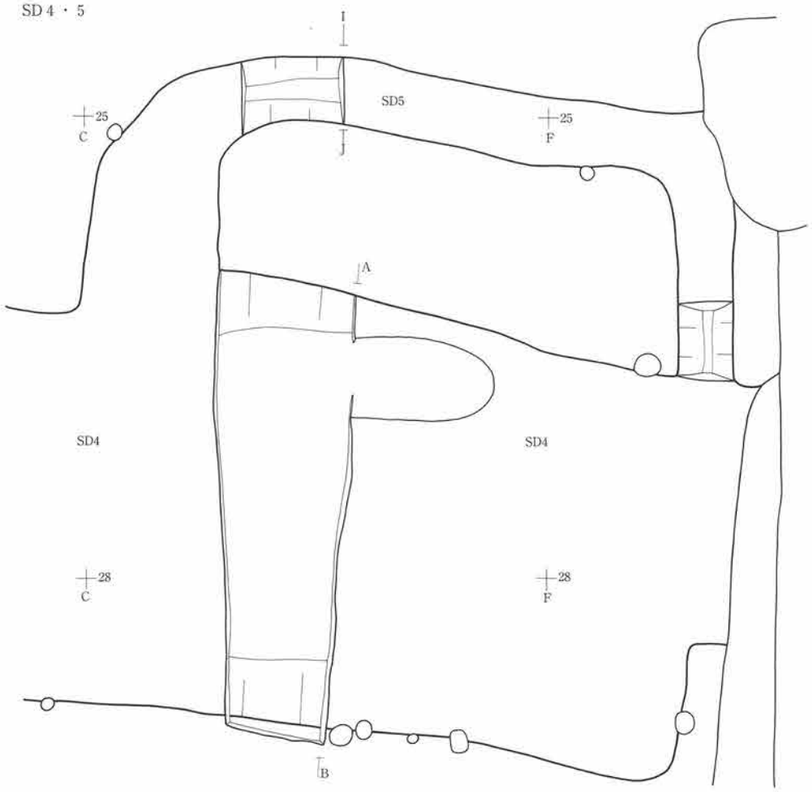
西側の状況：弧状のSD 5 溝跡が北側に接しているが重複関係は確認されず、同時に機能していたものと考えられる。掘り下げた部分では深さ1.4mで、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は 4 層確認された。 3 層以外は自然堆積層であると考えられ、特に 2 層に流水の痕跡が見られる。底面は壁際近くは平坦であるが、中央付近はやや深くえぐれている。

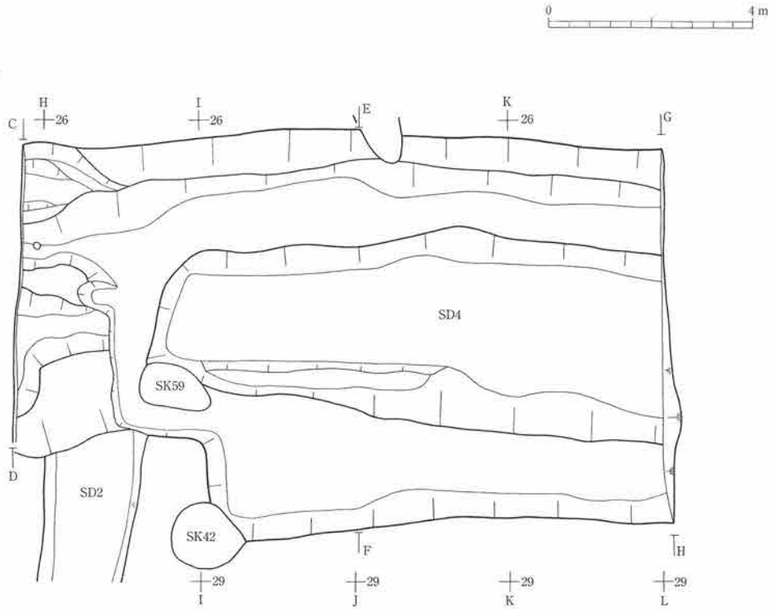


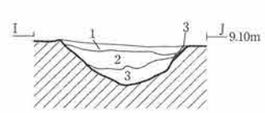
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 3層	陶器	端反皿	灰釉、大窯Ⅰa期	瀬戸美濃	15C			(2.3)	366-5	I-348
2	SD4 3層	陶器	天目茶碗	鉄釉、漆つぎ、大窯Ⅱa期	瀬戸美濃	16C前半			(1.8)	366-4	I-347
3	SD4 3層	陶器	鉢	四角形の鉢か、銅緑釉、蛇の目剥ぎ、内面2条の沈線文が四方に有、高台（ケズリ出し）、体部下半露胎	肥前	17C末~18C中頃		6.0	(2.3)	366-6	I-349
4	SD4 底面直上	陶器	卸皿	口縁部釉かかってる	古瀬戸	14C	8.7	4.5	2.0	369-9	I-429
5	SD4 3層	磁器	碗	染付、外面：山水文	中国	16C～17C			(4.5)	376-1	J-78
6	SD4 3層	磁器	碗	割花文、龍泉窯系	中国	12C後半~13C前半	(13.2)		(2.7)	376-20	J-97
7	SD4 3層	磁器	皿	染付、輪花	中国（景徳鎮）	16C末~17C前半	(19.4)		(2.5)	375-12	J-77
8	SD4 3層	磁器	皿	染付、漆つぎ	中国	16C後半		(5.2)	(1.5)	376-4	J-81
9	SD4 3層	磁器	仏飯具	色絵（赤）	肥前	17C後半以降		5.4	(2.5)	375-11	J-76

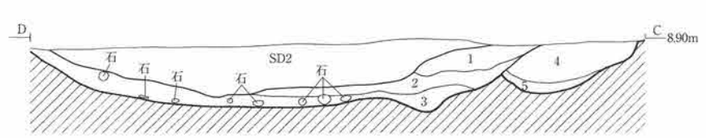
No.	遺構・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	登録番号
10	SD4 4層	砥石	9.3	3.9	2.5	168	砂質凝灰岩		428-2	Kd-143
11	SD4 3層	砥石	4.5	3.2	2	52	デイサイト質凝灰岩		428-17	Kd-173

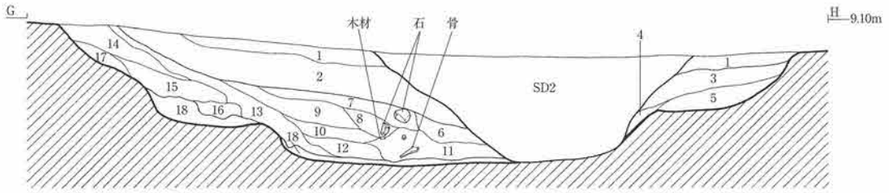
第140図　SD4堀跡出土遺物（1）

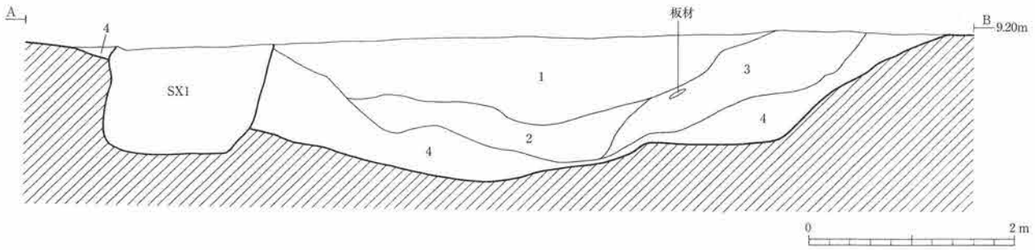


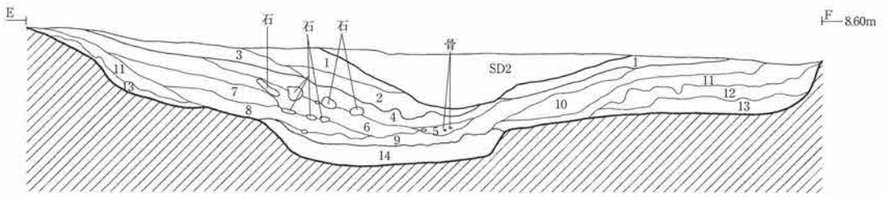












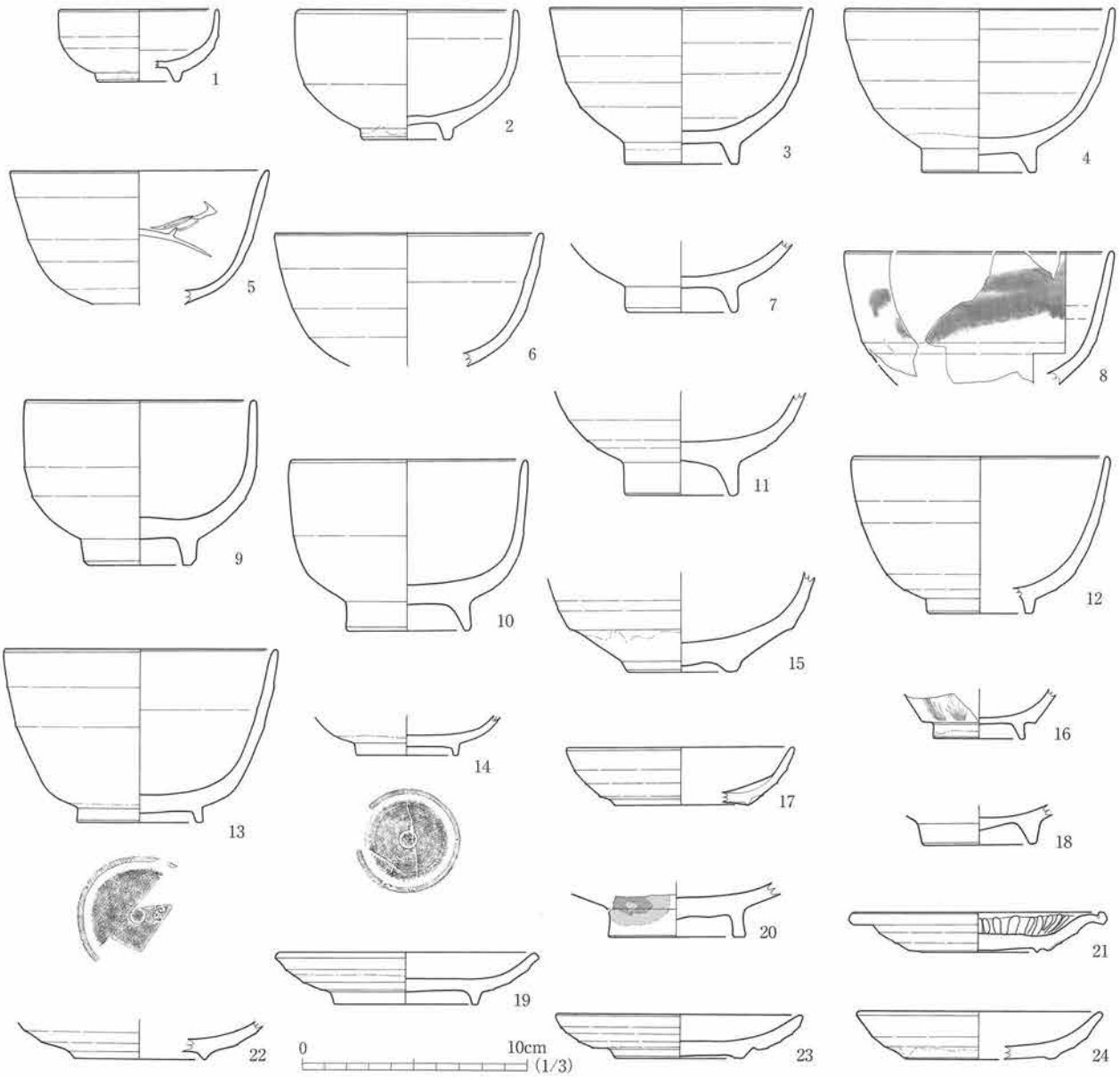
遺構	No.	土色	土性	備考
SD4 A－B	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質シルト	褐色（10YR4/4）砂を層状に含む、自然堆積
	2	オリーブ黒色（10Y3/1）	砂質シルト	層状に堆積している、自然堆積（この時期水が流れていた）
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土	にぶい黄橙（10YR5/4）粘土のブロックを含む、土器に炭化物の層を層状に含む、そこより焼いた板材が出土している、人為堆積土、しまり、粘性ややあり
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土	底面で炭化物を多く含む、中央の底面で炭化物に混じって動物遺存体が出土している、この層より鉢鉢が出土している、しまり、粘性ややあり
SD5 I－J	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト質粘土	自然堆積
	2	黒褐色（10YR2/2）	粘土	にぶい黄橙（10YR6/4）粘土含む、人為堆積土、しまりあり
	3	オリーブ黒色（5Y2/2）	シルト質粘土	底面は砂、自然堆積、グライ化している、しまり、粘性ややあり

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SD4 C－D	1層	1	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土質シルト	1回目の土
		2	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	端に地山ブロックを含む、1回目にSD4を埋めた土
		3	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	砂	細砂～粗砂、地山ブロックを含む、1回目にSD4を埋めた土
	2層	4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	微砂～粗砂を含む、酸化鉄を含む、層下面に植物遺存体が薄く堆積している（SD4の括れ部分を削る溝）
		5	暗緑灰色（10GR3/1）	粘土質シルト	地山ブロックを含む、礫～粗砂を含む（SD4の括れ部分を削る溝）

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SD4 G－H	2層	6	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘土質シルト	褐（10YR4/6）シルト、暗オリーブ灰（5GY4/1）を斑状に含む
		7	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	褐（10YR4/6）シルトを斑状に含む
		8	オリーブ黒色（5Y2/2）	粘土質シルト	褐（10YR4/4）シルトを斑状に含む
		9	黒褐色（2.5Y3/1）	粘土質シルト	灰オリーブ（5Y4/2）粘土質シルトを斑状に含む
		10	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	暗緑灰（5GY3/1）粘土質シルトブロックを含む
		11	オリーブ黒色（7.5Y2/2）	粘土質シルト	黒（7.5Y2/1）粘土、オリーブ黒（10Y3/2）粘土をブロックに含む
		12	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土質シルト	黒（7.5Y2/1）粘土をブロックに含む、層下面に多い
		13	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	暗オリーブ灰（5GY3/1）粘土、オリーブ褐（2.5Y4/6）シルト、にぶい黄（2.5Y6/4）シルトのブロックを含む
		14	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/4）シルトを斑状に含む
		15	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	褐（10YR4/6）シルトを斑状に含む
		16	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	黒（7.5Y2/1）粘土を斑状に含む
		17	暗褐色（10YR3/3）	シルト	灰黄褐（10RY4/2）シルトを斑状に含む
	3層	18	暗緑灰色（7.8GY4/1）	粘土質シルト	暗オリーブ（7.5Y4/3）シルト、オリーブ黒（7.5Y3/2）粘土質シルトをブロック状に含む

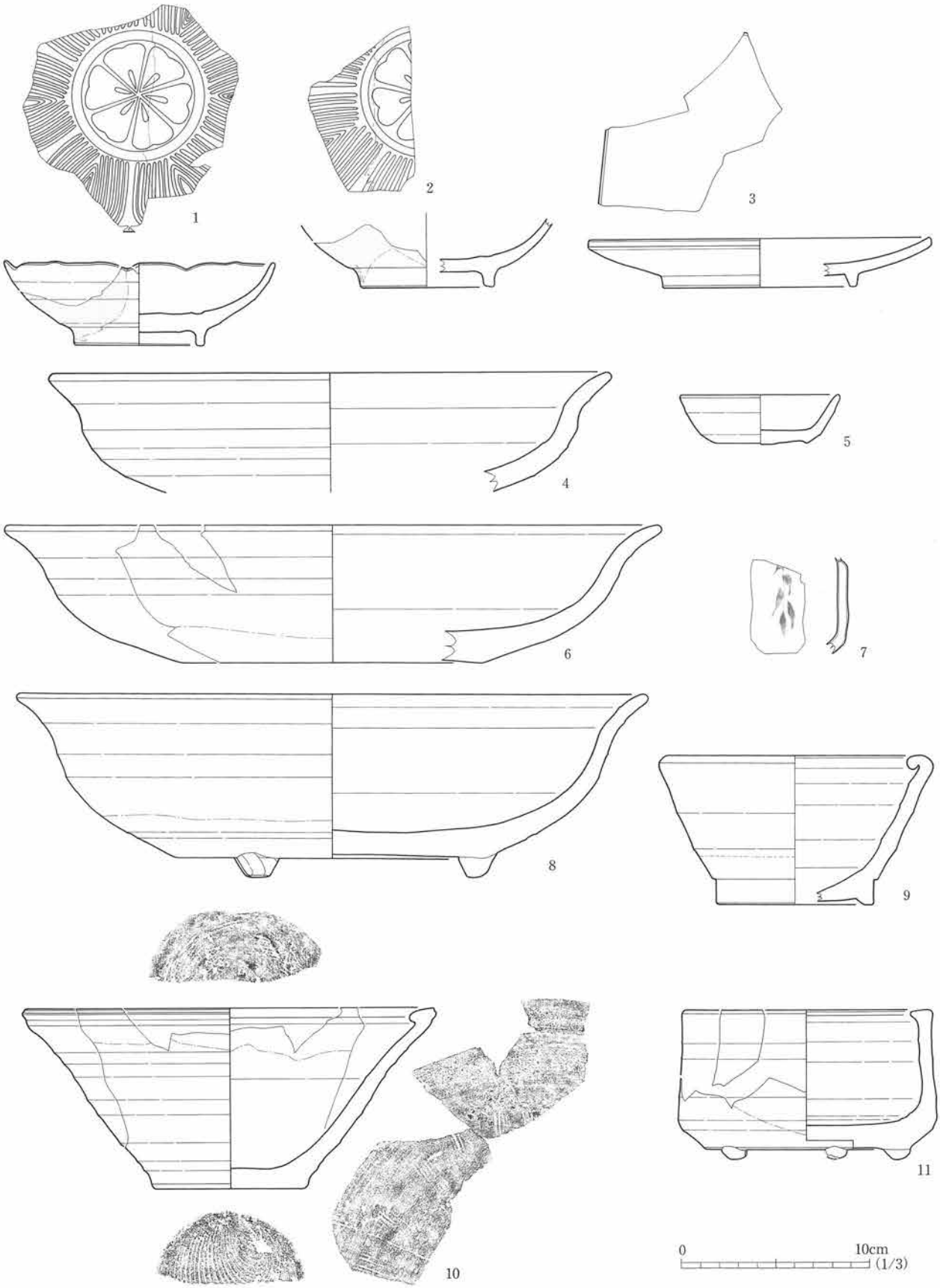
遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SD4 E－F	1層	1	灰黄褐色（10RY4/2）	粘土質シルト	酸化鉄を含む、遺物取り上げ＝1層
		2	暗緑灰色（10GY3/1）	粘土質シルト	微砂～粗砂を含む、遺物取り上げ＝1層
		3	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	細砂～粗砂を含む、遺物取り上げ＝1層
	2層	4	暗緑灰色（10GY4/1）	粘土質シルト	底面に礫を含む、遺物取り上げ＝1層
		5	暗緑灰色（10GY3/1）	粘土質シルト	細砂～粗砂を含む、遺物取り上げ＝1層
		6	暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）	粘土質シルト	底面に礫を含む、遺物取り上げ＝1層
		7	暗緑灰色（7.5GY4/1）	粘土質シルト	微砂～粗砂を含む、遺物取り上げ＝1層
		8	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	粘土質シルト	微砂～粗砂を含む、遺物取り上げ＝1層
		9	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	遺物取り上げ＝2層
		10	暗緑灰色（7.5GY3/1）	粘土質シルト	遺物取り上げ＝1層
		11	緑黒色（7.5GY2/1）	粘土質シルト	遺物取り上げ＝1層
		12	暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）	粘土質シルト	暗緑灰（7.5GY4/1）をブロックに含む、層に地山ブロックを含む、遺物取り上げ＝1層
		13	暗緑灰色（7.5GY4/1）	粘土質シルト	端に地山ブロックを含む、遺物取り上げ＝1層
	3層	14	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土質シルト	黒（7.5Y2/1）が縞状に薄く何層かに（5層前後）堆積している、端に地山ブロックを含む、遺物取り上げ＝2層

第140図　SD4堀跡・SD5溝跡



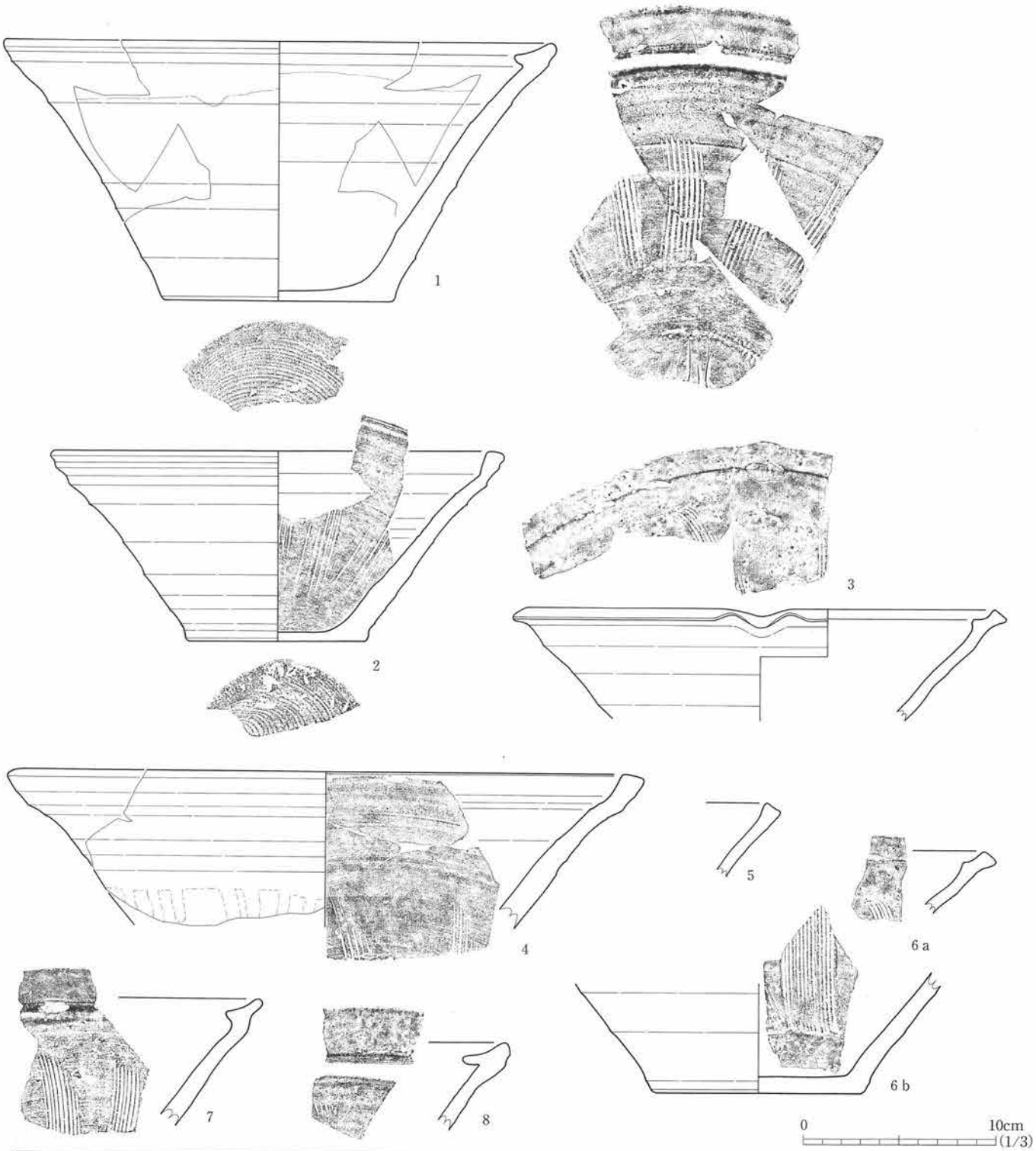
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 2層	陶器	小坏	灰釉、貫入が細かい	大堀相馬	18C	7.0	3.6	3.3	363-14	I-330
2	SD4 2層	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C前半	10.0	4.1	5.9	363-13	I-329
3	SD4 2層	陶器	碗	鉄釉	瀬戸？	18C	11.8	5.1	7.1	363-4	I-319
4	SD4 2層	陶器	碗	黒釉	瀬戸？	19C前半	12.0	5.0	7.4	363-2	I-317
5	SD4 2層	陶器	碗	掛釉の上に青色の釉を流し掛け、内面に文様（陰刻）	瀬戸？	18C以降	11.5		(6.1)	363-3	I-318
6	SD4 2層	陶器	碗	鉄釉	瀬戸？	18C	11.9		(6.0)	363-5	I-320
7	SD4 2層	陶器	碗	灰釉、目跡1ヶ所	京信楽	18C		4.8	(3.2)		I-321
8	SD4 2層	陶器	碗	灰釉に緑釉流し	美濃	17C	12.0		(6.0)	362-1	I-301
9	SD4 2層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半	10.3	7.5	4.6	363-8	I-324
10	SD4 2層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半	10.6	5.3	7.8	363-9	I-325
11	SD4 2層	陶器	碗	灰釉、呉器手	肥前	17C後半		5.1	(4.7)	363-7	I-323
12	SD4 2層	陶器	碗	灰釉（刷毛目文）	肥前	17C末~18C前	11.5	4.6	7.1	363-11	I-327
13	SD4 2層	陶器	碗	京焼風陶器、高台裏に「清水」の銘有、透明釉	肥前	17C後半	12.2	5.6	7.8	363-10	I-326
14	SD4 2層	陶器	碗	京焼風陶器、高台裏に銘有「木ノ下弥」	肥前	17C末~18C前		4.6	(1.8)	363-12	I-328
15	SD4 2層	陶器	碗	まだら唐津、ワラ灰釉か、高台はトキン、左まわりのロクロ、茶陶	唐津	17C前半		4.8	(4.5)	363-6	I-322
16	SD4 2層	陶器	碗	小杉茶碗	美濃	18C		4.0	(2.3)	362-2	I-302
17	SD4 2層	陶器	丸皿	灰釉、漆つぎ有、全面施釉	瀬戸美濃	16C中	10.1	5.9	2.6	362-5	I-306
18	SD4 2層	陶器	碗	銅緑釉	肥前	17C後半		5.0	(1.8)		I-397
19	SD4 2層	陶器	丸皿	灰釉、見込みに重ね焼きの跡、2次元的火熱有、外面体部 下半~底部に炭化物付着	瀬戸美濃	17C後半	11.4	6.4	2.4	362-7	I-308
20	SD4 2層	陶器	皿か鉢	掛け分け（灰釉、鉄釉の濃淡）、内面は黒釉、畳付きが露胎	瀬戸美濃	17C前半		6.0	(2.5)	362-10	I-314
21	SD4 2層	陶器	折縁皿	灰釉、丸彫	瀬戸美濃	16C末	11.0	5.1	1.8	362-6	I-307
22	SD4 2層	陶器	丸皿	志野	美濃	16C末		5.8	(1.8)	361-13	I-299
23	SD4 2層	陶器	丸皿	志野、高台裏露胎、大窯Ⅰ期	美濃	16C末~17C初	11.0	5.6	2.0	361-12	I-298
24	SD4 2層	陶器	丸皿	志野、大窯Ⅰ期	美濃	16C末~17C初	10.8	6.6	2.2	361-11	I-297

第142図　SD4堀跡出土遺物（2）



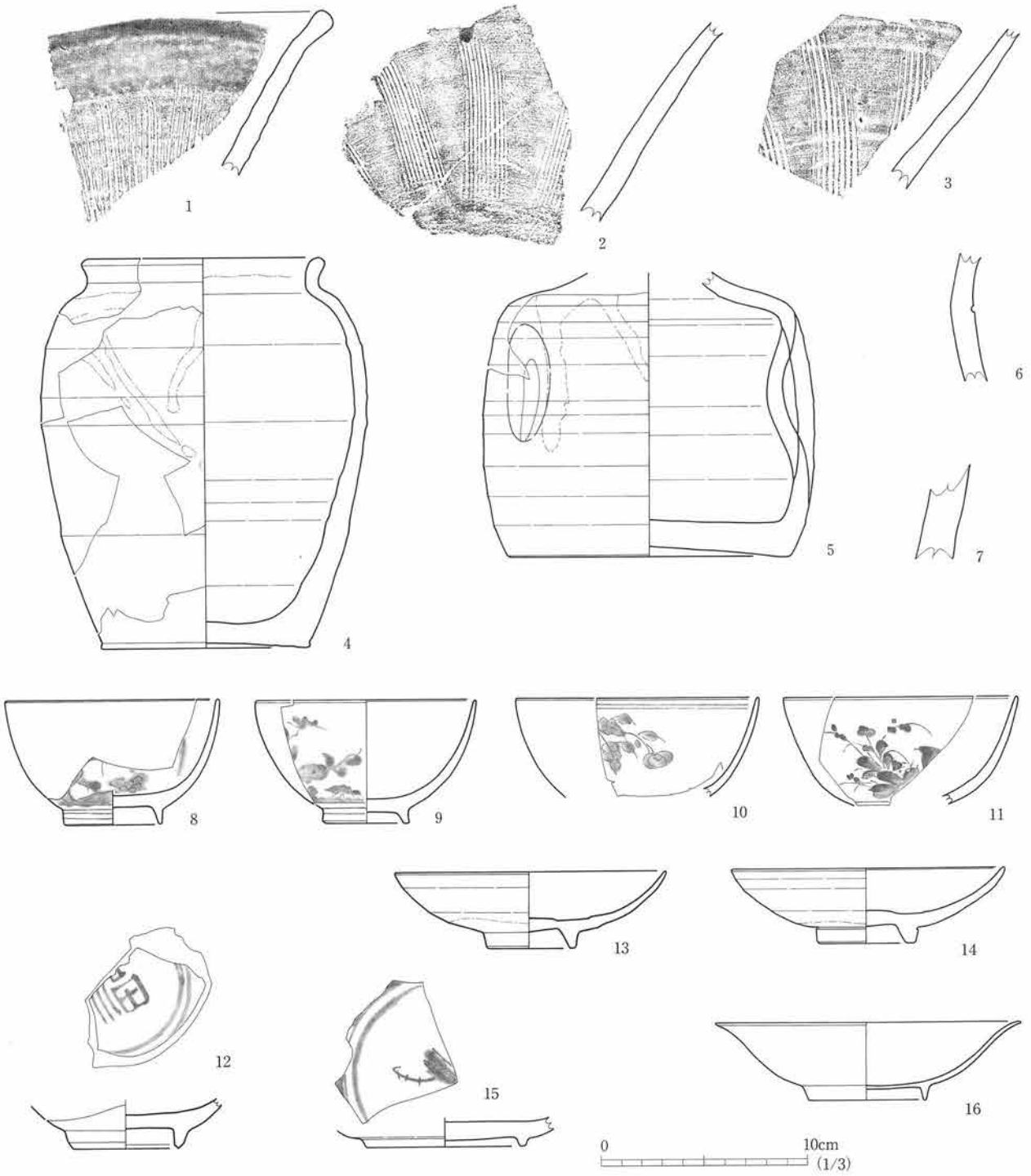
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 2層	陶器	皿	掛け分け（鉄釉と灰釉）、型押しの輪花皿	瀬戸美濃	17C前半～中	(14.4)	6.8	4.1～(4.5)	362-8	I-310
2	SD4 2層	陶器	皿	掛け分け（鉄釉と灰釉）、型押しの輪花皿	瀬戸美濃	17C前半～中		7.0	(3.4)	362-9	I-311
3	SD4 2層	陶器	変形皿	鉄釉、全面施釉、外面にわずかに黒釉有	産地不明	江戸？	18.2	10.2	2.6	364-1	I-331
4	SD4 2層	陶器	大皿	灰釉	岸窯系	17C後半	29.3		(6.4)	365-1	I-336
5	SD4 2層	陶器	小鉢か小型向付	碁笥底、全面施釉	美濃	16C末～17C初	8.5	4.9	2.7	361-14	I-300
6	SD4 2層	陶器	大皿	鉄釉に食釉流し、内面に飴釉	岸窯系	17C後半	34.8	16.0	7.4	364-5	I-335b
7	SD4 2層	陶器	向付	筒形、志野織部	美濃	17C初			(5.1)	362-3	I-303
8	SD4 2層	陶器	大皿	三脚、鉄釉に飴釉流し、内面に飴釉、内面底部にピン痕	岸窯系	17C後半	33.5	16.5	9.9	364-4	I-335a
9	SD4 2層	陶器	煙硝擂	口縁部～体部外面鉄釉、内面底部墨衽し、付着物（青黒い板状多い）内面及び体部下部は露胎	美濃	17C後半	13.6	7.8	8.0	362-4	I-305
10	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目5条、鉄釉、口縁部鉄釉、内外面体部鉄化粧	岸窯系	17C中頃	22.0	8.0	9.7	365-4	I-339
11	SD4 2層	陶器	鉢	五脚	岸窯系	17C後半	12.9	10.8	(8.0)	365-2	I-337

第143図　SD4堀跡出土遺物（3）



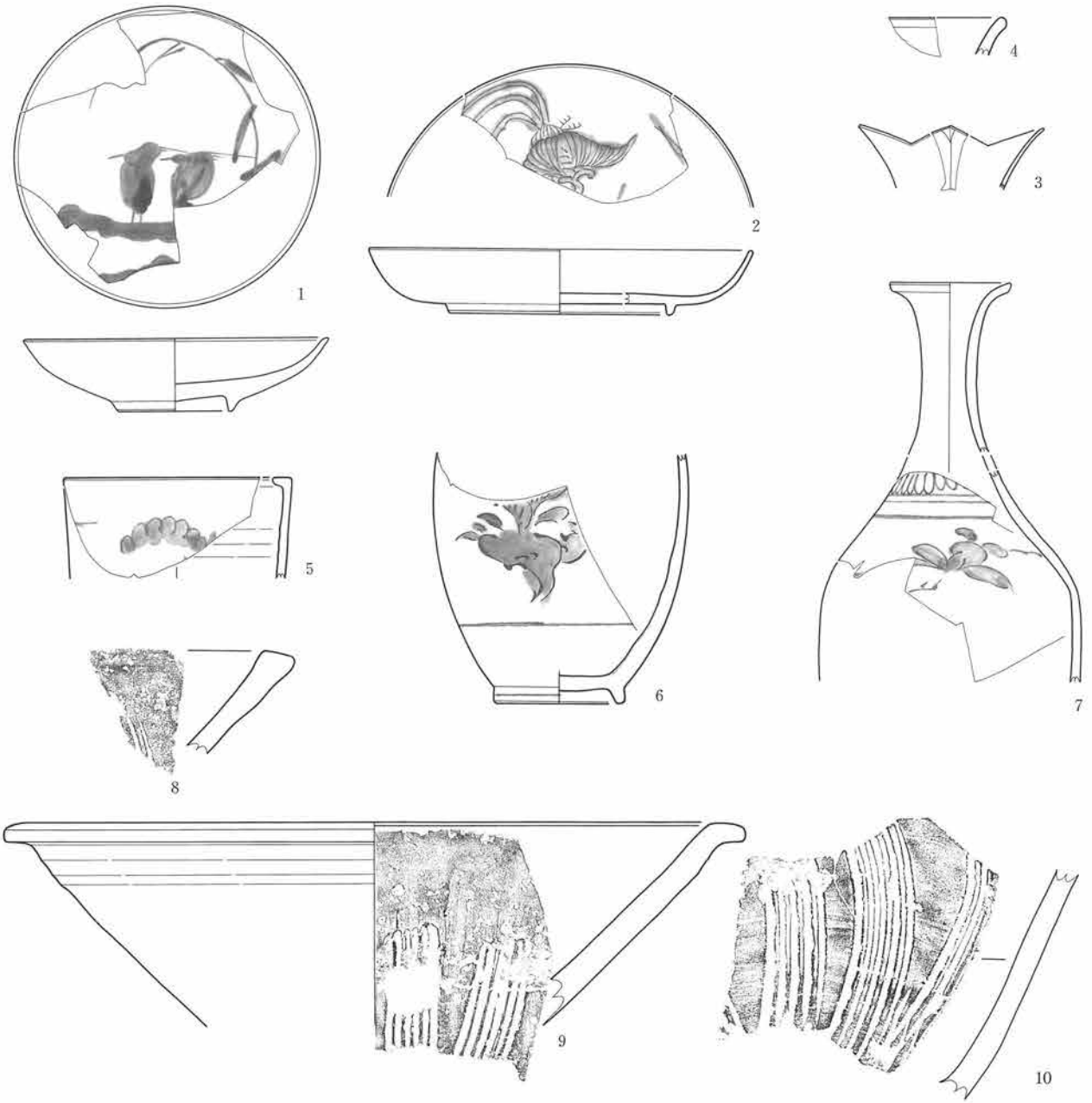
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径 (cm)	法量 底径 (cm)	法量 器高 (cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目7条、口縁部付近に鉄釉、内面に炭化物付着、破片を後に砥石として使用（断面に磨面有）	岸窯系	17C後半？	28.9	11.6	13.7	365-3	I-338
2	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目6条、口縁部付近は灰釉、体部は鉄釉	岸窯系	17C中頃	23.6	9.0	10.0	365-5	I-340
3	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目5条以上	瀬戸美濃	17C初	27.6		(6.4)	362-11	I-315
4	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目5条以上、鉄化粧に鉄釉がけ	岸窯系？	17C中頃	33.3		(8.2)	367-1	I-364
5	SD4 2層	陶器	擂鉢		岸窯系	17C中頃					I-346
6a	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目5条、鉄釉、口縁部に布で補強した、塗つぎ有	瀬戸美濃	17C初				363-1	I-316a
6b	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目13条、鉄釉	瀬戸美濃	17C初		11.0	(5.7)	363-1	I-316b
7	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目9条、鉄釉、口縁部に灰釉	岸窯系	17C中頃				366-1	I-341
8	SD4 2層	陶器	擂鉢	口縁部に鉄釉、体部鉄化粧	岸窯系	17C中頃				366-3	I-342

第144図　SD4堀跡出土遺物（4）



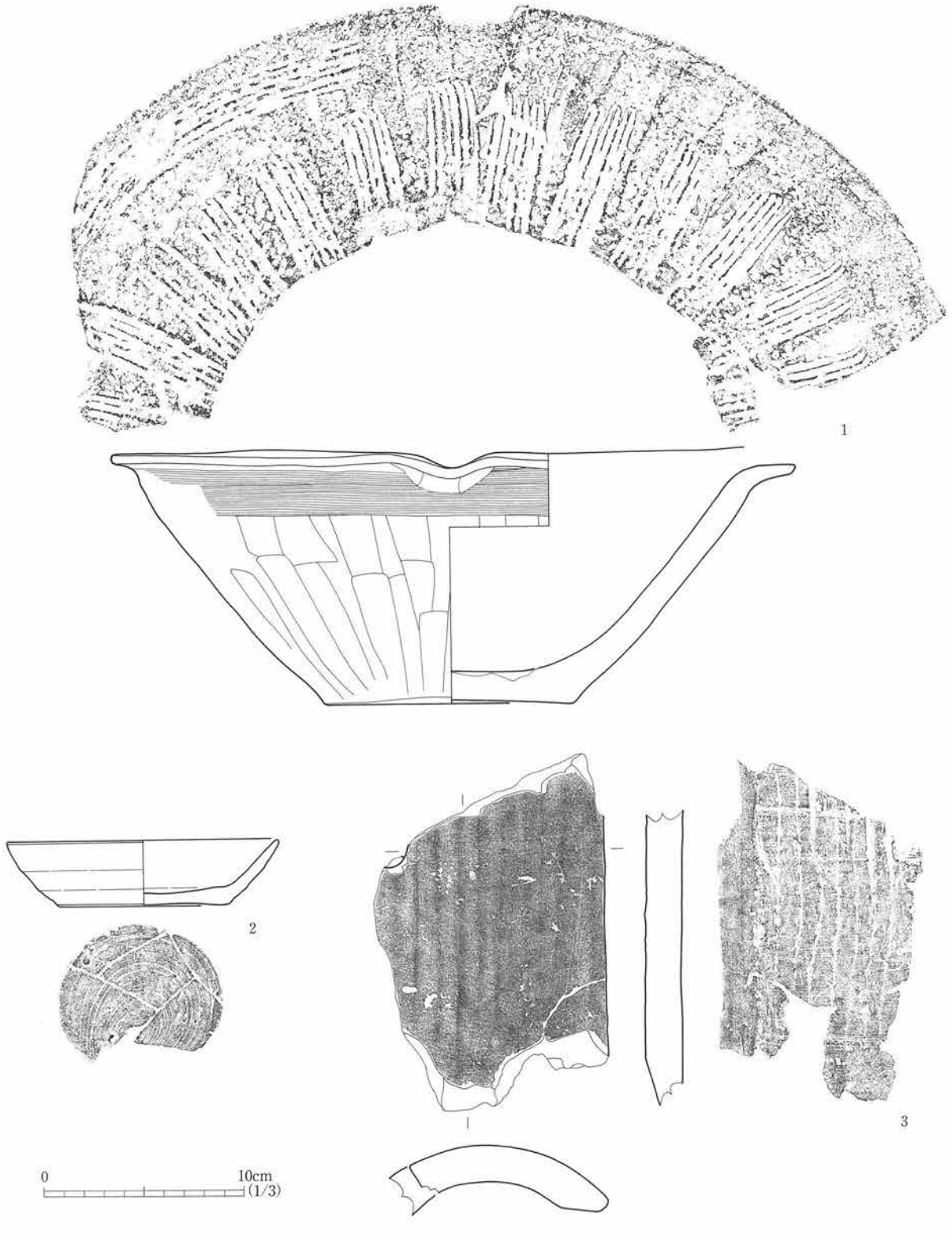
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 2層	陶器	擂鉢		岸窯系	17C中頃				366-2	I-343
2	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目8条、鉄化粧に鉄釉、内面底部付近磨耗	岸窯系	17C中頃					I-344
3	SD4 2層	陶器	擂鉢	擂目8条、鉄化粧に鉄釉	岸窯系	17C中頃					I-345
4	SD4 2層	陶器	甕	鉄釉に飴釉流し、口縁部に飴釉	岸窯系	17C後半	11.3	10.0	19.2	364-3	I-334
5	SD4 2層	陶器	甕か徳利	鉄釉に飴釉流し、体部に3ヶ所凹み、破片に指り痕有（成石に転用？）	岸窯系	17C後半		13.8	(14.0)	364-2	I-333
6	SD4 2層	中世陶器	甕		常滑					370-15	I-454
7	SD4	中世陶器	甕		在地	13～14C				370-5	I-443
8	SD4 2層	磁器	碗	染付、外面に炭化物付着	肥前	18C	10.4	4.7	6.7	374-12	J-60
9	SD4 2層	磁器	碗	染付、外面：草花文、内面に炭化物付着、畳付に砂付着	肥前	17C末～18C前半	10.8	4.2	6.1	374-13	J-61
10	SD4 2層	磁器	碗	染付	肥前	17C後半以降	11.8		(4.9)	374-14	J-62
11	SD4 2層	磁器	碗	染付	肥前	18C	11.3		(5.3)	374-15	J-63
12	SD4 2層	磁器	碗	陶胎染付、見込みに銘有「福」、高台裏に墨付着（墨入れに転用か）	肥前	18C前半		5.1	(2.5)	375-1	J-65
13	SD4 2層	磁器	皿	見込みの蛇の目釉剥ぎ、高台に砂付着	肥前	17C後半	13.1	4.2	3.8	375-7	J-72
14	SD4 2層	磁器	皿	見込み蛇の目剥ぎ	肥前	17C後半	13.2	4.8	3.7	375-6	J-71
15	SD4 2層	磁器	皿	染付、畳付に砂付着	肥前	17C後半		7.8	(1.3)		J-70
16	SD4 2層	磁器	皿		中国（景徳鎮）	16C前半	17.6	10.4	3.0	375-3	J-67

第145図　SD4堀跡出土遺物（5）



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD4　2層	磁器	皿	染付、内面に水辺に鳥上部に草、畳付に砂付着	肥前	17C前半~中葉	14	5.2	3.4	375-5	J-69
2	SD4　2層	磁器	皿	染付、高台内に工具痕	中国（景徳鎮）	16C末~17C前半	17.6	10.4	3.0	375-4	J-68
3	SD4　2層	磁器	桔梗形猪口	漆つぎ	肥前	16C	8.5		(2.9)	376-17	J-94
4	SD4　2層	磁器	盤？	龍泉窯	肥前	17C中頃~後半				376-18	J-95
5	SD4　2層	磁器	香炉	染付、漆つぎ	肥前	18C？	10.4		(4.7)	375-8	J-73
6	SD4　2層	磁器	徳利？	染付、外面：かぶ文？畳付に砂付着	肥前	17C中頃~後半		6.0	(11.7)	375-9	J-75
7	SD4　2層	磁器	瓶	染付	肥前	17C中頃~後半	5.7	6.0	(18.5)	375-10	J-74
8	SD4　2層	瓦質土器	擂鉢	擂目３条以上	在地	16C代				378-3	T-9
9	SD4　2層	瓦質土器	擂鉢	擂目６条、口縁部内外面ロクロナデ、体部内面縦ナデ、折縁口縁、胎土に白色針状物質多く含む	在地	16C代	34.0		(9.4)	378-4	T-8
10	SD4　2層	瓦質土器	擂鉢	擂目５条、胎土に白色針状物質を多く含む	在地	16C代				378-2	T-7

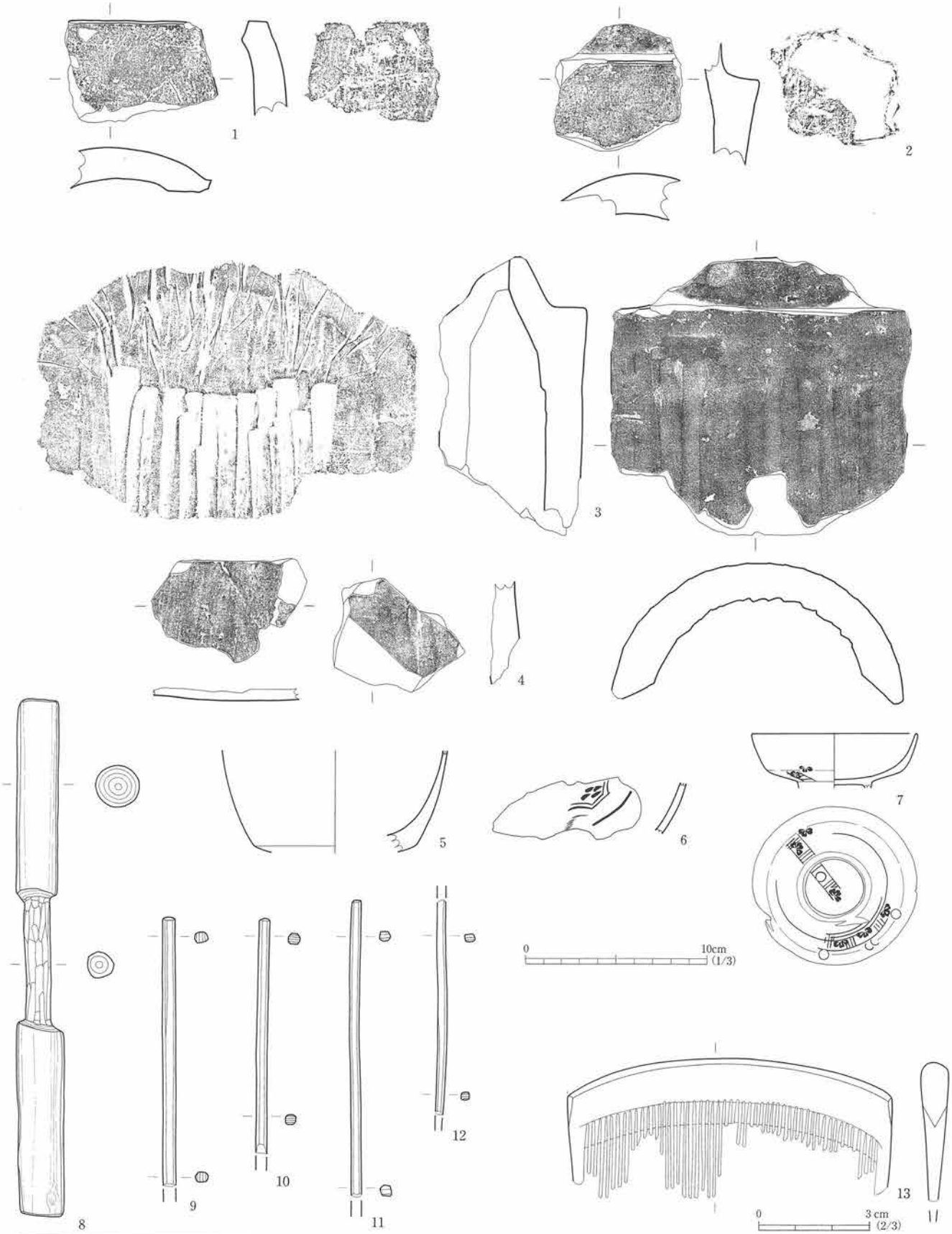
第146図　SD4堀跡出土遺物（6）



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD4　2層	瓦質土器	擂鉢	擂目6条、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ナデ、折縁口縁、片口、胎土に白色針状物質含む、内面横方向に6条の擂目が1ヶ所有	在地	16C代	34.0	12.4	12.9	379-3	T-38
2	SD4　2層	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	13.6	8.5	3.3	344-1	Ca-10

No.	遺構・層位	種　別	凸　　面	凹　　面	備　　考	写真図版	登録番号
3	SD4　2層	丸瓦	ナデ・網目状圧痕・釘穴あり	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦	381-8	F-11

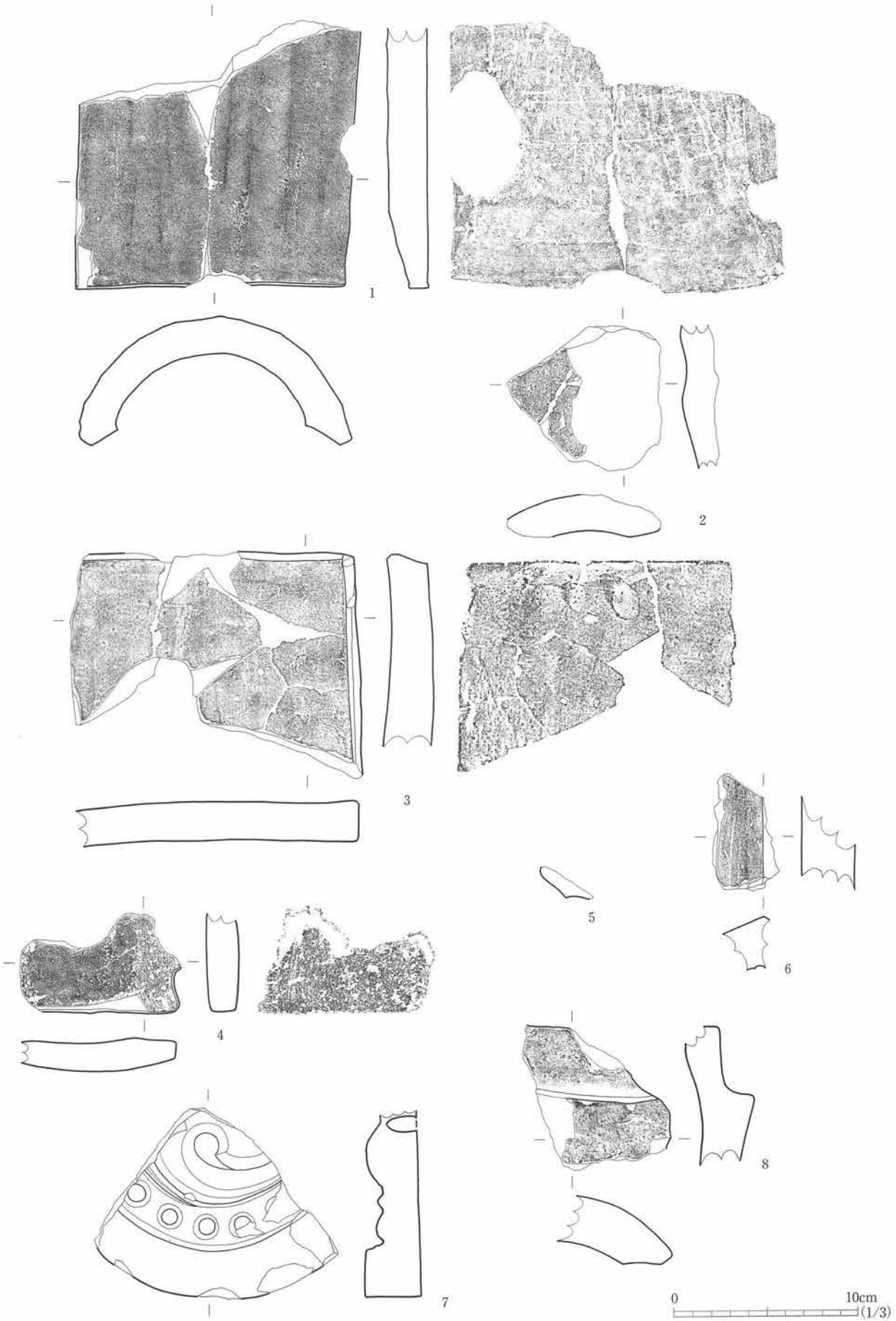
第147図　SD4堀跡出土遺物（7）



No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
1	SD4 2層	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	ケズリ・燻し瓦		F-14
2	SD4 2層	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦		F-16
3	SD4 2層	丸瓦	ナデ	布目痕・網目状圧痕・沈線状圧痕	ケズリ・燻し瓦	381-10	F-13
4	SD4 2層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-11

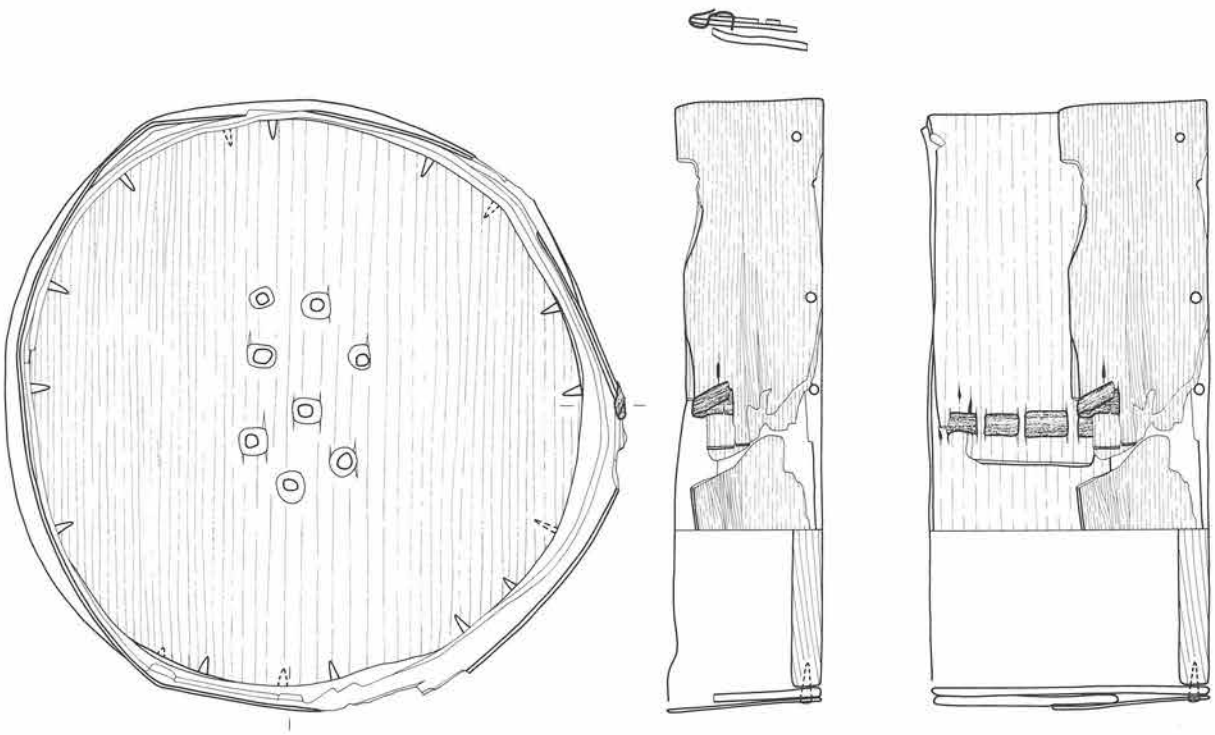
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
5	SD4 2層	漆器 椀	内外面赤色漆仕上げ、高台部欠損	ブナ属の一種	387-3	La-52
6	SD4 2層	漆器 椀	外面赤色漆の上に黒色漆で文様有、内面赤色漆塗り仕上げ	ブナ属の一種	387-2	La-51
7	SD4 2層	漆器 椀	外面黒色漆の上に銀白色に近い顔料で文様有、内面赤色漆塗り仕上げ、蓋の可能性有、口径9.0cm 器高（3.0）cm	ブナ属の一種	386-3	La-41
8	SD4 2層	小型杵	長さ28.8cm 最大径2.3cm 最小径1.45cm 芯持材	モミ属	395-10	Lc-32
9	SD4 2層	箸	長さ（15.0）cm 最大径0.7cm 断面→楕円形	ヒノキ属	416-9	Lc-33①
10	SD4 2層	箸	長さ（13.2）cm 最大径0.7cm 断面→四円形	ヒノキ属	416-9	Lc-33②
11	SD4 2層	箸	長さ（16.5）cm 最大径0.6cm 断面→ほぼ四円形	ヒノキ属	416-9	Lc-33③
12	SD4 2層	箸	長さ（12.0）cm 最大径0.5cm 断面→四円形	ヒノキ属	416-9	Lc-33④
13	SD4 2層	櫛	長さ（3.9）cm 幅9.0cm 厚さ0.8cm	カバノキ属の一種	393-4	Lc-1

第148図　SD4堀跡出土遺物（8）

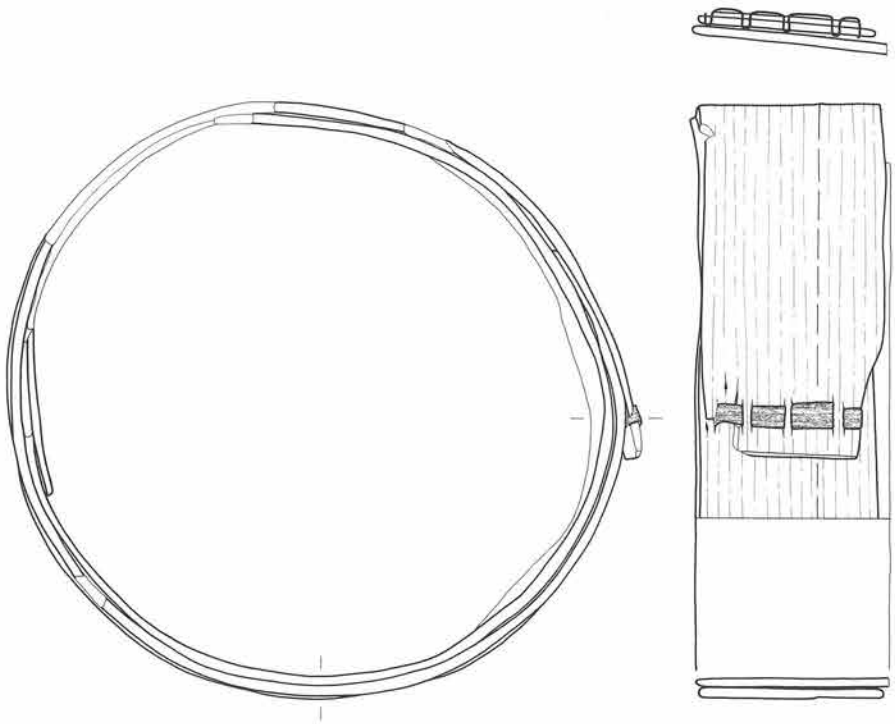


No.	遺構・層位	種　別	凸　面	凹　面	備　考	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	丸瓦	ナデ	布目痕・綱目状圧痕・沈線状圧痕	燻し瓦	381-9	F-12
2	SD4　2層	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦		F-15
3	SD4　2層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦	382-4	G-8
4	SD4　2層	平瓦	マメツ	ミガキ	磨き目あり・転用・燻し瓦		G-9
5	SD4　2層	丸瓦	剥離	布目痕・沈線状圧痕			F-18
6	SD4　2層	冠瓦	ナデ		冠瓦の破片	382-2	F-23
7	SD4　2層	軒丸瓦	金箔押巴文軒丸瓦・連珠・巴の部分の尾が長い		燻し瓦	381-3	F-10
8	SD4　2層	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕	燻し瓦		F-19

第149図　SD4堀跡出土遺物（9）



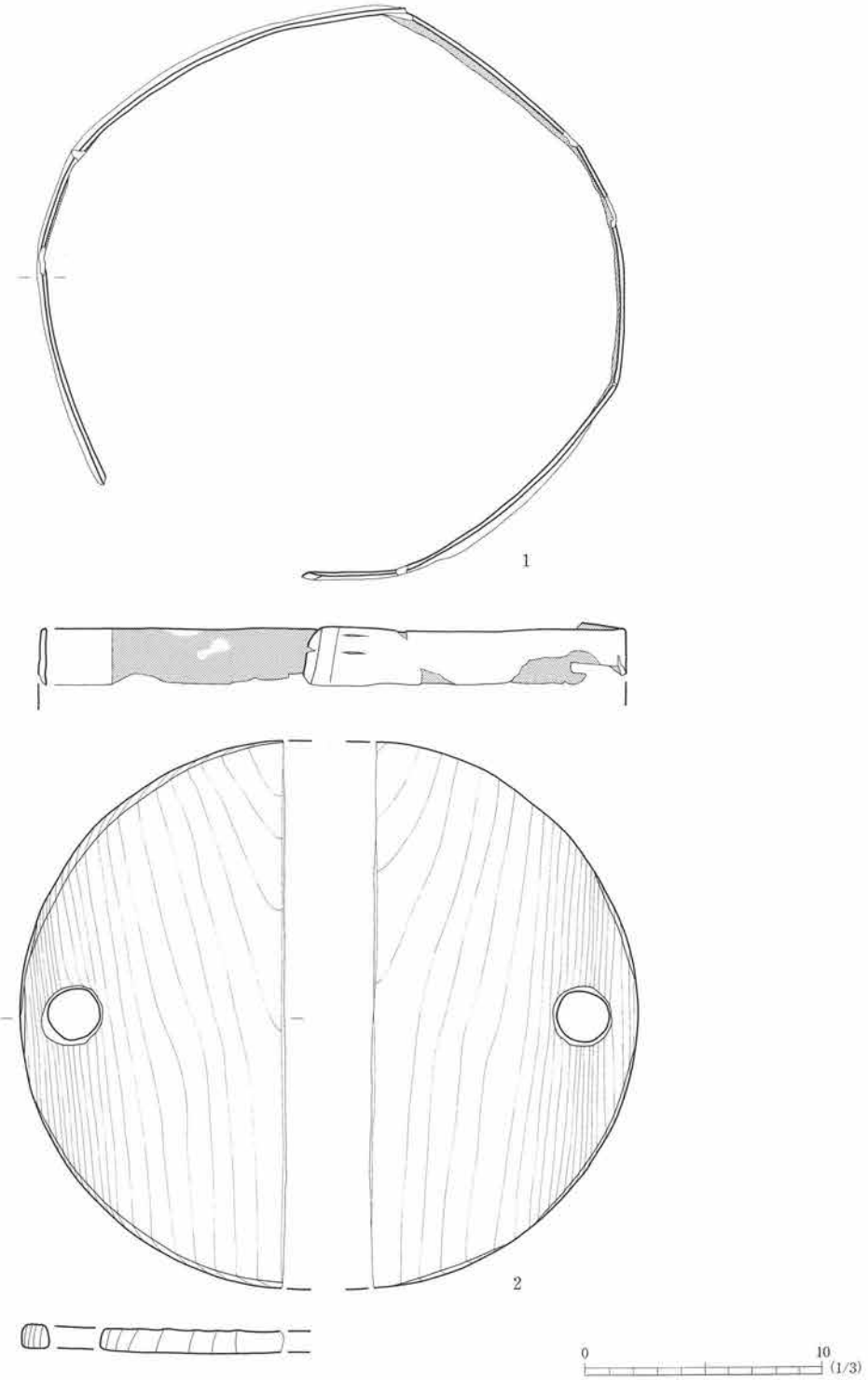
1



0　10cm
(1/3)

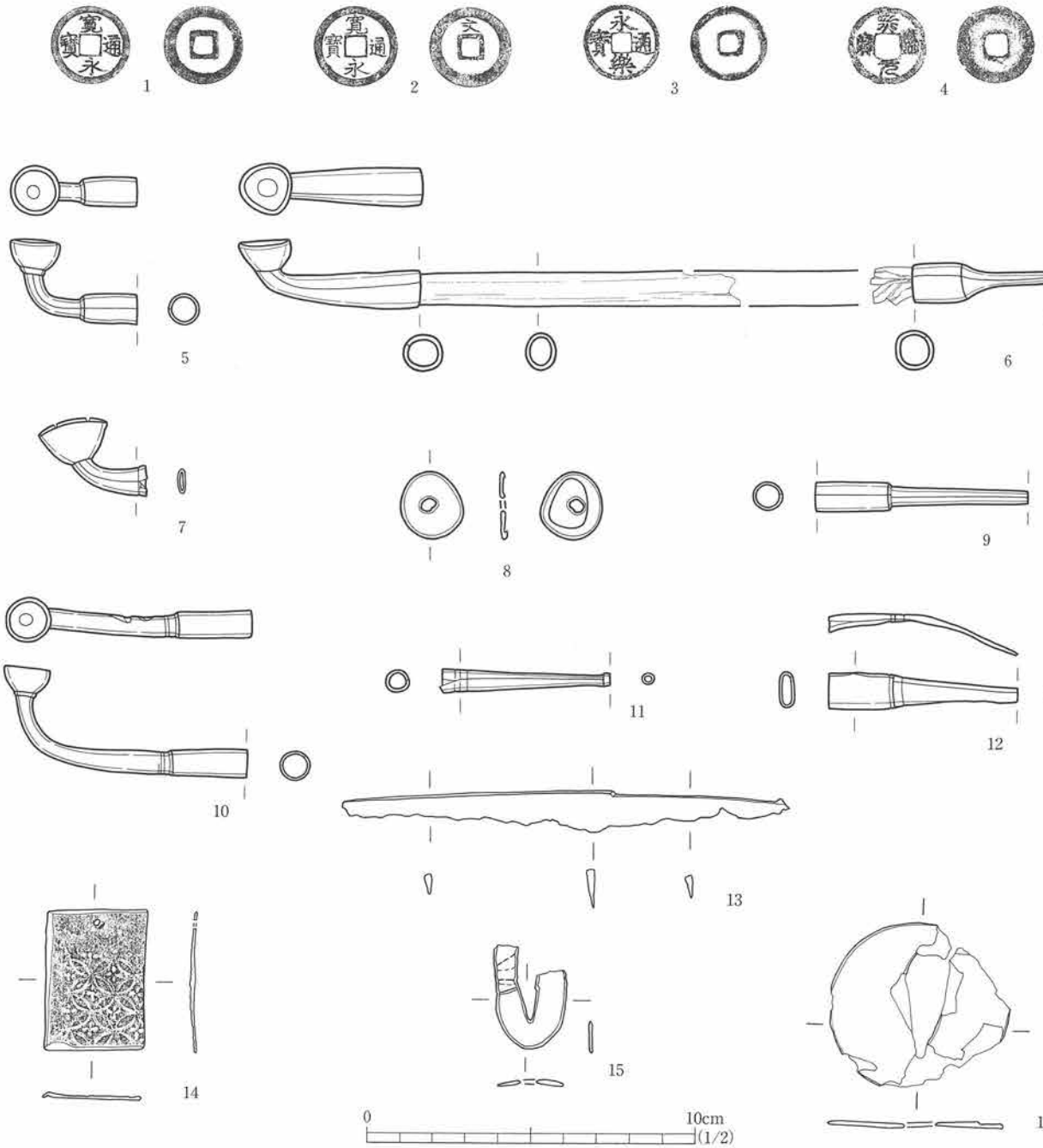
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	曲物　セイロ？	側板：外側　高さ6.2cm　厚さ0.1～0.15cm　中　高さ7.2cm　厚さ0.4cm 内側　高さ11.0cm　厚さ0.3cm～0.4cm 側板（上部）1列内に4段綴じ、側板（下部）1列上外内2段綴じ 底板：底径21.8cm×22.8cm　厚さ1.2cm　釘穴17（木釘残存12本）、釘結合曲物	ヒノキ属	397-1 398-1	Lc-44

第150図　SD4堀跡出土遺物（10）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	曲物	側板（上部のみ残存）：高さ2.5cm　厚さ0.2～0.3cm　内面はほぼ黒漆、皮穴有	ヒノキ属	396-1	Lc-35
2	SD4　2層	樽の天板	31.2cm×(14.9)cm　厚さ1.3cm　栓孔径3.0cm　中央部に加工痕有	モミ属	395-12	Lc-34

第151図　SD4堀跡出土遺物（11）

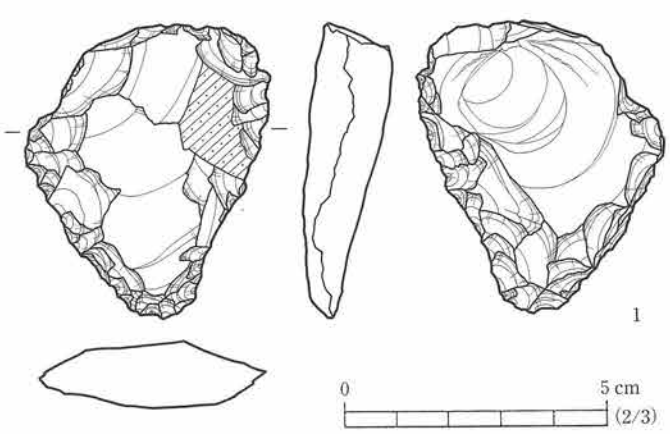


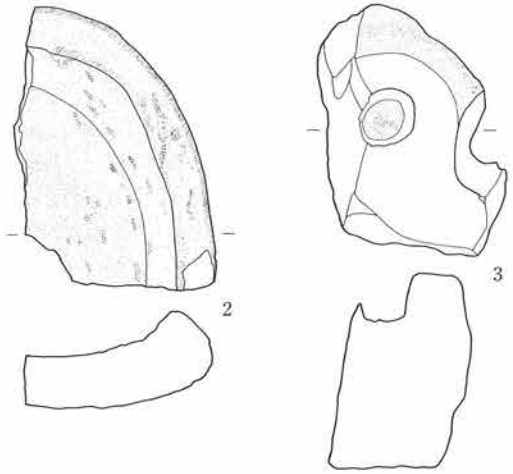
No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	銅製品　銭貨	（古）寛永通宝	2.4	2.9	431-7	Na-44
2	SD4　2層	銅製品　銭貨	（新）寛永通宝	2.5	3.65	431-8	Na-45
3	SD4　2層	銅製品　銭貨	永楽通宝（明）（初鋳年　1408年）	2.3	1.9	431-6	Na-43
4	SD4　2層	銅製品　銭貨	熙寧元宝（宋）（初鋳年　1068年）	2.4	3.1	431-9	Na-46

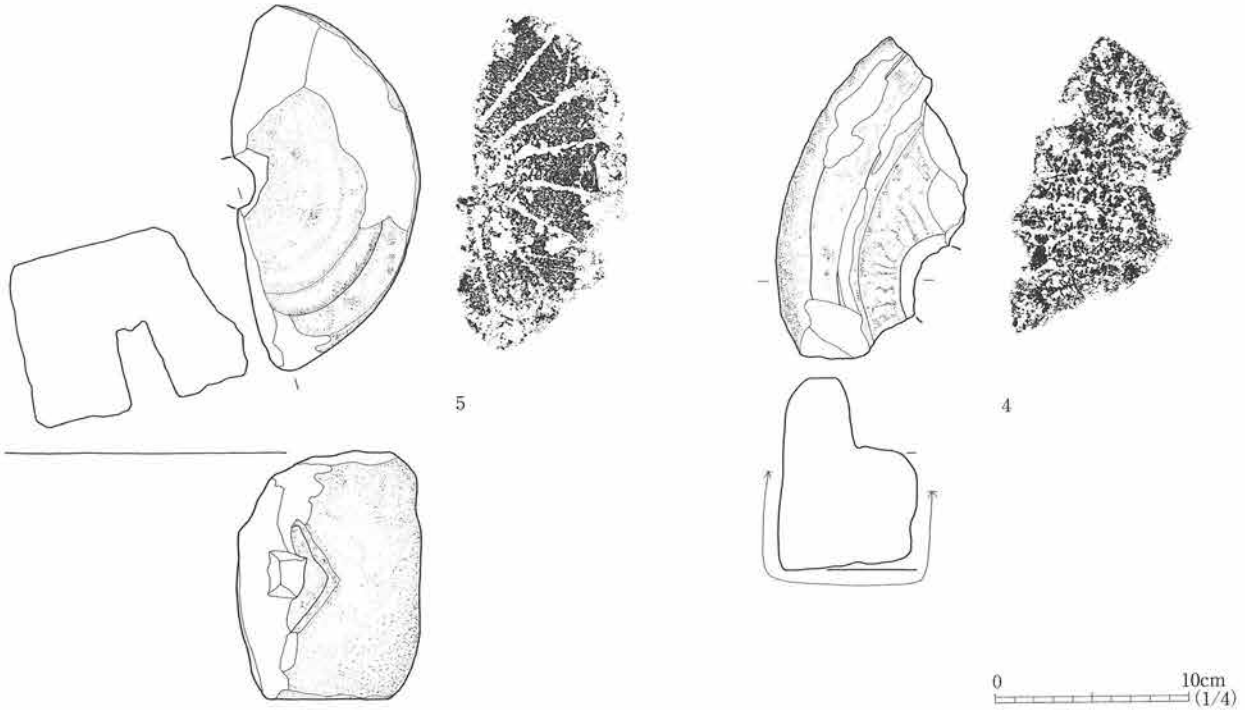
No.	遺構・層位	種別	特　　徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
5	SD4　2層	雁首	補強帯有、全面に鍍金の痕跡有	3.9	1.3	0.9		433-9	Nb-11
6	SD4　2層	煙管	羅宇最大径1.1cm　羅宇が約1.4cm雁首内に入る、雁首、吸口　全面に鍍金の痕跡有	（24.8）雁首5.5 吸口4.3	1.4	1.2	0.4		Nb-29
7	SD4　2層	雁首	全面に鍍金の痕跡有、全体がつぶれて変形	3.3	2.1×0.4	0.8×0.2		433-7	Nb-9
8	SD4　2層	煙管銭	全面に鍍金有	直径2.1				432-16	Nb-30
9	SD4　2層	吸口		6.5		0.9	0.4×0.3	433-11	Nb-13
10	SD4　2層	雁首	補強帯有、全面に鍍金の痕跡有、灰落としの際のつぶれの痕跡？有	7.6	1.2	0.9		433-8	Nb-10
11	SD4　2層	吸口	全面に鍍金の痕跡有	5.1		0.7	0.3	433-12	Nb-14
12	SD4　2層	吸口	全面に鍍金の痕跡有、全体がつぶれて変形	5.8		1.1×0.4	0.4×0.1	433-10	Nb-12

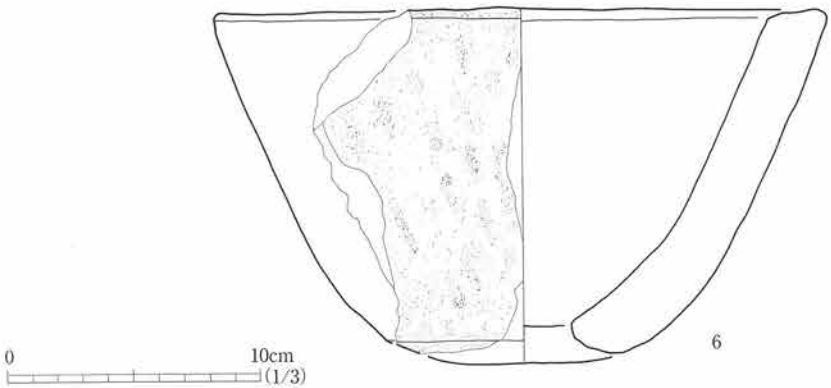
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　　考	写真図版	登録番号
13	SD4　2層	刀子	（13.7）	（1.3）	0.3	（9）			Nc-6
14	SD4　2層	飾金具	4.4	3	0.2	9			Nc-2
15	SD4　2層	切羽	（3.2）	2.1	0.1	（0.1）			Nc-7
16	SD4　2層	鍔	（5）	5.6	0.2	（10）			Nc-4

第152図　SD4堀跡出土遺物（12）







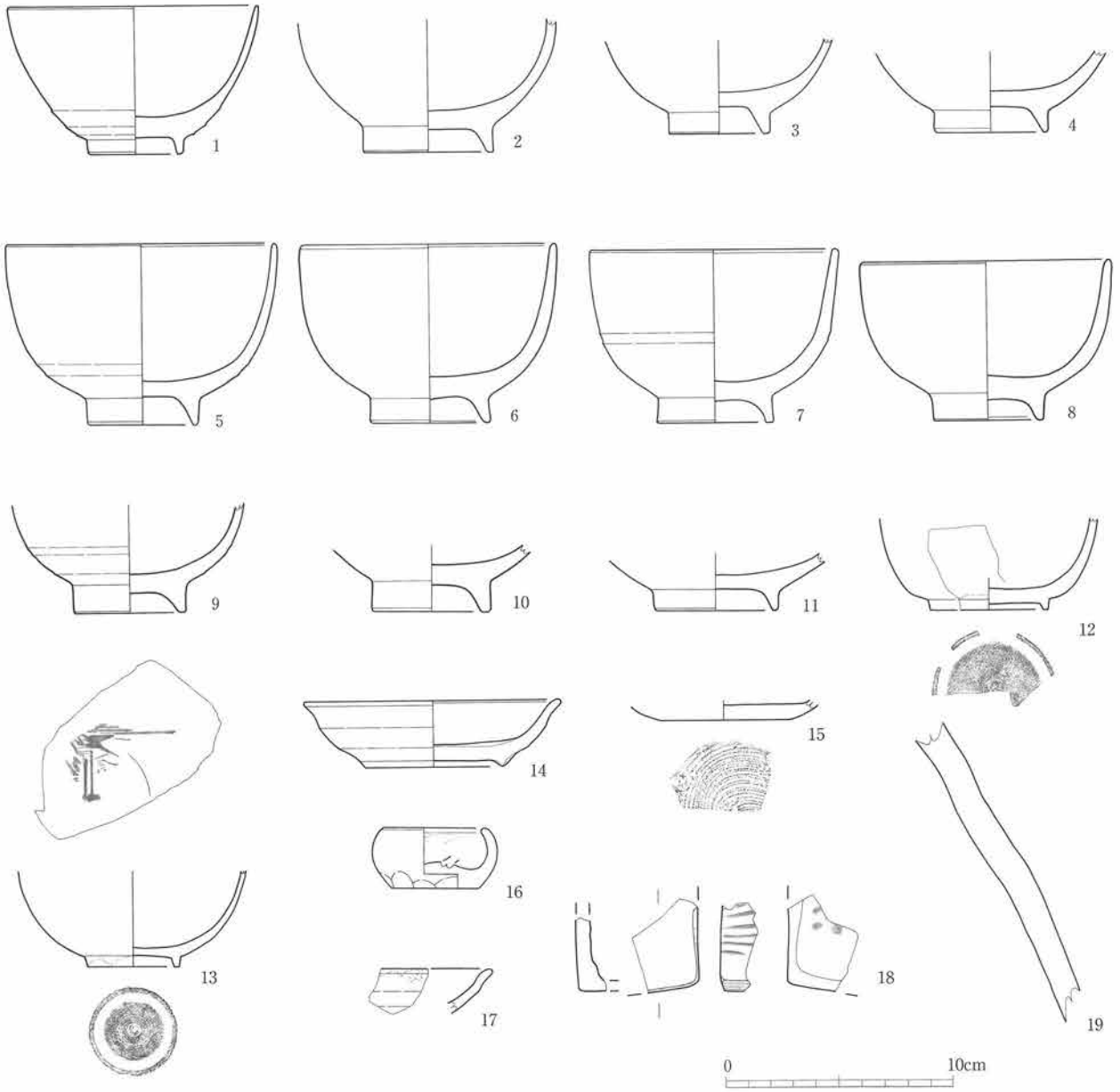


No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	不定形	5.8	4.8	1.8	36.6	珪質頁岩		418-3	Ka-158
2	SD4　2層	石皿	15.2	1.06		765	頁岩		424-3	Kd-36
3	SD4　2層	石臼		(9.3)		1,450	安山岩		424-2	Kd-35
4	SD4　2層	石臼	(30.0)	(10.1)		1,505	安山岩		424-1	Kd-34
5	SD4　2層	石臼	(20.2)	(13.1)		2,400	安山岩		425-1	Kd-46
6	SD4　2層	石鉢	(24.6)	(14.3)		424	安山岩		424-4	Kd-37

第153図　SD4堀跡出土遺物（13）

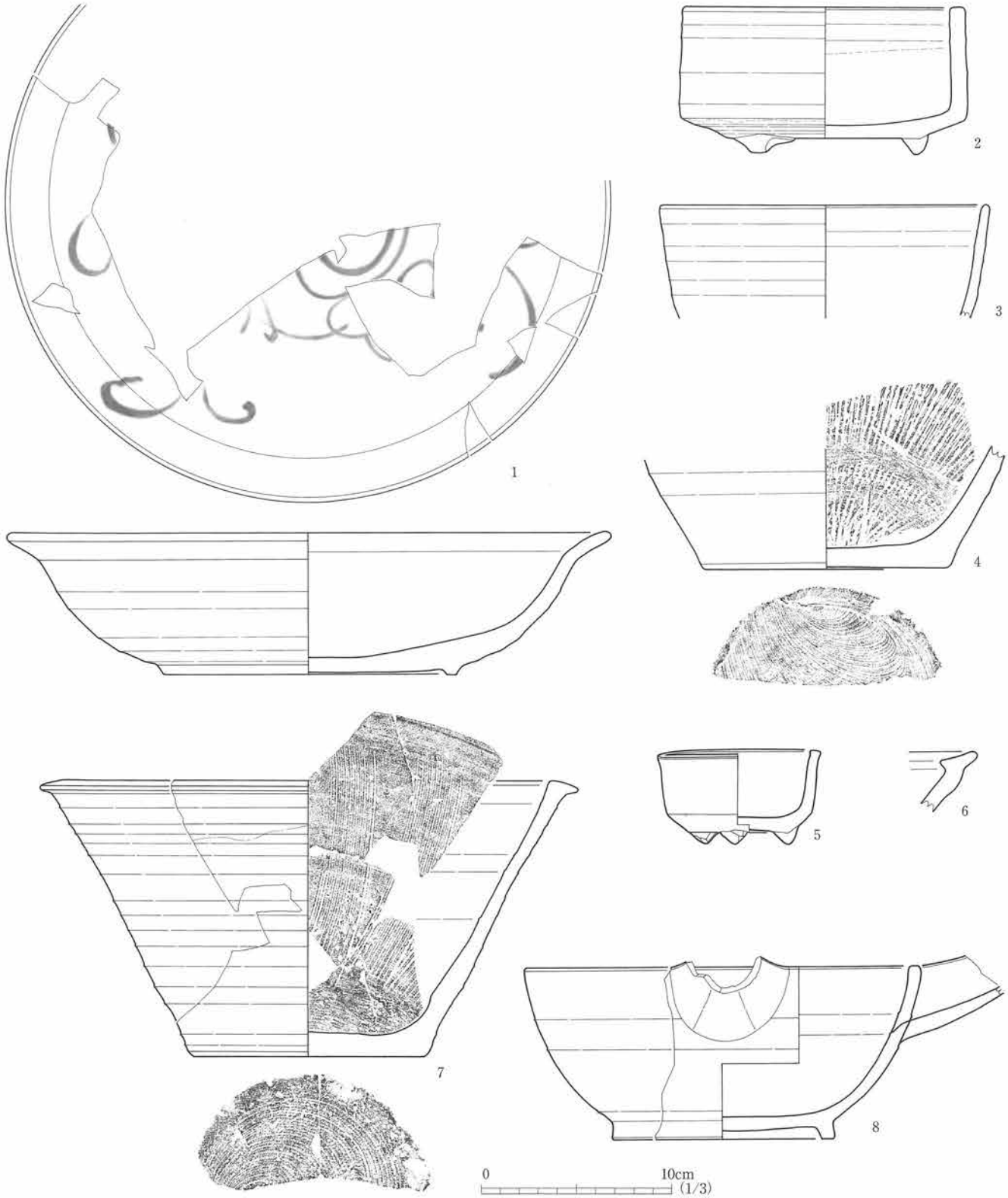
No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SD4　2層	砥石	9	3.8	1.6	125	デイサイト質凝灰岩		428-12	Kd-155
2	SD4　2層	砥石	8.3	4.7	1.1	54	デイサイト質凝灰岩		428-10	Kd-152
3	SD4　2層	砥石	5.2	3.9	1.8	51	デイサイト質凝灰岩		428-9	Kd-151
4	SD4　2層	砥石	7.3	3.9	1.6	65	デイサイト質凝灰岩		428-11	Kd-153
5	SD4　2層	砥石	14.7	7.9	5.4	1005	凝灰質砂岩		428-4	Kd-145
6	SD4　2層	砥石	11.8	4.4	3.7	235	デイサイト質凝灰岩		428-6	Kd-148
7	SD4　2層	砥石	9.5	2	2.2	66	デイサイト質凝灰岩		428-13	Kd-156
8	SD4　2層	砥石	8.9	6	2.3	156	デイサイト砂岩		428-7	Kd-149

第154図　SD4堀跡出土遺物（14）



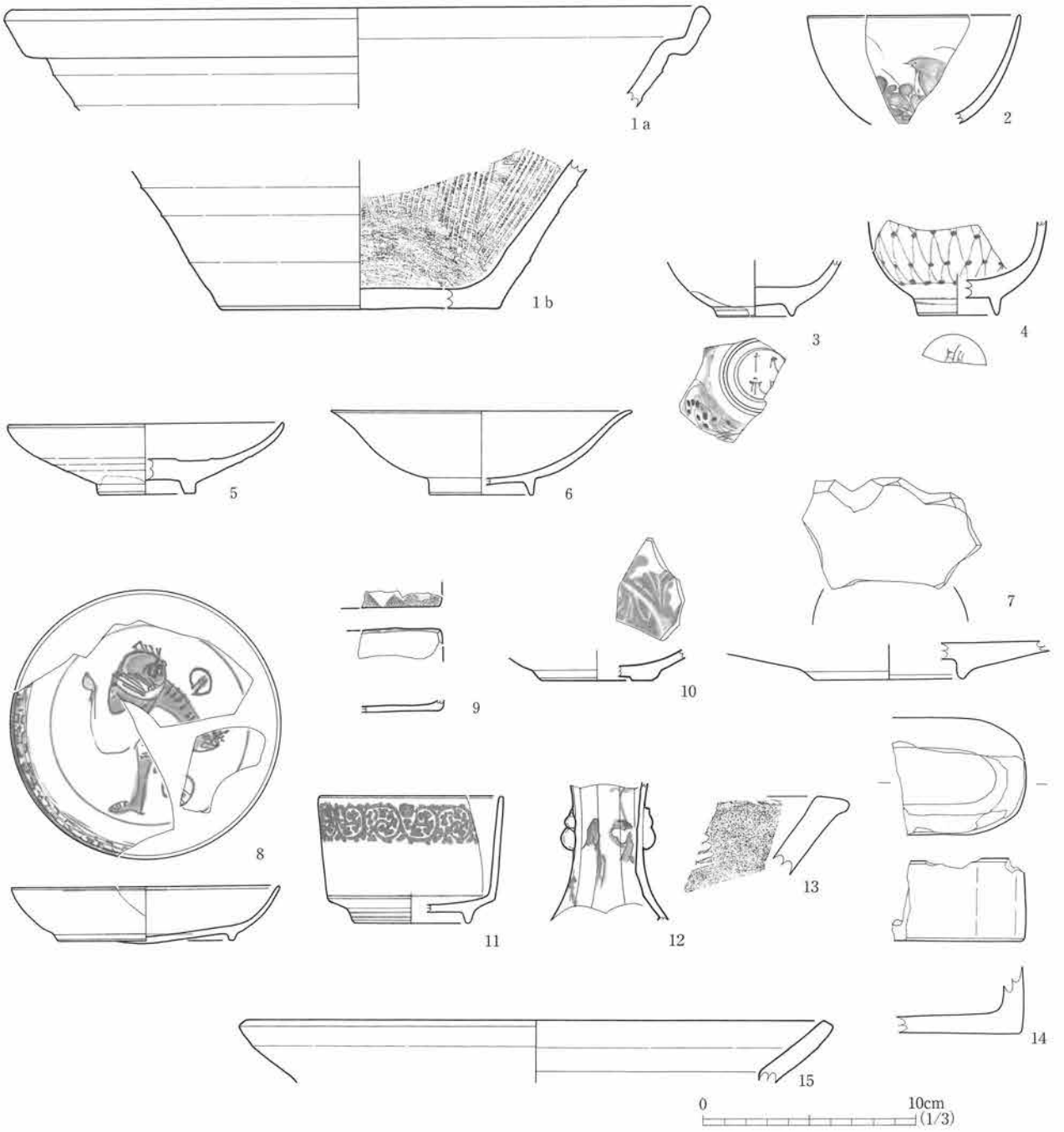
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 1層	陶器	碗	刷毛目文	肥前	17C末~18C前半	11.2	4.2	6.7	360-10	I-284
2	SD4 1層	陶器	碗	灰釉、漆つぎ	肥前	17C後半以降		5.8	(6.0)		I-277
3	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		4.5	(4.3)	360-11	I-285
4	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.2	(3.7)	360-6	I-280
5	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	12.2	4.8	8.2	360-8	I-282
6	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	11.4	5.4	8.1	361-1	I-286
7	SD4 1層	陶器	碗	灰釉、畳付きを研磨	肥前	17C後半以降	11.2	6.2	7.8	360-9	I-283
8	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降	11.3	5.0	7.2	360-4	I-278
9	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.0	(4.9)	360-5	I-279
10	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.2	(3.1)		I-287
11	SD4 1層	陶器	碗	灰釉	肥前	17C後半以降		5.6	(2.6)	360-7	I-281
12	SD4 1層	陶器	碗	京焼風陶器、高台内に銘字有、高台部露胎	肥前	17C後半以降		5.3	(4.1)	361-3	I-289
13	SD4 1層	陶器	碗	京焼風陶器、灰釉、見込みに鉄釉有、高台裏に蛇	肥前	17C後半以降		4.0	(4.3)	361-2	I-288
14	SD4 1層	陶器	端反皿	灰釉、大窯Ⅰa期	瀬戸美濃	16C	11.3	6.0	3.0	360-2	I-273
15	SD4 1層	陶器	緑釉小皿	底部内面磨耗、古瀬戸	瀬戸	15C後半		5.8	(0.9)	359-1	I-266
16	SD4 1層	陶器	灯明皿	鉄釉（透明釉）、口縁部に油煙が付着、内面芯受痕跡	堤？	18C以降	4.4	3.8	2.7	361-8	I-294
17	SD4 1層	陶器	緑釉小皿	灰釉（口縁部）、古瀬戸	瀬戸	15C後半			(2.7)	359-2	I-267
18	SD4 1層	陶器	向付	青織部、角型、型押し成形（布目痕）	美濃	17C初			(1.3)	359-3	I-268
19	SD4 1層	中世陶器	甕		常滑					370-4	I-442

第155図　SD4堀跡出土遺物（15）



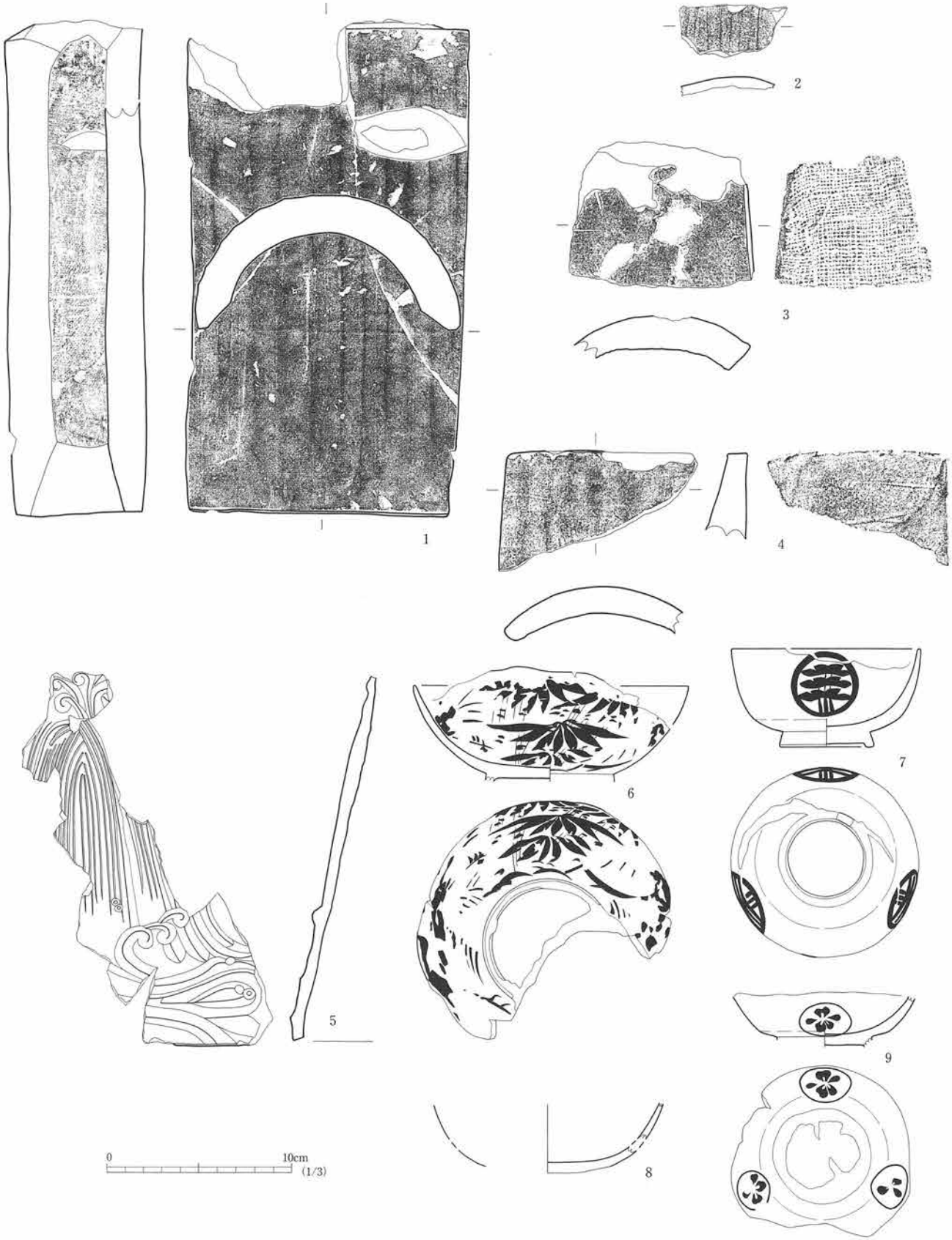
No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SD4　1層	陶器	大鉢	鉄絵で文様有	美濃	17C初	31.6	15.4	7.5	359-4	I-269
2	SD4　1層	陶器	香炉	三脚、口縁部をキセル等で叩いた痕有、灰落としに転用	美濃	17C後半	14.8	10.0	7.8	359-5	I-270
3	SD4　1層	陶器	鉢	灰釉、刷毛目文	肥前	18C以降	17.0		(6.0)	361-4	I-290
4	SD4　1層	陶器	擂鉢	胎土に山砂含む	不明	17C		12.6	(6.3)	361-10	I-296
5	SD4　1層	陶器	香炉	三脚、鉄釉＋オリーブ色の釉、内面に付着物有（炭化物か？）、全面施釉	堤？	17C末～18C前半	8.4	5.2	5.0	361-9	I-295
6	SD4　1層	陶器	擂鉢	鉄釉、口縁部に灰釉	岸窯系	17C中頃				361-6	I-292
7	SD4　1層	陶器	擂鉢	擂目10条、口縁～体部　内外面ロクロナデ	岸窯系	17C中頃	28.1	12.0	14.6	361-5	I-291
8	SD4　1層	陶器	片口	灰釉、漆つぎ	美濃	17C後半以降	20.8	11.4	9.1	359-6	I-271

第156図　SD4堀跡出土遺物（16）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1a	SD4 1層	陶器	擂鉢	鉄釉、①と同一個体	瀬戸	18C	33.4		(4.8)	360-1	I-272②
1b	SD4 1層	陶器	擂鉢	擂目17条、鉄釉、②と同一個体	瀬戸	18C		(13.4)	(6.2)	360-1	I-272①
2	SD4 1層	磁器	碗	染付	肥前	18C	(10.2)		(5.2)	374-16	J-64
3	SD4 1層	磁器	碗	染付、高台内に銘有、「大明□□」、畳付に砂付着	肥前	17C前半		3.6	(2.7)	374-5	J-52
4	SD4 1層	磁器	碗	染付、外面：網目文（一重）、高台内に銘有、「□興」	肥前	17C後半	(8.5)	4.0	(4.6)	374-4	J-51
5	SD4 1層	磁器	皿	染付？畳付に砂付着、蛇の目釉剥ぎ	肥前	17C中～後半	13.2	4.4	3.4	374-9	J-56
6	SD4 1層	磁器	皿	漆つぎ	中国	15C後半～16C前半	14.4	4.9	4.1	374-8	J-55
7	SD4 1層	磁器	中皿	染付？畳付に砂付着	肥前	17C後半		(7.2)	(1.8)		J-57
8	SD4 1層	磁器	皿	染付、内面：人物文様？四方タスキ文、高台内に放射状に工具痕、畳付に砂付着、漆つぎ	中国（景徳鎮）	16C末～17C前半	12.8	8.4	2.6	374-6	J-53
9	SD4 1層	磁器	水滴か香合	染付	肥前	江戸時代	(1.4)	(3.9)	(0.5)	374-10	J-58
10	SD4 1層	磁器	皿	染付、蛇の目高台	中国	17C前半		5.2	(1.3)	374-7	J-54
11	SD4 1層	磁器	鉢	染付、外面：唐草文、口唇部に鉄釉	肥前	17C末～18C初	8.8	5.7	6.1	376-2	J-79
12	SD4 1層	磁器	仏花瓶	染付、瓢箪の形の耳付	肥前	17C？			(6.6)	374-11	J-59
13	SD4 1層	瓦質土器	擂鉢	擂目4条以上（口縁部付近に横方向、火熱を受けて変色	在地	16C代			3.8	378-1	T-6
14	SD4 1層	瓦質土器	鬢入れ	胎土に白色針状物質含む、灰色で砂混じりの胎土	在地	江戸時代	(5.1×3.4)	(6.0×4.4)	4.0	378-9	T-27
15	SD4 1層	瓦質土器	鉢	内外面に炭化物付着、胎土に白色針状物質含む		江戸時代	(28.1)		(3.0)		T-26

第157図　SD4堀跡出土遺物（17）

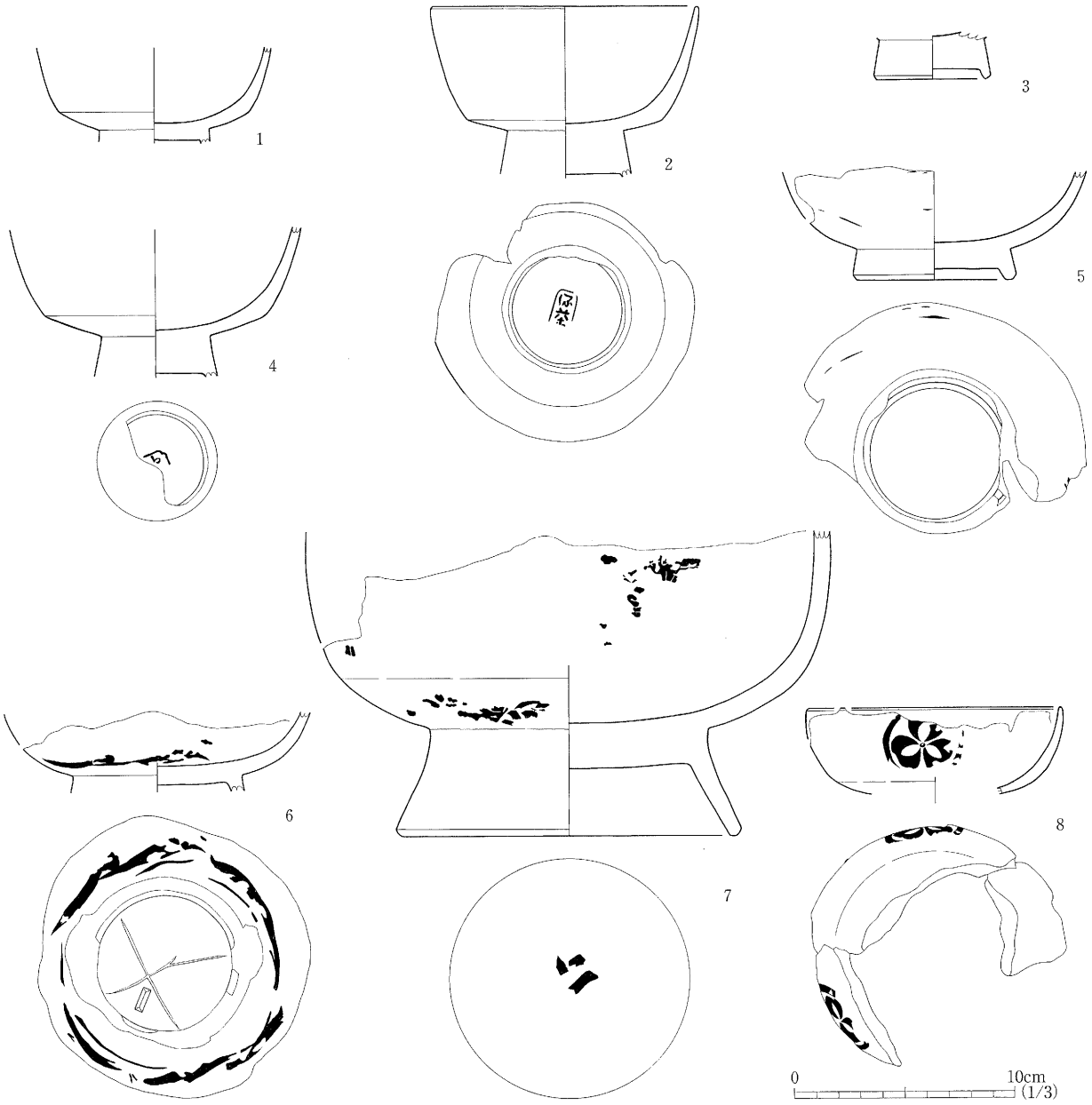


No.	遺構・層位	種　別	凸　面	凹　面	備　考	写真図版	登録番号
1	SD4　1層	丸瓦	ナデ・沈線状圧痕	布目痕・縄目状圧痕	ケズリ・燻し瓦	381-5	F-7
2	SD4　1層	丸瓦	ナデ	剥離	燻し瓦		F-9
3	SD4　1層	丸瓦	ナデ	布目痕	古代		F-6
4	SD4　1層	丸瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦	381-7	F-8

No.	遺構・層位	種　別	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
5	SD2　1層	堤人形	人形片	(20.8)	(9.2)	(0.9)		380-13	P-30

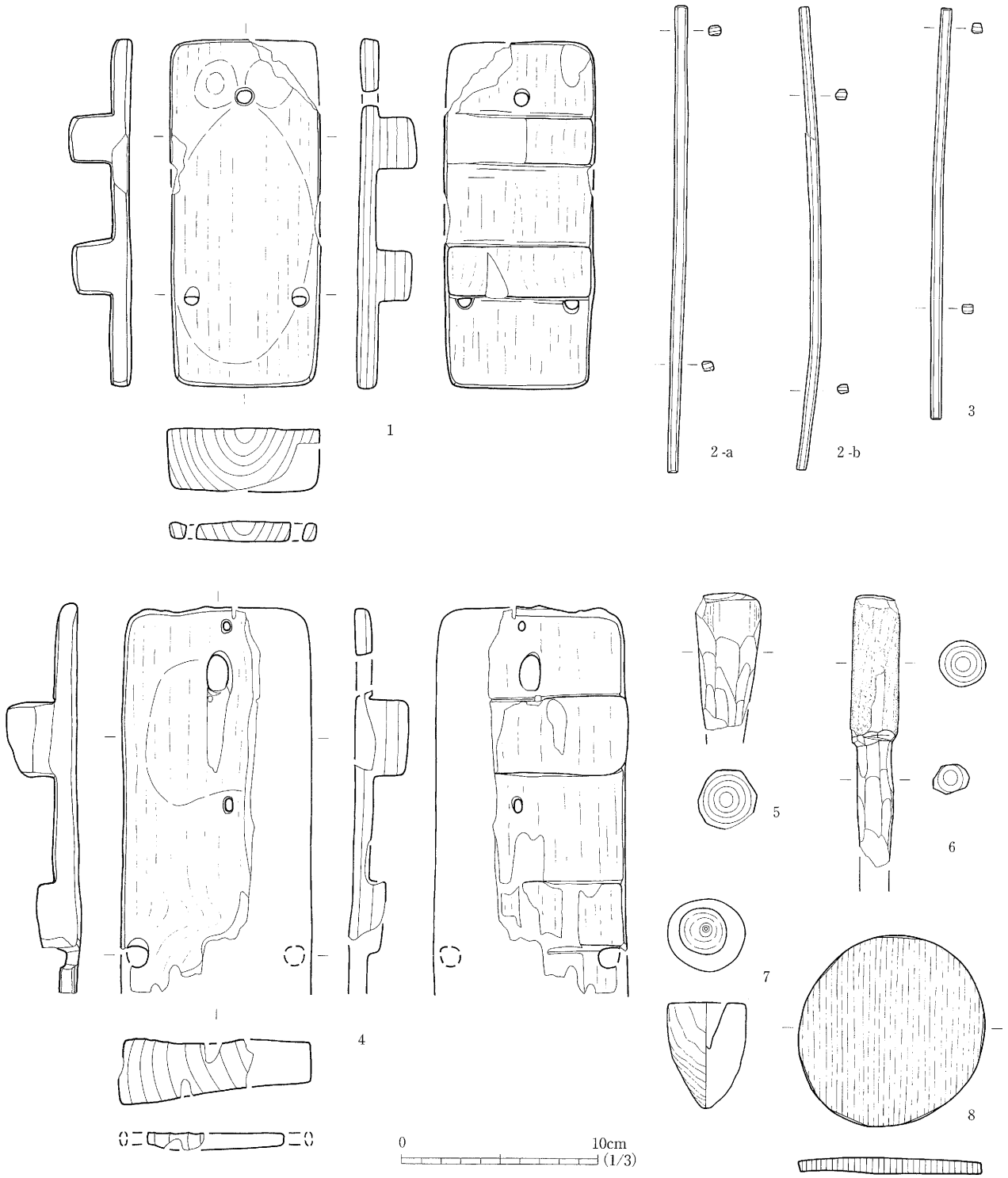
No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
6	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に濃淡の赤色漆で文様有（草花文？）内面茶褐色漆仕上げ、口径14.8cm　底径（7.0）cm　器高（6.2）cm	ブナ属の一種	386-6	La-44
7	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様（三階松？）有（3単位）、内面赤色漆仕上げ、口径10.3cm　底径5.2cm　器高5.4cm	ブナ属の一種	386-2	La-40
8	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様有、内面茶褐色漆仕上げ、底部内面にコゲ痕有、器高（3.8）cm	ブナ属の一種	387-4	La-53
9	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に銀白色に近い顔料で文様有（3単位）、内面赤色漆仕上げ、底径（5.3）cm　器高（2.9）cm	ブナ属の一種	387-1	La-48

第158図　SD4堀跡出土遺物（18）



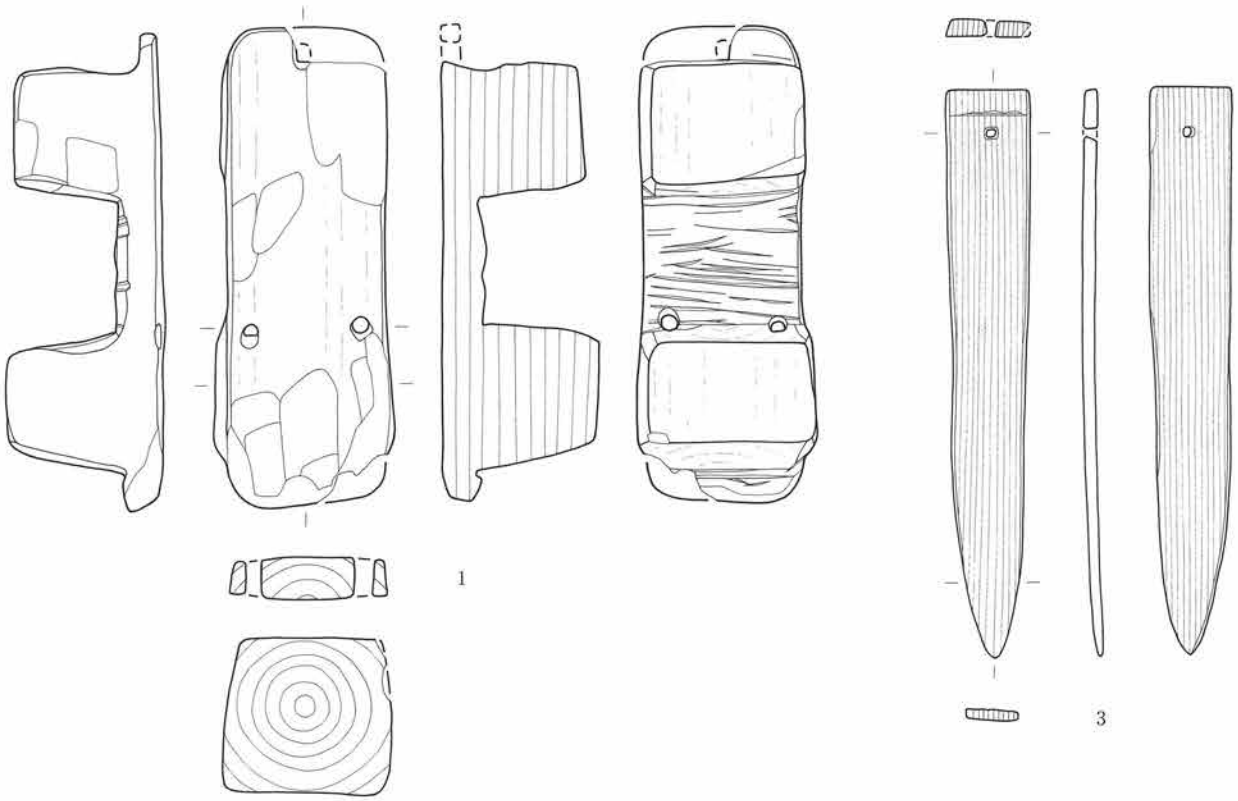
No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD4　1層	漆器　椀	内外面赤色漆塗仕上げ、底部外面黒漆塗、底径（5.1）cm　器高（4.3）cm	ブナ属の一種	386-8	La-46
2	SD4　1層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面黒漆の上に赤色漆で「源茶？」の銘有、口径12.0cm 底径（5.6）cm　器高7.6cm	ブナ属の一種	386-1	La-39
3	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆塗仕上げ、内面赤色漆仕上げ、高台部のみ残存、底径（5.1）cm　高台高1.7cm	ブナ属の一種		La-65
4	SD4　1層	漆器　椀	内外面赤色漆仕上げ、底部外面黒漆の上に赤色漆の銘有、底径（5.6）cm　器高（6.9）cm	ブナ属の一種	386-9	La-47
5	SD4　1層	漆器　椀	内外面黒色漆仕上げ、外面に赤色漆で文様わずかに有、底部内面を中心に焼痕有、底径（7.0）cm　器高1.5cm	ブナ属の一種	386-7	La-45
6	SD4　1層	漆器　椀	外面黒漆の上に赤色漆で文様有、内面赤色漆仕上げ、底部外面に漆塗付以前に「－」に線刻及び、漆塗付後に十字の線刻有、口径（13.4）cm　底径（7.6）cm　器高（3.5）cm	ブナ属の一種	386-5	La-43
7	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様有、内面茶褐色漆仕上げ、内外面に焼痕有、底径15.6cm　器高（13.7）cm　高台高（4.8）cm	カツラ	387-6	La-50
8	SD4　1層	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色で文様有（3単位）、内面茶褐漆仕上げ、高台部欠損、口径（11.6）cm　器高（3.2）cm	ブナ属の一種	386-4	La-42

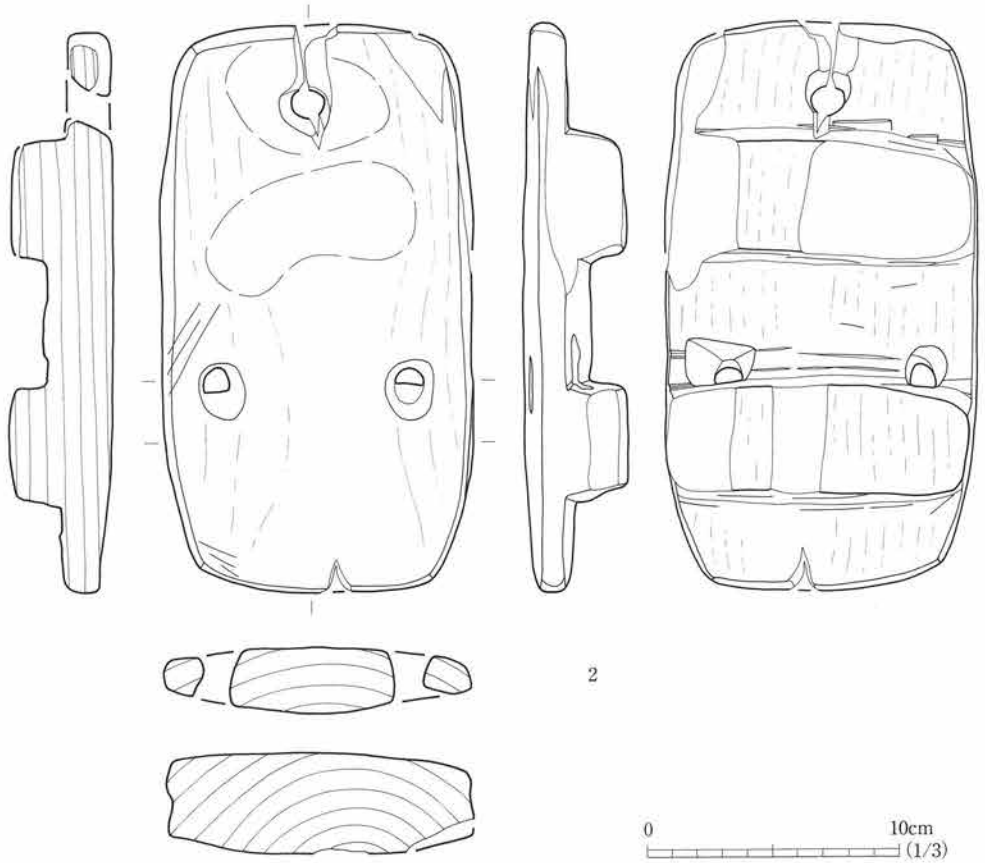
第159図　SD4堀跡出土遺物（19）



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD4　1層	連歯下駄	ほぼ完形、柾目材、指圧痕残る、横緒穴は後歯の後、台部長17.5cm　台部幅7.6cm　高さ3.0cm	ヒノキ属	392-3	Lb-18
2a	SD4　1層	箸	長さ23.6cm　最大径0.7cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-8	Lc-28②
2b	SD4　1層	箸	長さ23.5cm　最大径0.7cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-8	Lc-28①
3	SD4　1層	箸	長さ20.8cm　最大径0.7cm　断面→四角形	ヒノキ属	416-7	Lc-27
4	SD4　1層	連歯下駄	欠損、柾目材、指圧痕残る、台部中央及び、鼻緒脇に加工穴、横緒穴は後歯の後、台部長（19.4）cm　台部幅（6.8）cm　高さ3.2cm	ヒノキ属	392-4	Lb-19
5	SD4　1層	栓	長さ（6.9）cm　最大径3.3cm　芯持材	クリ	395-7	Lc-29
6	SD4　1層	小型杵	長さ（13.8）cm　最大径2.3cm　最小径1.8cm　芯持材	広葉樹（散孔材）	395-11	Lc-30
7	SD4　1層	独楽	口径4.0cm　底径0.5cm　器高5.3cm	マツ属複維管束亜属	395-8	Lc-31
8	SD4　1層	円形板	最大径10.0cm　厚さ0.8cm　曲物底板？　柾目材	ヒノキ属	399-1	Lc-41

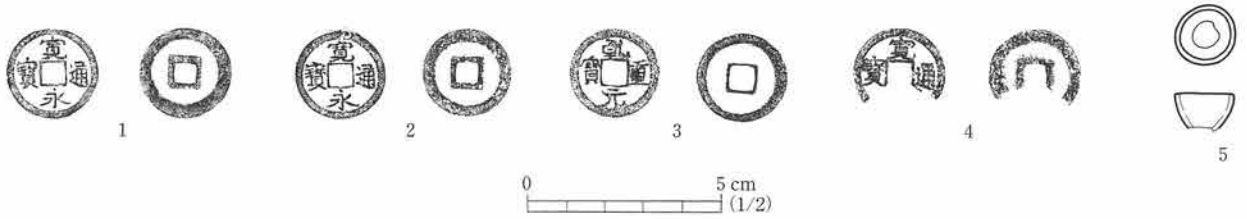
第160図　SD4堀跡出土遺物（20）

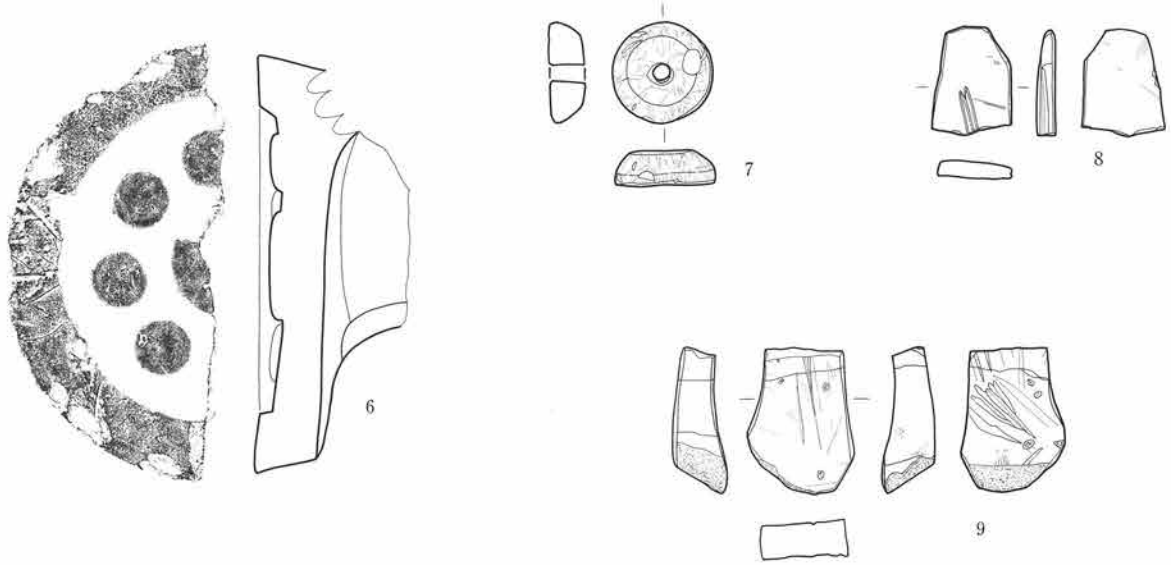


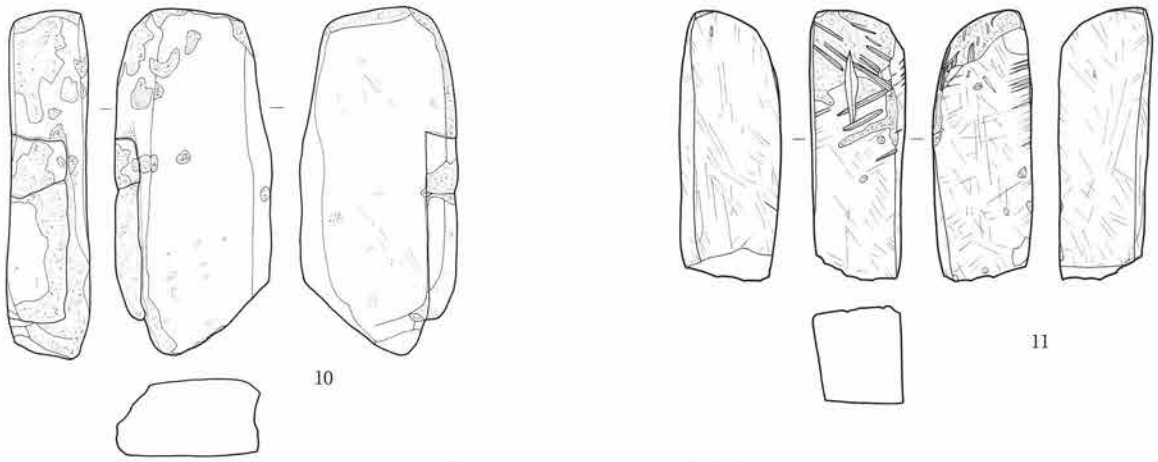


No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SD4　1層	連歯下駄	ほぼ完形、芯持材、台幅が狭い割りに歯部が高い、台裏の刃物痕は深いものが多い、横緒穴は後歯の前、台部長19.3cm　台部幅6.3cm　高さ6.2cm	クリ	392-2	Lb-17
2	SD4　1層	連歯下駄	ほぼ完形，板目材，指圧痕残る，横緒穴は後歯の前，台部長22.7cm　台部幅12.3cm　高さ4.0cm	クリ	392-6	Lb-20
3	SD4　1層	不明	長さ22.8cm　幅3.4cm　厚さ0.7cm、表面中央部に焼痕有、柾目材、上部に①黒色漆付着痕有、②紐のような痕有、③中央に貫通の穴一ヶ所	ヒノキ属	399-2	Lc-42

第161図　SD4堀跡出土遺物（21）

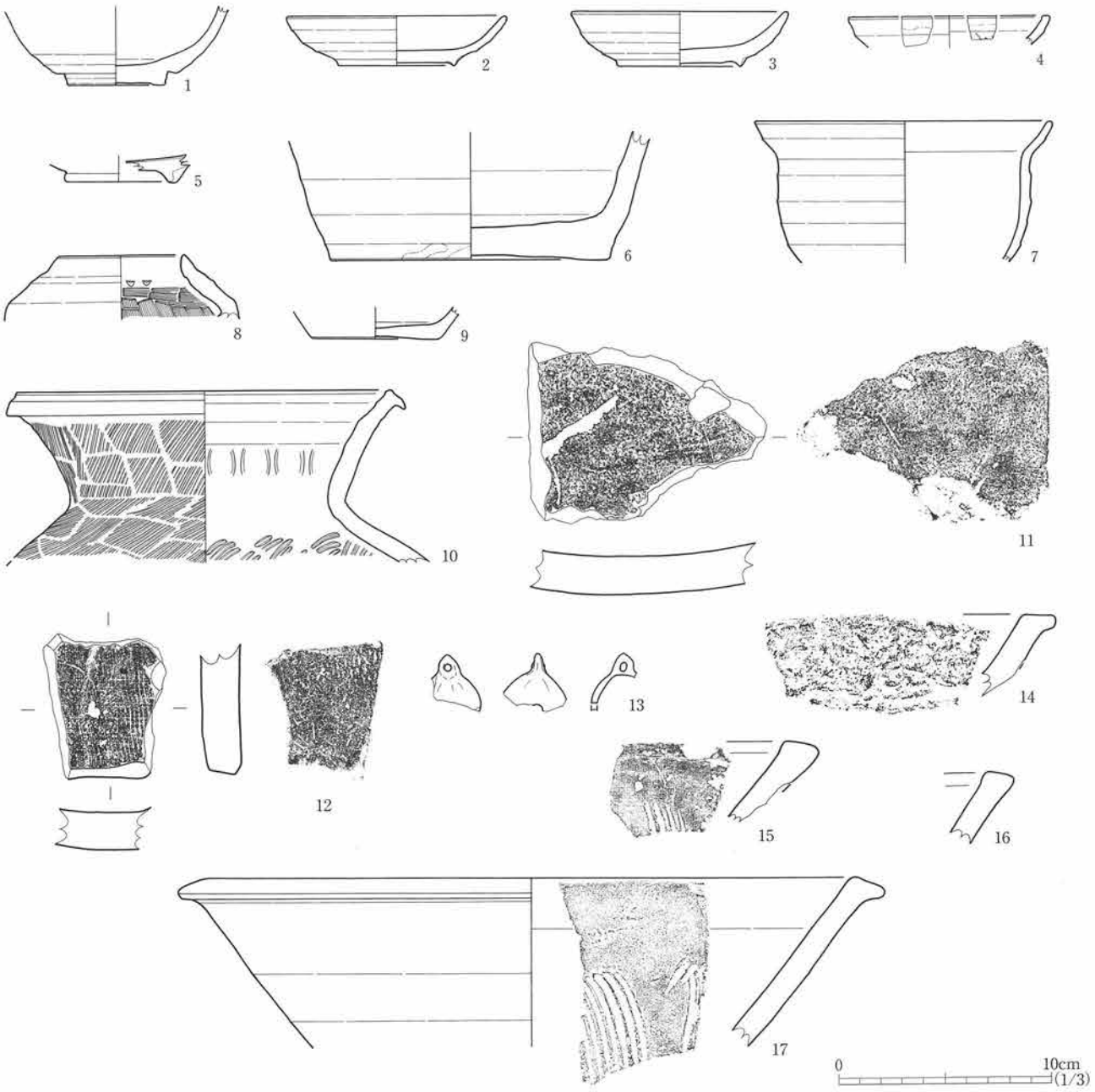






No.	遺構・層位	種別	特徴					外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	SD4 1層	銅製品 銭貨	（古）寛永通宝					2.4	3.55	431-3	Na-40
2	SD4 1層	銅製品 銭貨	（古）寛永通宝					2.3	2.7	431-4	Na-41
3	SD4 1層	銅製品 銭貨	乾元重宝（唐）					2.4	(2.95)	431-10	Na-47
4	SD4 2層	銅製品 銭貨	（古）寛永通宝					2.4	2.05	431-5	Na-42
No.	遺構・層位	種別	特徴			全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
5	SD4 1層	雁首	火皿のみ残存			(1.6)	1.4				Nb-8
No.	遺構・層位	種別	凸面			凹面		備考		写真図版	登録番号
6	SD4 1層	軒丸瓦	九曜文							381-2	F-24
No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考		写真図版	登録番号
7	SD4 1層	紡錘車	4.1	4	1.4	36.2	蛇紋岩			422-6	Kd-6
8	SD4 1層	砥石	4.3	3.1	0.8	16	デイサイト質凝灰岩			428-5	Kd-147
9	SD4 2層	砥石	5.8	4.3	2	65	デイサイト質凝灰岩			428-8	Kd-150
10	SD4 1層	砥石	13.9	6.2	3.2	464	デイサイト質凝灰岩			428-3	Kd-144
11	SD4 1層	砥石	10.9	3.8	3.9	265	デイサイト質凝灰岩			428-16	Kd-171

第162図　SD4堀跡出土遺物（22）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 堆積土	陶器	椀	鉄釉（三種類以上を混合）	瀬戸美濃	17C中半～後半		4.6	(3.8)	366-13	I-359
2	SD4 堆積土	陶器	丸皿	灰釉、全面施釉、高台の裏に輪トチンの痕、塗つぎ、大窯	瀬戸美濃	16C前半	10.1	5.4	2.3	366-10	I-356
3	SD4 堆積土	陶器	丸皿	灰釉、高台内露胎	瀬戸美濃	16C	10.2	5.8	2.6	366-12	I-358
4	SD4 堆積土	陶器	卸皿	口縁部に灰釉、古瀬戸	瀬戸	15C後半	9.5		(1.4)	366-8	I-354
5	SD4 堆積土	陶器	丸皿	灰釉、釉だまり	瀬戸美濃	16C		5.0	(1.3)	366-11	I-357
6	SD4 堆積土	陶器	甕	灰釉、底部内面に目跡有	岸窯系	17C後半		13.1	(6.1)	366-14	I-360
7	SD4 堆積土	陶器	鉢	外面鉄釉、内面白濁釉	大堀相馬	19C前半	14.0		(6.7)	366-15	I-361
8	SD4 2層	中世陶器	小型壺		在地		5.9		(3.0)	370-14	I-453
9	SD4 堆積土	土師質土器	皿	底部回転糸切り	在地	江戸時代		5.9	(1.5)	344-9	Ca-18

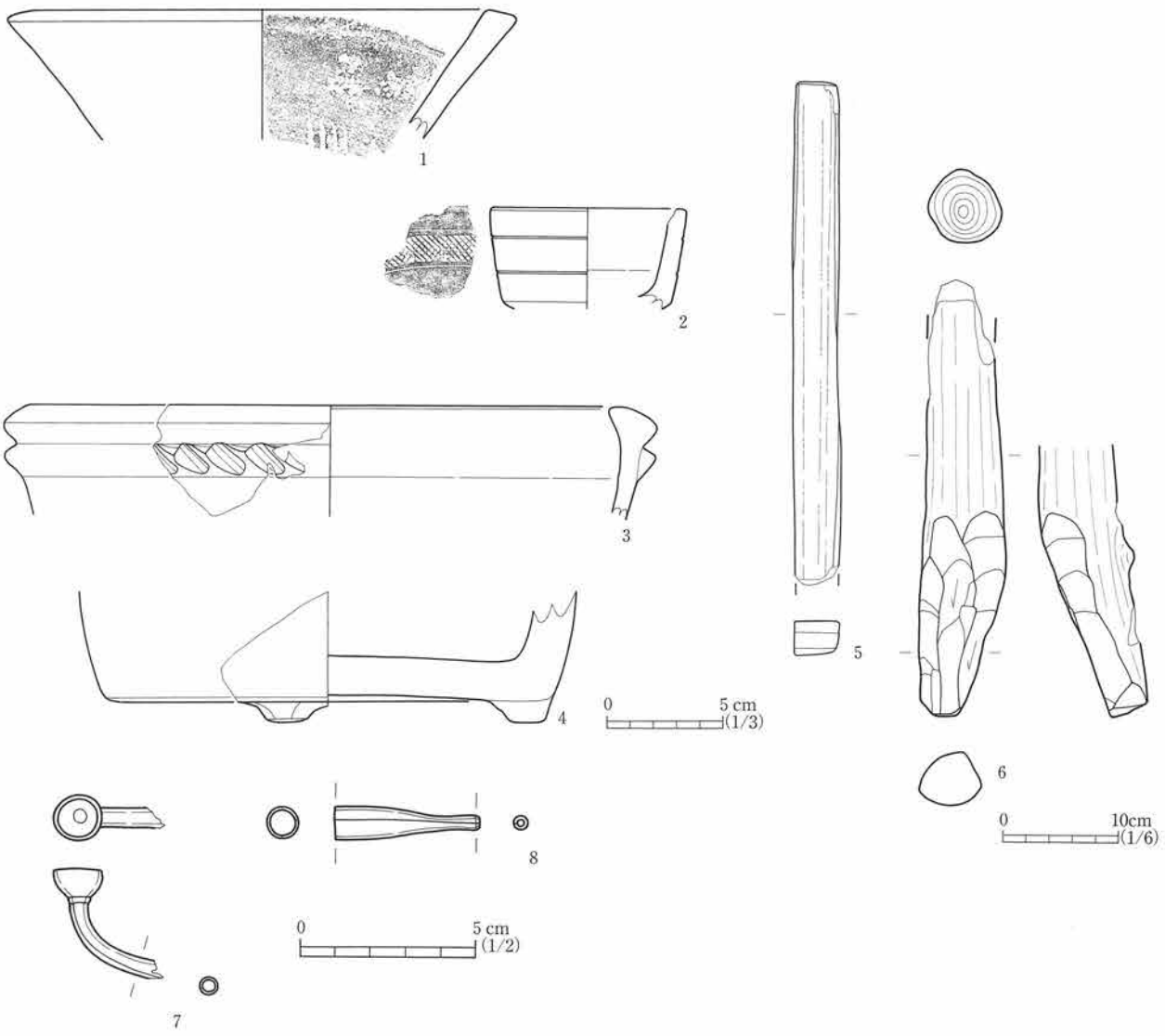
No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
10	SD4	須恵器・壺	平行叩き目		当て具痕・オサエメ		343-5	E-15

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
11	SD4 層中	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦		G-10
12	SD4 堆積土	平瓦	縄叩き目からナデ	平行叩き目	古代瓦		G-12

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
13	SD4 東壁	土錘		(2.3)		(3.05)		380-22	P-26

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
14	SD4 堆積土	瓦質土器	擂鉢	折縁口縁、火熱を受けている	在地	16C代					T-13
15	SD4 堆積土	瓦質土器	擂鉢	擂目4条	在地	16C代				377-13	T-5
16	SD4 堆積土	瓦質土器	擂鉢		在地	16C～17C				378-5	T-11
17	SD4 堆積土	瓦質土器	擂鉢	擂目7条、折縁口縁、火熱のため変色している、胎土に白色針状物質含む	在地	16C代	33.2		(8.0)	279-2	T-40

第163図　SD4堀跡出土遺物（23）



No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	SD4 堆積土	瓦質土器	擂鉢	擂目4条、角頭タイプの口縁、片口わずかに残存、火熱受け内外面に炭化物付着	在地	16C代	21.8		(5.6)	378-6	T-12
2	SD4 堆積土	瓦質土器	香炉	体部外面に斜格子文及び沈線有、胎土に白色針状物質含む	在地	16C以降	(8.3)		(4.3)	378-10	T-28
3	SD4 堆積土	瓦質土器	火鉢	体部に突帯有、胎土に白色針状物質含む	在地	17C～18C	(25.6)		(4.8)	378-11	T-29
4	SD4 堆積土	瓦質土器	鉢	脚付、砂が底部内外面に付着、焼成不良	在地	江戸時代		(19.0)	(5.7)	378-12	T-30

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
5	SD4 層中	不明	長さ(21.7)cm 幅2.1cm 厚さ1.5cm 板目材。	スギ類似種	399-3	Lc-43
6	SD4 堆積土	杭	長さ(37.7)cm 最大径7.3cm		404-5	Lc-77

No.	遺構・層位	種別	特徴	全長(cm)	火皿径(cm)	羅宇口径(cm)	吸口径(cm)	写真図版	登録番号
7	SD4 堆積土	雁首	腐食著しい、補強帯有、Nb-16と同一か？	(3.2)	1.3	(0.5)		433-13	Nb-15
8	SD4 堆積土	吸口	全面に鍍金の痕跡有	4.0		1.0	0.4	433-14	Nb-16

No.	遺構・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	登録番号
9	SD4 埋土	不定形	6.9	6.4	2.2	85.5	流紋岩		418-5	Ka-192

第164図　SD4堀跡出土遺物（24）

東側の状況：幅が狭くなっている部分の深さは0.55～0.6mで、その東側は1.35～1.45mと幅が広い部分が深くなっている。壁は底面から緩やかに立ち上がっているが、底面から40～60cm上がった部分に幅0.6～2.7mの段が見られる。また、深い部分と浅い部分の境の壁は急角度で立ち上がっている。堆積土は15層確認され、3層に大別される。最下層が自然堆積層で、上層は人為的堆積の状況である。下位の人為的堆積土は本遺構を1回目に埋めた土で、北半では礫、砂、地山ブロックを含み、遺物を多く含んでいる。南半では地山ブロックを含む土で遺物の量は少ない。土層断面（土層断面図C－C′）の観察で先に南側から埋め、次いで北側から埋めているものと考えられる。上位の人為的堆積土は本遺構を2回目に埋めた土で、シルトあるいは粘土質シルト土に地山ブロックが多量に含まれる土で、遺物の量は少ない。これらの人為的堆積の違いは時期的な違いであるか、埋め戻しの工程で入れた土の違いであるかは不明である。広い部分の底面は平坦であるが、狭くなっている部分の底面は、ＳＤ２溝跡（古期）によって削られ、凸凹になっている。幅の狭くなっている部分にはＳＤ３堀跡で検出されたような橋杭等の橋の痕跡は見られなかったことから、土橋状になっていた可能性が考えられる。

遺物は、陶磁器類、木製品、漆製品、木材、金属製品、土器類、土製品、瓦類、石製品、獣骨類等多種のものが出土した。遺物の取り上げに際しては上位の人為的堆積土のものをℓ1、下位の人為的堆積土のものをℓ2、最下層のものをℓ3として取り上げた。遺物の図示は取り上げた層毎に全ての種類の遺物を示した。

SD４堀跡出土陶器　時期別集計表（産地別）

時　　期	古瀬戸	瀬戸美濃	美　濃	肥　前	大堀相馬	小野相馬	岸窯系	瀬　戸	堤	京信楽	唐　津	不　明	計
13世紀～14世紀	1												1
14世紀～15世紀	1												1
15世紀後半	3	1											4
16世紀		4											4
16世紀前半～中頃		4											4
16世紀末～17世紀初頭		3	7										10
17世紀		1		2			1					2	6
17世紀前半		1									1		2
17世紀中頃～後半		9	5	39			34						87
17世紀後半～18世紀前半				4					1				5
17世紀末～18世紀中頃				2									2
18世紀			1	4	4			4	1	6			20
18世紀前半					1	1							2
18世紀後半以降					1					1			2
19世紀前半					1			1					2
19世紀後半					1								1
江戸時代												5	5
不明							1						1
合　　計	5	23	13	51	8	1	36	5	2	7	1	7	159

SD６堀跡

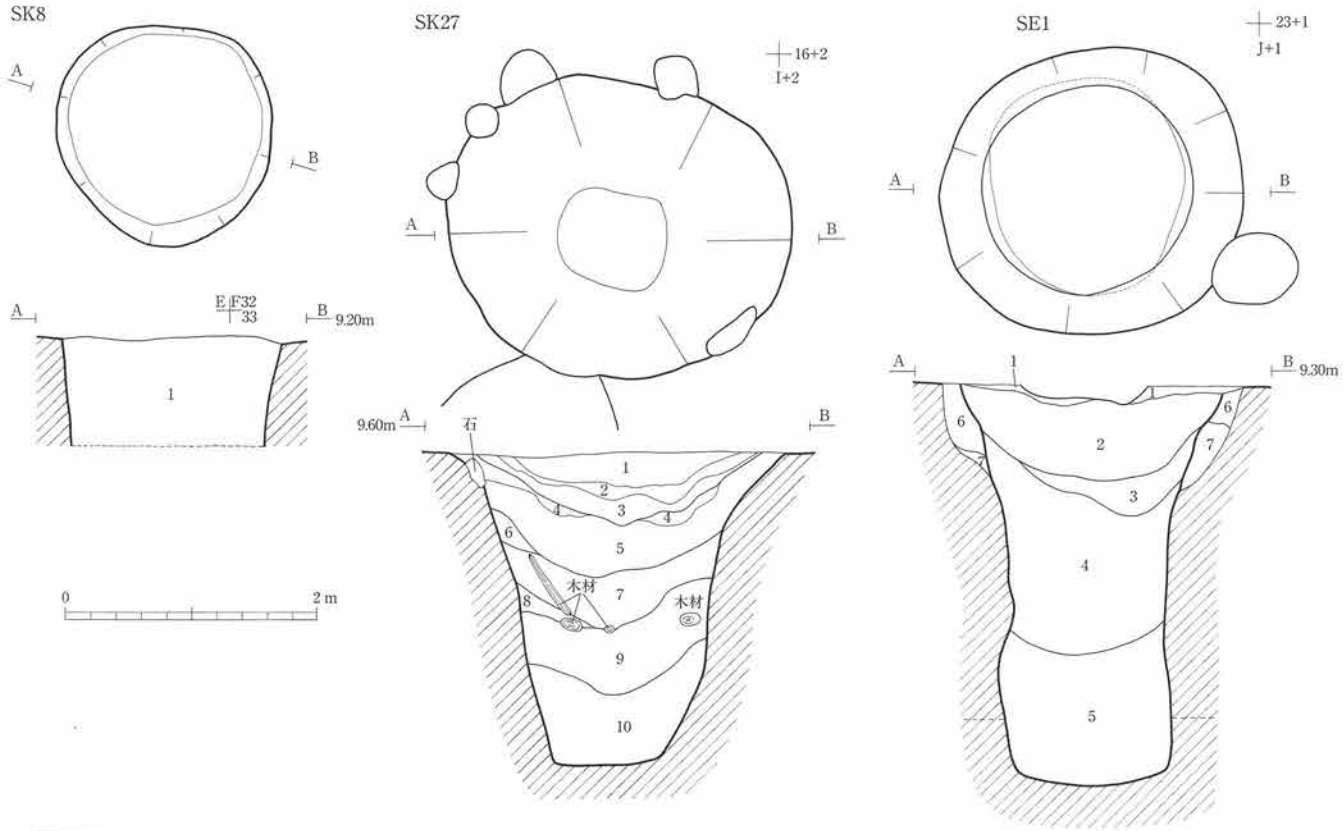
B～G－10～12グリッド、Ⅰ区とⅡ区の境に位置しており、その一部のみを確認した。SB１掘立柱建物跡、SX３性格不明遺構と重複しており、本遺構はSX３性格不明遺構より古く、SB１掘立柱建物跡より新しい。上幅は2.5m以上で方向はE－20°－N前後である。掘り下げていないため、遺構の詳細は不明である。

井戸跡

調査当初は土坑として精査を開始したが、調査中遺構の状況からSK８土坑およびSK27土坑の２基については井戸跡と判明したため、この項で記述する。

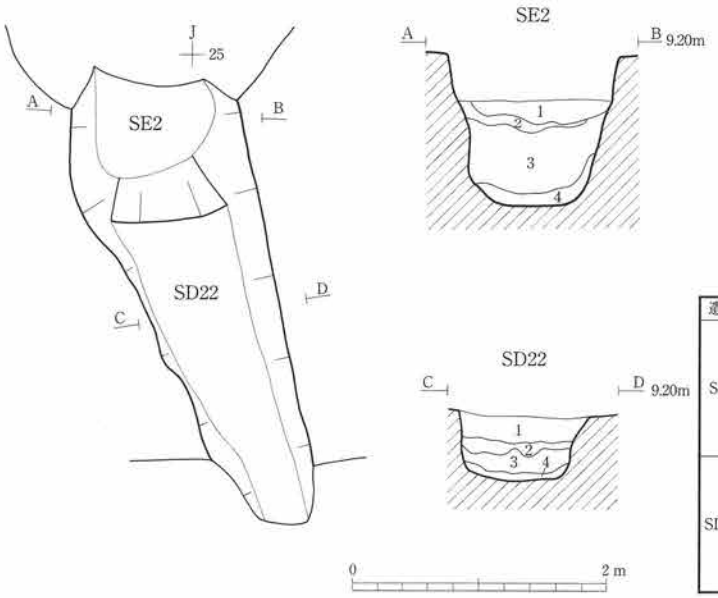
SK８土坑

E・F－32グリッドで確認された。当初土坑としていたが、井戸跡として記述する。SD３堀跡と重複しており、本遺構が新しい。平面形は直径約1.75mの不整な円形である。深さ90cmまで掘り下げたところで、底面を検出しな



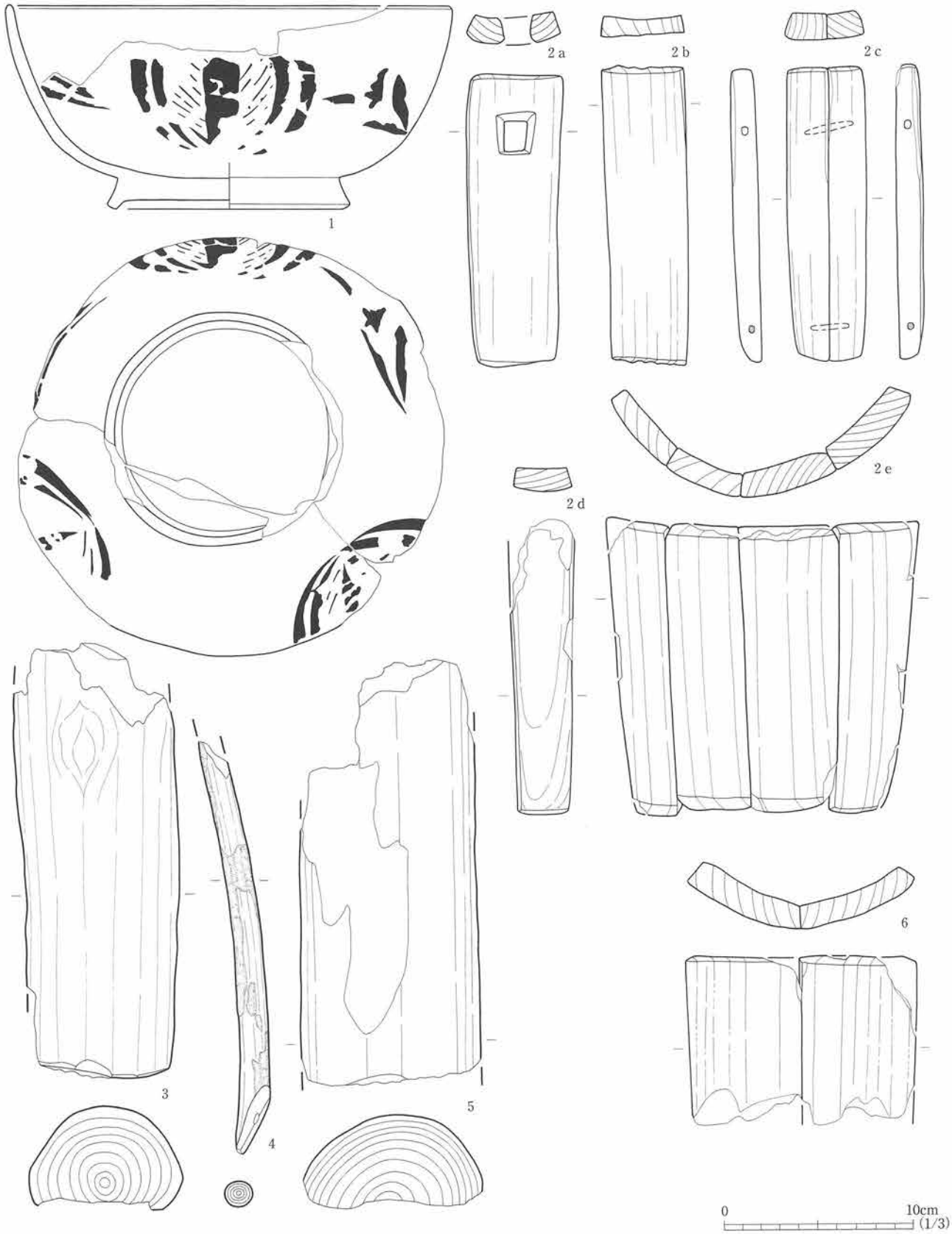
遺構	No.	土色	土性	備考
SK8	1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂質シルト	酸化鉄を多く含む、下方グライ化している
SK27	1	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	炭化物、焼土塊、小礫含む、しまりあり
	2	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物、明黄褐色（10YR6/6）砂質シルトブロックを含む
	3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物、焼土粒を含む
	4	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	炭化物若干含む
		灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	
	5	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	明黄褐（10YR6/6）礫砂、にぶい黄褐（10YR4/3）シルトブロックを多く含む、径10数cmの礫含む、人為的埋土
	6	黒褐色（10YR2/2）	粘土質シルト	しまりややあり、粘性あり
	7	黄灰色（2.5Y4/1）	粘土質シルト	木材混入、粘性あり
	8	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	木材多量に混入、粘性あり
	9	オリーブ黒（10Y3/1）	粘土質シルト	木材多量に混入、粘性あり
	10	オリーブ黒（5GY2/1）	粘土質シルト	木端、暗オリーブ灰（5GY4/1）砂質シルトブロックを含む

遺構	No.	土色	土性	備考
SE1	1	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト、暗褐（10YR3/3）シルトをブロックに含む、人為的埋土
		暗褐色（10YR3/3）		
	2	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	混合、人為的埋土
		明黄褐色（10YR5/8）		
		暗褐色（10YR3/3）		
		灰黄褐色（10YR5/2）		
	3	灰色（7.5Y4/1）	微～細砂	灰（7.5Y4/1）のシルトブロックを含む、人為的埋土
	4	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	シルト	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト、暗褐（10YR3/3）シルトの混合ブロック、人為的埋土
	5	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土質シルト	砂、礫を多く含む、人為的埋土
	6	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	壁の崩落土
		暗褐色（10YR3/3）		
	7	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	混合、壁の崩落土
		明黄褐色（10YR5/8）		
		暗褐色（10YR3/3）		
		灰黄褐色（10YR5/2）		



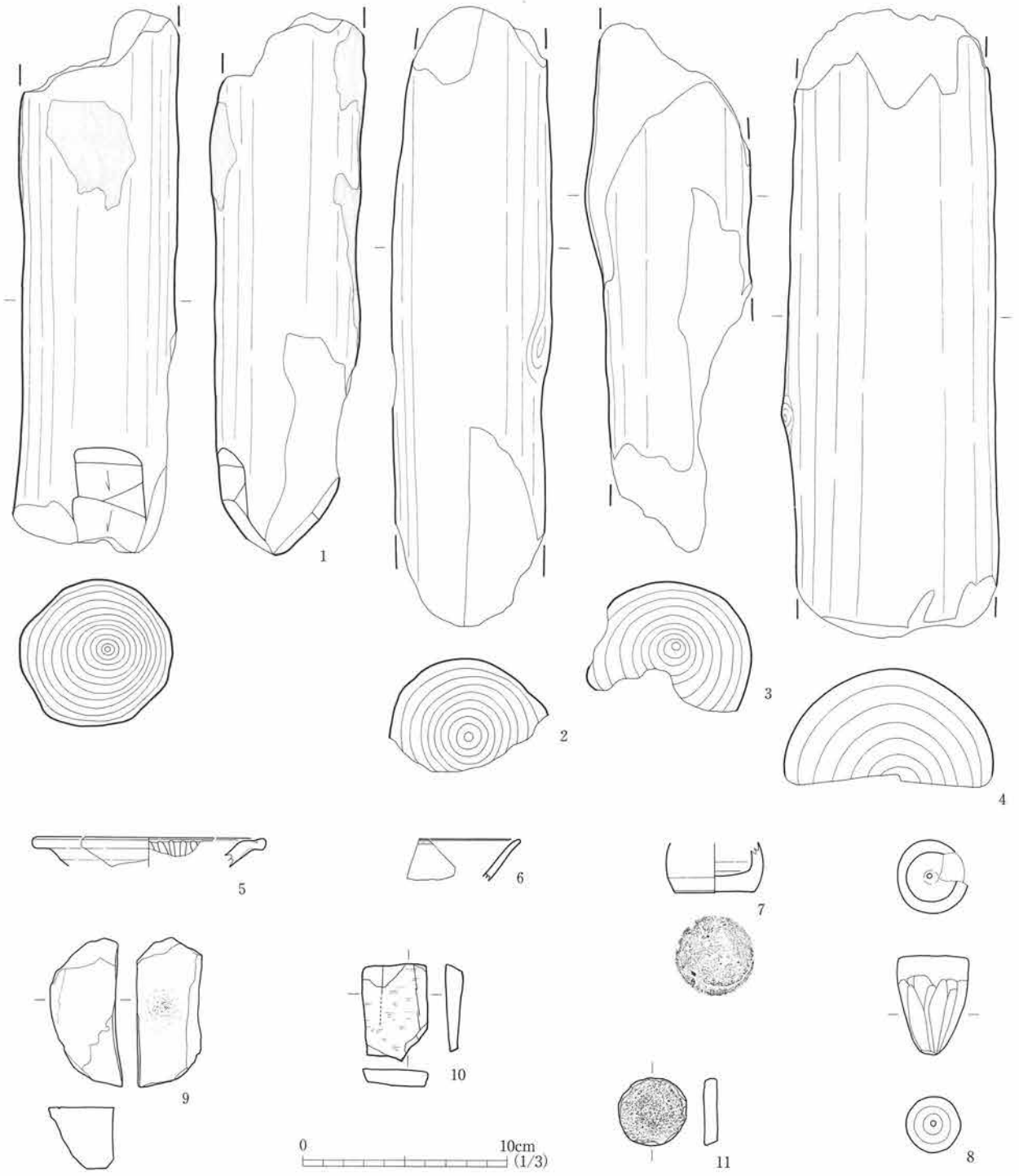
遺構	No.	土色	土性	備考
SE2	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐色（10YR5/8）砂質シルト、褐（7.5Y4/6）シルト、黄褐（7.5Y4/6）シルト、にぶい黄色（2.5Y6/4）細砂をブロック状に含む
	2	暗灰黄色（2.5Y4/2）	砂	細砂
	3	灰オリーブ色（5Y4/2）	砂質シルト	オリーブ黒（5Y3/2）粘土質シルト、黄褐（2.5Y5/4）シルト、オリーブ灰（10Y4/2）粘土質シルト、黄褐（10YR5/8）細砂をブロック状に含む
	4	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	粘土質シルト	
SD22	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	褐（10YR4/6）粘土質シルト、褐（10YR4/4）粘土質シルト、にぶい黄褐（10YR5/3）細砂をブロック状に含む、人為的埋土
	2	黄褐色（2.5Y5/4）	砂	細砂、人為的埋土
	3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	褐（10YR4/6）粘土質シルト、暗褐（10YR3/4）粘土質シルト、にぶい黄褐（10YR5/3）細砂をブロック状に含む、人為的埋土
	4	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	酸化鉄含む、人為的埋土

第165図　井戸跡・SD22溝跡



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	SK27　底面	漆器　鉢	外面黒色漆の上に赤色漆で文様あり（3単位）内面黒漆塗り仕上げ	トキノキ	388-1	La-55
2a～e	SK27　2層	桶か樽の側板	長さ15.9cm　幅5.1cm　厚さ1.5cm　上部に1.3×1.6cmの方形の貫通孔あり、板目材	クリ	402-5	Lc-60、61、67
3	SK27　7層	加工木	下端部に加工痕あり、全長（23.5）cm　幅8.5cm	イチイ	402-4	Lc-59
4	SK27　7層	加工木	上　下端部に加工痕あり、中心部に1ヶ所穴あり（縦に貫通している）		403-6	Lc-69 ③
5	SK27　7層	加工木	全長（21.7）cm		403-2	Lc-62
6	SK27　7層	桶か樽の側板	2枚接合、長さ（9.2）cm　幅12.0cm　厚さ1.6cm　柾目材	マツ属複維管束亜属	403-5	La-68

第166図　井戸跡出土遺物（1）



No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
1	SK27 7層	加工木	下端部に加工痕あり、全長 (26.7)cm 幅7.5cm		402-3	Lc-58
2	SK27 7層	加工木	全長 (26.0)cm 幅8.0cm		403-3②	Lc-63 ②
3	SK27 7層	加工木	全長 (30.4)cm 幅7.9cm		403-3①	Lc-63 ①
4	SK27 7層	加工木	全長 (30.9)cm 幅10.2cm		403-4	La-65

No.	遺構・層位	種別	器種	特徴	産地	時期	法量 口径 (cm)	法量 底径 (cm)	法量 器高 (cm)	写真図版	登録番号
5	SE1 1層	陶器	折縁皿	灰釉、丸彫、大窯Ⅴ期	瀬戸美濃	16C末頃	11.0		(1.4)	367-3	I-368
6	SE1	磁器	皿	口兀	中国	13～14C			(2.0)	377-1	J-98
7	SE1 底面	土師質土器	壺	小型壺、底部に回転糸切り	在地	江戸時代		3.9	(2.4)	344-10	Ca-19

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
8	SE1 5層	独楽	口径3.5cm、器高4.8cm、底径0.7cm		415-4	Lc-136

No.	遺構・器種	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考	写真図版	登録番号
9	SE1	砥石	7.3	3.3	0.9	79	デイサイト質凝灰岩		425-10	Kd-59
10	SE1 1層	砥石	4.8	3.2	0.9	18	凝灰質頁岩		425-11	Kd-60

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
11	SD22 1層	土製円盤	マメツ	3.25	3.3	0.7	10.6	380-3	P-41

第167図　井戸跡出土遺物（2）

かったが、掘り下げを中止した。このため、深さは不明である。掘り下げた部分での堆積土は単層である。壁は急角度で立ち上がるが底面は未確認のため不明である。遺物は礫石器が出土した。

SK27土坑

H・I－16・17グリッドで確認した。当初土坑としていたが、井戸跡として記述する。ピットと重複しており、本遺構が古い。平面形は2.75m×2.5mの円形に近い楕円形である。深さは2.5mである。素掘りの井戸であり、井戸枠は確認されなかった。壁は底面から急角度で立ち上がっているが、東側の壁は中位で垂直に近い角度になり、上端近くでゆるやかな角度になっている。堆積土は大別5層確認された。2層が人為的堆積土であると考えられる。底面は平坦である。遺物は磁器、木製品（杭・桶の側板・加工木）、石製品（砥石）、礫（焼礫・分割礫・擦痕のある礫）が出土した。

SE1井戸跡

I・J－24・25グリッドで確認した。ピット、SE2井戸跡と重複しており、ピットより古くSE2井戸跡より新しい。平面形は2.3m×2.4mの円形である。深さは3.2mである。素掘りの井戸であり、井戸枠は確認されなかった。壁は底面から急角度で立ち上がっているが、底面から1mまでは壁の崩落のためか、オーバーハングし、上端近くでゆるやかな角度になっている。堆積土は7層確認された。6・7層は壁の崩落土で、1～5層は人為的堆積状況を示している。底面は平坦である。遺物は陶磁器、土師質土器、木製品（独楽）、石製品（砥石）が出土した。

SE2井戸跡・SD22溝跡

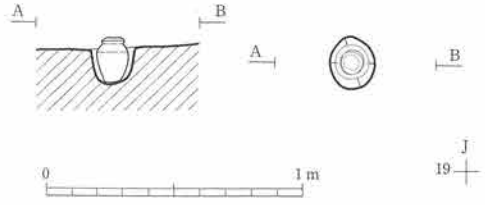
I・J－25・26グリッドで確認した。2基の遺構に重複関係は確認されなかった。そのため、同一の遺構として記述する。ピット、SE1井戸跡、SD4堀跡、SK68土坑と重複しており、SK68土坑より新しく、ピット、SE1井戸跡より古い。また、確認時にはSD4堀跡の堆積土がSD22溝跡上を覆っていたが、2基の遺構は重複関係はなく同時期のものであると考えられる。確認した長さは3.7mで、方向はN－13°－Wである。上幅はSE2井戸跡とした部分で1.4m、SD22溝跡の部分で1.25～0.7mとSD4堀跡に向かって狭くなる。深さはSE2井戸跡とした部分で1.1m、SD22溝跡の部分で58～40cmである。堆積土はSE2井戸跡・SD22溝跡部分で各々4層確認された。人為的堆積状況を示している。底面は平坦であるが、南から北に向かって傾斜し、SE2井戸跡部分で段を形成している。遺物は出土しなかった。

SE1井戸跡とSE2井戸跡・SD22溝跡の関係は、確認時点では前述のようにSE1井戸跡がSE2井戸跡・SD22溝跡より古いとしていたが、SE2井戸跡とした落ち込み部分は、SD22溝跡に伴うものであり、SD22溝跡はSE1井戸跡構築の際の作業通路であると考えられる。また、SE2井戸跡とした部分はSE1井戸跡構築の際の掘り出した土を上にあげるための足場である可能性がある。

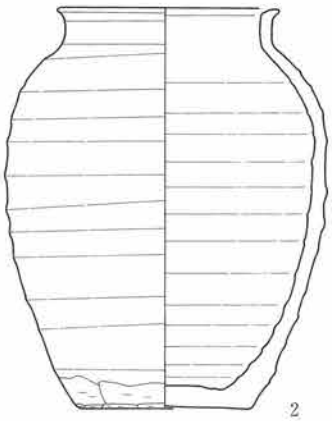
埋設土器

1号埋設土器

I－18グリッドで確認された。畑の耕作によって掘り方の上部は削平され、土器の上部が現れていた。ピットと重複しており、本遺構がピットより新しい。確認した掘り方は21cm×18cmの不整な円形で。深さは17cmである。埋設されていた土器は土師質土器の壺で、口径9.3cm、底径6.9cm、最大径13.5cm、器高17.7cmで、正位置に置かれており、径9.6cm、器高1.2cmの蓋が被せられていた。壺内部は内面全面に泥が膜を張ったような状況で、底部には砂が入っていた。その他には埋納物や混入物はなく、空の状態で、遺物はなかった。



土　色	土 性	備　考
褐色（10YR4/4）	シルト質砂	掘り方埋土
暗褐色（10YR5/6）	細砂～粗砂	特に混入物なし、土器の内部の土



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　徴	産　地	時　期	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区東埋設土器	土師質土器	蓋	回転糸切り	在地	江戸時代	8.35	6.1	1.05	344-12	Ca-20①
2	Ⅱ区東埋設土器	土師質土器	壺	回転糸切り	在地	江戸時代	8.6	6.6	16.05	344-11	Ca-20②

第168図　1号埋設土器

性格不明遺構

SX 1 性格不明遺構

D・E－26グリッドで確認した。SD 4 堀跡と重複しており本遺構が新しい。SD 4 堀跡に入れたトレンチによって、西側を削平したため全体は不明であるが、平面形は2.7m以上×1.6mの楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは1.1mである。壁は底面から急角度で立ち上がるが、一部オーバーハングする部分もある。堆積土は 3 層確認された。底面は平坦である。遺物は漆器の椀等の木製品、石臼等が出土した。

SX 2 性格不明遺構

F－26グリッドで確認した。SD 4 堀跡、SD 5 溝跡と重複しており本遺構が新しい。平面形は3.05m×1.35mの不整な楕円形である。深さは1.45mである。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は 3 層確認された。底面は平坦であるが、西側が段になり20～25cm高くなっている。遺物は出土しなかった。

SX 3 性格不明遺構

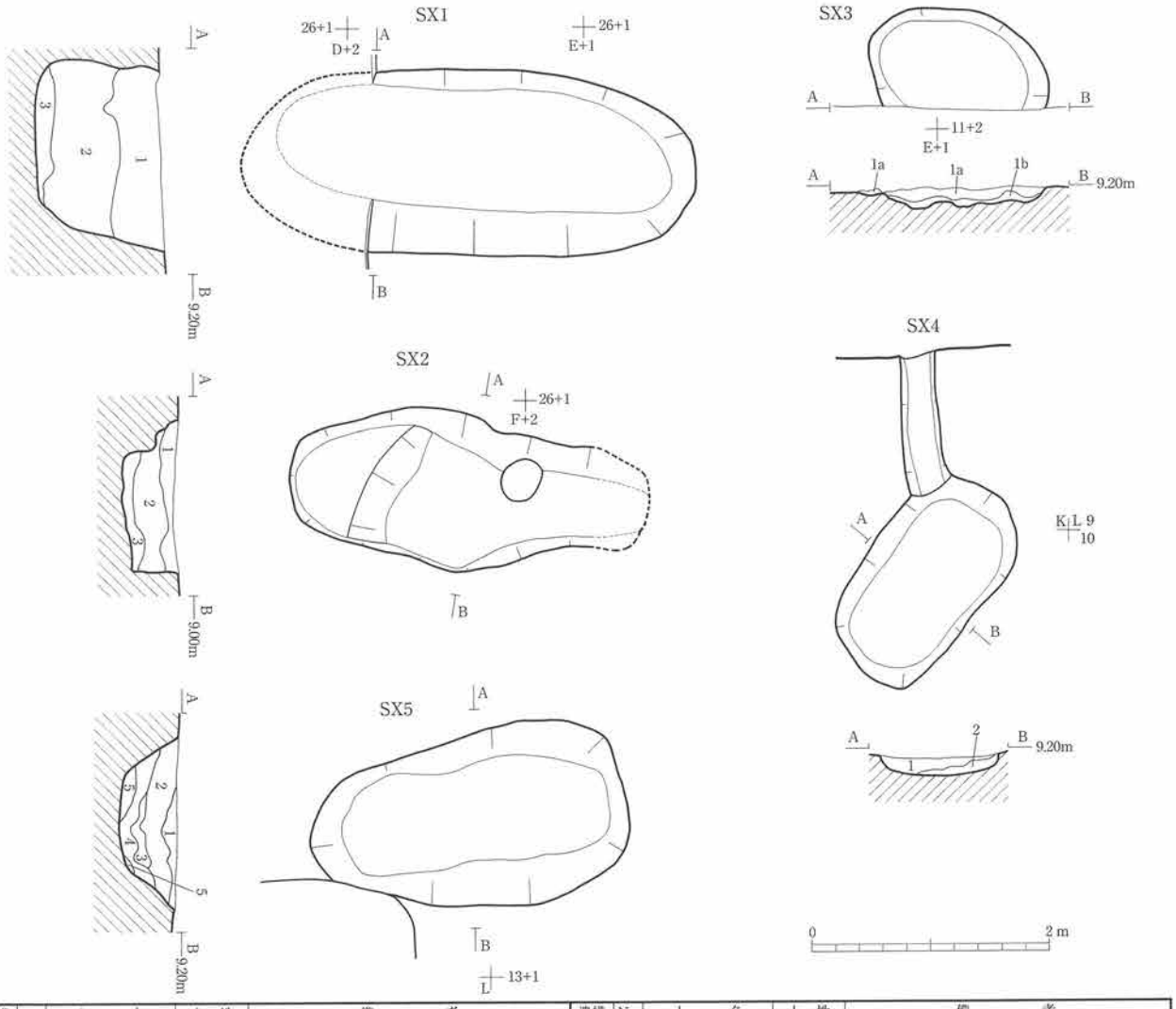
調査区北壁断面で確認され、調査区を拡張し、E－11グリッドで確認した。SD 6 堀跡と重複しており本遺構が新しい。南側を側溝で削平され、全体は不明であるが、平面形は1.6m×0.95m以上の楕円形を基調としたものであると考えられる。深さは20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は 2 層確認された。底面は凸凹が著しい。遺物は縄文土器が出土した。

SX 4 性格不明遺構

K－9・10グリッドで確認した。平面形は1.9m×1.1mの隅丸長方形で北側のコーナーから幅35cmの溝が北側の調査区外まで延びている。深さは25cmで、北側の溝は8～9cmで北側に傾斜している。壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は2層確認された。底面は平坦である。遺物は煙管が出土した。

SX 5 性格不明遺構

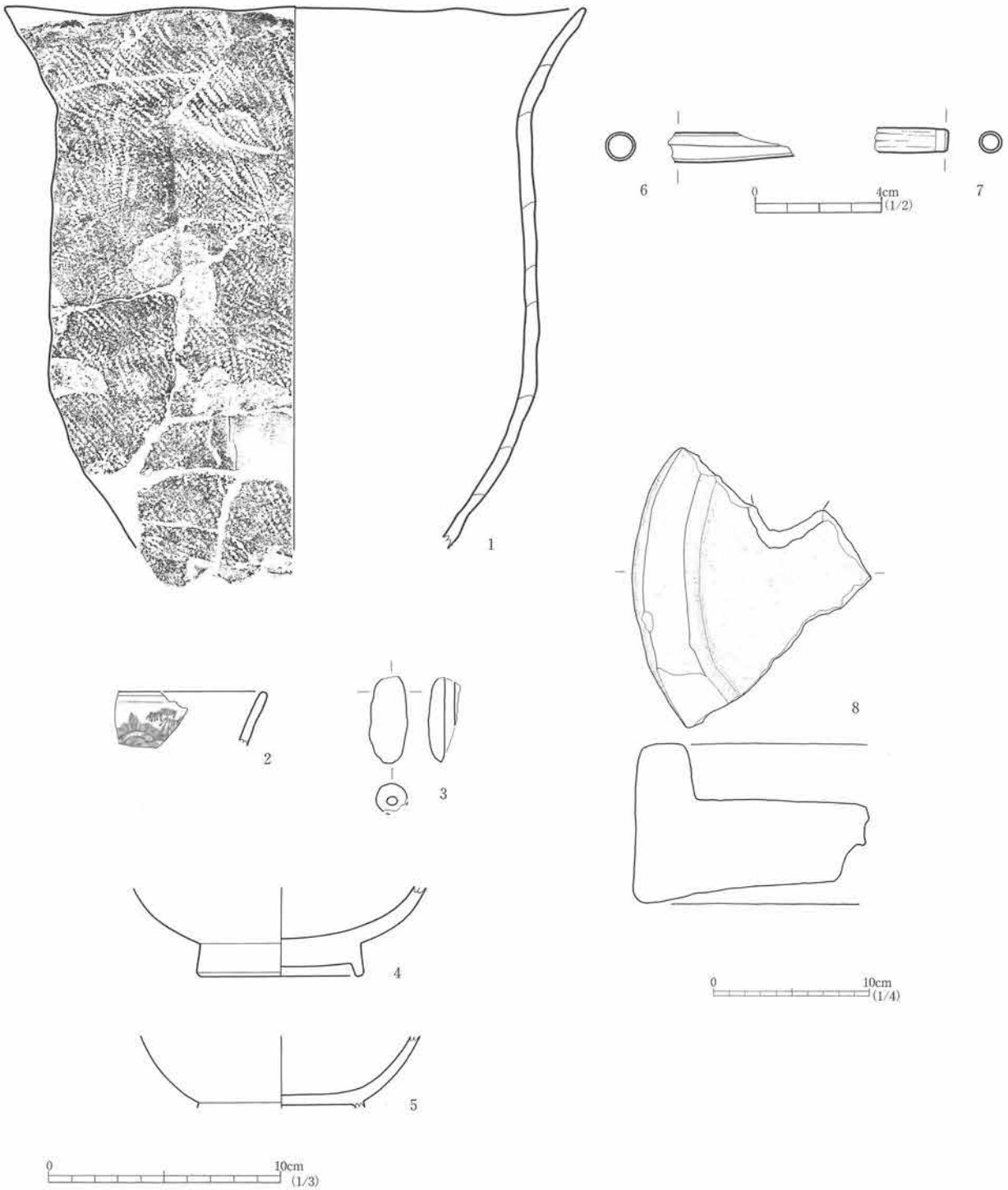
K・L－12・13グリッドで確認した。遺構東側は当初の調査区外に延びていたが、調査区を拡張して全体を確認した。SK36土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は2.65m×1.55mの不整な楕円形である。深さは55cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は5層確認された。底面は平坦である。遺物は磁器、土製品が出土した。



遺構	No.	土色	土性	備考
SX1	1	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土	灰（5Y4/1）砂をブロック状に含む、しまり、粘性あり
	2	黒色（7.5Y2/1）	粘土	植物遺存体、動物遺存体を含む、底面より漆器が出土している、壁の内側に挟まれている、しまり、粘性あり
	3	オリーブ黒色（10Y3/1）	粘土	黒褐（10YR3/1）粘土をブロック状に含む、鉄器土、石臼が出土している、しまり、粘性ややあり
SX2	1	オリーブ黒色（5Y2/2）	粘土	灰オリーブ（5Y4/2）シルトを含む、しまり、粘性ややあり
	2	黒色（5Y2/1）	粘土	植物遺存体を含む、この層より獣骨が出土、粘性ややあり
	3	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）シルト質粘土を含む、粘性ややあり

遺構	No.	土色	土性	備考
SX3	1a	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	にぶい黄褐色土を小ブロック状に含む
	1b	にぶい黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物を粒状、帯状に部分的に含む
SX4	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物、焼土を含む
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	しまり、粘性ややあり
SX5	1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物粒、オリーブ褐（2.5Y4/3）シルト霜降りに含む、しまりややあり
	2	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を含む、オリーブ褐（2.5Y4/6）砂質シルトブロック、しまり、粘性ややあり
	3	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物、黄褐（2.5Y5/3）粘土質シルト小ブロックを含む、粘性ややあり
	4	黄褐色（2.5Y5/3）	粘土質シルト	黒褐（10YR3/2）粘土質シルトブロックを含む、しまりややあり、粘性あり
	5	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む、しまりややあり、粘性あり

第169図　II・III区　性格不明遺構（1）



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	SX3 1層	縄文土器・深鉢	縄文（RL）	ナデ		334-11	A-11

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	写真図版	登録番号
2	SX5 堆積土	磁器	鉢	陶胎染付	肥前	18C				377-8	J-105

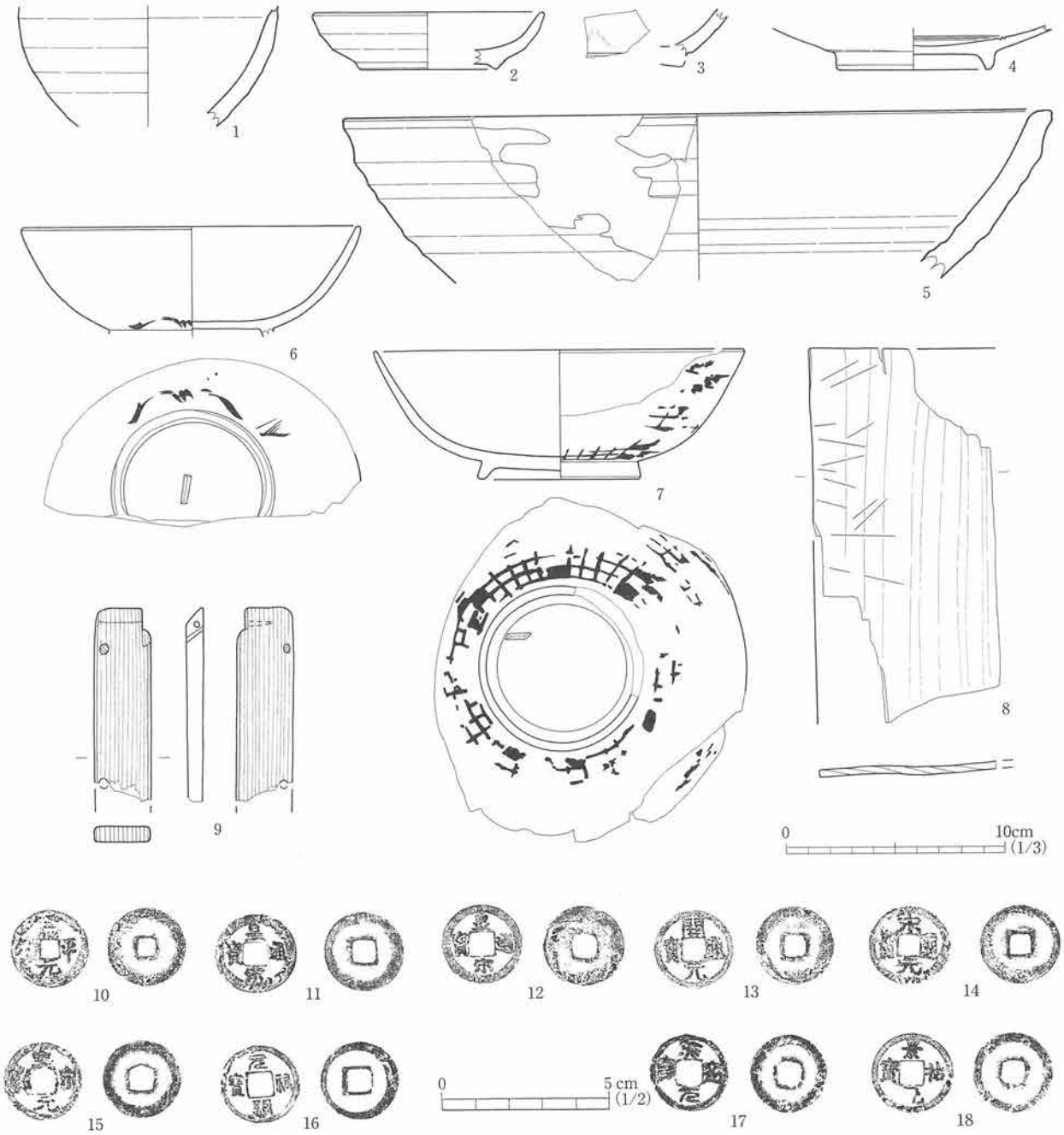
No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
3	SX5 堆積土	土錘	マメツ 孔径0.5cm	(4.2)	(1.75)	(0.7)	(9.0)	380-4	P-3

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
4	SX1 2層底面	漆器 椀	内外面赤色漆仕上げ、底面外面黒漆仕上げ、外面の一部及び内面見込みに焼痕有、底径7.0cm 器高（3.9）cm	ブナ属の一種	389-5	La-71
5	SX1 2層	漆器 椀	外面黒漆の上に赤色漆仕上げで文様わずかに有、内面赤色漆塗仕上げ	ブナ属の一種	389-4	La-72

No.	遺構・層位	種別	特徴	全長（cm）	火皿径（cm）	羅宇口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
6	SX4	吸口	Nb-24と同一か？	(3.9)		(0.9)		433-20	Nb-23
7	SX4	羅宇	羅宇 最大径0.7cm	(2.3)					Nb-24

No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
8	SX1 3層	石臼	(15.4)			2040	安山岩		424-10	Kd-44

第170図 II・III区 性格不明遺構出土遺物（1）

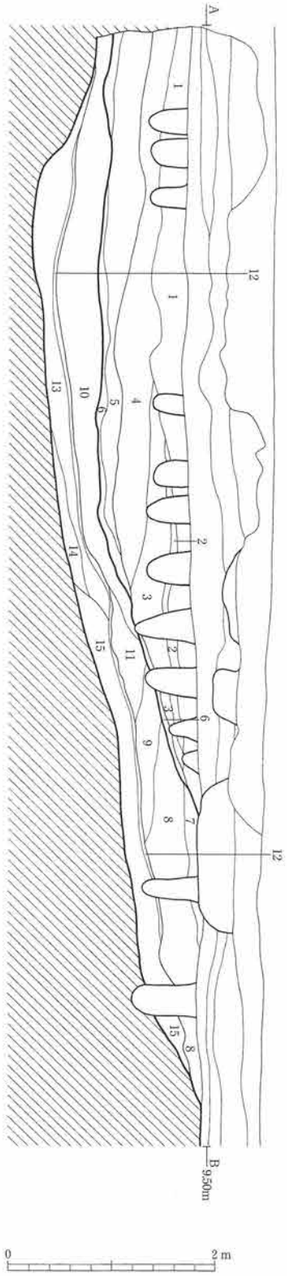


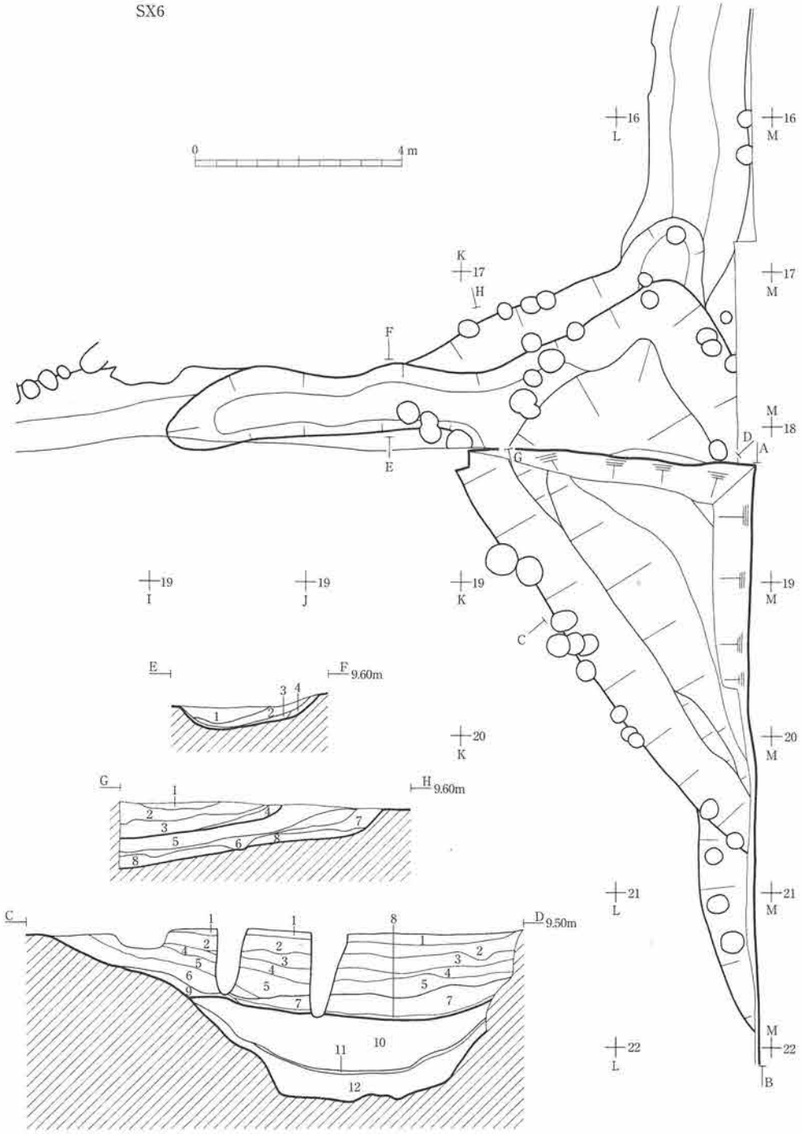
No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	SX6　9層	陶器	天目茶碗	鉄釉、古瀬戸	瀬戸	14C後半			(5.7)	367-9	I-377
2	SX6　2層	陶器	丸皿	灰釉、掛つぎによる接合破片、高台の裏に輪トチンの痕、全面施釉、大窯Ⅱ b期	瀬戸美濃	16C	10.6	6.3	2.7	367-8	I-376
3	SX6　1層	陶器	天目茶碗	鉄釉の上に鉄化粧、大窯Ⅰa期	瀬戸美濃	15C末				367-7	I-375
4	SX6　2層	陶器		灰釉陶器	猿投	9C		7.2	(2.0)	370-3	I-441
5	SX6	陶器	鉢		在地		23.7		(7.8)	369-12	I-433

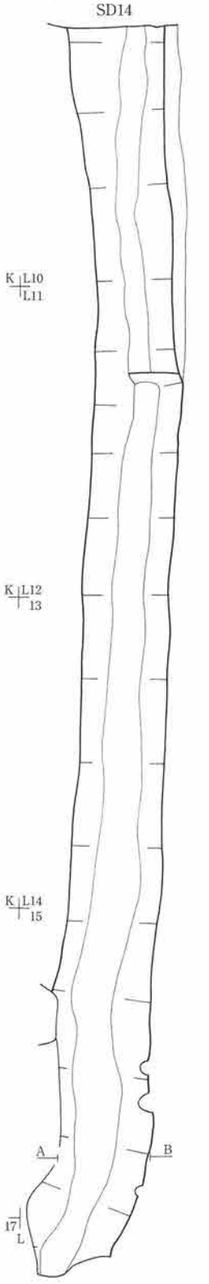
No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	樹　種	写真図版	登録番号
6	SX6	漆器　椀	外面黒色漆の上に濃淡の赤色漆で文様有、内面茶褐色漆仕上げ、底部外面に漆塗付前の線刻有	ブナ属の一種	388-3	La-57
7	SX6	漆器　椀	外面黒色漆の上に赤色漆で文様有、内面茶褐色漆仕上げ、底部外面に漆塗付前の線刻	ブナ属の一種	388-4	La-58
8	SX6	折敷？	長さ（17.5）cm×幅（8.2）cm　厚さ0.4cm　表面に加工痕有、板目材	ヒノキ属の一種	394-3	Lc-6
9	SX6	不明	長さ（9.05）cm　幅2.6cm　厚さ0.8cm　釘穴２ヶ所有（１ヶ所は木釘入り）柾目材	スギ	396-2	Lc-36

No.	遺構・層位	種　別	特　　徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
10	SX6	銅製品　銭貨	咸平元宝（北宋）　（初鋳年　1368年）	2.4	4.0	429-1	Na-1
11	SX6	銅製品　銭貨	皇宋通宝（北宋）　（初鋳年　1039年）	2.4	3.1	429-2	Na-2
12	SX6	銅製品　銭貨	皇宋通宝（北宋）　（初鋳年　1039年）	2.5	2.4	429-3	Na-3
13	SX6	銅製品　銭貨	開元通宝（唐）　（初鋳年　621年）	2.4	2.9	429-4	Na-4
14	SX6	銅製品　銭貨	宋通元宝（宋）　（初鋳年　968年）	2.4	2.5	429-5	Na-5
15	SX6	銅製品　銭貨	皇宋元宝（南宋）　（初鋳年　1253年）	2.4	2.0	429-6	Na-6
16	SX6	銅製品　銭貨	元祐通宝（北宋）　（初鋳年　1086年）	2.4	2.7	429-7	Na-7
17	SX6	銅製品　銭貨	熙寧元宝（北宋）　（初鋳年　1068年）	2.4	2.5	432-15	Na-71
18	SX6	銅製品　銭貨	景祐元宝（北宋）　（初鋳年　1034年）	2.5	2.7	431-14	Na-51

第171図　Ⅱ・Ⅲ区　性格不明遺構出土遺物（2）







C－D

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SX6新	1層	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	黄褐（10YR5/6）シルトのブロックを含む、炭化物わずかに含む
		2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黄褐（10YR5/6）シルト、にぶい黄褐（10YR5/4）シルトのブロック、炭化物わずかに含む
		3	褐色（10YR4/6）	シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）シルト、灰黄褐（10YR4/2）シルト、褐（7.5YR4/6）シルトのブロックを含む
		4	黒褐色（10YR3/2）	シルト	にぶい黄褐（10YR4/3）シルト、黄褐（10YR5/3）シルトのブロックを含む、層上面に灰層が薄く堆積している
		5	黒色（10YR2/1）	シルト	黒褐（10YR3/2）シルト、にぶい黄褐（10YR5/3）シルト、オリーブ褐（2.5Y4/6）のブロックを含む（灰を多量に含む）
		6	黄灰色（2.5Y4/1）	シルト	オリーブ褐（2.5Y4/6）シルト、にぶい黄褐（10YR5/4）シルトの小ブロックを含む
	2層	7	黒色（10YR1.7/1）	シルト	灰黄褐（10YR4/2）シルト、黒褐（10YR3/2）シルト、オリーブ黒（7.5Y3/2）シルトのブロックを含む（植物遺存体と灰を多量に含む）
		8	黒色（10YR1.7/1）	シルト	薄く堆積している→植物遺存体層
		9	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	黄褐（10YR5/6）の小ブロックを含む
SX6古	1層	10	暗オリーブ灰色（5GY4/1）	粘土	オリーブ黒（5GY2/1）のブロックを含む、層はグライ化している
		11	黒色（10YR2/1）		薄く堆積している→植物遺存体層、層はグライ化している
	2層	12	オリーブ黒色（5GY2/1）	粘土	オリーブ黒色（5GY2/1）のブロックを下半分に多く含む、層下面のラインは直線的ではなく乱れている、層はグライ化している

G－H

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SX6新		1	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	東側のみ炭化物、しまりあり
		2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物、明黄褐色（10YR6/8）粘土質ブロック、しまりややあり、粘性あり
		3	黒色（10YR1.7/1）	砂質シルト	炭化物、焼土粒、灰を含む、粘性あり
		4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	炭化物含む、粘性あり
SX6古		5	オリーブ褐色（2.5Y4/3）	砂質シルト	酸化鉄を含む、しまりややあり、粘性あり
		6	黒褐色（2.5YR3/2）	シルト	炭化物、焼土を含む、しまり、粘性ややあり
		7	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	酸化鉄を含む、粘性あり
		8	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	粘性ややあり

A－B

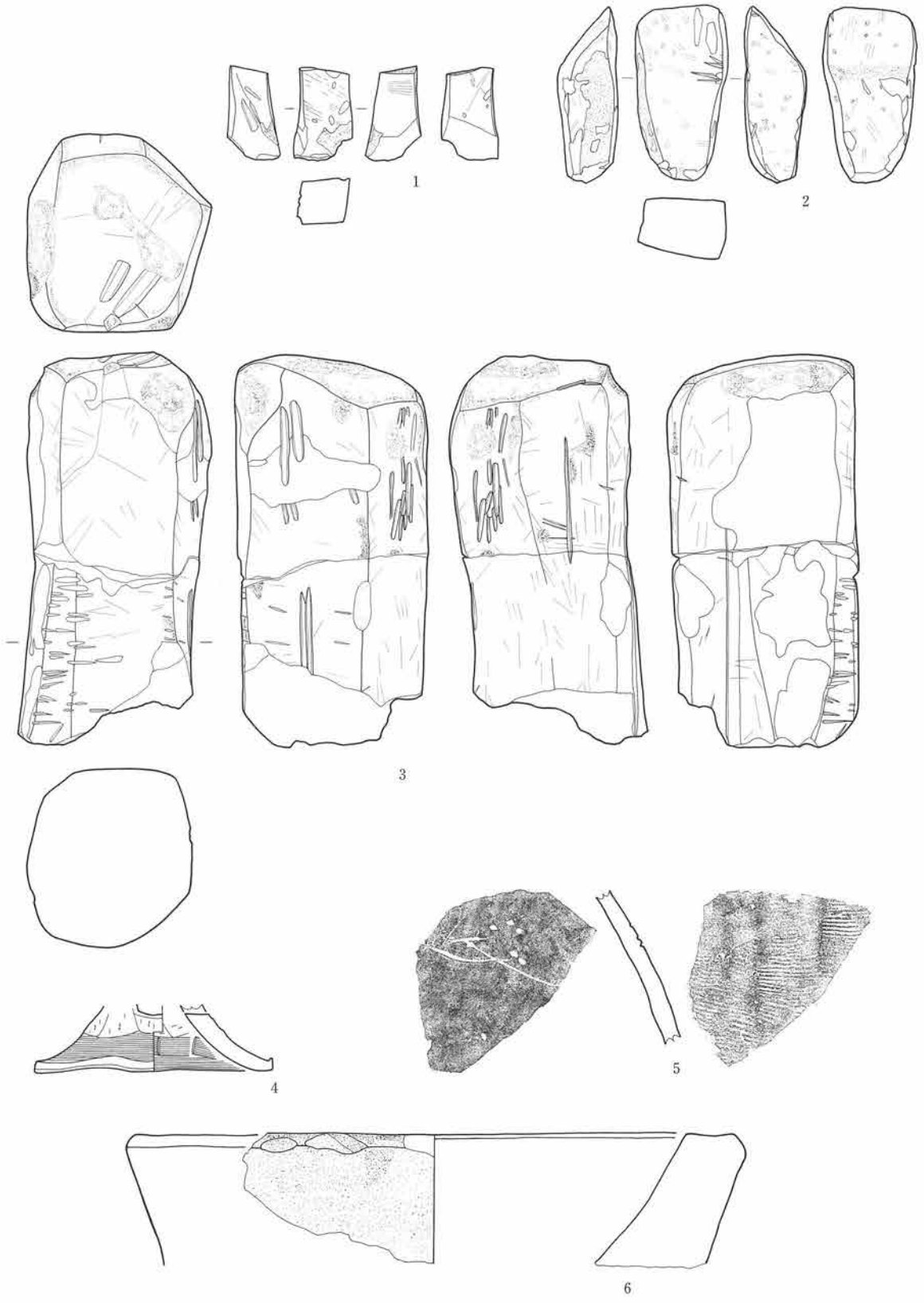
遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SX6新	1層	1	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	オリーブ（5Y5/6）シルトを斑状にオリーブ褐（2.5Y4/6）シルトと黄褐（2.5Y5/4）シルトのブロックを含む、灰を部分的にブロックで含む
		2	黒色（10YR2/1）		灰層、オリーブ（5Y5/6）シルトを斑状に含む
		3	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	オリーブ（5Y5/6）シルト、オリーブ褐（2.5Y4/6）シルトのブロックを含む、灰を部分的にブロックで含む
		4	黒褐色（2.5Y4/2）	シルト	褐（7.5Y4/6）シルト、黄褐（2.5Y5/4）シルトのブロックとオリーブ（5Y5/6）シルトのブロックを斑状に含む
	2層	5	黒色（10YR2/1）	シルト	灰黄褐（10YR4/2）シルト、黒褐（10YR3/2）シルト、オリーブ黒（7.5Y3/2）シルトのブロックを含む（植物遺存体と灰を多量に含む）
		6	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	層上面に黒（10YR2/1）の層（植物遺存体）が薄く帯状に堆積している
SX6古	1層	7	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	オリーブ（5Y5/6）シルトを斑状に多く含む
		8	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	オリーブ（5Y5/6）シルトを斑状に多く含む、黄褐（2.5Y5/2）シルトをブロック含む
		9	暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘土質シルト	黄褐（2.5Y5/2）シルトをブロックで含む、オリーブ（5Y5/6）シルトを斑状に含む
		10	黒オリーブ灰色（5GY4/1）	粘土	
	2層	11	オリーブ黒色（7.5Y3/2）	粘土	オリーブ（2.5Y4/6）シルトブロックを含む、炭化物粒を含む
		12	黒色（10YR2/1）		薄く堆積している→植物遺存体
		13	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土	
		14	黒色（7.5YR2/1）	粘土	
		15	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土	黄褐（10Y5/6）シルトを小ブロックで含む

E－F

遺構	層位	No.	土色	土性	備考
SX6新		1	黄褐色（10YR5/6）	シルト質砂	しまりあり
		2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	しまりややあり、粘性あり
		3	黒色（10YR1.7/1）	粘土質シルト	炭化物、焼土、灰多く含む、粘性あり
		4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物多く含む、粘性あり

遺構	No.	土色	土性	備考
SD14	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	暗褐（10YR3/4）砂質シルトブロック、しまり、粘性ややあり
	2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗灰黄（2.5YR4/2）粘土質ブロック
	3	暗灰黄色（2.5YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、マンガン、酸化鉄を含む、粘性あり
	4	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物若干含む、しまりややあり、粘性あり
	5	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物若干含む、灰黄褐（10YR5/2）粘土質シルトを縞状に上層に含む、粘性あり
	6	灰黄褐色（10YR4/2） 灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	粘性あり
	7	にぶい黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	しまり、粘性ややあり

第172図　性格不明遺構（2）SD14溝跡



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	SX6	砥石	4.8	3	2.6	43.2	デイサイト質凝灰岩		426-5	Kd-70
2	SX6	砥石	8.8	4.7	3.2	168	デイサイト質凝灰岩		426-6	Kd-71
3	SX6	砥石	19.6	9.6	10	2680	デイサイト		425-13	Kd-61+69

No.	遺構・層位	種別・器種	外　面	内　面	備　考	写真図版	登録番号
4	SD14	土師器・高坏	ナデ・ケズリ	ナデ・ヘラナデ・ケズリ			C-20

No.	遺構・層位	種別・器種	外　面	底　面	内　面	備　考	写真図版	登録番号
5	SD14	須恵器・甕	沈線文・刺突文		当て具痕		343-4	E-13

No.	遺構・器種	種　別	口径（cm）	器高（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
6	SD14	石鉢	(31.0)	(6.5)	3.6	390	安山岩		424-9	Kd-42

第173図　II・III区　性格不明遺構出土遺物（3）・溝跡出土遺物（3）

SX 6 性格不明遺構

Ⅰ～Ｌ－16～21グリッドで確認した。東側の調査区外に延びており、全体は不明である。本遺構の調査が２年に渡ってしまったため、遺構が途切れてしまう部分が調査区境の部分でみられる。ピット、SD12・14・32溝跡と重複しており、ピットより古く、３条の溝跡より新しい。また、本遺構廃絶後埋まりきる前にＳＫ74土坑が掘り込まれている。本遺構は２時期の変遷がある。新期の遺構は平面形が10.3m以上×5.8m以上の隅丸長方形を基調としたものと考えられ、北西のコーナーから幅1.1m～1.4mの溝が６mの長さで西へ延びている。遺構の深さはおよそ１mで、西側の溝の深さは20cmである。壁は緩やかな角度で立ち上がり、中段で傾斜がより緩やかになる部分がある。堆積土は大別２層確認された。１層は人為的な堆積状況である。２層には植物遺体が多量に含まれる層がある。底面については当初新旧の重複関係を捉えられず、底面まで掘り下げてしまったため、新期の底面の状況は不明である。旧期の遺構は新期の遺構による削平と東側の調査区外へ延びていることから平面形は不明であるが、14.5m以上×5.5m以上の規模である。深さは1.7mである。北東コーナーが幅1.5m、長さ１mで北東に張出している。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は大別２層確認された。１層は人為的な堆積状況である。２層には植物遺体、細砂ブロックを含む層がある。底面は乱れ、細かな凸凹が見られる。遺物は陶器、木製品、古銭等の金属製品等が出土しているが、新旧どちらに属すものか明確に分離できなかった。

掘立柱建物跡

調査区全域からピットが確認されている。整地層の上面から掘り込まれたものを含めて全てⅢ層上面で確認したため、中世～近世のものが混在している可能性がある。

SB 1 掘立柱建物跡

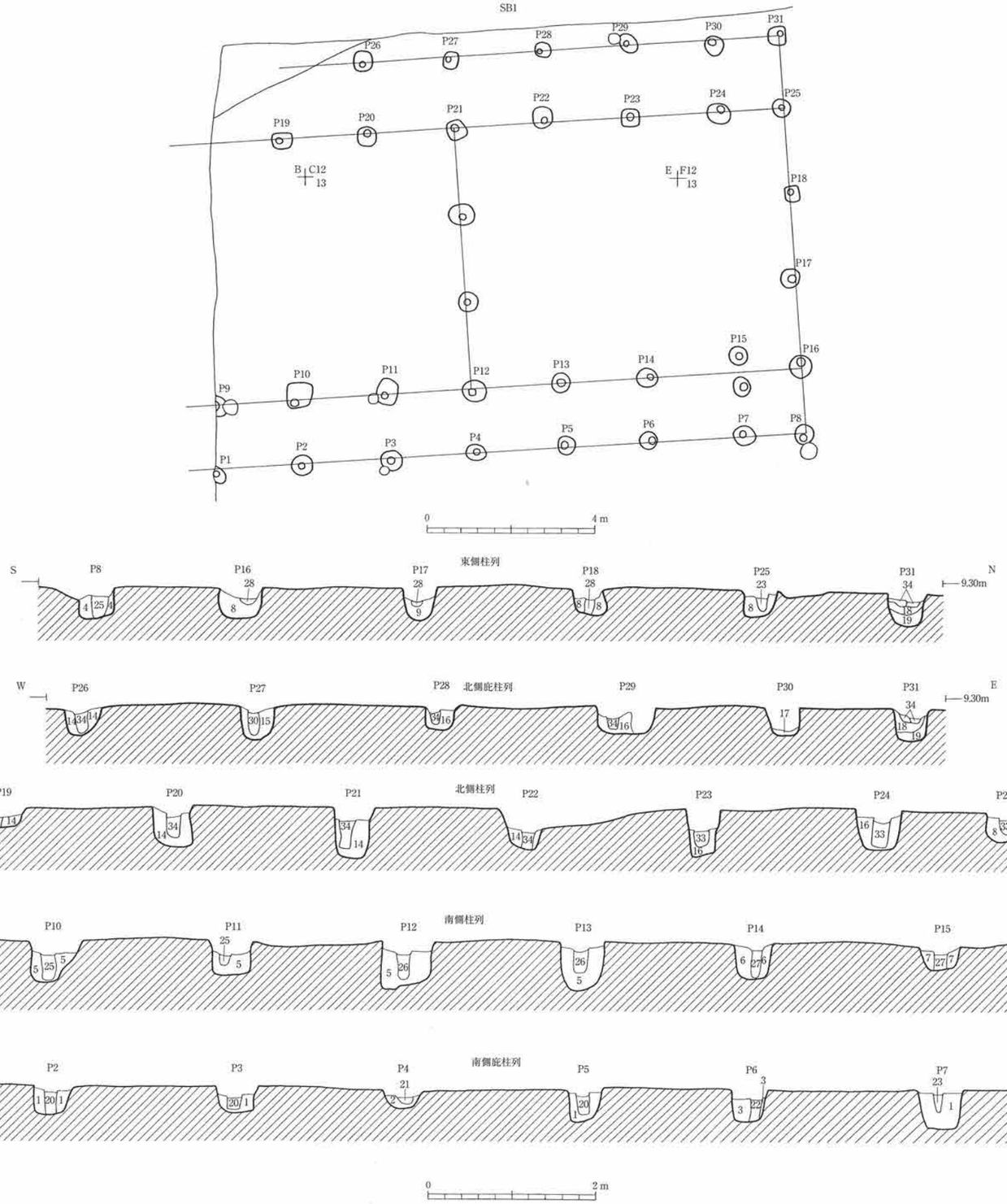
調査区北部のＢ～Ｇ－11～15グリッドで確認した。SD６堀跡、SK14土坑と重複しており、本遺構が古い。東西７間以上（総長14.8m以上）、南北３間（総長約6.2m）の身舎部分の南面及び北面に各々１間（柱間各々1.8m）の庇あるいは縁がつく東西棟である。桁行柱列方向はＥ－０°－Ｎでほぼ真東を向く。身舎には間仕切りがある。柱穴は一辺60～40cmの方形を基調としたものと径60～50cmの円形を基調としたものがある。柱穴の深さは20～60cmで全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径20cm前後の円形のものが多いが、一辺18cmの角柱の痕跡も見られる。身舎部分と庇あるいは縁の部分で柱穴と柱痕跡に規模の違いは見られない。

SB 2 掘立柱建物跡

調査区北部のＧ～Ｉ－10～14グリッドで確認した。SB３・４・５掘立柱建物跡と重複し、SB１掘立柱建物跡の東に隣接する。ＳＢ３・４掘立柱建物跡より古い。ＳＢ５掘立柱建物跡とは位置的に重複しているが、直接柱穴の重複がないため新旧関係は不明である。東西１間以上（総長2.5m以上）、南北４間（総長約9.8m）の身舎部分の南面及び北面に各々１間（柱間各々0.85m）の庇あるいは縁がつく東西棟であると考えられる。東側は後世の耕作等による削平で本遺構を構成する柱穴を確認できなかったものと考えられる。梁行柱列方向はＮ－０°－Ｅでほぼ真北を向く。南北に幅0.85mの庇あるいは縁が付く。柱穴は一辺35～60cmの方形を基調としたものと径25～40cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。身舎部分と庇あるいは縁の部分で柱穴と柱痕跡に規模の違いは見られない。

SB 3 掘立柱建物跡

調査区北部のＧ・Ｈ－10～14グリッドで確認した。SB２・４・５掘立柱建物跡と重複し、SB１掘立柱建物跡の東に隣接する。SB２掘立柱建物跡より新しく、SB４掘立柱建物跡より古い。SB５掘立柱建物跡とは位置的に重複しているが、直接柱穴の重複がないため新旧関係は不明である。東西４間以上（総長9.8m以上）、南北４間（総長



No.	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含む、粘性ややあり
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を含む
3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含み、炭化物、焼土、土器片を多く含む、粘性ややあり
4	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	黄褐色土、焼土ブロック、炭化物を含む、粘性ややあり
5	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
6	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、やや少ない、土器片を含む、粘性ややあり
7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、やや多く含む、土器片を含む、粘性ややあり
8	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、にぶい黄橙色土を含む、粘性ややあり
9	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含む、粘性ややあり
10	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
11	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を多く含む、粘性ややあり
12	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む、粘性ややあり
13	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	土器片を含む、粘性ややあり
14	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を小ブロック状に含む、炭化物を含む、粘性ややあり
15	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を小ブロック状に含む、炭化物を含む、粘性ややあり
16	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR5/2）土を下方に含む、粘性ややあり
17	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR6/2）土を多く含み、酸化鉄を含む、粘性ややあり
18	灰黄褐色（10YR6/2）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR4/2）土を小ブロック状に含む、粘性ややあり
19	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR6/2）粘土質シルトを小ブロック状に含む

No.	土　色	土 性	備　考
20	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含む、粘性ややあり
21	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトを含み、炭化物を含む、粘性ややあり
22	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含み、焼土を含む、粘性ややあり
23	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含み、炭化物を少量含む、粘性ややあり
24	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	焼土を多く含む、粘性ややあり
25	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含む、粘性ややあり
26	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を含む、粘性ややあり
27	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を少量含む、粘性ややあり
28	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含む、粘性ややあり
29	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を含む、粘性あり
30	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含む、炭化物を含む、粘性ややあり
31	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	ややにぶい黄褐色土を多く含み、炭化物を含む
32	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を多く含む、粘性ややあり
33	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	焼土を少量含む、粘性ややあり
34	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を少量含む、炭化物を含む、粘性ややあり

第174図　II・III区　掘立柱建物跡（1）

約9.3m）の身舎部分の南面及び北面に各々１間（柱間は南側で1.1m、北側で幅1.2m）の庇あるいは縁がつく東西棟であると考えられる。東側は後世の耕作等による削平で本遺構を構成する柱穴を確認できなかったものと考えられる。梁行柱列方向はＮ－０°－Ｅでほぼ真北を向く。柱穴は径35～60cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形のものである。身舎部分と庇あるいは縁の部分で柱穴と柱痕跡に規模の違いは見られない。

SB４掘立柱建物跡

調査区北部のＧ・Ｈ－11～14グリッドで確認した。SB２・３・５掘立柱建物跡と重複し、SB１掘立柱建物跡の東に隣接する。SB２・３掘立柱建物跡より新しく、SB５掘立柱建物跡とは位置的に重複しているが、直接柱穴の重複がないため新旧関係は不明である。南北５間（総長約10.2m）を確認したが、SB２・３掘立柱建物跡と同様の東西棟であると考えられる。東側は後世の耕作等による削平で本遺構を構成する柱穴を確認できなかったものと考えられる。柱列方向はＮ－０°－Ｅでほぼ真北を向く。南北に幅1.4mの庇あるいは縁が付くものと考えられる。柱穴は径25～40cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。身舎部分と庇あるいは縁の部分で柱穴と柱痕跡に規模の違いは見られない。

SB５掘立柱建物跡

調査区北部のＧ・Ｈ－11～13グリッドで確認した。SB２・３・４掘立柱建物跡と重複している。直接柱穴の重複がないため新旧関係は不明である。南北２間（総長約3.7m）、東西１間以上（総長1.8m以上）の東西棟であると考えられる。東側は後世の耕作等による削平で本遺構を構成する柱穴を確認できなかったものと考えられる。梁行柱列方向はＮ－４°－Ｗである。柱穴は径30～50cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～15cmの円形のものである。

SB６掘立柱建物跡

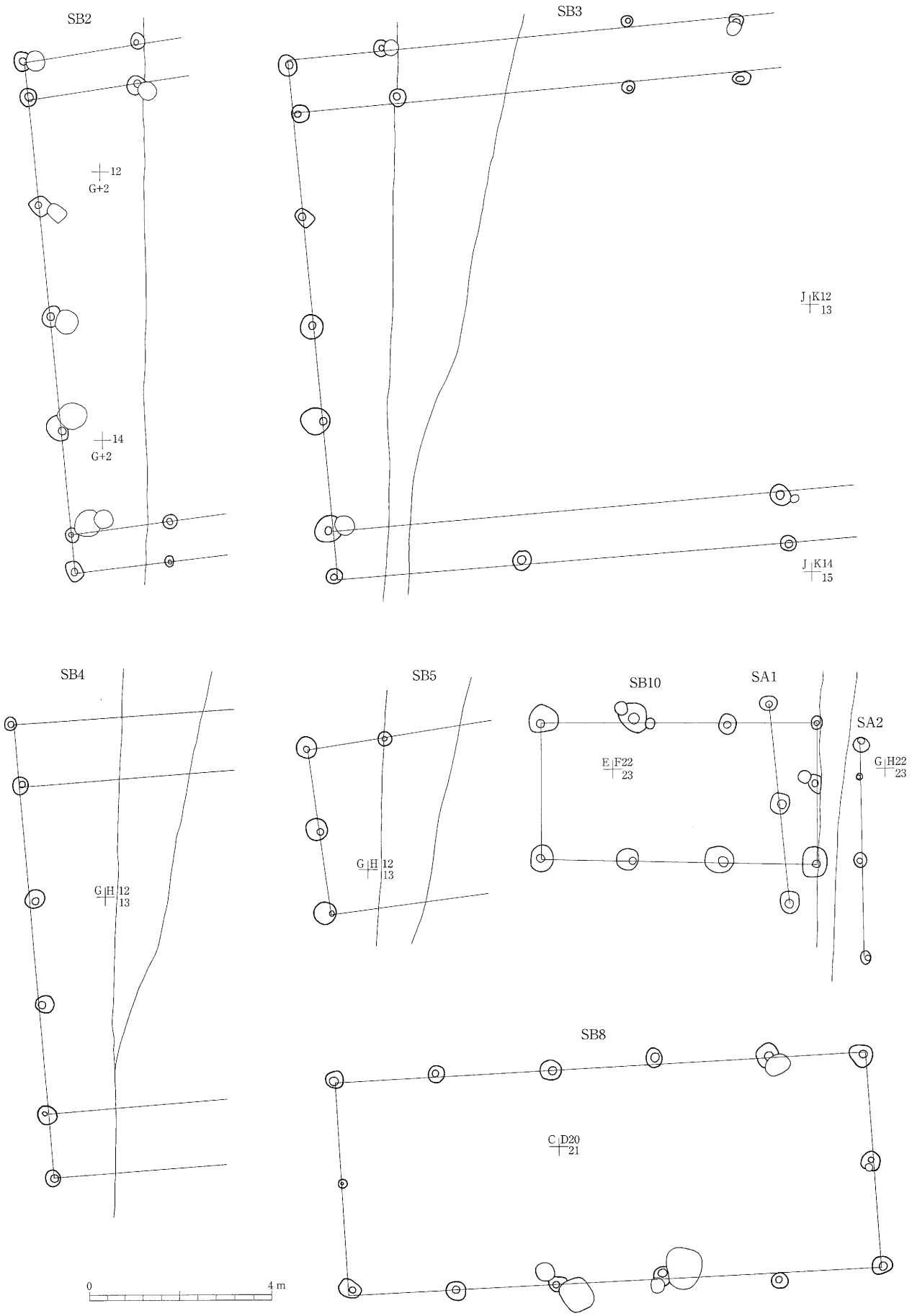
調査区中央部のＣ～Ｈ－19～21グリッドで確認した。SB７・８・９掘立柱建物跡と重複している。本遺構がもっとも新しい。東西６間（総長約15.4m）、南北３間（総長約7.6m）の東西棟である。桁行柱列方向はＥ－５°－Ｎである。柱穴は一辺45～60cmの方形を基調としたものと径35～60cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形のものである。柱穴のなかには古銭（永楽通宝）を出土したものがある。

SB７掘立柱建物跡

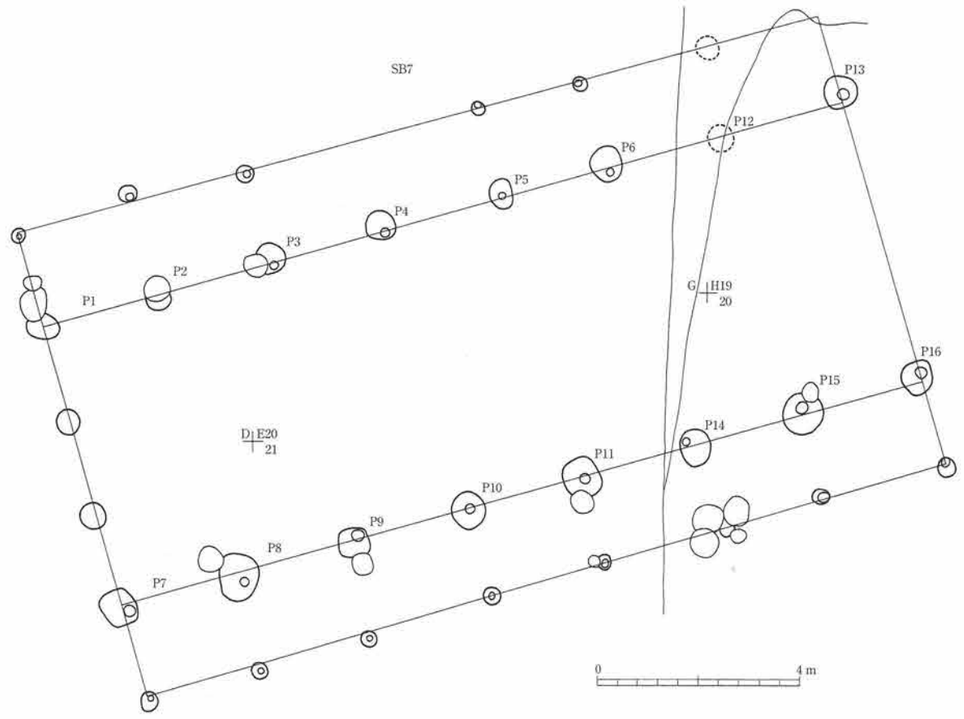
調査区中央部のＣ～Ｉ－18～22グリッドで確認した。SB６・８・９掘立柱建物跡と重複している。SB６掘立柱建物跡より古く、SB８・９掘立柱建物跡より新しい。桁行東西７間（総長約16.4m）、梁行南北３間（総長約６m）の身舎部分の南面および北面に各々１間（柱間約1.8m）の庇あるいは縁がつく東西棟である。桁行柱列方向はＥ－11°－Ｎである。身舎部分の柱穴は一辺60～80cmの方形を基調としたものと径40～80cmの円形を基調としたもので、庇あるいは縁の柱穴は径25～35cmの円形を基調としたものであり、身舎部分の柱穴の規模が庇あるいは縁の柱穴より大きい。柱穴の深さは20～60cmで身舎部分と庇あるいは縁の柱穴の深さは変わらない。柱痕跡が確認されなかった柱穴もあるが身舎部分の柱痕跡は直径15～25cmの円形のもので、庇あるいは縁の柱痕跡が直径10～20cmと、身舎部分の柱痕跡が大きい。また、身舎部分の柱穴には砂を掘り方の埋土としているものがある。

SB８掘立柱建物跡

調査区中央部のＢ～Ｆ－20～21グリッドで確認した。SB６・７・９掘立柱建物跡と重複している。SB６・７掘立柱建物跡より古く、SB９掘立柱建物跡より新しい。桁行東西５間（総長約11.7m）、梁行南北２間（総長約4.7m）の東西棟である。桁行柱列方向はＥ－３°－Ｓである。柱穴は一辺40～60cmの方形を基調としたものと径25～60cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径20～25cmの円形のもので

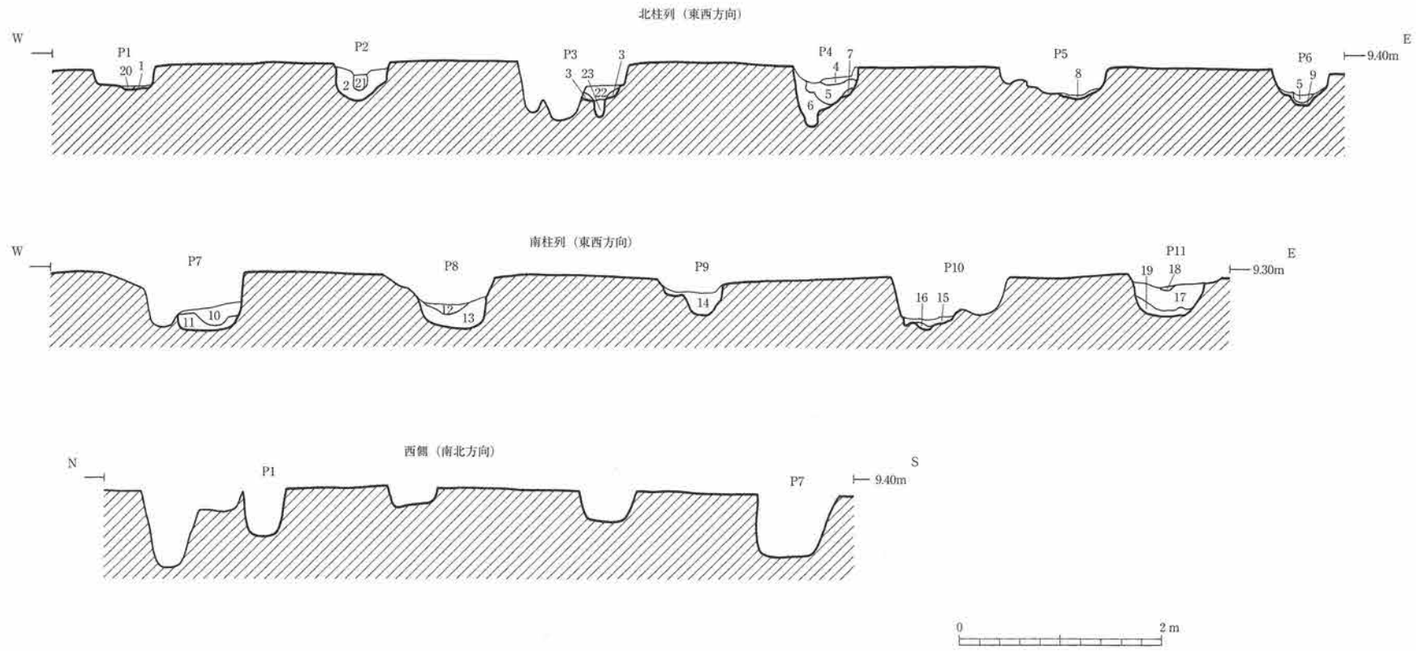


第175図　II・III区　掘立柱建物跡（2）・柱列（1）



No.	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土、砂を含む、粘性ややあり
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、砂を含む、粘性ややあり
3	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、砂を含む、粘性ややあり
4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	砂を含む、粘性ややあり
5	灰黄褐色（10YR5/2）	砂	酸化鉄を含む、粘性ややあり
6	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含む、粘性ややあり
7	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	酸化鉄を含む、粘性ややあり
8	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を含む、粘性ややあり
9	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	砂、酸化鉄を含む、粘性ややあり
10	灰黄褐色（10YR5/2）	砂	小石、土器片を含む
11	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を多く含む、粘性ややあり
12	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	砂を多く含む、下方に酸化鉄の集積、粘性ややあり
13	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、小石、砂を含む、粘性ややあり
14	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、炭化物、砂を含む、粘性ややあり
15	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を含む、粘性ややあり
16	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	炭化物を多<含む
17	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂	小石を含む
18	灰黄褐色	粘土質シルト	砂を含む、粘性ややあり
19	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄褐色土、炭化物を含み、砂を少量含む、粘性ややあり

No.	土　色	土　性	備　考
20	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	砂を多く含む、粘性ややあり
21	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	灰黄褐色土を上部に含み、炭化物、砂を含む、粘性ややあり
22	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質シルト	砂、小石を多く含む、粘性ややあり
23	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	にぶい黄橙色土を、小ブロック状に含む、粘性ややあり



第176図　II・III区　掘立柱建物跡（3）

ある。

SB９掘立柱建物跡

調査区中央部のＣ～Ｊ－18～21グリッドで確認した。SB６・７・８・11・28掘立柱建物跡と重複している。SB11掘立柱建物跡より新しく、他の遺構より古い。桁行東西11間（総長約20.5m）で東側５間分（長さ約10.8m）北側に２間（長さ約2.6m）張り出している。桁行南北２間（総長約4.8m）の身舎部分の南面および北面に各々１間（南面柱間約1.1m、北面柱間約1.4m）の庇あるいは縁がつく東西棟である。庇あるいは縁がつくのは南面で７間（長さ約14.2m）、北面では北側に張り出す部分までの６間（長さ約12m）である。建物の東部は梁行５間（総長約９m）である。桁行柱列方向はＥ－４°－Ｓである。身舎部分には間仕切がある。身舎部分及び東側の柱穴は一辺45～60cmの方形を基調としたものと径35～70cmの円形を基調としたもので、庇あるいは縁の柱穴は径30～65cmの円形を基調としたものであり、身舎部分の柱穴の規模が庇あるいは縁の柱穴より大きいものが多い。身舎部分の柱痕跡は直径15～25cmの円形のもので、庇あるいは縁では柱痕跡が確認されなかった柱穴もあるが柱痕跡の規模は身舎部分のものと変わらない。

SB10掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＥ～Ｇ－22～23グリッドで確認した。SA１柱列と重複しているが直接柱穴の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西３間（総長約6.1m）、梁行南北２間（総長約3.1m）の東西棟である。桁行柱列方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴は一辺50～70cmの方形を基調としたものと径30～65cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～25cmの円形のものである。北西角の柱穴には柱材が残存していた。SB８・９掘立柱建物跡の南に本遺構が平行して位置している。また、本遺構の東側１mにSA２柱列が平行している。

SA１柱列

調査区中央部南寄りのＧ－22～24グリッドで確認した。SB10掘立柱建物跡と重複しており、本遺構が古い。確認した長さは柱穴３基で4.5mである。方向はＮ－０°－Ｅである。柱穴は径40～50cmの楕円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形である。

SA２柱列

調査区中央部南寄りのＧ－22～24グリッドで確認した。確認した長さは柱穴４基で4.8mである。北側の柱間が0.8mと狭い。方向はＮ－４°－Ｅである。柱穴掘り方は径15～35cmの楕円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。

SB11掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＩ・Ｊ－12～23グリッドで確認した。SB９掘立柱建物跡と重複しており、本遺構が古い。桁行南北３間（総長約5.4m）、梁行東西２間（総長約3.6m）の南北棟である。桁行柱列の方向はＮ－５°－Ｅである。柱穴掘り方は一辺30～55cmの隅丸方形を基調としたものと径30～40cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～15cmの円形のものである。北側中央の柱穴には柱材が残存していた。本遺構の西側南半の0.5mにSA３柱列が平行するように位置している。

SA３柱列

調査区中央部南寄りのＩ－22～25グリッドで確認した。確認した長さは柱穴４基で約9.2mである。方向はＮ－３°－Ｅである。柱穴掘り方は径30～40cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15cmの円形のものである。SB11掘立柱建物跡西側南半からSB14掘立柱建物西側まで続いている。

SB12掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＫ・Ｌ－23・24グリッドで確認した。SB13・14掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。東西１間（柱間約3.2m）、南北１間（柱間約3.5m）である。西側柱列の方向はＮ－２°－Ｗである。柱穴掘り方は径30～55cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形のものである。本遺構の南0.5mにSA４柱列が平行するように位置している。

SA４柱列

調査区中央部南寄りのＪ～Ｌ－24グリッドで確認した。調査区外の東側に延びている。SB13・14掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。確認した長さは柱穴４基で約７mである。方向はＥ－４°－Ｎである。柱穴掘り方は径30～40cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。

SB13掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＩ～Ｌ－24・25グリッドで確認した。SB12・14掘立柱建物跡、SA４柱列と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西４間（総長約8.4m）、梁行南北１間（柱間約４m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺40～50cmの隅丸方形を基調としたものと径30～50cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。

SB14掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＩ～Ｌ－24・25グリッドで確認した。東側の調査区外に延びている。SB13・14掘立柱建物跡、SA４柱列と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西４間以上（総長約8.7m以上）、梁行南北３間（総長約5.0m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺40～50cmの隅丸方形を基調としたものと径25～50cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。柱穴の中には柱材、根固め石が残存しているものがある。

SB15掘立柱建物跡

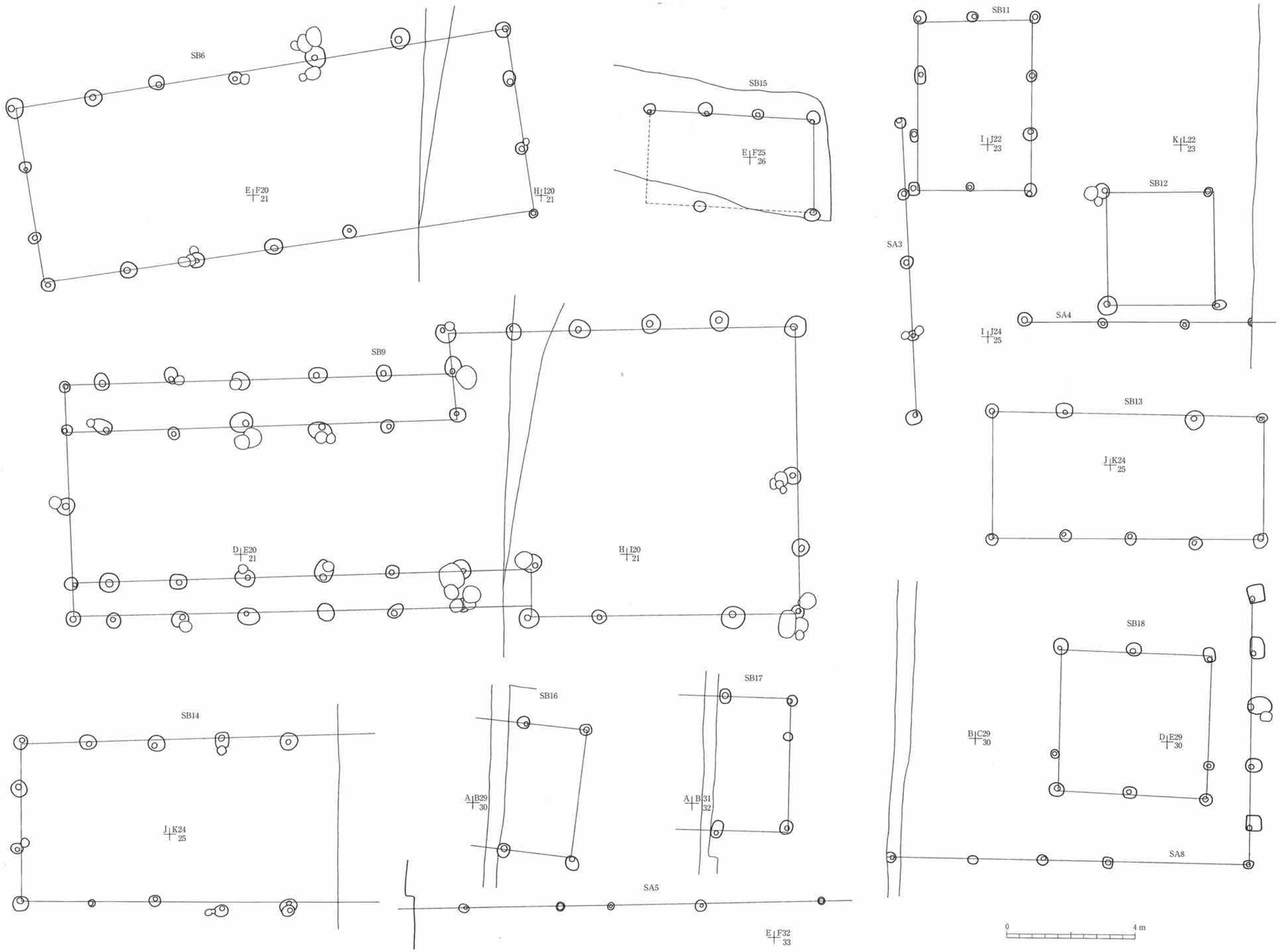
調査区中央部南寄りのＤ～Ｆ－25・26グリッドで確認した。SD４堀跡と重複しており、本遺構が新しいものと考えられるが、重複部分で２個の柱穴しか確認していない。桁行東西３間（総長約7.1m）、梁行南北１間（柱間約2.85m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－８°－Ｓである。柱穴掘り方は径30～45cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10～20cmの円形のものである。

SB16掘立柱建物跡

調査区南部のＢ・Ｃ－29・30グリッドで確認した。西側の調査区外に延びている。桁行東西１間以上（総長約3.0m以上）、梁行南北１間（柱間約4.0m）の東西棟と考えられる。桁行柱列の方向はＥ－10°－Ｓである。柱穴掘り方は径30～50cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形のものである。

SB17掘立柱建物跡

調査区南部のＢ・Ｃ－30～32グリッドで確認した。西側の調査区外に延びている。SK４土坑と重複しており、本遺構が新しい。桁行東西１間以上（総長約2.8m以上）、梁行南北１間（柱間約4.0m）の東西棟と考えられる。桁行柱列の方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺30～50cmの隅丸方形を基調としたものと径30～40cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径15～20cmの円形のものである。



第177図　II・III区　掘立柱建物跡（4）・柱列（2）

SB18掘立柱建物跡

調査区南部のＢ・Ｃ－30～32グリッドで確認した。SD４堀跡、SB19掘立柱建物跡と重複しており、SD４堀跡より新しいが、SB19掘立柱建物跡とは柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西２間（総長約4.7m）、梁行南北２間（総長約4.4m）の東西棟である。梁行の柱間は北が3.1m、南が1.3mと北側が広い。桁行柱列の方向はＥ－６°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺25～45cmの隅丸方形を基調としたものと径25～45cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径13～18cmの円形のものである。

SB19掘立柱建物跡

調査区南部のＢ・Ｃ－30～32グリッドで確認した。ＳＢ18掘立柱建物跡と重複しているが、SB19掘立柱建物跡とは柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西２間（総長約5.0m）、梁行南北２間（総長約4.4m）の東西棟である。重複するSB18掘立柱建物跡と同様梁行の柱間は北が2.85m、南が1.45mと北側が広い。桁行柱列の方向はＥ－７°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺30～35cmの隅丸方形を基調としたものと径30～45cmの円形を基調としたものがある。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～15cmの円形のものである。本遺構およびSB16・18掘立柱建物跡を囲むように、東側１mから南側２mの位置に逆Ｌ字形にSA８柱列が配置されている。

SA８柱列

調査区南部のＢ～Ｅ－28～31グリッドで確認した。調査区外の西側に延びている。SD４堀跡、SB17・20・21掘立柱建物跡と重複している。SD４堀跡より新しいが、他の掘立柱建物跡は柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。SB16・18・19掘立柱建物跡を囲むような逆Ｌ字形である。東側の南北方向の柱列は柱穴６基で約8.3m、方向はＮ－４°－Ｅである。南側の柱列は柱穴４基で約11mであるが、更に西側へ延びるものと考えられる。方向はＥ－４°－Ｎである。柱穴掘り方は一辺45～70cmの隅丸方形を基調としたものと径30～50cmの円形を基調としたものがある。南北方向の柱列の柱穴掘り方が東西方向の柱列の柱穴掘り方より規模が大きい。柱痕跡が確認されたものは直径12～18cmの円形のものである。中には柱材が残存するもの、根固石が残存するものがある。

SB20掘立柱建物跡

調査区南部のＥ・Ｆ－28～31グリッドで確認した。SB21掘立柱建物跡、SA８柱列と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行南北４間（総長約6.6m）、梁行東西２間（総長約3.8m）の南北棟である。桁行柱列の方向はＥ－７°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺20～50cmの隅丸方形を基調としたものと径25～45cmの円形を基調としたものがある。柱痕跡が確認されたものは直径15～25cmの円形のものである。

SB21掘立柱建物跡

調査区南部のＥ・Ｆ－28～31グリッドで確認した。SD４堀跡、SB20掘立柱建物跡、SA８柱列と重複しており、SD４堀跡より新しいが、SB20掘立柱建物跡、SA８柱列とは柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行南北４間（総長約7.75m）、梁行東西２間（総長約3.8m）の南北棟である。桁行柱列の方向はＮ－７°－Ｅである。北東角の柱穴は確認できなかったが、柱穴掘り方は一辺30～50cmの隅丸方形を基調としたものと径20～45cmの円形を基調としたものがある。柱痕跡が確認されたものは直径13～20cmの円形のものである。

SA５柱列

調査区南部のＢ～Ｆ－32グリッドで確認した。SK８・３土坑と重複しているが、直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。確認した長さは柱穴５基で約10.1mであるが、さらに西側へ延びているものと考えられる。方向はＥ－４°－Ｓである。柱穴掘り方は径20～35cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10～15cmの円形のものである。本遺構はSB16～21掘立柱建物跡の南面に位置し、SD３堀跡に沿っている。

SB22掘立柱建物跡

調査区南部のＩ・Ｊ－30グリッドで確認した。SB25掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。南北１間（柱間約2.0m）、東西１間（柱間約1.6m）の南北棟である。西側柱列の方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴掘り方は径30～45cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～15cmの円形のものである。

SB23掘立柱建物跡

調査区南部のＪ～Ｌ－29・30グリッドで確認した。調査区外の東側に延びている。SB24・25掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西２間以上（総長約5.5m以上）、梁行南北３間（総長約4.8m）の東西棟であると考えられる。桁行柱列の方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴掘り方は径25～45cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。

SB24掘立柱建物跡

調査区南部のＫ・Ｌ－29・30グリッドで確認した。調査区外の東側に延びている。SB23・25掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西１間以上（総長約4.5m以上）、梁行南北３間（総長約5.0m）の東西棟であると考えられる。桁行柱列の方向はＥ－４°－Ｓである。柱穴掘り方は径20～50cmの円形を基調としたものである。全ての柱穴で柱痕跡が確認された。柱痕跡は直径10～20cmの円形のものである。

SB25掘立柱建物跡

調査区南部のＫ・Ｌ－28～30グリッドで確認した。調査区外の東側に延びている。SB22・23・24掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西４間以上（総長約10.8m以上）、梁行南北３間（総長約4.5m）の東西棟であると考えられる。桁行柱列の方向はＥ－６°－Ｓである。柱穴掘り方は径20～60cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10～15cmの円形のものである。

SB26掘立柱建物跡

調査区南部のＩ～Ｋ－31・32グリッドで確認した。桁行東西３間（総長約5.85m）、梁行南北１間（柱間約3.1m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－８°－Ｓである。柱穴掘り方は径20～40cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10～15cmの円形のものである。

SA６柱列

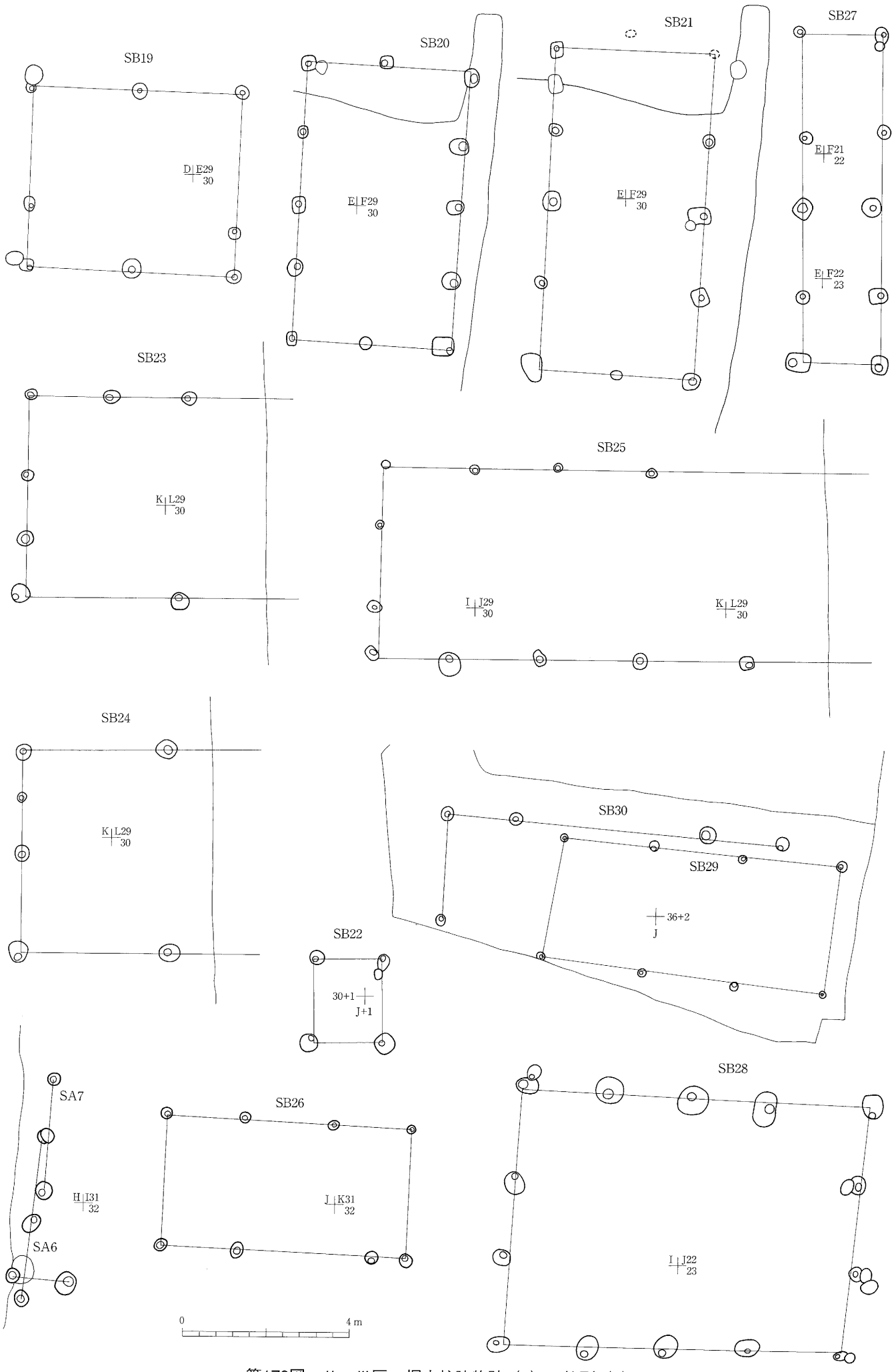
調査区南部のＨ－31・32グリッドで確認した。SA７柱列と重複しており、本遺構が古い。確認した長さは柱穴３基で約4.0mであるが、さらに南側へ延び、SD３堀跡と重複している可能性も考えられる。方向はＮ－12°－Ｅである。柱穴掘り方は径35～50cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径15cmの円形のものである。また、南側に1.35mの間隔で２基の柱穴を確認した。本遺構と直交しており、関連するものである可能性がある。

SA７柱列

調査区南部のＨ－31グリッドで確認した。SA６柱列と重複しており、本遺構が新しい。確認した長さは柱穴３基で約2.7mである。方向はＮ－８°－Ｅである。柱穴掘り方は径39～40cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径15～18cmの円形のものである。

SB27掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＥ・Ｆ－21～23グリッドで確認した。SB６・７・８・９・10掘立柱建物跡と重複してい



第178図　II・III区　掘立柱建物跡（5）・柱列（3）

るが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行南北４間（総長約8.0m）、梁行東西１間（柱間約2.0m）の南北棟である。桁行柱列の方向はＮ－３°－Ｅである。柱穴掘り方は一辺35～60cmの隅丸方形を基調としたものと径25～40cmの円形を基調としたものがある。柱痕跡が確認されたものは直径10～20cmの円形のものである。中には根固石が残存するものがある。

SB28掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＨ～Ｋ－21～23グリッドで確認した。SB９・11・12掘立柱建物跡、SA３柱列と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西４間（総長約4.35m）、梁行南北３間（総長約6.3m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－５°－Ｓである。柱穴掘り方は一辺30～85cmの隅丸方形を基調としたものと径20～70cmの円形を基調としたものがある。柱痕跡が確認されたものは直径10～22cmの円形のものである。中には柱材が残存するもの、根固石が残存するものがある。

SB29掘立柱建物跡

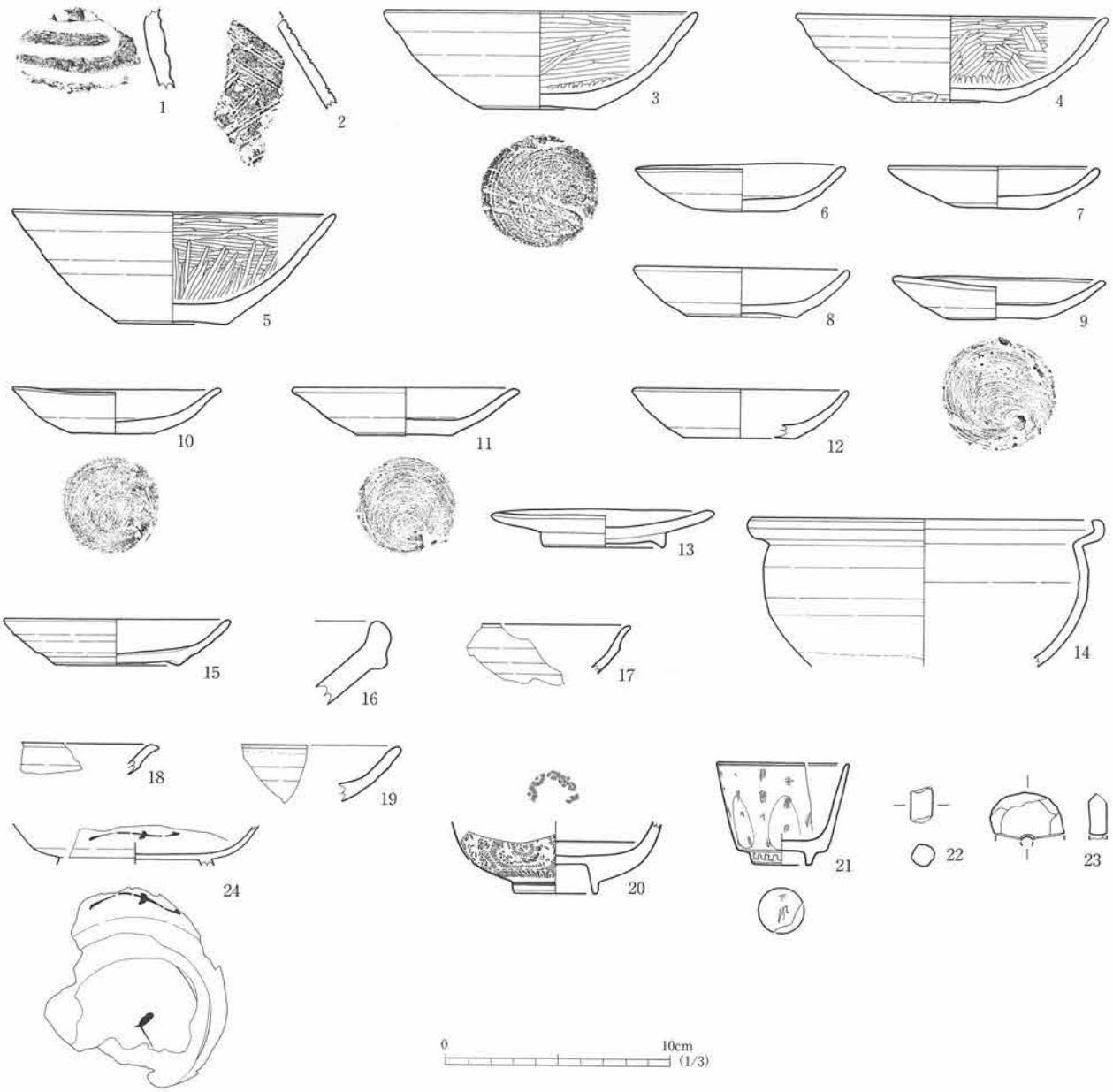
調査区中央部南寄りのＩ～Ｋ－36・37グリッドで確認した。SB30掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西３間（総長約6.75m）、梁行南北１間（柱間約3.1m）の東西棟である。桁行柱列の方向はＥ－10°－Ｓである。柱穴掘り方は径15～25cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10cmの円形のものである。

SB30掘立柱建物跡

調査区中央部南寄りのＨ～Ｊ－35・36グリッドで確認した。SB29掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の直接の重複関係がないため、新旧関係は不明である。桁行東西３間（総長約8.0m）、梁行南北１間（総長約2.5m）の東西棟であるが、東及び南の柱列は確認していない。南側の調査区外に延びる可能性も考えられる。桁行柱列の方向はＥ－９°－Ｓである。柱穴掘り方は径25～40cmの円形を基調としたものである。柱痕跡が確認されたものは直径10～15cmの円形のものである。

遺構外出土遺物

Ⅱ・Ⅲ区の古代以降の各層の遺構に属さない基本層出土遺物および側溝、表土出土遺物のうちの主なものを図示する。出土遺構の不明な遺物についてもここで図示する。



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区西 P391	縄文土器・深鉢	沈線文・刺突文	ナデ		334-5	A-5
2	Ⅱ区西 P401	弥生土器・壺	重菱形文（二本一描沈線）	ナデ		336-19	B-54

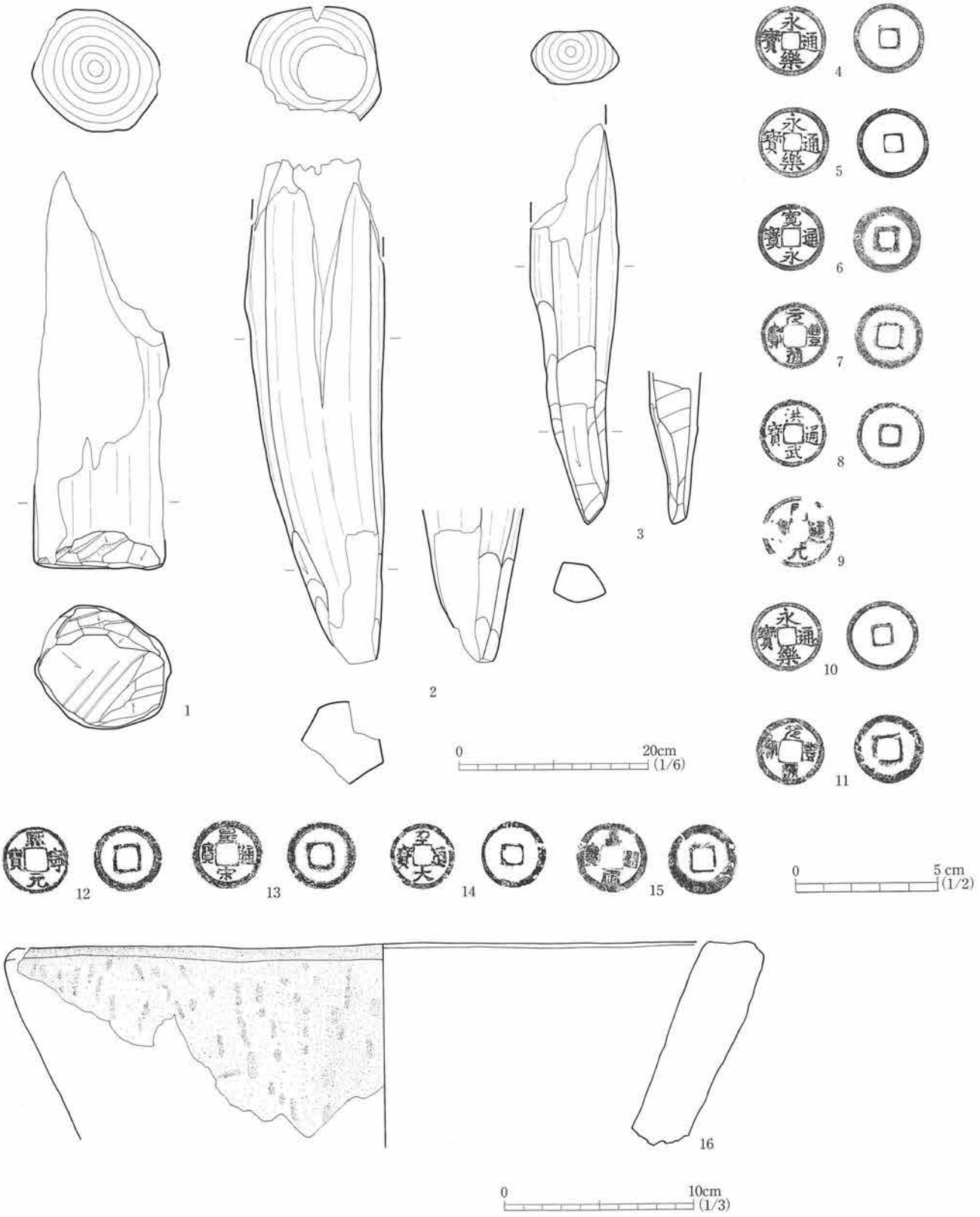
No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
3	Ⅱ区東P1	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-2	D-31
4	Ⅱ区東P2	土師器・坏	ロクロナデ・ケズリ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理			D-37
5	Ⅱ区西 P412	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		341-7	D-68

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
6	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	皿	胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.4	4.0	2.1	343-9	Ca-2
7	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	皿	胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.3	3.8	1.9	343-12	Ca-5
8	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.3	4.2	2.2	343-10	Ca-3
9	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.2	3.8	1.9	343-11	Ca-4
10	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.8	4.2	2.2	343-8	Ca-1
11	Ⅱ区東Ⅵ層上面	土師質土器	皿	底部回転糸切り、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.6	5.0	2.2	344-2	Ca-11
12	Ⅱ区東Ⅵ層上面	土師質土器	皿	胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	9.6	5.0	2.3	344-8	Ca-17
13	Ⅱ・Ⅲ区東P410	土師質土器	高台付皿	赤焼土器？（古代？）			10.0	5.3	1.7		Ca-21
14	Ⅱ・Ⅲ区東P1	陶器	土鍋	鉄釉	不明	19C後半	16		(6.7)	367-10	I-378
15	Ⅱ・Ⅲ区東P1	陶器	丸皿	灰釉、高台畳に輪トチンの痕、面面施釉、大窯Ⅱ b 期	瀬戸美濃	16C後半	10	5.5	1.8	367-11	I-379
16	Ⅱ・Ⅲ区東P1	陶器	擂鉢	内外面鉄釉	堤	19C後半				367-15	I-386
17	Pit 42、58	陶器	端反皿	灰釉、大窯Ⅰa期	瀬戸美濃	15C末~16C前半				367-14	I-385
18	Pit4	陶器	端反皿	灰釉、漆つぎ、大窯Ⅰ期	瀬戸美濃	16C前半					I-388
19	Pit208	陶器	緑釉小皿	口縁部灰釉	瀬戸	15C後半				367-12	I-382
20	Ⅱ・Ⅲ区東P1	磁器	碗	染付、描絵（見込みに描絵で環状の松竹梅）	瀬戸美濃	19C後半		3.7	3.3	376-6	J-83
21	Ⅱ・Ⅲ区東P1	磁器	小坏	染付、外面：文字文	瀬戸美濃	19C中頃	6.0	2.5	4.6	376-5	J-82

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
22	Ⅱ・Ⅲ区 東P276	棒状土製品		(1.6)	(1.0)		(1.3)	380-7	P-8
23	Ⅱ・Ⅲ区 東P218	土製円盤	ミガキ	(2.15)	3.0	0.8	5.5	379-5	P-7

No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
24	Ⅱ・Ⅲ区 東P411	漆器 椀	外面黒色漆の上で赤色漆で文様有、内面赤色漆塗仕上げ、木質部の劣化が著しい、器高（1.8）cm		389-2	La-63

第179図　ピット出土遺物（1）



No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区東 P11	柱材	柱痕、下端部に加工痕有、全長（42.3）cm 幅・径14.0cm	クリ	406-2	Lc-84
2	Ⅱ区東 P26	柱材	柱痕、下端部に加工痕有、中は空洞になっている、全長（53.7）cm 幅・径14.7cm	クリ	406-3	Lc-85
3	Ⅱ区東 P6	柱材	柱痕、下端部に加工痕有、全長（42.2）cm 幅・径9.0cm	クリ	406-1	Lc-83

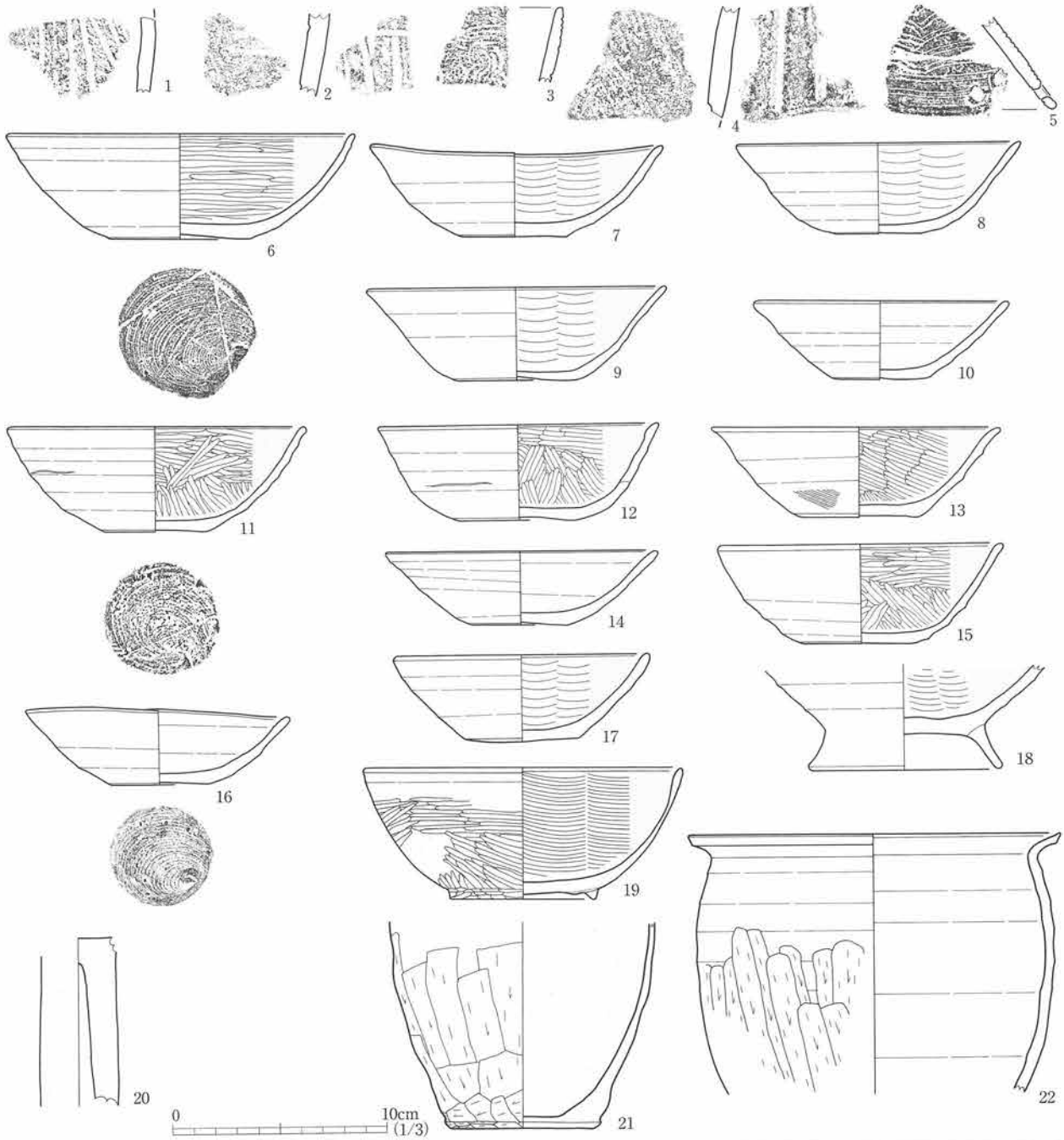
No.	遺構・層位	種別	特徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
4	Ⅱ区東 P1	銅製品 銭貨	永楽通宝（明）（初鋳年 1408年）	2.5	3.2	431-12	Na-49
5	Ⅱ区東 P2	銅製品 銭貨	永楽通宝（明）（初鋳年 1408年）	2.5	2.45	429-13	Na-50
6	Ⅱ区東 P2	銅製品 銭貨	（古）寛永通宝	2.4	2.8	432-2	Na-57
7	Ⅱ区東 Pit	銅製品 銭貨	洪武通宝（明）	2.3	2.6	432-5	Na-60
8	Ⅱ区東 Pit	銅製品 銭貨	元豊通宝（北宋）（初鋳年 1078年）	2.4	2.4	432-4	Na-59
9	Ⅱ区東 P3	銅製品 銭貨	開元通宝？（唐）（初鋳年 621年）	2.5	0.75		Na-62
10	Ⅱ区西 Pit	銅製品 銭貨	永楽通宝（明）（初鋳年 1408年）	2.5	3.0	429-10	Na-10
11	Ⅱ区西 Pit	銅製品 銭貨	北豊通宝（北宋）（初鋳年 1078年）	2.4	2.05	429-12	Na-12
12	Ⅱ区西 P628	銅製品 銭貨	熙寧通宝（北宋）（初鋳年 1068年）	2.4	2.65	429-15	Na-15
13	Ⅱ区西 Pit	銅製品 銭貨	皇宋通宝（北宋）（初鋳年 1039年）	2.5	3.6	429-16	Na-16
14	Ⅱ区西 P630	銅製品 銭貨	至大通宝（元）（初鋳年 1310年）	2.3	2.75	430-2	Na-20
15	Ⅱ区西 P1	銅製品 銭貨		2.5	2.3	429-11	Na-11

No.	遺構・層位	種別	径（cm）	高さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
16	Ⅱ区東 P5	石鉢	（38.3）	（10.3）	1425	石質凝灰岩		424-7	Kd-40

第180図 ピット出土遺物（2）

No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区　Pit	小玉	0.4	0.4	0.4	0.1	ガラス玉		422-1	Kd-1
2	Ⅲ層　Pit2	砥石	4.6	2.4	2.6	21.8	デイサイト質凝灰岩		425-12	Kd-62
3	Ⅱ区　P128	有孔円板	4.3	3.1	1	16	デイサイト質凝灰岩		428-21	Kd-183
4	Ⅱ区東　P5	砥石	8.2	3.7	3.5	130	デイサイト質凝灰岩		426-9	Kd-75
5	Ⅱ区東　P1	砥石	5.9	4.6	3.3	120	デイサイト質砂岩		426-10	Kd-76
6	Ⅱ区東　P129	砥石	8	3.9	2.5	102	デイサイト質凝灰岩		426-11	Kd-77
7	Ⅱ区　P147	砥石	5.2	4.3	4.7	156	デイサイト質凝灰岩		426-7	Kd-72
8	Ⅱ区　P3	砥石	11.3	4.4	2.2	154	デイサイト質凝灰岩		426-8	Kd-74
9	Ⅱ区東　P2	砥石	7.4	2.8	2.1	65	デイサイト質凝灰岩		428-19	Kd-175
10	Ⅱ区　P3	砥石	6	3.6	2	40	デイサイト質凝灰岩		428-20	Kd-180
11	Ⅱ区　P144	砥石	9.8	4.1	2.1	106	デイサイト質凝灰岩		428-18	Kd-174
12	Ⅱ区　P413	砥石	18.8	7.5	3.7	400	珪化木		421-1	Kc-38

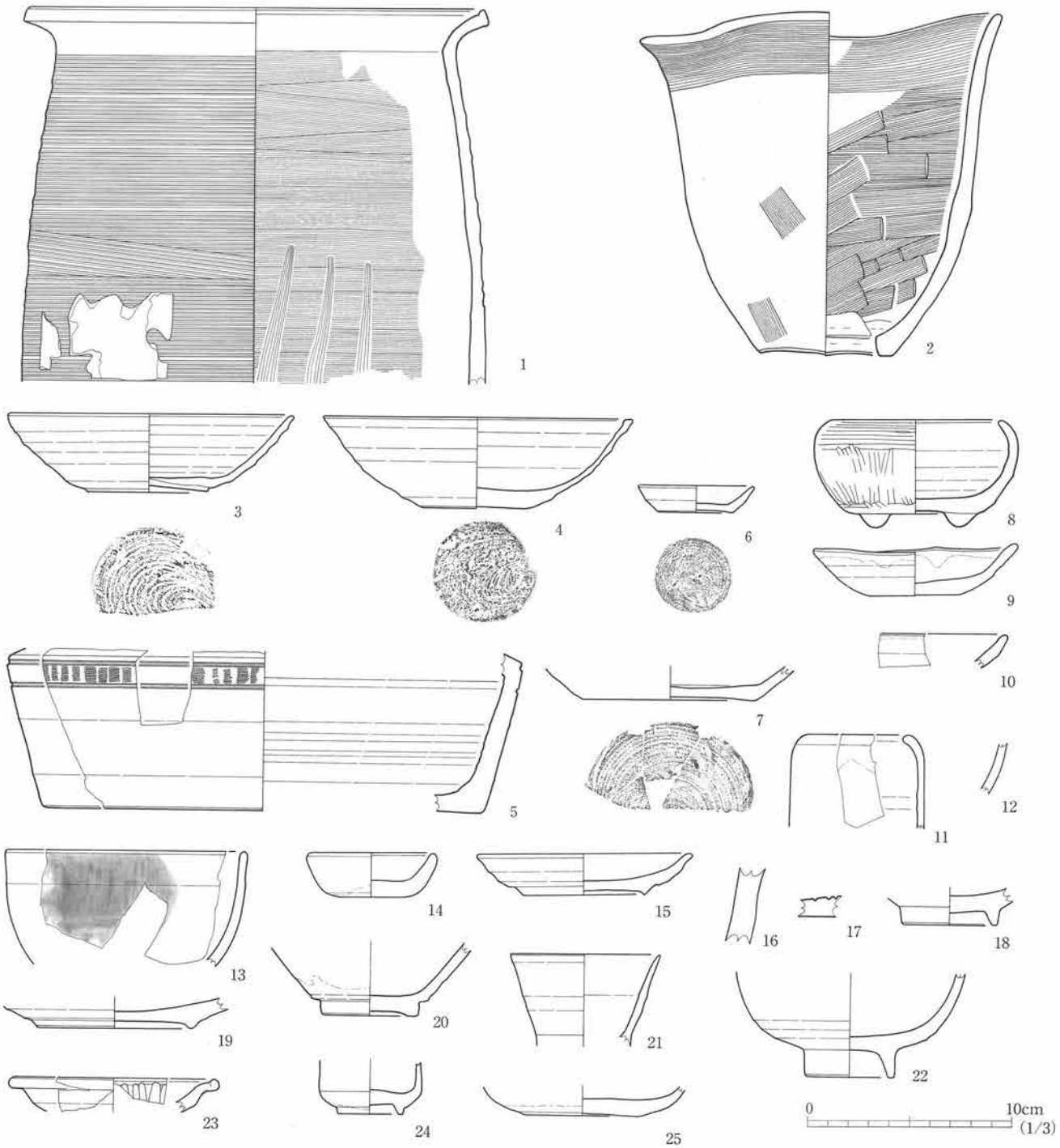
第181図　ピット出土遺物（3）



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区北西　表土	縄文土器・深鉢	沈線文	ミガキ		334-7	A-7
2	Ⅱ区東　西側溝	縄文土器・深鉢	マメツ	沈線文		334-8	A-8
3	Ⅱ区西　掘堆積土中	縄文土器・深鉢	沈線文・不明縄文	ナデ		334-9	A-9
4	Ⅱ区西　掘堆積土	縄文土器・深鉢	撚糸文	沈線文		334-10	A-10
5	表土	弥生土器・蓋	連弧文（二本一描沈線）・貫通孔	ナデ		336-6	B-41

No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
6	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		339-13	D-29
7	Ⅱ区東Ⅲ層	土師器・坏	ロクロナデ	ナデ	ミガキ・黒色処理		340-1	D-30
8	Ⅱ区東Ⅲ層	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-3	D-32
9	Ⅱ区東Ⅲ層上面	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-4	D-33
10	Ⅱ区東Ⅲ層	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		340-5	D-34
11	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-6	D-35
12	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-7	D-38
13	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ・ナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-8	D-39
14	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ・ナデ	回転糸切り	ロクロナデ		340-9	D-40
15	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ		ミガキ・黒色処理		340-10	D-41
16	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		340-11	D-42
17	Ⅱ区東　表土	土師器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理		340-12	D-43
18	Ⅱ区東Ⅱ層中	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ナデ	ミガキ・黒色処理		341-12	D-44
19	遺構検出面	土師器・高台付坏	ロクロナデ・ミガキ	高台付・ナデ	ミガキ・黒色処理		341-8	D-69
20	東側溝	土師器・高坏	マメツ	マメツ	脚部			C-39
21	Ⅱ区W　検出面	土師器・甕	ケズリ	マメツ			338-9	C-37
22	Ⅱ区東　表土	土師器・甕	ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ			D-36

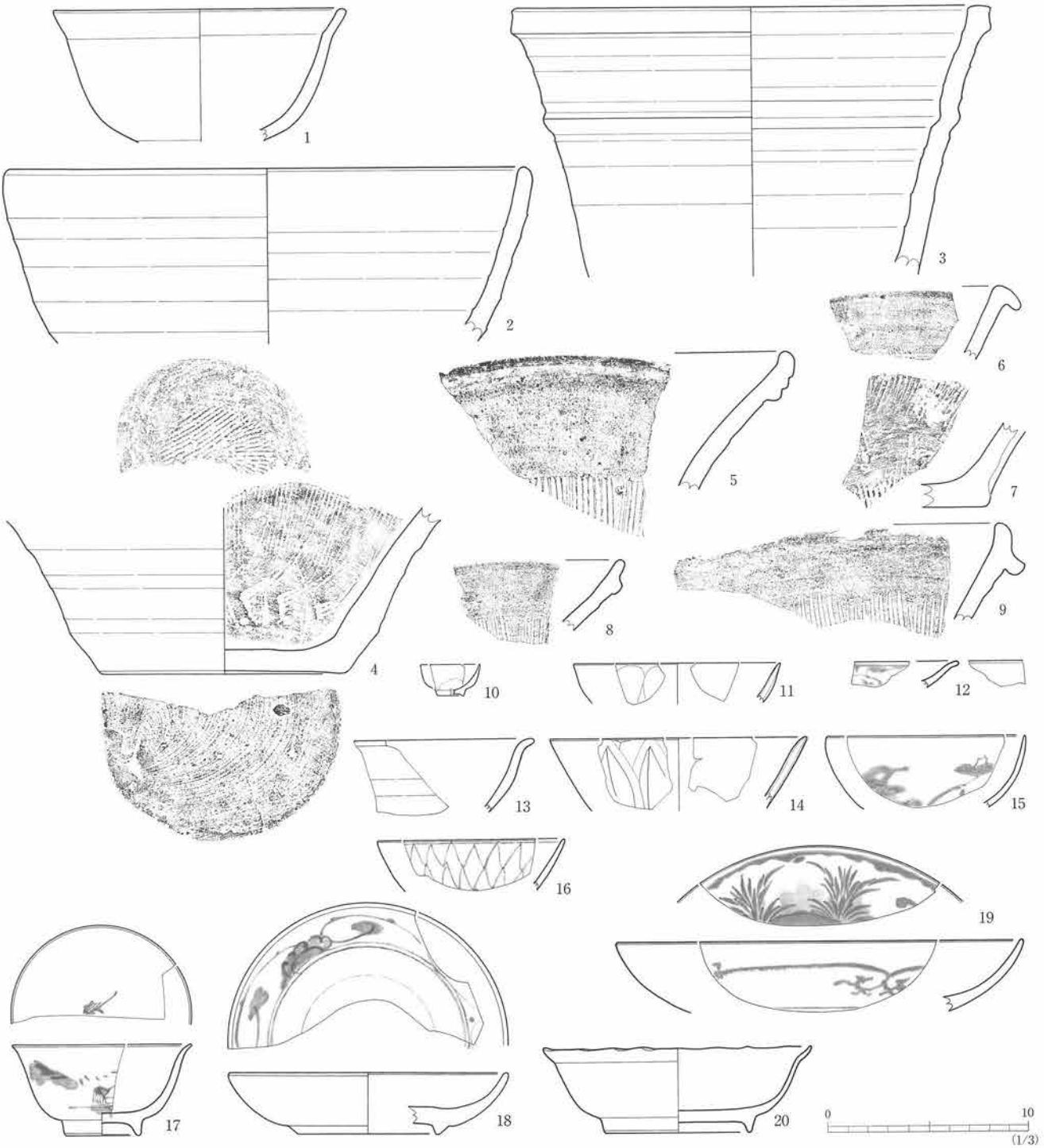
第182図　遺構外出土遺物（2）



No.	遺構・層位	種別・器種	外面	底面	内面	備考	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区東、層上面	土師器・甕	ロクロナデ・ロクロハケメ		ナデ・ヘラナデ	炭化物付着	340-13	D-45
2	Ⅱ区西Ⅲ層中	土師器・甑	ナデ		ナデ・ヘラナデ・ケズリ		337-18	C-38
3	Ⅱ区東Ⅲ層	須恵器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ		342-10	E-12
4	表土	須恵器・坏	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			E-14
5	Ⅱ区西	須恵器・坏	ロクロナデ・ナデ・沈線文・刺突文	ヘラ切り	ロクロナデ		343-3	E-5

No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
6	Ⅱ区東撹乱底面	土師質土器	皿	底部回転糸切り、内外面 口縁部に炭化物付着（灯明皿として使用か？）	在地	江戸時代	5.5	3.7	1.4	344-3	Ca-12
7	Ⅲ区東 表土	土師質土器	皿	底部回転糸切り	在地	江戸時代		8.4	(1.7)	344-4	Ca-13
8	近世整地層	土師質土器	鉢	三脚、外面丁寧な磨き、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代	(8.4)	6.4	(5.3)	344-5	Ca-14
9	Ⅲ層上面	陶器	緑釉小皿	灰釉（口縁部）、底部回転糸切り、古瀬戸	瀬戸	15C後半	9.9	4.5	2.1～2.6	368-4	I-393
10	Ⅱ区西遺構検出面	陶器	緑釉小皿	灰釉（口縁部）	瀬戸	15C後半				368-7	I-398
11	Ⅱ区西遺構検出面	陶器	灰吹き？	鉄釉（二種類）、口縁部は黒色の鉄釉	大堀相馬	19C？	5.0		(4.7)	368-10	I-412
12	Ⅱ区西遺構検出面	陶器	碗	刷毛塗り	猿投	9C				370-2	I-440
13	近世遺構検出面	陶器	碗	灰釉に緑釉流し	美濃	17C中頃	11.9		(5.7)	368-9	I-400
14	近世遺構検出面	陶器	小皿	鉄釉？	岸窯系	17C後半以降	6.1	3.0	2.2	368-10	I-402
15	近世遺構検出面	陶器	小皿	灰釉、全面施釉、目跡	瀬戸美濃	17C前半	10.3	5.9	2.0	368-5	I-395
16	近世整地検出面	陶器			在地					370-16	I-455
17	近世整地検出面	陶器	擂鉢		岸窯	17C					I-456
18	Ⅱ・Ⅲ区東側溝	陶器	碗	総織部	美濃	17C		4.6	(1.9)	367-16	I-389
19	Ⅱ・Ⅲ区東側溝	陶器	皿	長石釉、高台内露胎	美濃	16C末～17C初		7.6	(1.6)	368-1	I-390
20	不明	陶器	天目茶碗	鉄釉、灰被、底部内反り、見込みに茶せんずり	中国	13C～14C		4.4	(3.3)	368-11	I-403
21	Ⅱ・Ⅲ区東 表土	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C	7.3		(4.6)	368-15	I-415
22	Ⅱ・Ⅲ区東 表土	陶器	碗	灰釉	肥前	17C以降		4.4	(5.2)		I-428
23	Ⅱ・Ⅲ区東側溝	陶器	折縁皿	灰釉、丸彫、大窯Ⅴ期。	瀬戸美濃		9.9		(1.7)	368-2	I-391
24	Ⅱ・Ⅲ区東 表土	陶器	小坏	灰釉	大堀相馬	18C以降		3.2	(2.7)	368-13	I-413
25	Ⅱ区東 表土	陶器	皿	鉄釉、古瀬戸	瀬戸	14Cか15C		5.6	(1.5)	369-7	I-426

第183図　遺構外出土遺物（3）



No.	遺構・層位	種　類	器　種	特　　徴	産　地	時　期	法　量			写真図版	登録番号
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
1	Ⅱ区東　表土	陶器	鉢	灰釉	大堀相馬	19C	14.4		(6.7)	368-14	I-414
2	Ⅱ区東　表土	陶器	鉢	灰釉、口縁部に使用痕	堤？	19C？	26.4		(9.8)	368-16	I-416
3	Ⅱ区東　表土	陶器	鉢	鉄釉	堤？	19C	21.8		(13.6)	368-17	I-417
4	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目８条	堤？	19C？		12.2	(8.4)	369-4	I-423
5	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目８条、鉄釉	堤？	19C				369-1	I-420
6	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目５条以上	岸窯系	17C後半以降					I-418
7	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目７条以上、火熱を受けて外面破損及び変色、内面磨耗著しい	岸窯系	17C				368-18	I-419
8	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目６条以上、鉄釉	堤？	18C？				369-2	I-421
9	Ⅱ区東　表土	陶器	擂鉢	擂目８条、鉄釉	堤？	江戸時代				369-3	I-422
10	近世整地層	磁器	紅猪口	内面型打ち（丸形）	肥前	18C前半	3.0	1.3	1.6	376-7	J-84
11	近世整地層	磁器	碗	外面：連弁文、龍泉文	中国	13C後半～14C前半	10.4		(2.1)	377-5	J-102
12	近世整地層	磁器	Ⅲ	染付	中国	15C後半～16C前半				377-7	J-104
13	近世整地層	磁器	碗	龍泉窯系	中国	15C～16C？				377-6	J-103
14	近世遺構検出面	磁器	碗	外面：龍泉窯系	中国	13C後半～14C前半	12.8		(3.6)	377-4	J-101
15	Ⅲ区東　表土	磁器	碗	染付、外面：松樹文、漆つぎ	肥前	17C後半以降	9.9		(3.6)	376-13	J-90
16	Ⅲ区東　表土	磁器	Ⅲ	染付、外面：網目文	肥前	17C後半	9.4		(2.6)	376-9	J-86
17	Ⅲ区東　表土	磁器	碗	染付	瀬戸美濃	19C前半～中	9.0	3.8	4.6	376-14	J-91
18	Ⅲ区東　表土	磁器	Ⅲ	染付、内面：蛇の目釉剥ぎ	肥前	18C	14.0	7.2	3.1	376-11	J-88
19	Ⅲ区東　表土	磁器	Ⅲ	染付	肥前	18C後半	20.4		(3.6)	376-10	J-87
20	Ⅲ区東　表土	磁器	鉢	口縁部に鉄釉、輪花	肥前	19C？	13.4	7.2	4.3	476-12	J-89

第184図　遺構外出土遺物（4）

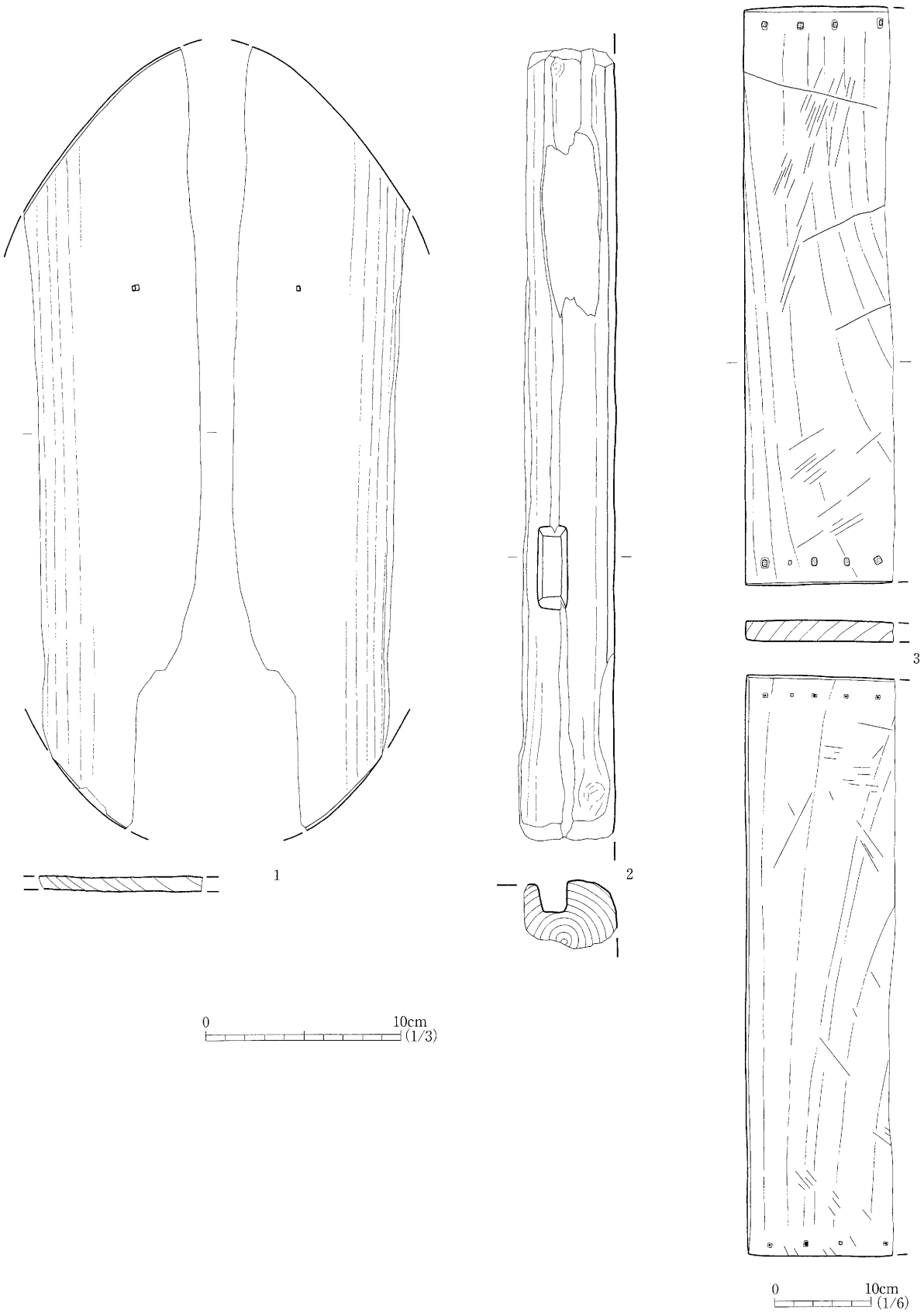
No.	遺構・層位	種類	器種	特徴	産地	時期	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区東 表土	瓦質土器	擂鉢	角頭タイプの口縁、片口	在地	16C代	22.8		(3.7)	378-7	T-15
2	Ⅱ区東 表土	瓦質土器	擂鉢	手焙りの可能性有、内面に炭化物付着、胎土に白色針状物質含む	在地	江戸時代					T-31

No.	遺構・層位	種別	凸面	凹面	備考	写真図版	登録番号
3	近世整地層	軒丸瓦	巴文・瓦当に離れ砂の痕跡あり		燻し瓦		F-21
4	表土	丸瓦	ナデ	布目痕・沈線状圧痕			F-20
5	表土	冠瓦	ナデ	ナデ・沈線状圧痕	玉縁短い	382-1	F-22
6	Ⅱ区 Ⅱ層	平瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦	323-6	G-15

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
7	掘堆積土中	土製円盤	縄文(RL)	3.6	4.2	0.65	13.4	379-4	P-2
8	Ⅱ区 表土	棒状土製品		(2.5)	(1.0)		(2.2)	380-9	P-13
9	Ⅱ区 表土	土錘	マメツ 孔径0.65cm	3.2	1.75		10.8	380-10	P-14
10	Ⅱ区 表土	土錘	ヘラケズリ 孔径0.5cm	4.2	1.1		4.8	380-11	P-15
11	Ⅱ区 表土	土錘	マメツ 孔径0.55cm	5.9	2.5		21	380-12	P-17
12	Ⅱ区東 東側溝	堤人形?	脚				(12.6)	380-18	P-10
13	不明	堤人形	狐?	(5.1)	(5.2)		(21.6)	380-19	P-42

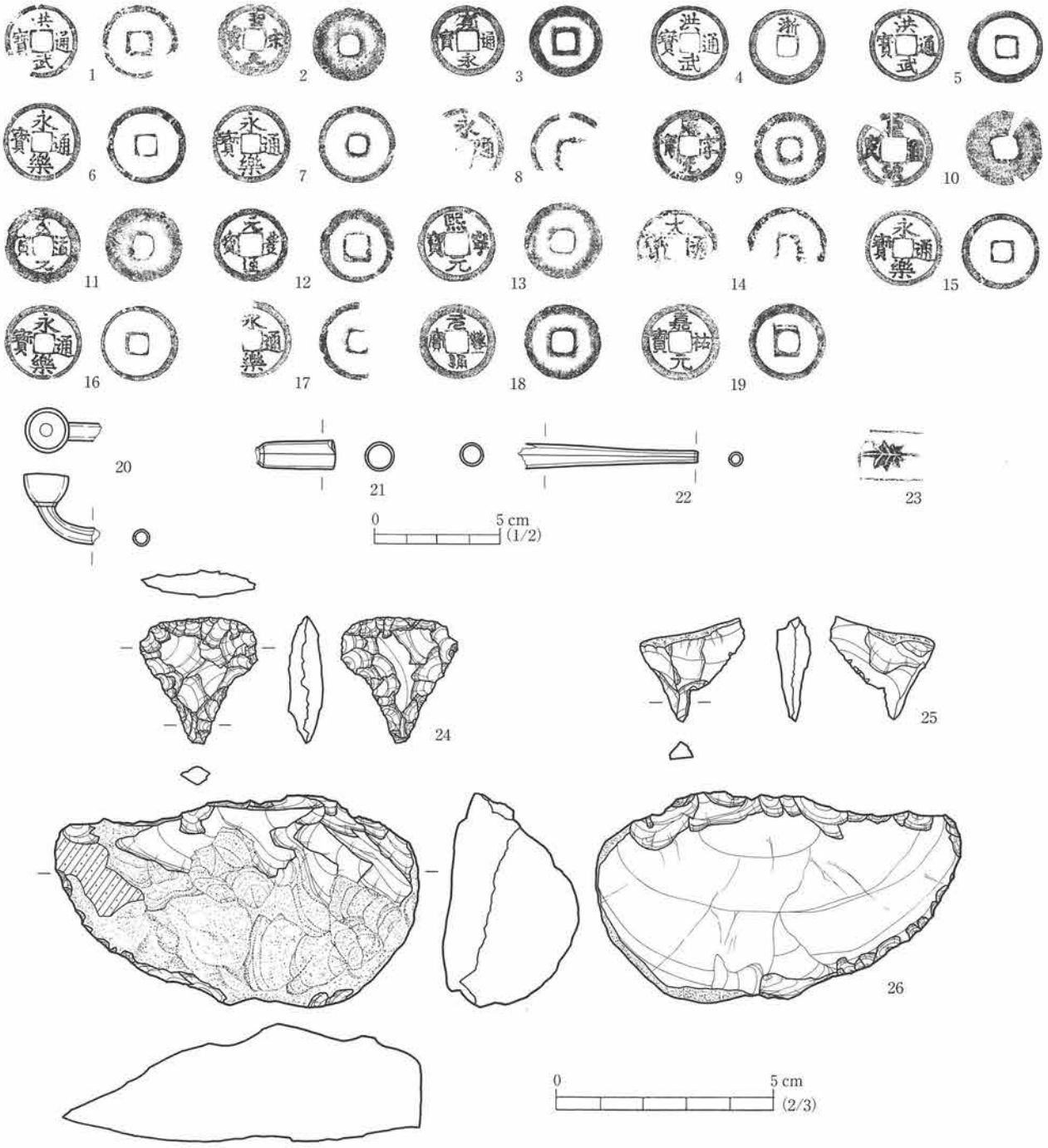
No.	遺構・層位	種別	特徴	樹種	写真図版	登録番号
14	不明	柱材	柱3、(SB10) 下端部に加工痕有、全長(18.7)cm 幅・径(8.5)cm		405-4	Lc-81
15	不明	柱材	柱1、(SB20) 下端部に加工痕有、全長(17.6)cm 幅・径(17.2)cm		405-2	Lc-79

第185図 遺構外出土遺物(5)



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	樹　種	写真図版	登録番号
1	不明	円形板	(53.7)cm×（11.5)cm　厚さ1.0cm　木釘穴痕１ヶ所有、柾目材	スギ類似種	406-5	Lc-87
2	不明	不明	長さ（81.8)cm　幅（10.0)cm　厚さ（7.1)cm　芯持材	クリ	407-1	Lc-88
3	不明	不明	59.5cm×(11.5)cm　厚さ2.1cm　釘穴有：右側５ヶ所（内１ヶ所は穴のみ）左側４ヶ所、外面：カンナ削り痕３ヶ所有、内面：両側に木組み痕有、削痕有、柾目材	カヤ	406-4	Lc-86

第186図　遺構外出土遺物（6）

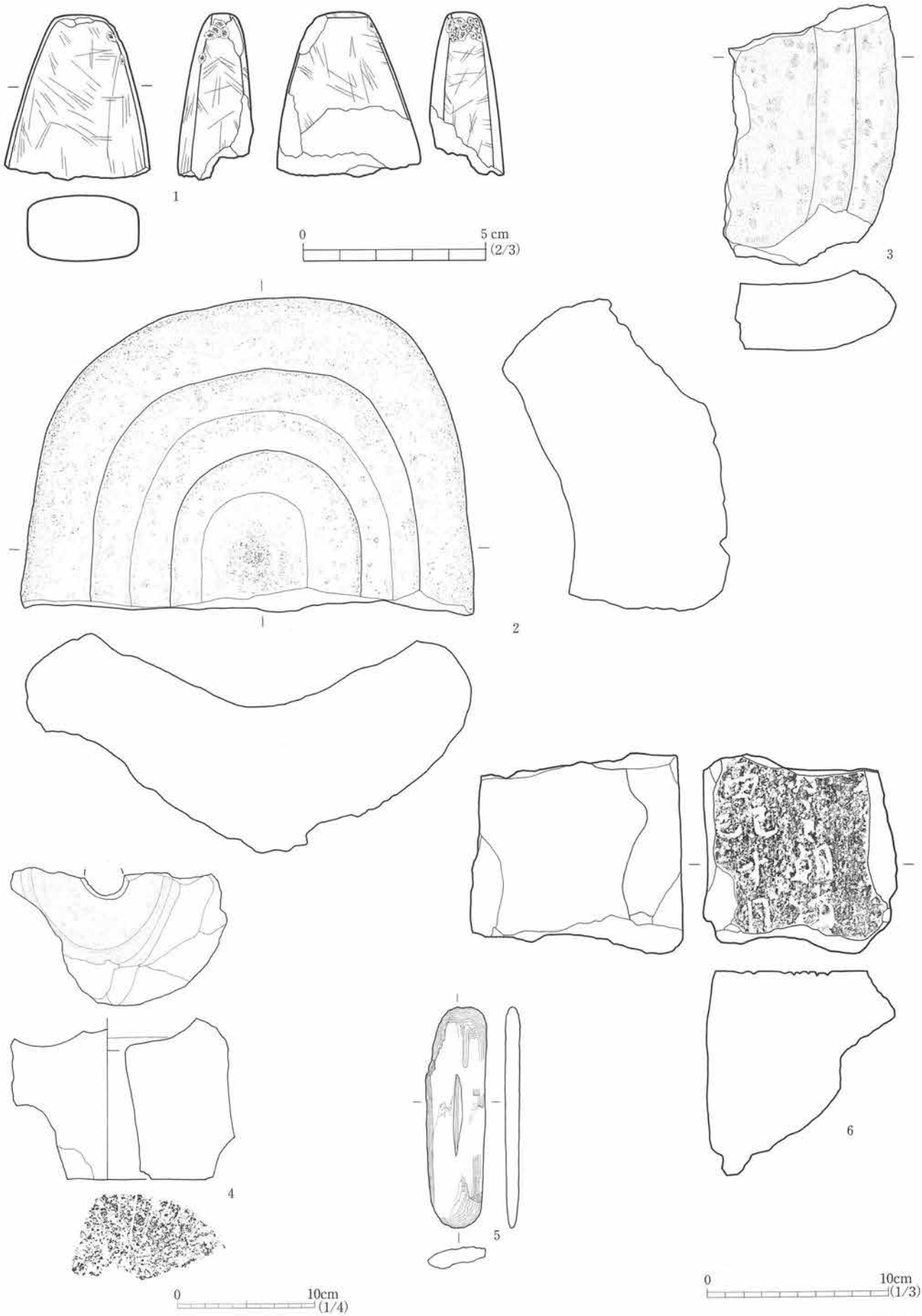


No.	遺構・層位	種別	特徴	外径（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	近世整地層	銅製品 銭貨	洪武通宝（明） （初鋳年 1368年）	2.4	2.0	431-17	Na-54
2	近世整地層	銅製品 銭貨	聖宋元宝（北宋） （初鋳年 1101年）	2.4	3.05	431-18	Na-55
3	近世遺構検出面	銅製品 銭貨	（新）寛永通宝	2.3	2.2	431-15	Na-52
4	近世遺構検出面	銅製品 銭貨	洪武通宝（明） （初鋳年 1368年）	2.4	2.8	432-3	Na-58
5	近世遺構検出面	銅製品 銭貨	洪武通宝（明） （初鋳年 1368年）	2.3	2.75	431-16	Na-53
6	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	永楽通宝（明） （初鋳年 1408年）	2.5	1.9	432-12	Na-68
7	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	永楽通宝（明） （初鋳年 1408年）	2.5	2.7	432-8	Na-64
8	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	永楽通□（明） （初鋳年 1409年）		1.15	432-14	Na-70
9	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	熙寧通宝（宋） （初鋳年 1068年）	2.3	2.05	432-6	Na-61
10	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	？	2.4	1.9	431-1	Na-56
11	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	至道元宝（北宋） （初鋳年 995年）	2.4	2.7	432-10	Na-66
12	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	元豊通宝（北宋） （初鋳年 1078年）	2.4	2.4	432-9	Na-65
13	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	熙寧元宝（北宋） （初鋳年 1068年）	2.5	2.45	432-11	Na-67
14	Ⅱ区東 表土	銅製品 銭貨	？	2.6	1.9	432-13	Na-69
15	不明	銅製品 銭貨	永楽通宝（明） （初鋳年 1408年）	2.4	1.7	429-13	Na-13
16	不明	銅製品 銭貨	永楽通宝（明） （初鋳年 1408年）	2.4	3.45	430-1	Na-19
17	不明	銅製品 銭貨	永楽通宝（明） （初鋳年 1408年）	2.5	1.3	429-18	Na-18
18	不明	銅製品 銭貨	元豊通宝（北宋） （初鋳年 1078年）	2.4	2.85	429-14	Na-14
19	不明	銅製品 銭貨	嘉祐元宝（宋） （初鋳年 1056年）	2.5	3.0	429-17	Na-17

No.	遺構・層位	種別	特徴	全長（cm）	火皿径（cm）	雁字口径（cm）	吸口径（cm）	写真図版	登録番号
20	近世整地層	雁首	補強帯有	（2.5）	1.2	（0.5）		433-18	Nb-20
21	不明	雁首	全面に鍍金有	（2.5）		（0.9）		433-21①	Nb-31①
22	近世遺構検出面	吸口		（5.6）		（0.7）	0.4	433-19	Nb-21
23	不明	飾り金具	全面に鍍金有、彫金	（2.15）×1.5				433-21②	Nb-31②

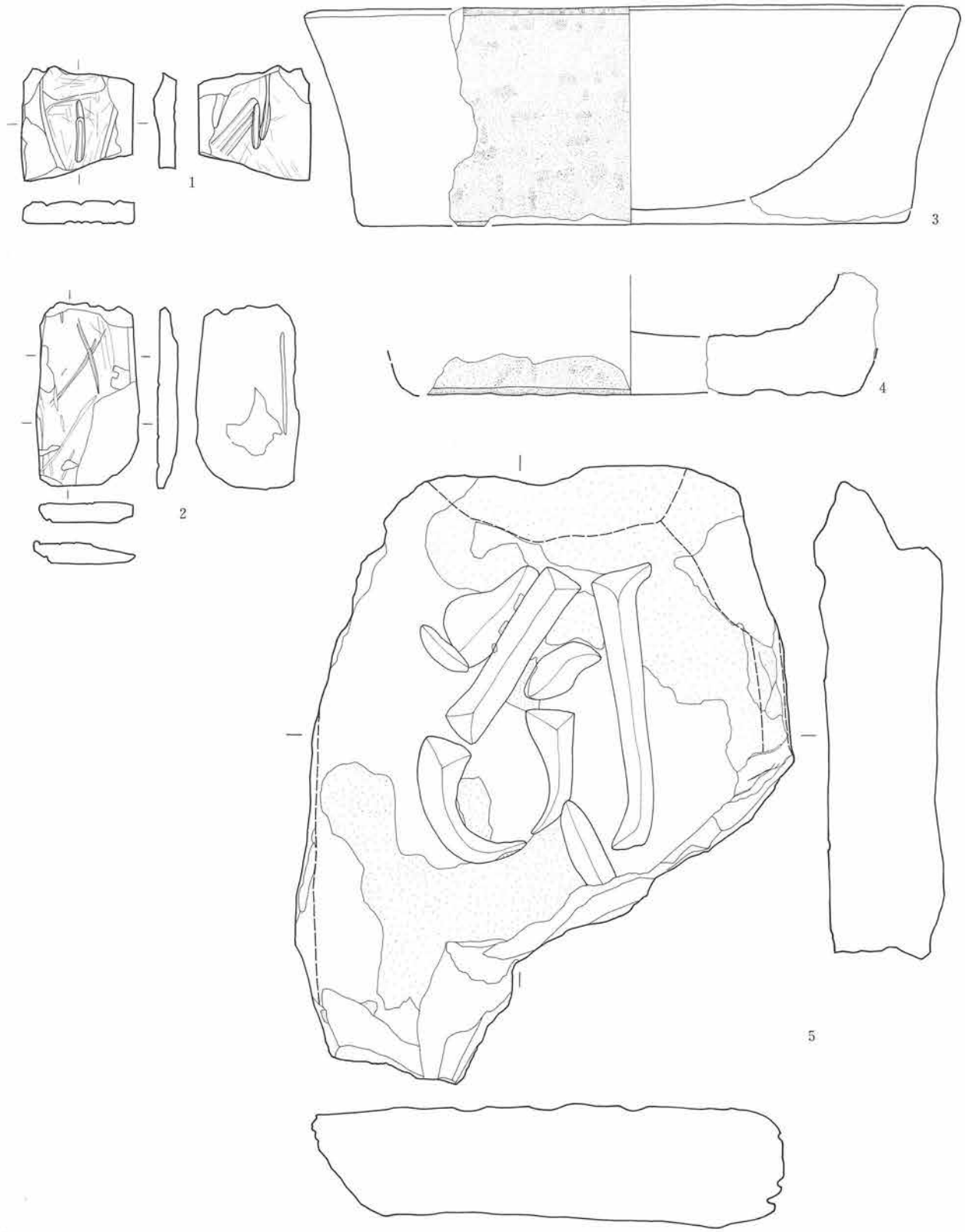
No.	遺構・層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	登録番号
24	西側溝	ドリル	（3.1）	（2.8）	0.8	5	珪化凝灰岩		417-10	Ki-4
25	Ⅱ区 表土	ドリル	（2.5）	（2.4）	0.8	1.9	頁岩		419-3	Ki-3
26	近世遺構 検出面	不定形	5.1	8.6	3.2	126	流紋岩		417-15	Ka-105

第187図 遺構外出土遺物（7）



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	Ⅱ区西検出面	磨製石斧	(4.6)	(4.0)	(2.1)	(50.5)	蛇紋岩		418-8	Kf-2
2	近世整地層	石皿	18	25.3	12	5400	安山岩		423-1	Kd-23
3	Ⅲ区表土	石皿	14.7	9.7		915	安山岩		324-6	Kd-38
4	Ⅲ区表土	石臼		(11.9)		1595	安山岩		424-8	Kd-39
5	撹乱	礫石器	16.3	5.5	1.4	128	珪化木		421-2	Kc-39
6	Ⅲ区　検出面	板碑	11.3	10.9		1880	安山岩		422-12	Kd-21

第188図　遺構外出土遺物（8）



No.	遺構・層位	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版	登録番号
1	I区中央部	硯	6	5.8	1.2	13.8	頁岩		425-5	Kd-54
2	表土	硯	9.6	5.4	1.1	70	頁岩		422-10	Kd-18
3	不明	石鉢	(28.4)	(11.4)		1185	安山岩		425-3	Kd-49
4	表土	石鉢	(22.8)	26.3	3.0	740	砂質凝灰岩		424-41	Kd-41
5	表土	板碑	32.3	26.3	6.1	7230	デイサイト	種子「ア」薬研彫	422-11	Kd-20

第189図　遺構外出土遺物（9）

Ⅵ　まとめ

1．遺跡の構成

今回の調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の遺構と遺物を検出した。各時代の遺跡の構成について考えてみたい。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺物は基本層及び古代以降の遺構内堆積土中から出土しているが、遺構は検出されていない。出土した土器は大部分が破片であり、全体が復元されたものはSX３性格不明遺構出土の深鉢１点のみである。地文のみであり、詳細な時期は不明であるが、概ね後期以降のものであると考えられる。他の文様が判然とするものは後期以降のものであり、その他の土器についても同様の時期と考えられ、石器についても後期以降のものと考えられる。

(2) 弥生時代

Ⅰ区SD１堀跡以南のⅣ層上面で確認された水田跡はⅡ区の北側のＢ・Ｃ－15～Ｊ－11をむすぶ線から北側へ広がっている。南側の非耕作域との境に畦畔と段が確認され、下層に疑似畦畔が確認されたものもある。笊川を隔てた北側に広がる富沢遺跡で弥生時代の水田跡が検出されており、今回の調査で笊川以南にも同時代の水田が広がっていたことが確認された。遺物はⅣ層およびⅤ層から出土しているが、全体を把握できる資料がないため、詳細は不明である。地文や沈線の施文状況等の特徴から、宮城県一迫町青木畑遺跡出土土器に類例を求められるが、断定はできない。水田跡はこの時期以降のものであると考えられる。

また、古代以降の遺構検出面や遺構内堆積土から出土した弥生土器には、二～三本一単位の沈線による山形文、連弧文波状紋を特徴とする十三塚式、二重口縁に刺突文が施文される天王山式のものがある。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構はSK76土坑１基のみである。出土した土器は大型の壺１点である。複合口縁で、体部は球形に近い。口唇部および複合口縁の段の部分に刻目文が施文されている。肩部にも同様の工具による連続した刺突紋が施文されている。外面体部および口縁下部、内面上部にハケメ、口縁内外面はヨコナデ、内面下部はヘラナデ、ナデが施されている。この土器は器形の特徴等から、塩釜式に位置づけられるものである。

(4) 古代

古代の遺構はⅤ層（Ⅰ区はⅡ層）上面で確認された。竪穴住居跡はⅠ区で６軒、Ⅱ区で21軒の27軒確認された。出土した遺物について、分類は行っていないが、土師器には製作にあたってロクロを使用していないもの（非ロクロ）と使用しているもの（ロクロ）がある。非ロクロ土師器には坏、甕、高坏がある。坏は外面に段を持つもの、丸底のもの、平底のものがあり、すべて内面にミガキ・ヨコナデが施されその後黒色処理が施されている。外面はヨコナデ・ケズリあるいはミガキが施されている。甕は頸部に段や沈線のないもので、外面は口縁部にヨコナデ、体部にハケメ・ナデ・ケズリが施されており、内面は口縁部にヨコナデ、体部にハケメ・ナデ・ヘラナデが施されている。類似する資料は本遺跡第１次調査で出土しており、８世紀代のものと考えられている。今回の調査資料についても８世紀前後の年代が考えられる。ロクロ土師器は坏、高台付坏、甕がある。坏、高台付坏は内外面ロクロ調整で内面はミガキ・黒色処理が施されている。坏の外面体部下端にケズリが施されているものがある。甕は内外面ロクロ調整で内面はナデ・ヘラナデ・ハケメが施され、外面は体部下半にケズリが施されている。同様の特徴を持つ本遺跡第１次調査の出土資料は10世紀前後の年代と考えられている。今回の調査資料についても同様の年代が

考えられる。非ロクロ土師器を出土する竪穴住居跡はSI２・７・10・11・14・15・17・22・23・30竪穴住居跡の10軒で、土坑はSK18土坑の１基のみである。10軒の竪穴住居跡は土師器と同時期であるものと考えられる。SK18土坑はSI14竪穴住居跡の掘り方によって削平されていることから、住居跡より古いものと考えられる。ロクロを使用している土師器を出土する竪穴住居跡はＳＩ３・12・13・18・20・21・24・26竪穴住居跡の８軒である。土坑はSK40-②の１基のみである。土師器と同時期と思われる。遺構内の堆積土に灰白色火山灰が全く見られないことから10世紀前半以前のものであると考えられる。その他の竪穴住居跡は時期を決定する資料がないが、重複関係から大きく時期の変わるものはないものと考えられる。また、この他の古代の遺構は、土坑については上記の２基の他には、Ⅰ区のSK６・９～15土坑、Ⅱ・Ⅲ区のSK38・39・40-①・41・42・75土坑の14基である。溝跡はSD11・15・33溝跡の他、小規模な溝跡がある。

小溝状遺構群はⅡ区の北部からⅢ区中央付近に分布している。３群確認されたが、第１群が最も新しく、第３群が最も古い。竪穴住居跡との重複関係から第１群は10世紀前半以前の竪穴住居跡より古く、第３群は８世紀代の竪穴住居跡より新しい。このことから小溝状遺構群は８～10世紀代に営まれていたものと考えられる。

(5) 中世

中世の遺構はⅠ区で確認された竪穴建物跡１棟の他は全てⅡ区のⅡ～Ⅲ層で確認された土坑である。SK13・20・22・23・28・31・32・33・34・63土坑の10基である。これらの土坑は火葬墓であると考えられる。焼土、炭化物が多量に含まれ、焼けた人骨が出土している。Ｈ～Ｋ－15・16グリッドを中心として、Ｂ・Ｃ－21、Ｋ・Ｌ－24、Ｊ－11グリッドに分布する。王ノ壇遺跡で検出されている火葬墓と同様のものであるが、王ノ壇遺跡のものは底面中央が溝状に掘り込まれて外側に張り出す形態になっている。本遺跡の場合は王ノ壇遺跡のものと同様の形態のもの、溝状の掘り込みがないもの、溝状の掘り込みがあっても外側に張り出さないもの等、様々な形態のものがある。その他の中世の遺構には、竪穴建物の他に近世の整地層の下部で確認された、SD26～32溝跡が中世の遺構である可能性がある。小規模な区画を画する区画溝と考えられる。掘立柱建物跡の存在も考えられるが、近世のものとの明確な区別をすることが困難な状況であり、建物構成等は不明である。

(6) 近世

出土遺物について

近世の出土遺物には陶磁器、土師質土器、瓦質土器、木製品、土製品、金属製品、石製品等がある。ここでは特に出土量の多いSD３・４堀跡、SD２溝跡の出土陶磁器について述べる。

磁　器

磁器は358点出土している。SD２溝跡は２時期の変遷があるが、その時間差は遺物上からは明確ではなかったことから、まとめて記述する。出土点数は139点あり、全体の４割近くを占め、最も多くなっている。年代は17世紀以前のもの３％、17世紀代のもの16％、18世紀以降のもの81％となっており、多くは18世紀代のものである。17世紀以前のものは中国産で、17世紀以降のものは肥前産が多く、瀬戸美濃産のものも見られる。SD３堀跡からは37点出土しており、全体の１割強と出土数は少ない。年代は16世紀前半以前のもの11％、16世紀後半～17世紀後半のもの49％、18世紀以降のもの40％となっている。17世

磁器　遺構別集計表（産地別）

遺　構	点　数	中国産	肥　前	瀬戸美濃	産地不明
SD２	139	5	117	6	11
SD３	37	9	27	1	
SD５	99	16	82	1	
SD５	1		1		
SD23　ℓ１	2		2		
SK11　ℓ１	1		1		
SK19　ℓ２	1		1		
SK27	1	1			
SK51	1		1		
SK61	1		1		
SK65　ℓ１	1	1			
SK66　ℓ１	2		2		
SE１　ℓ１	2	1	1		
SX５	2		2		
SX６	1		1		
I20　P１	1		1		
H21　P１	1	1			
H21　P４	1				1
H22　P１	1			1	
I22　P２	1		1		
K23　P２	3		3		
E30　P376	1		1		
不明　P１	1			1	
不明　P８	1	1			
近世整地層	14	5	9		
表土等	42	4	28	6	4
合　計	358	44	282	16	16

紀代以前のものは中国産が多く、それ以降のものはほとんどのものが肥前産である。SD４堀跡からは99点出土しており、全体の３割弱を占める。年代は17世紀以前のもの14%、17世紀代のもの58%、18世紀以降のもの28%となっている。その中でも17世紀中～後半のものが多い傾向にある。17世紀以前のものは全て中国産で、17世紀代以降のものはほとんどが肥前産のものである。その他に土坑等の遺構から16点、整地層から14点、表土等から42点出土している。それらも16世紀以前のものは中国産が多く、17世紀以降のものは肥前産のものが多い。

陶　器

陶器は753点出土している。SD２溝跡は磁器と同様まとめて記述する。出土点数は387点と陶器総数のなかでも５割をやや超す割合を占め、最も多くなっている。年代は17世紀以前のもの２%、17世紀代のもの14%、18世紀代のもの61%、19世紀代のもの21%、その他２%である。17世紀以前のものは瀬戸産、瀬戸美濃産、美濃産が多く、17世紀代のものは肥前産、岸窯産が多く、特に肥前産では碗、岸窯産では擂鉢が多い。18世紀代のものは大堀相馬産のものが多く、特に碗が多い。19世紀代のものは大堀相馬産、堤産が多い。SD３堀跡からは70点出土しており、全体の１割に満たない。年代は16世紀以前のものが17%、17世紀代のもの53%、18世紀代のもの23%、19世紀代のもの４%、その他３%である。16世紀以前のものは瀬戸産が多い。17世紀代のものは美濃産、肥前産、岸窯産が多い。18世紀代のものは大堀相馬産のものが多い。SD４堀跡からは159点出土しており、全体の２割強を占める。年代は17世紀以前のもの15%、17世紀代のもの64%、18世紀代のもの15%、19世紀以降のもの６%である。17世紀以前のものは瀬戸産、瀬戸美濃産、美濃産が多い。17世紀代ではその８割近くが中葉～後半のもので、肥前産、岸窯産のものが多い。また、美濃産の煙硝擂がSD１堀跡出土の破片と接合した。18世紀代のものは大堀相馬産、京信楽産のものが多く、19世紀以降のものは大堀相馬産の他産地は不明である。その他に土坑等の遺構から21点、整地

陶器　遺構別集計表（産地別）

遺　構	点　数	古瀬戸	瀬戸美濃	美　濃	肥　前	大堀相馬	小野相馬	岸窯系	堤	京信楽	唐　津	常　滑	在　地	不　明	中　国
SD１	1		1												
SD２	387	3	16	11	39	221	24	18	31	13（京焼き1）	1		2	8	
SD３	70	3	7	10	10	10		19	5	2	2	1		1	
SD４	159	10	23	13	51	8	1	36	2	7	1			7	
SD５	3				1	1		1							
SK４	1							1							
SK19	1													1	
SK22	1			1											
SK52	1		1												
SK61	2	1		1											
SK66	3				1			2							
SX３	1				1										
SX６　ℓ１	2		1		1										
ℓ２	1		1												
ℓ９	1	1													
不明	1				1										
SE１　ℓ１	1		1												
SI３（貼床）	1													1	
I16　P１	1													1	
I18　P１	1		1												
J19　P２	1								1						
F19　P205	1		1												
G19　P208	1	1													
G19　P220	1	1													
D20　P193	1	1													
C21　P42	1		1												
H22　P１	1								1						
K23　P２	1				1										
E28　P４	1		1												
不明　P６	1				1										
近世整地層	3	2			1										
Ⅰ区遺構検出面	9	2				4								3	
中世遺構検出面	4	2		1		1									
近世遺構検出面	9		2	1	1	3		1						1	
表土	70	2	8	7	15	21	1	2	10			1		2	1
西壁面	3					2								1	
Ⅱ層	1				1										
Ⅲ層上面	1	1													
Ⅴ層	4				2	2									
合　計	753	30	65	45	126	274	26	80	50	22	4	2	2	26	1

層から3点、ピットから12点、表土等から101点出土している。それらについても17～18世紀代のものが多い。

以上のことからSD 2 溝跡出土の陶磁器は18世紀以降、19世紀代までのものが8割以上を占め、磁器ではほとんどが肥前産で、19世紀代に瀬戸美濃産等他のものが見られるようになる。陶器では18世紀代になると大堀相馬産の占める量が多くなり、19世紀代まで続く。また、器種は碗、皿類等の什器類が多く、バラエティが豊富である。SD 3 堀跡はSD 2 溝跡、SD 4 堀跡と比べると陶磁器の出土量が少ないが、17世紀代のものが5割以上を占める。中でも17世紀後半のものが多い。磁器では17～18世紀代を通して肥前産が多く、陶器は17世紀代には美濃産、岸窯産が多く、18世紀代になると大堀相馬産が多くなる。SD 4 堀跡出土の陶磁器は17世紀代のものが多く6割以上を占める。その中でも特に17世紀中葉から後半にかけてのものが多く、陶器では8割を超している。磁器では大部分が肥前産のもので、陶器では肥前産、岸窯産のものが多く、18世紀以降大堀相馬産のものが多くなる。

土師質土器、瓦質土器、木製品、金属製品については集計表に示す。

土師質土器集計表（登録資料のみ）

遺　構	皿	鉢	香　炉	小型壺	壺	蓋	計
SD 2　ℓ 1			1				1
配石中	1						1
層中	2						2
SD 4　ℓ 2	1						1
層中	1						1
SK52				1			1
SK60	1						1
SE 1　底面				1			1
1号埋設土器					1	1	2
Ⅱ区西P　410	5						5
近世整地層		1					1
Ⅵ層上面G18　P 2	2						2
表土	1						1
撹乱	1						1
計	15	1	1	2	1	1	21

瓦質土器集計表（登録資料のみ）

遺　構	時　期	鉢	擂　鉢	香　炉	手あぶり	鬢水入れ	火　鉢	硯	計
SD 2　ℓ 1	18～19世紀前半	2							2
ℓ 2	江戸時代	3			1				4
配石中	江戸時代	2							2
SD 3　ℓ 1	16～17世紀		1						1
	江戸時代							1	1
ℓ 2	16世紀		3						3
ℓ 3	16世紀		1						1
SD 4　ℓ 1	16世紀		2						2
	江戸時代	1				1			2
ℓ 2	16世紀		4						4
	江戸時代		1						1
層中	16世紀		3						3
	16世紀以降			1					1
	16～17世紀		1						1
	江戸時代	1					1		2
SX 1　ℓ 2	16世紀		1						1
C22　P35	16世紀		1						1
K23　P 2	中～近世	1							1
(L22)	16世紀		1						1
(G・H21)	江戸時代						1		1
表土　(H19)	江戸時代	1							1
	江戸時代	2							2
	不明	1							1
計		14	19	1	1	1	2	1	39

金属製品集計表（登録資料のみ）

遺構	煙管		古銭	その他	計
	雁首	吸口			
SD1 ℓ1	1				1
SD2 ℓ1	1	1	1		3
ℓ2	4	1	18	匙1	24
底面	1	1		刀1	3
SD2 ℓ2			1	板状製品1	2
SD4 ℓ1	1		4		5
ℓ2	4	4	4	飾金具1　鍔1　刀子1	15
底面				切羽1	1
層中	1	1			2
SD12			1		1
SK37			1		1
SK44	1				1
SK66	1	1	1		3
SX4		1			1
SX6 ℓ3			1		1
SX6 層中			8		8
Ⅱ～Ⅲ区			2		2
近世遺構検出面		1	2		3
近世整地層	1		3		4
P			12		12
表土	3		9		12
不明			3		3
合計	19	11	71	7	108

漆塗製品・木製品集計表（一部杭材除く）

遺構	漆塗製品							木製品															杭		加工木	柱材	竹製品	小計	合計
	椀		大鉢	皿	箸	下駄	不明	下駄					箸	樽天板	桶か樽側板	曲物	柄杓の柄	皿	小型杵	円形板	櫛	その他	不明	杭	橋杭				
	椀身	椀蓋						連歯下駄	差歯下駄	下駄歯連歯	下駄歯差歯	下駄歯下駄歯																	
SD2 ℓ1	3	1															1						3			1		1	10	
ℓ2	1	2		1				2					3							2		枠1	3						15	
ℓ3 底面	4	1																1					6			2			14	48
配石					1								4									アク抜きフネ1							6	
層中	2																	1					3						3	
SD3 ℓ1	7					1		6				1											2						17	
ℓ2	18	1						2	2	1	1	1	1			1				1	1		3						32	110
ℓ3 底面	3							3				1				1						木錘？1							9	
層中												1				1	1						4	13	31	1			52	
SD4 ℓ1	13		1					4					3						1	1		栓1　独楽1	1						26	
ℓ2	3	1											4	1		2			1		1								13	41
層中																							1	1					2	
SD12 下層	1																												1	
SE1 ℓ5																						独楽1							1	
SK27 ℓ7															11											14			25	
層中			1																										1	
SK37 ℓ5																							1			1			2	
SK64 ℓ1				1																									1	
SX1 ℓ2	2																												2	
SX6 ℓ7	1																					折敷？1							2	54
底面	2																									3			5	
層中	1						1																1						3	
Ⅱ区 西P411	1																												1	
柱1～4																											4		4	
J24 P6																											1		1	
J21 P11																											1		1	
H21 P6																											1		1	
不明																				1			2						3	
小計	62	6	2	2	1	1	1	17	2	1	4	15	1	11	5	2	2	2	5	2	7	27	14	31	22	7	1			
合計							75															103		45	22	7	1			253

検出遺構について

近世の遺構は整地層と掘り込み面の関係から4期に分けられる。

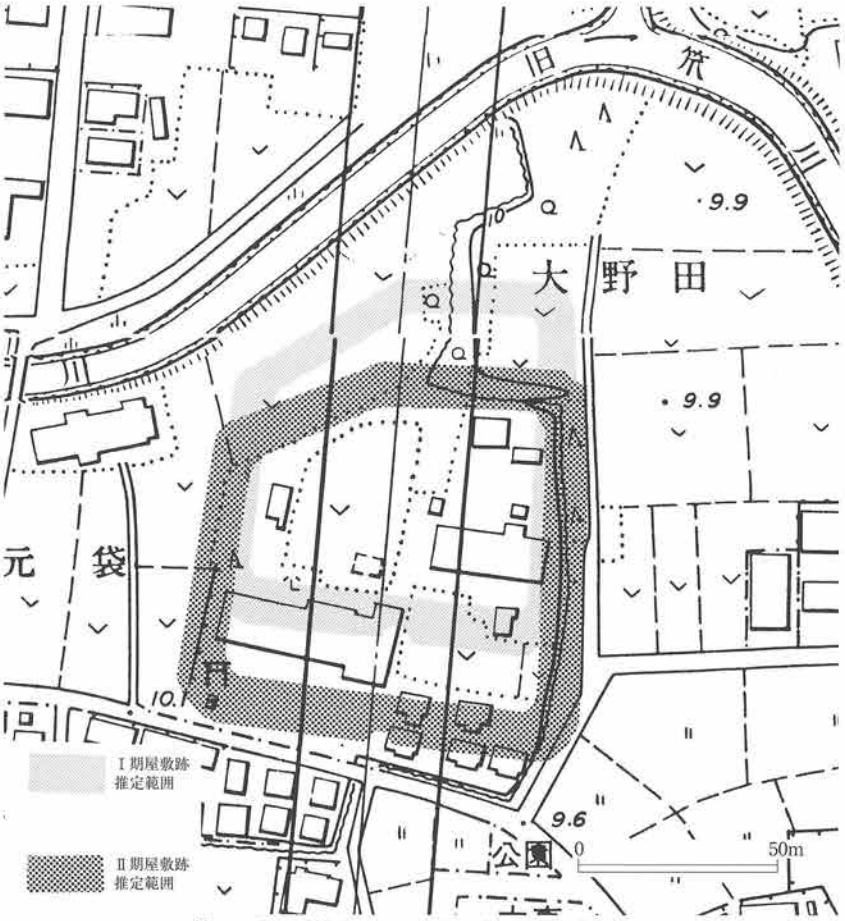
〈Ⅰ期〉

堀で囲まれた屋敷跡で、調査で検出された部分と航空写真、現地踏査結果から、SD1堀跡およびSD4堀跡が同一の堀跡であると考えられ、平面形態は北西部が笊川に沿った形となり、台形を呈するものと考えられる。堀は幅

が約８ｍ、深さ1.5m程度であるが、南辺の中央部は幅約５ｍとくびれ、深さも浅くなることから、土橋であった可能性がある。堀の内側は盛土で整地されており、多数の柱穴が検出されている。これらの柱穴は、Ⅰ期以外のものも多数含まれており、時期的な細分が困難な状況である。また、同一面で前述の火葬墓が検出されていることから、屋敷地として使われていなかった時期があり、その後屋敷が構えられたものであると考えられる。柱穴の規模によってその分布状況を検討すると中心的な施設は、Ⅱ区の北側に確認されたSB１・２・３・４掘立柱建物跡とSK27井戸跡が考えられる。SB１掘立柱建物跡については南辺及び北変に庇が付くもので、SB２・３・４掘立柱建物跡についても南辺及び北変に庇が付く建物であるが、東側の構造及び全体の規模は不明である。SB２・３・４掘立柱建物跡はSB２から４へという順序で同位置に建て替えられている。それらの建物と井戸の間の柱穴にも同程度の規模のものが見られるが、建物は不明である。また、SA１柱列はSB１掘立柱建物跡と方向が同じであることからこの時期の塀跡であると考えられる。掘立柱建物跡と井戸跡の南東にあるSX６性格不明遺構は池跡と考えられる。この遺構は２時期の重複があり、Ⅰ期の遺構はⅡ期の遺構により削平され、詳細は不明である。また、小規模な柱穴の掘立柱建物跡が付属して建てられていた事も十分に考えられる。

〈Ⅱ期〉

Ⅰ期と同様に堀で囲まれた屋敷跡で、SD３堀跡およびSD６堀跡が同一の堀跡であると考えられ、Ⅰ期より南へ約20m移動している。Ⅰ期のものと平面形態、規模は同様であるが、南辺が深さ２ｍと深くなっており、東側底面には畝状の高まりがある。Ⅰ期の堀の南辺は埋め立てられずにそのままⅡ期にも使用されていたものと思われ、南辺の堀は二重になっていたものと考えられる。南辺中央のくびれ部では底面が土橋状に浅くなり、その上に橋が架けられていた。南側の堀では幅約1.5mの二列で約１ｍ間隔に五ヶ所の橋杭が検出され、北側の堀では橋杭は検出



第190図　近世Ⅰ・Ⅱ期屋敷跡範囲推定図

されていないが、堀底面の構造が類似していることから同様の橋が架けられていたものと考えられる。SD３堀跡とSD４堀跡の間は新たな盛土で整地されている。屋敷内の中心的な施設としてはSB６・７・９・13・14掘立柱建物跡の４棟の建物跡が考えられる。また、SA２柱列がこの時期のものであると考えられる。特に中心となるSB９掘立柱建物跡は東西に２棟の建物が合体したような構造になっており、西側は南北に庇が付くが、東側は庇がなく、西側より幅が広いという構造になっている。SB７掘立柱建物跡は南北に庇の付くもので、SB６掘立柱建物跡は庇の無い建物で、同一の場所でSB９→７→６の順に建て替えられている。また、SB13・14掘立柱建物跡がSE１井戸跡を取り込む形で建てられている。SE１井戸跡がⅡ期の屋敷に伴う井戸であると考えられる。この他にSD３堀跡と中心となる建物の間、SD４堀跡を挟む地域にも掘立柱建物跡が検出されている。SB９掘立柱建物跡の東側にⅠ期の屋敷と同様SX６性格不明遺構とした池跡と思われる遺構があり、Ⅱ期の遺構である新期の遺構は北端にSD14溝跡が接続し、北方へ傾斜しており、排水溝の可能性がある。また、SX６性格不明遺構のⅠ期およびⅡ期部分のそれぞれを埋めた部分にも柱穴が見られることから具体的な建物は不明であるが、Ⅱ期の池の近辺にも建物が位置していたことが考えられる。更に池を完全に埋めた跡地にも建物を建てており、池を埋めた段階で、SD４堀跡の１回目の埋土がこの時期であったことが考えられ、屋敷の性格は変わっていたものと思われる。出土遺物からⅠ期およびⅡ期は17世紀を中心とした年代が考えられる。

〈Ⅲ期〉

Ⅰ期・Ⅱ期と同様の規模の屋敷跡であると考えられる。池跡としたSX６性格不明遺構部分で、遺構が埋められた上に更に盛土整地し、その他の地域ではⅡ期の面の上に盛土整地している。この時期の建物についてはⅠ期及びⅡ期の建物跡と重複する部分が多く、特定することは困難であるが、Ⅰ期・Ⅱ期の建物跡と同様の規模の柱穴の建物もあったと考えられる。堀で囲まれているが、武士の屋敷から規模の大きい農家へと変わっている可能性が考えられる。

〈Ⅳ期〉

この時期には屋敷跡を囲んでいたSD３堀跡を完全に埋め、その上にSD４堀跡を２回目に埋めた土で更に埋まったSD３堀跡の上にまで盛土整地している。その後SD２溝跡を構築し、掘立柱建物跡が建てられている。Ⅰ～Ⅲ期の掘立柱建物跡と重複するものが多数存在すると考えられるが、SD３堀跡の外側やSD４堀跡が埋まった地域に検出された建物がこの時期のものであると考えられる。SD２溝跡は２期の変遷があるが、新期には流れる水を堰止めて河棚が設けられている。Ⅲ期およびⅣ期は18世紀後半以降の年代が考えられる。その後SD２溝跡を埋め立て再度盛土整地され現在の表土となり、住宅地および畑地として利用されて来たものと考えられる。

２．まとめ

(1) 元袋遺跡は笊川の形成した東西に馬背状に延びる標高10m前後の自然堤防上に位置している。

(2) 縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世にわたって各地代の遺物・遺構が検出された。

(3) 縄文時代の遺物としては後期以降の土器、石器が出土している。遺構が検出されていないため、集落等は不明である。

(4) 遺跡の北側で弥生時代の水田跡が検出されている。水田跡の時期は出土遺物から前期以降と考えられる。その他に十三塚式、天王山式期の土器が出土している。石器では石包丁未製品、アメリカ式石鏃がある。

(5) 古墳時代では土坑が１基検出され、土師器の大型の壺が出土している。

(6) 古代では竪穴住居跡27軒、土坑16基、溝跡６条、小溝状遺構群３群等の遺構が検出された。
奈良時代の竪穴住居跡が10軒検出され、８世紀代の年代が考えられる。

平安時代の竪穴住居跡は８軒検出され、10世紀前後の年代が考えられる。

小溝状遺構群は８～10世紀のものと考えられる。

(7) 中世では竪穴建物跡１基、土坑１基、火葬墓10基、溝跡７条が検出された。その他に多数の柱穴があるが、中世の建物、それを中心とした屋敷跡については不明である。

(8) 近世では４時期の屋敷の変遷が認められた。Ⅰ・Ⅱ期については堀で囲まれた屋敷跡で堀や建物の規模が大きく、武士階級の屋敷であったものと考えられる。池状の遺構がみられることからも格式の高い屋敷跡と考えられる。堀からの出土遺物には伊達家の家紋である九曜紋の瓦、三引両紋風の漆器椀があり、天目茶碗や茶道具、赤色漆塗りの漆器椀、白木の箸、鍍金された煙管、更に金箔瓦が出土している。

伊達家の家紋のある遺物から、この屋敷は伊達家に関係の深い屋敷である可能性が考えられる。『伊達治家記録』には国分薬師堂御仮屋、袋原仮屋の名が認められるが、大野田には御仮屋の記録は残っていない。同書、天和３（1683）年12月23日の記事に伊達家四代藩主綱村が「長町簀（笊）川辺で御遊行」の記載があり、このような際に立ち寄るための屋敷であった可能性は考えられる。時期的には17世紀を中心とした時期であり、伊達家の初代から四代の時期と重複するものと考えられるが、直接伊達家につながる屋敷であるか、家紋を拝領した家臣等の屋敷であるのかは不明である。また、Ⅱ期の後半期には、池を埋め、堀の一部を埋めている。その後の屋敷は格式の高い武家屋敷ではなくなっていたものと考えられる。18世紀前半頃には屋敷跡の性格が変わっていたものと考えられる。この17世紀を中心とした屋敷跡については今後、文献資料の検討や新たな周囲の調査成果の検討をしていかなければならないものであると考えられる。

Ⅲ期についてはⅠ・Ⅱ期と同様の規模の屋敷跡であるが、埋め立てられた池の上、Ⅱ期の面の上に盛土整地し、新たな屋敷を建てている。この屋敷は武家屋敷跡ではなく農家の屋敷地になっていたことが考えられる。

Ⅳ期については堀が完全に埋め立てられ、Ⅲ期の面の上に盛土整地し、新たな水路が掘られ、掘立柱建物で構成される屋敷跡であると考えられる。Ⅲ期同様に農家の屋敷地として利用されていたものと考えられる。

Ⅲ期・Ⅳ期の年代は18世紀後半以降であり、現代まで住宅地および農地として利用されていたものと考えられる。

引用・参考文献

天野順陽ほか　1994　「下草古城ほか」『宮城県文化財調査報告書第160集』宮城県教育委員会
荒井格ほか　2000　「高田Ｂ遺跡」『仙台市文化財調査報告書第242集』仙台市教育委員会
飯村均　1997　「東北地方南部の近世窯業」『考古学ジャーナル通巻No.417』
市田京子　1992　「江戸時代の下駄」『江戸学と江戸文化－江戸遺跡研究会第５回大会発表要旨』
岩淵康治ほか　1980　「三神峯遺跡」『仙台市文化財調査報告書第25集』仙台市教育委員会
氏家和典　1967　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』東北史学会
追川吉生　1999　「江戸時代出土漆器椀の形態分類」『江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨』
太田昭夫ほか　1992　「富沢遺跡」『仙台市文化財調査報告書第149集』仙台市教育委員会
太田昭夫　1994　「中田南遺跡」『仙台市文化財調査報告書第182集』仙台市教育委員会
大橋康二　1989　「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』ニューサイエンス社
小川淳一ほか　2000　「王ノ壇遺跡」『仙台市文化財調査報告書第249集』仙台市教育委員会
小川望　1992　「大名屋敷の焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
加藤道男ほか　1982　「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書第85集』宮城県教育委員会
金森安孝　1988　「東光寺遺跡」『仙台市文化財調査報告書第112集』仙台市教育委員会
金子昌浩　1992　「江戸の動物資料」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
北野信彦　1992　「近世寺院跡遺跡出土漆器資料の一性格」『江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨』
北野信彦　1999　「生産技術面からみた江戸遺跡出土の生産・流通・消費」『江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨』
工藤哲司ほか　1996　「柳生」『仙台市文化財調査報告書第95集』仙台市教育委員会
古泉弘　1979　「江戸の出土下駄」『物質文化32』物質文化研究会
古泉弘　1983　『江戸を掘る』柏書房
古泉弘　1987　『江戸の考古学』ニューサイエンス社
小川敬　1976～78　『青戸・葛西城址調査報告書Ⅱ～Ⅳ』葛西城址研究会
佐久間光平ほか　1995　「佐沼城跡」『迫町文化財調査報告書第２集』迫町教育委員会
佐久間光平ほか　1993　「上野館跡」『宮城県文化財調査報告書第156集』宮城県教育委員会
佐藤甲二ほか　1983　「茂庭」『仙台市文化財調査報告書第45集』仙台市教育委員会
佐藤洋ほか　1982　「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第34集』仙台市教育委員会
佐藤洋ほか　1985　「仙台城三の丸跡」『仙台市文化財調査報告書第76集』仙台市教育委員会
佐藤洋　1987　「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第109集』仙台市教育委員会
佐藤洋　1997　「養種園遺跡」『仙台市文化財調査報告書第214集』仙台市教育委員会
下津間康夫　1997　「草戸千軒町遺跡出土の下駄」『草戸千軒町遺跡調査研究報告１』広島県立博物館
主浜光朗ほか　1987　「山田上ノ台遺跡」『仙台市文化財調査報告書第100集』仙台市教育委員会
主浜光朗　1995　「上ノ原山遺跡」『仙台市文化財調査報告書第198集』仙台市教育委員会
篠原信彦ほか　1990　「下ノ内遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ―」『仙台市文化財調査報告書第136集』仙台市教育委員会
鈴木功ほか　1996　「福島市飯坂町岸窯跡について」『福島考古第37号』福島県考古学会
須藤譲　1992　「漆椀の製作と民俗」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館

仙台市史編纂委員会　1998　「板碑」『仙台市史特別編５』仙台市
武田健市　1998　「大日北遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第49集』多賀城市教育委員会
長佐古真也　1992　「近世「徳利」の諸様相」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
仲井さやか　1992　「近世の漆椀について」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
仲田茂司　1999　「東国中世の漆器」『考古学研究第46巻１号（通巻181号）』考古学研究会
中富洋　1991　「山口遺跡」『仙台市文化財調査報告書第151集』仙台市教育委員会
仲野泰裕　1992　「江戸で使用された瀬戸美濃の食器」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
萩尾昌枝　1992　「江戸時代初期の宴会の食器類」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館
平間亮輔　1998　「原遺跡」『仙台市文化財調査報告書第229集』仙台市教育委員会
藤澤敦ほか　1993　『東北大学埋蔵文化財年報６』東北大学埋蔵文化財調査センター
藤澤敦ほか　1994　『東北大学埋蔵文化財年報７』東北大学埋蔵文化財調査センター
藤澤敦ほか　1997　『東北大学埋蔵文化財年報８』東北大学埋蔵文化財調査センター
藤澤敦ほか　1998　『東北大学埋蔵文化財年報９』東北大学埋蔵文化財調査センター
堀江格ほか　1998　「岸窯跡―近世窯跡の調査―」『福島市埋蔵文化財調査報告書111』福島市教育委員会
矢部良明編　1993　『やきものの鑑賞基礎知識』至文堂
結城慎一　1989　「上野遺跡」『仙台市文化財調査報告書第127集』仙台市教育委員会
吉岡恭平ほか　1996　「下ノ内浦・山口遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅴ―」『仙台市文化財調査報告書第207集』
渡部弘美　1987　「元袋Ⅲ遺跡」『仙台市文化財調査報告書第103集』仙台市教育委員会
渡部弘美　1992　「山田条里遺跡―仙台平野の遺跡群Ⅸ―」『仙台市文化財調査報告書第162集』仙台市教育委員会
渡辺誠　1992　「焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会　吉川弘文館
渡邊誠ほか　2000　「大野田古墳群・王ノ遺跡・六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第243集』仙台市教育委員会
渡部紀ほか　1995　「伊古田遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅲ―」『仙台市文化財調査報告書第193集』仙台市教育委員会

同定・分析

仙台市、元袋遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、元袋遺跡における水田跡の探査、ならびに発掘調査において検出された水田遺構における稲作の検証を試みたものである。

2．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

1）試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
2）試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）
　※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
3）電気炉灰化法による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原，1987）。

3．水田跡の探査

(1) 試料

調査地点は、Ⅰ区東壁セクションである。調査区の土層はⅠ層～Ⅴ層に分層された。このうち、Ⅰ層は盛土である。Ⅱ層は、土質はシルトであり自然堆積層とみられている。土層上面において弥生時代中期後葉～中世・近世までの遺構が検出されている。Ⅲ層は、シルト質粘土であり、これも自然堆積層と考えられている。Ⅳ層は、土質は粘土である。土層観察において水田土壌の可能性が考えられている。Ⅴ層は、自然堆積のシルト質粘土である。土層上面から弥生時代前期末～中期初頭と推定される土器が出土している。

試料は、遺跡の調査担当者によって容量50cm^3の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。図1に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示した。

(2) 結果

試料1g中のプラント・オパール個数を表1に示す。なお、イネ、ヨシ属、タケ亜科の各植物の推定生産量と変遷について図2に示した。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示した。

分析の結果、イネはⅠ層でのみ検出された。密度は非常に高い値である。ヨシ属はⅠ層、Ⅱ層およびⅣ層から検出された。密度はいずれも低い値である。タケ亜科はすべての試料から高い密度で検出された。ウシクサ族はⅠ層、Ⅳ層およびⅤ層から検出されたがいずれも低い密度である。キビ族は検出されなかった。

1）稲作跡の可能性

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

Ⅰ層から検出されたイネは、現在あるいは比較的最近の水田耕作によるものと考えられる。他の土層からはイネは検出されなかった。

2）古環境の推定（図2参照）

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

本地点では全体にタケ亜科が非常に高い密度で検出されており、ヨシ属は極微量である。したがって、本遺跡周辺はネザサ節やクマザサ属が繁茂するような、比較的乾いた土壌条件で現在まで推移したものと推定される。

4．Ⅳ層水田遺構における稲作の検証

元袋遺跡の発掘調査において、第Ⅳ層から水田遺構が検出された。同層は、先に行った水田探査では、水田跡とは推定されなかった土層である（3章参照）。ここでは、同遺構における稲作の検証を目的にプラント・オパール分析を行った。

（1）試料

試料は、Ⅳ層より検出された水田遺構5箇所から採取された5点である。いずれも遺跡の調査担当者によって容量50cm^{3}の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。図3に分析試料の採取箇所を示す。

（2）分析結果

試料1g中のプラント・オパール個数を表2に示した。

分析の結果、イネはすべての試料から検出された。ただし、いずれも非常に低い密度である。ヨシ属はすべての試料から検出された。ただし、密度はいずれも低い値である。タケ亜科もすべての試料から検出された。このうち、試料番号S54を除くといずれも高い密度である。ウシクサ族は試料番号S52とS53から検出されたが、両者ともに低い密度である。キビ族は検出されなかった。

以上のように、すべての地点からイネが検出されたことから、当該遺構において稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし、プラント・オパール密度の平均は700個／gと非常に低い値である。プラント・オパール密度が低い原因としては、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③稲藁の大部分が水田外に持ち出されていたこと、④稲の生産性が低かったこと、などが考えられるが、ここでの原因は不明である。

5．まとめ

元袋遺跡において採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、水田跡の探査と検出水田遺構での稲作の検証を行った。その結果、最初に行った水田跡の探査では、盛土以外に水田層と考えられる土層は認められなかった。発掘調査において検出されたⅣ層水田跡からは、極微量ではあるがイネが検出され、同遺構において稲作

が行われていた可能性が推定された。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，10：281－298.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：15－29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：29－41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17：73－85.

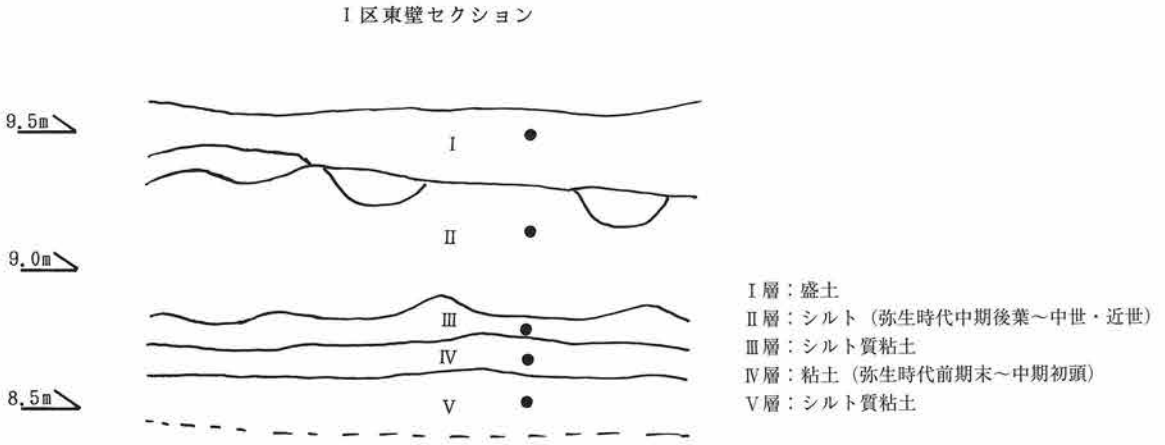


図1　土層断面図と分析試料の採取箇所

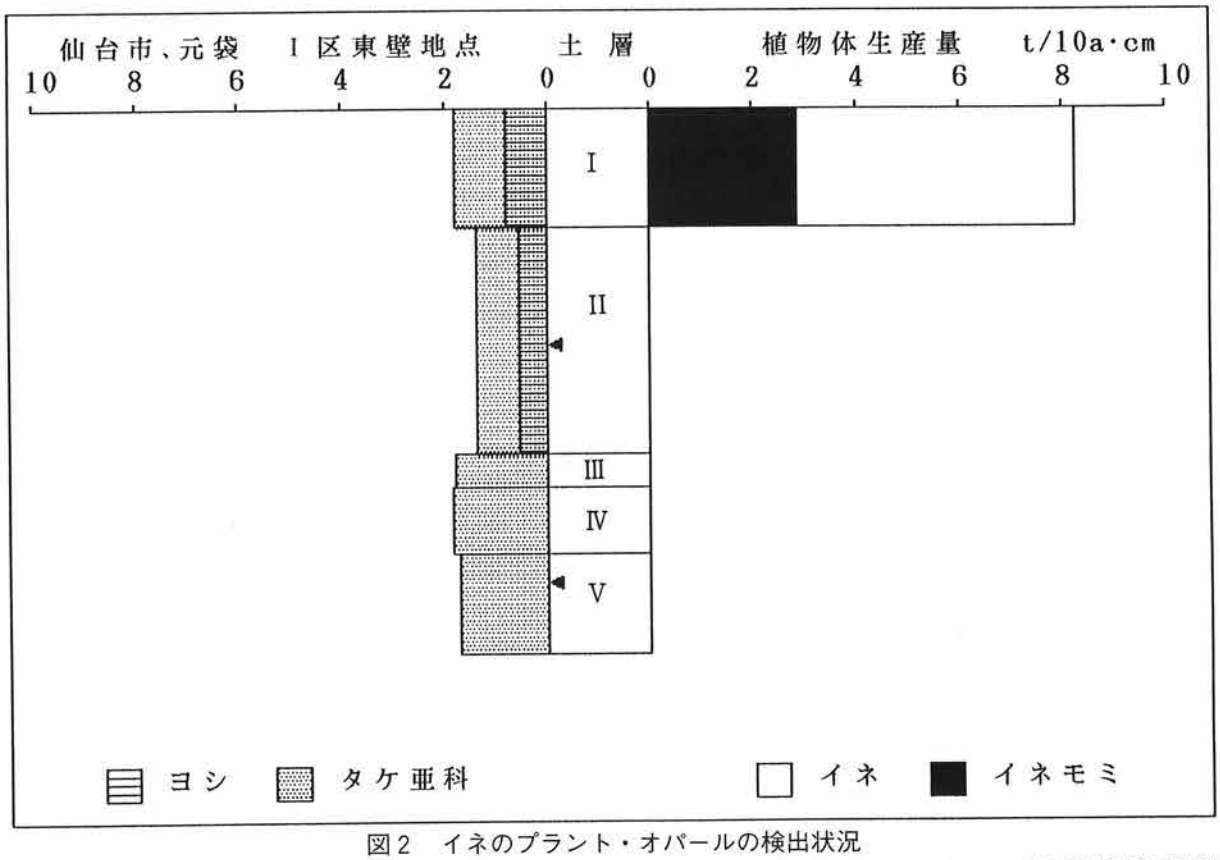


図2　イネのプラント・オパールの検出状況

（注）◀印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所

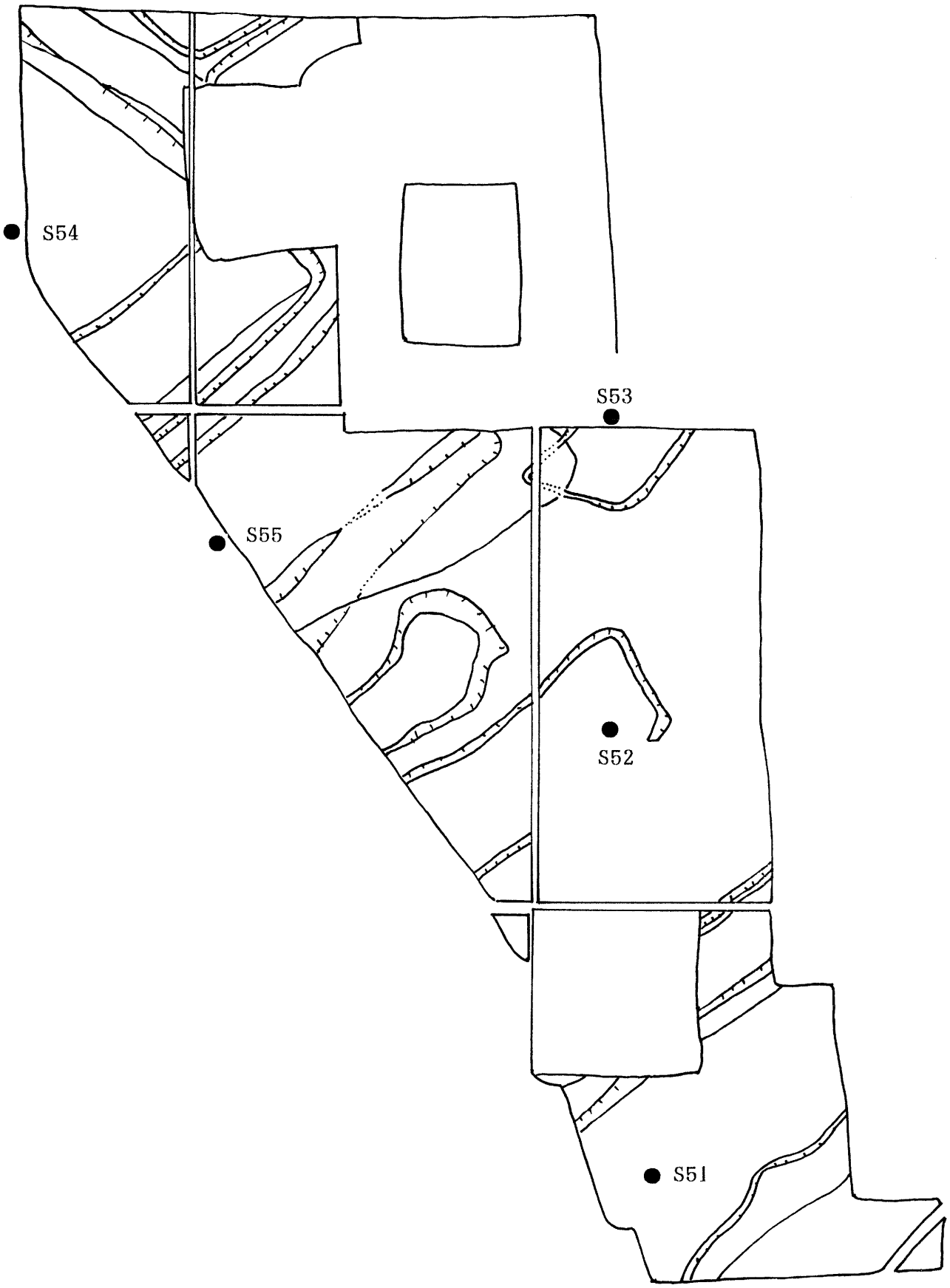


図３　試料採取地点

表1　プラント・オパール分析結果

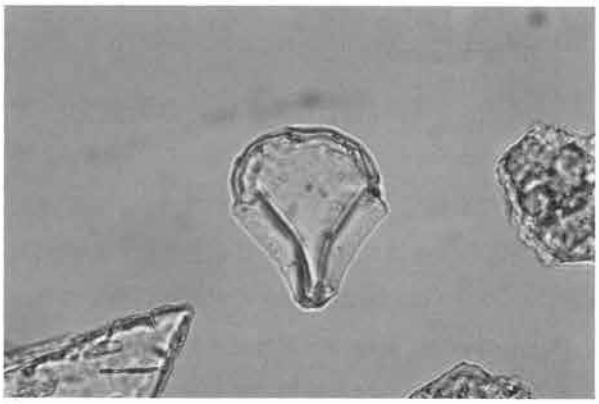
（単位：個／g）

試料名	イ　ネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ属	キビ族
Ⅰ	21,600	900	28,800	900	0
Ⅱ	0	700	26,900	0	0
Ⅲ	0	0	33,400	0	0
Ⅳ	0	0	33,000	1,400	0
Ⅴ	0	0	33,900	1,400	0

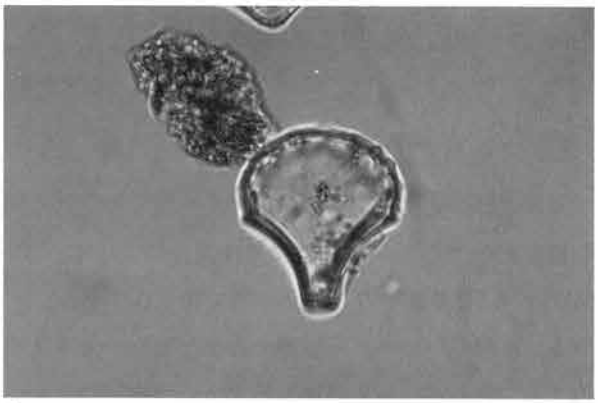
表2　プラント・オパール分析結果

（単位：個／g）

試料名	イ　ネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ属	キビ族
S51	700	700	16,400	0	0
S52	700	700	23,300	700	0
S53	700	700	32,400	2,300	0
S54	700	1,400	4,200	0	0
S55	700	700	22,500	0	0

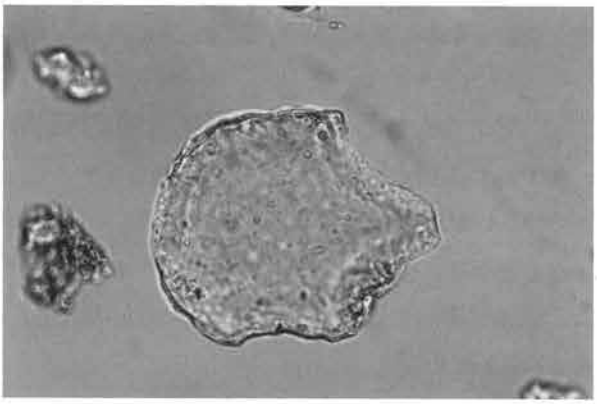


1

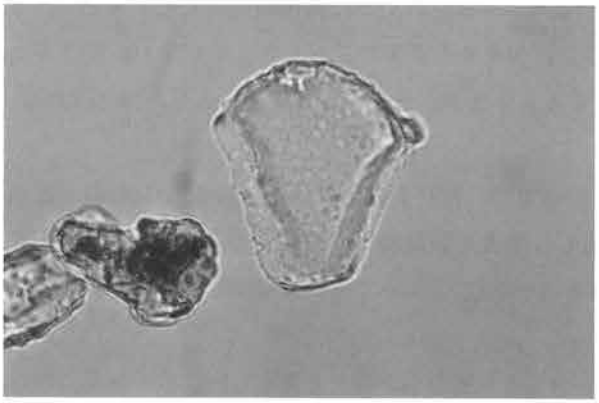


2

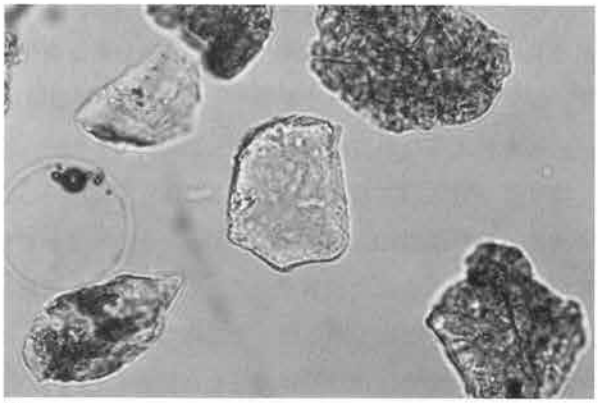
3



4



5



6

0　50　100 μm

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

No.	分　類　群	地　点	試料名
1	イネ	Ⅰ区東壁	Ⅰ
2	イネ	Ⅳ層水田跡	S51
3	イネ	Ⅳ層水田跡	S54
4	ヨシ属	Ⅳ層水田跡	S54
5	タケ亜科	Ⅰ区東壁	Ⅲ
6	タケ亜科	Ⅳ層水田跡	S53

元袋遺跡より出土した大型植物遺体

吉川純子（古代の森研究舎）

1．はじめに

元袋遺跡は仙台市太白区の笊川が蛇行して袋状の地形となった場所に立地しており、弥生時代から江戸時代までの複合遺跡である。ここでは発掘調査によって、江戸時代仙台藩関連の大規模な屋敷跡が発見された。屋敷跡はSD４からSD２までの二時期の堀で囲まれており、古い時期のSD４、SD３は同時期に存在の可能性も推定されている。木製品のほか、陶磁器や瓦など遺物の大半はこの堀から出土しており、遺物の時期は16世紀後半から18世紀前半まであるが、多くが16世紀末から17世紀代のものである。本遺跡の遺構からは多種類に及ぶ果実種子などの大型植物遺体が出土しており、河川に近く湿った場所であったため植物遺体の保存はきわめて良好であった。これらの大型植物遺体を詳細に観察、同定した結果から、当時の生業、周囲の環境などの推定を試みる。

2．出土した大型植物遺体の傾向

まず表１は土坑より出土した大型植物遺体で、SK13は火葬墓、SK27は井戸、SK22とSK28は火葬墓、SK37は井戸ではないが楕円形に掘られた土坑である。これらのほかに土坑としての用途は不明であるがSK11、SK20、SK31からも植物遺体を出土している。SK22については炭化物残渣の中に同定可能な植物遺体は認められなかった。なお、SK37においては５層の堆積物を約300cc採取し、0.25ミリ目の篩で水洗した残渣を顕微鏡下で選別した結果を表１に示してある。

出土傾向としては、イネ、アワ、キビ、ヒエ、オオムギ、コムギといった穀類やキュウリ属メロン仲間の種子を中心にウメ、モモといった木本の食用植物が随伴する。アズキまたはダイズといった食用の炭化したマメやソバも出土している。また、土坑SK37の堆積物からは食用植物のほかにヘラオモダカやイボクサ、ミゾソバ、ヤナギタデ、シロネ属のような水生植物や、住居や田畑の周辺に生育するようなギシギシやヒユ属、ミドリハコベ近似種、メナモミのような中生植物も出土した。

表２及び表３は二時期にわたる堀SD２、SD３、SD４と遺跡東方向に伸びる排水溝とみられるSD12の同定結果である。排水溝SD12は堆積物約300ccを0.25ミリ目の篩で水洗した残渣を顕微鏡下で選別した。また、堀試料の多くはすでに選別された試料であるが、SD３の１層J34及びSD４の２層I27については、体積は不明であるが水洗残差があったのでこれも顕微鏡下で選別した。

堀及び排水溝では食用植物のほかに周辺に生育していた植物からも供給が多かったと考えられ、木本16種、草本51種と多種類に及んでいる。木本では食用にされていたと考えられるウメ、モモのほか、湿地に生育するハンノキ、植栽していたと考えられるスギ、サワラ、キリなどを出土している。草本ではイネ、アワ、キビ、ヒエ、オオムギ、コムギ、ソバ、アズキ属またはダイズ属、エゴマ、キュウリ属メロン仲間、トウガラシ属が出土し、食用として利用されていたと考えられる。また、食用か否か不明であるがアサも利用植物である。水生植物では１個体のみではあるがSD12からは流水に生育するコバノヒルムシロを出土していることから、この排水溝は比較的栄養度の低い水が流れていたと推測される。また、堀や排水溝からは水生植物のヘラオモダカ、ウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、イシミカワ、ヒシ属などが出土している。中生植物ではギシギシ、ミチヤナギ近似種、シロザ近似種、コハコベ近似種、オヤブジラミ、アカネ属などを出土している。

表４は土坑、溝以外の住居にともなう遺構などから出土した植物遺体を示している。SX06のみ楕円形の用途不明の土坑である。これらの遺構からはほとんどイネやオオムギなどの炭化した穀類とオニグルミ、モモを出土した。また、常緑の木本であるシラカシの幼果を出土しており、立地的にシラカシが自生していたとは考えられない場所

であるため、屋敷内に植栽されていたと考えられる。

出土傾向をわかりやすくするため、遺構ごとに何種類かの植物について図示を試みた。ただし、SD12及びSK37は約300cc中の出土数であるが、ほかは定量されていないため、あくまでも出土しているか否かの目安としてのみの出土総数を図示してある。図１は堀SD２、SD３、SD４、及び排水溝SD12と井戸SK27、土坑SK37について主要な栽培利用植物について出土傾向を図示した。堀はSD３、４がほぼ同時期でSD２が新しい。図１によると、SD４、SD12はイネやヒエ、オオムギ、メロン仲間など生活残渣が比較的多く堆積している。また、SD３もヒエは堆積しているが全体に少なく、オニグルミやウメ、モモなどの食用木本が堆積している。SD２になると穀類は見つかっていない。また、土坑SK37はイネ、オオムギ、アサのような穀類などが堆積しているが、井戸SK27は比較的少ない。井戸は上水としての水を汲むために底さらいを頻繁に行い、ゴミなどが入らぬようにふたを閉めている井戸も多いため、使用している間は堆積物が溜まらず、井戸廃棄と同時に埋めてしまったとすれば、植物遺体の堆積がほとんどなかった可能性が高い。逆にSK37は炭化穀類やアサなどが堆積していることから、生活ゴミや周囲の土砂が流れ込んでいたものの、それほど底さらいを必要としなかった土坑と考えることもできる。

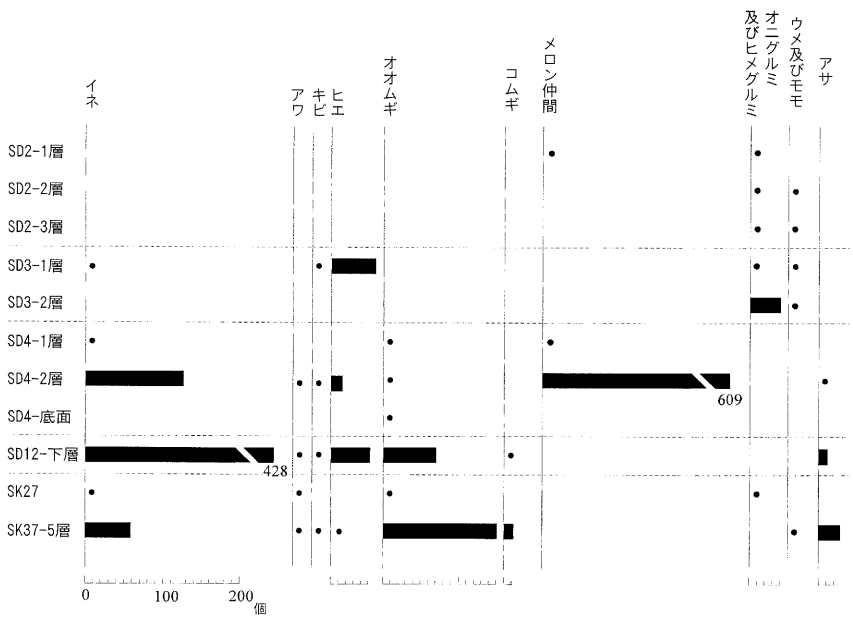


図１　元袋遺跡より出土した栽培植物（表示個数は種子総数、黒丸印は10個未満）

図２は堀SD３、SD４、及び排水溝SD12と土坑SK37で出土した水生植物５種類と中生植物７種類について出土傾向を図示した。図２ではSD２と井戸SK27は省かれているが、これは掲載した種類の出土が無かったためである。SD12とSK37では水生植物と中生植物が比較的まんべんなく出土している。堀ではSD４は水生植物も中生植物も出土しているが、SD３では木本のスギと水生植物を出土し、草本の中生植物は出土しない。水生植物が比較的多く出土したのは堀の中などにこれらの

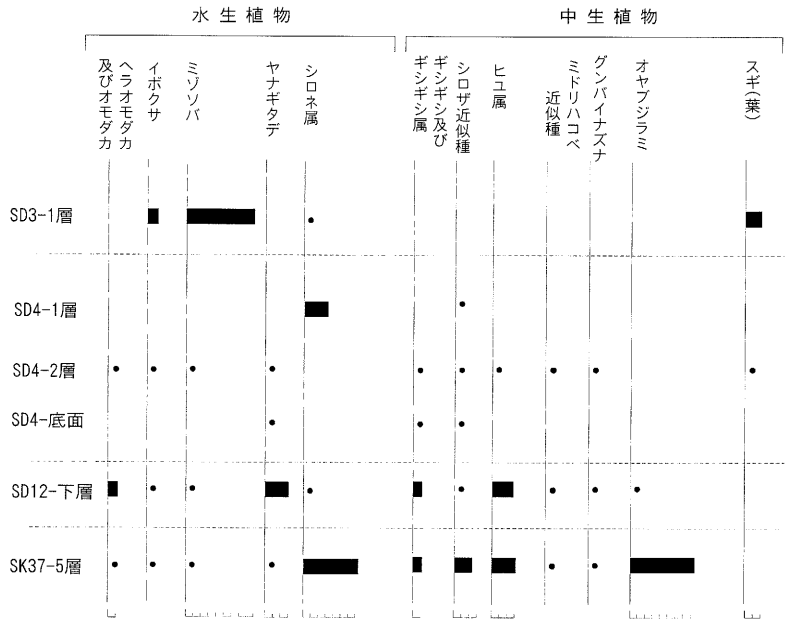


図２　元袋遺跡より出土した環境指標植物（１目盛りは10個、黒丸印は10個未満）

植物が生育していたと考えられる。また周囲に生育していたギシギシやミドリハコベなどの中生植物やスギなどが風や雨水によって堆積していたと考えられる。なお、新しい時期の堀SD２は炭化穀類や草本などをほとんど出土しないが、堀が使われていた期間が大変短かったか、屋敷自体が常駐ではなく短期的に使われる目的で存在していたとも考えられる。本遺跡ではイネに次いでオオムギの出土が目立つが、これはおそらく人間ではなく馬のための飼い葉として利用していたものと考えられる。

３．特筆すべき大型植物遺体の記載

ナス属Ａ、Ｂ：ナス属Ａは径2.5～４ミリではっきりとした網目がある。形状と大きさ等は栽培のナスに匹敵するが、現在栽培されているナスは網目の空隙が無く畝状になっているため形態としては異なっている。このナス属の種子形態については現在検討中である。ナス属Ｂは楕円不定形で２ミリ以下のものが多く、野生のイヌホオズキやマルバノホロシなどと考えられる。

不明Ａ：紡錘形で表面縦方向に比較的深い溝が数本はいる。最外層はスポンジ状であるが内層が木質で大変堅く内部には楕円形の空洞がある。構造的には果実種子では無いようである。仙台市の中在家南遺跡、高田Ｂ遺跡などの低湿地遺跡で多く出土しているが、どの植物のどの部位か判明していない。

表１　元袋遺跡土坑より出土した大型植物遺体

分類群名	学名		SK11 1層2	SK11 1層3	SK13 1層	SK13 茶毘墓	SK20 層なし	SK27 7層	SK27 9層	SK28 2層	SK28 層なし	SK31 層なし	SK37 2層	SK37 5層	(ﾌﾟﾛｯｸ)
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	炭化内果皮片	1						3						
ウメ	*Prunus mume* Sieb.et Zucc.	核風化	1												1
モモ	*P.persica* (Linn.)Batsch	核風化		2											
ヤマブドウ	*Vitis coignetiae* Pulliat	種子													3
マタタビ	*Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.)Planch. et Maxim.	種子													1
ニワトコ	*Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn.	内果皮													2
ヘラオモダカ	*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche	果実													7
オモダカ	*Sagittaria trifolia* Linn.	果実													2
イネ	*Oryza sativa* L.	穎	28										2		30
		炭化胚乳			5	1	1	1	1	3	3	1	1	25	29
アワ	*Setaria italica* Beauv.	穎													6
		炭化種子							1						3
キビ	*Panicum milliaceum* L.	穎												1	
		炭化種子													4
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	炭化種子			8	2		6	8	3				39	147
コムギ	*Triticum aestivum* L.	炭化種子												9	12
ヒエ	*Echinochloa Crusgalli* Beauv. var. *frumentacea* W.F.Wight.	穎													7
		炭化種子													3
ホタルイ属Ａ	*Scirpus* A	果実												1	7
イボクサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子													10
アサ	*Cannabis sativa* L.	果実													28
カナムグラ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.	果実													18
ソバ	*Fagopyrum sagittatum* Gilibert	果実													2
ギシギシ	*Rumex japonicus* Houtt.	果被													3
ギシギシ属	*Rumex*	果実													10
ミチヤナギ近似種	*Polygonum* cf. *aviculare* Linn.	果実													12
ミゾソバ	*P. thunbergii* Sieb.et Zucc.	果実													1
サナエタデ近似種	*P.* cf. *scabrum* Moench	果実													152
ヤナギタデ	*P. hydropiper* Linn.	果実													3
ネバリタデ近似種	*P.* cf. *viscoferum* Makino	果実													26
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* Linn.	種子													18
イノコズチ属	*Achyranthes*	果実													3
ヒユ属	*Amaranthus*	種子													31
コハコベ近似種	*Stellaria* cf. *media* (Linn.) Villars	種子													2
ミドリハコベ近似種	*S.* cf. *neglecta* Weihe	種子													1
ノミノフスマ近似種	*S.* cf. *alsine* Grimm var. *undulata* (Thunb.)Ohwi	種子													3
グンバイナズナ	*Thlaspi arvense* Linn.	種子													7
アズキ属またはダイズ属	*Vigna* or *Glycine*	炭化種子					1			1				1	5
マメ科	Legminosae	種子												1	
カタバミ属	*Oxalis*	種子													1
オヤブジラミ	*Torilis scabra* (Thunb.) DC.	果実													84
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実													10
シロネ属	*Lycopus*	果実													74
アカネ属	*Rubia*	種子													26
メナモミ	*Siegesbeckia pubescens* (Makino)Makino	果実													27
キュウリ属メロン仲間	*Cucumis melo* L.	種子	2	501											
ナス属Ａ	*Solanum* A	種子													2
ナス属Ｂ	*Solanum* B	種子													19
不明Ａ			2												

表2　元袋遺跡溝遺構より出土した大型植物遺体（1）

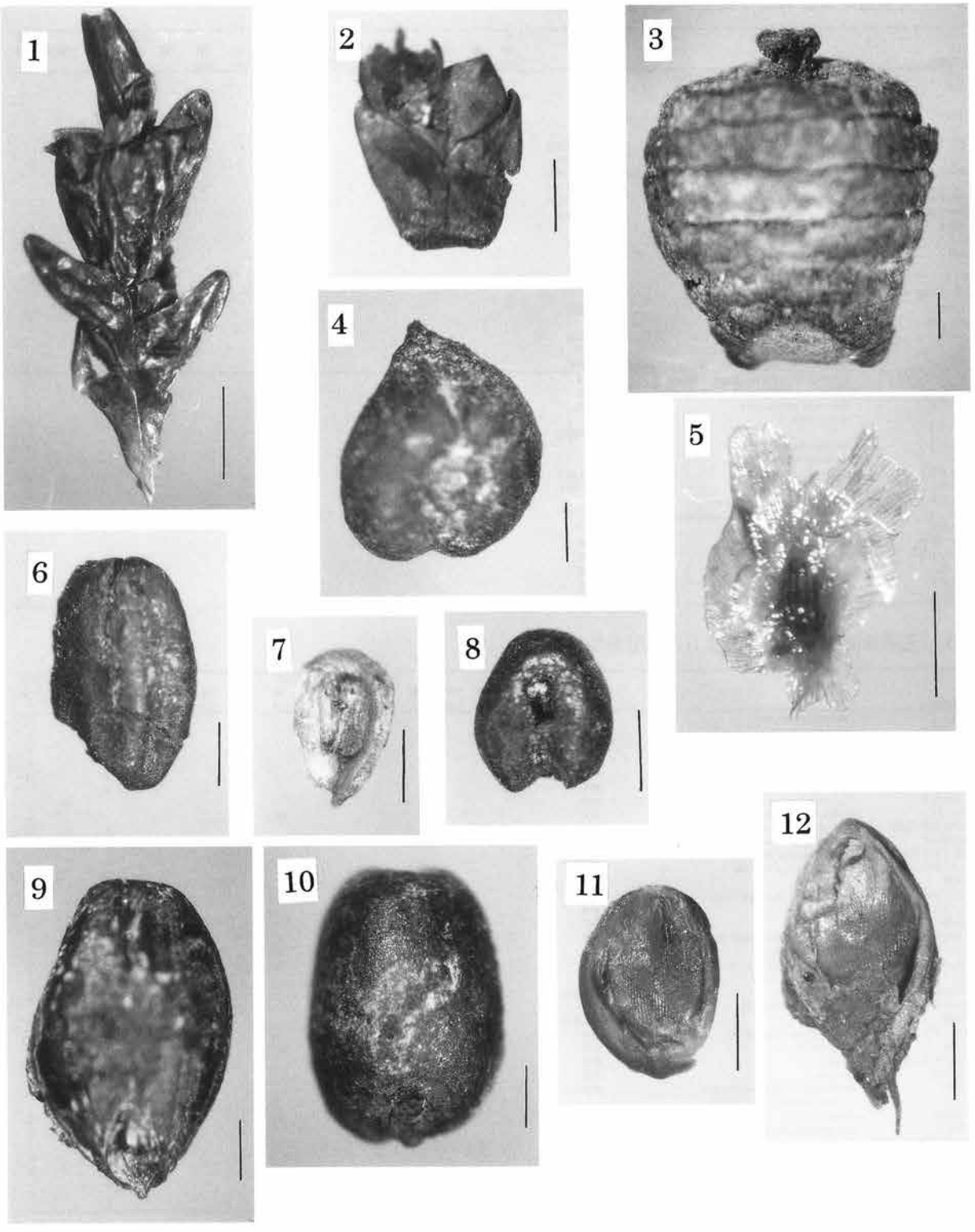
分類群名	学名		SD2 1層 G33	1層 K27	2層 H28	2層 K27	3層 H27	3層 H47	SD3 3層 I47	1層 J34	1層 K34	1層 K35	2層	SD4 1層 I28	2層 I27	底面上	SD12 下層
カヤ	*Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc.	種子			3	2		2	2								
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.) D.Don	種子								22					3		
		葉								20					6		
サワラ	*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.	球果													2		
		葉								1					30		
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮完形	1			1			1		1	3	20				
		完形食痕						1				1	1				
ヒメグルミ	*J. ailanthifolia* var. *cordiformis* (Maxim.)Rehder	内果皮完形				1		1				1	18				
		内果皮半分				1	1	1				3	3				
ハンノキ	*Alnus japonica* (Thunb.) Steud.	果実序破片						1									
コナラ属	*Quercus*	果実破片		1													
クワ属	*Morus*	種子													5		1
ウメ	*Prunus mume* Sieb.et Zucc.	核風化				1		1									
モモ	*P.persica* (Linn.) Batsch	核				7			1				1				
		核半分						1									
		核風化				1					1		1				
キイチゴ属	*Rubus*	核															2
ミズキ	*Cornus controversa* Hemsley	内果皮															1
エゴノキ	*Styrax japonica*							1									
クサギ	*Clerodendron trichotomum* Thunb.	内果皮														1	
キリ	*Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud.	種子								4					1		
ニワトコ	*Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn.	内果皮													2		2
コバノヒルムシロ	*Potamogeton cristatus* Regel et Maack	果実															1
ヘラオモダカ	*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche	果実													1		5
オモダカ	*Sagittaria trifolia* Linn.	果実															7
イネ	*Oryza sativa* L.	穎								3				1	127		414
		炭化胚乳															14
アワ	*Setaria italica* Beauv.	穎													1		1
キビ	*Panicum milliaceum* L.	穎								7					2		1
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	炭化種子												1	1	3	66
コムギ	*Triticum aestivum* L.	炭化種子															5
イヌビエ	*Echinochloa Crusgalli* Beauv.	穎								2							
ヒエ	*E. Crusgalli* Beauv. var. *frumentacea* W.F.Wight.	穎								58					15		52
イネ科A	Gramineae A	穎								5					5		1
ウキヤガラ	*Scirpus yagara* Ohwi	果実															1
ホタルイ属A	*Scirpus* A	果実													4	1	54
スゲ属	*Carex*	果実								5					1		
ツユクサ	*Commelina communis* Linn.	種子													1		
イボクサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子								14					1		3

表3　元袋遺跡溝遺構より出土した大型植物遺体（2）

分類群名	学名		SD2 1層 G33	1層 K27	2層 H28	2層 K27	3層 H27	3層 H47	SD3 3層 I47	1層 J34	1層 K34	1層 K35	2層	SD4 1層 I28	2層 I27	底面上	SD12 下層
アサ	*Cannabis sativa* L.	果実													1		12
カナムグラ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.	果実															4
ソバ	*Fagopyrum sagittatum* Gilibert	果実															4
ギシギシ	*Rumex japonicus* Houtt.	果被													1	1	1
ギシギシ属	*Rumex*	果実													6		12
ミチヤナギ近似種	*Polygonum* cf. *aviculare* Linn.	果実													3		
イシミカワ	*P. perfoliatum* Linn.	果実														19	
ミゾソバ	*P. thunbergii* Sieb.et Zucc.	果実								90					4		3
サナエタデ近似種	*P.* cf. *scabrum* Moench	果実													1	14	18
ヤナギタデ	*P. hydropiper* Linn.	果実													4	2	30
ボントクタデ近似種	*P.* cf. *pubescens* Blume	果実													1		
ネバリタデ近似種	*P.* cf. *viscoferum* Makino	果実												1	15		68
タデ属	*Polygonum*	果実													1		5
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* Linn.	種子												5	4	2	2
イノコズチ属	*Achyranthes*	果実														1	
ヒユ属	*Amaranthus*	種子													7		28
コハコベ近似種	*Stellaria* cf. *media* (Linn.) Villars	種子															2
ミドリハコベ近似種	*S.* cf. *neglecta* Weihe	種子													6		3
ノミノフスマ近似種	*S.* cf. *alsine* Grimm var. *undulata* (Thunb.)Ohwi	種子															2
グンバイナズナ	*Thlaspi arvense* Linn.	種子													1		7
アズキ属またはダイズ属	*Vigna* or *Glycine*	炭化種子															3
エノキグサ	*Acalypha australis* Linn.	種子													1		
ヒシ属	*Trapa*	果実破片											1				
オヤブジラミ	*Torilis scabra* (Thunb.) DC.	果実															7
セリ科	Umbelliferae	果実								4					1		
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実															6
シロネ属	*Lycopus*	果実								4				32			4
エゴマ	*Perilla frutescens* (Linn.)Britton var. *japonica (Hassk.)Hara*	果実破片													2		3
アカネ属	*Rubia*	種子															2
メナモミ	*Siegesbeckia pubescens*(Makino)Makino	果実													5		11
キュウリ属メロン仲間	*Cucumis melo* L.	種子		1										1	609		
ナス属A	*Solanum* A	種子															8
ナス属B	*Solanum* B	種子															26
トウガラシ属	*Capsicum*	種子													1		
ヤブタビラコ	*Lapsana humilis* (Thunb.) Makino	果実															1
不明A										446					7		

表4　元袋遺跡住居跡ほかより出土した大型植物遺体

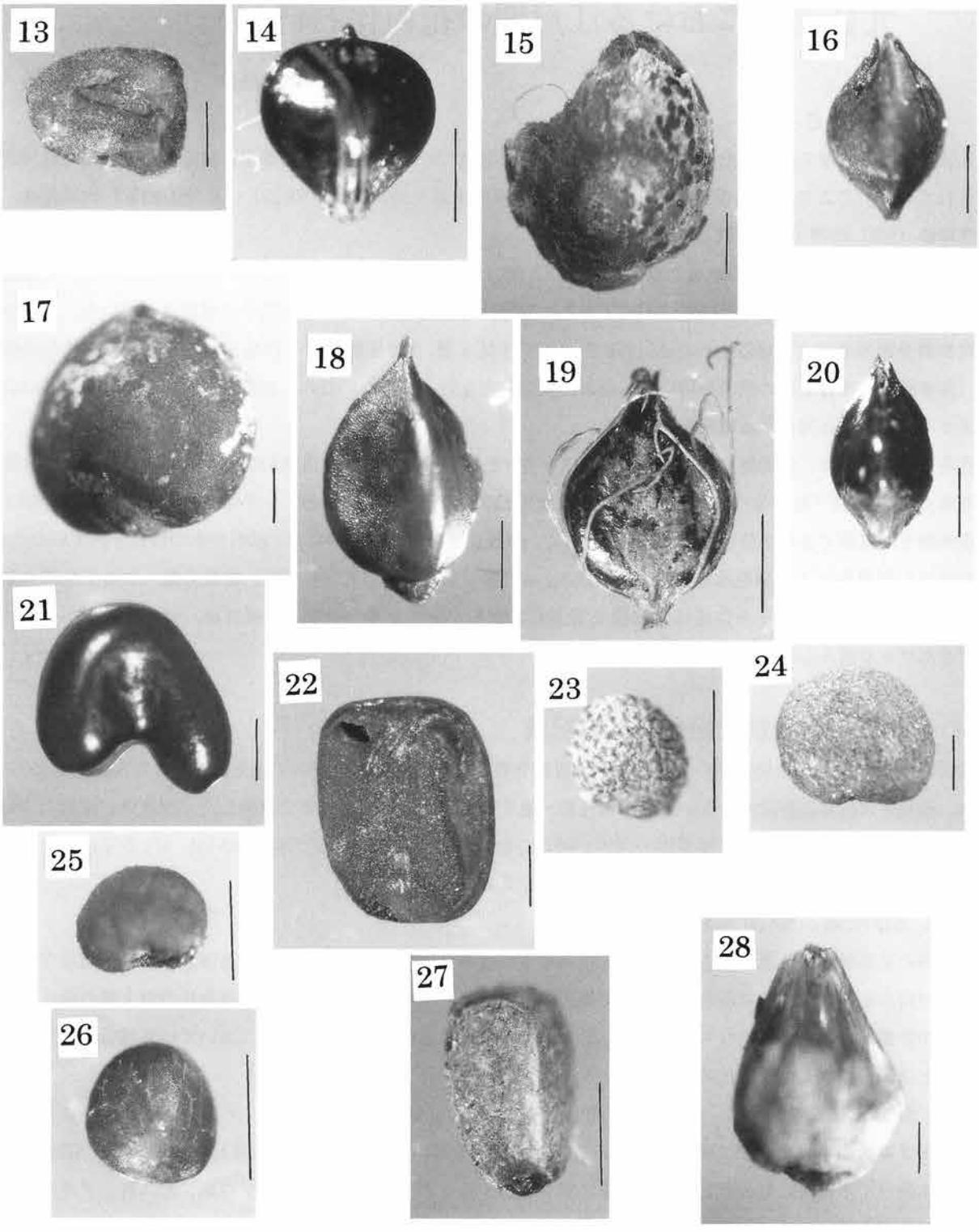
			SI13(a) 掘方	SI14(a) 1層	SI17 5層	SI21 竈2,3層	SX06 2層L18	C13 P115	G23,24 P123	F21 P154	P162	P305
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮半分							1	1		
		内果皮片					4				1	
シラカシ	*Quercus myrsinaefolia* Blume	幼果	1									
アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis	幼果		1								
モモ	*Prunus persica* (Linn.)Batsch	核									1	
		炭化核						1				1
イネ	*Oryza sativa* L.	穎										
		炭化胚乳			1	2						
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	炭化種子				2						
コムギ	*Triticum aestivum* L.	炭化種子				2						



図版1　元袋遺跡より出土した大型植物遺体（1）

1．スギ、葉（SD3-1層J34）2．サワラ、葉（SD3-1層J34）3．シラカシ、幼果（SI13a掘方）4．ヤマブドウ、種子（SK37-5層）
5．キリ、種子（SD3-1層J34）6．イネ、炭化胚乳（SK37-5層）7．ヘラオモダカ、果実（SK37-5層）8．キビ、炭化種子（SK37-5層）
9．オオムギ、炭化種子（SK37-5層）10．コムギ、炭化種子（SK37-5層）11．キビ、穎果（SD3-1層J34）12．ヒエ、穎果（SD3-1層J34）

スケールは1mm



図版２　元袋遺跡より出土した大型植物遺体（2）

13. イボクサ、種子（SD3-1層J34）14. ホタルイ属、果実（SK37-5層）15. アサ、種子（SD12下層）16. ギシギシ属、果実（SK37-5層）
17. カナムグラ、果実（SK37-5層）18. ミゾソバ、果実（SD3-1層J34）19. サナエタデ近似種、果実（SK37-5層）
20. ネバリタデ近似種、果実（SK37-5層）21. マメ科、種子（SK37-5層）22. アズキ属またはダイズ属、炭化種子（SK37-5層）
23. コハコベ近似種、種子（SK37-5層）24. ナス属A、種子（SK37-5層）25. アカネ属、種子（SK37-5層）
26. イヌコウジュ属、果実（SK37-5層）27. シロネ属、果実（SK37-5層）28. 不明A（SD3-1層J34）

スケールは１mm

元袋遺跡における江戸期の花粉化石群

吉川昌伸（古代の森研究舎）

1．試料と方法

元袋遺跡では、堀で囲まれた二時期の武士の屋敷跡が重複して発見され、仙台藩主に関連した施設の可能性が考えられている。ここでは、屋敷周辺の植生及び生業を解明するため、土坑（SK37）・溝（SD12下）内堆積物、及び住居跡（SI8）の覆土について調査した。

SD12溝はⅡ区東部の池状の窪地から東側に延びる溝、SK37土坑はSD12溝の北側に近接し５ｍ×3.5ｍの楕円形の土坑である。土坑の用途については不明である。時期は16世紀後半から18世紀前半と推定されている。分析試料は発掘調査担当者により採取されたSD12溝下、SK37土坑５層、SI8住居床面（1b層・埋土１層）及び住居外生活面（基本層Ⅱ・Ⅳ各層）の試料を用いた。なお、現地調査を行っていないため、位置及び層序などについては以下で示さないことから関係する項を参照されたい。

花粉化石の抽出は、住居跡試料については約２－３ｇをとり、10%KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒砂を取り除く－48%HF（約30分）－重液分離（重液は比重2.15に調整した臭化亜鉛）－アセトリシス処理（濃硫酸１：無水酢酸９の混液で湯煎７分）の順に処理を行った。溝及び土坑試料については、試料が水づけにされていたため、沈殿物から傾斜法により細粒成分を抽出し、250μｍの篩で篩分後に、KOH、HF、重液分離－アセトリシス処理の順に行った。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。

2．堆積物及び花粉化石群の記載

元袋遺跡より産出した分類群のリストとその個数を表１に、溝と土坑については主要花粉分布図を図１に示す。なお、出現率は樹木花粉数が少ないことから花粉・胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図版に示したAFR. MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

a．SD12溝、SK37土坑

各試料の産出状況は不明であるが、溝と土坑内堆積物は木材化石や種実などの植物遺体からなり、環境ゴミと生活ゴミが何らかの要因により掃き寄せられて集積した遺体層とみられる。遺体層とは植物体の地上部の破片・部分が何らかの要因により掃き寄せられて集合したもので、生育する植物がその生育地において枯死埋積して形成された泥炭とは区別される（辻，1999）。

さて、SK37土坑５層からは、クワ科が多産し、イネ科（イネ属型）やアカザ科、ヒユ科、セリ科、ヨモギ属などを産出する。樹木は全体で３％と低率で、スギ、コナラ亜属、クリなどを僅かに産出する。一方、SD12溝下では、イネ科（イネ属型）を多産し、クワ科やアブラナ科、ヨモギ属が比較的多く、ソバ属、ヒユ科、アカザ科、セリ科、ヒルガオ属、ベニバナ属などを伴う。また、抽水植物のオモダカ属やキカシグサ属が産出する。樹木は全体で11%を占め、落葉広葉樹のコナラ亜属やブナ、イヌブナ、低木のニワトコ属、針葉樹のマツ属複維管束亜属やスギなどを産出する。いずれの試料もクワ科は、花粉形態から草本のカラハナソウ属ないしアサ属とみられる。なお、カラハナソウ属とアサ属は、クワ科を２科に分けてアサ科とする分類体系もある。

b．住居跡床面及び住居外生活面

住居跡の覆土試料は、住居床面の1b層と埋土１層はにぶい黄褐色シルト質極細粒砂、住居外生活面のⅡ層が床面と同様のにぶい黄褐色シルト質極細粒砂、Ⅳ層がにぶい黄褐色シルトからなる。これら住居跡試料の有機物量は

11－13%と低い。なお、有機物量については強熱減量試験により行い、るつぼを電気マッフル炉中に置き750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。

各試料とも花粉化石は産出しないか、あるいは極めて稀で、草本起源と推定される炭片が多く含まれる。

表1　元袋遺跡より産出した花粉化石の組成表

和　　名	学　　名	SK37 5層	SD12 下	SI8 1b層	SI8 埋土1	SI8 II層	SI8 IV層
樹　木							
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*		4		1		
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)						
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	3	3				
イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae		1				
ヤナギ属	*Salix*		2				
サワグルミ属	*Pterocarya*		1				
クルミ属	*Juglans*		1				
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*		3				
カバノキ属	*Betula*		5				
ハンノキ属	*Alnus*	1	7		1		
ブナ	*Fagus crenata* Blume		8				
イヌブナ	*Fagus japonica Maxim.*	2	5				
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	3	22				
クリ属	*Castanea*	3	1				
ケヤキ属	*Zelkova*		1				
モチノキ属	*Ilex*		1				
トチノキ属	*Aesculus*				1		
ツツジ科	Ericaceae		1				
ニワトコ属	*Sambucus*	1	11				
草　本							
オモダカ属	*Sagittaria*		10				
イネ科（イネ属型）	Gramineae (*Oryza* type)	35	275		1		
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	8	33				
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	5				
ツユクサ属	*Commelina*		1				
ユリ科	Liliaceae		1				
クワ科	Moraceae	354	96				
タデ属サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon		3				
ソバ属	*Fagopyrum*	1	1				
アカザ科	Chenopodiaceae	10	13				
ヒユ科	Amaranthaceae	19	19				
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	3				
アブラナ科	Cruciferae	3	37				
バラ科	Rosaceae		4				
マメ科	Leguminosae		3				
ツリフネソウ属	*Impatiens*		2				
キカシグサ属	*Rotala*		1				
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1					
セリ科	Umbelliferae	7	8				
ヒルガオ属	*Calystegia*		3				
シソ科	Labiatae	1					
オオバコ属	*Plantago*		1				
ヤエムグラ属－アカナ属	*Galium - Rubia*		1				
ベニバナ属	*Carthamus*		2				
ヨモギ属	*Artemisia*	27	69				
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	32				
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	8				
シダ植物							
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*		1				
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	1	2			1	1
樹木花粉総数	Total arboreal pollen	13	77	0	3	0	0
草本花粉総数	Total nonarboreal pollen	472	631	0	1	0	0
シダ植物胞子総数	Total fern spores	1	3	0	0	1	1
花粉・胞子総数	Total pollen and spores	486	711	0	4	1	1
不明花粉	Unknown pollen	6	5	0	1	0	0

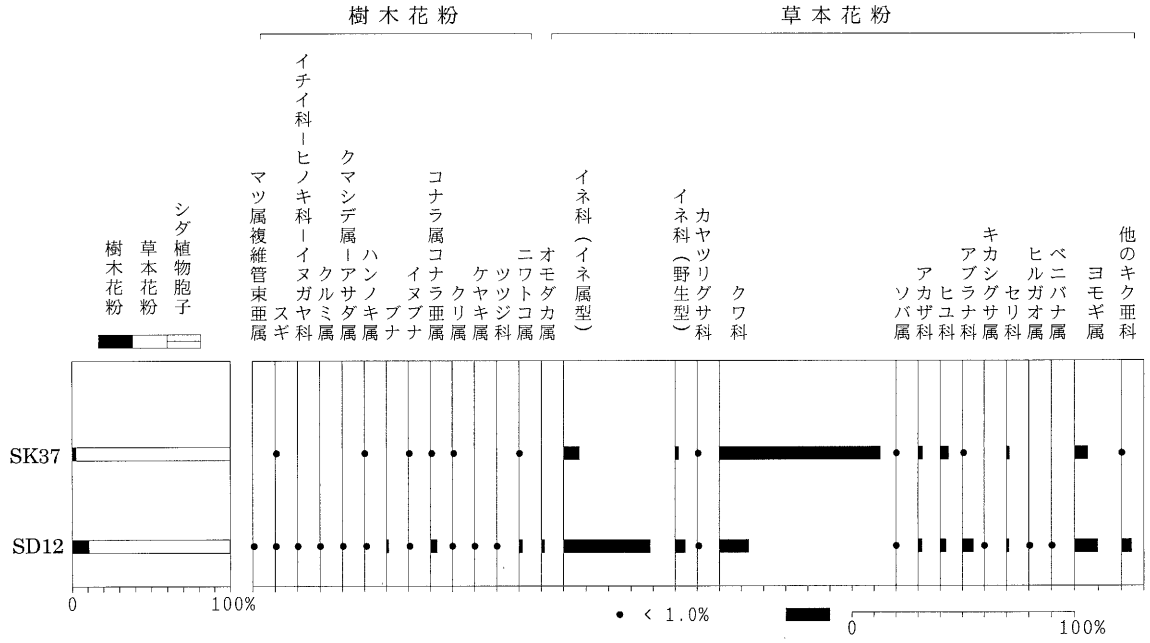


図１　元袋遺跡のSK37土坑、SD12溝の主要花粉分布図
（出現率は、花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

３．花粉化石群からみた若干の考察

SD12溝とSK37土坑試料は、いずれも同様の堆積物からなり、花粉化石群は比較的類似した組成を示す。すなわち、クワ科とイネ科（イネ属型）が高率ないし比較的高率に占め、ソバ属、ヒユ科、アカザ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属などからなり、樹木花粉は稀である。堆積物は、遺体屑を主とし、植物遺体以外の無機物は稀で、流水等により掃き寄せられて堆積した様相を呈する。樹木花粉が稀であること、堆積物が選択的であることから短期間に堆積したと推定され、いずれの試料も季節性を反映した結果と推定される。つまり、SK37土坑ではクワ科が卓越することから夏～初秋に、SD12についてもイネ属型やクワ科からなることから概ね同じ季節に堆積したとみられる。

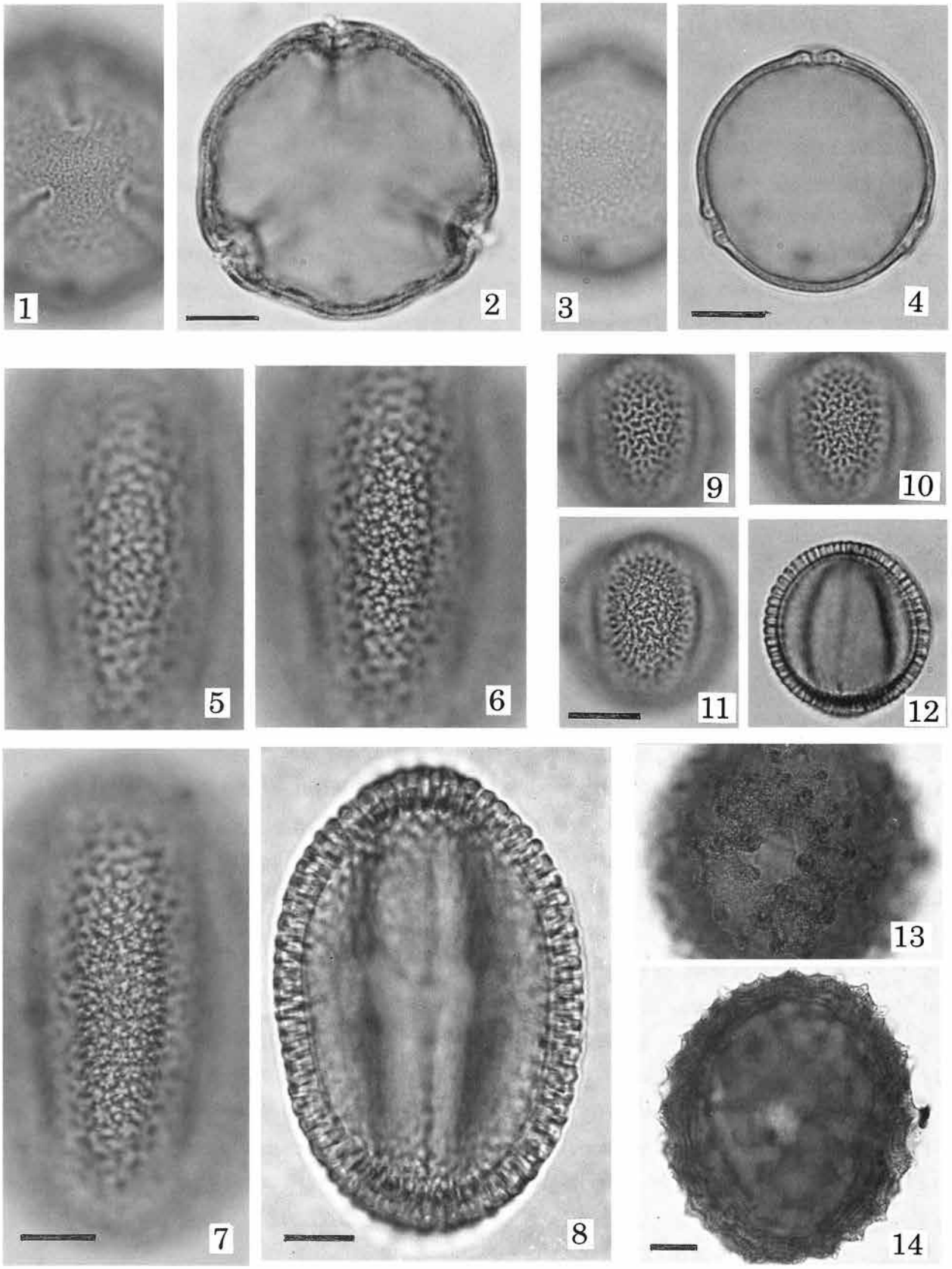
SD12溝ではイネ科（イネ属型）が多産するが、こうした花粉の多くは周囲の水田から流水により搬入されたと推定されるが、籾内には花粉粒が残留していることから洗米の廃水などによる可能性もある。一方、SK37土坑周辺においてはクワ科の草本が繁茂していたとみられる。大型植物遺体ではアサとカナムグラが産出しているが、アサであれば周囲で栽培されていたことになる。他に栽培植物としてはソバ属とベニバナ属が産出している。屋敷の植栽については、樹木花粉が稀であること、流水により搬入された花粉が多いとみられることから、これら資料から植栽を特定することは難しい。

住居跡の覆土は、江戸時代と新しい時期の堆積物であることから、花粉化石が得られる可能性が期待されたが、皆無に近い状態であった。花粉が得られなかった要因の１つとしては、試料が生活面（覆土に覆われる直前の床表面）そのものでなかったことが考えられる。花粉の外壁は一般に風化土壌やロームなどの酸化条件下では分解されるが、風化土壌でも敵湿で強い酸性（pH5.0より酸性）を示す土壌は分析の対象となりうる（三宅・中越（1998））ことから、生活面そのもので土壌条件さえあえば植生や生業復元のための資料が得られる可能性はある。

引用文献

三宅　尚・中越信和．1998．森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，６巻，１号，15-30.

辻誠一郎．1999．歴史資料としての植物遺体．国立歴史民族博物館編「考古資料と歴史学」，207-230，吉川弘文館，東京.



図版1　元袋遺跡から産出した花粉化石

1－2：イヌブナ（Fagus japonica）、SD12溝下、AFR. MY 1265.　3－4：クワ科（Moraceae）、SK37土坑5層、AFR. MY 1271.
5－8：ソバ属（Fagopyrum）、SD12溝下、AFR. MY 1267.　9－12：アブラナ科（Cruciferae）、SD12溝下、AFR. MY 1264.
13－14：ベニバナ属（Carthamus）、SD12溝下、AFR. MY 1270.

（スケールは10μm）

元袋遺跡出土材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1．試料

試料は202点で、近世のものとされる建物や堀跡などの遺構から検出されたものである。漆器・箸などの食事具や下駄・曲物・桶などの日用品、橋杭などの土木・建築用材などと推定されているが、用途が不明のため形状で表記されているものもある（表1参照）。

遺跡は笊川右岸の、笊川が大きく蛇行して袋状になった場所（標高約10m）に位置している。遺跡は弥生時代から江戸時代までの複合遺跡であるが、試料は近世初期のものとされている堀で囲まれた、大規模な武士の屋敷跡とその関連施設とみられる遺構から検出されたものである。屋敷跡は新旧二時期のものが重複して確認され、仙台藩主との関連も考えられている。なお、遺構によっては近世前半あるいは後半と推定されているものもあるが、すべての遺構の時期が確定しているわけではないため本報文では近世のものとして一括して扱うこととする。

2．方法

プレパラートの作製には、筆者が遺物から採取した材片を用いた。材片は年輪界を少なくとも一つ（足かけ2年分）含み、かつできるだけ少ない量となるよう調査担当者と協議しながら採取した。剃刀の刃を用い、材片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラールで封入したプレパラートを、生物顕微鏡で観察・同定した。併せて分類群ごとに比較的状態のよいもの1点を選び、顕微鏡写真図版を作成した（図版1－8）。作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3．結果

試料の中には劣化や変形などのため同定ができなかったものが5点あった。確実な同定ができず類似種としたものを含む197点が以下の23分類群（ここでは亜科・属・亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。針葉樹7分類群、広葉樹15分類群、非樹木1分類群である。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は以下のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、現生種の県内での自然分布については「北本州産高等植物チェックリスト」（上野 1991）を参照した。また、一般的性質などについては「木の事典　第1～7・13・14・16巻」（平井 1979－1982）も参考にした。（　）の中の試料番号は類似種としたものを示している。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon* sp.）マツ科

Lb1，Lc3a，Lc4a，Lc31，Lc45a，Lc60・66・67④c，Lc60・66・67④d，Lc68

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1－15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

複維管束亜属（二葉松類）には3種あるが、県内にはクロマツ（*Pinus thunbergii*）とアカマツ（*P. densiflora*）の2種が分布する。クロマツは本州～琉球の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。アカマツは北海道南部から九州に自生し、また植栽される。材は重硬で、強度は大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途がある。

・マツ属単維管束亜属（*Pinus subgen. Haploxylon* sp.）マツ科

Lc3b

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁は滑らかで、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1－15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

単維管束亜属（五葉松類）には4種といくつかの変・品種があるが、県内にはハイマツ（*Pinus pumila*）とゴヨウマツ（ヒメコマツ）（*P. parviflora*s）が自生する。ハイマツは北海道・本州（中部地方以北）の高山・寒冷地に、ゴヨウマツは北海道（日高・渡島・奥尻島）・本州・四国・九州に分布する。ゴヨウマツは尾根筋や斜面に生育する常緑高木で、まれに植栽される。材の硬さは中程度で、加工や乾燥は容易、保存性は中程度である。建築・建具・器具・家具材などの用途がある。

・モミ属（*Abies* sp.）マツ科

Lb23，Lc32，Lc34，Lc47，Lc56

早材部から晩材部への移行はやや緩やか～緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなり、柔細胞内壁は粗く、末端壁にはじゆず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で1－4個。放射組織は単列、1－30細胞高。

モミ属は国内に5種あるが、県内にはモミ（*Abies firma*）とオオシラビソ（アオモリトドマツ）（*A. mariesii*）の2種が分布する。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、オオシラビソは本州（中部地方以北）の亜高山帯に分布する常緑高木である。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途がある。

・スギ（*Cryptomeria japonica*）スギ科

Lb3，Lb22，Lc17①，Lc36，(Lc43)，(Lc45b①)，Lc46，Lc51，Lc53，Lc54，Lc55，Lc60・66・67②，Lc60・66・67③a，Lc60・66・67③b，Lc60・66・67④a，Lc60・66・67④b，(Lc87)

早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型で2－4個。放射組織は単列、1－15細胞高。

Lc43，Lc45b①，Lc87は肉眼では年輪界と見えたものが真の年輪界ではなく（＝偽年輪）、試料が1年に満たなかったため類似種としたが、ほぼ確実と思う。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在、植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属（*Chamaecypsris* sp.）ヒノキ科

Lb2，Lb6，Lb18，Lb19，Lc4b，Lc5a、Lc5b，Lc6，(Lc9)，Lc10，Lc11①，Lc13，Lc17②，Lc17③，Lc20，Lc21，Lc24，Lc27，Lc28①，Lc28②，Lc33①、LC33②，Lc33③，Lc33④，Lc35，Lc41，Lc42，Lc44①，Lc44②，Lc44③，(Lc45b②)，Lc48，

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型（Cupressoid）で1－4個。放射組織は単列、1－20細胞高。

Lc9，Lc45b②はともに劣化が著しい。

ヒノキ属にはヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）とサワラ（*C. pisifera*）の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に自生し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積をもつ重要樹種である。材はやや軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・イチイ（*Taxus cuspidata*）イチイ科

Lc50，No.98

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はトウヒ型（Piceoid）～ヒノキ型で1－2個。放射組織は単列、1－10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イチイは北海道から九州に分布する常緑高木である。本州（主として日本海側）には低木性の変種キャラボク（*Taxus cuspidata* var. *nana*）があり、庭木として植栽されることも多い。材はやや重硬で、強度は大きく、加工は容易、保存性とくに耐水性に優れる。材質は緻密で光沢があり、仕上がりは美しい。笏や鉛筆など特殊な用途が知られ、彫刻・細工物・建築装飾材・器具・家具・機械・楽器材など各種の用途が知られている。

・カヤ（*Torreya nucifera*）イチイ科

Lc86，Lc114

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1－4個。放射組織は単列、1－10細胞高。仮道管内壁には2－3本が対をなしたらせん肥厚が認められる。

カヤは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で、樹高25－30mにもなるが生長はきわめて遅い。庭木として植栽されることも多く、いくつかの変・品種がある。材は針葉樹としては重い方で、強度は中程度、割裂性は大きく、加工は容易、保存性とくに耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られ、碁盤としては最高級品とされる。

・ヤナギ属（*Salix* sp.）ヤナギ科

Lb7，Lc113，Lc116－118，Lc123

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管孔は単独および2－3個が複合、横断面では楕円形～やや角張った楕円形、管壁厚は中庸。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1－15細胞高。柔組織は随伴散在状、ターミナル状。年輪界はやや明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、種間雑種も多く分類の困難な群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。県内にはマルバヤナギ（*Salix chamaenomeloides*）やタチヤナギ（*S. subfragilis*）など14種が分布する。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく耐朽性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で、とくに重要な用途は知られていない。

・カバノキ属（*Betula* sp.）カバノキ科

Lc1

散孔材で、管孔は放射方向に２－４個が複合または単独で配列、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段（bar）数は10－20、壁孔は小型で密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、１－４細胞幅、１－30細胞高。柔組織はターミナル状および短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

カバノキ属は国内に11種があり、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木～低木である。県内にはウダイカンバ（*Betula maximowicziana*）やダケカンバ（*B. ermanii*）など５種が自生する。このうちミズメ（*B. grossa*）は日本固有種で、本州（岩手・新潟県以南）・四国・九州の山地に生育する。ミズメの材は重硬・強靱で、各種の道具・器具材、木地・家具材などに用いられる。

・ブナ属（*Fagus* sp.）ブナ科

La1，La2，La3，La4，La5，La6，La7，La8，La9，La10，La11，La12，La13，La14，La15，La16，La17，La18，La19，La20，La21，La22，La23，La24，La25，La26，La27，La28，La29，La30，La31，La32，La33，La34，La35，La36，La37，La38，La39，La40，La41，La42，La43，La44，La45，La46，La47，La48，La51，La52，La53，La54，La56，La57，La58，La59，La60，La61，La62，La63，La64，La65，La71，La72，Lc15，Lc18

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２－３個が複合、横断面では多角形、管壁は中庸～薄く、分布密度は高い。道管はほぼ単穿孔をもつが、晩材部では段数が10前後の階段穿孔をもつものもある。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は明瞭。

ブナ属はブナ（*Fagus crenata*）とイヌブナ（*F. japonica*）の２種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナの方がブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落を作ることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木である。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.）ブナ科

Lc89，No. 89

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（ドングリ）が開花した年に熟すグループで、カシワ（*Quercus dentata*）・ミズナラ（*Q. crispula*）・コナラ（*Q. serrata*）・ナラガシワ（*Q. aliena*）といくつかの変・品種がある。カシワ・ミズナラ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（青森県を除く）・四国・九州に分布する。平野部に普通にみられるコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科

Lb11，Lb17，Lb20，Lc19，Lc23，Lc29，Lc49，Lc52，Lc60・66・67①，Lc83，Lc84，Lc85a、Lc85b，Lc88，

Lc103，Lc104，Lc105，Lc107，Lc108，Lc109，Lc111，(Lc112)，Lc115，Lc116－118，Lc122，Lc124，Lc125，Lc126，Lc128，Lc129，No. 93

環孔材で孔圏部は１～多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および２－３個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、管壁はともに薄い。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状～網目状となる。放射組織は同性、単列、１－15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

Lc112は乾燥による収縮・変形が著しいため確定できない。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椪木などに用いられる。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*）ニレ科

Lb8b，Lb13，Lb14，Lb15b，Lb25

環孔材で孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独。小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－10細胞幅、１－30（60）細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

・ヤマグワ（*Morus australis*）クワ科

Lb24，Lc110

環孔材で孔圏部は１－５列、晩材部に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または２－３個が複合する。小道管は管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－４細胞幅、１－50細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道から九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。材はやや重硬で強靭、加工はやや困難、耐朽性は高い。装飾材や器具・家具材などに用いられる。

・モクレン属（*Magnolia* sp.）モクレン科

Lb5，Lb8a、Lb12，Lb15a、Lb16，Lb21，Lc26，Lc60・66・67⑤

散孔材で管壁は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２－４個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は国内に６種あるが、県内にはホオノキ（*Magnolia obovata*）・コブシ（*M. praecocissima*）・タムシバ（*M. salicifolia*）の３種が自生する。このうちホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途も知られている。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum*）カツラ科

La50，Lc22

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または２－３個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔をもち、段数は20以上。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に分布する落葉高木である。カツラ属にはこのほかに、本州北・中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ（*Cercidiphyllm magnificum*）がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径材が多く欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

・ヤブツバキ類似種（cf. *Camellia japonica*）ツバキ科

Lc2

散孔材で、放射組織は異性、１－３細胞幅、１－20細胞高。結晶細胞が認められる。その他の特徴は十分観察できない。このため写真図版は作成していない。

ヤブツバキは本州から九州の主として沿海地に自生し、また多くの変・品種があり植栽される。材は重硬・強靭で割れにくく、加工は困難、耐朽性は高い。器具・旋作・薪炭材などに用いられる。

・トチノキ（*Aesculus turbinata*）トチノキ科

La55

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または２－３個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１－15細胞高で階層状に配列し、肉眼では横縞のリップル・マーク（ripple mark）として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道（南西部）・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に自生する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥は容易で、耐朽性は低い。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

・コシアブラ（*Acanthopanax sciadophylloides*）ウコギ科

Lb10

環孔材であるが大道管の配列が接線方向に連続せず、間に小道管が分布するため明瞭な孔圏部として認められない。管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または２－８個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１－４細胞幅、１－30細胞高。柔組織は散在状。年輪界は明瞭。

コシアブラは北海道から九州の山地に自生する落葉高木である。材は軽軟で、割裂しやすく、器具・印判・旋作・薪炭材などの用途が知られている。

・ハリギリ（*Kalopanax pictus*）ウコギ科

Lb4

環孔材で孔圏部は１－２列、孔圏外で急に管径を減じたのち漸減させ、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。

大道管は横断面では円形～楕円形、ほぼ単独、小道管は横断面では多角形で複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１－８細胞幅、１－40細胞高で時に鞘状の細胞が認められる。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ハリギリ（センノキ）は本州から九州の山地林内に自生する落葉高木である。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、耐朽性はあまり高くない。家具材のほか建築内装・器具・機械・彫刻材などの用途が知られている。

・トネリコ属（*Fraxinus* sp.）モクセイ科

Lc120、Lc121

環孔材で孔圏部は２－３列、孔圏外で急に管径を減少させたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔をもち、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。

放射組織は同性（～異性）、１－４細胞幅、１－40細胞高であるが20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

トネリコ属は国内に９種があり、いずれも落葉高木である。県内にはヤチダモ（*Fraxinus mandshurica* var. *japonica*）やトネリコ（*F. japonica*）など６種が自生する。材質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などに用いられる。

・ニワトコ（*Sambucus sieboldiana*）スイカズラ科

Lc127

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、２－８個が複合または単独で接線方向に配列することがある。道管は単穿孔をもち、壁孔は大型で交互状に配列する。放射組織は異性、１－４細胞幅、１－30細胞高。時に鞘状の細胞が認められる。年輪界は不明瞭。

ニワトコは本州・四国・九州の山野に普通の落葉低木～小高木で、いくつかの変・品種があり、ときに植栽される。御幣など民俗的には重要な用途があるが、材の用途には特に重要なものはない。

・イネ科タケ亜科（*Gramineae subfamily Bambusoideae* sp.）

Lc11②，Lc17④

基本組織の中に維管束が散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科（タケ・ササ類）には多数の種が含まれるが、解剖学的特徴のみでは区別できない。

Lb9，Lc16，Lc30，Lc106，Lc119は広葉樹（散孔材または散孔材？）であったが、組織の劣化や変形が進み、その特徴がほとんど観察できなかった。

以上の同定結果を出土遺構や推定されている用途などとともに一覧表で示す（表１）。

４．考察

今回同定対象とした試料の主な用途別の樹種構成をみると、用途によって、特定の樹種を選択的に用いていると判断できるものと比較的多様な樹種が用いられているものがあるようである（表２）。

漆器は試料数のほぼ１／３を占める66点が同定対象とされた。器種では椀（大椀を含む）が58点と多く、鉢（鉢？を含め４点）・蓋？（３点）・皿（１点）もある。用材はブナ属が64点と圧倒的多数を占め、カツラとトチノ

キ（各１点）も認められた。本遺跡との関連も考えられている仙台城三ノ丸跡出土の漆器（手元の資料では器種まではわからないが）でもブナが多用されている[注1)]（仙台市教育委員会1985）。本試料とはその所属年代が前後するようであるが、中田南遺跡の中世とされる屋敷跡から出土した漆塗椀14点・漆塗皿１点と富沢遺跡第88次調査で検出された18世紀のものとされる土坑から出土した漆塗椀１点もブナ属製であった（高橋1994－1995）。また今泉城跡出土の中世～近世とされる漆器でもブナが多く認められており[注2)]（木村・内藤1983）、仙台市域の中・近世の漆器（特に椀）はブナ属（おそらくブナ）製のものが中心であったとみてよさそうである。

先に筆者は中田南遺跡出土試料の用材を検討した中で、漆器の用材のブナ属をブナと想定し、その原木の生育地は高館丘陵・青葉山丘陵以遠の高標高地であり、県外の可能性もあるとした（高橋1994）。本試料についても同じ推論が成り立つと思う。県内には鳴子町・七ヶ宿町・蔵王町・白石市など著名な漆器（木地）産地があり、また隣接する岩手・秋田・山形・福島各県にもそれぞれ産地があり、ブナが主な原料の一つとして使われている（橋本1979）。東北地方の丘陵～山地の自然植生はブナを優占種とする広葉樹林と考えられていることから、当時の仙台領内あるいは隣接地が原料の供給地となりえたと考える。ただ、試料の中にはハレの場で使用された特注品ではなかったかとされるものがあることや、伴出する陶磁器から遠隔地との交易も盛んであったことが窺えるなど、これらの漆器（およびその原料）の産地の特定は困難である。

ところで、上記のようなブナ属の多用の中で、カツラとトチノキが１点ずつ認められた。試料数は限られているものの、器種が台付鉢（カツラ）と大鉢（トチノキ）という大型の容器であったことが注目される。当時にあってはブナの大径材の入手は容易であったと思う。しかし、ブナ材は狂いが大きいことが欠点とされる。これは乾燥による収縮率が大きいことと材質が不均質なことによる。材料の体積が増すと材の不均質さの程度も大きくなり、乾燥も困難になることから狂いがより大きくなる。したがってブナは大型容器の用材としては不向きといえ、より適した樹種が選択された結果が今回の試料の用材の違いとなって表れたものと考えている。

下駄は一木作りの連歯下駄（18点）と差歯下駄（露卯下駄台３点，歯５点）が検討された。用材として不明広葉樹を含め12分類群が用いられていたが、構造によって明らかな違いが認められた（表２）。すなわち、差歯下駄の用材はケヤキとモクレン属に限定されているのに対し、連歯下駄にはヒノキ属・クリ・モクレン属・スギなど雑多な樹種が用いられていた。製作技法に応じた樹種選択があったと考えるべきであろう。ただ、本試料よりやや古い時代のものとされる中田南遺跡出土下駄では今回と逆の事例[注3)]が報告されている（高橋1994）。両者の違いが時期的な差によるものなのか、遺跡の性格によるものなのかはわからないが、今後の類例に留意したい。なお、仙台城三ノ丸跡出土下駄（35点）からも不明広葉樹を含め10分類群が認められている。その中には本試料と共通する樹種もあるものの、ヒノキアスナロやケヤキが多く[注4)]種構成には若干の違いがある（仙台市教育委員会1985）。また、ヤナギ属製の下駄は富沢遺跡第70次調査[注5)]で稀な出土例として報告されているが（高橋1992）、今後類例が増加するのか注目していきたい。

橋杭（橋脚）にはクリを中心に多くの樹種が使われている。耐朽性に優れるクリの多用は肯けるものの、トネリコ属やヤマグワより材質の軽軟なヤナギ属の方が試料数が多くなっている。ヤナギ属の中には耐水性の高い種もあることからそれらが使われたためであろうか。

柱は対象とした４点がいずれもクリに同定された。多用されている橋杭とともに掘立で用いるには最適な樹種といえよう。

箸の用材はヒノキ属が大半（12点）で、タケ亜科（２点）とスギ（１点）も認められた。完形品を見る限りでは、太さがほとんど変化しない「寸胴箸」か先端を少し削った「片口箸」型のものである。材料（原木）を大まかに割ってから削って形を整えたもののようで、割裂性の大きな樹種が選択されたものであろう。なお、仙台城三ノ丸跡では同定された13点がいずれもヒノキアスナロ（ヒノキアスナロ？を含む）とされ（仙台市教育委員会1985）、本

試料とは樹種に違いが認められるが、割裂性に富む針葉樹林という点では共通しているともいえる。

桶側板は12点が対象とされたが、スギ（６点）が半数を占め、複維管束亜属（３点）とヒノキ属・クリ・モクレン属（各１点）も認められた。スギの多用は各地・各時代の出土遺物や現在使用されているものと共通する用材である。これに対して、複維管束亜属やクリは、割り技法だけではスギのような通直材は得にくい樹種である。使用する工具・刃物の発達があって利用できるようになった樹種といえるのではないだろうか。

桶の用材は、遺物では針葉樹林がほとんどで広葉樹の例はごく限られている（伊東ほか1987，伊東1990）。民俗例では、福島県内の味噌桶（1991年調査）の例[注6)]でみると、スギが最多（58.1%）で、ヒバ・サワラ・ヒノキなど針葉樹が多いものの、クルミ（オニグルミ）がスギに次いで多い（18.8%）ほか、クリ・キリ・ウルシの広葉樹も上位10種の中に入っている。この傾向は福島県にとどまらず広く東日本一帯に認められるという（石村1997）。したがって、広葉樹の使用は出土例で示されているほど稀なものではなかったのかもしれない。ただモクレン属の例は、上の調査でもホオノキ１点があげられているにすぎない。なお、仙台城三ノ丸跡からも桶の出土が報告されているが（仙台市教育委員会1985）、筆者の手元の資料ではその樹種まではわからない。

曲物は６試料11点が対象とされたが、側板には複維管束亜属とヒノキ属が、底板には単維管束亜属とヒノキ属が用いられていた。側板・底板ともヒノキ属製の例に加えて、複維管束亜属の側板に、別種の単維管束亜属やヒノキ属の底板を組み合わさせていた例もあった。通常は同一樹種を用いるものと考えていたが、当時の用材としてはそれほど稀ではなかったのかもしれず、今後の類例を注目したい。

＜注＞

1）光谷拓実氏によるブナ15点・トチノキ１点・不明広葉樹２点の同定結果が得られている．
2）椀８点と板物１点の用材はブナ６点・ケヤキ３点とされている．
3）連歯下駄５点はすべてクリ，差歯下駄台１点はモクレン属，差歯５点はケヤキ（３点）・ヤマグワ・ケンポナシであった．
4）手元の資料では下駄としかわからないが，ヒノキアスナロ（12点）・ケヤキ（10点）・ホオノキ（４点）・不明広葉樹（同一種とされる）（３点）とクルミ属・クリ・キハダ？・ミズキ・ハリギリ？・トネリコ属（各１点）が報告されている（光谷拓実氏の同定）．
5）近世～現代のものとされるが，材質が軟らかいためか著しくすり減っていると報告されている．
6）総計4973点で22種があげられている．

引用文献

橋本鉄男　1979「ものと人間の文化史31　ろくろ」，法政大学出版局，444pp.
平井信二　1979－1982「木の事典　第１～７・13・14・16巻」，かなえ書房．
石村真一　1997「ものと人間の文化史82　桶・樽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」，法政大学出版局，367・366・258pp.
伊東隆夫・山口和穂・林　昭三・布谷知夫・島地　謙　1987　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途，木材研究・資料，第23号，42－210.
伊東隆夫　1990　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ，木材研究・資料，第26号，91－189.
木村中外・内藤俊彦　1983　今泉城跡から出土した木製品の素材，「仙台市文化財調査報告書第58集　今泉城跡－名取川下流域における中世城館跡の調査－」，仙台市教委員会，206－207.
佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫（編）1989「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」，平凡社，321・305pp.
仙台市教育委員会　1985　樹種同定結果について，「仙台市文化財調査報告書第76集　仙台城三ノ丸跡　発掘調査報告書」，197－199.
高橋利彦　1992　富沢遺跡第70次・72次・73次・77次調査出土材の樹種，「仙台市文化財調査報告書第163集　富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)－富沢遺跡第70～75・77・79次発掘調査報告書－　下ノ内遺跡－第５次発掘調査報告書－」，仙台市教育委員会，110.
高橋利彦　1994　仙台市中田南遺跡出土材の樹種，「仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－」，仙台市教育委員会，406－422.
高橋利彦　1995　富沢遺跡第88次調査出土材の樹種，「仙台市文化財調査報告書第203集　富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）－富沢遺跡第88次・89次発掘調査報告書－」，仙台市教育委員会，41－42.
上野雄規（編）1991「北本州産高等植物チェックリスト」，東北植物研究会，365pp.

表１　元袋遺跡出土材の樹種

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
La 1	SD3　I34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 2	SD3　K34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 3	SD3　K34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 4	SD3　K34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 5	SD3　K34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 6	SD3　K33　1層	漆塗椀	ブナ属
La 7	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 8	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 9	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 10	SD3　J34　2層	漆塗蓋？	ブナ属
La 11	SD3　H33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 12	SD3　I34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 13	SD3　I33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 14	SD3　I33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 15	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 16	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 17	SD3　J33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 18	SD3　K36　2層	漆塗椀	ブナ属
La 19	SD3　I34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 20	SD3　L34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 21	SD3　J33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 22	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 23	SD3　J33　2層	漆塗椀	ブナ属
La 24	SD3　J34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 25	SD3　K34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 26	SD3　I34　2層	漆塗椀	ブナ属
La 27	SD3　J34　2層	漆塗鉢？	ブナ属
La 28	SD3　K33　2層	漆塗鉢？	ブナ属
La 29	SD2　J27　2層	漆塗蓋？	ブナ属
La 30	SD2　G27　1層	漆塗椀	ブナ属
La 31	SD2　G27　底面	漆塗椀	ブナ属
La 32	SD2　G27　底面	漆塗椀	ブナ属
La 33	SD2　K21　1層	漆塗椀	ブナ属
La 34	SD2　G31　1層	漆塗椀	ブナ属
La 35	SD2　H28　底面	漆塗椀	ブナ属
La 36	SD2　2層	漆塗椀	ブナ属
La 37	SD2　1層	漆塗椀	ブナ属
La 38	SD2　I27　底面	漆塗椀	ブナ属

表1　（続き）

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
La 39	SD4　I27　1層	漆塗椀	ブナ属
La 40	SD4　J27　1層	漆塗椀	ブナ属
La 41	SD4　K26　2層	漆塗蓋？	ブナ属
La 42	SD4　J34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 43	SD4　I28　1層	漆塗大椀	ブナ属
La 44	SD4　K26　1層	漆塗大椀	ブナ属
La 45	SD4　I27　1層	漆塗大椀	ブナ属
La 46	SD4　J27　1層	漆塗椀	ブナ属
La 47	SD4　J26　1層	漆塗椀	ブナ属
La 48	SD4　I21　2層	漆塗椀	ブナ属
La 50	SD4　I26　1層	漆塗台付鉢	カツラ
La 51	SD4　J27　2層	漆塗椀	ブナ属
La 52	SD4　I26　2層	漆塗椀	ブナ属
La 53	SD4　H26　1層	漆塗椀	ブナ属
La 54	SD4　J27　1層	漆塗椀	ブナ属
La 55	Ⅱ区　SK 7　底面	漆塗大鉢	トチノキ
La 56	SD2　G31　2層	漆塗皿	ブナ属
La 57	SX06　ベルト　底面	漆塗椀	ブナ属
La 58	SX06　7層　Ⅱ期	漆塗椀	ブナ属
La 59	SD2　L24　1層	漆塗椀	ブナ属
La 60	SX06　下層　L20　側小溝	漆塗椀	ブナ属
La 61	SD3　K34　1層	漆塗椀	ブナ属
La 62	Ⅲ区　G34　SK64　1層	漆塗椀	ブナ属
La 63	Ⅱ区　ピット411	漆塗椀	ブナ属
La 64	SD2　K21　1層	漆塗椀	ブナ属
La 65	SD4　H28　1層	漆塗椀	ブナ属
La 71	Ⅲ区　SX 1　2層　底面	漆塗椀	ブナ属
La 72	Ⅲ区　SX 1　2層	漆塗椀	ブナ属
Lb 1	SD3　J33　1層	連歯下駄	マツ属複維管束亜属
Lb 2	SD3　K35　1層	連歯下駄	ヒノキ属
Lb 3	SD3　J34　1層	連歯下駄	スギ
Lb 4	SD3　J34　1層	連歯下駄	ハリギリ
Lb 5	SD3　K33　1層	連歯下駄	モクレン属
Lb 6	SD3　J34　1層	連歯下駄	ヒノキ属
Lb 7	SD3　I33　2層	連歯下駄	ヤナギ属
Lb 8a	SD3　I33　2層	露卯下駄台	モクレン属
Lb 8b	SD3　I33　2層	同上差歯	ケヤキ
Lb 9	SD3　I34　2層	連歯下駄	広葉樹（散孔材）

表1　（続き）

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
Lb 10	SD3　J36　3層	連歯下駄	コシアブラ
Lb 11	SD3　I33　3層	連歯下駄	クリ
Lb 12	SD3　J34　2層	下駄差歯	モクレン属
Lb 13	SD3　J34　底面	下駄差歯	ケヤキ
Lb 14	SD3　L33　1層	露卯下駄台	ケヤキ
Lb 15a	SD3　J33　2層	露卯下駄台	モクレン属
Lb 15b	SD3　J33　2層	同上差歯	ケヤキ
Lb 16	SD3　J33　3層	連歯下駄	モクレン属
Lb 17	SD4　I28　1層	連歯下駄	クリ
Lb 18	SD4　J26　1層	連歯下駄	ヒノキ属
Lb 19	SD4　J27　1層	連歯下駄	ヒノキ属
Lb 20	SD4　H27　1層	連歯下駄	クリ
Lb 21	SD2　H27　2層	連歯下駄	モクレン属
Lb 22	SD2　K27　2層	連歯下駄	スギ
Lb 23	SD3　J33　2層	不明	モミ属
Lb 24	SD3　I34　2層	連歯下駄（歯）	ヤマグワ
Lb 25	SD3	下駄差歯	ケヤキ
Lc 1	SD4　K27　2層	櫛	カバノキ属
Lc 2	SD3　K34　2層	櫛	ヤブツバキ類似種
Lc 3a	SD3　34　2層	曲物側板	マツ属複維管束亜属
Lc 3b	SD3　I34　2層	同上底板	マツ属単維管束亜属
Lc 4a	SD3（古）K33　3層	曲物側板	マツ属複維管束亜属
Lc 4b	SD3（古）K33　3層	同上底板	ヒノキ属
Lc 5a	SD3　砂質層・グライ	曲物側板	ヒノキ属
Lc 5b	SD3　砂質層・グライ	同上底板	ヒノキ属
Lc 6	SX06　7層　Ⅱ期	折敷？	ヒノキ属
Lc 9	SD2　J27　2層	板状品	ヒノキ属類似種
Lc 10	SD2　H27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 11①	SD2　I27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 11②	SD2　I27　2層	箸	イネ科タケ亜科
Lc 13	SD2　H28　2層	柄杓柄	ヒノキ属
Lc 15	SD2　H27　3層	皿	ブナ属
Lc 16	SD2　H27　底面	小型板状品	広葉樹（散孔材？）
Lc 17①	SD2　G27　配石中	箸	スギ
Lc 17②	SD2　G27　配石中	箸	ヒノキ属
Lc 17③	SD2　G27　配石中	箸	ヒノキ属
Lc 17④	SD2　G27　配石中	箸	イネ科タケ亜科
Lc 18	SD2　L28	皿？	ブナ属

表1　（続き）

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
Lc 19	SD3　I33　1層	板状品	クリ
Lc 20	SD3　L33　1層	板状品	ヒノキ属
Lc 21	SD3　J34　2層	箸	ヒノキ属
Lc 22	SD3　J33　2層	不明	カツラ
Lc 23	SD3　H34　3層	木錘	クリ
Lc 24	SD3　グライ層・砂質粘土	柄杓柄？	ヒノキ属
Lc 26	SD3	不明	モクレン属
Lc 27	SD4　I27　1層	箸	ヒノキ属
Lc 28①	SD4　J27　1層	箸	ヒノキ属
Lc 28②	SD4　J27　1層	箸	ヒノキ属
Lc 29	SD4　J27　1層	栓？	クリ
Lc 30	SD4　J27　1層	小型杵？	広葉樹（散孔材）
Lc 31	SD4　J27　1層	独楽	マツ属複維管束亜属
Lc 32	SD4　K27　2層	小型杵	モミ属
Lc 33①	SD4　K27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 33②	SD4　K27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 33③	SD4　K27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 33④	SD4　K27　2層	箸	ヒノキ属
Lc 34	SD4　K27　2層	蓋	モミ属
Lc 35	SD4　I27　2層	曲物側板	ヒノキ属
Lc 36	SX6	小型板状品	スギ
Lc 41	SD4　J28　1層	曲物底板	ヒノキ属
Lc 42	SD4　J27　1層	小型板状品	ヒノキ属
Lc 43	SD4　東壁	板状品	スギ類似種
Lc 44①	SD4　I27　2層	曲物側板①	ヒノキ属
Lc 44②	SD4　I27　2層	曲物側板②	ヒノキ属
Lc 44③	SD4　I27　2層	同上底板	ヒノキ属
Lc 45a	SD2　I27　2層	底板	マツ属複維管束亜属
Lc 45b①	SD2　I27　2層	桶材？	スギ類似種
Lc 45b②	SD2　I27　2層	桶材？	ヒノキ属類似種
Lc 46	SD2　K27　2層	板材	スギ
Lc 47	SD2　I27　1層	板状品	モミ属
Lc 48	SD3　K35　2層	板状品	ヒノキ属
Lc 49	SD2　I27　底面	槽	クリ
Lc 50	SD2　L28　1層	二又棒状品	イチイ
Lc 51	SD2　I27　1層	棒状品	スギ
Lc 52	SD2　I27　3層	棒状品	クリ
Lc 53	SD2　H27　3層	板（背板）	スギ

表１　（続き）

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
Lc 54	SD2　H27　3層	小型板状品	スギ
Lc 50	SD2　H27　3層	不明	スギ
Lc 56	SD2　H27　3層	不明	モミ属
Lc 60・66・67①	SK27　7層	桶側板	クリ
Lc 60・66・67②	SK27　7層	桶側板	スギ
Lc 60・66・67③a	SK27　7層	桶側板	スギ
Lc 60・66・67③b	SK27　7層	桶側板	スギ
Lc 60・66・67④a	SK27　7層	桶側板	スギ
Lc 60・66・67④b	SK27　7層	桶側板	スギ
Lc 60・66・67④c	SK27　7層	桶側板	マツ属複維管束亜属
Lc 60・66・67④d	SK27　7層	桶側板	マツ属複維管束亜属
Lc 60・66・67⑤	SK27　7層	桶側板	モクレン属
Lc 68	SK27　7層	桶側板	マツ属複維管束亜属
Lc 83	ピット6　J24	柱	クリ
Lc 84	ピット11　J21	柱	クリ
Lc 85a	ピット6　H21	柱	クリ
Lc 85b	ピット6　H21	柱	クリ
Lc 86	－	板材	カヤ
Lc 87	－	円板状品	スギ類似種
Lc 88	－	角材	クリ
Lc 89	SD3　K34　2層	擢状品	コナラ属コナラ亜属コナラ節
Lc 103	SD3	杭No. 13	クリ
Lc 104	SD3	橋杭No. 1	クリ
Lc 105	SD3	橋杭No. 2	クリ
Lc 106	SD3	橋杭No. 3	広葉樹（散孔材？）
Lc 107	SD3	橋杭No. 4	クリ
Lc 108	SD3	橋杭No. 5	クリ
Lc 109	SD3	橋杭No. 6	クリ
Lc 110	SD3	橋杭No. 7	ヤマグワ
Lc 111	SD3	橋杭No. 8	クリ
Lc 112	SD3	橋杭No. 9	クリ類似種
Lc 113	SD3	橋杭No. 10	ヤナギ属
Lc 114	SD3	橋杭No. 11	カヤ
Lc 115	SD3	橋杭No. 12	クリ
Lc 116－118	SD3	橋杭No. 14	ヤナギ属
Lc 116－118	SD3	橋杭No. 14	クリ
Lc 119	SD3	橋杭No. 15	広葉樹（散孔材？）

表1　（続き）

試料番号	出土遺構・層位	用　途	樹　種
Lc 120	SD3	橋杭No. 16	トネリコ属
Lc 121	SD3	橋杭No. 17	トネリコ属
Lc 122	SD3	橋杭No. 18	クリ
Lc 123	SD3	橋杭No. 19	ヤナギ属
Lc 124	SD3	橋杭No. 20	クリ
Lc 125	SD3	橋杭No. 21	クリ
Lc 126	SD3	橋杭No. 22	クリ
Lc 127	SD3	橋杭No. 23	ニワトコ
Lc 128	SD3	橋杭No. 24	クリ
Lc 129	SD3	橋杭No. 25	クリ
（仮）89	SD3　K34　2層	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節
（仮）93	SD3　I33　2層	不明	クリ
（仮）98	SD2　L28　1層	不明	イチイ

表2　元袋遺跡出土材の主な用途別樹種構成　各用途には？のついたものも含めた.

分類群＼用途	漆器	下駄		橋杭	箸	桶側板	曲物		柱	その他	合計
		連歯	差歯				側板	底板			
複維管束亜属	−	1	−	−	−	3	2	−	−	2	8
単維管束亜属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
モミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	5
スギ	−	2	−	−	1	6*	−	−	−	8*	17
ヒノキ属	−	4	−	−	12	1*	4	4	−	7*	32
イチイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2
カヤ	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	2
ヤナギ属	−	1	−	3	−	−	−	−	−	−	4
カバノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
ブナ属	64	−	−	−	−	−	−	−	−	2	66
コナラ節	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2
クリ	−	3	−	15*	−	1	−	−	4	8	31
ケヤキ	−	−	5	−	−	−	−	−	−	−	5
ヤマグワ	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	2
モクレン属	−	3	3	−	−	1	−	−	−	1	8
カツラ	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2
ヤブツバキ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
トチノキ	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
コシアブラ	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ハリギリ	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
トネリコ属	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	2
ニワトコ	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
不明広葉樹	−	1	−	2	−	−	−	−	−	2	5
タケ亜科	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	2
合計	66	18	8	25	15	12	6	5	4	43	202
		26					11				

＊：類似種を含む

図版 1　　1．マツ属複維管束亜属　　Lc 60・66・67④c

図版 2　　2．マツ属単維管束亜属　　Lc 3

3．モミ属　　Lc 34

4．スギ　　Lc 54

図版 3　　5．ヒノキ属　　Lc 42

6．イチイ　　Lc 50

7．カヤ　　Lc 86

図版 4　　8．ヤナギ属　　Lc 113

9．カバノキ属　　Lc 1

10．ブナ属　　Lc 61

図版 5　　11．コナラ属コナラ亜属コナラ節　　Lc 89

12．クリ　　Lc 19

13．ケヤキ　　Lb 13

図版 6　　14．ヤマグワ　　Lb 24

15．モクレン属　　Lc 60・66・67⑤

16．カツラ　　Lc 22

図版 7　　17．トチノキ　　La 55

18．コシアブラ　　Lb 10

19．ハリギリ　　Lb 4

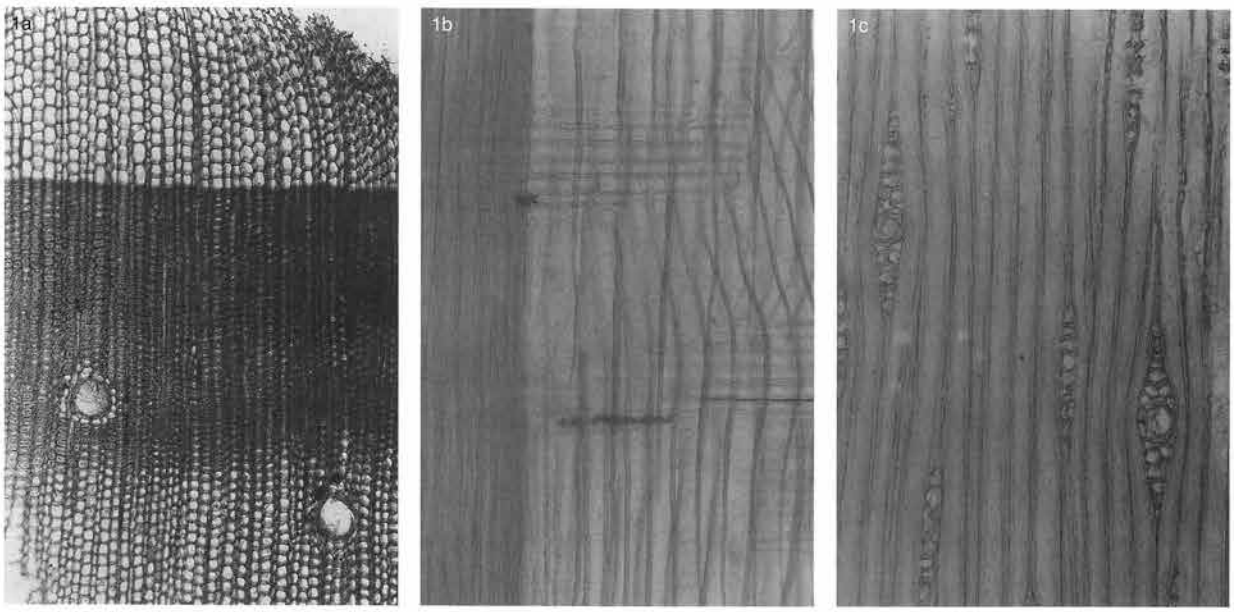
図版 8　　20．トネリコ属　　Lc 121

21．ニワトコ　　Lc 127

22．イネ科タケ亜科　　Lc 17④

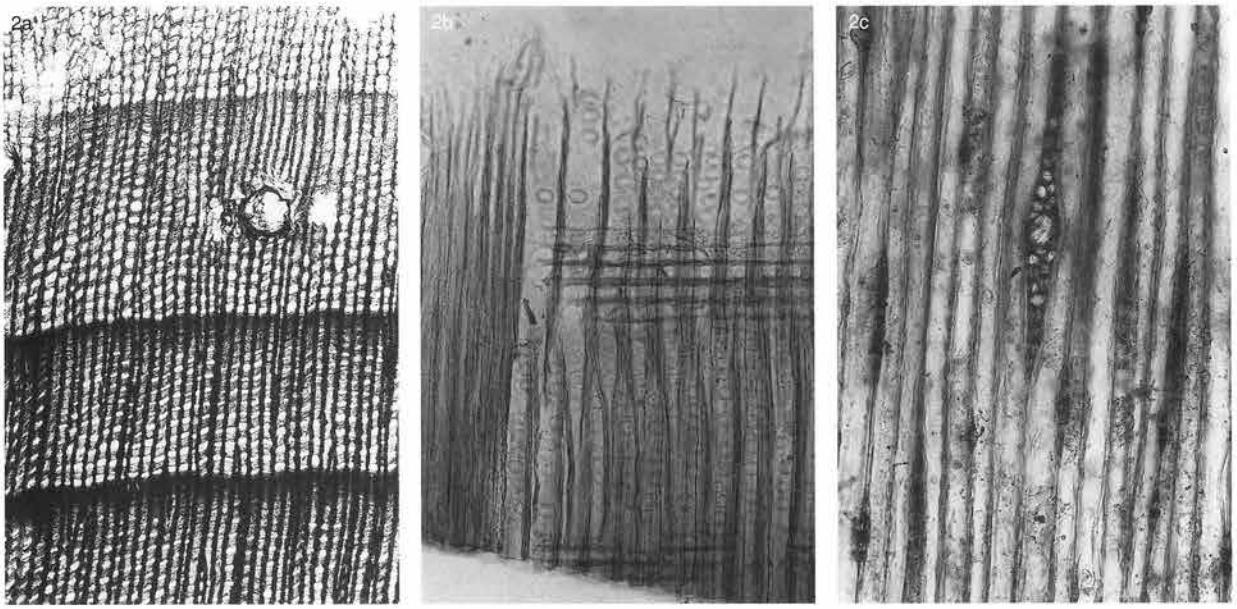
a：木口×40　　b：柾目×100　　c：板目×100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右である。

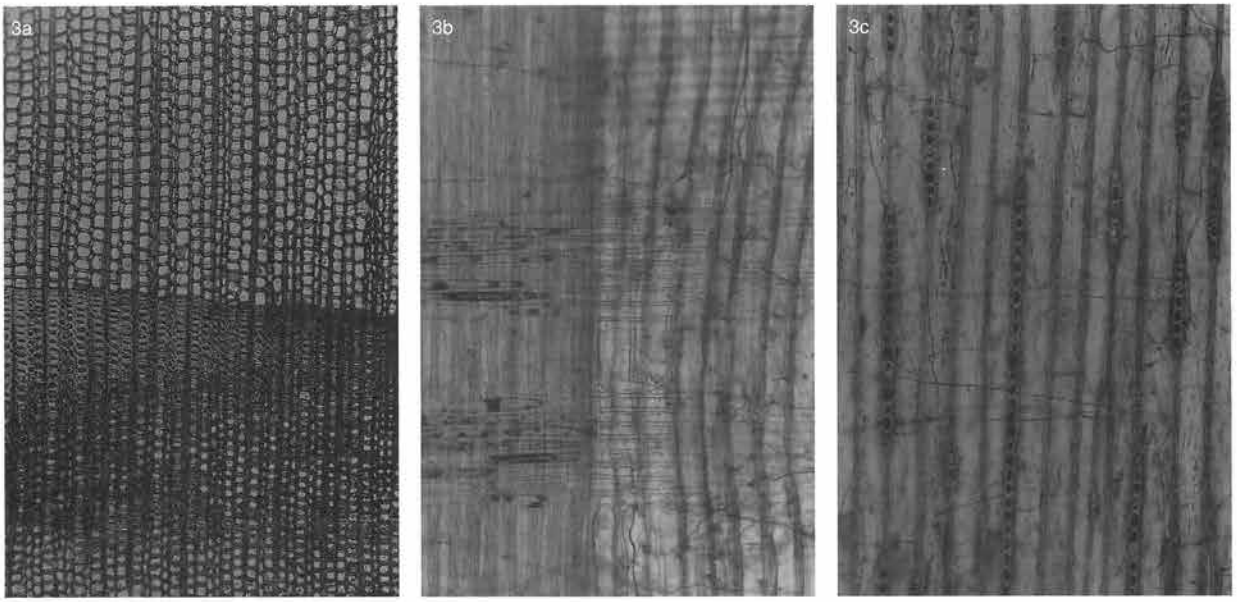


図版 1
1 a〜c

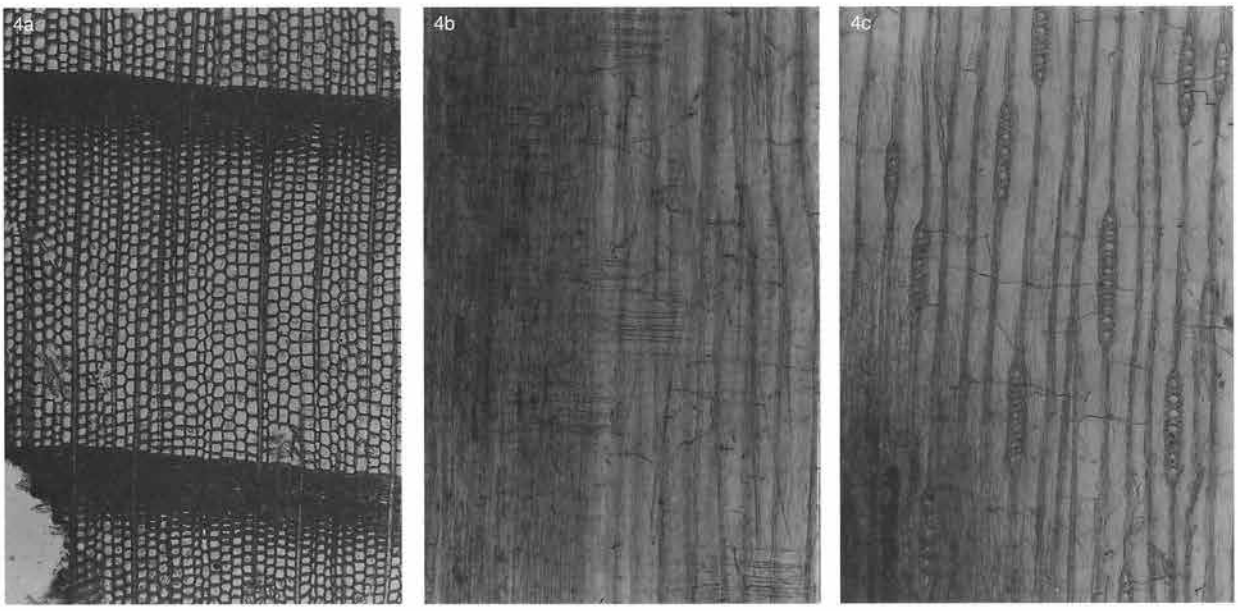
図版 2



2 a～c

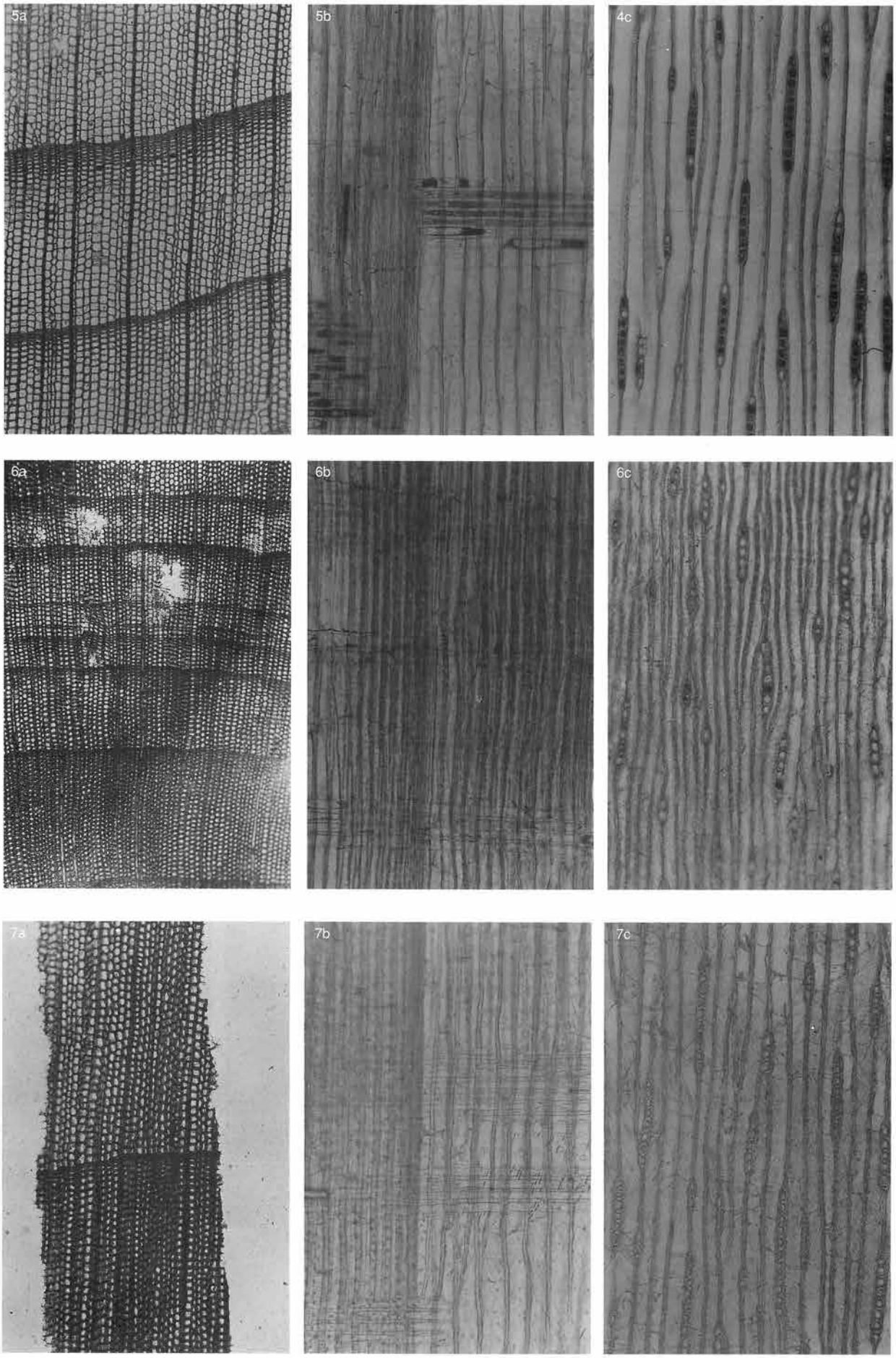


3 a～c



4 a～c

図版 3

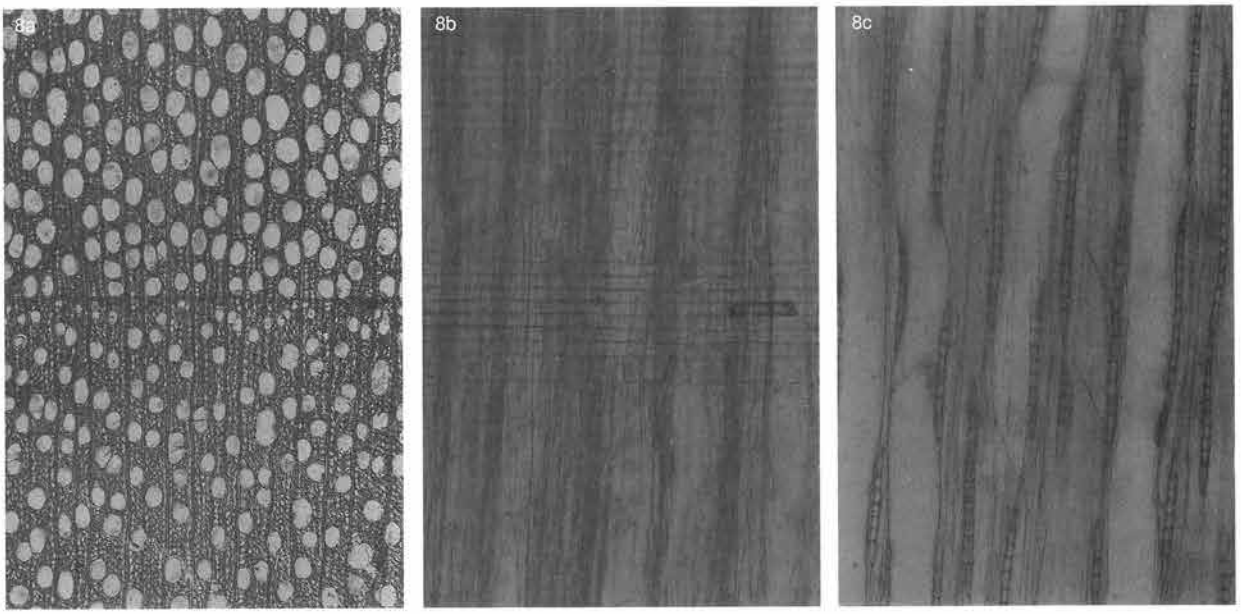


5 a～c

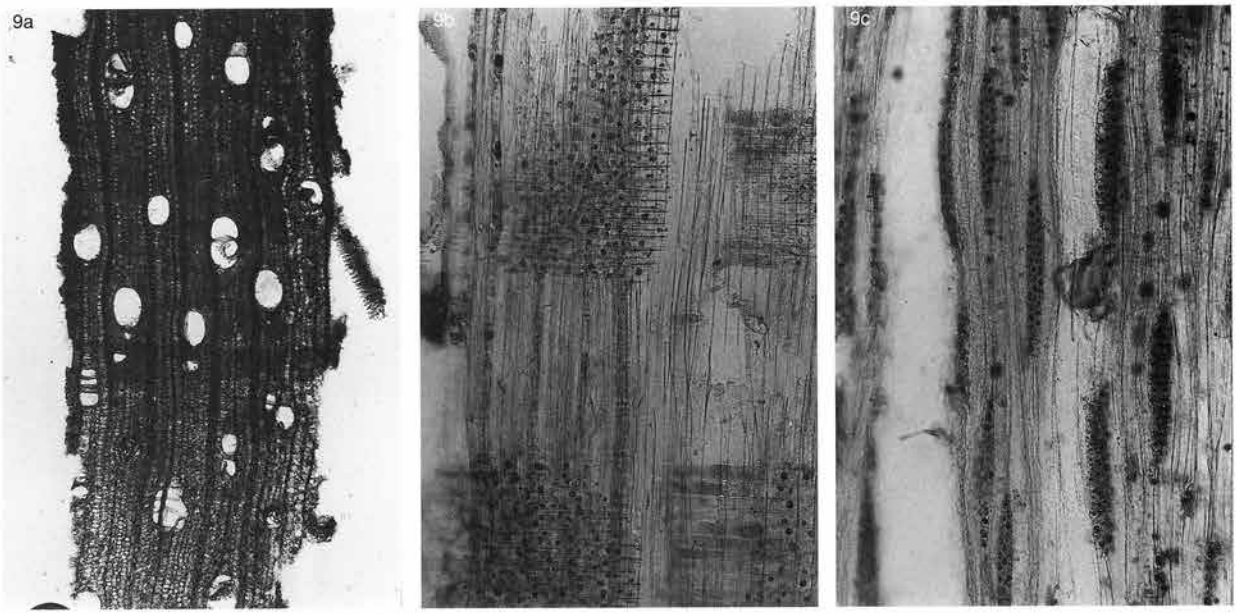
6 a～c

7 a～c

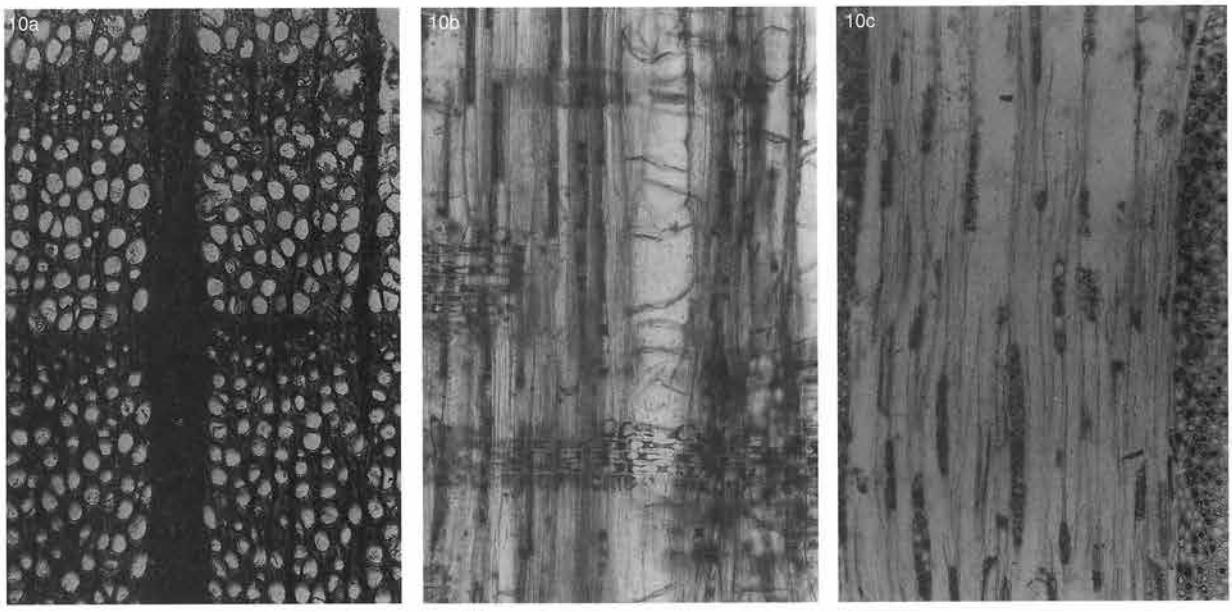
図版 4



8 a～c

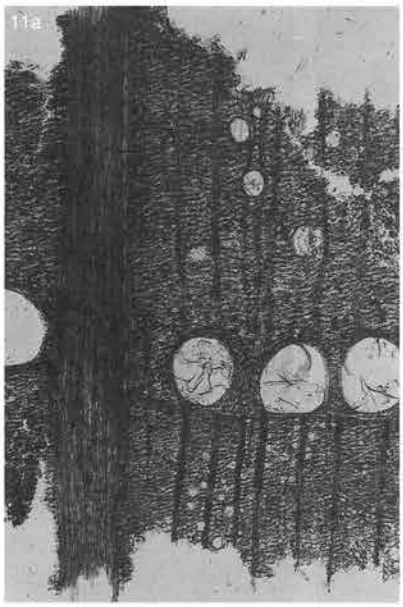


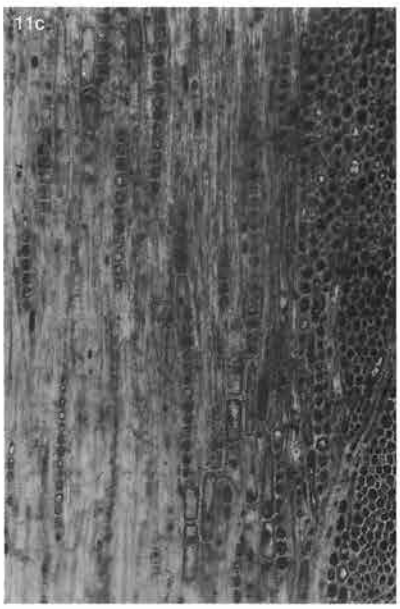
9 a～c



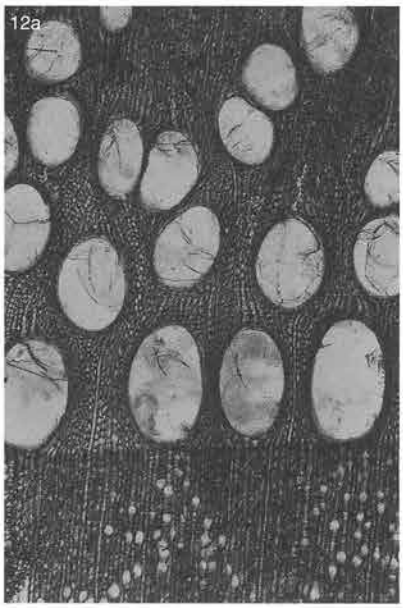
10a～c

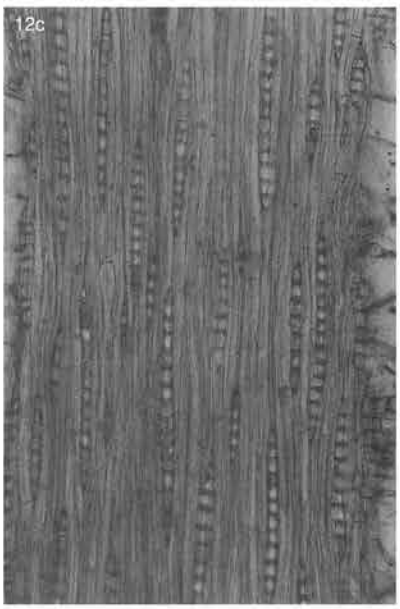
図版 5



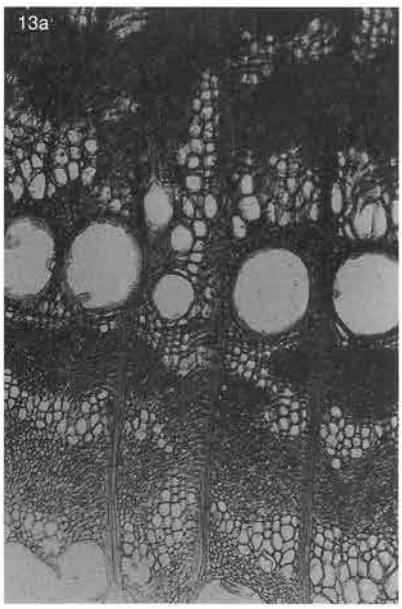


11a～c



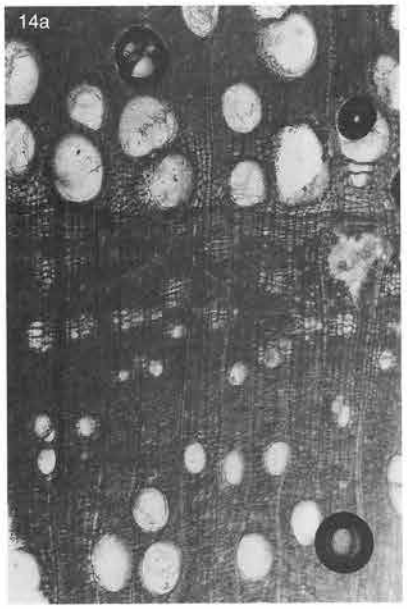


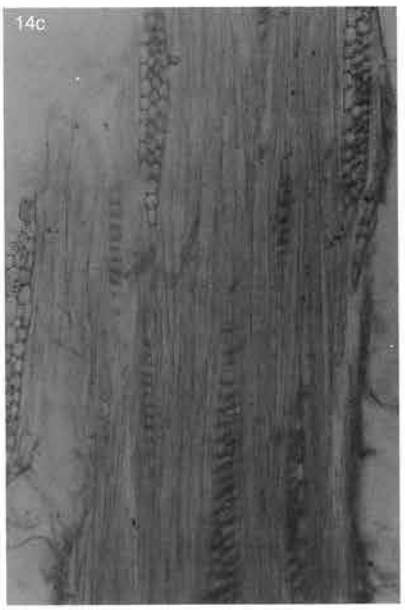
12a～c



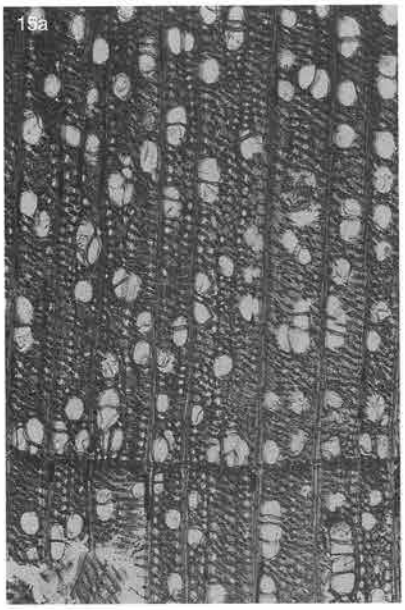
13a～c

図版6

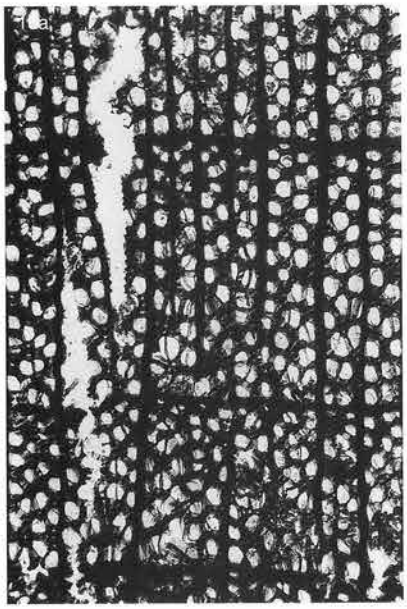




14a～c

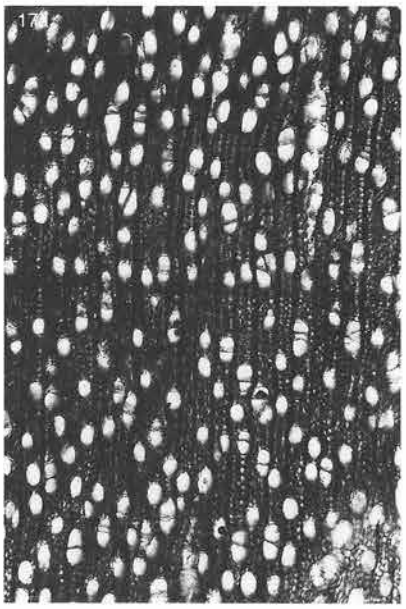


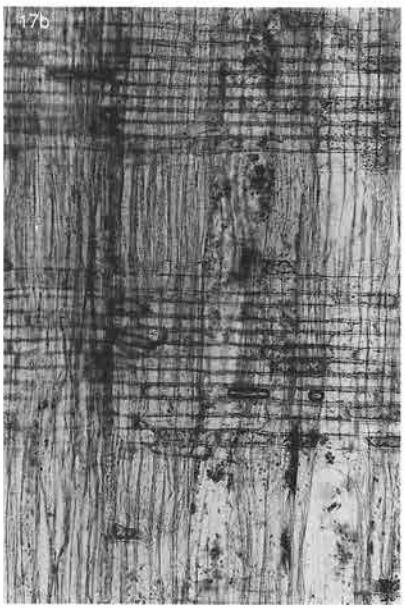
15a～c



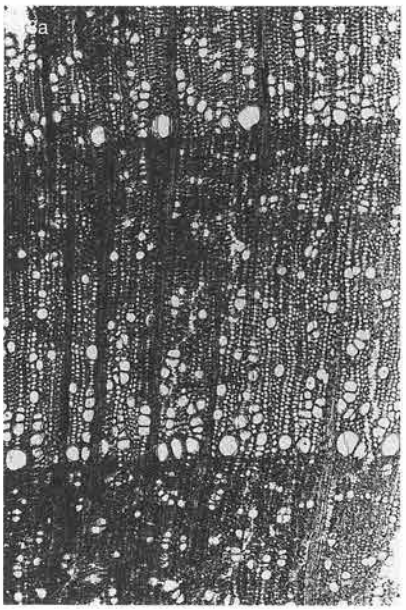
16a～c

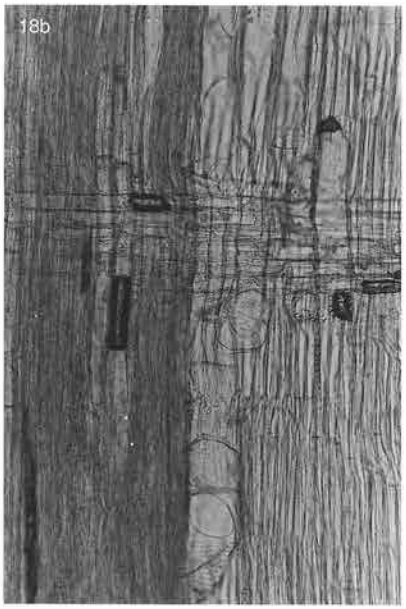
図版 7



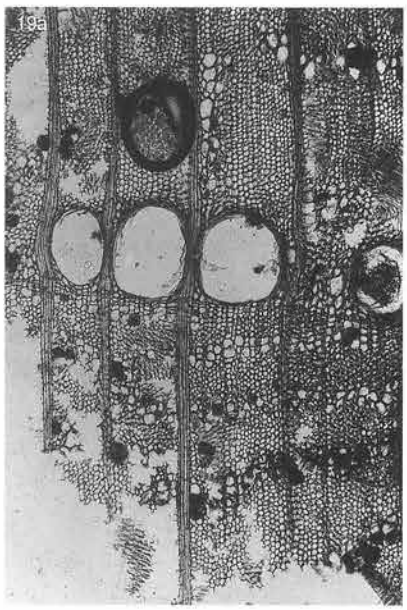


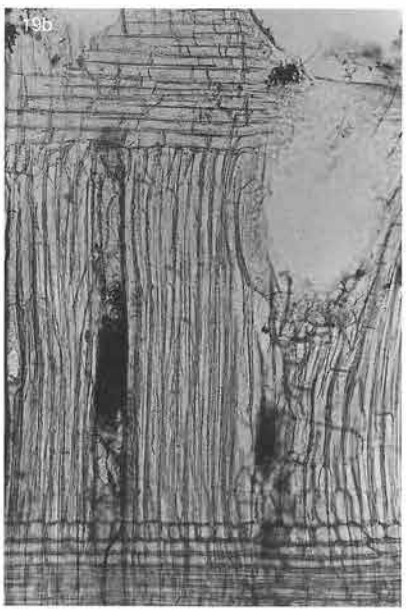
17a～c

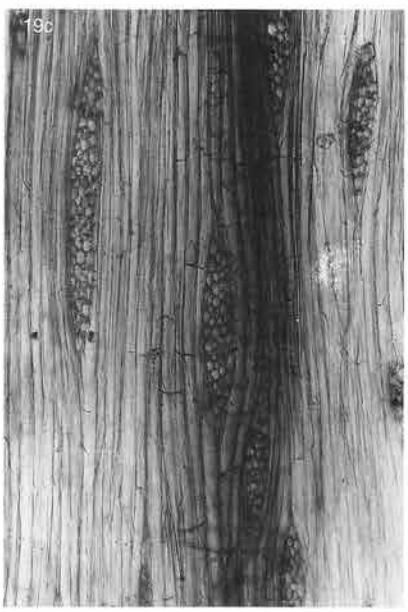




18a～c

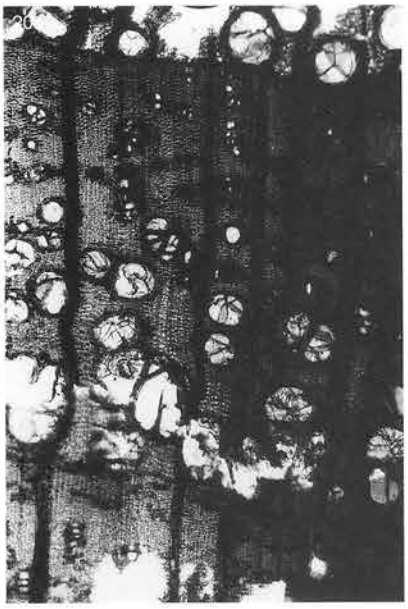


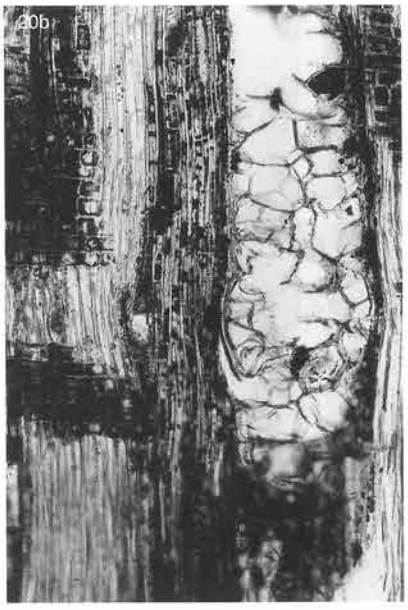




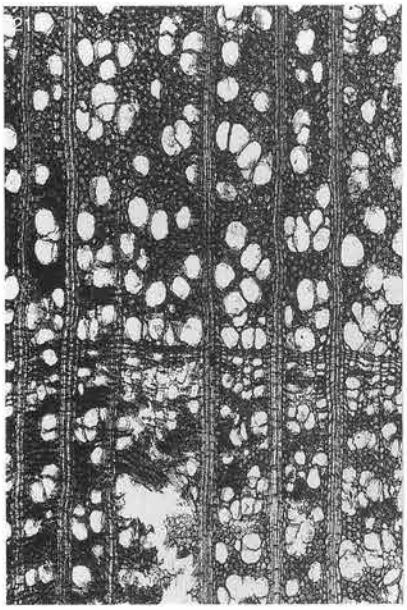
19a～c

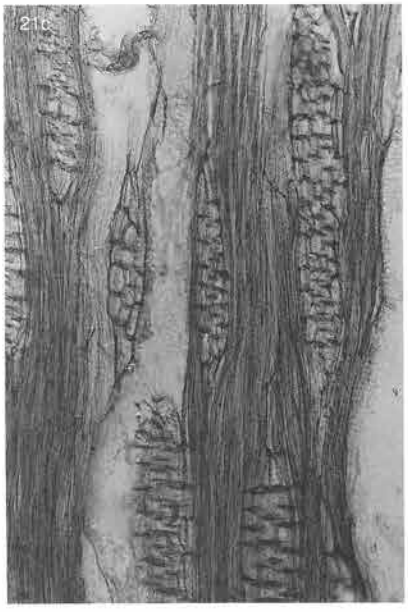
図版8



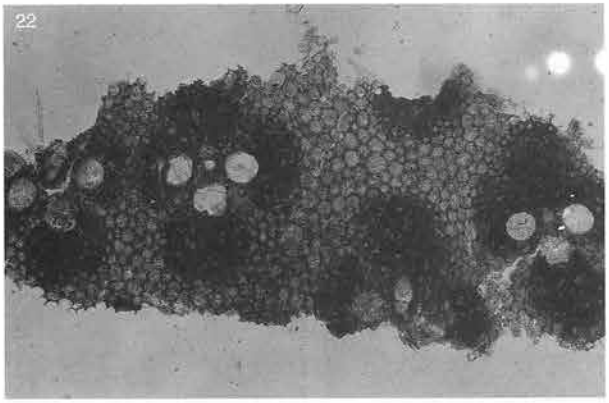


20a～c





21a～c



22

元袋遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学　北野信彦

1、はじめに

仙台市元袋遺跡からは、近世初頭期（16世紀末～17世紀代）を中心とした2時期の武家地関連および江戸時代後期頃の在郷地関連の遺構・遺物が多数検出されている。その内には本稿漆器資料も多く含まれている。今回、仙台市教育委員会の御厚意により、これら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本稿ではこの調査結果および、そこから派生する幾つかの諸問題について報告する。

2、出土漆器資料の調査

漆器資料は、陶磁器資料と比較して、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査で客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本稿では、これら漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択、(2) 木取り方法、(3) 漆膜面の漆塗り構造、(4) 色漆の使用顔料、(5) 蒔絵材料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。まず、その調査方法と調査結果を記す。

2.1　調査方法

2.1.1　用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。なお、本稿ではすでに仙台市教育委員会で調査された樹種同定結果の一部を参考にさせていただいた。

2.1.2　木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

2.1.3　漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251JP，ハードナーHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

2.1.4　色漆の使用顔料および蒔絵粉材料の性質

色漆に用いられた顔料および蒔絵粉材料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX-2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

2.2　調査結果

今回調査を行った漆器資料は、椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類である食器類の合計69点である。これらの帰属年代は、共伴陶磁器の編年観や出土状況および出土層位の観察から、近世初頭（16世紀末～17世紀代）を中心とした2期および江戸時代後期頃（18世紀以降）の3時期に分類される。以下、各項目別の調査結果を述べる（Table.1）。

2．2．1　用材選択

本漆器資料の内、元袋遺跡出土漆器資料の用材選択についてはすでに仙台市教育委員会による調査結果があるのでその成果を参照させていただいた。これら漆器椀類の樹種には、ブナ科ブナ、トチノキ科トチノキ、カツラ科カツラの広葉樹３種類が確認された。これらはいずれも加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材である（Table.２）（注１）が、本漆器資料ではブナ材が全体の93.7%の出現比率を占め・圧倒的に利用頻度が高かった。

Table.１　元袋遺跡出土漆器観察表

No.	器形	樹種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文様	内	外	文様	内	外	
1	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
2	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
3	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱		朱	1	2	
4	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
5	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
6	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
7	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
8	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
9	椀型	ブナ	B	黒	黒	内外紋赤			朱	2	2	
10	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵銀	ベンガラ		Ag	1	2	
11	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱＋ベンガラ		朱	3	2	
12	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
13	椀型	ブナ	B	赤	黒		朱			1	1	
14	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
15	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
16	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱		朱	1	2	
17	椀型	ブナ	B	黒	黒		朱潤	朱潤		1	1	
18	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	3	
19	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
20	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ潤		ベンガラ	1	2	
21	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱		朱	1	2	
22	坪椀型	ブナ	B	赤	赤			ベンガラ		1	1	
23	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
24	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
25	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		朱	1	2	
26	椀型	ブナ	B	黒	黒	外絵赤			ベンガラ	1	2	
27	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		朱	1	2	
28	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱		朱	1	2	
29	椀型	ブナ	B	赤	黒	外紋赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
30	椀型	ブナ	B	赤	黒	外紋赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
31	椀型	ブナ	B	赤	黒	外紋赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
32	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
33	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
34	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
35	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
36	椀型	ブナ	B	黒	黒					3	3	
37	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
38	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
39	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
40	椀型	ブナ	B	赤	黒	外紋赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
41	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
42	椀型	ブナ	B	赤	黒	外紋赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
43	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	朱		朱	1	2	
44	椀型	ブナ	A	赤	黒	外絵赤	朱＋ベンガラ		朱・ベンガラ	1	2	
45	椀型	ブナ	B	黒	黒	外絵赤			ベンガ	1	2	
46	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
47	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
48	椀型	ブナ	B	赤	黒		朱			1	1	
49	椀型	ブナ	B	赤	黒		朱			1	1	
50	椀型	カツラ	A	赤	黒	外絵赤	朱潤		朱	1	2	
51	椀型	ブナ	B	黒	黒	外絵赤			朱	1	2	引っ掻き技法
52	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
53	椀型	ブナ	B	黒	黒	外絵赤			朱潤	1	2	
54	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
55	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
56	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
57	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		朱	1	2	
58	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ		朱	1	2	
59	蓋型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	高台内文字
60	椀型	ブナ	－	黒	黒	外絵赤			朱	1	2	
61	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
62	椀型	ブナ	B	黒	黒	高台絵赤			朱	1	2	引っ掻き技法
63	椀型	ブナ	B	赤	黒	高台赤点	朱		朱	1	2	高台内印
64	椀型	ブナ	B	赤	黒	外絵赤	ベンガラ	ベンガラ		1	2	
65	椀型	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	
66	椀型	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	
67	破片	ブナ	B	赤	黒	外絵銀	ベンガラ		Ag	1	2	
68	下駄	－	－	赤	黒		ベンガラ			1	－	
69	破片	ブナ	B	赤			朱			1	1	

Table. 2　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環孔材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギク、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手物に適する。
B 散孔材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適してる。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっと適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキ、など	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、割れにくいので使用に適する。

報告者によるこれまでの全国115遺跡、合計16009点の出土漆器資料の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種には、ケヤキ（江戸時代前期段階ではシオジ材が多い）・トチノキ・ブナの３樹種の占有率が高く一般的である。これを全国８ブロックの地区に分けて材の使用比率を集計してみると、それぞれの頻度の様相は地域により若干異なる事が窺える。すなわち東北地区ではブナ材の使用が卓越しており、北海道・北陸・山陰地区ではブナ材優勢ながらもトチノキ材使用も多い。一方、江戸市中・東海・近畿・山陽地区ではややトチノキ材使用が多い傾向が見出された（Fig. 1）（注２）。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況をみてみると、東北地区の特徴であるブナ材の使用比率が高い点で、これまでの調査結果を裏付ける結果となった。

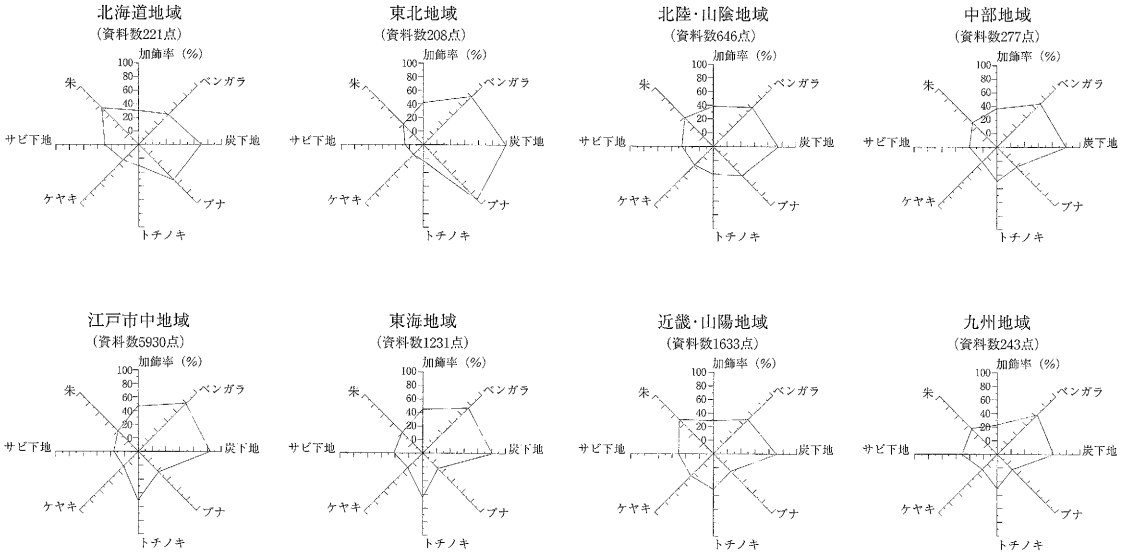
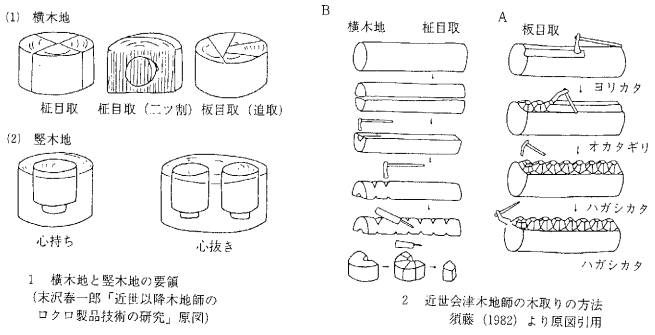


Fig. 1　地域別出土漆器資料の組成（集計例・18～19 ct.）

2．2．2　木取り方法

挽き物類の木取り方法は、横木地と竪木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（Fig. 2）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている（注３）。

本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみてみると、本資料の大多数を占めるブナ材は、いずれも横木地柾目取り比率が高かった。一般にブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法（ブンギリ）



1　横木地と竪木地の要領
（末沢奉一郎「近世以降木地師のロクロ製品技術の研究」原図）

2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

Fig. 2　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

が適しているという福島県奥会津および岩手県安代町・浄法寺町周辺で採集された口承資料がある（注４）。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘されたよう。

２．２．３　漆膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋や漆絵文様を地内もしくは外面に描く資料に分かれた。このうち無文様の地塗りのみの資料は、地内面赤・外面黒塗のものと内外赤塗のものがあり、後者は全体の29.0%を占めていた。また、赤色系漆で加飾されてある資料には、No. 44資料に代表されるような波や笹文様を施すものやNo. 9 資料のように伊達家との関連性が想定される『竪三引両文』が認められる椀のごとく、近世初頭～前期頃の仙台城関連遺跡出土漆器の特徴を有するものが多く認められ、これらは全体の34.8%を占めていた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、いずれもピークがほとんど見出だされない資料であり、金属顕微鏡で観察することにより、これらは炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地であると認識した（注５）。次に、地の漆塗り層は、いずれも１・２層塗りであり、塗回数は明確に判断できないものの簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であろう（注６）。そして赤色系漆による加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（Fig. 3）。

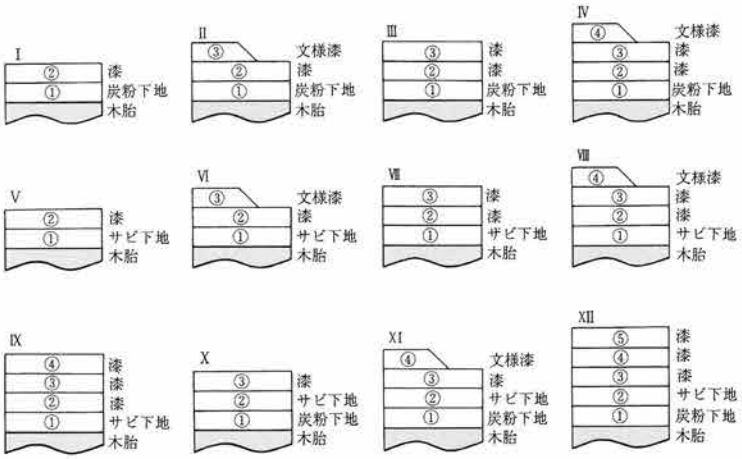


Fig. 3　漆塗り構造の分類

２．２．４　赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3）、朱（水銀朱 HgS）、朱＋ベンガラの三種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した（Fig. 4）。

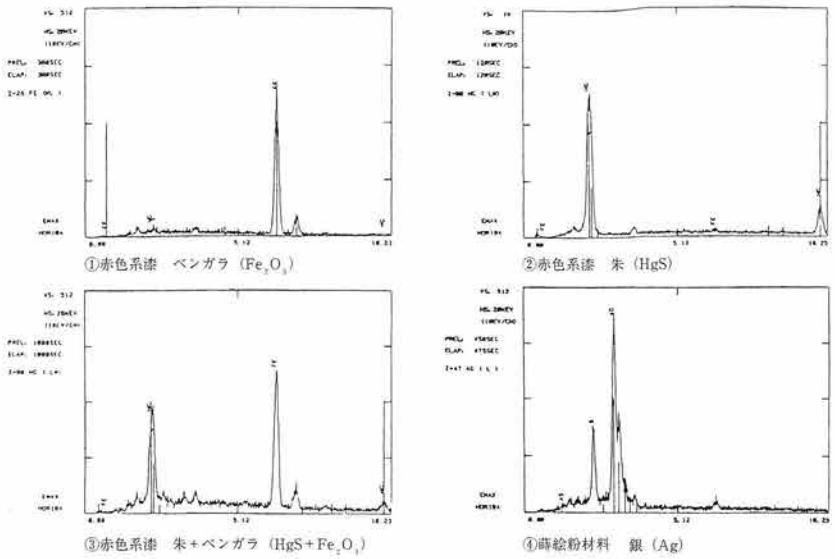


Fig. 4　電子線マイクロアナライザ分析結果

ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる（注７）。本資料の場合、朱・ベンガラの使用比率を比較すると全体ではベンガラが70.5%と高いものの、他の遺跡の一括資料群と比較してみると、朱の使用比率がやや優勢であった。また、No. 11，25，27，44，50，57，58資料等のように、地内面と外面の加飾部分では明らかに赤色系漆の赤味が異なる資料も多い。今回の分析結果からは、内ベンガラ漆・外の加飾部分を朱漆を用いるなど、明らかに赤色顔料を使い分けている事例も確認されたが、それ以外にも、使用時や埋没環境による赤色系漆の劣化度の違いや、朱やベンガラ顔料自体の品質の違い等、さまざまな要因の存在も想定された。とりわけ後者の事例については、保存処理や保管環境の設定等の諸条件とも密接にかかわる問題なので今後の調査課題としたい。

２．２．５　蒔絵粉材料の性質

表面観察において家紋や絵柄等の蒔絵加飾が見い出された資料（No.10，67資料）の蒔絵部分の定性分析を行った結果、いずれもAg（銀）が認められた。江戸期の各種文献資料には、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたことや、これら金・銀・スズ等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと、さらには代用金蒔絵粉材料は石黄（江戸時代初期・前期）～銀（中期以降）～スズ（後期以降）へと材質が変遷すること等が、知られる。その意味では本資料のに蒔絵材料には銀蒔絵粉が見い出されているので、やはりこれらは江戸時代後期頃の在郷地関連遺跡に関連する資料群の一つであると考える。

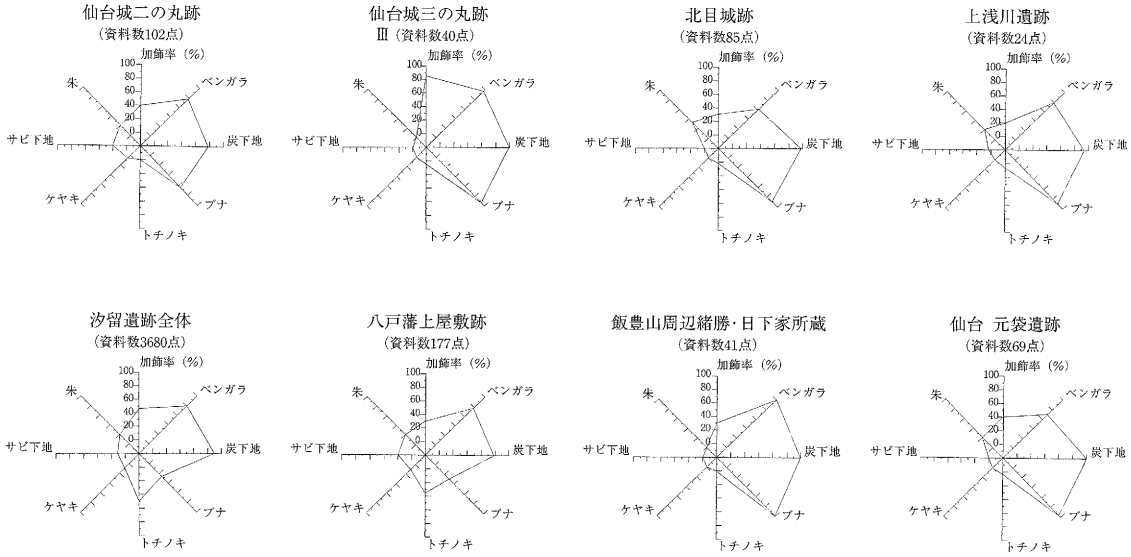


Fig. 5　材質、技法面からみた本遺跡も含む各一括出土漆器椀の組成（集計例）

３、考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、いずれも木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる一般的なランクのグループに分類され、とりわけ東北地区では汎用性が高いブナ材を用いていることが、本資料群の特徴の一つといえよう。これらを各年代の一括資料毎に把握するために、最も一般的な８つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総出現数の中で集計した（注８）。その結果、生産技術面からみた本漆器資料の全体的な組成の傾向は、仙台城関連資料をはじめとする東北地区における各遺跡出土資料および漆器生産地関連の民具資料のそれとは基本的には大差が無いが、江戸市中における東北諸藩の藩邸である仙台藩伊達家屋敷跡の汐留遺跡および南部八戸藩屋敷跡の林野庁

跡地遺跡のそれとは異なっていた。この結果からは、本資料の主流を占める椀・蓋類は、『江戸表』や『京・上方』から調達された什器類よりも、東北地区の『国元』で賄われたものである可能性が推察されよう。

とりわけ江戸時代初頭期頃の当遺跡は、屋敷地・堀・建物の規模等の検出遺構群や、伊達家家紋である九曜紋を加飾した瓦や金箔押巴文瓦、織部・志野・天目茶碗等の茶会席道具をはじめとする陶磁器類の存在から、文献史料には管見できないものの仙台藩主との関係も指摘される（御仮屋等）ような武家地関連遺跡であると推察されている。本稿で取り上げる漆器資料の場合でも、伊達家家紋の『竪三引両文』の加飾が施された漆器資料（No.9資料）が一例検出されている。同様の漆器資料は、北目城跡・仙台城二の丸遺跡・仙台城三の丸遺跡・養種園遺跡等のような近世初頭期～江戸時代前期頃の比較的江戸時代の初期段階の年代観が与えられた伊達家関連遺跡から幾例か出土例が報告されている。本稿では、これら『竪三引両文』の加飾が施された漆器資料同士の生産技術面の関連性を考察する目的で、本資料の外これまで調査する機会に恵まれた仙台城二の丸遺跡出資料（9点）、仙台城三の丸遺跡（6点）、北目城跡遺跡（4点）、養種園遺跡（1点）、汐留遺跡（1点）の5遺跡21点の『縦三ツ引両文』が加飾された出土漆器資料を加えた合計22点について、相互の調査結果を比較検討した（Table.3）。その結果、これら『竪三引両文』の家紋が施された漆器資料は、椀・蓋タイプの資料ではいずれも用材にはブナ科ブナ材の横木地柾目取りが、2点のみではあるが大型の鉢タイプの資料にトチノキ科トチノキの横木地板目取りが使用されていた。そしてこれらの下地にはいずれも炭粉下地の上に1～2層上塗り漆を塗布する基本的にはやや簡便な漆塗り技法の資料である点では一致していた。しかしその一方で、個々の資料の加飾の赤色漆には朱・ベンガラの異なる赤色顔料の使用も見い出だされた（注15）。このことからは、同じ『縦三引両文』を加飾したほぼ同年代の資料群の中でも個体により若干の生産技術面での違いが存在していたようである。なお、伊達家家紋である『竪三ツ引両文』のモチーフ自体は藩主用、伊達家一族用、上級家臣団用と各々使用目的に応じて使い分けが存在していたことが知られる。このような使用者と個々の資料の生産技術面との関連性、さらには個々の漆器の使用目的（ここでは漆器の機能）や時代背景など、幾つかの想定される問題点との相互関係の解明も今後の課題の一つといえる。

今後の課題は、陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが挙げられる。この検討作業を行うことが、本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

Table.3　各遺跡跡出土の竪三引両文の加飾がある漆器資料観察表

No.	器形	樹種	木取	表面塗り技法 内	外	文様	内	使用顔料 外	漆塗構造 文様	内	外	遺跡名
9	椀	ブナ	B	黒	黒	内外			朱	2	2	元袋遺跡
1	椀	ブナ	B	茶		外			ベンガラ	1	2	北目城跡
2	椀	ブナ	B	赤	黒	外	朱		朱	1	2	
3	大椀	トチノキ	A	茶	黒	外	朱		朱	1	2	
4	椀破片	ー	ー		黒	外			ベンガラ		2	
1	椀	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	仙台城三の丸
2		ブナ	B	赤	黒	外	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
3		ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
4		ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
5	漆膜面	ー		黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
6	漆膜面	ー		赤	黒	外	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
15	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱	2	2	仙台城二の丸
16	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱＋ベンガラ	2	2	
17	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
22	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
25	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内			ベンガラ	1	2	
26	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱	2	2	
30	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内			朱	2	1	
31	皿	ブナ	B	黒	赤	内		ベンガラ	朱＋ベンガラ	2	1	
32	椀（身）	ブナ	B	赤	黒	外	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
35	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
1	大椀	トチノキ	A	茶	黒	外	朱		朱	1	2	養種園遺跡
8060	椀	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	汐留遺跡

（謝　辞）

本調査を行なうにあたり、仙台市教育委員会の高橋綾子氏をはじめとする多くの方には、大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

（注）

(1) 末沢（1975）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男（1979）『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局

(2) 北野信彦（2000）「近世遺跡出土漆器資料の用材利用に関する一考察」『考古学と自然科学第38号』p. 49－52、日本文化財科学会、等を参照されたい。

(3) 北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』P81－101、日本民具学会編　雄山閣出版

北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学　第9号』P81－101、日本考古学協会　吉川弘文館、等を参照されたい。

(4) 須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法は、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤　護（1982）『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

(5) サビ下地を用いた漆器の生産自体の生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのは、漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津，近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地（堅地物）技術の導入などがあげられよう。なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・木下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

(6) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中吊］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集２』国土地理協会

(7) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野宿彦（2000）「朱・ベンガラ　項目」『日本民俗大辞典（下）』福田アジオ他編集、吉川弘文館

(8) 本調査では個々の漆器資料からもっとも一般的な８つの製作技法上の優劣ランクの項目を抽出しそれぞれの比率を総個体数の中で計算してその結果をレーダーチャート方式で図化するものである。すなわちレーダー中心

軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の製作技法の特徴を取り，それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

(9) 個々の出土漆器資料の分析結果は、既刊の下記発掘調査報告書の項目を参照されたい。

北野信彦（1992）「仙台城三の丸跡出土漆器資料の製作技法」『仙台市博物館調査研究報告　12』p.78－86，仙台博物館

北野信彦（1997）「汐留出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡　Ⅰ』p.87－137，東京都埋蔵文化財センター

北野信彦（2000）「出土漆器資料の材質・技法」『汐留遺跡　Ⅱ』p.299－308，東京都埋蔵文化財センター

北野信彦（2000）「東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『東北大学埋蔵文化財調査年報　13』p.283－300，東北大学埋蔵文化財調査研究センター

（引用文献）

(1) 沢口吾一（1966）『日本漆工の研究』、美術出版社。

(2) 光芸出版社編（1978）『うるし工芸辞典』

(3) 高橋あけみ（1996）「２章近世四　伊達家をめぐる美術：伊達家の漆工」『仙台市史　特別編３』p.259－276

(4) 北野信彦（2001）「近世出土漆器における材質・技法の把握に関する文化財科学的研究」『京都工芸繊維大学大学院　博士（学術：工芸科学）論文』p.１－230，京都工芸繊維大学

元袋遺跡から出土した人骨・動物骨

澤田純明・百々幸雄（東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座）

1993年から1995年にわたる仙台市元袋遺跡発掘調査において、中世末に帰属すると思われる遺構から人骨と動物骨が検出された。以下にその内容を報告する。出土骨の乾燥重量は一括して表１・２に示す。

１．墓坑出土人骨

墓坑７基（SK13、SK20、SK22、SK23、SK28、SK31、SK64）から火葬された人骨が出土した。焼成による変形・断片化が著しく、確認できる部位は限定されている。

各墓坑において出土人骨の部位は重複せず、骨の成長度も同じ段階にあるものとして矛盾はない。成人男性の焼骨重量は約２kg、成人女性であれば約1.3kgとされるが（山口　1983）、いずれの墓坑においても出土骨重量はそれを超えない。また、墓坑出土骨にヒト以外の動物は認められない。こうした様相から、墓坑一基に一体が埋葬されたとみなしてさしつかえないであろう。

SK13出土人骨

保存状態：頭蓋は、頭蓋冠破片、左右錐体、上顎骨前歯部、下顎骨前歯部、下顎骨右大臼歯部が保存される。歯は、右上顎犬歯が識別されるほか、切歯や臼歯破片が十数点認められるが、歯冠と歯根の分離やエナメル質の剥落が多く、歯種の同定や咬耗度の判定は困難である。四肢は、左上腕骨骨頭破片、左上腕骨骨幹部、右寛骨耳状面、右寛骨腸骨稜後部、左右膝蓋骨、左右不明腓骨骨幹部のほか、部位不明長骨骨幹部や指骨の破片が保存される。

年齢：右下顎第三大臼歯は残存していないが、歯槽の形態から歯根は完成していたものと思われる。正中口蓋縫合上顎骨部の閉塞は完了していない。頭蓋冠は小片となっており同定が困難であったが、三主縫合に推定されるものはいずれも閉塞していない。焼骨では、老人のように完全に閉塞していないのであれば、縫合に沿って割れる傾向にあるという（池田　1981）。以上の所見から、壮年～熟年程度と思われる。

性別：不明。

その他：下顎骨右中切歯部から反対側の前歯部にかけて歯槽の吸収が見られ、歯周疾患もしくは抜歯による歯の喪失が考えられる。

SK20出土人骨

保存状態：頭蓋冠破片、左右不明上腕骨骨頭、右上腕骨遠位部、左橈骨頭、左右不明尺骨骨幹部、左右不明腸骨体、左脛骨後側近位部、左足母指基節骨近位部、部位不明四肢骨片、椎骨片、肋骨片が保存される。

年齢：四肢骨骨端と腸骨稜がいずれも癒合しておらず、骨体の大きさを考慮に入れると、少年に相当すると思われる。

性別：不明。

SK22出土人骨

頭蓋冠や四肢骨の破片などが保存されるがいずれも小片であり、年齢・性別は不明である。

SK23出土人骨

保存状態：頭蓋冠破片、左錐体、部位不明四肢骨片、椎骨片、肋骨片が保存される。

年齢：頭蓋冠の厚さと四肢骨の大きさから幼児～少年と思われる。

性別：不明。

SK28出土人骨

保存状態：頭蓋は、頭蓋冠破片多数、左右錐体、左上顎骨前歯部、下顎骨左大臼歯部が保存される。歯は破片と化しており歯種の同定は困難である。四肢は、右上腕骨骨幹部、右上腕骨滑車、左右不明橈骨幹部、右寛骨臼、右

(？) 坐骨結節、大腿骨遠位端関節面、脛骨骨幹部、左右不明腓骨骨幹部、左右不明足母指基節骨が認められたほか、部位不明の長骨骨幹部破片や指骨破片が多数残存する。

年齢：第三大臼歯は残存していないが、歯槽の形態から下顎第三大臼歯の歯根はほぼ完成していたものと思われる。四肢長骨と指骨の骨端は全て癒合している。したがって成人段階にあるものと推定されるが、歯の咬耗や頭蓋縫合の状態が不明のため、詳細な年齢推定は困難である。

性別：焼成による収縮の影響を考慮すると判定は困難であるが、寛骨臼の大きさから女性であるように思われる。

SK31出土人骨

四肢長骨骨幹部破片ほか部位不明の小片が数点認められたのみである。

SK64火葬墓の出土人骨

保存状態：頭蓋は、頭蓋冠破片多数、右側頭骨外耳道、左右錐体、左右上顎骨、下顎骨左下顎体、下顎骨左関節突起が保存される。歯は、左右上顎中切歯、右上顎第二大臼歯、同第三大臼歯の各歯冠、左下顎第二小臼歯と同第一大臼歯の歯根のほか、同定の困難な数十点の破片が認められる。四肢は、左右肩甲棘・右肩甲骨烏口突起、右上腕骨滑車、左右橈骨頭、左僥骨遠位部、右尺骨滑車切痕、右尺骨骨幹部、左尺骨遠位部、左右大腿骨近位部と遊離した右大腿骨頭、右第一中足骨近位部、部位不明長骨骨幹部破片、指骨破片が保存される。体幹の骨は、環椎左後弓、軸椎の歯突起と椎体、胸椎、腰椎、肋骨の破片が残存する。軸椎について、山口県吉母浜遺跡中世墓や東京都増上等近世墓の埋葬では、出土状況から喉仏として別に扱った可能性が指摘されているが（田中　1985、奈良1988)、この人骨ではそのような風習の存在をうかがうことはできなかった。

年齢：上顎第二・第三大臼歯に咬耗は認められない。同第三大臼歯の歯根は確認できず、萌出がどの程度進行していたかは判然としない。上腕骨滑車と橈骨近位端は癒合しているが、上腕骨内側上顆、橈骨遠位端、尺骨遠位端、大腿骨骨頭、大転子、第一中足骨近位端は癒合していない。指骨の遠位端はすべて癒合しているが・その近位端は癒合の完了したものと未了のものがおおよそ半々である。以上の所見から、少年期後半に相当するものと思われる。

性別：不明。

出土焼骨の特徴と葬法について

どの骨体も、変形や収縮、断片化が著しく原型を留めるものは少ない。一部が黒く炭化しているが概ね灰白色の色調を呈する。これは骨が高温で長時間焼かれたときの観察結果（Shipmanほか　1984、Mays　1988）と一致する。

一般に焼成した骨はもろくなるが、遺跡から出土する焼骨は硬く強固な状態にあることが多く、元袋遺跡人骨もその例にもれない。土中の焼骨が物理的に強度を増して保存される理由として、高温により融解した無機成分が再結晶化する際に水を吸収して構造が変化する、有機物を含有しないために微生物によって腐食されない、などの説明がなされている（Mays　1988)。

また、四肢長骨では、骨体の歪みや輪状に走る亀裂が顕著であった。こうした変化は、骨が軟部組織に包まれた状態で焼かれた状況でのみ生じるとされ（池田　1981)、したがって本人骨群は、死後それほど時間を置かず軟部組織の腐敗が進まないうちに火葬に付されたものと想定される。

比較的保存の良好であった、SK13、SK28、SK64人骨では、全身にわたる部位が確認された。もし出土人骨が改葬されたものであれば、一次葬後の拾骨の際に指骨や中手・中足骨などが見落とされ、これらの小骨の出現頻度は相対的に低くなることが予想される。しかしながら出土人骨の部位構成は骨格本来のそれとさして変わらず（表１)、二次葬による遺体の移動運搬を示唆するものではない。墓坑内からは人骨に伴って多量の炭化物が検出されており、また、墓坑底面が受熱で赤変していたことを鑑みると、墓坑内で火葬がおこなわれた後にそのまま埋葬されたと解

釈するのが妥当である。炭化物の共伴や壁底の焼土化はほかの墓坑でも観察されていることから、すべての遺体が同様の葬法のもとに扱われた可能性が高い。

2．墓坑以外の遺構から出土した骨

土坑など17基の遺構（E16、E21、H14、J15、K16、L15、S12、SI14、SI19、SI20、SI21、SI23、SK11、SK27、SK35、SK36、SK37）から骨が検出された。その大半は哺乳類と思われたが、ほとんどが焼けて細片と化しており、種の同定は困難であった。出土骨のなかに、明瞭にヒトと判別できるものはない。焼けた四肢骨片の一部には、前述した人骨と同様に歪みや輪状方向の亀裂が認められたことから、軟部組織が付着した状態で火を受けたものと推測される。ある程度まで動物種類の判別が可能であったのはJ15、L15、SI14、SI23、SK27から出土した骨である。

J15出土骨

ブタかイノシシの上顎（？）後臼歯歯冠破片。咬耗は認められず、比較的若い個体と思われる。

L15出土骨

魚類尾椎。

SK14出土骨

シカ（あるいはカモシカなど中型ウシ科？）の中手骨もしくは中足骨の遠位部破片。骨端は癒合しておらず、若い個体である。

SI23出土骨

ブタかイノシシの中手骨もしくは中足骨の遠位部破片、および中型偶蹄目の指骨遠位部破片。骨体の大きさから、いずれも成体かそれに近い個体のものと思われる。

SK27出土骨

ブタかイノシシの下顎犬歯破片。

謝辞

人骨と歯の所見について、東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座奈良貴史助手ならびに同大学院歯学系研究科器官組織構造学講座鈴木敏彦助手からご教示を頂いた。また、写真図版の作成に際して、同大学院医学系研究科人体構造学講座川久保善智氏同前田朋子女史のご助力を得た。記して厚く感謝申し上げる。

文献

池田次郎　1981　出土火葬骨について太安萬侶墓，奈良県立橿原考古学研究所編，pp.79－88.

田中良之　1985　中世の遺構．吉母浜遺跡，下関市教育委員会，pp.31－100.

奈良貴史　1988　墓制について．増上寺子院群　光学院・貞松院跡　源興院跡，東京都港区教育委員会，pp.504－517.

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治　1986　根古屋遺跡出土の人骨・動物骨．霊山根古屋遺跡の研究，霊山根古屋遺跡調査団，pp.93－113.

山口　敏　1983　出土人骨についての分析．竜ケ池観音堂塚群発掘調査報告書Ⅱ，小千谷市教育委員会，pp.41－43.

Mays, S. 1998 Cremated bone. The Archaeology of Human Bones, Routledge, London, pp.207－224.

Shipman, P., Foster, G. and Schoeninger, M. 1984 Burnt bones and teeth: an experimental study of color, morphology, crystal structure and shrinlage. *Journal of Archaeological* Science, 11, pp. 307－325.

表1　墓坑出土人骨重量（g）

	頭　蓋	椎　骨	肋　骨	四肢長骨*1	手足の骨*2	不　明	総計
SK13	163.9（19%）	21.3（ 2%）	51.7（6%）	289.7（33%）	19.1（2%）	323.3（37%）	868.4
SK20	6.2（ 3%）	11.9（ 6%）	10.6（5%）	108.0（56%）	7.1（4%）	49.3（26%）	193.1
SK22	3（ 7%）	−	0.9（2%）	16.2（38%）	0.3（1%）	22.6（53%）	43.0
SK23	4.2（14%）	0.2（ 1%）	1.4（5%）	3.9（13%）	1.7（6%）	18.1（61%）	29.5
SK28	105.7（12%）	13.4（ 2%）	24.9（3%）	317.9（37%）	15.2（2%）	376.0（44%）	853.1
SK31	−	−	−	2.4（14%）	−	14.9（86%）	17.3
SK64	185.9（16%）	50.3（ 4%）	46.8（4%）	423.2（36%）	40.9（3%）	434.8（37%）	1181.9
アジア人*3	583（20%）	290（10%）	185（6%）	1568（55%）	240（8%）		2866

＊1：肩甲骨・寛骨を含む　＊2：中手骨・手根骨・中足骨・足根骨・指骨　＊3：馬場ほか（1986）を改変

表2　墓坑以外の遺構から出土した骨（K16出土骨以外はすべて焼骨）

遺　構	内　　容	重量（g）
E16	哺乳類骨片	0.9
E21	哺乳類骨片	1.6
H14	動物種類不明骨片	0.1
J15	ブタ／イノシシの後臼歯歯冠破片	1.7
K16	哺乳類骨片（非焼骨）	2.6
L15	魚類尾椎	0.1
SI2	哺乳類骨片	7.3
SI14	シカ（中型ウシ科？）の中手骨／中足骨遠位部破片	10.5
SI19	哺乳類骨片	2.6
SI20	哺乳類骨片	0.3
SI21	哺乳類骨片	8.0
SI23	ブタ／イノシシの中手骨／中足骨遠位部破片、および中型偶蹄目指骨遠位部破片	7.2
SK11	哺乳類骨片	0.3
SK27	ブタ／イノシシの下顎犬歯破片	2.6
SK35	動物種類不明骨片	0.9
SK36	動物種類不明骨片	2.1
SK37	哺乳類骨片	8.5

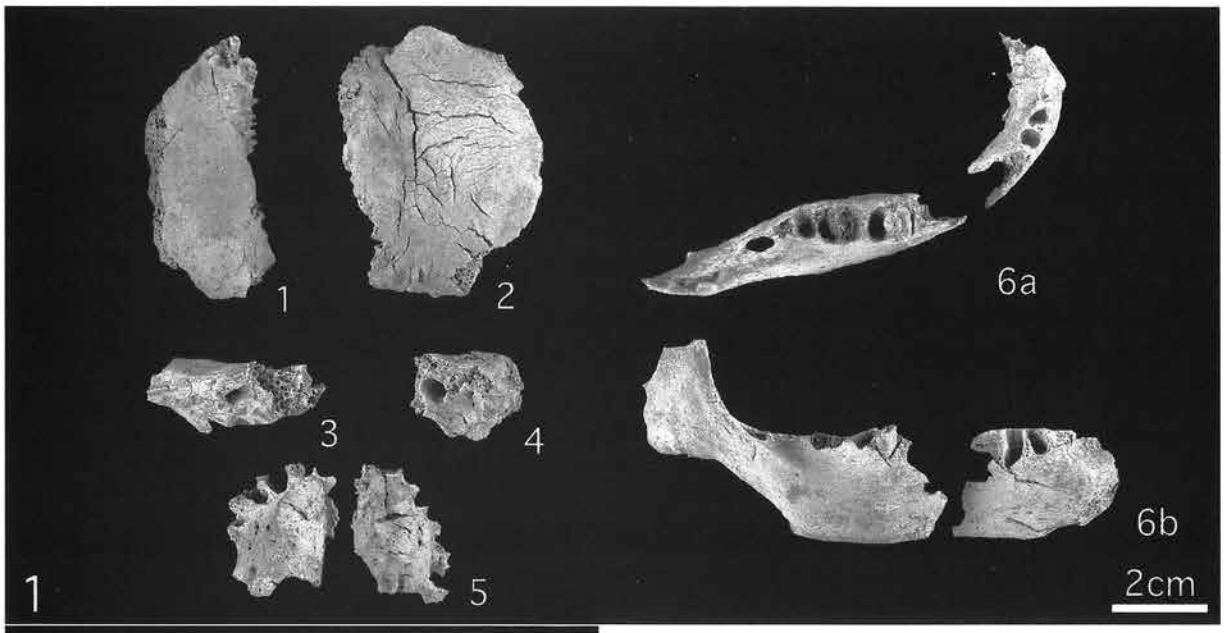
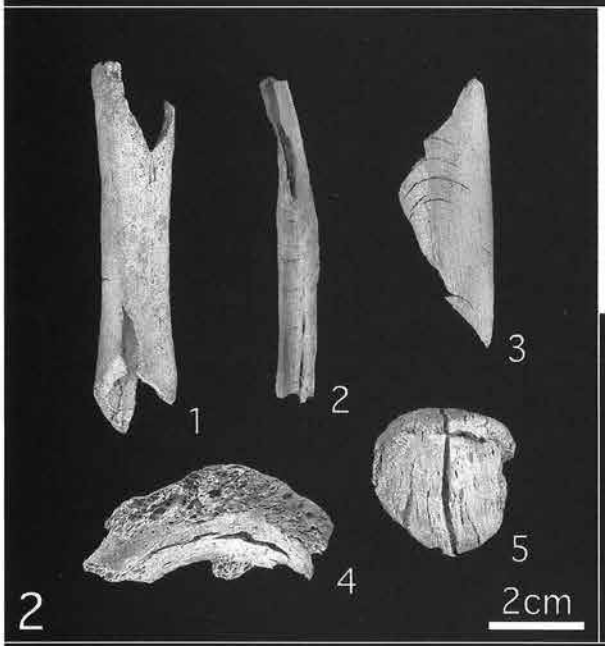
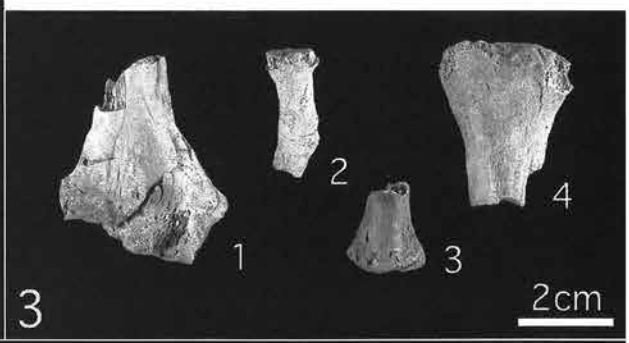


写真1　SK13出土人骨　1・2　頭蓋冠破片　3・4　左右鎚体
5　上顎骨下面　6a・6b　下顎骨右側の上面と側面
写真2　SK13出土人骨　1　右上腕骨骨幹部
2　左右不明腓骨骨幹部　3　部位不明四肢長骨片
4　右寛骨腸骨稜　5　右膝蓋骨





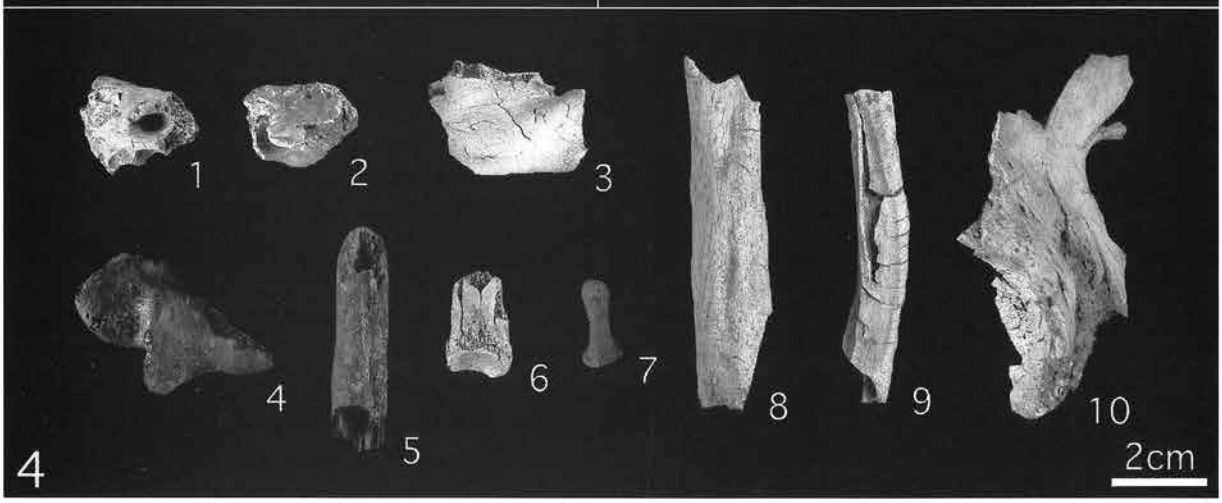


写真3　SK20出土人骨　1　右上腕骨遠位部　2　左橈骨頭　3　左足母指基節骨近位部　4　左脛骨後側近位部
写真4　SK28出土人骨　1・2　左右鎚体　3　下顎骨左大臼歯部　4　右上腕骨滑車　5　左右不明橈骨骨幹部
6　母指基節骨　7　末節骨　8　左右不明上腕骨骨幹部　9　左右不明腓骨骨幹部　10　右寛骨臼

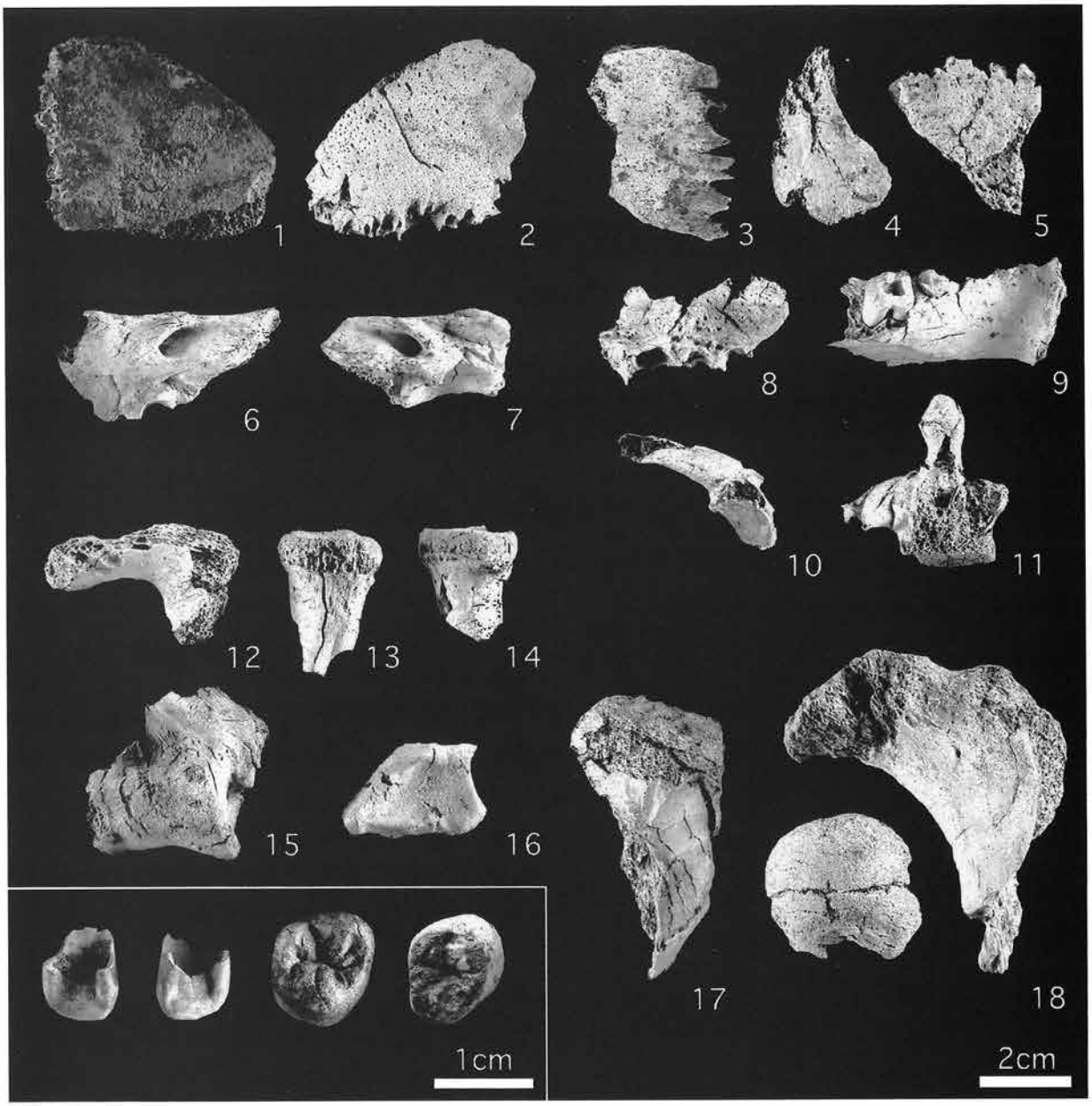


写真5　SK64出土人骨　1～5　頭蓋冠破片　6・7　左右鎌体　8　上顎骨下面　9　下顎骨左下顎体　10環椎左後弓　11　軸椎
12　右肩甲骨烏口突起　13・14　左右橈骨頭　15　右上腕骨滑車　16　左橈骨遠位端　17　左大腿骨近位部（後面）
18　右大腿骨近位部（前面）と遊離した大腿骨頭　左下欄内　左から左右上顎中切歯、右上顎第二・第三大臼歯

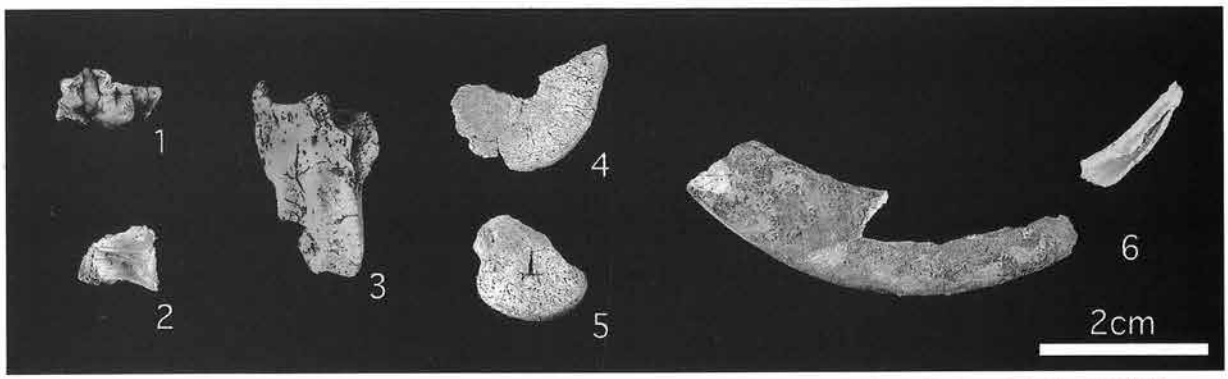


写真6　1　J15：ブタ／イノシシの上顎後臼歯歯冠　2　L15：魚類尾椎　3　SI14：シカ（中型ウシ科？）の中手／中足骨遠位端
4　SI23：ブタ／イノシシの中手／中足骨遠位部　5　SI23：中型偶蹄目の指骨遠位部　6　SK27：ブタ／イノシシの下顎犬歯

元袋遺跡出土動物遺存体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

元袋遺跡は笊川と名取川にはさまれた沖積地に立地する。今回の発掘調査では、中世末～近世の堀で囲まれた屋敷跡が重複して検出されている。検出された溝跡SD２・堀跡SD３・SD４からは・陶磁器・瓦・木製品、金属製品、石製品のほか、骨類や貝・植物遺存体など多量の遺物が出土している。

今回の調査では、主にSD３堀跡、SD４堀跡から出土した動物遺存体の種類について鑑定を行い、当時の動物や動物骨の利用状況に関する情報を得る。出土動物遺存体の鑑定は早稲田大学金子浩昌先生の協力を得た。

１．試料

試料は、主にSD３堀跡、SD４堀跡などから出土した獣骨である。試料の詳細は、結果とともに表２に示す。

２．分析方法

出土骨の実測図を作成し、形態的特徴の肉眼観察および大きさの測定を行い、種類および部位の鑑定を行う。同定は早稲田大学の金子浩昌先生に依頼し、結果は著名原稿として報告する。

３．結果

仙台市元袋遺跡出土の動物遺体

早稲田大学　金子浩昌

本遺跡から出土した動物遺体は17世紀中葉から後葉期に属すると考えられるもので、近世初期のこの地域における家畜その他の動物との関わりを知る貴重な資料と考えられる。各遺構より出土した動物遺体の種名、数量は一覧表（表１・２）に示したが、なお主要骨のまとめ、動物種としての特徴、人との関わりなどについて述べておきたい。

（1）検出された動物遺体

１）貝類

貝類の検出は少なかった。

a）アカニシ

SD12下層、SD３、SD４などで殻軸が残されていた。食用とされた貝としては最も多い。

b）ナガニシ

SD３で１点のみ出土。鹹水貝。食用というよりも形の面白いことから運ばれてきたのではなかろうか。

c）イシガイ

Ⅱ区東で１片あったのみである。、

d）ドブガイ

SD３で殻片があったのみである。

e）イシガイ

SD３で殻片があったのみである。

f）ハマグリ

殻皮が検出されている。

２）魚類

a）マグロ類

SD４で尾椎４点があった。大形の椎骨で椎体径37.67～39.67mmあり、一括して取り上げられている。しかし、

一つ繋がりではなかったと思われる。

b）カレイ類

尾椎１があった。

3）哺乳類

a）ツキノワグマ

・右上腕骨：近位骨端を欠く。遠位骨端は内外顆部を欠損する。骨体最小幅24.0mm、遠位骨端に金属刃による切痕が並ぶ。解体時のものであろう。近位骨端部には食肉獣の歯痕と思われるかじり痕が付く。イヌなどのかじった痕である。

・左尺骨：近、遠位骨端を欠くが、上記した上腕骨にほぼ見合う大きさの尺骨である。

b）イノシシ

SD３で下顎骨、SD４で尺骨を得ているのみである。

・下顎骨：SD３（13層J33）：乳臼歯、M１を萌出する段階の下顎骨２点がある。生後半年程度の個体のもの。１点は近位端、下顎枝を欠き解体の際に破損したものであろう。１点は下顎位角まで残す。ほぼ同じサイズであり、生育も同じ個体である。別の標本はP４～M３までを残す下顎骨で、臼歯を埴立する顎骨部分のみが残され、骨体部、枝骨はこわされている。解体や骨随を利用する過程で壊されたのであろう。臼歯の摩耗は進み、M１、２は全面こう頭を摩耗、M３も各咬頭を摩滅する。

SD４では尺骨が出土している。近位骨端骨は外れ、遠位骨端は欠けている。若い個体のものである。

C）ニホンジカ

主要骨格は角片、頭骨、四肢骨である。

Ⅰ区SX２堆土：上腕骨、脛骨

Ⅱ区SE１：角片２

SD３：角、肩甲骨（雄個体）、大腿骨

SD３：頭骨

SD４：角・左角座部（落角）・下顎骨・橈骨

SX６：大腿骨

このうち鹿角片が多く、それには加工途中の断片があった。SD４（K27）の鹿角は落角で、第一枝を切断（分岐部から鋸引きで切断している）、さらに角座から上部65mmの場所に切り込みを入れている。

切り込みは鋸引きである。また分岐部と枝部を三点で切断している標本もあり、これも鋸で輪切りにしている。

頭骨は前頭から頭頂、後頭骨を残すが、左右に立ち割ったもので、左側のみが残された。雄で、角は角座骨の基から切断されている。頭蓋の分断は脳髄の摘出を目的としていると思われる。上顎部分は別に外されたのであろう。下顎骨はSD４で右下顎枝が出土している。その表面には水平方向につく細かい切痕があるが、解体時側頭節を切断する際に付いた傷であろう。

表１　検出動物種名の一覧

- 軟体動物門　Phylum Mollusca
  - 腹足綱　Class Gastropoda
    - 新腹足目　Order Neogastropoda
      - アッキガイ科　Family Muricidae
        - アカニシ　*Rapana venosa*
      - イトマキボラ科　Family Faeciolariidae
        - ナガニシ　*Fusinus perplexus*
  - 二枚貝綱　Class Bivalvia
    - 古異歯目　Order Palaeoheterodonta
      - イシガイ科　Family Unionidae
        - ドブガイ　*Anodonta*（*Sinanodonta*）*woodiana*
        - イシガイ　*Unio douglasiae*
    - マルスダレガイ目　Order Veneroida
      - マルスダレガイ科　Family Veneridae
        - ハマグリ？　*Meretrix lusoria*？
- 脊椎動物門　Phylum Verterrata
  - 硬骨魚綱　Class Osteichthyse
    - スズキ目　Order Perciformes
      - サバ科　Family Scombridae
        - マグロ類　*Thunnus* sp.
    - カレイ目　Order Pleuronectiformes
      - カレイ類？　Pleuronectiformes fam. et gen. indet.？
  - 哺乳綱　Class Mammalia
    - 霊長目　Order Primates
      - ヒト科　Family Hominidae
        - ヒト　*Homo Sapiens*
    - 食肉目　Order Carnivora
      - イヌ科　Family Canidae
        - タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*
      - クマ科　Family Ursidae
        - ツキノワグマ　*Ursus thibetanus*
    - 奇蹄目　Oeder Perissodactyla
      - ウマ科　Family Equidae
        - ウマ　*Equus caballus*
    - 偶蹄目　Order Artiodactyla
      - ウシ科　Family Bovidae
        - ウシ　*Bos taurus*
      - シカ科　Family Cervidae
        - ニホンジカ　*Cervus nippon*
      - イノシシ科　Family Suidae
        - イノシシ　*Sus scrofa*

表２　出土動物遺存体の同定結果（1）

調査区	遺構・層位	グリッド	採取日	種　類　名	部　　位	個数	備　　考
Ⅰ区	SX2堆土		930913	ニホンジカ	右　腓骨	1	
Ⅰ区	SX2堆土		930913	ニホンジカ	右　上腕骨	1	
Ⅰ区	SX2堆土		930913	ウマ	第２蹠骨	1	
Ⅰ区	SX2堆土		930913	ヒト	肩甲骨	1	
Ⅱ区　東	P1	L22	950731	不明	獣骨片	2	焼骨
Ⅱ区　東	P1	L22	950731	カレイ類？	尾椎	1	
Ⅱ区　東	SD12下層			アカニシ	軸端	1	
Ⅱ区　東	SD12下層			イシガイ	右	1	
Ⅱ区　東	SI30内SK3		951006	不明	獣骨片	破片	焼骨
Ⅱ区　東	近世整地層	J18	950721	ウシ	右　上顎歯	1	$M^{2/3}$
Ⅱ区　東	近世整地層	J21	950718	ヒト	頭頂骨	破片2	
Ⅱ区　東		I21	950904	ウマ	左　下顎歯	1	P_3
Ⅱ区　東		I21	950904	ウマ	左　下顎歯	1	P_4
Ⅱ区　東		L21	950905	ウマ	左　上顎骨	4	P^4、$M^{1\cdot2\cdot3}$
Ⅱ区	SE1　ℓ5		950524	ニホンジカ	角	1	
Ⅱ区	SE1　ℓ5		950524	ニホンジカ	角（分岐部）	1	
Ⅱ区	SE1　ℓ5		950524	ニホンジカ	角（分岐部）	1	
	SD2　ℓ2	H27	950510	ウシ	左　脛骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950623	アカニシ	殻柱	1	
	SD3　ℓ2	J33	950623	アカニシ	殻	破片	
	SD3　ℓ2	J33	950623	ナガニシ	殻柱	1	
	SD3　ℓ2	J33	950623	ナガニシ	殻	1	
	SD3　ℓ2	J33	950623	二枚貝（ハマグリ？）	殻皮	1	
	SD3　ℓ2	J33	950621	ツキノワグマ	右　上腕骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950621	イノシシ	右　下顎骨	1	幼体
	SD3　ℓ2	J34	950612	ニホンジカ	角片	1	焼骨
	SD3　ℓ2	J34	950612	ニホンジカ	角片	1	焼骨
	SD3　ℓ2	J34	950612	ニホンジカ	左　大腿骨　遠位端	1	
	SD3　ℓ2	J34	950525	ウシ	左　上腕骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950524	ウマ	左　肩甲骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950524	ウマ	左　肩甲骨	1	
	SD3　ℓ2	J34	950613	ウマ	左　上腕骨	1	
	SD3　ℓ2	K34	950523	ウマ	左　上腕骨	1	
	SD3　ℓ2	J34	950613	ウマ	右　上腕骨	1	
	SD3　ℓ2		950526	ウマ	左　橈骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950616	ウマ	左　橈骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950623	ウマ	右　橈骨	1	
	SD3　ℓ2		950621	ウマ	右　尺骨	1	
	SD3　ℓ2	J33	950621	ウマ	尺骨	1	
	SD3　ℓ2	J34	950613	ウマ	左　脛骨	1	
	SD3　ℓ3	J34	950613	アカニシ	殻柱	1	
	SD3　ℓ3	J34	950613	アカニシ	殻柱	1	
	SD3　ℓ3	J33		タヌキ	頭骨	1	全長117.18、歯かなり摩滅、下顎骨長全長88.02（角部）、85.08（関節）、M_1　12.08×5.04
	SD3　ℓ3	I33	950601	イノシシ	下顎骨	1	
	SD3　ℓ3	J33	950605	イノシシ	右　下顎骨	1	幼体
	SD3　ℓ3	H33	950601	ニホンジカ	右　肩甲骨	1	
	SD3　ℓ3	I33		ウシ	頭骨	1	上顎幅145mm
	SD3			ドブガイ	左殻	1	
	SD3			ドブガイ	右殻	1	
	SD3			イシガイ	左殻	1	
	SD3			イシガイ	右殻	1	
	SD3		930826	ニホンジカ	頭骨	1	半裁

表２　出土動物遺存体の同定結果（2）

調査区	遺構・層位	グリッド	採取日	種　類　名	部　　位	個数	備　　考
	SD4　ℓ1	J27	950613	ツキノワグマ	左　尺骨	1	
	SD4　ℓ1	J27	950612	ウマ	右　上顎歯	1	P^2
	SD4　ℓ1	I27	950608	ウマ	右　肩甲骨	1	
	SD4　ℓ1	J26	950601	ウマ	左　上腕骨	1	
	SD4　ℓ1	J27	950613	ウマ	左　上腕骨	1	
	SD4　ℓ1	J26	950601	ウマ	右　上腕骨	1	
	SD4　ℓ1	J27	950612	ウマ	左　橈骨	1	
	SD4　ℓ1	K26	950601	ウマ	左　橈骨	1	幼体
	SD4　ℓ1	I27	950628	ウマ	右　中手骨　近位端	2	
	SD4　ℓ1	K26	950601	ウマ	左　脛骨	1	
	SD4　ℓ1	J27		ウマ	左　中足骨	1	
	SD4　ℓ2	J26	950613	アカニシ	殻柱	4	
	SD4　ℓ2	J26		アカニシ	殻柱	1	
	SD4　ℓ2	I27	950608	マグロ類	尾椎	4	遊離状態であったものと思われる
	SD4　ℓ2	K27	950608	イノシシ	右　尺骨	1	
	SD4　ℓ2	I27	950608	ニホンジカ	左　角	1	
	SD4　ℓ2	K27	950608	ニホンジカ	右　落角	1	
	SD4　ℓ2	K27	950609	ニホンジカ	角（右）	1	
	SD4　ℓ2	K27	950607	ニホンジカ	角	1	
	SD4　ℓ2	K27	950607	ニホンジカ	角	1	鋸切断痕あり
	SD4　ℓ2	K27	950608	ニホンジカ	幹部	1	
	SD4　ℓ2	K27	950608	ニホンジカ	枝部	1	
	SD4　ℓ2	I27	950608	ニホンジカ	右　下顎骨	1	
	SD4　ℓ2	I26	950605	ニホンジカ	右　下顎骨	1	
	SD4　ℓ2	K26		ニホンジカ	右　橈骨	1	
	SD4　ℓ2	K27		ウシ	左　下顎歯	1	$P_{2\cdot3}$、$M_{1\cdot2\cdot3}$
	SD4　ℓ2	I27	950607	ウシ	右　肩甲骨	1	
	SD4　ℓ2	J27		ウシ	大腿骨	1	
	SD4　ℓ2	K27	950608	ウマ	肋骨	1	
	SD4　ℓ2	I27	950608	ウマ	左　下顎骨	1	$P_{3\cdot4}$、$M_{1\cdot2\cdot3}$、P_2脱落
	SD4　ℓ2	K27	950608	ウマ	右　中手骨　遠位端	1	
	SD4　ℓ2	K27	950608	ウマ	右　大腿骨	1	
	SD4　ℓ2	J27	950605	ウマ	右　大腿骨	1	
	SD4　ℓ2	J26	950616	ウマ	左　距骨	1	
	SD4　ℓ2	K26		ウマ	左　中足骨	1	
	SD4　ℓ2	J26	950613	ウマ	右　中足骨	1	
	SD4	K27	950608	ニホンジカ	落角	3	
	SX6　17中		950830	ニホンジカ	左　大腿骨	1	
	近世遺構検出面	H23	950414	ウマ	左　上顎臼歯	1	

凡例　P：前臼歯　　M：後臼歯

四肢骨はSD３で肩甲骨を１点得ているのみである。

d）ウマ

ウマの遺骸はもっとも多く出土している。

・上顎骨：Ⅱ区東（ℓ5層L21）：左上顎臼歯列（P４～M３）、６歳前後と推定される。

SD４（ℓ1層J27）：右上顎前臼歯（P２）、４歳位か。

・下顎歯及び下顎骨：SD４（12層K27）：前臼歯～後臼歯（P２～M３）、老齢個体（13歳位か）の臼歯。

SD４（ℓ2層I27）・左下顎骨、前臼歯～後臼歯（P３～M３）、老齢個体。

四肢骨

・肩甲骨：骨体部遠位骨端を残す。SD３、SD４から３点が出土。肩甲骨頚部径64.0、59.5、50.2mm。

・上腕骨：骨体部から遠位骨端もしくはそれに近い位置を残す。SD３、SD４から６（左３、右３）点。骨休最

小径31.1、31.5、30.9mm。

・橈骨：SD３で３点、SD４で２点が出土している。比較的保存良好の標本は近位骨端を残すが、完存する標本はなかった。最小径31.5、38.5mmを計測する。SD４（ℓ1層K26）の左橈骨は生後間もない幼獣である。

・尺骨：SD３、SD４で各１点検出された。

・中手骨：SD４（ℓ1層127）の近位骨端を残す標本には第２中手骨が伴っていた。近位骨端幅45.0mm。SD４（ℓ2層K27）出土の中手骨は遠位骨端部を輪切りにしたもので、骨体部を何かに利用した残りではないかとおもわれる。遠位骨端幅40.0mm。

・大腿骨：SD４で２点があり、いずれも骨体部のみを残す標本。骨体最小幅25.0、30.6mm。12層K27の標本の近位骨端寄りには叩いたような痕跡があった。

・中足骨：SD４で完存する３点がある。

ℓ2層J26：全長242.5、近位骨端幅45.8、遠位骨端幅43.2mm。

ℓ2層K26：全長254.0、近位骨端幅47.9、遠位骨端幅46.2mm。

ℓ1層J27：標本は全長253.0±、近位骨端幅46.0mm。

・距骨：１点。幅60.58mm。

ｅ）ウシ

・肩甲骨：SD４で１点、かなり破損した標本。頚部幅60.0mm。

・上腕骨：SD３で１点、骨体のみを残す。最小径34.8mm。

・脛骨：SD２で１点、骨体のみを残す。最小径39.0mm。

（2）考察

大別されたSD３、SD４遺構内での動物遺骸の出土では、SD３で貝類が若干含まれていた他、獣骨類での出土に大差はみられなかった。両地点ともにウマを主としてシカ、イノシシの混在する様相がみられたのである。

１）貝類

アカニシは食用にされたものであり、ドブガイ、イシガイは淡水種であって自然の生息個体であった可能性もある。アカニシは大型の巻き貝で、内湾で採ることのできた貝種である。中近世の人々も好んで食べたことが知られている。

２）魚類

魚類骨格の出土は少なかった。軽い魚骨は流失することも考えられる。マグロ類の椎体があったのみであるが、仙台湾岸域はマグロの回遊域であり、漁獲も多かったのではないかと思われる。もちろん実際にはさらに多くの魚が食膳に供されていたことは想像するに難くない。

３）獣類

タヌキ：頭骨が１点あったのみである。身近にいくらもいた獣であり、捕獲する機会は多かったのではないかと思われるが、遺骸として残されているのは少なかった。

ツキノワグマ：多くの家畜遺骸に混じってクマの遺骸のあったことは興味あることであった。おそらく毛皮などを目的とした狩猟が行われたのであろう。骨には解体と肉を切り取る際についたと思われる切痕がみられた。

イノシシ：若、成獣個体があり、若い個体２個体は生後半年の秋から冬の間の捕獲されたと考えられる個体である。この年齢の個体の生息数は多く、捕獲個体も多くなると思われる。イノシシの尺骨１点も同じ位の年齢の個体のものである。成獣個体は年のいった個体であった。

ウマ：もっとも多くの遺骸を出土した動物であって、当時の主な家畜として飼育されていたことがわかる。残されていた骨格は中手、中足骨を除いて他は不完全なものが多かったが、計測値からみるかぎりいずれも現在の在来

馬の中小型である三崎馬に匹敵する大きさの個体であった。このタイプのウマは古代以降もっとも普遍的に飼育されていたことが知られている。本遺跡においても同じ状況であった。出土した馬歯から推定される年齢は幼、壮、老年の個体を含み、老齢個体は自然死ではなかったかと推定される。

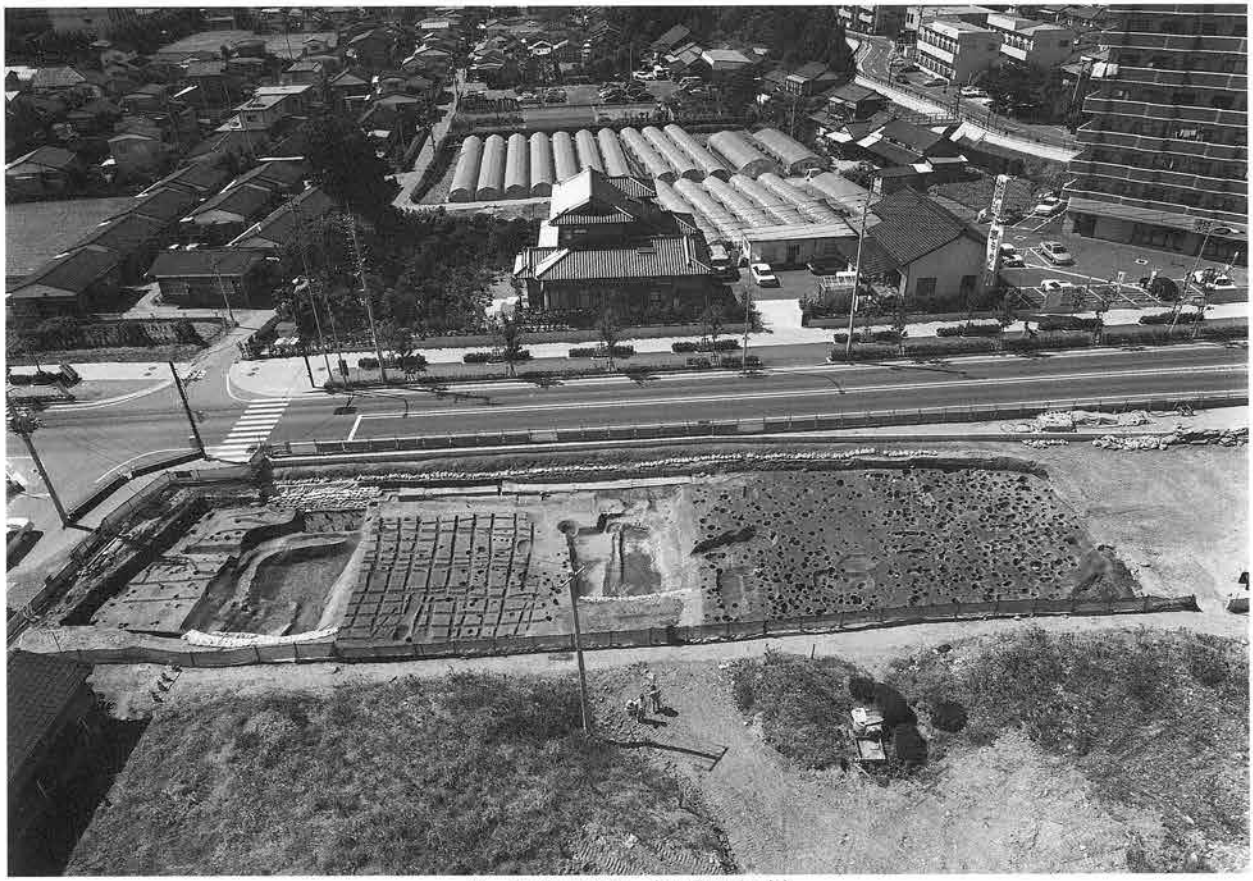
ウシ：古代以降ウシの飼育は、関東以北においては少ない。本遺跡においてもそうした傾向をみることができた。本遺跡でのウシ遺骸は少なく、計測資料が限られるが、その大きさは中型在来牛として知られる三島牛に匹敵する。古代から中、近世のウシはほぼ同じ大きさである。

人骨も出土しているが、おそらく埋葬されたものの一部であろう。また多数の焼骨が出土しているが火葬骨であり、そこには埋葬場所があったのであろう。

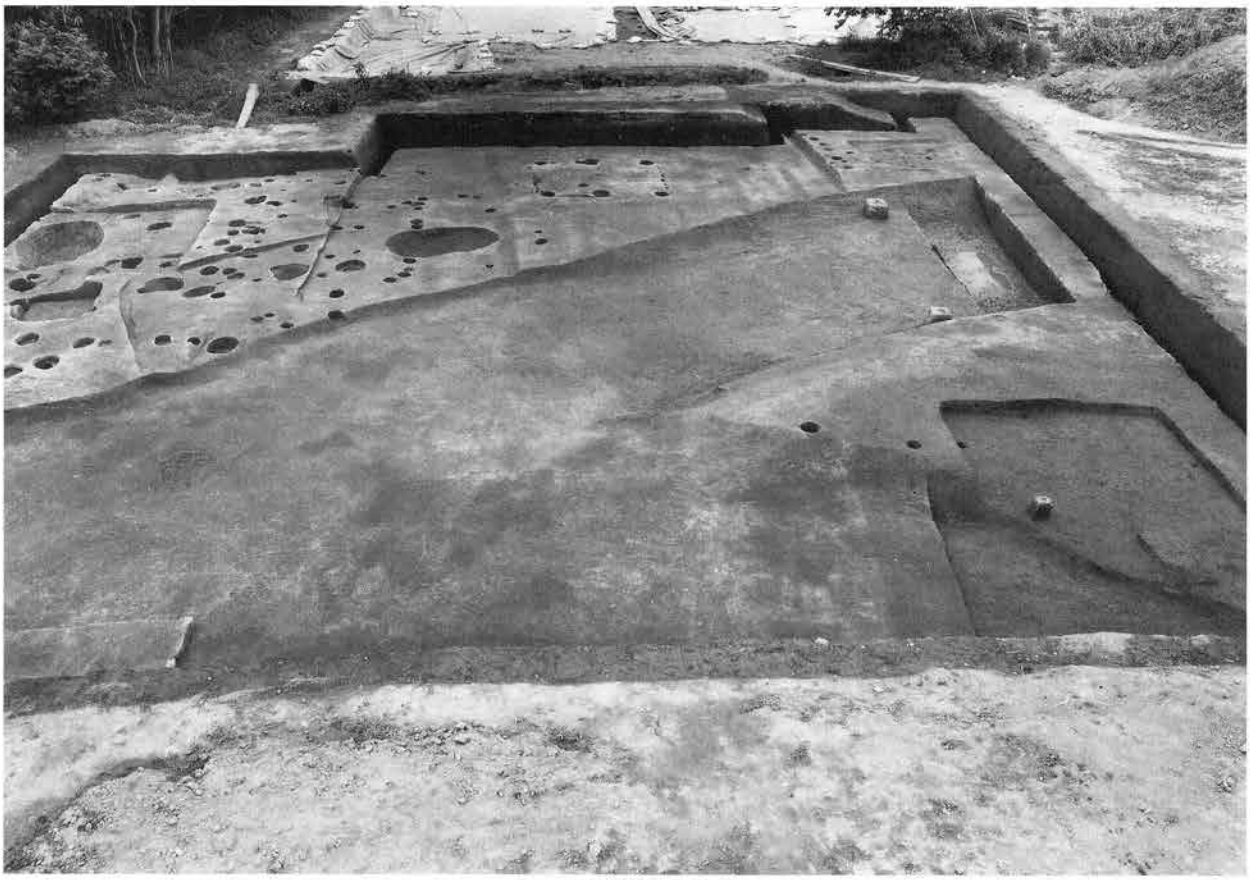
写　真　図　版

1　遺跡周辺の航空写真（昭和42年撮影・白線内元袋遺跡）

2　調査区全景（平成 5 年度）



3　調査区全景（平成 7 年度）



4　Ⅰ区全景（北→）

5　Ⅰ区水田跡全景（北→）

6　Ⅰ区東壁基本層序

7　Ⅰ区Ⅳ層上面水田跡確認状況（北→）

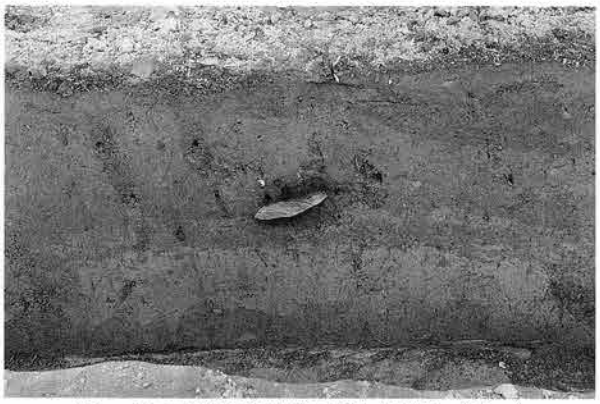
8　Ⅰ区E～Ⅰ－4～8　Ⅴ層上面擬似畦畔確認状況（北東→）

9　Ⅰ区Ⅳ層水田跡畦畔5　直下Ⅴ層上面土器出土状況（北→）

10　Ⅰ区G～Ⅰ－5～7　Ⅴ層上面遺物出土状況（北→）

11　Ⅰ区H・Ⅰ－5～7　Ⅴ層上面遺物出土状況（西→）

12　Ⅰ区C・D－7　Ⅴ層上面完掘状況（東→）



13　Ⅰ区東壁SI３石包丁出土状況（西→）

14　Ⅰ区東壁SI３石包丁出土状況（西→）

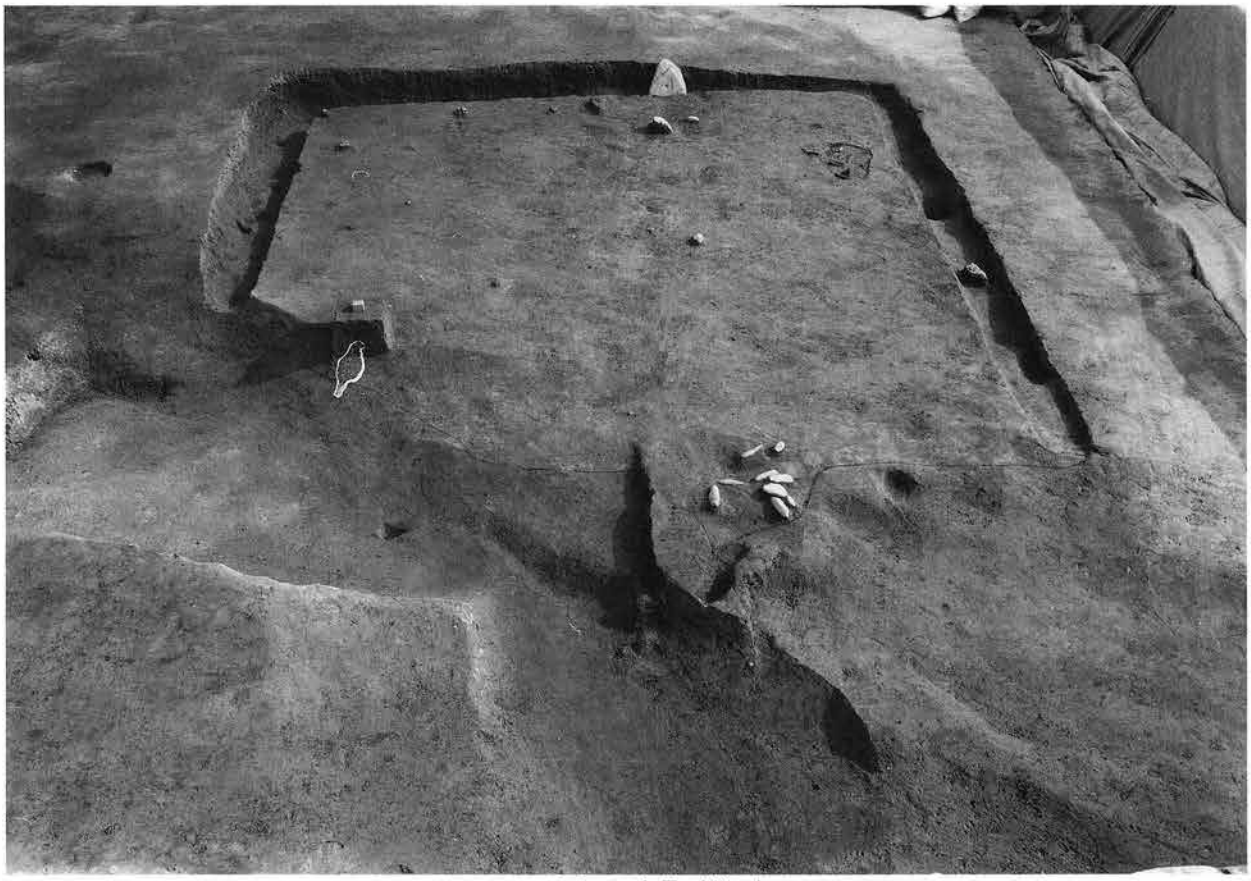
15　Ⅰ区SI２全景（東→）

16　Ⅰ区SI１全景（南→）

17　Ⅰ区SI２掘り方全景（東→）

18　Ⅰ区SI 3 全景（東→）

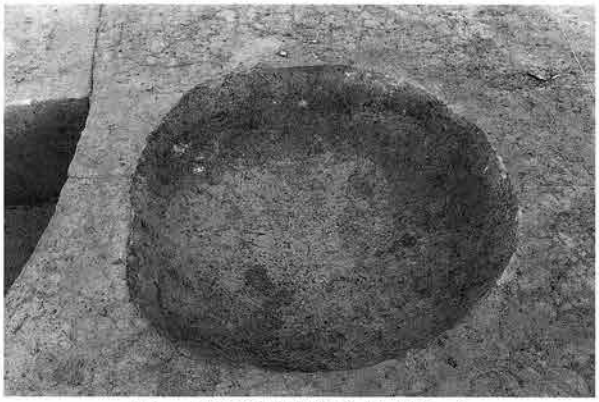
19　Ⅰ区SI 4 全景（北→）



20　Ⅰ区SI 7 全景（北→）

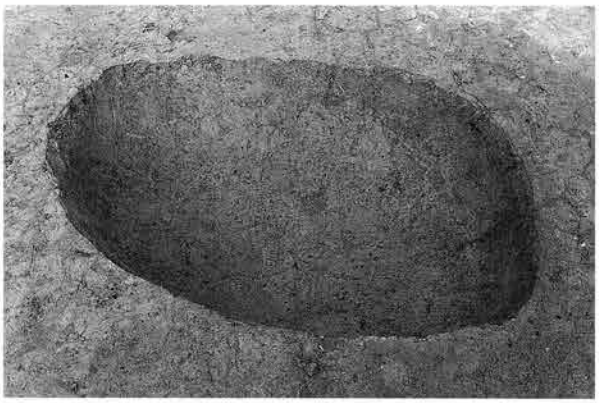
21　Ⅰ区SI 7 のP1白雲母出土状況

22　Ⅰ区SI 8 全景（西→）

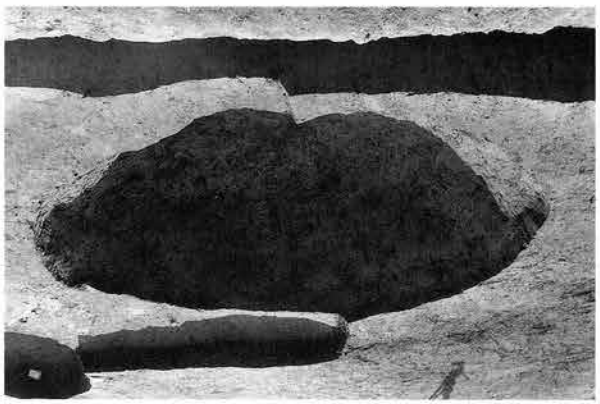


23　Ⅰ区SK３完掘全景（西→）

24　Ⅰ区SK４完掘全景（西→）

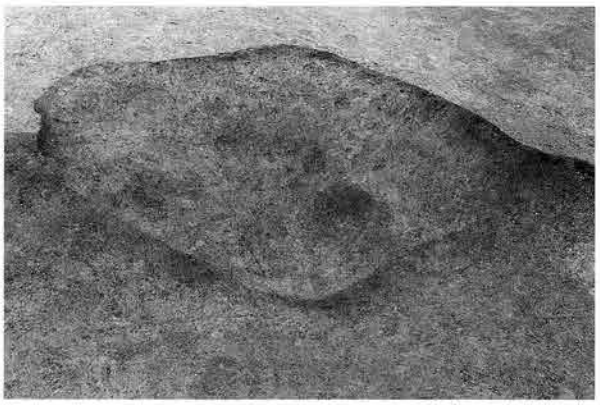


25　Ⅰ区SK５完掘全景（南→）

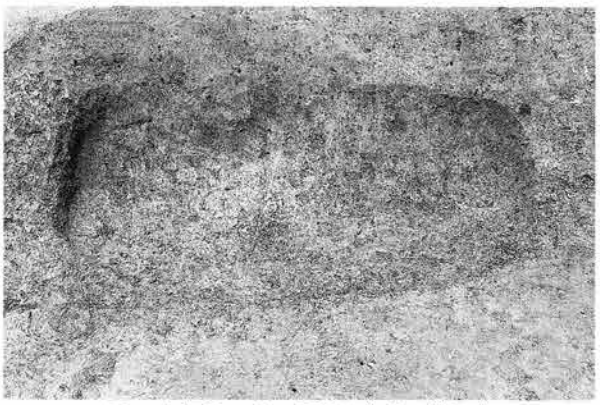


26　Ⅰ区SK７全景（東→）

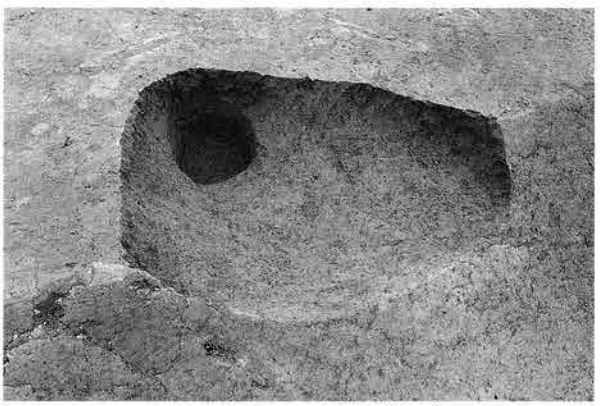
27　Ⅰ区SK８全景（南→）



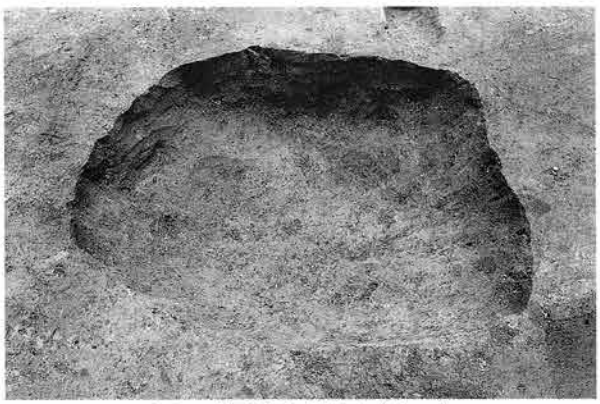
28　Ⅰ区D－３・４　SK10全景（南→）



29　Ⅰ区C－４　SK11全景（南→）



30　Ⅰ区SK12全景（北→）

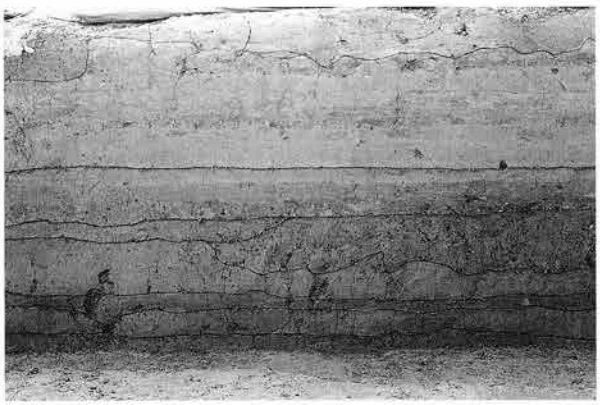


31　Ⅰ区SK14全景（北→）

32　Ⅰ区SI 6 全景（南→）

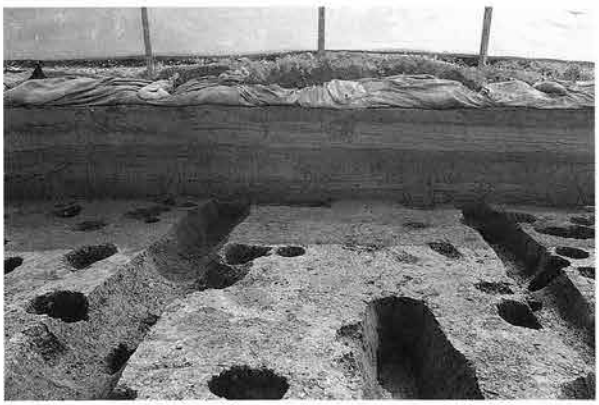
33　Ⅰ区SI 6 完掘状況（南→）

34　Ⅰ区SD 1 セクション（東→）



35　Ⅲ区西壁セクション（東→）

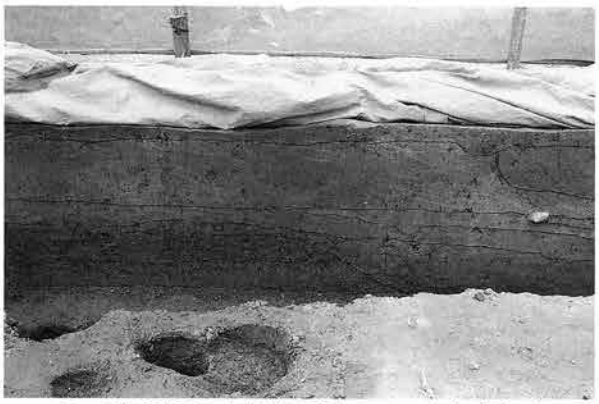
36　Ⅱ区東　東壁セクション20～21列（西→）



37　Ⅱ区東　東壁セクション21～22列（西→）

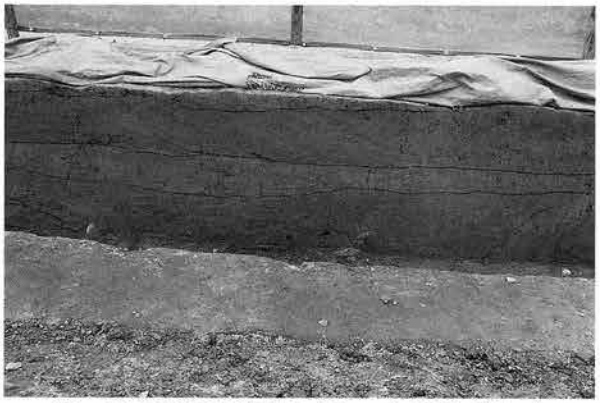
38　Ⅱ区東　東壁セクション22～24列（西→）

39　III区東SD４東壁セクション25列（西→）

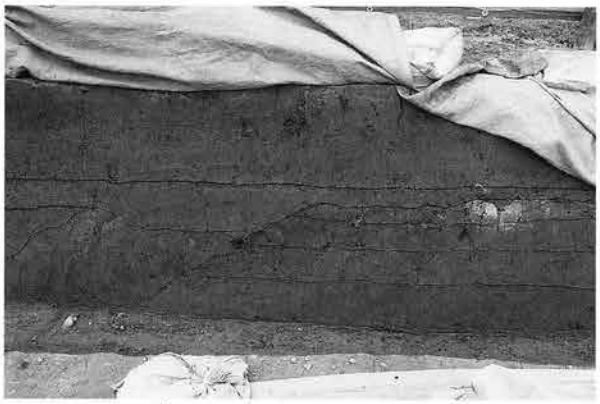


40　III区東SD４東壁セクション26列（西→）

41　III区東SD４東壁セクション26～27列（西→）



42　III区東SD４東壁セクション27列（西→）



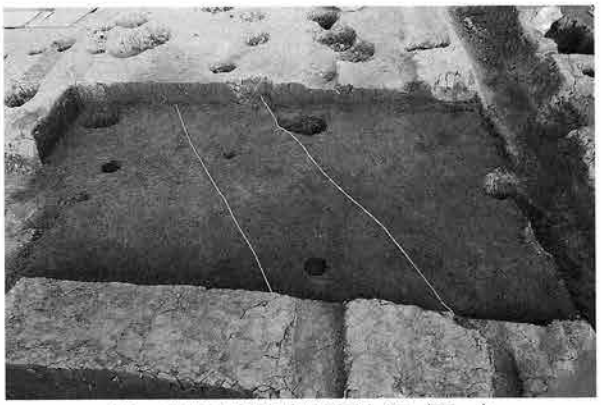
43　III区東SD４東壁セクション28列（西→）

44　III区東SD３、SD４間東壁セクション南半部（西→）

45　II区東Ｖ層上面落ち込み完掘（南→）

46　II区Ｖ層上面遺構確認プラン（北→）

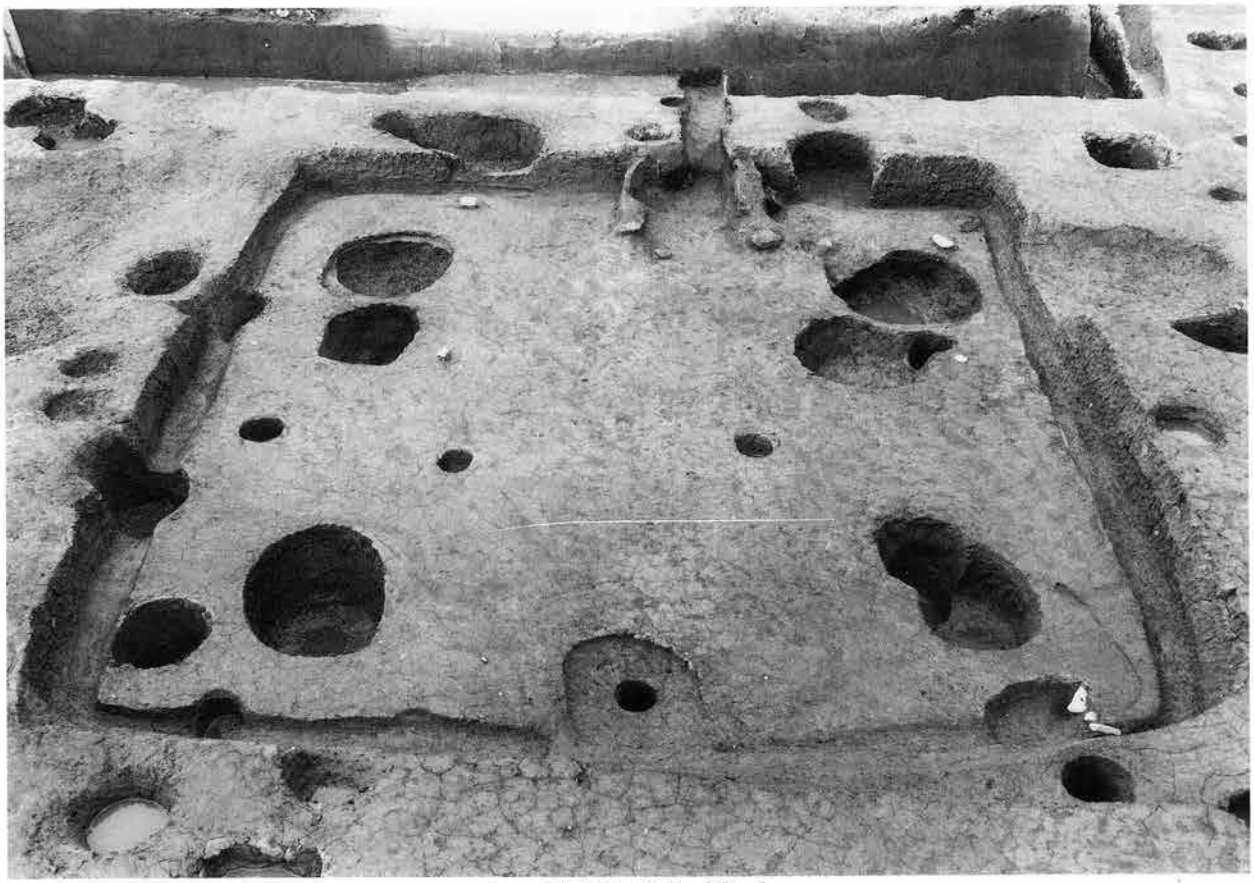
47　II区Ⅴ層上面全景（北→）



48　II区東拡張部Ⅴ層上面（西→）

49　II区SI10全景（東→）

50　II区SI11カマド部分（東→）

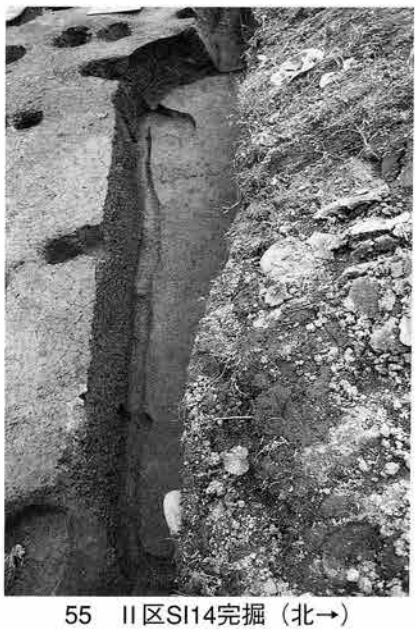


51　II区SI11全景（南→）

52　II区SI12、SI16全景（西→）

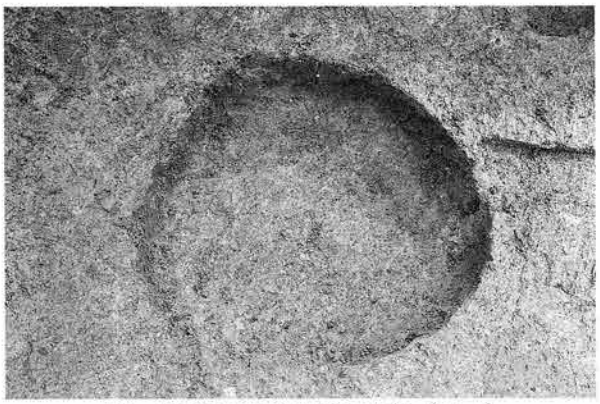
53　II区SI13全景（西→）

54　II区SI14全景（西→）



55　II区SI14完掘（北→）

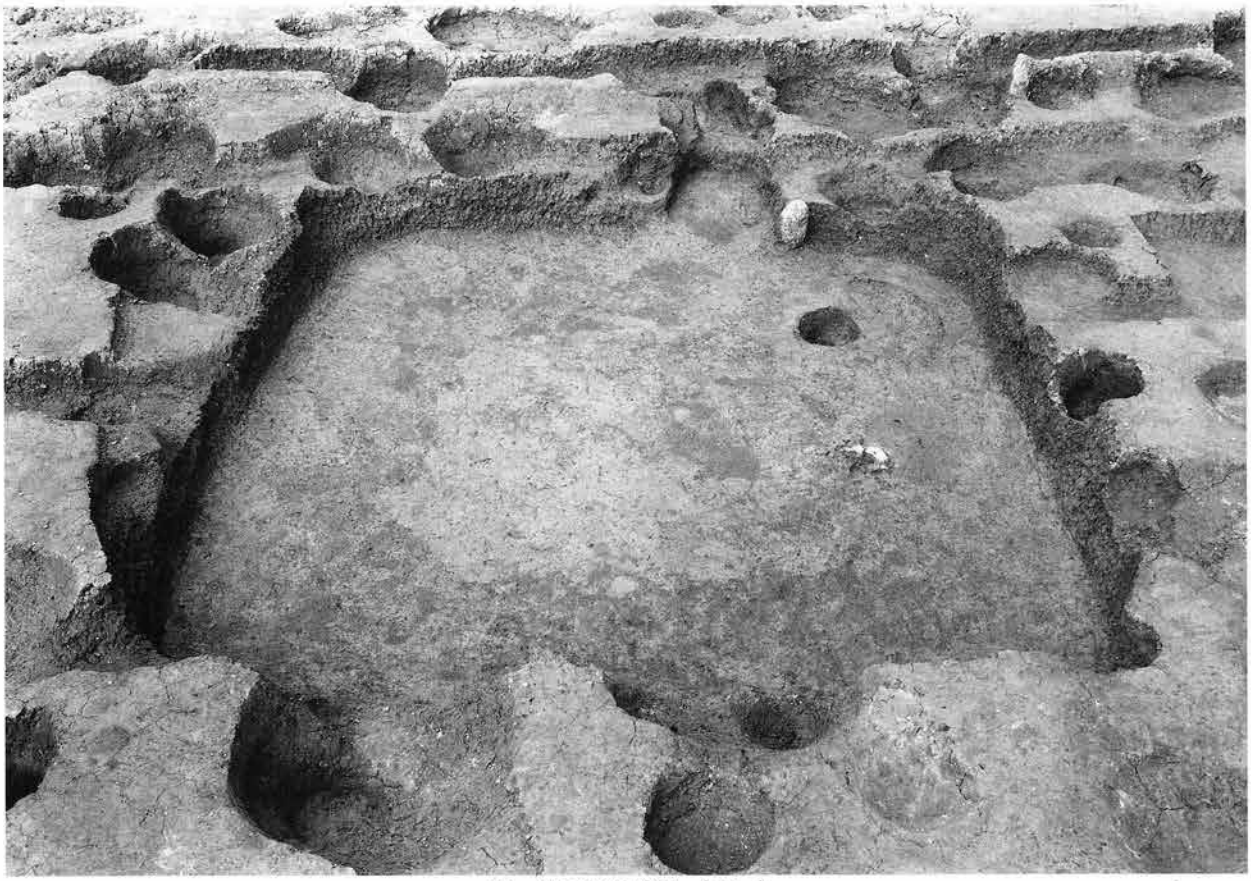
56　II区東SI15完掘（西→）



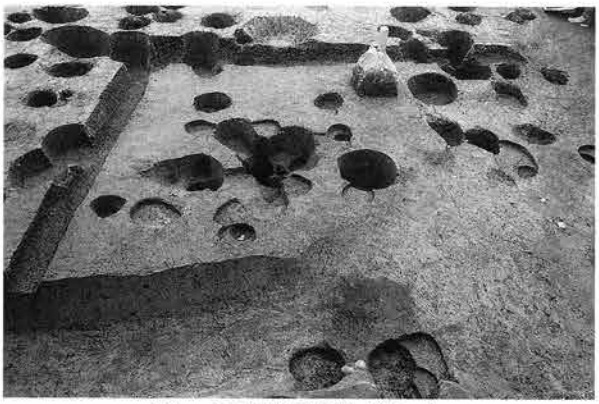
57　II区東SI15のSK１完掘（西→）

58　II区SI15全景（東→）

59　II区東SI15のSK２完掘（西→）

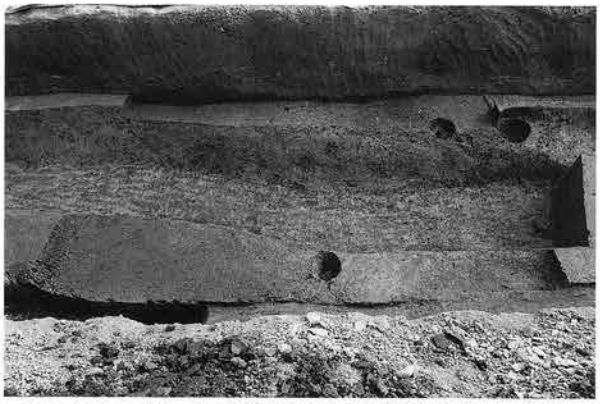


60　II区SI17全景（南→）

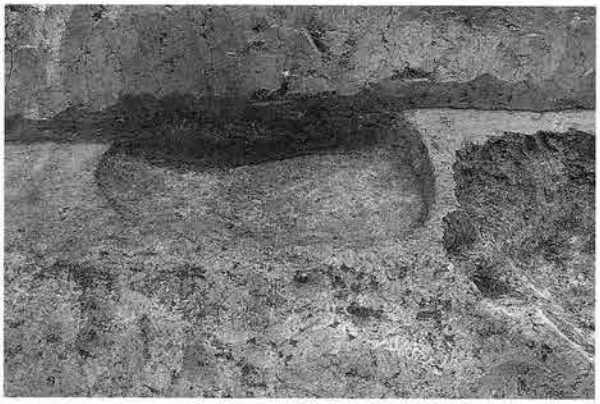


61　II区SI18完掘（南→）

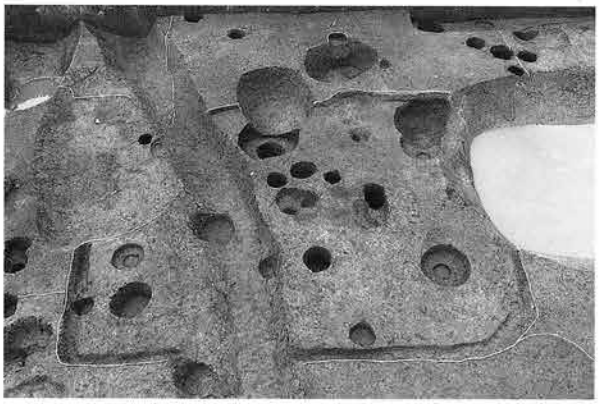
62　II区SI19完掘（南→）



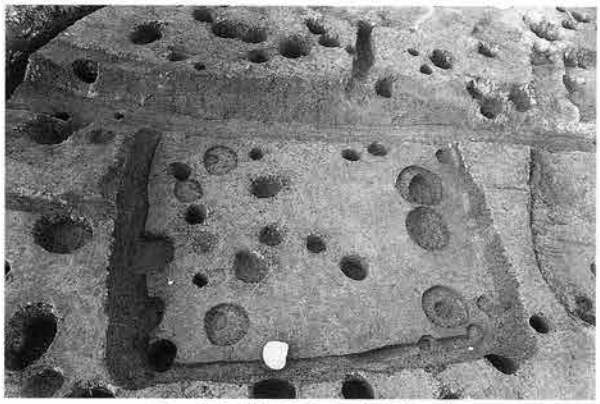
63　II区東SI19完掘（南→）



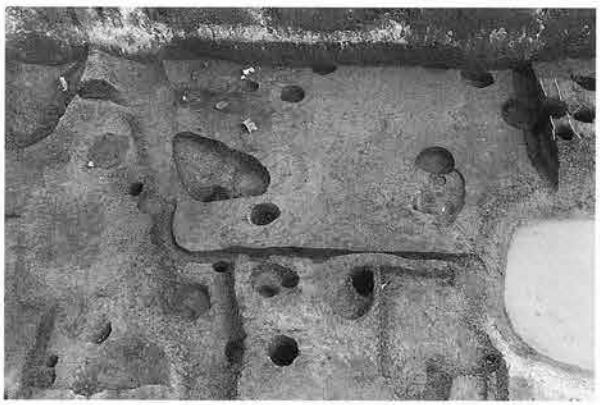
64　II区東SI19焼土完掘（南→）



65　II区東SI21完掘（西→）



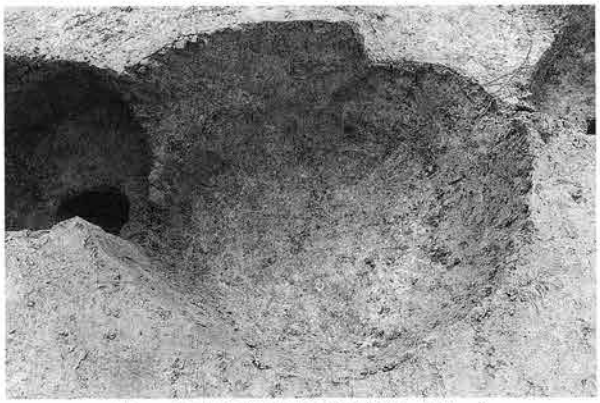
66　II区東SI22全景（南→）



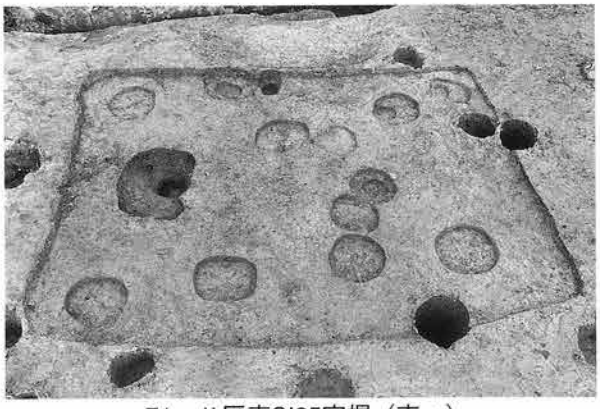
67　II区東SI23全景（西→）

68　II区東SI23完掘（西→）

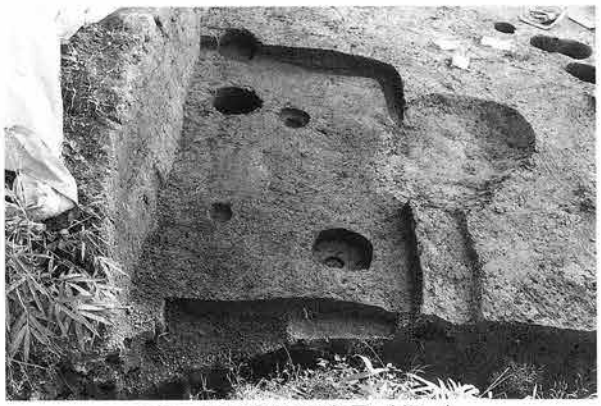
69　II区東SI24全景（西→）



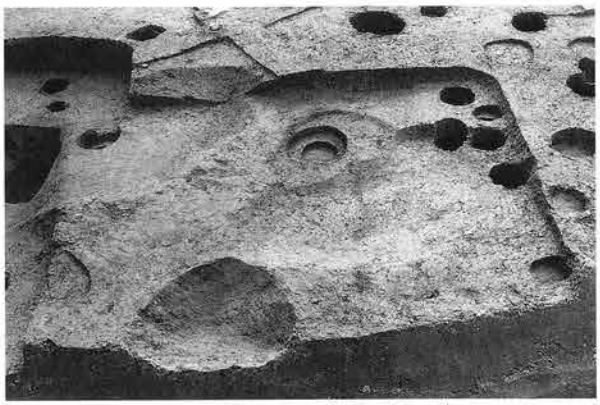
70　II区東SI24のP９完掘（北→）



71　II区東SI25完掘（南→）



72　II区東SI26全景（北→）



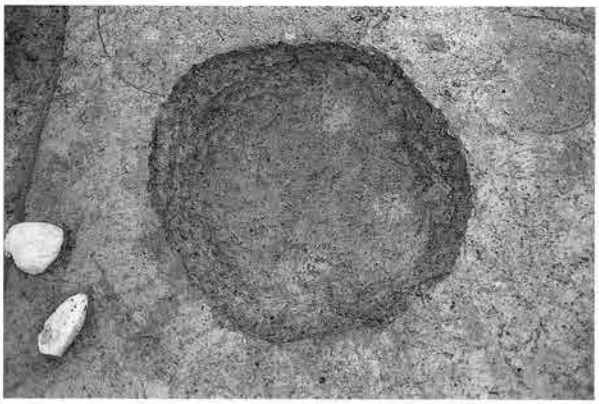
73　II区東SI27全景（北→）

74　II区東SI28完掘（北→）

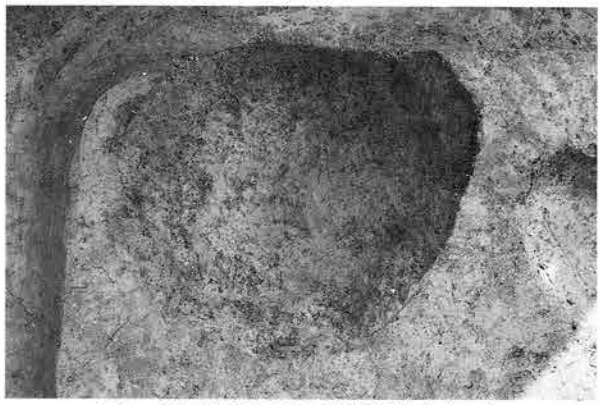
75　II区東SI30調査風景（東→）

76　II区東SI30完掘（南→）

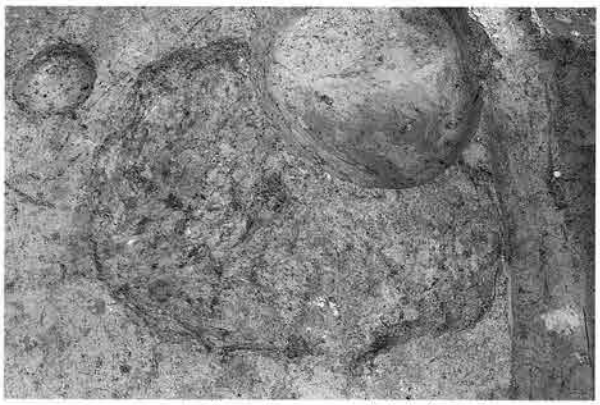
77　II区東SI30のSK 1 完掘（南→）



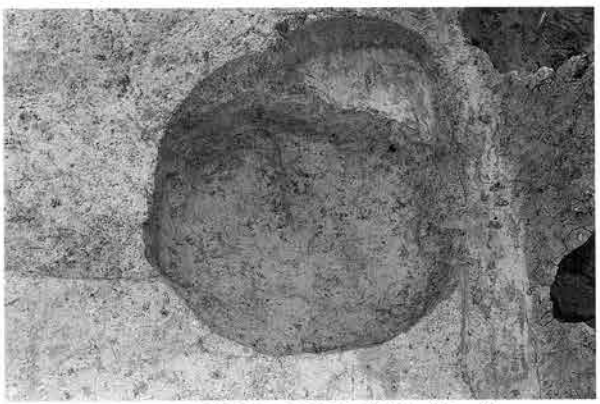
78　II区東SI30のSK 2 完掘（東→）



79　II区東SI30のSK 4 完掘（北→）

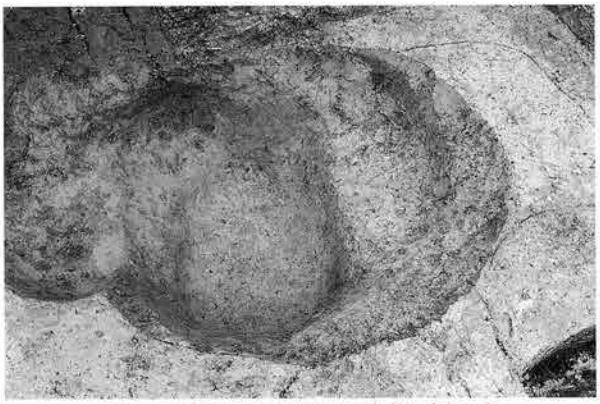


80　II区東SI30のSK 5 完掘（西→）

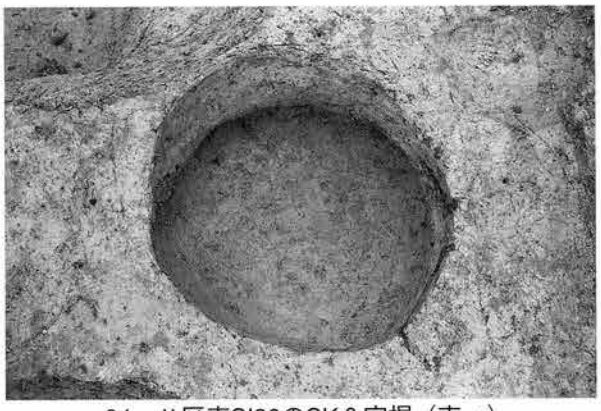


81　II区東SI30のSK 5 完掘（西→）

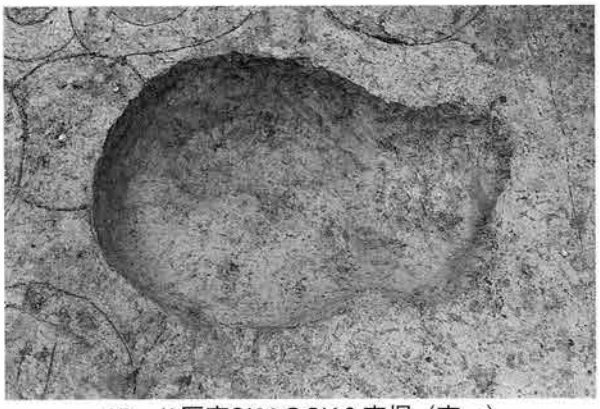
82　II区東SI30のSK 6 完掘（南→）



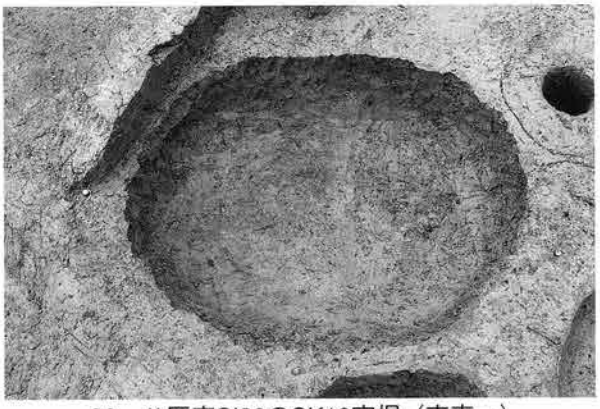
83　II区東SI30のSK 7 完掘（南→）



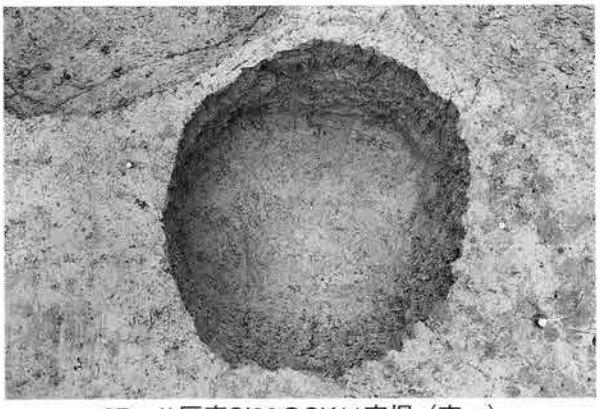
84　II区東SI30のSK 8 完掘（南→）



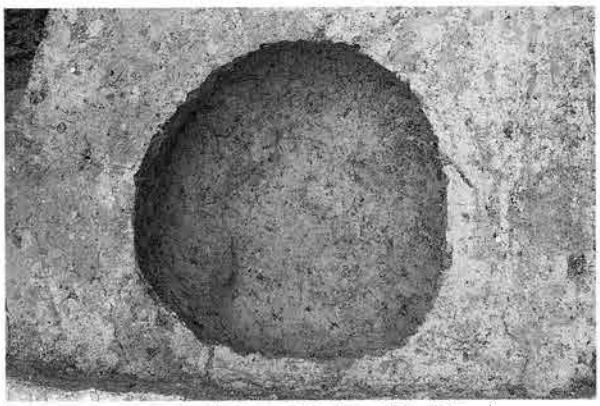
85　II区東SI30のSK 9 完掘（南→）



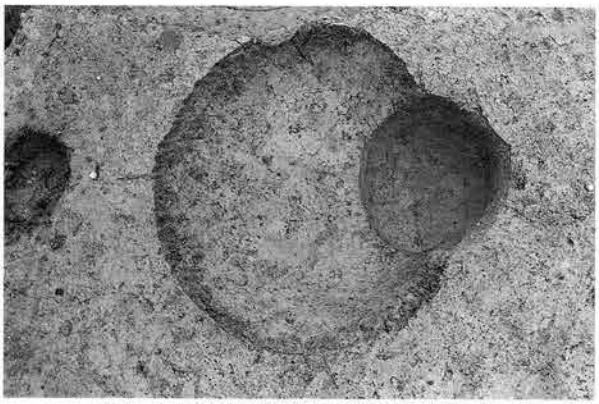
86　II区東SI30のSK10完掘（南東→）



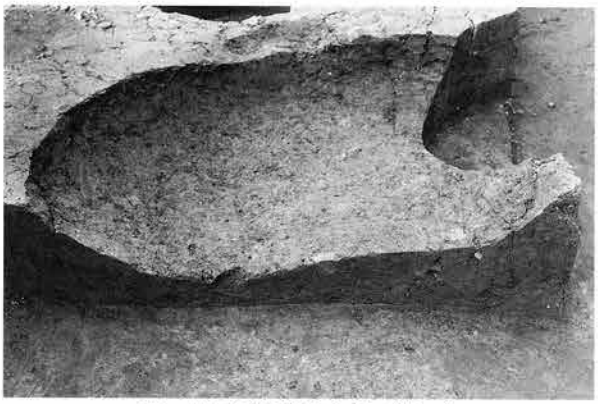
87　II区東SI30のSK11完掘（南→）



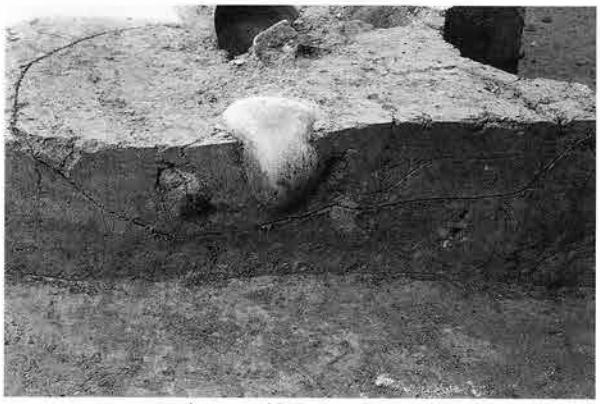
88　II区東SI30のSK12完掘（南→）



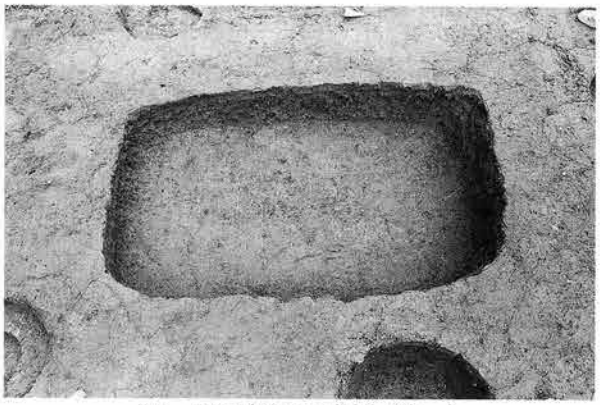
89　II区東SI30のSK13完掘（南→）



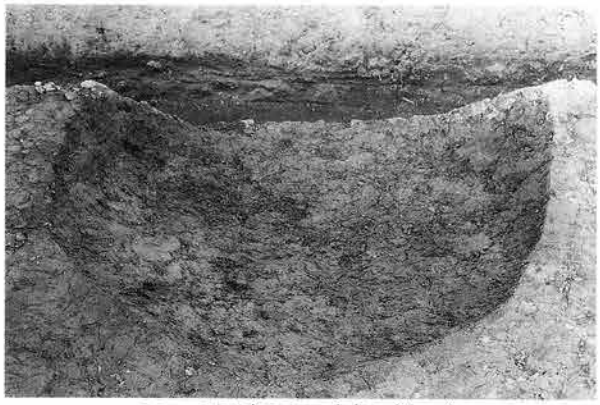
90　II区東SK18全景（南→）



91　II区東SK18検出セクション（南→）

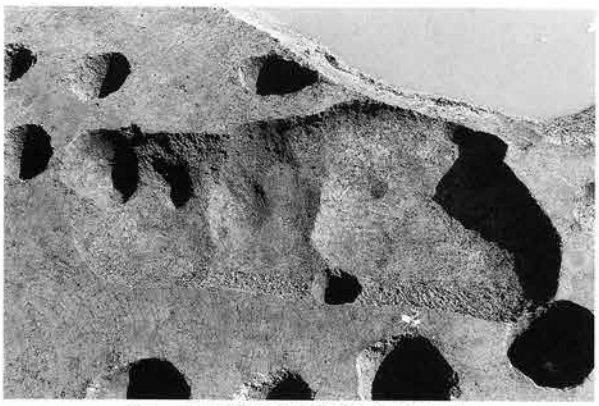


92　II区東SK19完掘（東→）



93　II区東SK40完掘（南→）

94　II区東SK40検出面遺物出土状況（西→）

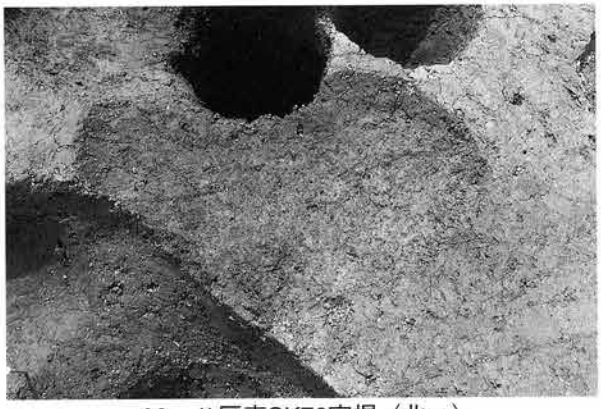


95　II区東SK40完掘（南西→）

96　II区東SK41完掘（西→）

97　II区東SK42－①完掘（西→）

98　II区東SK76遺物出土状況（南→）



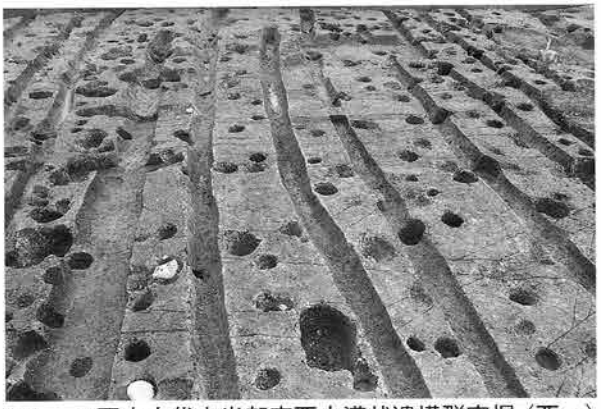
99　II区東SK76完掘（北→）

100　II区SX 7 円形周溝全景（東→）

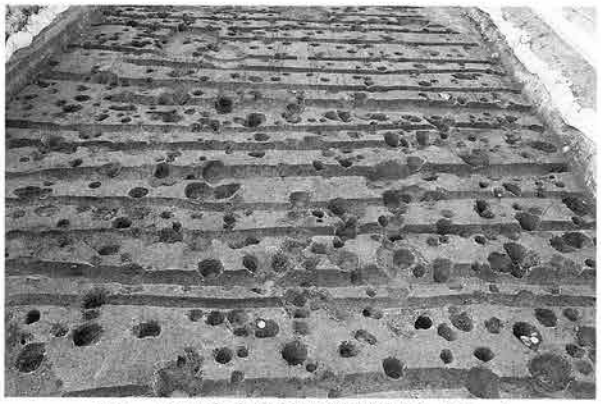
101　II区東SX 8 円形周溝完掘（東→）

102　II区南半部全景①（西→）

103　II区南半部全景②（西→）



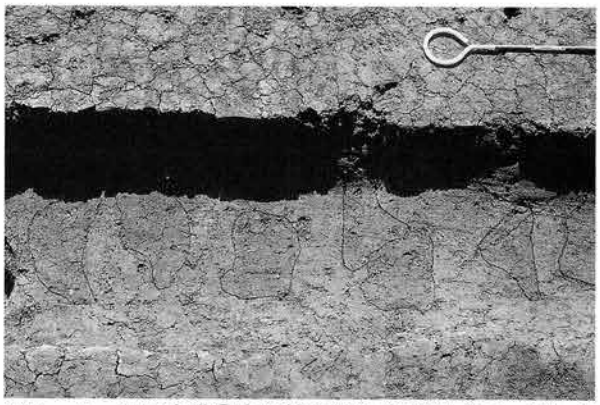
104　II区東古代南半部東西小溝状遺構群完掘（西→）



105　II区東小溝状遺構群完掘（北→）

106　III区東SD 3 、SD 4 間小溝状遺構群東西方向（東→）

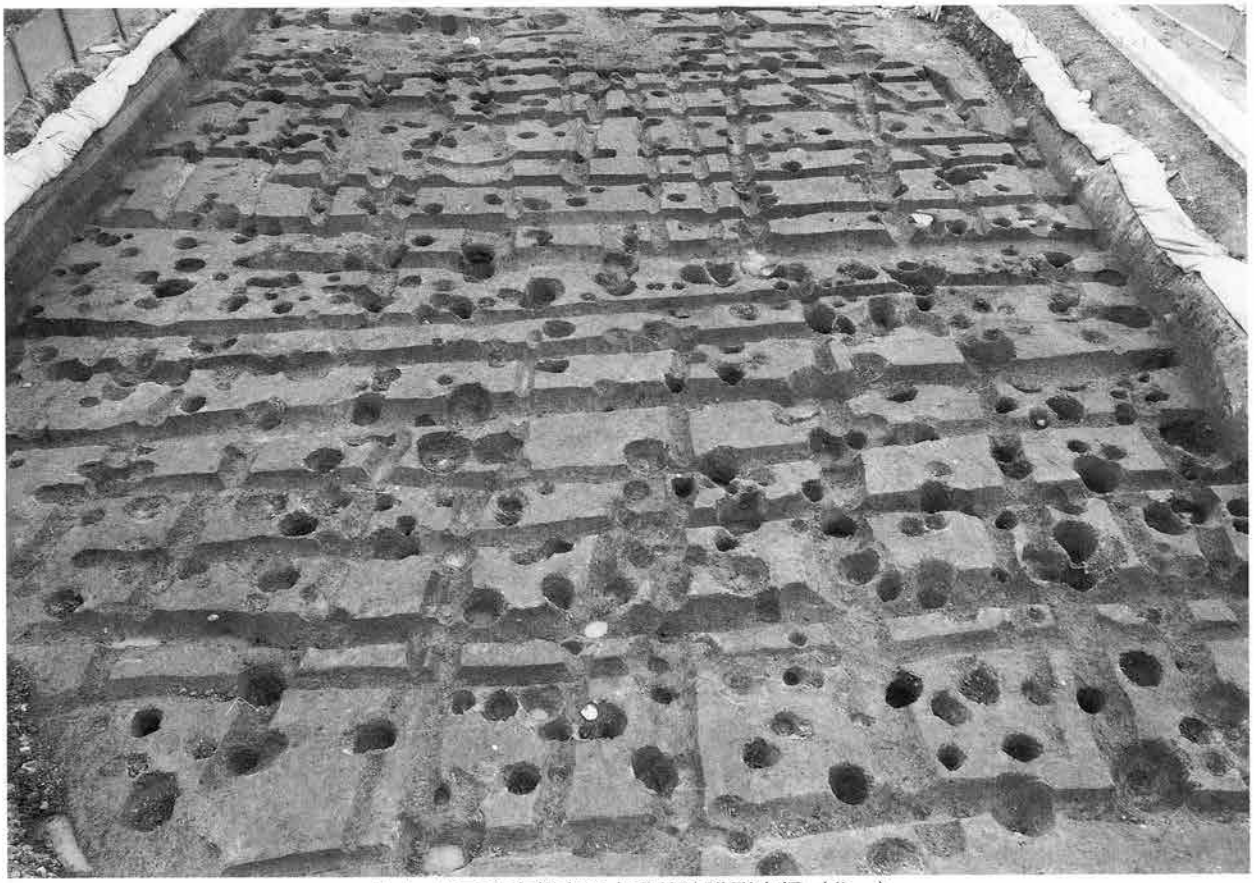
107　III区西小溝状遺構群全景（東西方向）（西→）



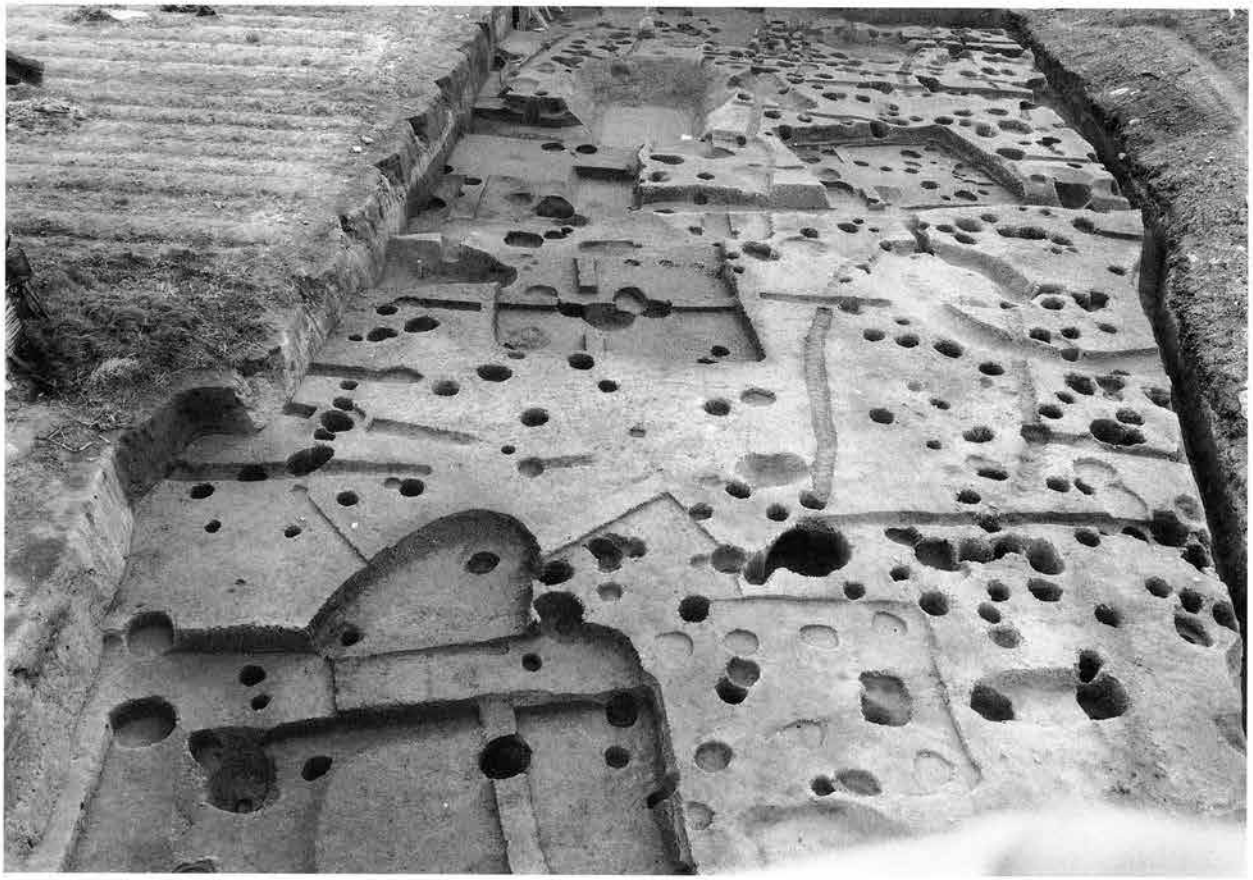
108　II～III区小溝②底面検出桝具痕確認プラン（北→）

109　II区東小溝状遺構群完掘（南半部）（西→）

110　III区東SD３、SD４間の小溝状遺構群完掘（東→）



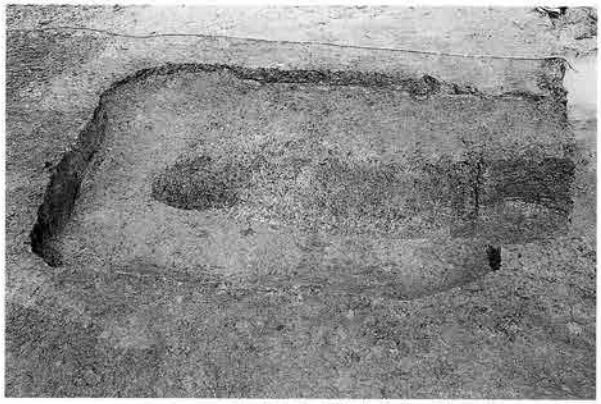
111　II区東古代東西小溝状遺構群完掘（北→）



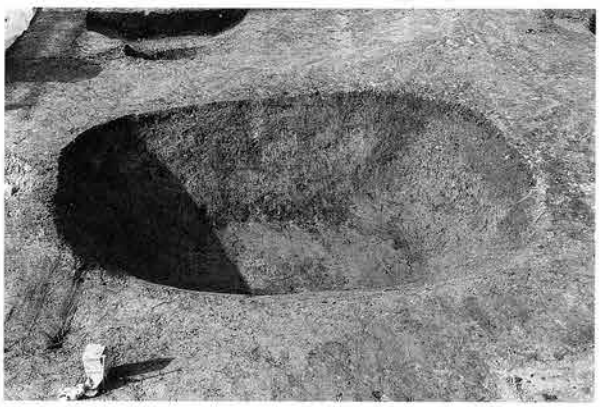
112　II区東VI層上面完掘（北→）

113　III区SK群全景（西→）

114　III区SK 1 全景（南→）

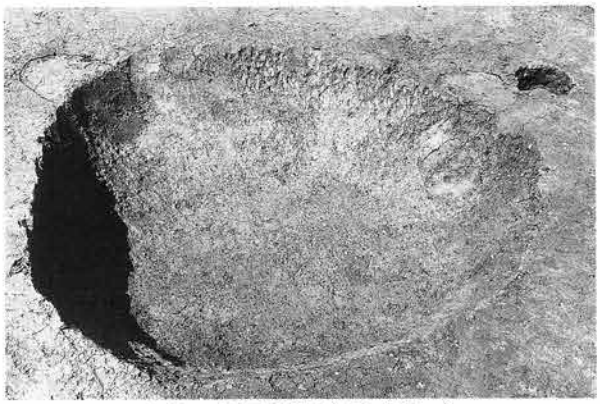


115　III区SK 2 全景（南→）

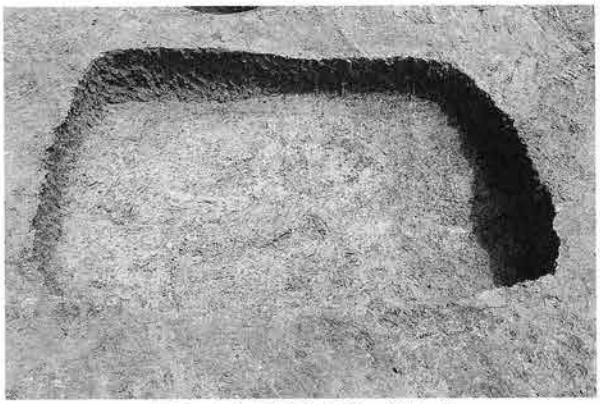


116　III区SK 3 全景（南→）

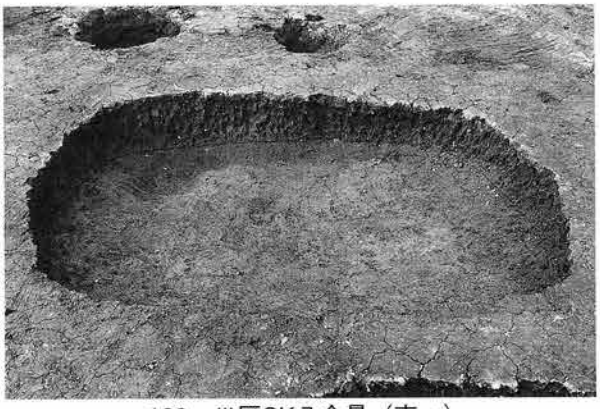
117　III区SK 4 全景（南→）



118　III区SK 5 全景（南→）



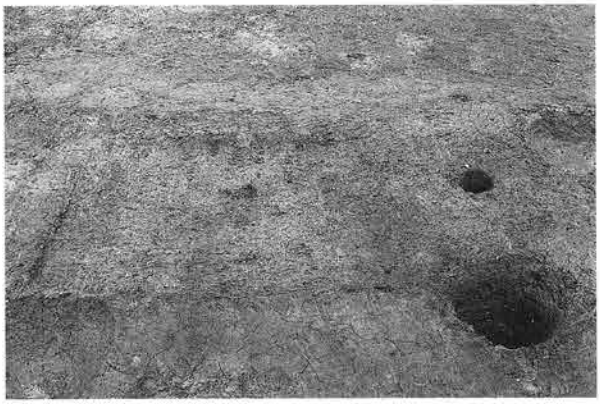
119　III区SK 6 全景（西→）



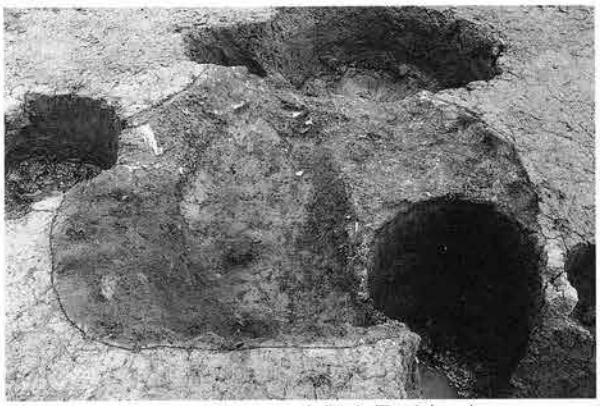
120　III区SK 7 全景（南→）

121　III区SK 8 全景（途中）（南→）

122　III区SK 9 全景（西→）



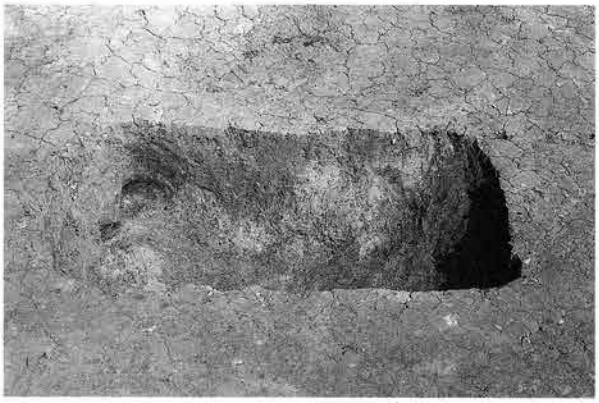
123　III区SK12全景（西→）



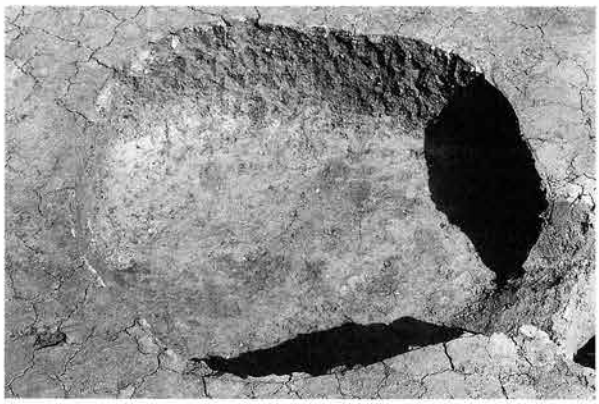
124　II区SK13完掘全景（東→）

125　II区SK13骨出土状況（東→）

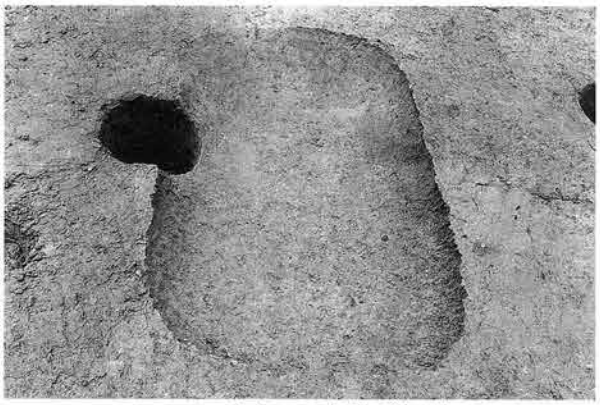
126　II区SK14全景（南→）



127　III区SK15全景（西→）

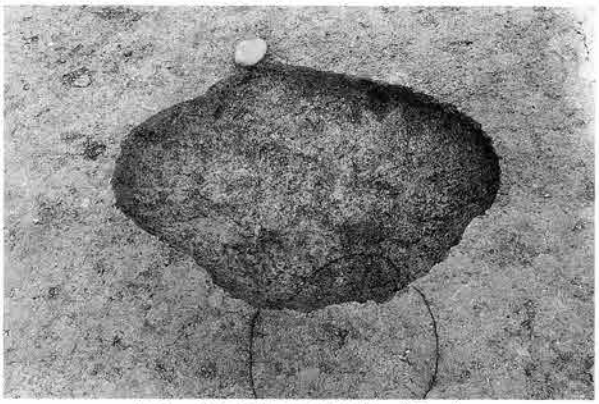


128　III区SK16全景（西→）

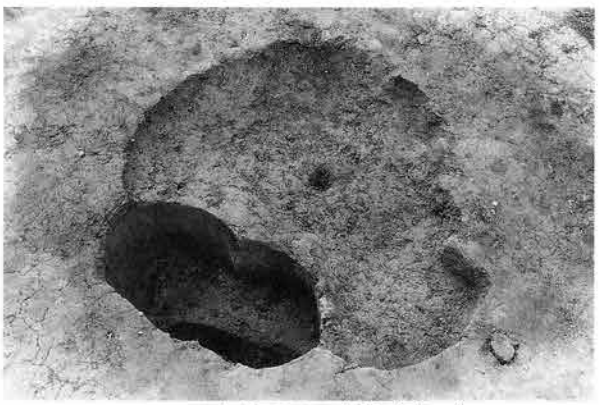


129　II区SK17全景（東→）

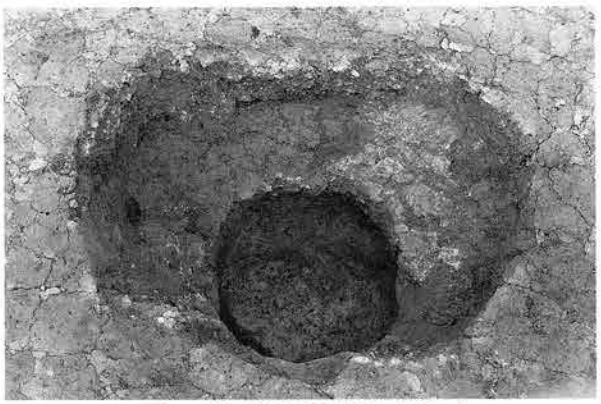
130　II区東SK20完掘（西→）



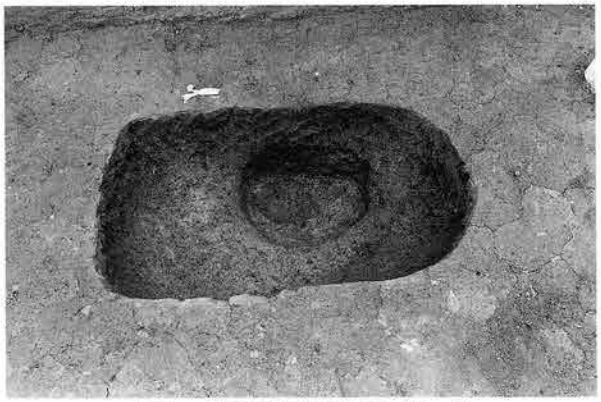
131　II区東SK21完掘（西→）



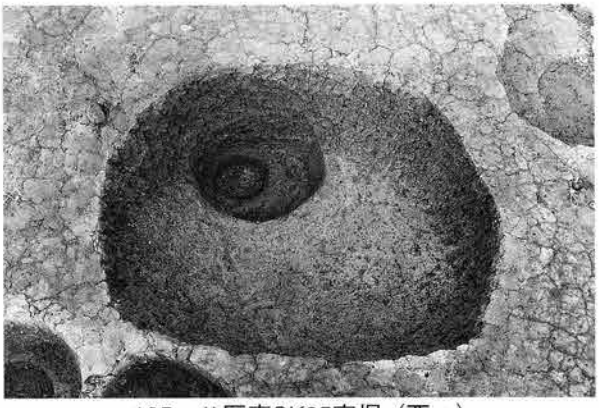
132　II区東SK22完掘（東→）



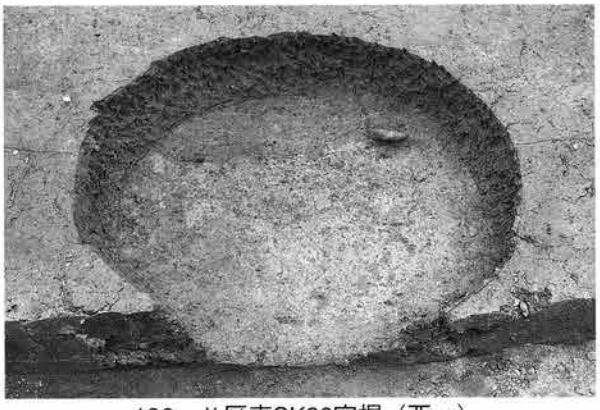
133　II区東SK23完掘（西→）



134　II区東SK24完掘（西→）



135　II区東SK25完掘（西→）

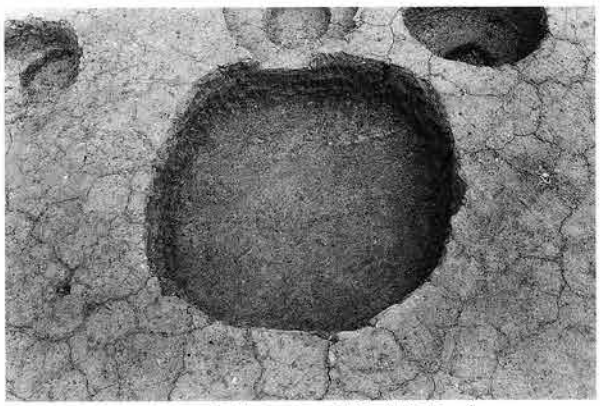


136　II区東SK26完掘（西→）

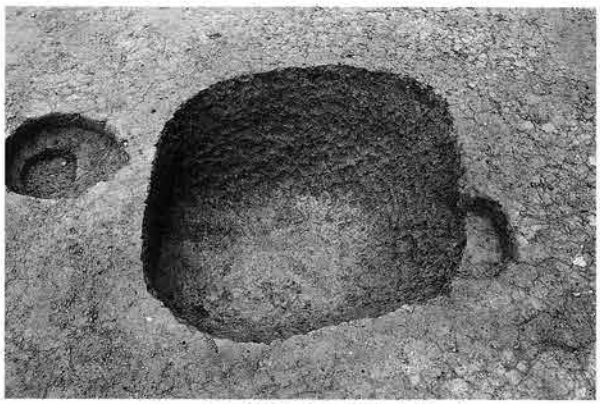
137　II区東SK27完掘（北東→）

138　II区東SK27 ℓ7 出土漆器取り上げ後の状態

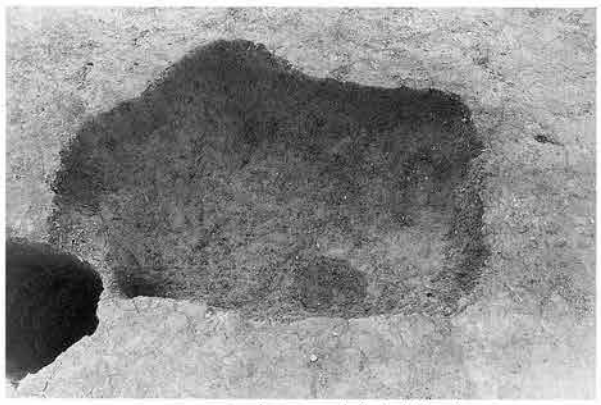
139　II区東SK28完掘（西→）



140　II区東SK29完掘（北東→）

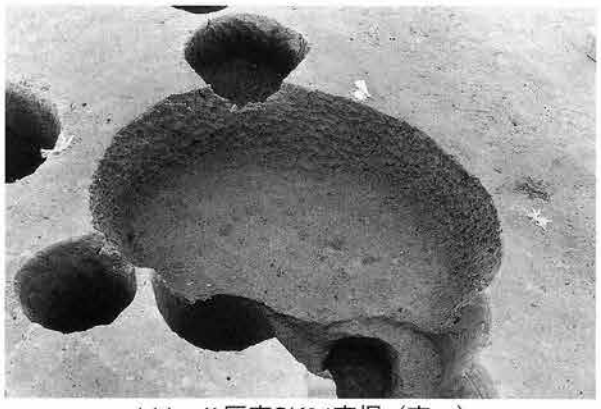


141　II区東SK30完掘（南→）

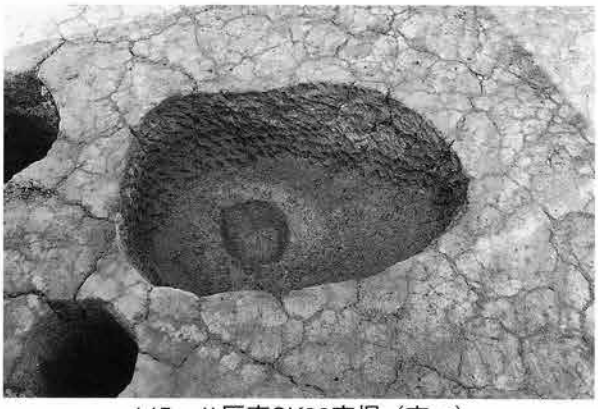


142　II区東SK31完掘（北→）

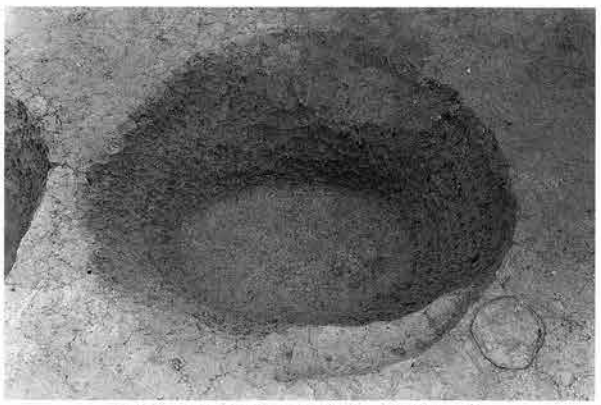
143　II区東SK32完掘（北→）



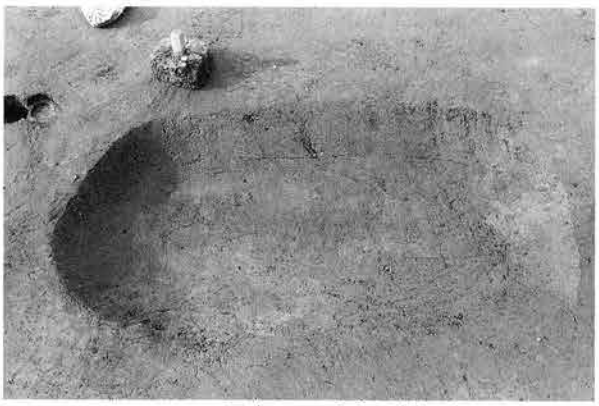
144　II区東SK34完掘（南→）



145　II区東SK33完掘（南→）



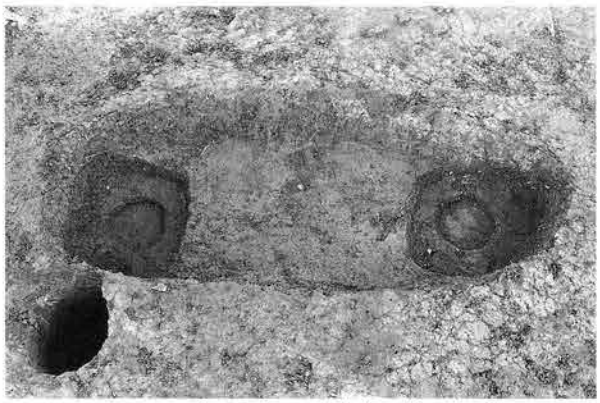
146　II区東SK35完掘（南西→）



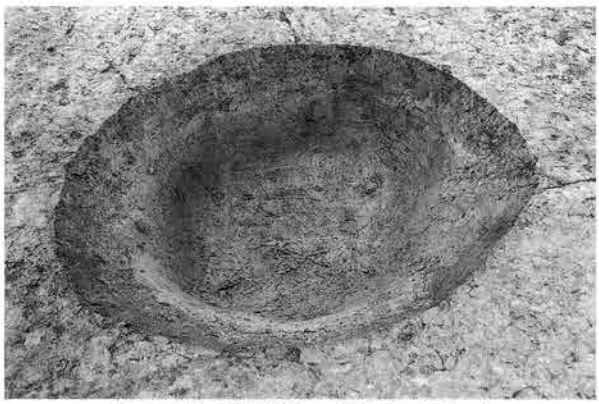
147　II区東SK36完掘（南→）

148　II区東SK37完掘（西→）

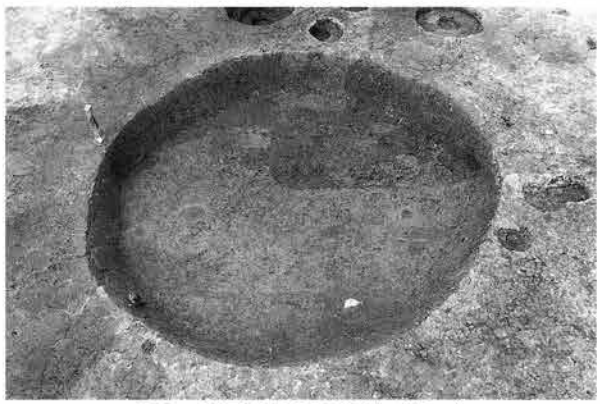
149　II区東SK38完掘（南→）



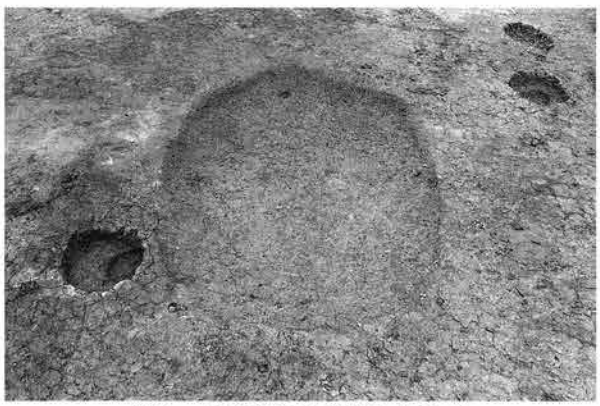
150　II区東SK39完掘（南→）



151　III区東SK42－②完掘（南→）

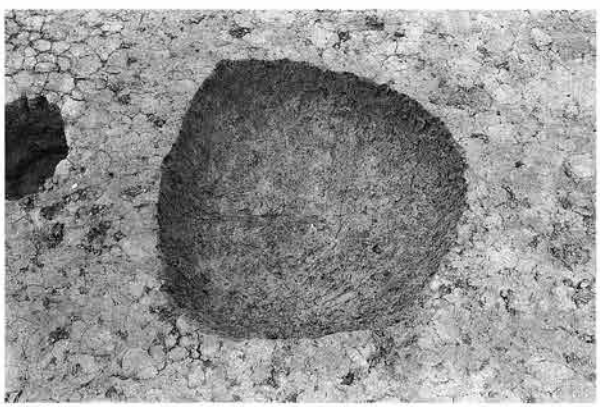


152　III区東SK43完掘（南→）

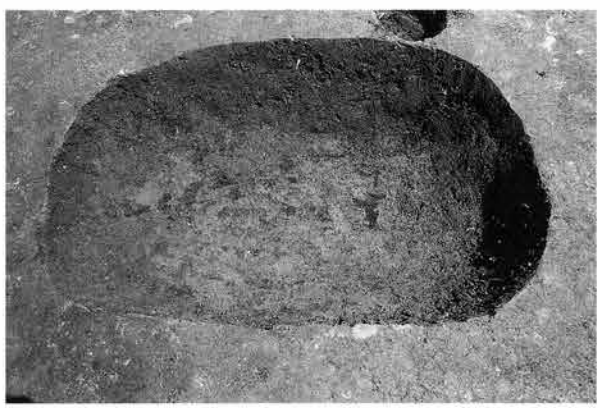


153　III区東SK44完掘（南→）

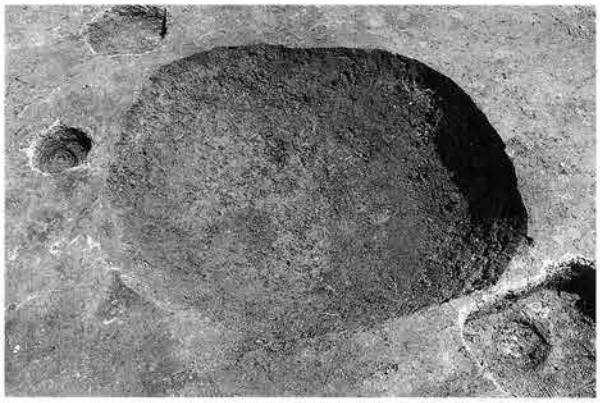
154　III区東SK45完掘（南→）



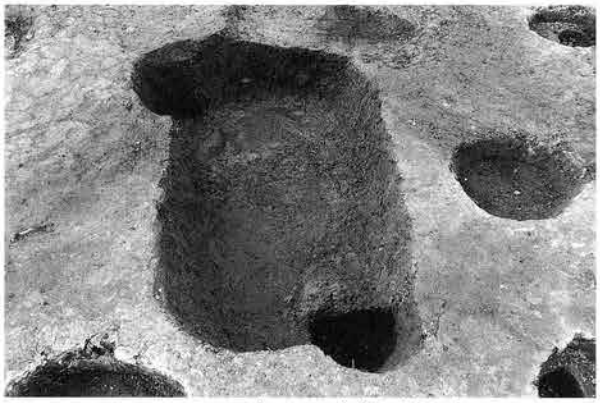
155　III区東SK46完掘（南→）



156　III区東SK48完掘（南→）



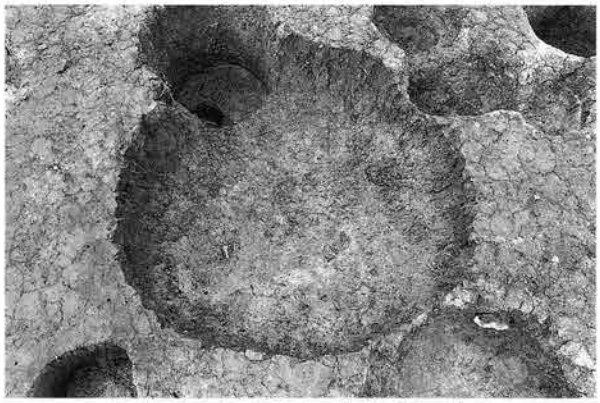
157　II区東SK49完掘（南→）



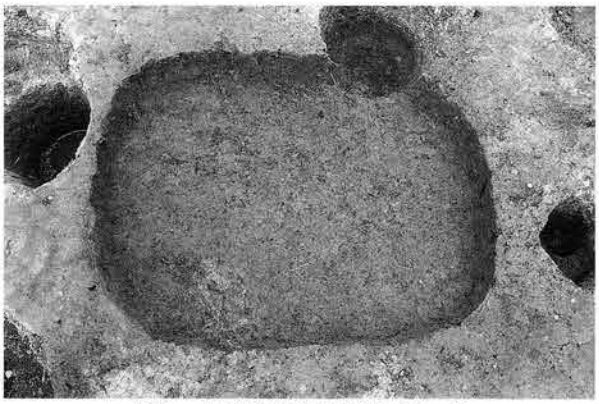
158　II区東SK51完掘（南→）

159　II区東SK52焼塩壺（北→）

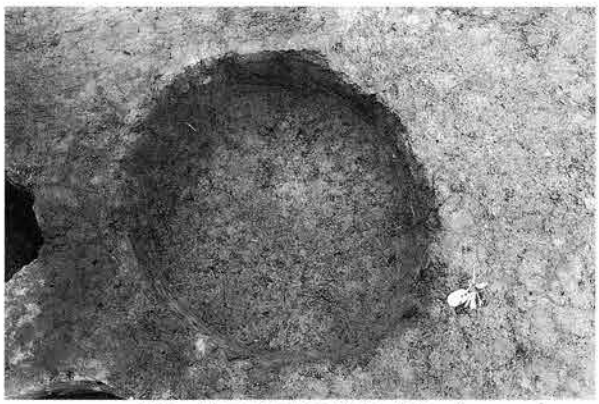
160　II区東SK52完掘（南→）



161　II区東SK53完掘（南→）



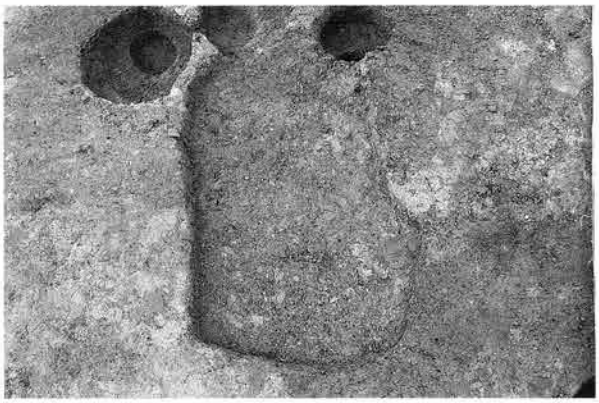
162　II区東SK54完掘（南→）



163　II区東SK55完掘（南→）

164　II区東J-21ピット確認（南→）

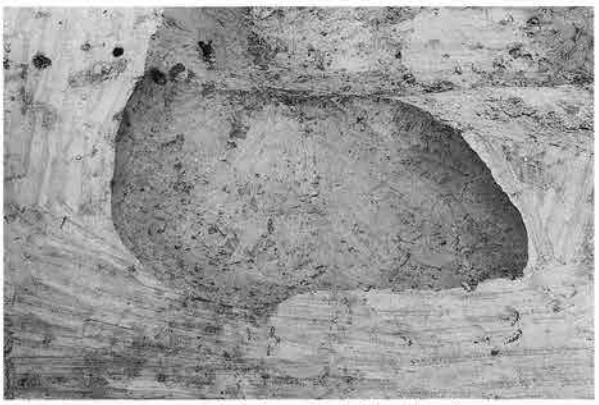
165　II区東J-21ピット完掘（南→）



166　II区東J-21ピット確認（南→）

167　II区東J-21ピット完掘（南→）

168　II区東SK58完掘（南→）

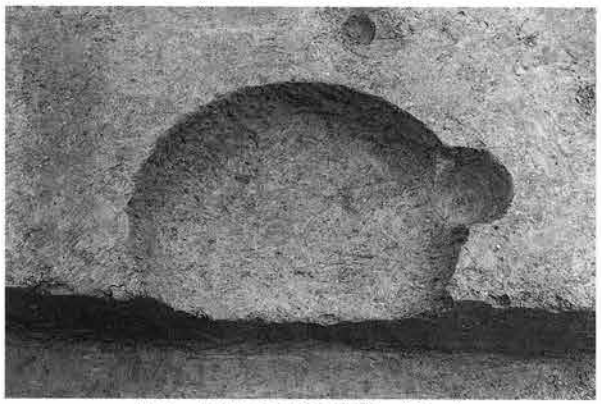


169　III区東SK59完掘（南→）

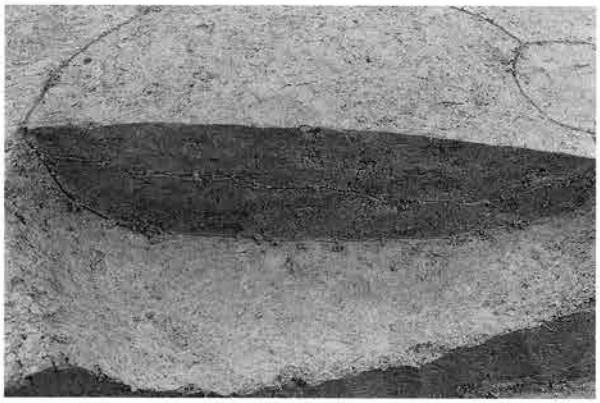
170　III区東SK60完掘（南→）

171　III区東SK61完掘（南→）

172　III区東SK61小皿［I372］（南→）



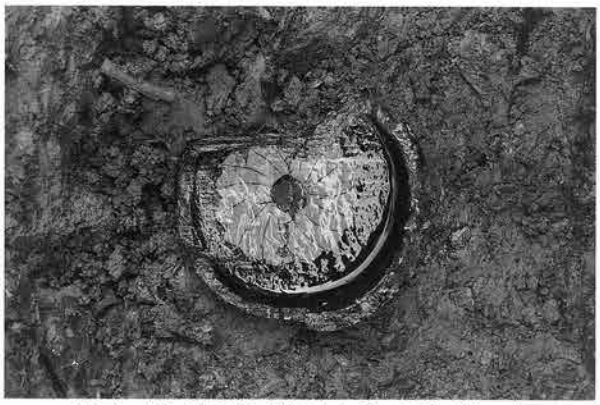
173　III区東SK62完掘（南→）



174　III区東SK62セクション（南→）

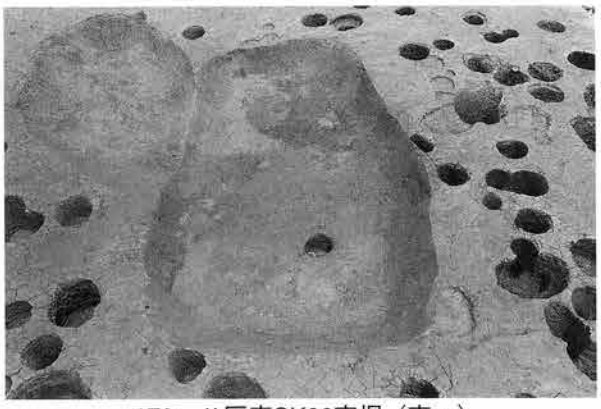
175　III区東SK63完掘（東→）

176　III区東SK63セクション（東→）



177　III区東SK64漆の皿［La62］（北→）

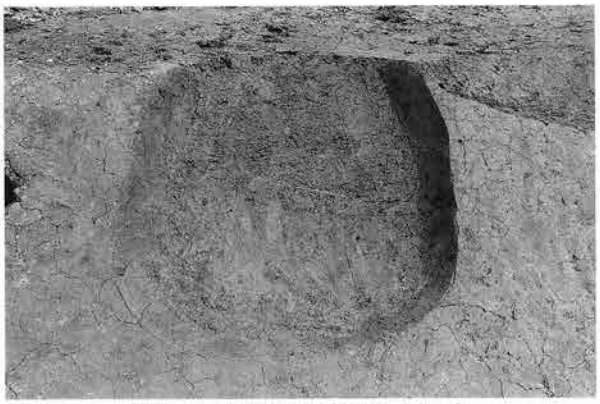
178　II区東SK65完掘（北→）



179　II区東SK66完掘（南→）

180　II区東SK67完掘（北西→）

181　II区東SK68完掘（北→）

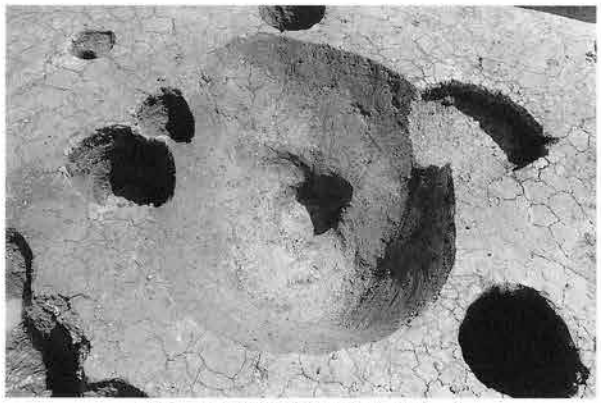


182　II区東SK69完掘（北→）

183　II区東SK70完掘（南→）

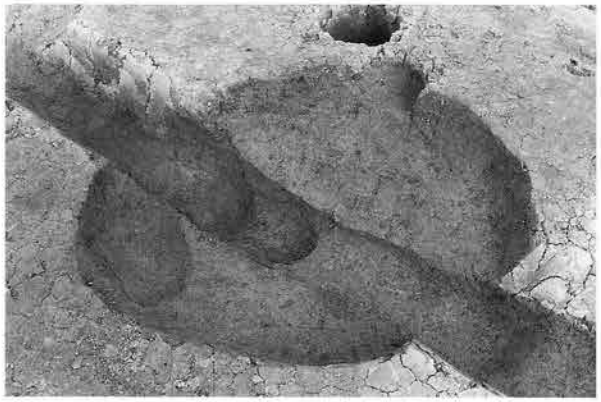
184　II区東SK71完掘（北→）

185　II区東SK72完掘（北→）



186　II区東SK73完掘（北→）

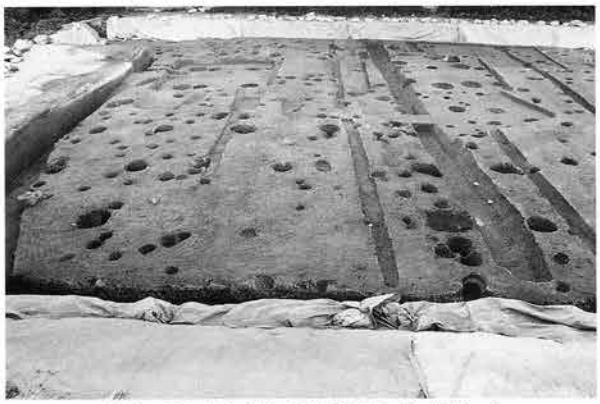
187　II区東SK74完掘（北→）



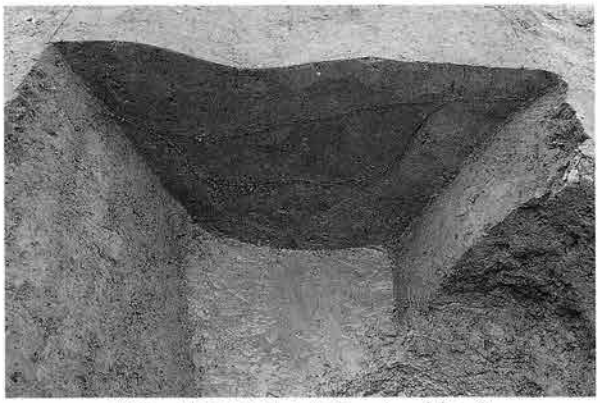
188　III区東SK75完掘（南→）

189　III区東SE 1 完掘（南→）

190　III区東SE 1 、SE 2 、SD22（北→）

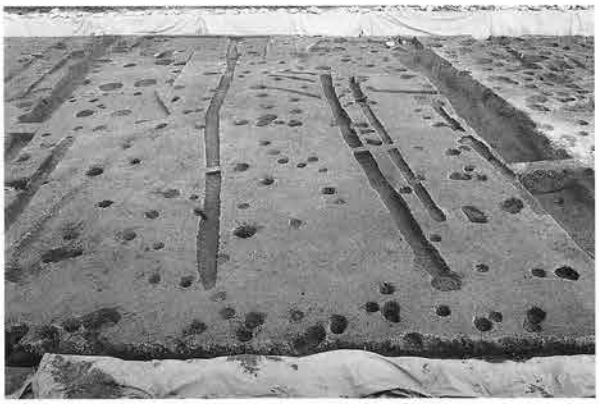


191　SD７とⅢ区北端部全景（西→）



192　Ⅱ区SD７セクション（東→）

193　Ⅱ区東SD７完掘（西→）



194　Ⅱ区SD12全景（西→）

195　Ⅱ区SD12セクション（東→）

196　Ⅱ区東SD12、SX６完掘（西→）

197　Ⅱ区東SD14完掘（南→）

198　II区東SD14北セクション（南→）

199　II区東SD21完掘（西→）

200　III区東SD22、SE 2 完掘（北→）

201　III区東SD23完掘（SK60含む）（西→）

202　III区東SD26完掘（北→）

203　II区東SK67、68、69、SD27完掘（北→）

204　III区東SD33完掘（西→）

205　III区東SD 3 完掘（東→）

206　III区東SD 3 完掘（北→）

207　III区東SD 3 完掘（西→）

208　III区東SD 3 東壁セクション（西→）

209　III区東SD 3 セクション（中央ベルト）（西→）

210　III区東SD 3 底面（西→）

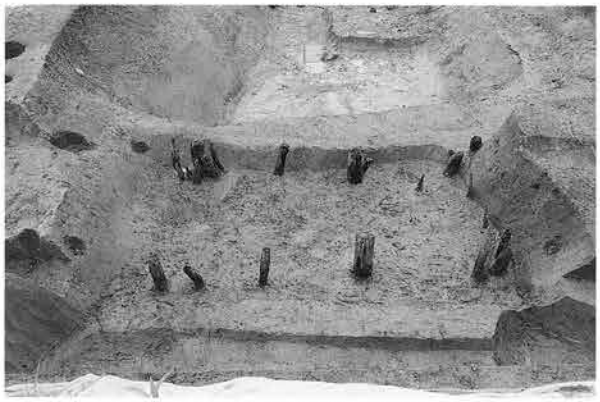
211　III区東SD 3 底面（北→）

212　III区東SD３橋（入口）（南→）

213　III区東SD３橋部分（北→）

214　III区東SD３橋部分（東→）

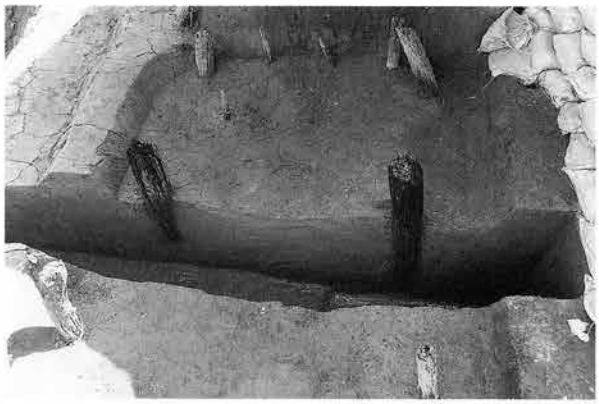
215　III区東SD３橋（西側拡張部分含む）（北東→）



216　Ⅲ区東SD３橋（西側拡張部分含む）（西→）

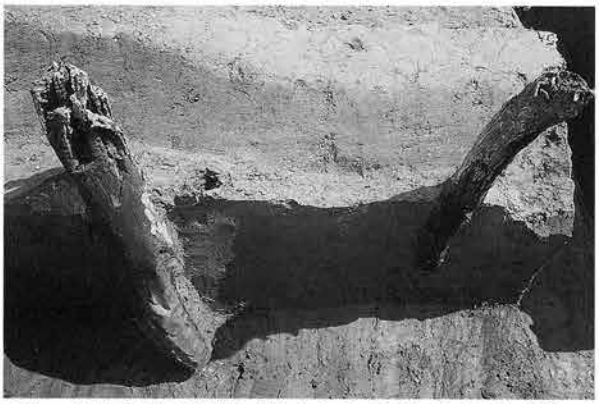
217　Ⅲ区東SD３橋（西側拡張部分含む）（北→）

218　Ⅲ区東SD３橋
（西側拡張部分含む）（南→）



219　Ⅲ区東SD３橋杭セクションNo１（東西）（北→）

220　Ⅲ区東SD３橋杭東列（南から１本目と２本目）（西→）



221　Ⅲ区東SD３橋杭（北から１本目と２本目）（西→）

222　Ⅲ区東SD３橋杭セクション
（No２南北の西列の南から１と２本目）（東→）

223　III区東SD３橋杭セクション
（No２南北西列の北から１～３本目）（東→）

224　III区SD３杭No３セクション
（東→）

225　III区SD３杭No10セクション
（東→）

226　III区東SD３作業風景（東→）

227　III区SD３天目茶碗出土状況（東→）

228　III区SD３天目茶碗出土状況（西→）

229　III区東SD３ℓ２椀（西→）

230　III区東SD 3 ℓ1 椀（北→）

231　III区東SD 3 ℓ2 椀［La16］（南→）

232　III区東SD 3 ℓ2 椀（北→）

233　III区東SD 3 ℓ2 椀（南→）

234　III区東SD 3 ℓ2 下駄［Lb15］（西→）

235　III区東SD 3 ℓ2 下駄（南→）

236　III区東SD 3 ℓ3 下駄の歯［Lb13］（南→）

237　III区東SD 3 ℓ2 木製のヘラ（北→）

238　III区東SD２配石中煙管［Lc38］（東→）

239　III区SD３（南側）金属製品出土状況（東→）

240　III区東SD３ ℓ２硯（南→）

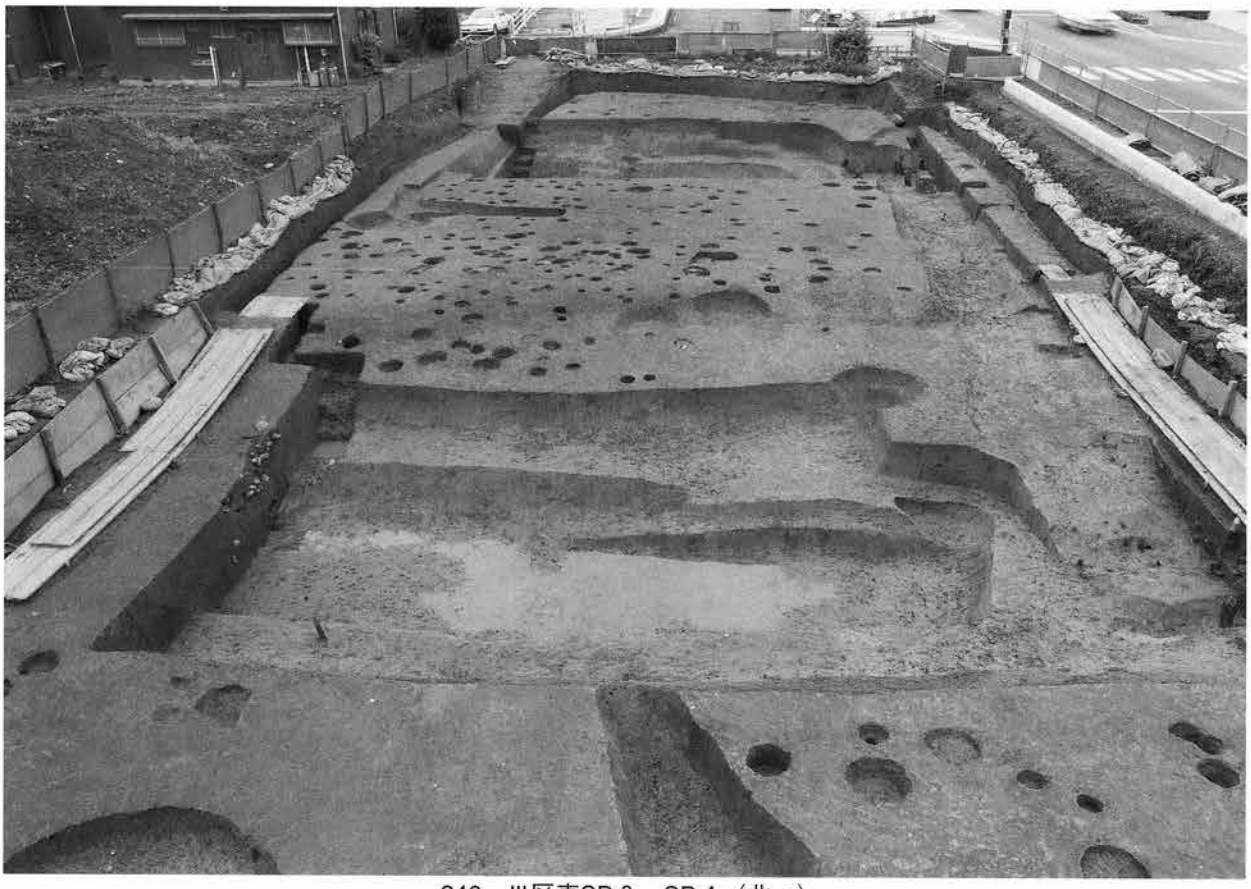
241　III区東SD３ ℓ１石臼［Kd47］（東→）

242　III区東SD３ ℓ１石塔の頭［Kd22］（北→）

243　III区東SD３ ℓ３動物の頭骨（牛）（西→）

244　III区東SD３ ℓ３動物の頭骨（タヌキ）（西→）

245　III区東SD25完掘（南→）



246　III区東SD 3 、SD 4 （北→）

247　III区東SD 4 完掘（西→）

248　III区東SD 4 完掘（東→）

249　III区東SD 2 、SD 4 中央ベルト東面（東→）

250　III区東SD 2 、SD 4 中央セクション（西→）

251　III区東SD 4 中のSD 2 施設（フネ）［Lc49］（東→）

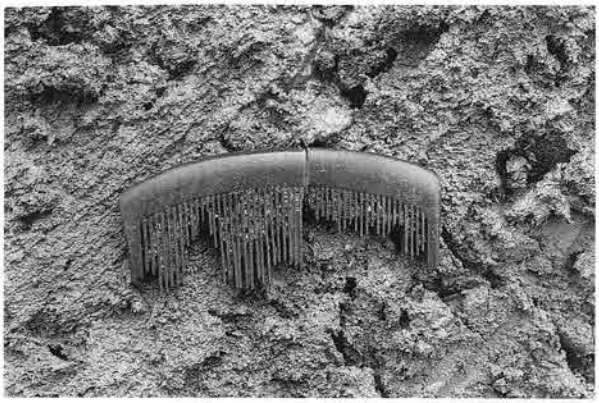
252　III区東SD 4 ℓ2 軒丸瓦（金箔付き）［F10］（北→）

253　III区東SD４ ℓ1 軒丸瓦［F24］（北→）

254　III区東SD４ ℓ1 椀［La40］（北→）

255　III区東SD４ ℓ1 椀（南→）

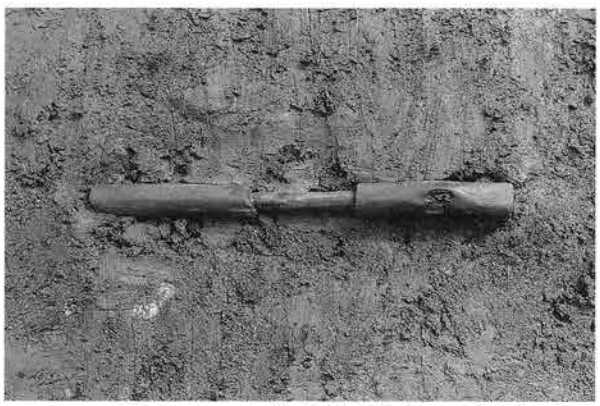
256　III区東SD４ ℓ2 セイロ［Lc44］（南西→）



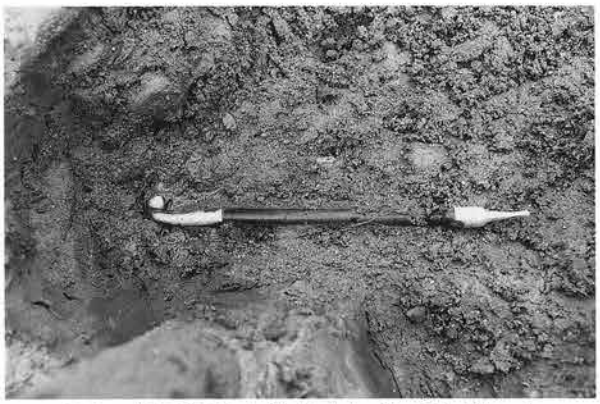
257　III区東SD４ ℓ2 櫛［Lc１］（北→）

258　III区東SD４ ℓ1 下駄［Lb20］（北→）

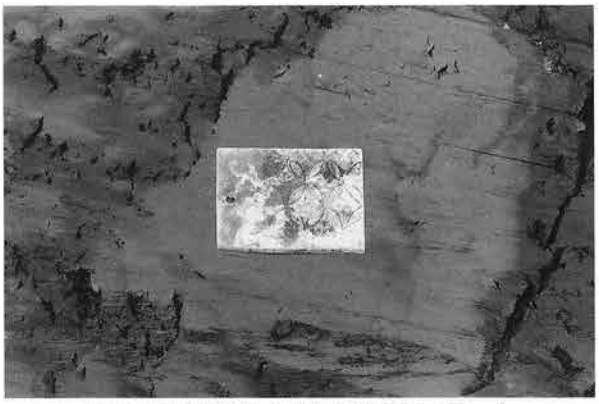
259　III区東SD４ ℓ1 下駄（南西→）



260　III区東SD４ ℓ2 杵状木製品［Lc32］（北→）



261　III区東SD 4 ℓ1 キセル［Lc39］（北→）



262　III区東SD 4 ℓ2 金属製品（東→）

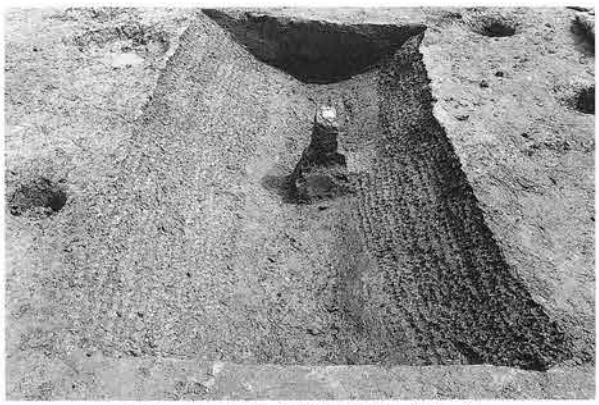
263　III区東SD 4 ℓ2 キセル雁首［Nb10］（北→）

264　III区東SD 4 ℓ2 加工痕ある鹿角（北→）

265　III区東SD 4 ℓ2 加工痕ある鹿角（西→）

266　III区東SD 4 ℓ2 鹿角（北→）

267　III区東SD 4 ℓ2 動物のアゴの骨（西→）



268　III区SD 5 完掘状況（西→）

269　III区東SD２完掘（北→）

270　III区東SD２東西セクションNo１（南→）

271　III区東SD２南北セクションNo２（西→）

272　III区東SD２北西コーナー（北→）

273　III区東SD２北西コーナー（北東→）

274　III区東SD２北西コーナー（東→）

275　III区東杭列（西→）

276　III区東SD２杭列（西→）

277　III区東SD２杭列（西→）

278　III区東SD２杭列横断面（東→）

279　III区東SD２ ℓ1 椀［La29］（南→）

280　III区東SD２底面配石中　椀（東→）

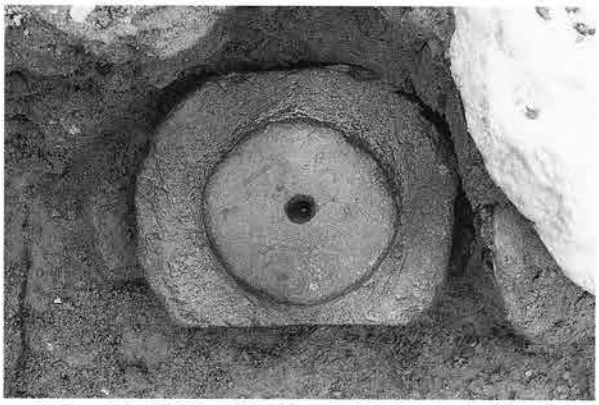
281　III区東SD２ ℓ2 曲物（西→）

282　III区東SD 2 底面配石中　煙管（東→）

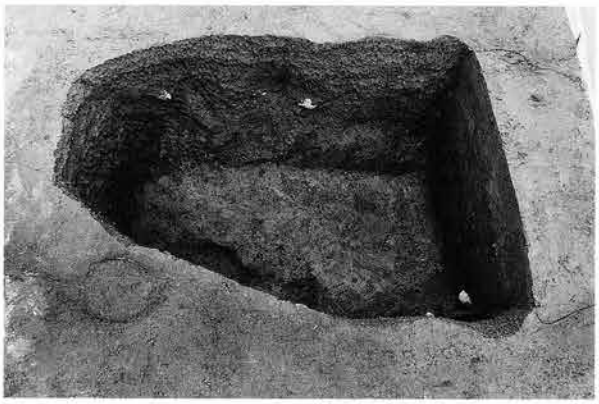
283　III区東SD 2 底面（刀）（西→）

284　III区東SD 2 底面　硯［Kd15］（東→）

285　SD 2 底面配石中　硯［Kd12］（東→）



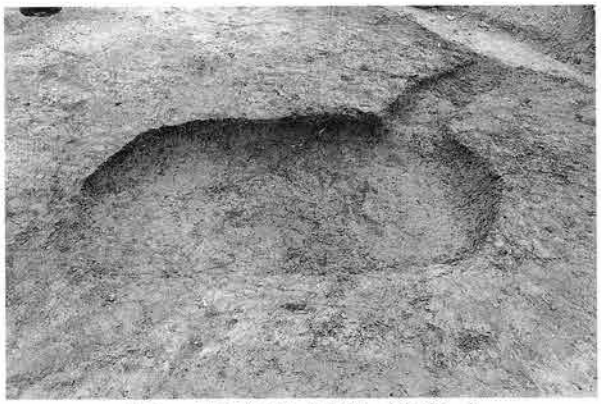
286　III区東SD 2 配石中　石臼［Kd48］（東→）



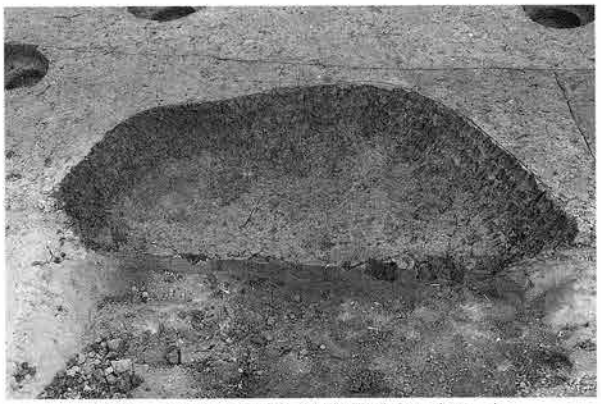
287　III区SX 1 全景（北→）

288　III区SX 1 遺物出土状況　漆器No 2（西→）

289　III区SX 2 全景（東→）



290　II区東SX 4 完掘（南東→）



291　II区東SX 5 東半部完掘（西→）

293　II区東SX 6 （西→）

292　II区東SX 5 西半部完掘（西→）

294　II区東SX 6 完掘（南→）

295　II区東SX 6 完掘（西→）

296　II区東SX 6 完掘（西→）

297　II区東SX 6 完掘（西→）

298　II区東SX 6 （西→）

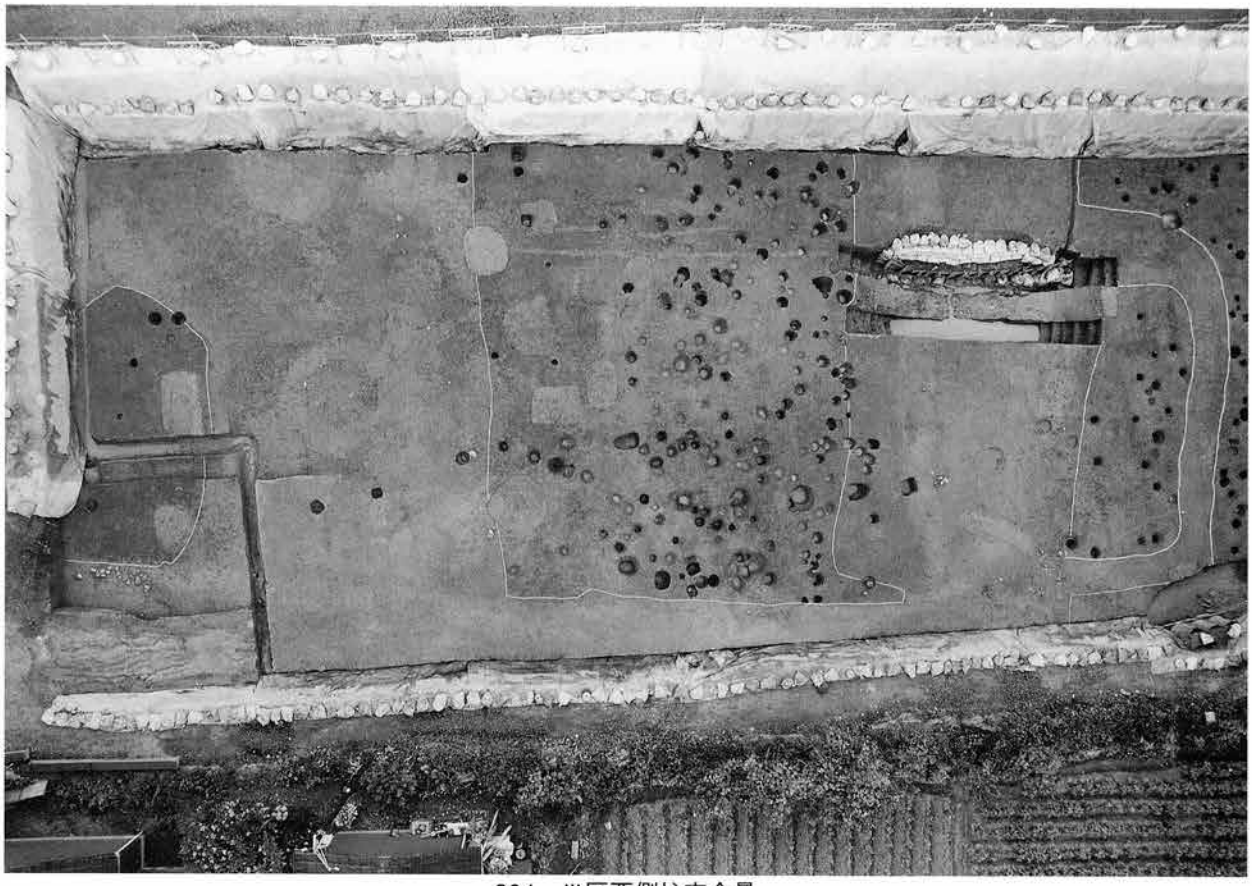
299　II区東SX 6 東壁セクション（西→）

300　II区東SX 6 セクション（南→）

301　II区東SX 6 セクション下半部（南→）

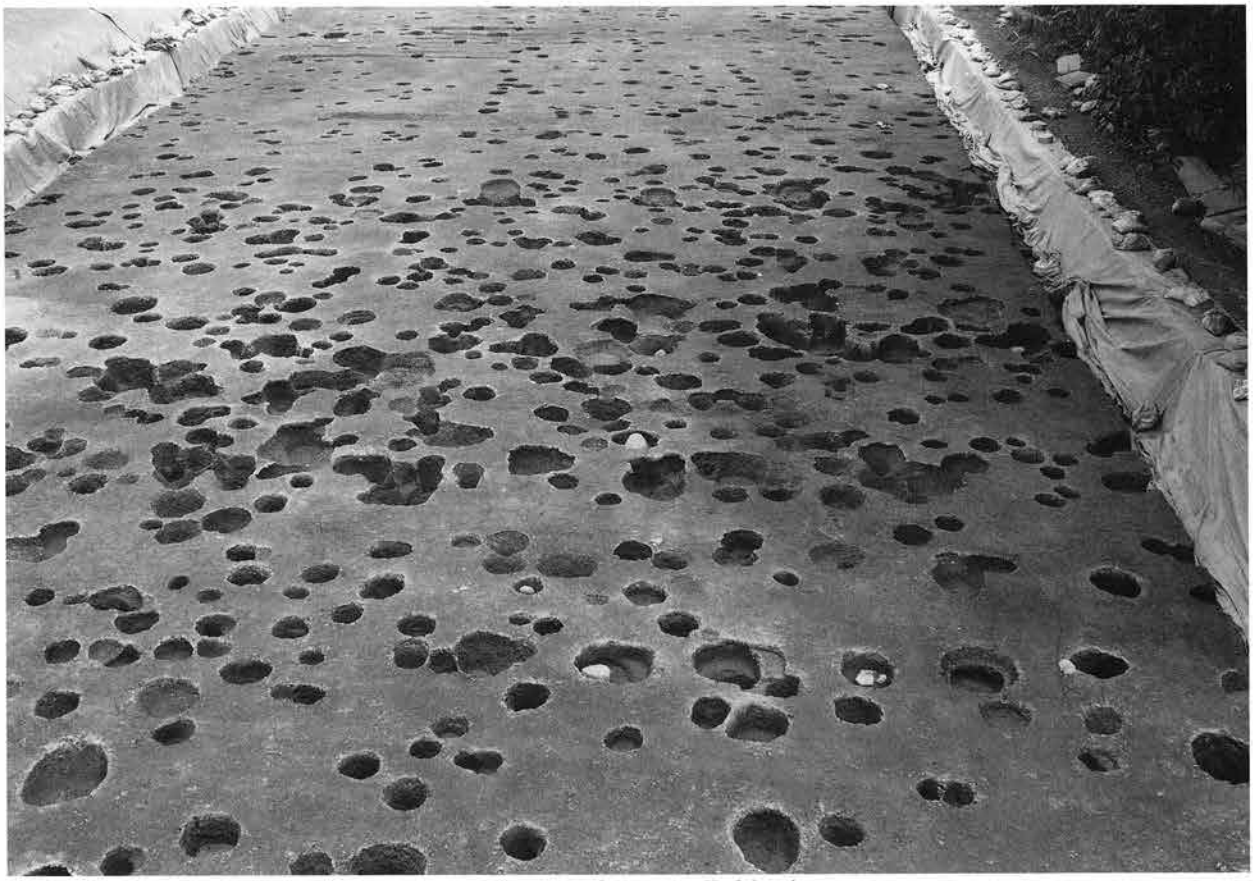
302　II区西側柱穴全景

303　II・III区東全景



304　III区西側柱穴全景

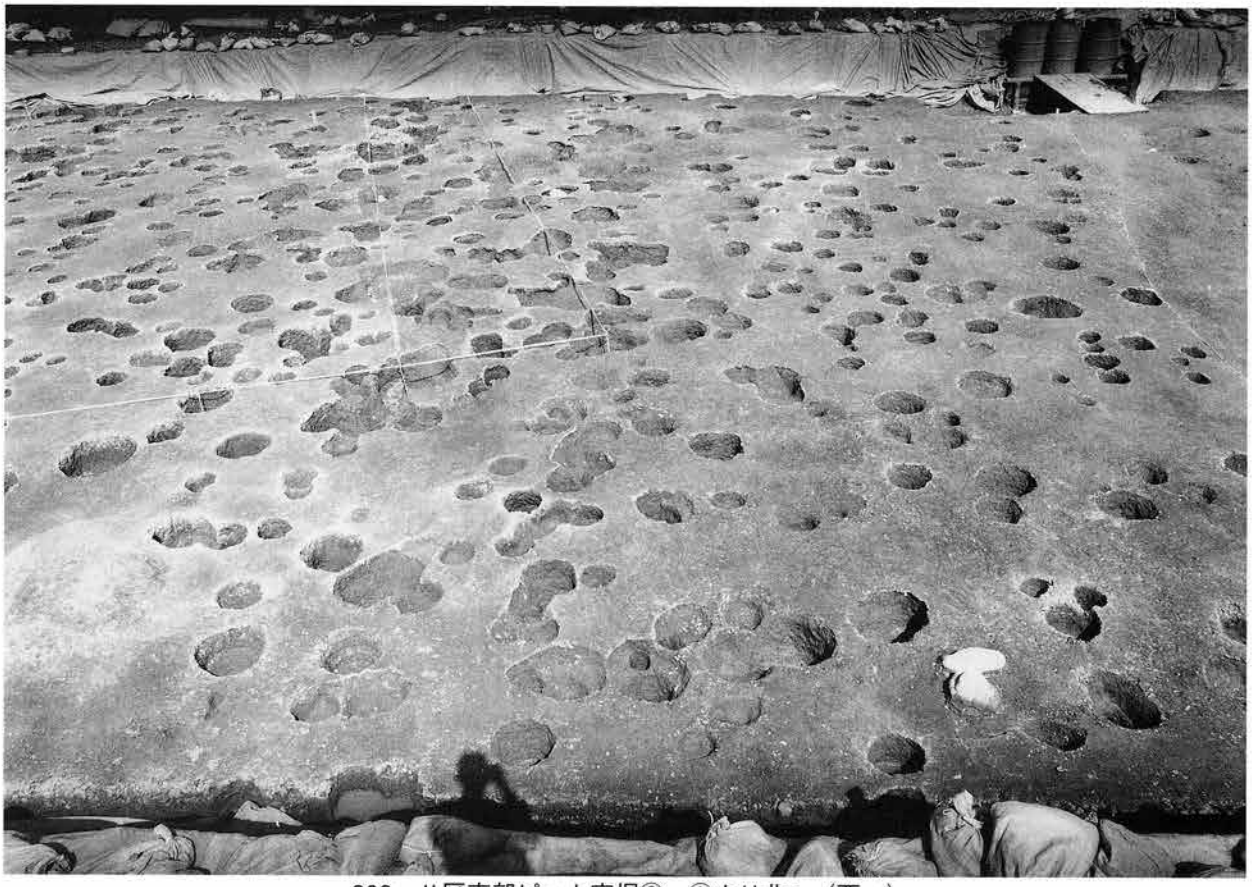
305　II区ピット完掘（南→）



306　II区南部ピット群（南→）

307　III区ピット完掘（北→）

308　II区南部ピット完掘①（西→）



309　II区南部ピット完掘②　①より北へ（西→）

310　II区南部ピット完掘③　②より北へ（西→）

311　II区南部ピット完掘④　③より北へ（西→）

312　II区南部ピット完掘⑤　④より北へ（西→）

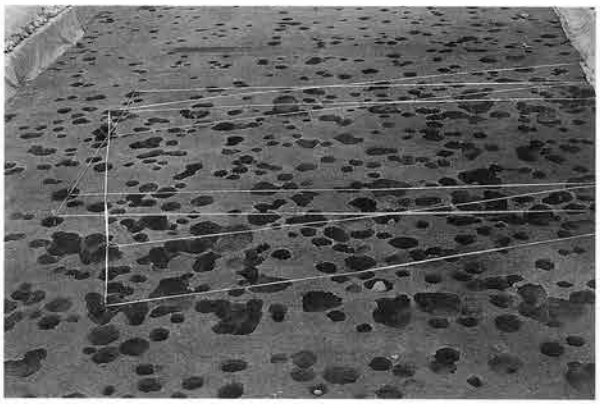
313　II区南部ピット完掘⑥　⑤より北へ（西→）

314　II区南部ピット完掘⑦　⑥より北へ（西→）

315　II区北半ピット群（南→）

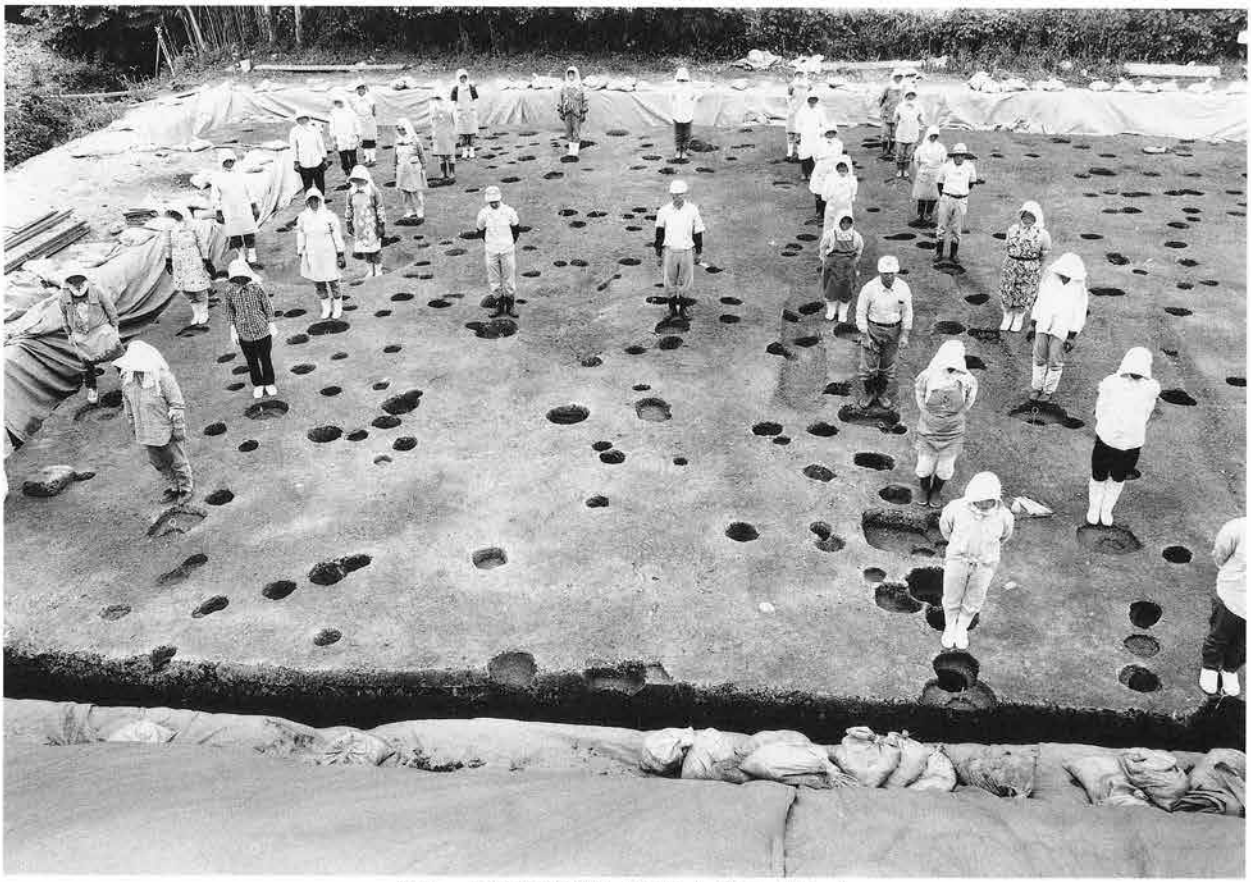
316　II区建物群（南→）

317　II区南部建物（SB７、９）（西→）



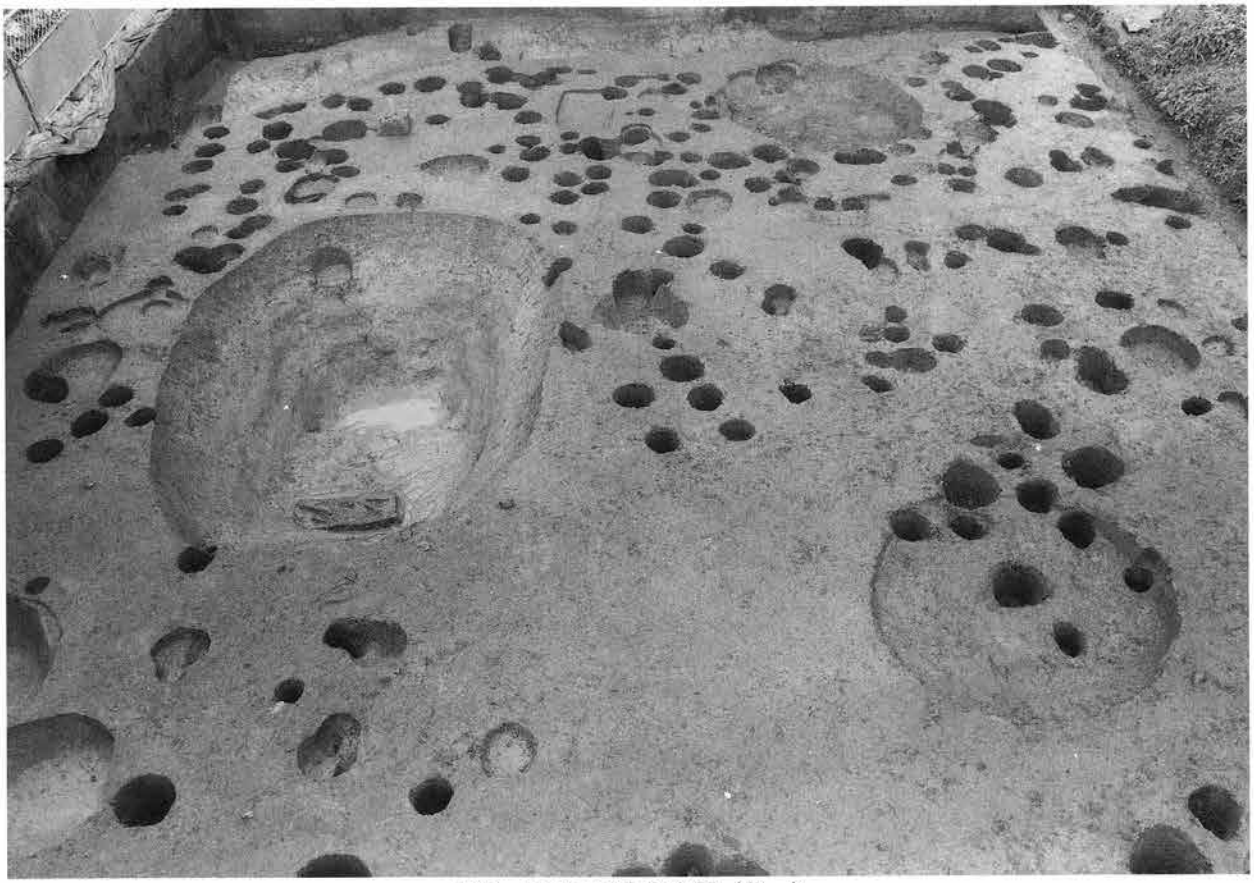
318　II区建物（SB７、９）（南→）

319　II区北部建物（SB１）（西→）



320　II区北端建物（SB１）復元（西→）

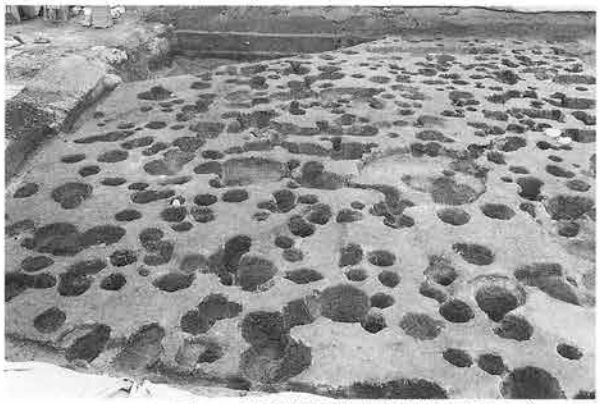
321　II区北端建物（SB１）復元（南→）



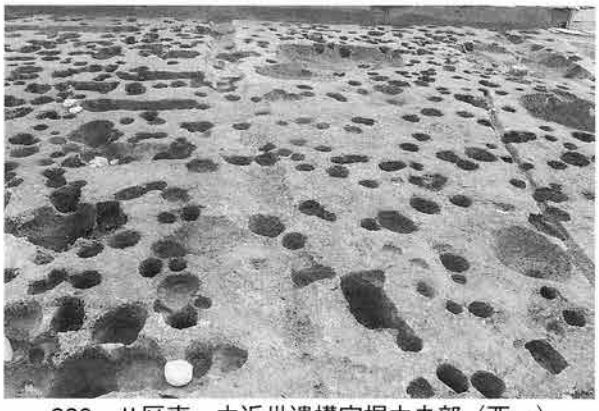
322　II区III層南半完掘（北→）

323　II区東ピット（II層上面）完掘（北→）

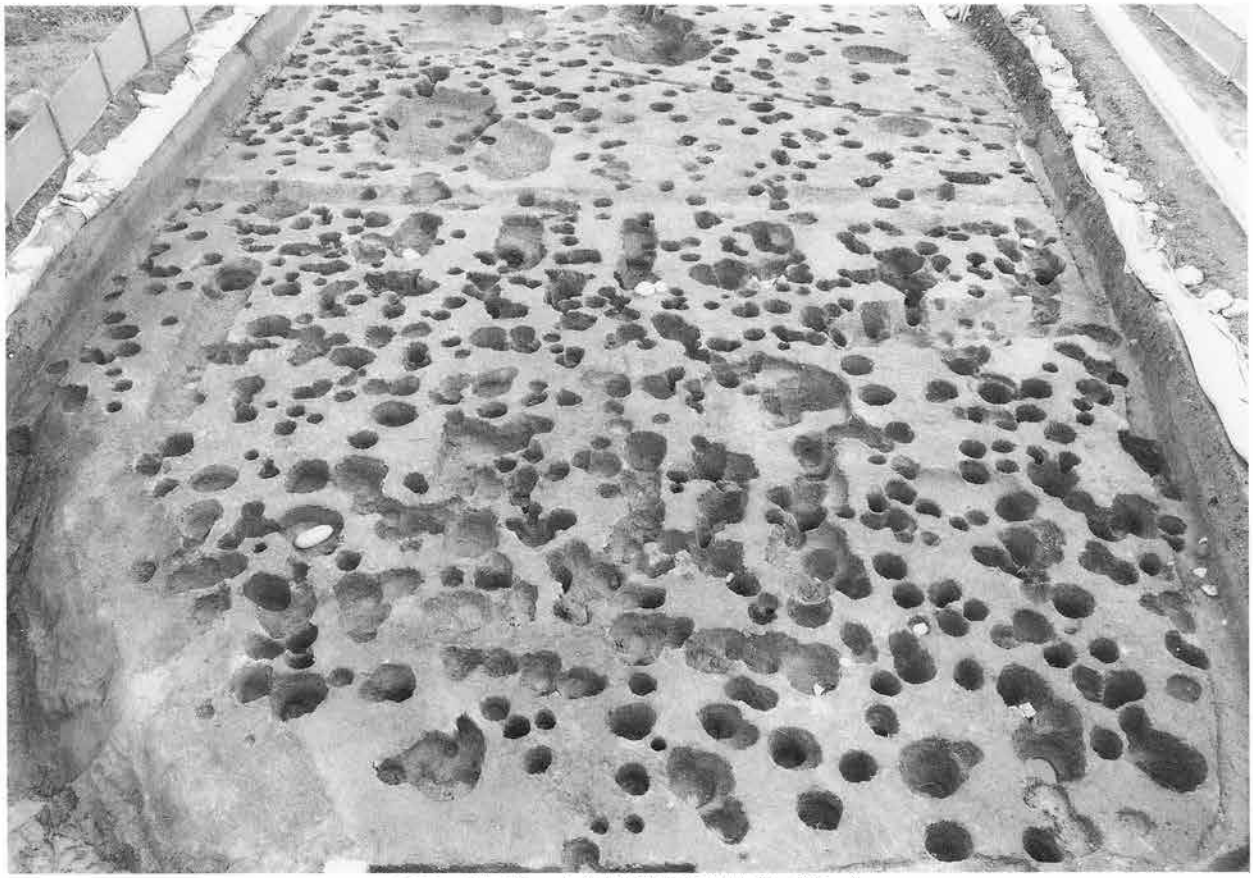
324　II区東　東拡張区ピット完掘（南→）



325　II区東　中近世遺構完掘北部（西→）



326　II区東　中近世遺構完掘中央部（西→）



327　II区東　中近世遺構完掘北部（西→）

328　II区東　中近世遺構完掘南部（西→）

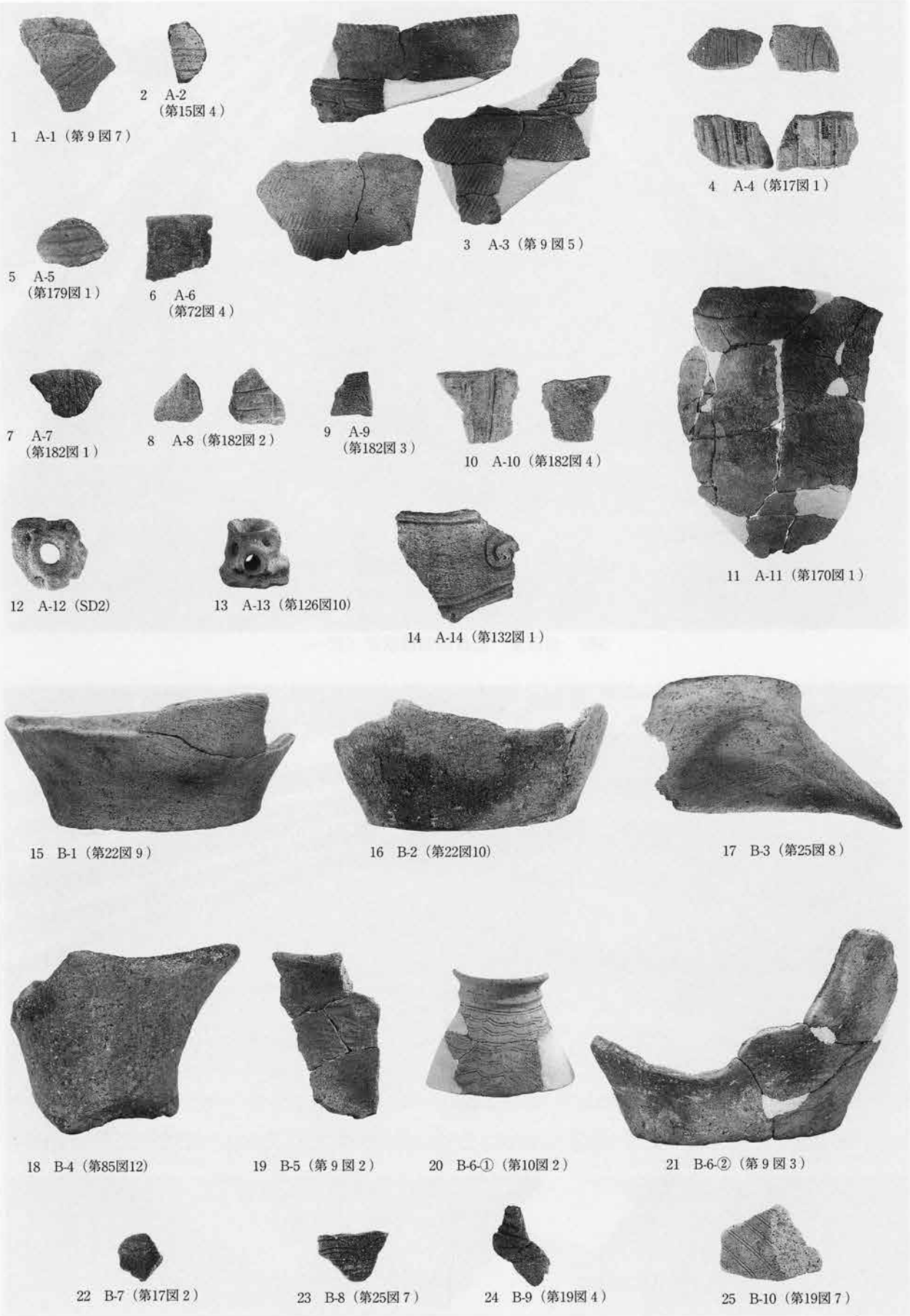
329　II区　D−19　ピット410　遺物出土状況（南東→）

330　II区東　I−18　ピット1陶器、皿（北→）

331　II区東　1号埋設土器セクション［Ca20・21］（南→）

332　III区東　近世面完掘状況（北→）

333　III区東　南半近世面完掘状況（北東→）


1 A-1（第9図7）
2 A-2（第15図4）
3 A-3（第9図5）
4 A-4（第17図1）
5 A-5（第179図1）
6 A-6（第72図4）
7 A-7（第182図1）
8 A-8（第182図2）
9 A-9（第182図3）
10 A-10（第182図4）
11 A-11（第170図1）
12 A-12（SD2）
13 A-13（第126図10）
14 A-14（第132図1）
15 B-1（第22図9）
16 B-2（第22図10）
17 B-3（第25図8）
18 B-4（第85図12）
19 B-5（第9図2）
20 B-6-①（第10図2）
21 B-6-②（第9図3）
22 B-7（第17図2）
23 B-8（第25図7）
24 B-9（第19図4）
25 B-10（第19図7）

334 出土遺物（1）

1　B-11（第19図 8）

2　B-12（第19図 6）

3　B-13（第19図 5）

4　B-14（第19図 3）

5　B-16（第22図 6）

6　B-15（第22図 5）

7　B-17（第22図 7）

8　B-18（第22図 4）

9　B-19（第25図 5）

10　B-20（第22図 2）

11　B-21（第22図 8）

12　B-22
（第22図 1）

13　B-23（第36図 8）

14　B-24（第25図 2）

15　B-25（第25図 3）

16　B-26（第25図 6）

17　B-27（第25図 4）

18　B-29
（第85図 4）

19　B-30
（第126図11）

20　B-31（第85図 6）

21　B-32（第85図 8）

22　B-33（第85図 9）

23　B-34（第126図12）

24　B-35
（第85図 2）

335　出土遺物（2）

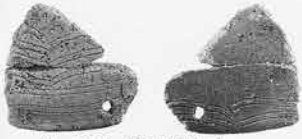
1　B-36（第85図 7 ）

2　B-37（第85図 5 ）

3　B-38（第85図 3 ）

4　B-39（第85図10）

5　B-40（第85図11）



6　B-41（第182図 5 ）

7　B-42（第10図 9 ）

8　B-43（第10図10）

9　B-44（第10図 8 ）

10　B-45（第10図11）

11　B-46（第10図 4 ）

12　B-47（第10図 7 ）

13　B-48（第10図12）

14　B-49（第10図 6 ）

15　B-50（第10図 3 ）

16　B-51（第10図 5 ）

17　B-52（Ⅰ層）

18　B-53（第 9 図 1 ）

19　B-54（第179図 2 ）

20　B-56（第22図 3 ）

336　出土遺物（ 3 ）

1　C-1（第19図１）

2　C-12（第51図１）

3　C-22（第28図１）

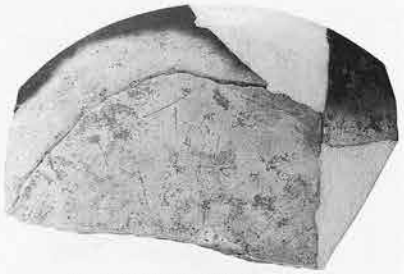
4　C-24（第30図１）

5　C-31（第36図１）

6　C-33（第42図１）

7　C-36（第36図１）

8　C-5（第19図２）



9　C-26（第30図２）

10　C-18（第53図２）

11　C-25（第30図３）

12　C-8（第39図２）

13　C-9（第39図１）

14　C-10（第51図３）

15　C-11（第51図２）

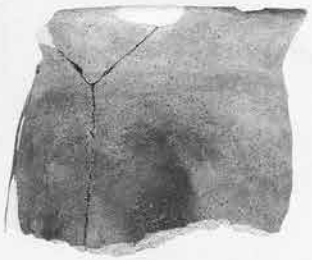
16　C-27（第36図４）

17　C-30（第36図３）

18　C-38（第183図２）

337　出土遺物（４）

1　C-40（第76図１）



2　C-15（第53図５）

3　C-16（第53図３）

4　C-17（第53図４）

5　C-19（第64図１）

6　C-28（第36図６）

7　C-29（第36図７）

8　C-34（第72図５）

9　C-37（第182図21）

338　出土遺物（５）

1　SI-24　出土土器

2　D-7（第49図２）

3　D-9（第49図１）

4　D-13（第55図４）

5　D-14（第55図１）

6　D-17（第55図３）

7　D-20（第56図10）

8　D-21（第55図６）

9　D-23（第55図12）

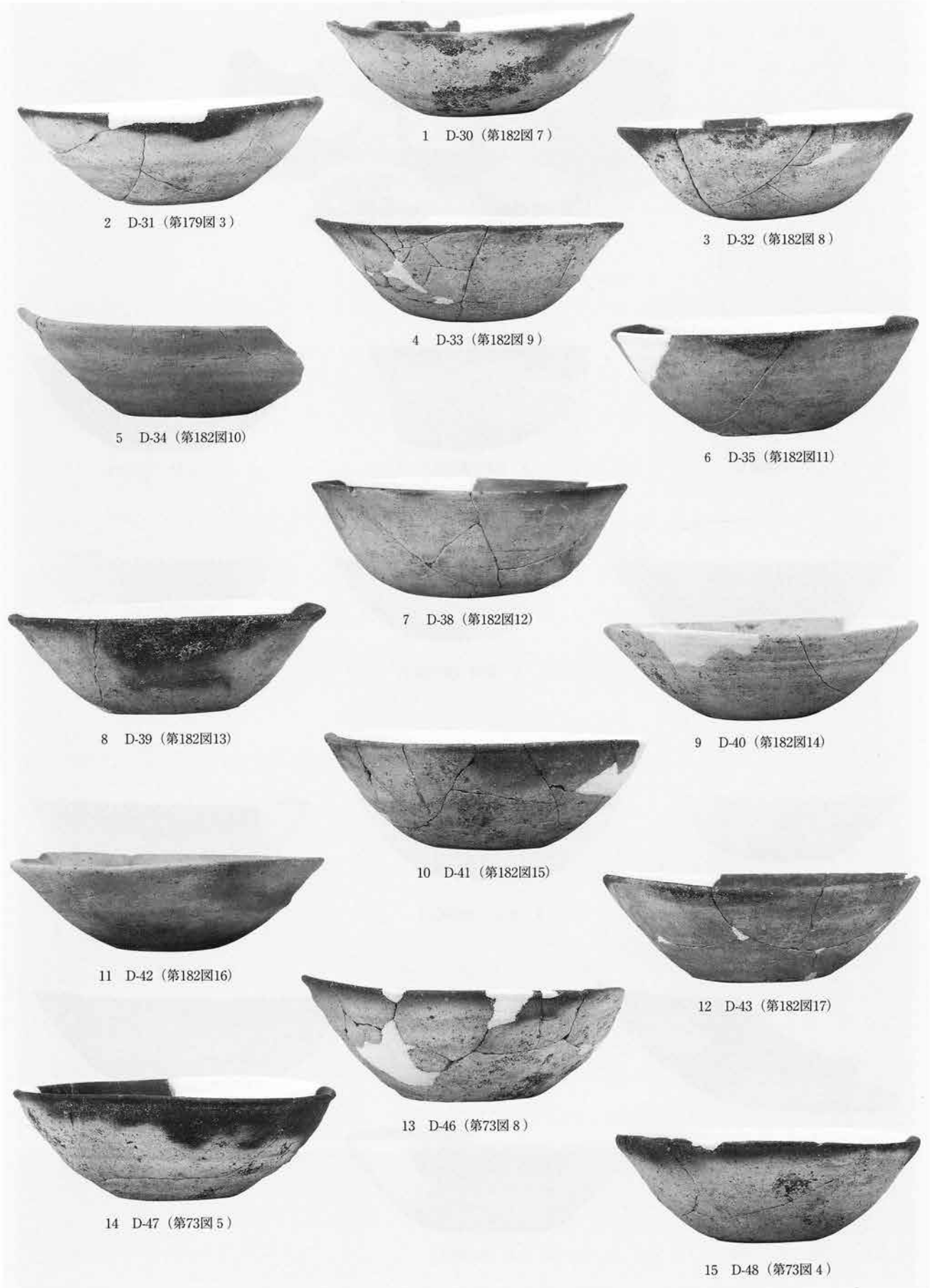
10　D-24（第59図１）

11　D-26（第74図１）

13　D-29（第182図６）

12　D-27（第73図１）

339　出土遺物（６）



1　D-30（第182図 7 ）

2　D-31（第179図 3 ）

3　D-32（第182図 8 ）

4　D-33（第182図 9 ）

5　D-34（第182図10）

6　D-35（第182図11）

7　D-38（第182図12）

8　D-39（第182図13）

9　D-40（第182図14）

10　D-41（第182図15）

11　D-42（第182図16）

12　D-43（第182図17）

13　D-46（第73図 8 ）

14　D-47（第73図 5 ）

15　D-48（第73図 4 ）

340　出土遺物（ 7 ）

1　D-49（第73図 6 ）

2　D-50（第73図 2 ）

3　D-51（第73図 3 ）

4　D-52（第73図 7 ）

5　D-66（第32図 6 ）

6　D-67（第32図 7 ）

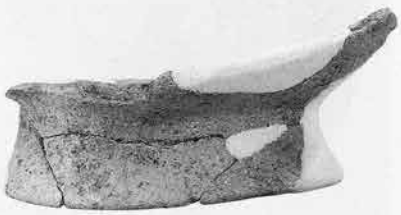
7　D-68（第179図 5 ）

8　D-69（第182図19）

9　D-15（第55図 7 ）

10　D-16（第55図 8 ）

11　D-22（第55図11）



12　D-44（第182図18）

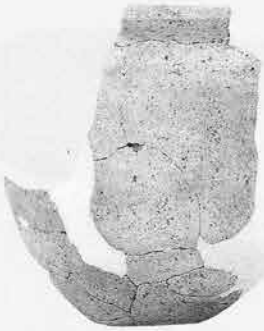
13　D-4（第47図 1 ）

14　D-5（第47図 2 ）

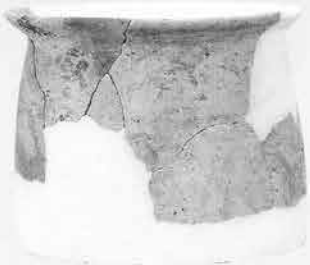
15　D-8（第49図 3 ）

341　出土遺物（ 8 ）

1　D-28（第79図１）



2　D-58（第32図８）



3　D-64（第32図10）

4　D-65（第34図１）

5　D-60（第32図１）

6　E-1（第34図２）

7　E-2（第34図３）

8　E-3（第34図４）

9　E-6（第42図２）

10　E-12（第183図３）

11　E-4（第34図５）

12　E-7（第42図３）

13　E-8（第72図６）

14　E-9（第53図７）

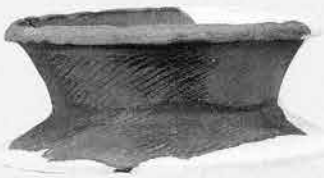
342　出土遺物（９）

1　E-10（第47図 4 ）

2　E-11（第47図 3 ）

3　E-5（第183図 5 ）

4　E-13（第173図 5 ）



5　E-15（第163図10）

6　E-16（第79図 2 ）

7　E-17（Ⅲ層上面）

8　Ca-1（第179図10）

9　Ca-2（第179図 6 ）

10　Ca-3（第179図 8 ）

11　Ca-4（第179図 9 ）

12　Ca-5（第179図 7 ）

13　Ca-6（第75図 3 ）

14　Ca-7（第110図 5 ）

15　Ca-8（第113図11）

16　Ca-9（第113図12）

343　出土遺物（10）

1　Ca-10（第147図２）

2　Ca-11（第179図11）

3　Ca-12（第183図６）

4　Ca-13（第183図７）

5　Ca-14（第183図８）

6　Ca-15（第106図23）

7　Ca-16（第72図７）

8　Ca-17（第179図12）

9　Ca-18（第163図９）

10　Ca-19（第167図７）

11　Ca-20-②（第168図２）

12　Ca-20-①（第168図１）

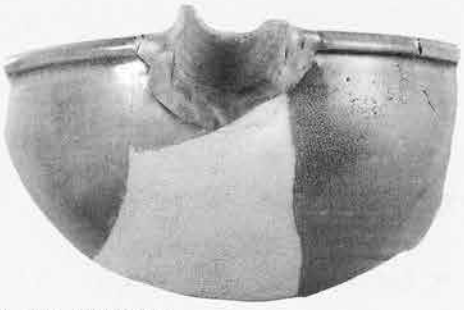
13　I-1（第105図８）

14　I-2a（第105図１）　I-2b（第104図24）

15　I-4（第104図23）

16　I-8（第105図４）

17　I-10（第106図５）



18　I-11（第106図１）

344　出土遺物（11）

1　I-12（第104図22）

2　I-13（第104図13）

3　I-14（第104図 9 ）

4　I-15（第104図10）

5　I-16（第104図21）

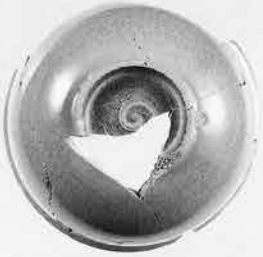
6　I-17（第104図 7 ）

7　I-18（第104図 8 ）

8　I-19（第104図12）

9　I-20（第104図 6 ）

10　I-24（第104図15）



13　I-21（第104図20）

11　I-25（第104図18）

12　I-26（第104図17）

345　出土遺物（12）

1　I-27（第104図19）

2　I-28（第104図16）

3　I-29（第104図４）

4　I-31（第104図２）

5　I-32（第104図１）

8　I-33（第105図６）

7　I-35（第105図７）

9　I-36（第105図７）

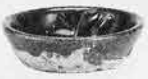
6　I-34（第105図12）

10　I-37（第105図13）

346　出土遺物（13）

1　I-38（第106図 7 ）

2　I-39（第105図14）



3　I-49（第105図 9 ）

4　I-50（第105図10）

5　I-53（第106図 3 ）

6　I-51（第105図11）

7　I-56（第104図25）

8　I-58（第109図10）

9　I-59（第96図26）

10　I-63（第96図25）

11　I-64（第97図 3 ）

12　I-66（第97図 4 ）

13　I-67（第97図 2 ）

14　I-68（第96図 6 ）

15　I-70（第96図 2 ）

347　出土遺物（14）

1　I-71（第96図 9 ）

2　I-73（第96図 5 ）

3　I-74（第96図 8 ）

4　I-75（第96図 7 ）

5　I-76（第96図18）

6　I-77（第96図20）

7　I-78（第96図16）

8　I-79（第96図21）

9　I-80（第96図22）

10　I-82（第97図 1 ）

11　I-83（第96図15）

12　I-84（第96図10）

13　I-85（第96図17）

14　I-86（第96図13）

15　I-87（第96図14）

348　出土遺物（15）

1　I-88（第96図11）

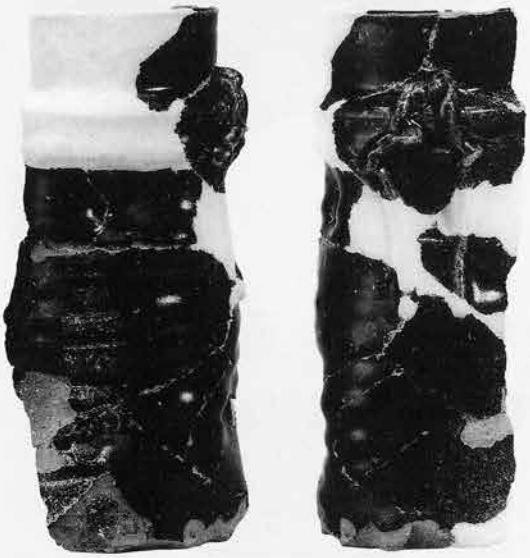
2　I-89（第96図23）

3　I-90（第96図12）

4　I-91（第97図 9 ）

5　I-94（第96図 3 ）

6　I-92（第97図16）



7　I-101（第98図 6 ）

8　I-102（第98図 2 ）

349　出土遺物（16）

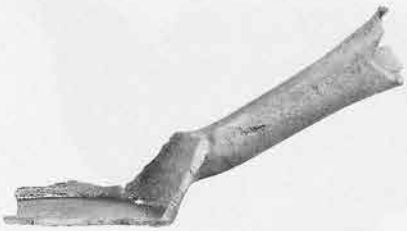
1　I-103（第97図 5 ）

2　I-105（第97図15）

3　I-106（第97図 6 ）

4　I-107（第98図 1 ）

5　I-108（第97図14）



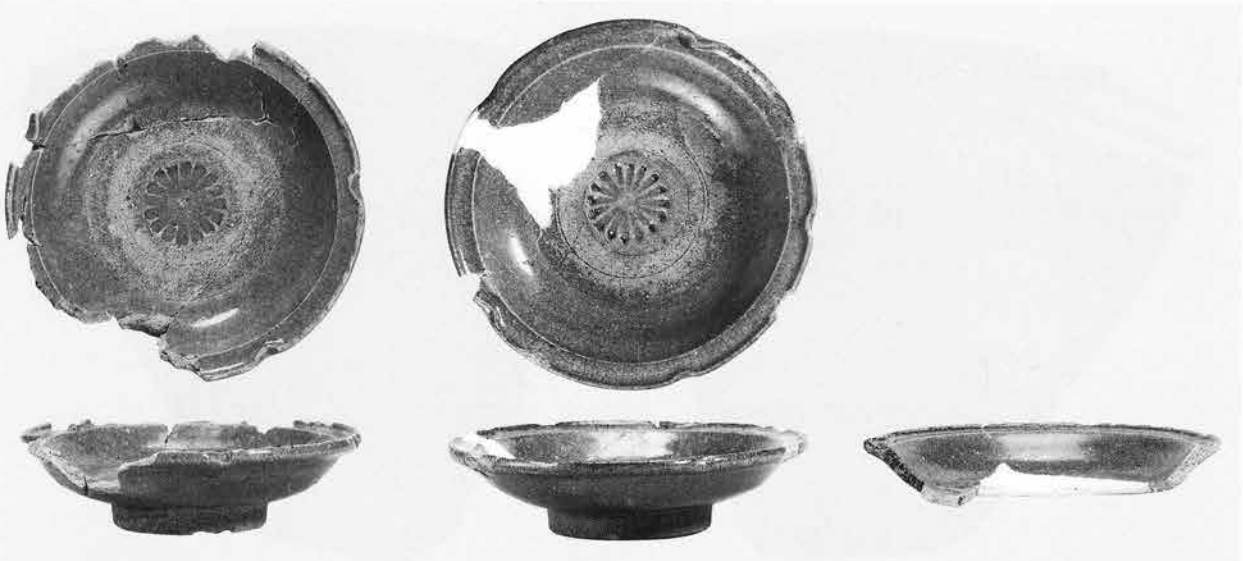
6　I-109（第98図 5 ）

7　I-110（第98図 3 ）

8　I-113（第96図24）

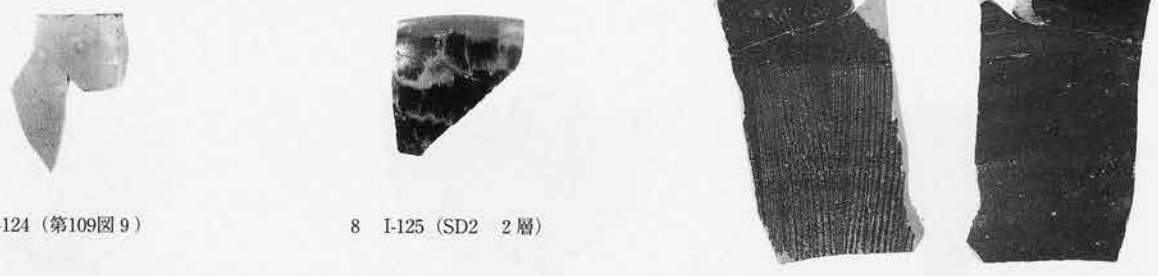
9　I-112（第97図10）

350　出土遺物（17）



1　I-115（第109図 5 ）　2　I-116（第109図 6 ）　3　I-118（第109図 7 ）

4　I-121（第109図 8 ）　5　I-122（第109図 2 ）　6　I-123（第109図 1 ）



7　I-124（第109図 9 ）　8　I-125（SD2　2 層）　9　I-127（第109図12）

10　I-129（第109図13）　11　I-131（第109図 3 ）　12　I-132（第92図 3 ）

351　出土遺物（18）

1　I-128（第110図１）

2　I-134a（第91図７）
　　I-134b（第91図８）

3　I-135（第90図３）

4　I-137（第91図21）

5　I-138（第90図20）

6　I-139（第90図21）

7　I-140（第90図18）

8　I-142（第90図27）

9　I-143（第90図22）

10　I-145（第91図19）

352　出土遺物（19）

1　I-146（第91図24）

2　I-147（第90図19）

3　I-148（第91図23）

4　I-149（SD2配石中）

5　I-151（第90図11）

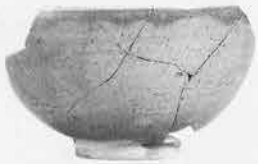
6　I-152（第90図13）

7　I-153（第90図17）

8　I-154（第90図 8 ）

9　I-155（第90図12）

10　I-156（第90図16）



11　I-157（第90図 9 ）

12　I-158（第90図15）

13　I-159（第90図10）

14　I-160（第90図25）

353　出土遺物（20）

1　I-161（第91図５）

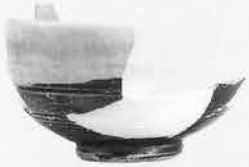
2　I-164（第91図３）

3　I-165（第91図１）

4　I-166（第90図26）

5　I-167（第90図14）

6　I-168（第91図16）



7　I-169（第91図14）

8　I-170（第91図13）

9　I-171（第91図12）

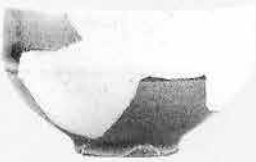
10　I-172（第91図15）

11　I-173（第91図４）

12　I-174（第91図10）

13　I-175（第91図９）

14　I-176（第91図17）



15　I-177（第91図11）

354　出土遺物（21）

1　I-178（第90図 1 ）

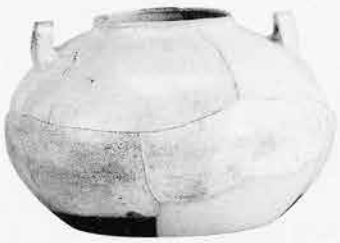
2　I-179（第90図 7 ）

3　I-180（第90図 2 ）

4　I-181（第90図 5 ）

5　I-182（第90図 4 ）

6　I-183（第90図 6 ）



7　I-184（第92図 8 ）

8　I-185（第92図10）

9　I-186（第91図22）

10　I-188（第92図 2 ）

11　I-203（第92図 6 ）

12　I-202（第92図 9 ）

13　I-204（第92図 5 ）

14　I-206（第92図13）

15　I-207（第92図12）

16　I-205（第92図 7 ）

355　出土遺物（22）

1　I-208（第92図14）

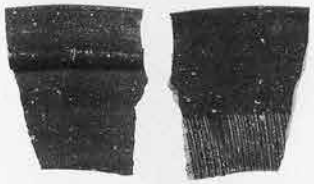
2　I-210（第113図5）

3　I-211（第113図6）

4　I-212（第113図2）

5　I-214（第113図4）

6　I-215（第113図1）



7　I-217（第113図8）

8　I-218（第113図9）

9　I-219（第106図4）

10　I-216（第113図10）

356　出土遺物（23）

1　I-220（第113図 7 ）

2　I-222（第91図20）

3　I-223（第97図 8 ）

4　I-224（第90図24）

5　I-225（第105図 3 ）

6　I-228（第126図 3 ）

7　I-229（第126図 6 ）

8　I-234（第118図13）

9　I-235（SD2）

10　I-237（第118図 3 ）

12　I-238（第118図 8 ）

11　I-236（第118図10）

14　I-241（SD2）

13　I-240（第118図 4 ）

15　I-242（第118図 9 ）

357　出土遺物（24）

1　I-244（第118図 2）

2　I-245（第118図12）

3　I-246（第118図 6）

4　I-247（第118図 7）

5　I-248（第118図 5）

6　I-251（第119図 1）

7　I-252（第115図 2）

8　I-253（第115図 1）

9　I-254（第115図 4）

10　I-256（第131図 6）

11　I-257（第131図 7）

12　I-258（第131図 8）

13　I-259（第131図 9）

14　I-264（第131図12）

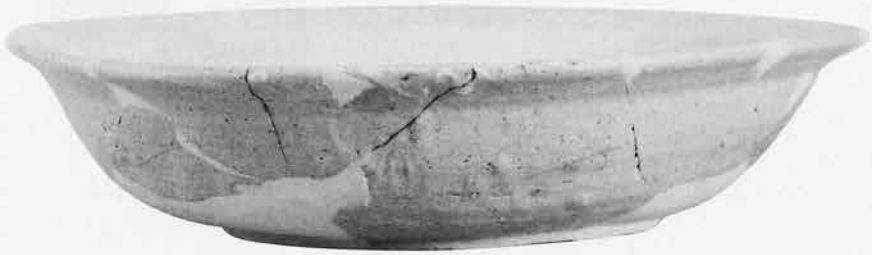
358　出土遺物（25）

1　I-266（第155図15）

2　I-267（第135図17）

3　I-268（第155図18）

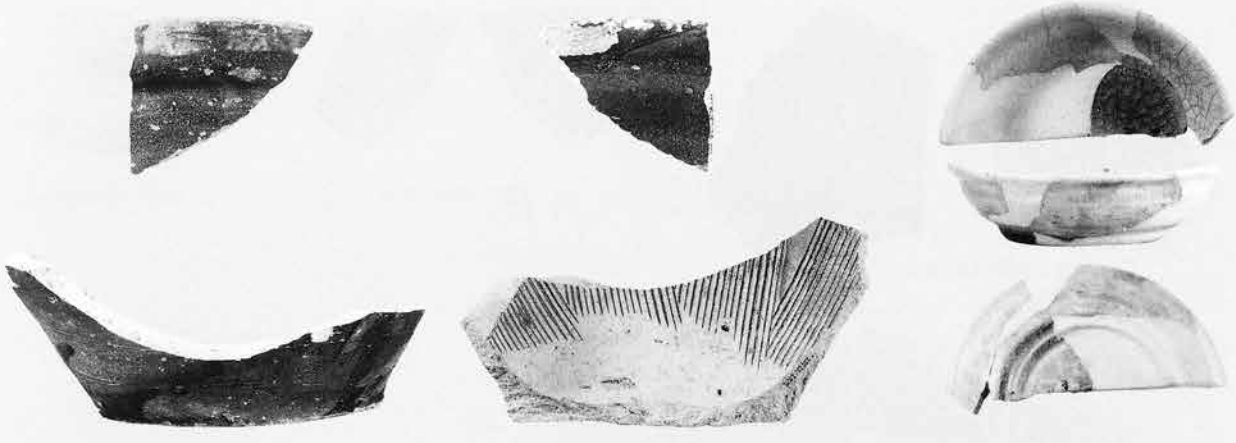
5　I-270（第156図２）



4　I-269（第156図１）

6　I-271（第156図８）

359　出土遺物（26）



1　I-272（第157図１）　　2　I-273（第155図14）

3　I-274（SD4　１層）

4　I-278（第155図８）

5　I-279（第155図９）

6　I-280（第155図４）

7　I-281（第155図11）

8　I-282（第155図５）

9　I-283（第155図７）

10　I-284（第155図１）

11　I-285（第155図３）

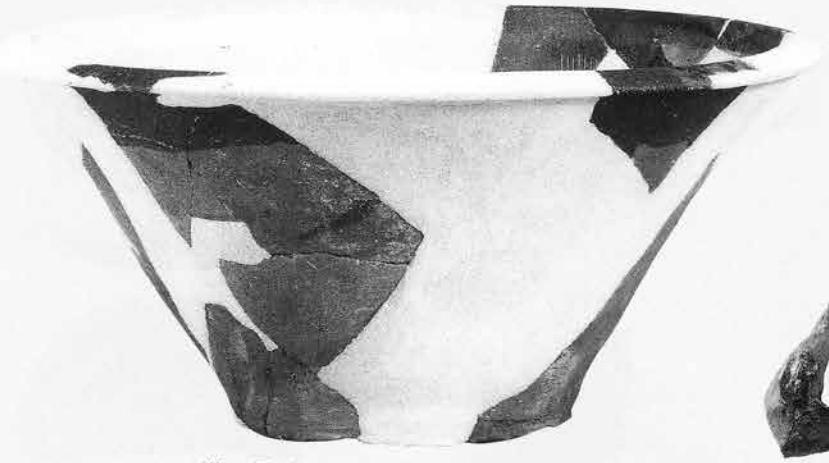
360　出土遺物（27）

1　I-286（第155図 6 ）

2　I-288（第155図13）

3　I-289（第155図12）

4　I-290（第156図 3 ）



5　I-291（第156図 7 ）

6　I-292（第156図 6 ）

7　I-293（SD4　1 層）

8　I-294（第155図16）

9　I-295（第156図 5 ）

10　I-296（第156図 4 ）

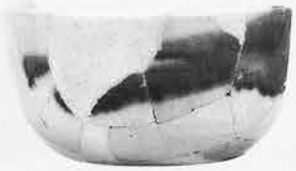
11　I-297（第142図24）

12　I-298（第142図23）

13　I-299（第142図22）

14　I-300（第143図 5 ）

361　出土遺物（28）



1　I-301（第142図８）

2　I-302（第142図16）

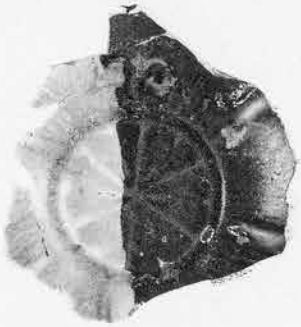
3　I-303（第143図７）

4　I-305（第143図９）

5　I-306（第142図17）

6　I-307（第142図21）

7　I-308（第142図19）



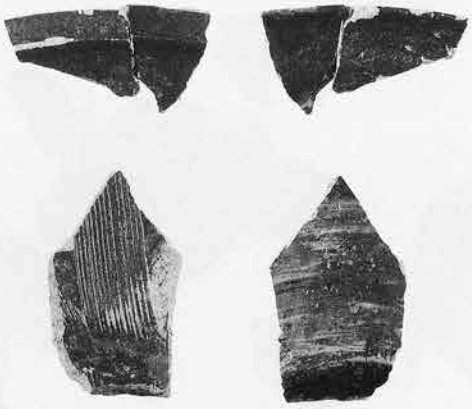
8　I-310（第143図１）

9　I-311（第143図２）

10　I-314（第142図20）

11　I-315（第144図３）

362　出土遺物（29）



1　I-316（第144図 6 ）

2　I-317（第142図 4 ）

3　I-318（第142図 5 ）

4　I-319（第142図 3 ）

5　I-320（第142図 6 ）

6　I-322（第142図15）

7　I-323（第142図11）

8　I-324（第142図 9 ）

9　I-325（第142図10）

10　I-326（第142図13）

11　I-327（第142図12）

12　I-328（第142図14）

13　I-329（第142図 2 ）

14　I-330（第142図 1 ）

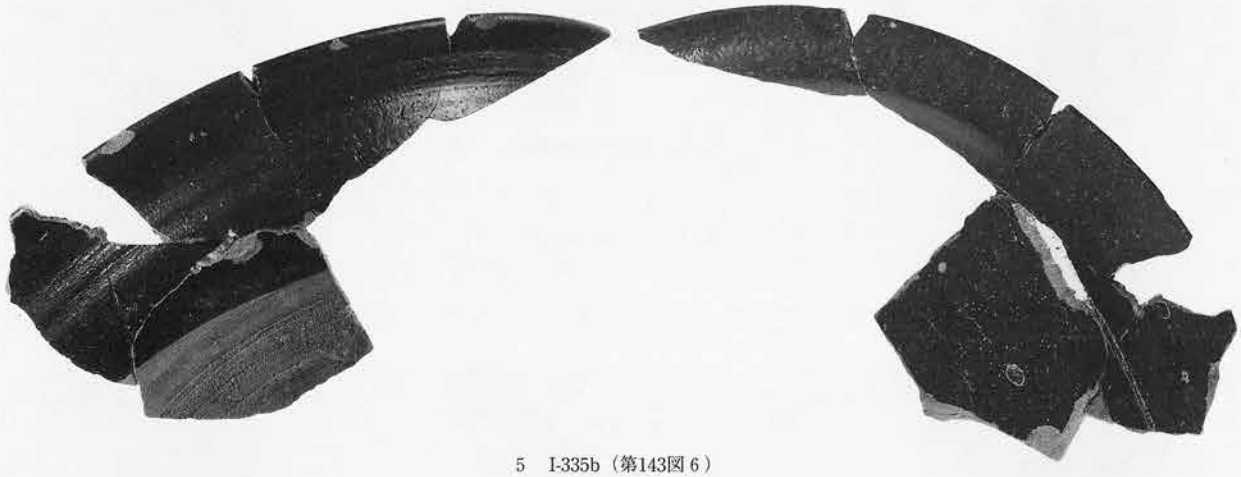
363　出土遺物（30）

1　I-331（第143図 3 ）

2　I-333（第145図 5 ）

3　I-334（第145図 4 ）

4　I-335a（第143図 8 ）



5　I-335b（第143図 6 ）

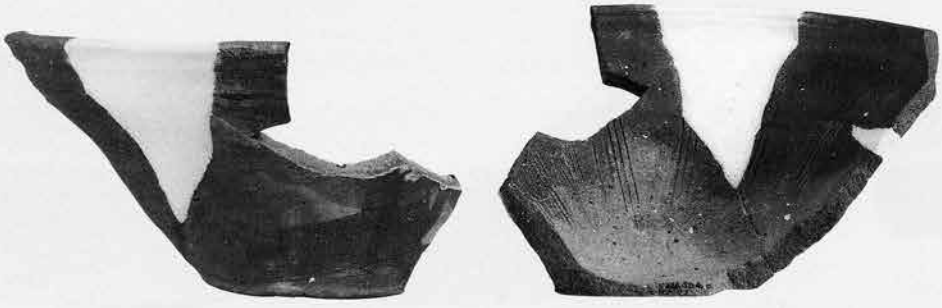
364　出土遺物（31）

1　I-336（第143図４）

2　I-337（第143図11）

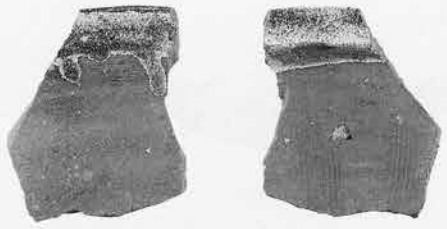
3　I-338（第144図１）

4　I-339（第143図10）

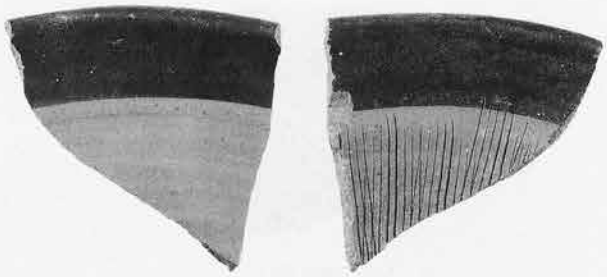


5　I-340（第144図２）

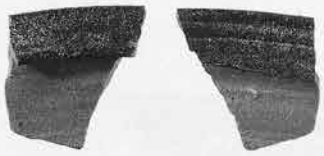
365　出土遺物（32）



1　I-341（第144図 7）



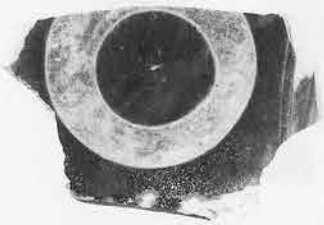
2　I-343（第145図 1）



3　I-342（第144図 8）

4　I-347（第141図 2）

5　I-348（第141図 1）



7　I-352（第92図 1）

8　I-354（第163図 4）

6　I-349（第141図 3）

9　I-355（SD4）

10　I-356（第163図 2）

11　I-357（第163図 5）

12　I-358（第163図 3）

13　I-359（第163図 1）

14　I-360（第163図 6）

15　I-361（第163図 7）

16　I-363（第131図10）

366　出土遺物（33）

1　I-364（第144図４）

2　I-365（第85図１）

3　I-368（第167図５）

4　I-369
（第72図１）

5　I-371（第75図２）

6　I-372（第75図１）

7　I-375（第172図３）

8　I-376（第172図２）

9　I-377（第172図１）

10　I-378（第179図14）

11　I-379（第179図15）

12　I-382（第179図19）

13　I-384（Pit193）

14　I-385（第179図17）

15　I-386（第179図16）

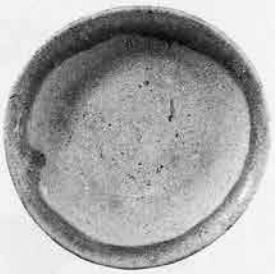
16　I-389（第183図18）

367　出土遺物（34）

1　I-390（第183図19）

2　I-391（第183図23）

3　I-392（第10図１）



4　I-393（第183図９）

5　I-395（第183図15）

6　I-396（近世整地層）

7　I-398（第183図10）

8　I-399（近世遺構検出面）

9　I-400（第183図13）

10　I-402（第183図14）

11　I-403（第183図20）

12　I-412（第183図11）

13　I-413（第183図24）

14　I-414（第184図１）

15　I-415（第183図21）

16　I-416（第184図２）

17　I-417（第184図３）

18　I-419（第184図７）

368　出土遺物（35）

1　I-420（第184図 5 ）

2　I-421（第184図 8 ）

3　I-422（第184図 9 ）

5　I-424（第49図 5 ）

4　I-423（第184図 4 ）

6　I-425（遺構検出面）

9　I-429（第141図 4 ）

7　I-426（第183図25）

8　I-427（第15図 5 ）

10　I-430（SK15）

11　I-431（K14　Pit4）

12　I-433（第172図 5 ）

13　I-434（J20）

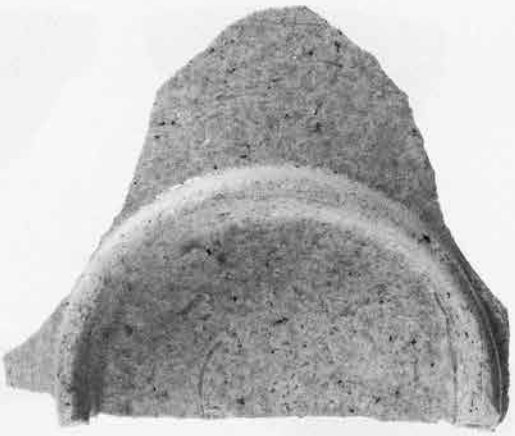
14　I-435（第72図 2 ）

15　I-436（SI21　堆積土）

369　出土遺物（36）

1　I-438（表土）

2　I-440（第183図12）



3　I-441（第172図４）

4　I-442（第155図19）

5　I-443（第145図７）

6　I-444（J17　Ⅲ層）

7　I-446（第25図１）

8　I-447（第97図12）

9　I-448（第97図13）

10　I-449（SD2　３層）

11　I-450（第110図２）

12　I-451（第118図15）

13　I-452（第118図14）

14　I-453（第163図８）

15　I-454（第145図６）

16　I-455（第183図16）

370　出土遺物（37）

1　J-1（第106図13）

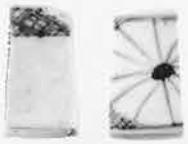
3　J-3（第106図14）

2　J-2（第106図９）

4　J-4（第106図８）

5　J-5（第106図11）

6　J-6（第106図10）



7　J-7（第106図15）

9　J-9（第106図21）

10　J-10（第106図22）

8　J-8（第106図20）

11　J-11（第106図17）

12　J-12（第106図18）

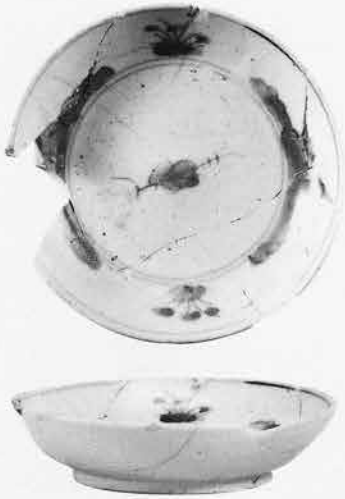
13　J-13（第106図19）

14　J-14（第106図12）

15　J-15（第98図７）

16　J-16（第98図８）

371　出土遺物（38）



1　J-17（第98図12）

2　J-18（第98図 9 ）

3　J-20（第98図10）

4　J-21（第98図11）

5　J-22（第93図 3 ）

6　J-23（第93図 4 ）

7　J-24（第93図 5 ）

8　J-25（第93図 1 ）

9　J-26（第93図 7 ）

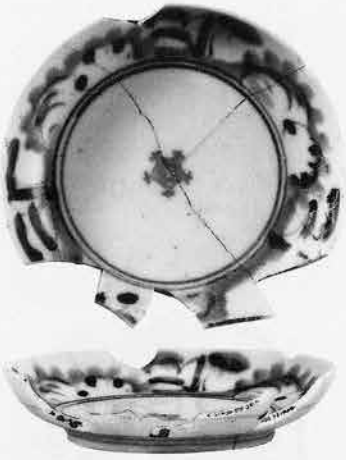
10　J-27（第93図 2 ）

11　J-28（第93図 6 ）

12　J-29（第93図15）

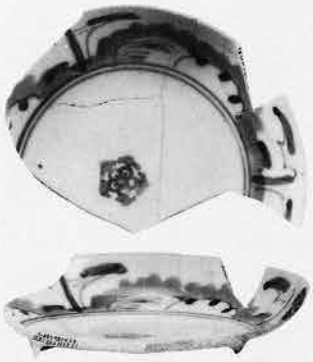
13　J-30（第93図14）

372　出土遺物（39）



1　J-31（第93図10）

2　J-32（第93図11）



3　J-33（第93図 9 ）

4　J-34（第93図 8 ）

5　J-35（第93図12）

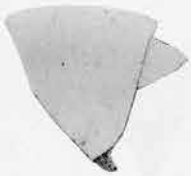
6　J-36（第93図16）

7　J-37（第93図13）

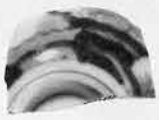
8　J-38（第110図 4 ）

9　J-39（第110図 3 ）

10　J-40（第126図 8 ）



11　J-41（第126図 7 ）

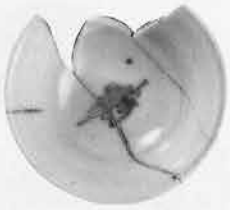


12　J-43（第119図 2 ）

13　J-44（SD3　2 層）

373　出土遺物（40）

1　J-47（第119図５）



2　J-49（第115図６）

3　J-50（第115図５）

4　J-51（第157図４）

5　J-52（第157図３）

6　J-53（第157図８）

7　J-54（第157図10）

8　J-55（第157図６）

9　J-56（第157図５）

10　J-58（第157図９）

11　J-59（第157図12）

12　J-60（第145図８）

13　J-61（第145図９）

14　J-62（第145図10）

15　J-63（第145図11）

16　J-64（第157図２）

374　出土遺物（41）

1　J-65（第145図12）

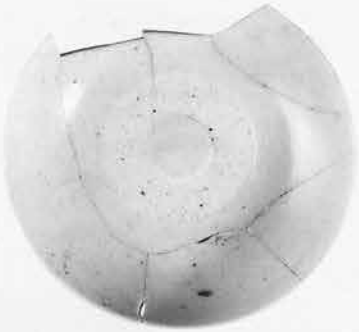
2　J-66（SD4　2層）

3　J-67（第145図16）

4　J-68（第146図２）

5　J-69（第146図１）

6　J-71（第145図14）



7　J-72（第145図13）

8　J-73（第146図５）

10　J-74（第146図７）

9　J-75（第146図６）

11　J-76（第141図８）

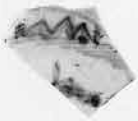
12　J-77（第141図６）

375　出土遺物（42）

1　J-78（第141図４）

2　J-79（第157図11）

3　J-80（SD4）



4　J-81（第141図７）

5　J-82（第179図21）

6　J-83（第179図20）

7　J-84（第184図10）

8　J-85（第72図３）

9　J-86（第184図16）

10　J-87（第184図19）

11　J-88（第184図18）

12　J-89（第184図20）

13　J-90（第184図15）

14　J-91（第184図17）

15　J-92（第106図16）

16　J-93（第119図３）

17　J-94（第146図３）

18　J-95（第146図４）

19　J-96（SD4　２層）

20　J-97（第141図５）

376　出土遺物（43）

1　J-98（第167図 6 ）

2　J-99（SK27　堆積土）

3　J-100（SK65　1 層）

4　J-101（第184図14）

5　J-102（第184図11）

6　J-103（第184図13）

7　J-104（第184図12）

8　J-105（第170図 2 ）

9　J-106（不明）

10　J-107（第119図 8 ）

11　T-1（第119図 9 ）

12　T-4（第115図 7 ）

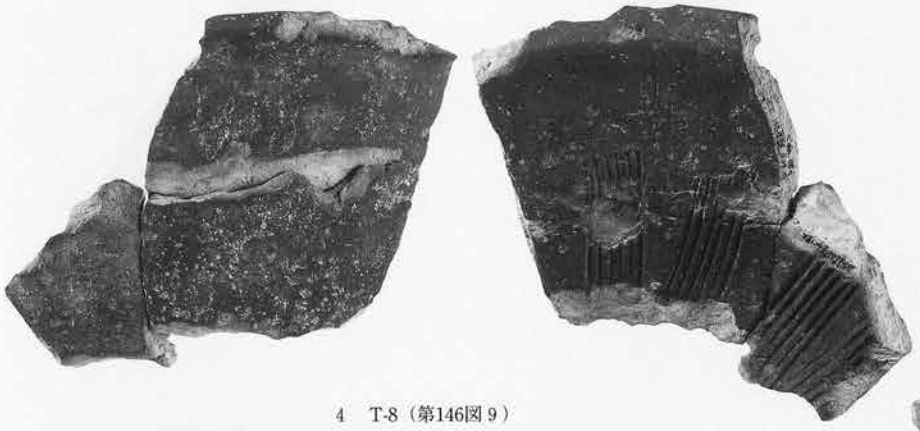
13　T-5（第163図15）

377　出土遺物（44）

1　T-6（第157図13）

2　T-7（第146図10）

3　T-9（第146図８）



4　T-8（第146図９）

5　T-11（第163図16）

6　T-12（第164図１）

7　T-15（第185図１）

8　T-20（第98図13）

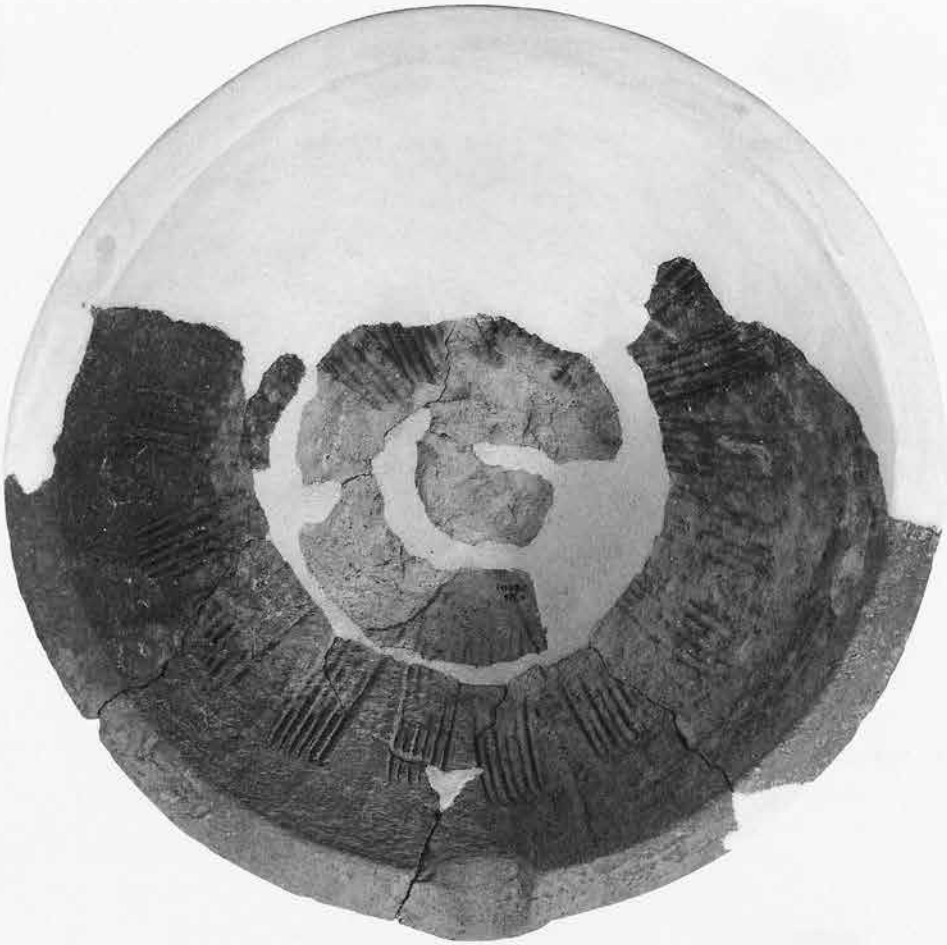
9　T-27（第157図14）

10　T-28（第164図２）

11　T-29（第164図３）

12　T-30（第164図４）

378　出土遺物（45）



1　T-37（第126図 9 ）

2　T-40（第163図17）

3　T-38（第147図 1 ）

4　P-2（第185図 7 ）

5　P-7（第179図23）

6　P-36（第119図13）

7　P-37（第119図15）

379　出土遺物（46）

1　P-38（第119図14）

2　P-39（第119図16）

3　P-41（第167図11）

4　P-3（第170図３）

5　P-4（第32図15）

6　P-5（第32図16）

7　P-8（第179図22）

8　P-9（第９図６）

9　P-13（第185図８）

10　P-14（第185図９）

11　P-15（第185図10）

12　P-17（第185図11）

13　P-30（第158図５）

14　P-45（第94図５）

15　P-20（第98図14）

16　P-44（第107図４）

17　P-34（第110図８）

18　P-10（第185図12）

19　P-42（第185図13）

20　P-28（第107図６）

21　P-11（第84図１）

22　P-26（第163図13）

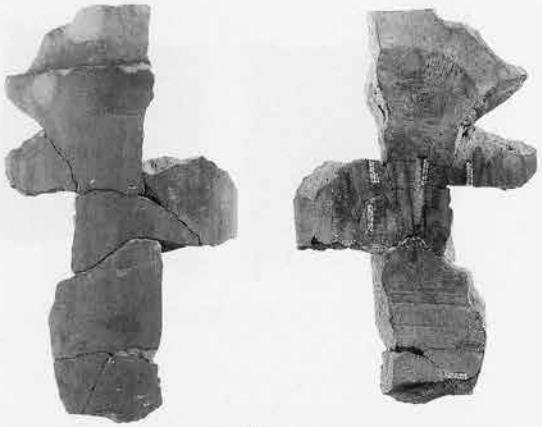
23　P-24（第94図４）

380　出土遺物（47）

1　P-6（第49図 6）

2　F-24（第162図 6）

3　F-10（第149図 7）



4　F-3（第110図 6）

5　F-7（第158図 1）

6　F-5（第94図 2）

7　F-8（第158図 4）

8　F-11（第147図 3）

9　F-12（第149図 1）

10　F-13（第148図 3）

381　出土遺物（48）

1　F-22（第185図5）

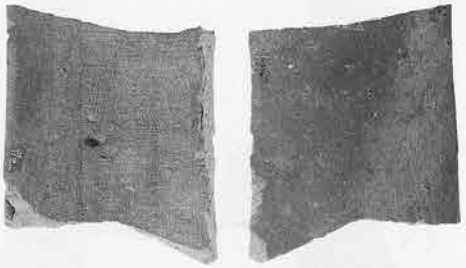
2　F-23（第149図6）

3　G-1（第94図3）

4　G-8（第149図3）

5　G-13（第79図3）

6　G-15（第185図6）



7　G-6（第115図9）

8　La-1（第127図5）

9　La-3（第127図4）

10　La-2（SD3　1層）

11　La-4（第127図1）

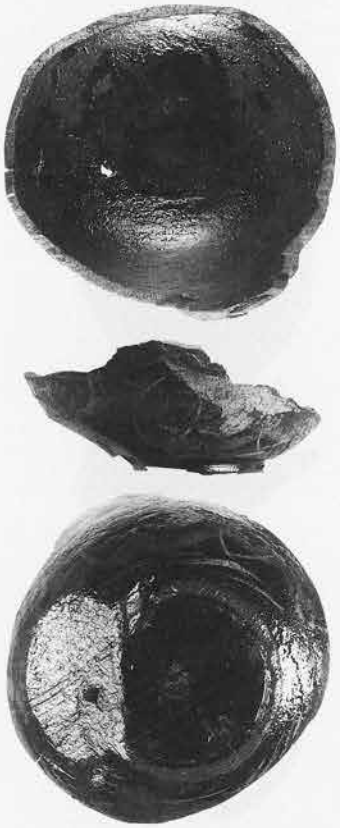
12　La-5（第127図2）

382　出土遺物（49）

1　La-7（第121図 6 ）

2　La-8（第120図12）

3　La-9（第121図 1 ）

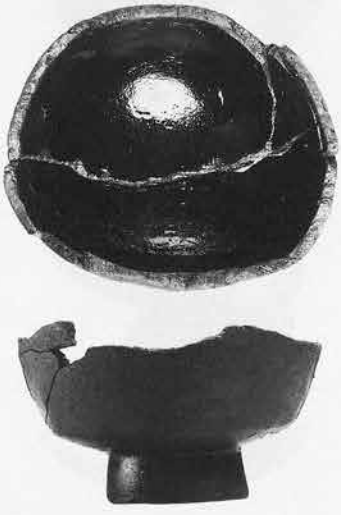


5　La-11（第121図 2 ）

7　La-13（第120図11）

4　La-10（第121図 7 ）

6　La-12（第120図 4 ）



8　La-14（第120図 7 ）

383　出土遺物（50）

1　La-15（第120図10）

2　La-16（第121図３）

3　La-17（第120図６）

4　La-18（第121図５）

5　La-19（第120図３）

6　La-20（第120図５）

9　La-23（第120図１）

7　La-21（第121図４）

10　La-24（第120図９）

8　La-22（第120図８）

11　La-25（第120図２）

384　出土遺物（51）

1　La-26（第116図２）

2　La-27（第116図４）

3　La-28（第116図３）

4　La-29（第99図４）

5　La-30（第107図６）

6　La-31（第88図１）

7　La-32（第88図２）

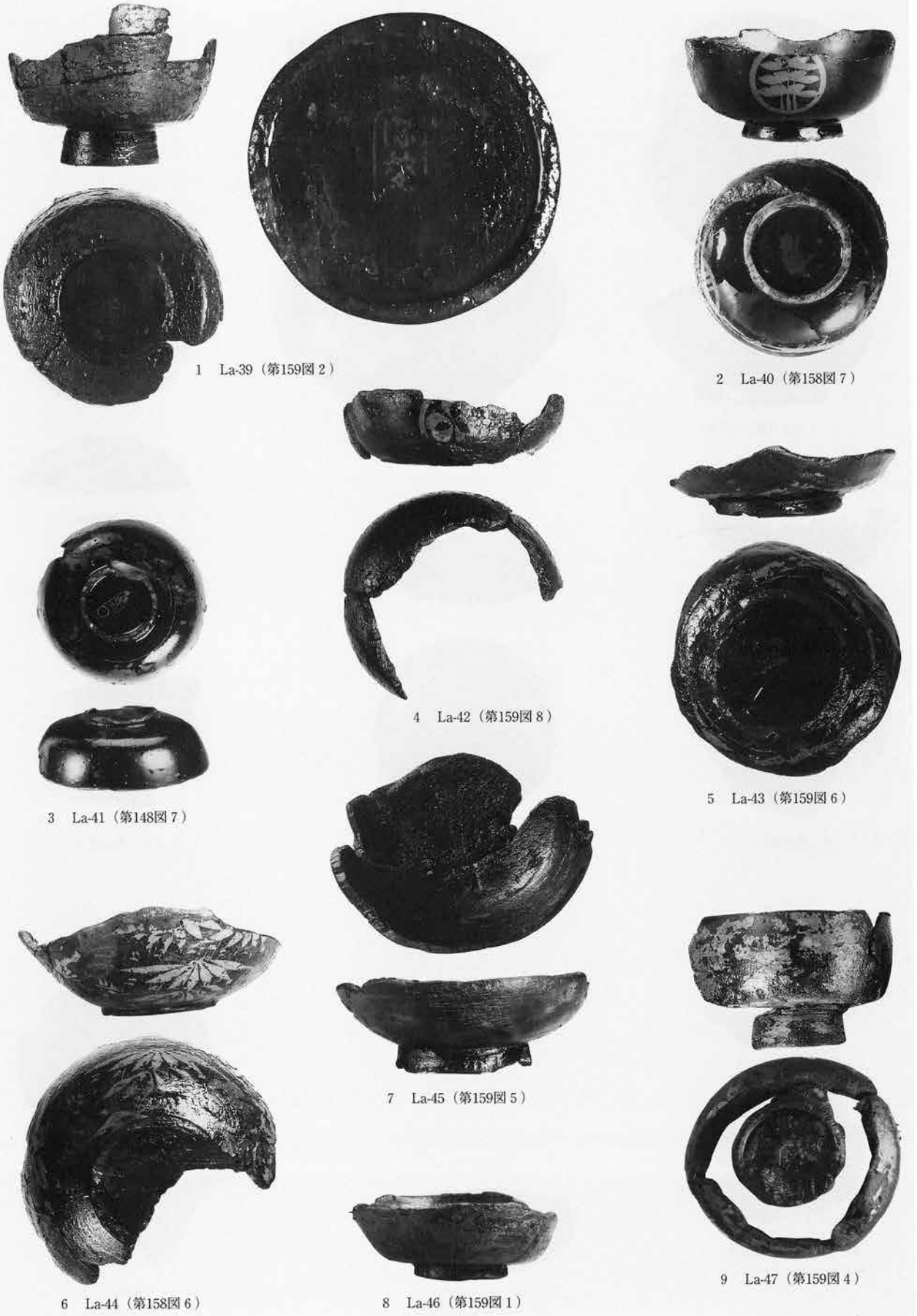
8　La-33（第107図８）

9　La-34（第99図２）

11　La-36（第99図３）

10　La-35（第88図３）

385　出土遺物（52）



1　La-39（第159図 2）

2　La-40（第158図 7）

3　La-41（第148図 7）

4　La-42（第159図 8）

5　La-43（第159図 6）

6　La-44（第158図 6）

7　La-45（第159図 5）

8　La-46（第159図 1）

9　La-47（第159図 4）

386　出土遺物（53）

1　La-48（第158図 9 ）

2　La-51（第148図 6 ）

3　La-52（第148図 5 ）

4　La-53（第158図 8 ）

5　La-54（SD4　1 層）

6　La-50（第159図 7 ）

387　出土遺物（54）

2　La-56（第99図 6 ）

3　La-57（第172図 6 ）

1　La-55（第166図 1 ）

6　La-60（SX6）

5　La-59（第107図 9 ）

4　La-58（第172図 7 ）

7　La-61（第127図 3 ）

388　出土遺物（55）

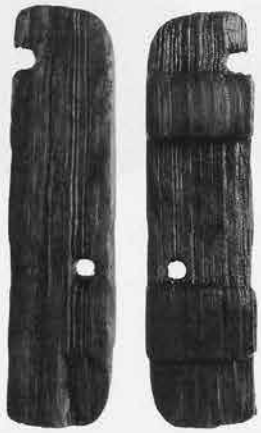
1　La-62（第75図 4 ）

2　La-63（第179図24）

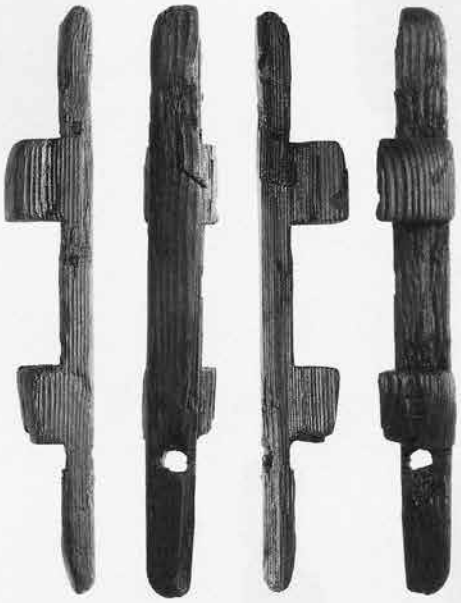
3　La-64（第107図 7 ）

4　La-72（第170図 5 ）

5　La-71（第170図 4 ）



6　Lb-1（第127図 6 ）



7　Lb-2（第127図 7 ）

8　Lb-3（第127図 8 ）

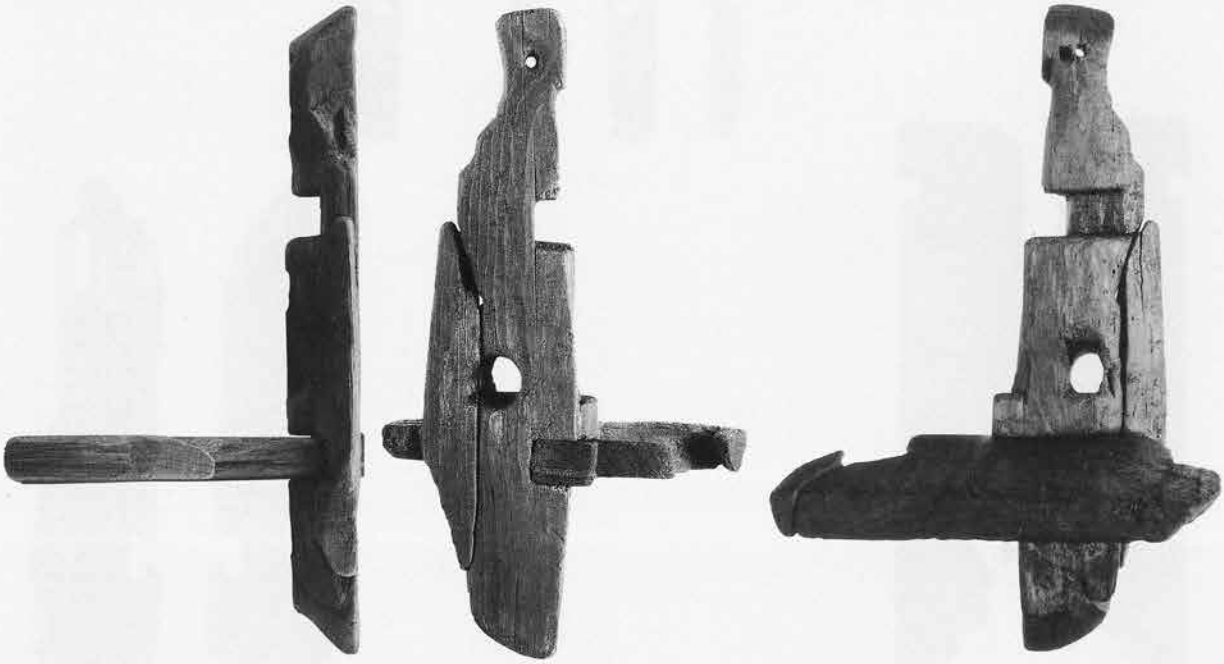
9　Lb-4（第128図 1 ）

389　出土遺物（56）

1　Lb-5（第128図 6 ）

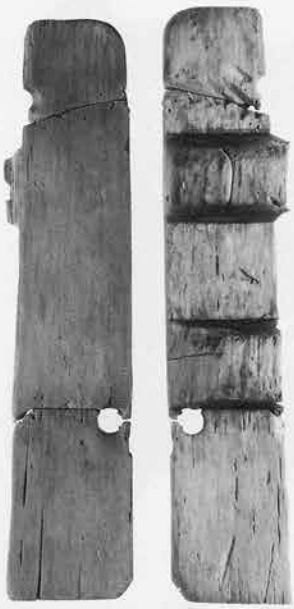
2　Lb-6（第128図 5 ）

3　Lb-7（第122図 3 ）



4　Lb-8（第123図 3 ）

390　出土遺物（57）



1　Lb-9（第122図２）

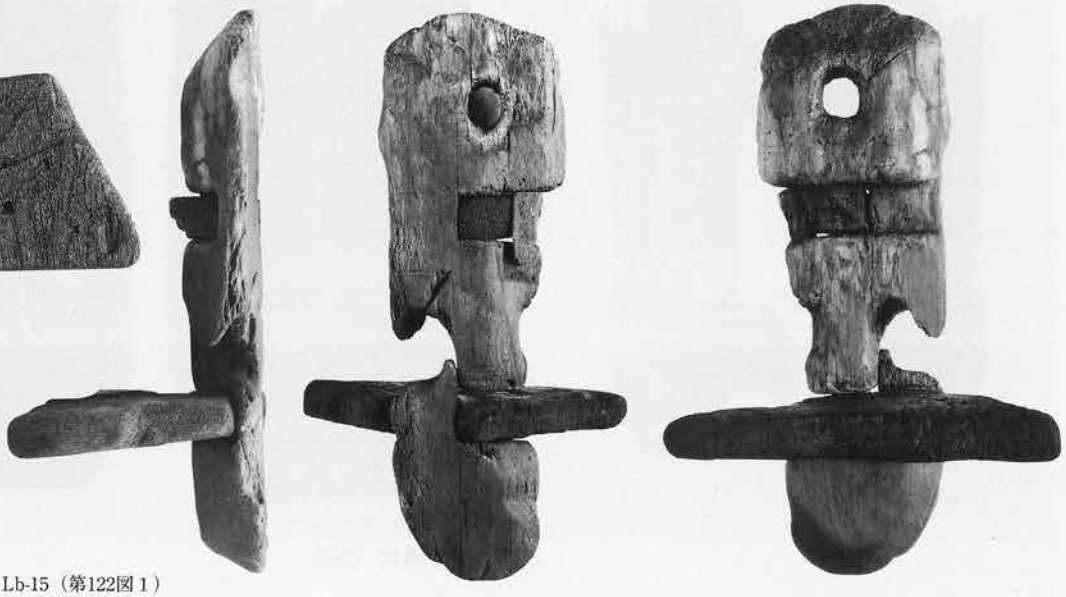
2　Lb-10（第116図１）

4　Lb-12（第123図２）

3　Lb-11（第117図１）

5　Lb-13（第115図10）

6　Lb-14（第128図２）



7　Lb-15（第122図１）

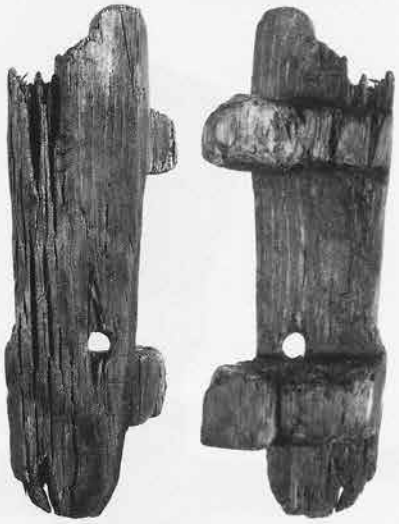
391　出土遺物（58）

1　Lb-16（第116図５）

2　Lb-17（第161図１）

3　Lb-18（第160図１）

4　Lb-19（第160図４）



5　Lb-21（第99図５）

6　Lb-20（第161図２）

392　出土遺物（59）

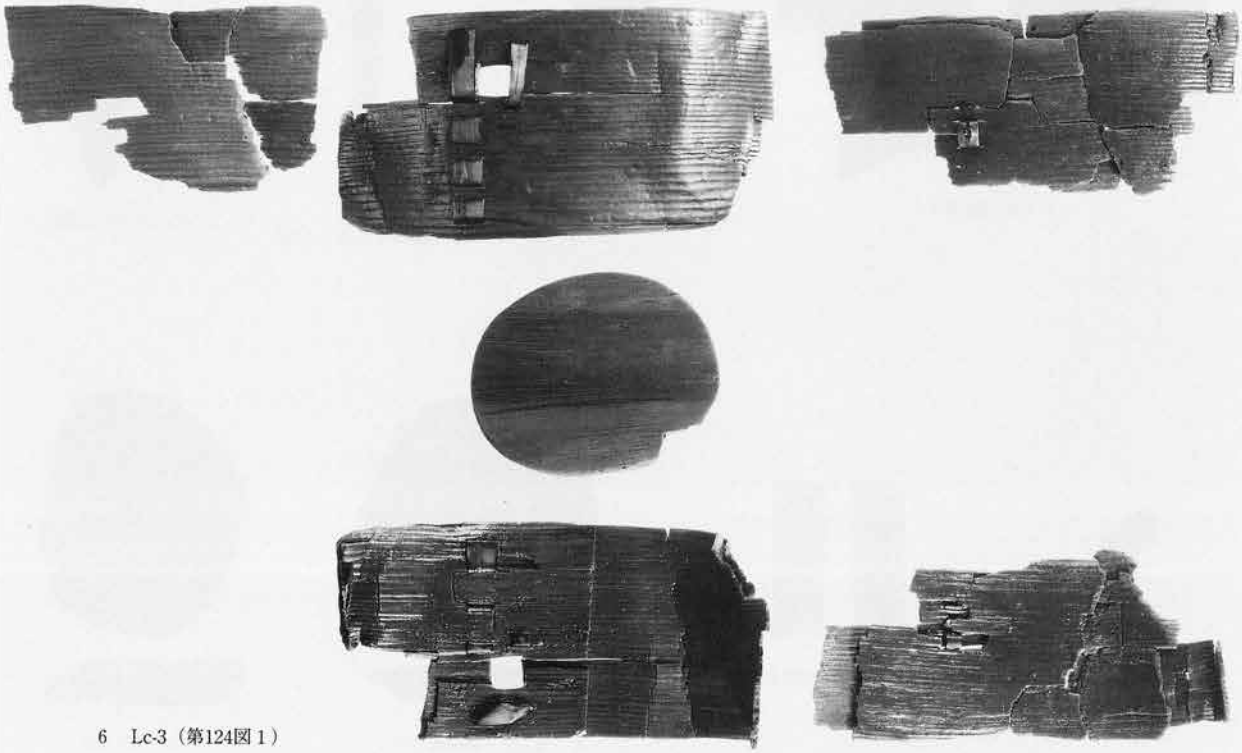
1　Lb-22（第99図５）

2　Lb-23（第122図４）

3　Lb-25（第132図２）

4　Lc-1（第148図13）

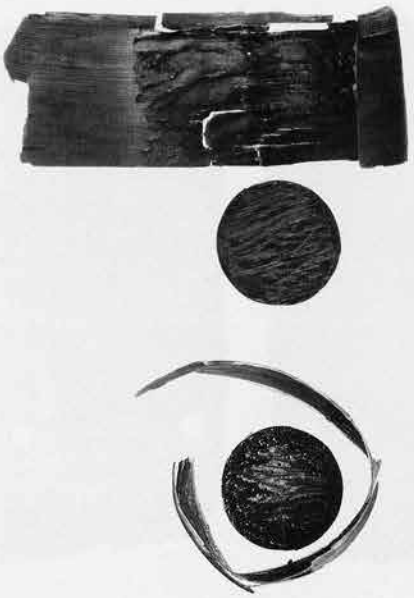
5　Lc-2（第123図４）



6　Lc-3（第124図１）

393　出土遺物（60）

1　Lc-4（第117図３）



2　Lc-5（第115図11）

3　Lc-6（第172図８）

4　Lc-7（第107図10）

5　Lc-8（SD2　１層）

6　Lc-12（第100図５）

7　Lc-14（SD2　２層）

8　Lc-16（第88図４）

9　Lc-15（第94図６）

10　Lc-18（第113図13）

394　出土遺物（61）

1　Lc-19（第128図３）

2　Lc-20（第128図４）

3　Lc-22（第124図２）

4　Lc-23（第117図３）

5　Lc-24（第115図12）

6　Lc-26（第132図３）

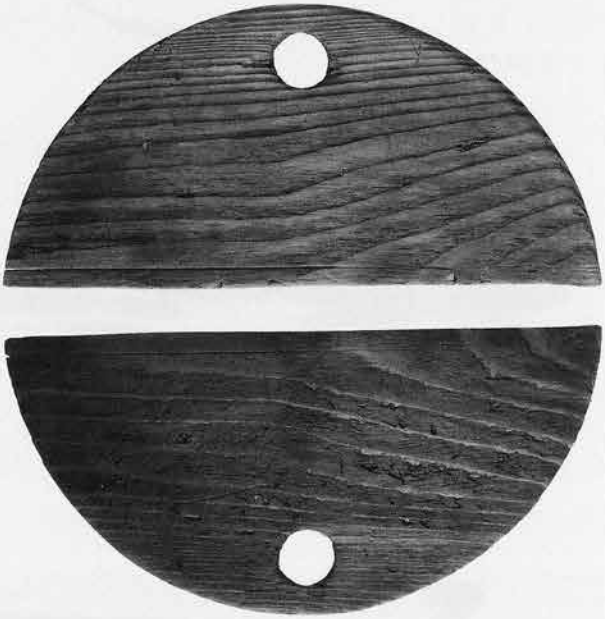
7　Lc-29（第160図５）

8　Lc-31（第160図７）

9　Lc-25（第124図４）

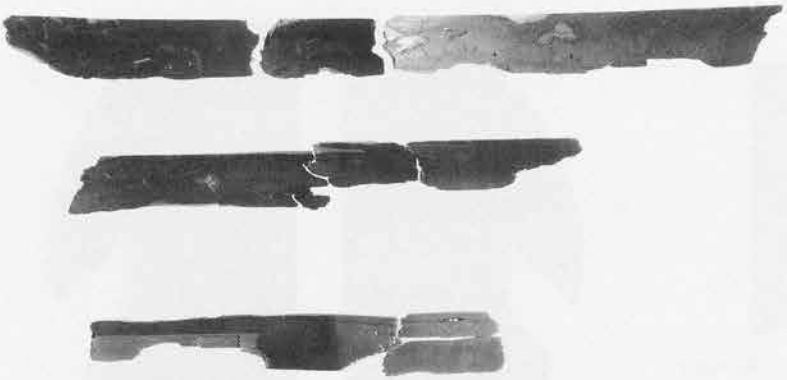
10　Lc-32（第148図８）

11　Lc-30（第160図６）

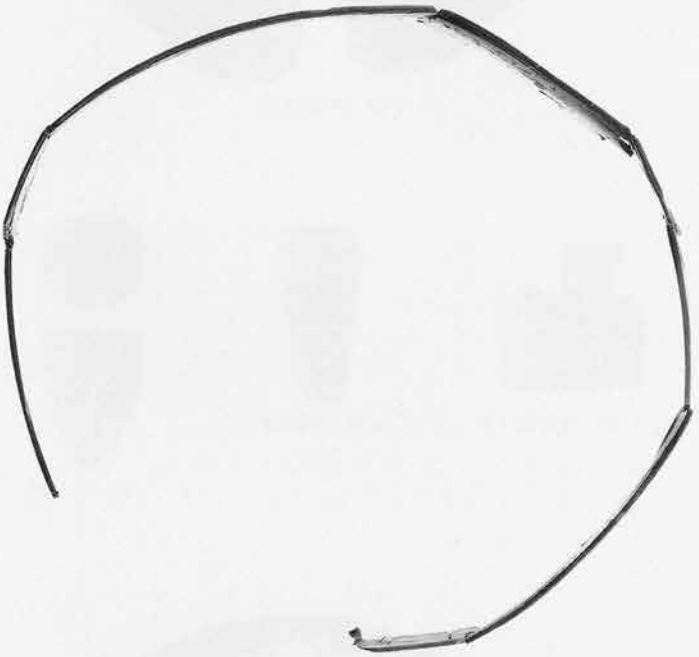


12　Lc-34（第151図２）

395　出土遺物（62）



2　Lc-36（第172図 9 ）



1　Lc-35（第151図 1 ）

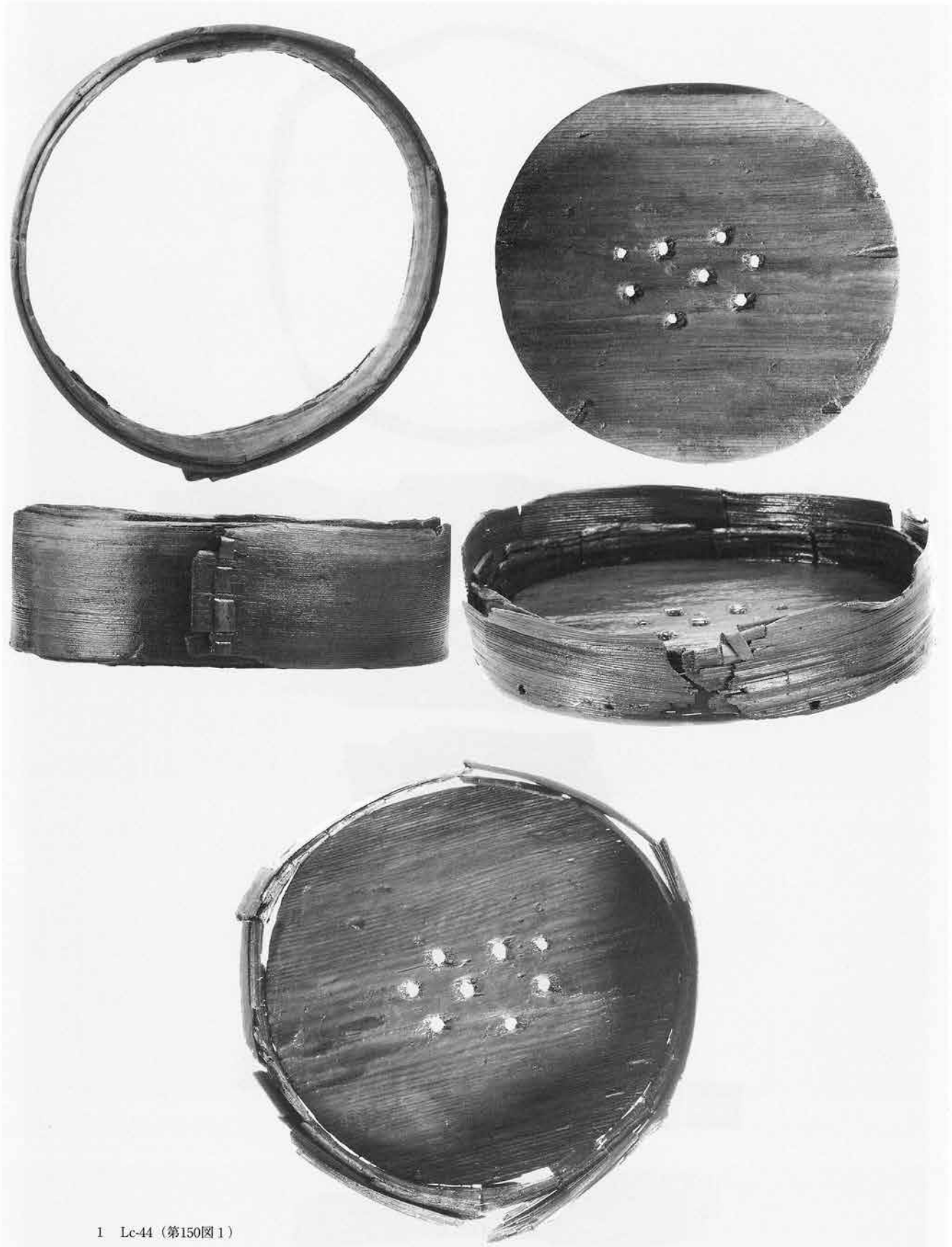
3　Lc-37（SD3　2 層）

4　Lc-40（SD4　2 層）

5　Nb-28（第89図 1 ）

6　Nb-29（第152図 2 ）

396　出土遺物（63）

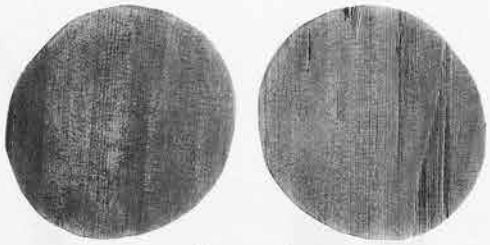


1　Lc-44（第150図1）

397　出土遺物（64）

1　Lc-44（第150図１）

398　出土遺物（65）

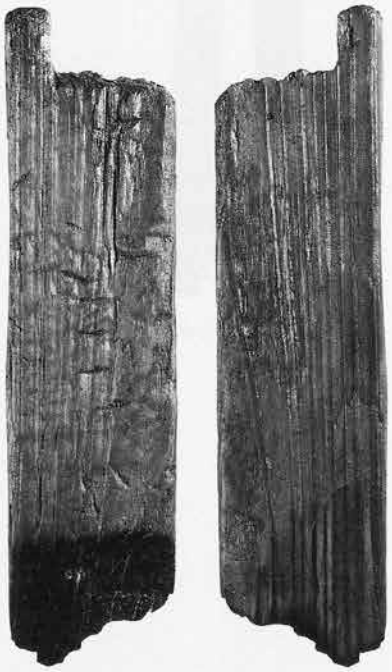


1　Lc-41（第160図 8 ）

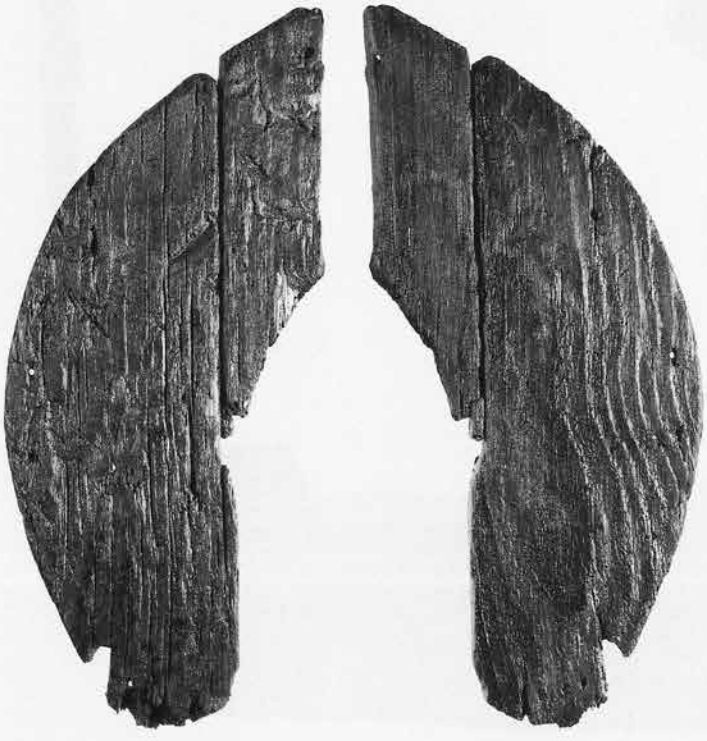
2　Lc-42（第161図 3 ）

3　Lc-43（第164図 5 ）

4 － 2　Lc-45b①（第100図 6 ）



4 － 3　Lc-45b②
（第100図 7 ）



4 － 1　Lc-45a（第101図 1 ）

4 － 4　Lc-45b③（第101図 2 ）

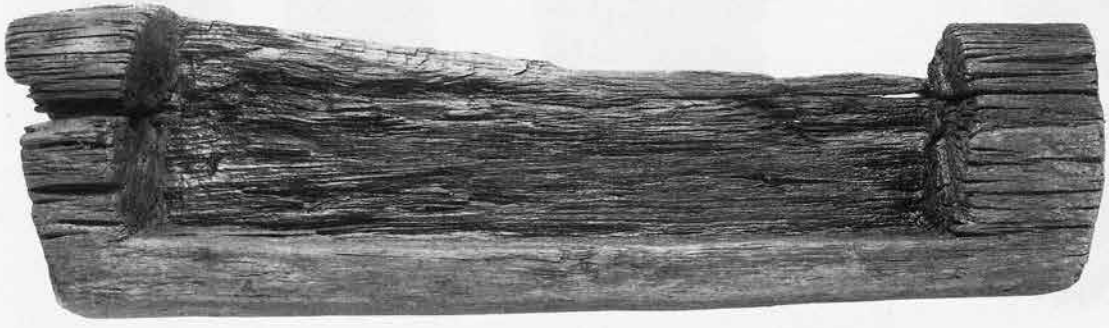
399　出土遺物（66）

1　Lc-46（第100図８）

2　Lc-48（第124図３）

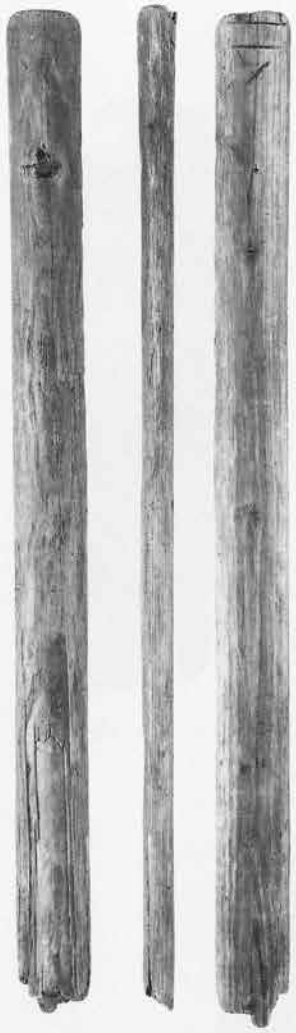
3　Lc-47（SD2　１層）

4　Lc-50（第107図12）



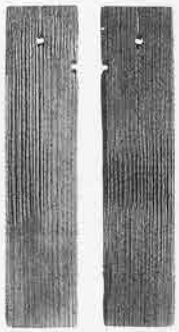
5　Lc-49（第88図５）

400　出土遺物（67）

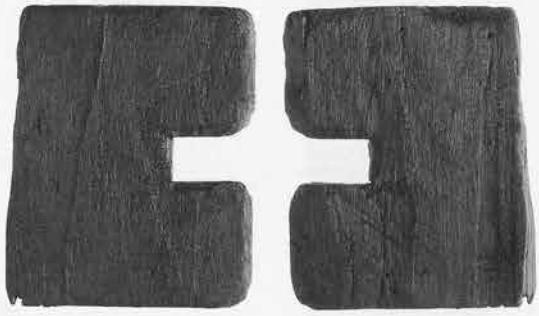


1　Lc-51（第107図11）

2　Lc-56（第94図10）



3　Lc-54（第94図７）



4　Lc-55（第94図８）

5　Lc-53（SD2　３層）

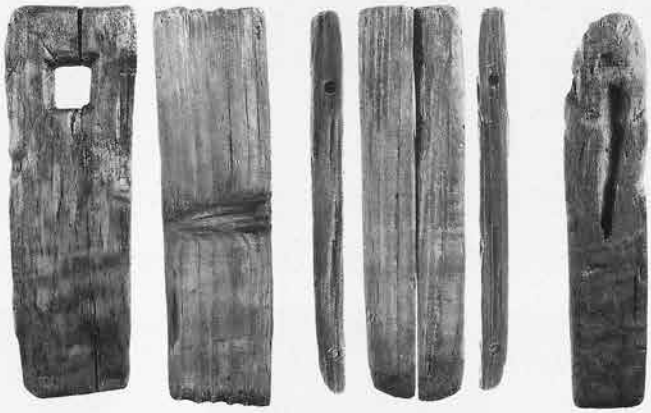
401　出土遺物（68）

1　Lc-52（SD2　3層）

2　Lc-57（第94図9）

3　Lc-58（第167図1）

4　Lc-59（第166図3）



5　Lc-60（第166図2）
Lc-66（第166図2）
Lc-67（第166図2）

402　出土遺物（69）

1　Lc-61（SK27　7層）

2　Lc-62（第166図5）

3　Lc-63-①（第167図3）
Lc-63-②（第167図2）

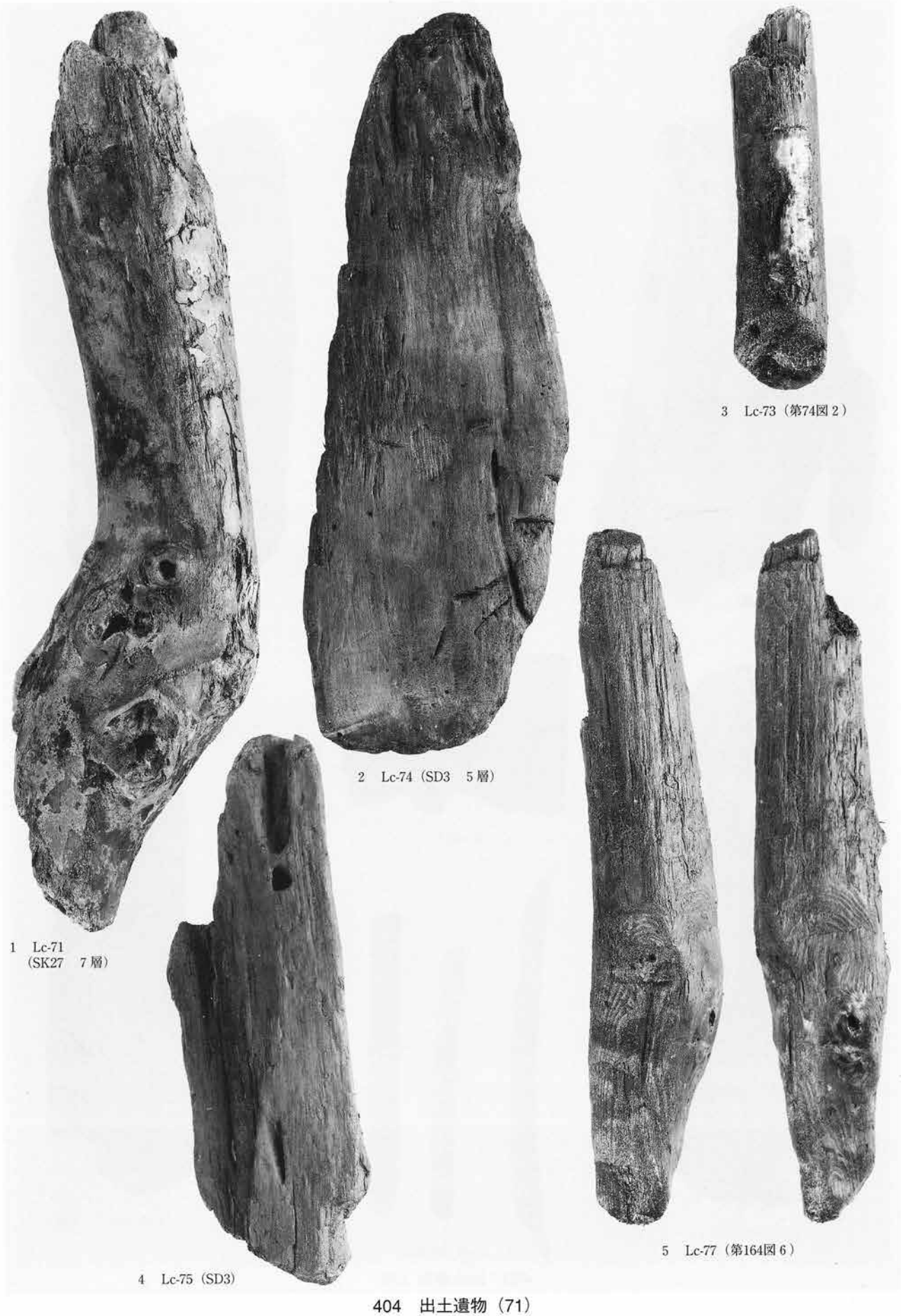
4　Lc-65（第167図4）

5　Lc-68（第166図6）

6　Lc-69（第166図4）

7　Lc-70（SK27　7層）

403　出土遺物（70）



1　Lc-71
（SK27　7層）

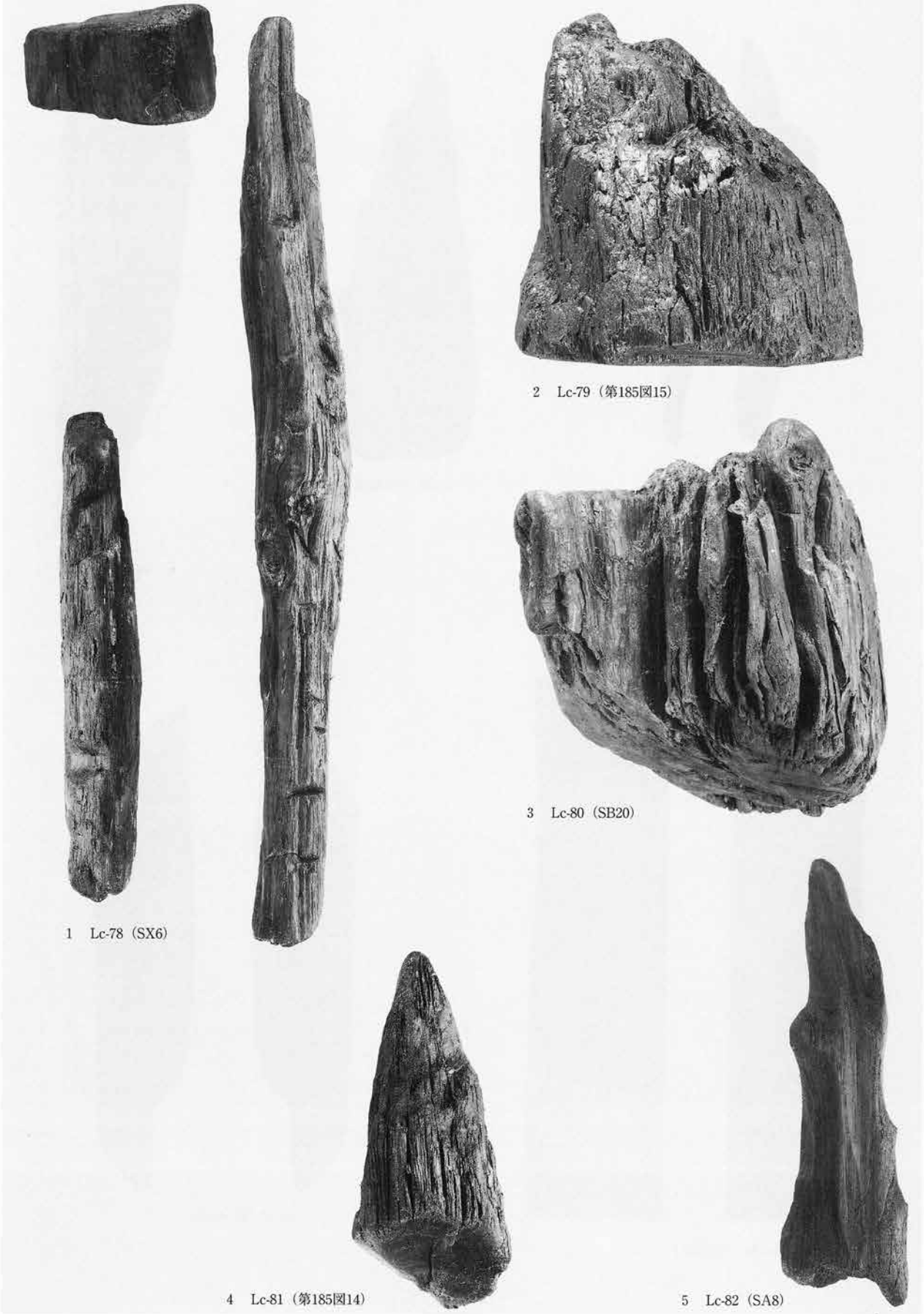
2　Lc-74（SD3　5層）

3　Lc-73（第74図2）

4　Lc-75（SD3）

5　Lc-77（第164図6）

404　出土遺物（71）



1　Lc-78（SX6）

2　Lc-79（第185図15）

3　Lc-80（SB20）

4　Lc-81（第185図14）

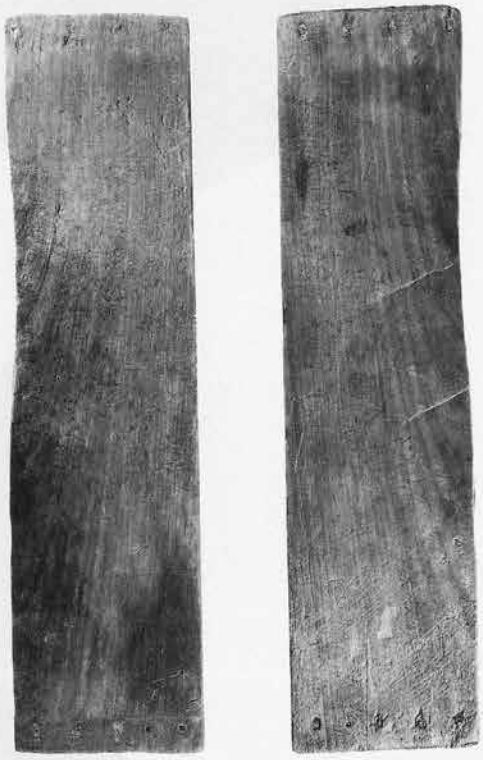
5　Lc-82（SA8）

405　出土遺物（72）

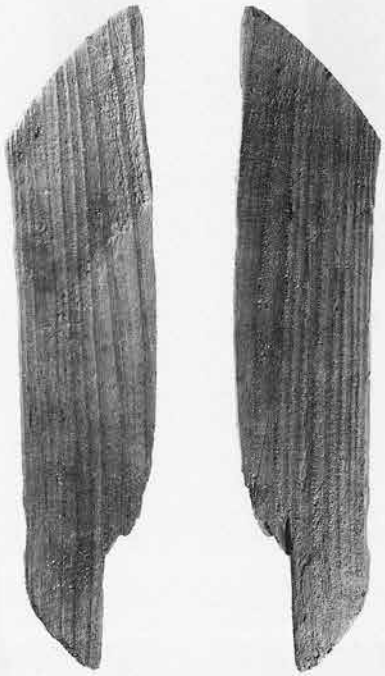
1　Lc-83（第180図３）

2　Lc-84（第180図１）

3　Lc-85（第180図２）



4　Lc-86（第186図３）



5　Lc-87（第186図１）

406　出土遺物（73）

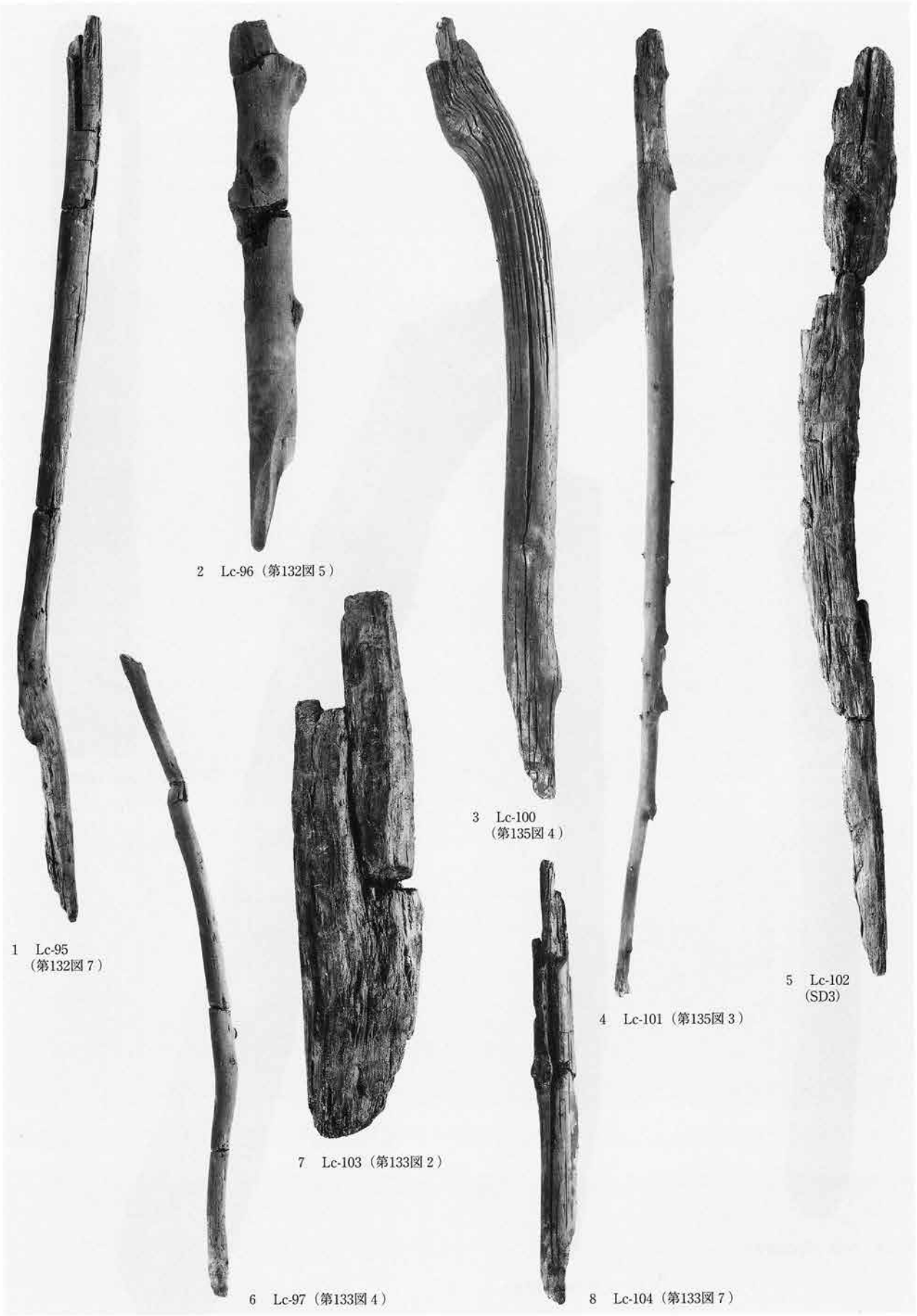
1　Lc-88（第186図２）

2　Lc-93（第133図３）

3　Lc-94（第132図６）

4　Lc-92（第135図５）

407　出土遺物（74）


1 Lc-95
（第132図 7）
2 Lc-96（第132図 5）
3 Lc-100
（第135図 4）
4 Lc-101（第135図 3）
5 Lc-102
（SD3）
6 Lc-97（第133図 4）
7 Lc-103（第133図 2）
8 Lc-104（第133図 7）

408 出土遺物（75）

1　Lc-105（第136図１）

2　Lc-106（第136図３）

3　Lc-107（第136図２）

409　出土遺物（76）

1　Lc-108（第137図１）

2　Lc-109（第139図３）

3　Lc-110（第134図３）

410　出土遺物（77）

1　Lc-111（第137図２）

2　Lc-112（第133図８）

3　Lc-113（第135図８）

4　Lc-116（第135図６）

5　Lc-117（第135図２）

6　Lc-119（第133図１）

7　Lc-120（第134図６）

8　Lc-114（第139図１）

411　出土遺物（78）

1　Lc-118（第139図２）

2　Lc-121（第134図５）

412　出土遺物（79）

1　Lc-122（第138図２）

2　Lc-123（第135図１）

413　出土遺物（80）

1　Lc-125（第138図３）

2　Lc-126（第134図７）

3　Lc-127（第133図５）

4　Lc-128（第134図２）

5　Lc-129（第134図１）

414　出土遺物（81）

1　Lc-130（第138図 1 ）

2　Lc-134（第134図 4 ）

3　Lc-135（SD3　2 層）

4　Lc-133（第167図 8 ）

415　出土遺物（82）

1　Lc-9（第100図４）

2　Lc-10（第100図１）

3　Lc-11（第100図２）

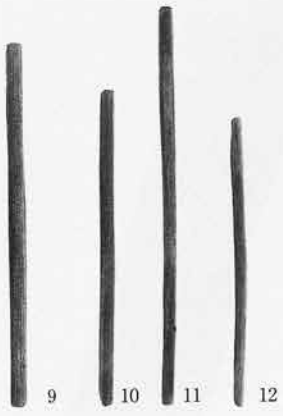
4　Lc-17（第111図１～４）

5　Lc-13（第101図３）

6　Lc-21（第123図１）

7　Lc-27（第160図３）

8　Lc-28（第160図２）



9　Lc-33（第148図９～12）

416　出土遺物（83）

1　Kh-1（第19図 9 ）

2　Kh-2（第25図11）

3　Kh-3（第85図13）

4　Kh-4（第10図14）

5　Kh-5（第32図17）

6　Kh-6（第 9 図 4 ）

7　Ki-1（第25図10）

8　Ki-2（第37図 1 ）

9　Ki-3（第187図24）

10　Ki-4（第187図23）

11　Kj-1（第95図 2 ）

12　Ka-4（第22図12）

13　Ka-5（第 9 図 8 ）

14　Ka-7（第13図 2 ）

15　Ka-105（第187図25）

16　Ka-108（第30図 6 ）

17　Ka-111（第40図 1 ）

417　出土遺物（84）

1　Ka-156（第103図１）

2　Ka-157（第103図２）

3　Ka-158（第153図１）

4　Ka-170（第95図１）

5　Ka-192（第164図９）

6　Ka-214（SX2）

7　Kf-1（第125図１）

8　Kf-2（第188図１）

9　Ke-1（第15図６）

10　Ke-2（第22図11）

11　Kg-1（第13図３）

12　Kx-3
(SI7)

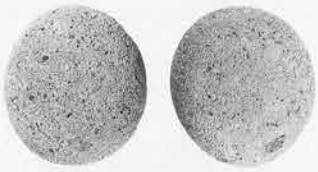
13　Kx-4
(SI7)

14　Kx-5
(SI7)

418　出土遺物（85）

1　Kc-1（第25図14）

2　Kc-2（第19図10）



3　Kc-5（第22図13）

4　Kc-6（第28図３）

5　Kc-7（第30図９）

6　Kc-8（第30図８）

7　Kc-9（第30図10）

8　Kc-10（第30図11）

9　Kc-11（第37図５）

10　Kc-12（第37図３）

11　Kc-13（第37図８）

12　Kc-15（第37図４）

13　Kc-18（第37図６）

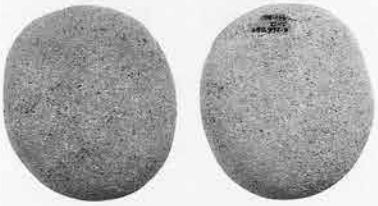
14　Kc-19（第42図４）

419　出土遺物（86）

1　Kc-20（第44図２）

2　Kc-21（第51図５）

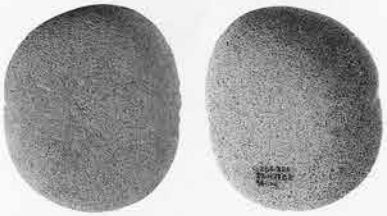
3　Kc-22（第53図８）



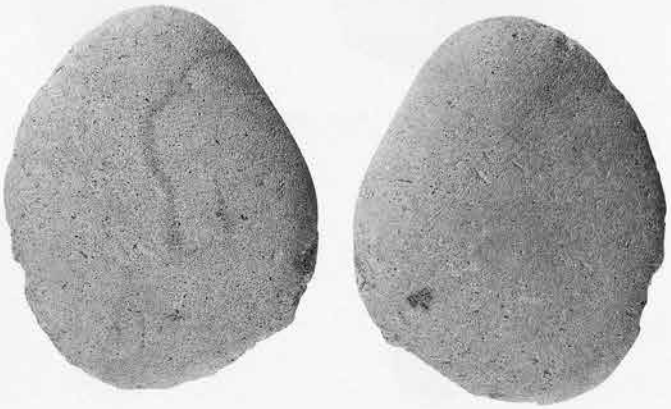
4　Kc-24（第72図10）

5　Kc-23（第57図１）

6　Kc-26（第74図５）



7　Kc-27（第73図12）

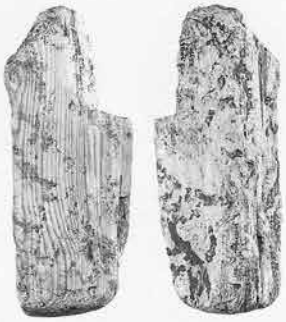


8　Kc-28（第74図６）

9　Kc-29（第74図７）

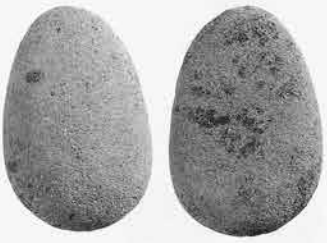
10　Kc30+31（第73図11）

420　出土遺物（87）

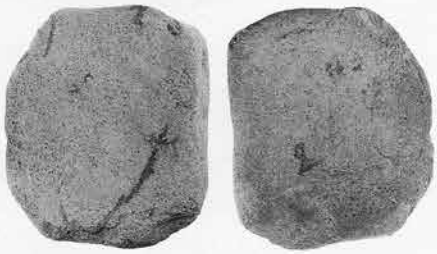


1　Kc-38（第181図12）

2　Kc-39（第188図５）



3　Kc-41（第44図３）



4　Kc-40（第37図７）

5　Kc-43（J15　Pit6）

6　Kc-44（第51図４）

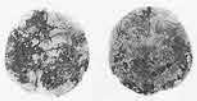
9　Kc-49（SK37）

7　Kc-46（第125図７）

8　Kc-47（第130図３）

421　出土遺物（88）

1　Kd-1（第181図 1）



2　Kd-2（第103図 3）

3　Kd-3（第103図 5）

4　Kd-4（第103図 4）

5　Kd-5（第125図 3）

6　Kd-6（第162図 7）

7　Kd-12（第112図 2）

8　Kd-15（第88図 9）

9　Kd-16（第131図 4）

10　Kd-18（第189図 2）

11　Kd-20（第189図 5）

12　Kd-21（第188図 6）

13　Kd-22（第129図 1）

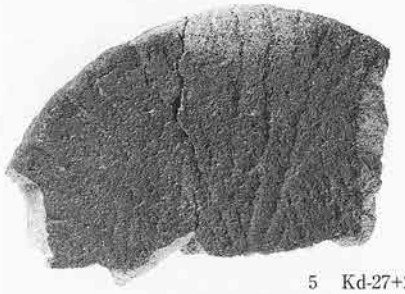
422　出土遺物（89）

1　Kd-23（第188図２）

2　Kd-24（第25図13）

4　Kd-29（第125図６）

3　Kd-25（第130図２）

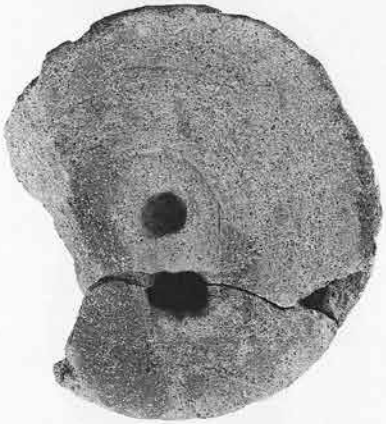


5　Kd-27+28（第126図13）

6　Kd-31（第125図5a・5b）

7　Kd-32（第125図４）

8　Kd-33（第126図14）



9　Kd-30+47（第130図１）

423　出土遺物（90）

1　Kd-34（第153図 4 ）

2　Kd-35（第153図 3 ）

3　Kd-36（第153図 2 ）

4　Kd-37（第153図 6 ）

5　Kd-41（第189図 4 ）

6　Kd-38（第188図 3 ）

7　Kd-40（第180図16）

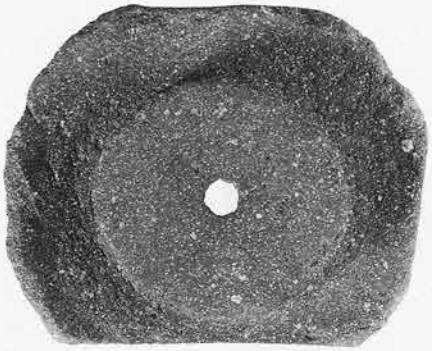
9　Kd-42（第173図 6 ）

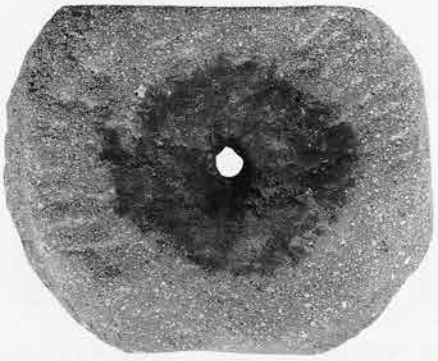
8　Kd-39（第188図 4 ）

10　Kd-44（第170図 8 ）

424　出土遺物（91）

1　Kd-46（第153図５）





2　Kd-48（第112図１）

3　Kd-49（第189図３）

4　Kd-50（第25図12）

5　Kd-54（第189図１）

6　Kd-55（第30図７）

7　Kd-56（第32図18）

8　Kd-57（第37図２）

9　Kd-58（第72図９）

13　Kd-61+69（第173図３）

10　Kd-59（第167図９）

11　Kd-60（第167図10）

12　Kd-62（第181図２）

425　出土遺物（92）

1　Kd-65（第59図２）

2　Kd-66（第74図４）

3　Kd-67（第73図10）

4　Kd-68（第79図５）

5　Kd-70（第173図１）

6　Kd-71（第173図２）

7　Kd-72（第181図７）

8　Kd-74（第181図８）

9　Kd-75（第181図４）

10　Kd-76（第181図５）

11　Kd-77（第181図６）

12　Kd-84（第112図６）

13　Kd-85（第108図９）

14　Kd-86（第111図９）

15　Kd-87（第111図６）

16　Kd-88（第111図７）

17　Kd-89（第111図10）

18　Kd-90（第111図８）

19　Kd-92（第112図５）

426　出土遺物（93）

1　Kd-93（第103図 7 ）

2　Kd-94（第103図 6 ）

3　Kd-97（第108図 2 ）

4　Kd-98（第108図 3 ）

5　Kd-99（第108図 8 ）

6　Kd-100（第108図 6 ）

7　Kd-102（第88図 8 ）

8　Kd-104（第95図 4 ）

9　Kd-109（第95図 3 ）

10　Kd-111（第103図 8 ）

11　Kd-115（第108図 5 ）

12　Kd-117（第108図 4 ）

13　Kd-118（第108図 1 ）

14　Kd-119（第108図 7 ）

15　Kd-120（第112図 4 ）

16　Kd-123（第111図12）

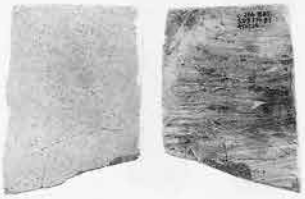
17　Kd-124（第111図11）

18　Kd-131（第131図 1 ）

19　Kd-133（第131図 2 ）

20　Kd-134（第131図 3 ）

21　Kd-135（第112図 3 ）



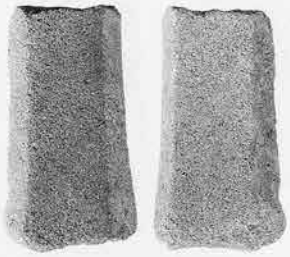
22　Kd-137（第117図 4 ）

427　出土遺物（94）

1　Kd-139（第125図２）

2　Kd-143（第141図９）

3　Kd-144（第162図10）



4　Kd-145（第154図５）

5　Kd-147（第162図８）

6　Kd-148（第154図６）

7　Kd-149（第154図８）

8　Kd-150（第162図９）

9　Kd-151（第154図３）

10　Kd-152（第154図２）

11　Kd-153（第154図４）

12　Kd-155（第154図１）

13　Kd-156（第154図７）

15　Kd-169（第139図５）

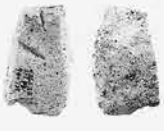
14　Kd-168（第17図３）

16　Kd-171（第162図11）

17　Kd-173（第141図10）

18　Kd-174（第181図11）

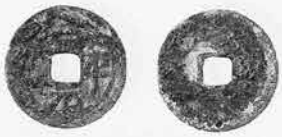
19　Kd-175（第181図９）



20　Kd-180（第181図10）

21　Kd-183（第181図３）

428　出土遺物（95）



1　Na-1（第172図10）

2　Na-2（第172図11）

3　Na-3（第172図12）

4　Na-4（第172図13）

5　Na-5（第172図14）

6　Na-6（第172図15）

7　Na-7（第172図16）

8　Na-8（第79図 6 ）

9　Na-9（第73図 3 ）

10　Na-10（第180図10）

11　Na-11（第180図15）

12　Na-12（第180図11）

13　Na-13（第187図15）

14　Na-14（第187図14）

15　Na-15（第180図12）

16　Na-16（第180図13）

17　Na-17（第187図19）

18　Na-18（第187図17）

429　出土遺物（96）

1　Na-19（第187図16）

2　Na-20（第180図14）

3　Na-21（第102図５）

4　Na-22（第102図６）

5　Na-23（第102図７）

6　Na-24（第102図８）

7　Na-25（第102図９）

8　Na-26（第102図10）

9　Na-27（第102図11）

10　Na-28（第102図12）

11　Na-29（第102図13）

12　Na-30（第103図14）

13　Na-31（第102図15）

14　Na-32（第103図22）

15　Na-33（第102図16）

16　Na-34（第102図17）

17　Na-35（第102図18）

18　Na-36（第102図19）

430　出土遺物（97）

1　Na-37（第102図21）

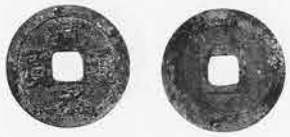
2　Na-38（第102図20）

3　Na-40（第162図１）

4　Na-41（第162図２）

5　Na-42（第162図４）

6　Na-43（第152図３）



7　Na-44（第152図１）

8　Na-45（第152図２）

9　Na-46（第152図４）

10　Na-47（第162図３）

11　Na-48（第124図６）

12　Na-49（第180図４）

13　Na-50（第180図５）

14　Na-51（第172図18）

15　Na-52（第187図３）

16　Na-53（第187図５）

17　Na-54（第187図１）

18　Na-55（第187図２）

431　出土遺物（98）

1　Na-56（第187図10）

2　Na-57（第180図 6 ）

3　Na-58（第187図 4 ）

4　Na-59（第180図 8 ）

5　Na-60（第180図 7 ）

6　Na-61（第187図 9 ）

7　Na-63（第75図 5 ）

8　Na-64（第187図 7 ）

9　Na-65（第187図12）

10　Na-66（第187図11）

11　Na-67（第187図13）

12　Na-68（第187図 6 ）

13　Na-69（第187図14）

14　Na-70（第187図 8 ）

15　Na-71（第172図17）

16　Nb-30（第152図 8 ）

432　出土遺物（99）

1　Nb-1（第107図13）

2　Nb-2（第107図14）

3　Nb-4（第102図３）

4　Nb-5（第102図４）

5　Nb-6（第111図５）

6　Nb-7（第102図４）

7　Nb-9（第152図７）

8　Nb-10（第152図10）

9　Nb-11（第152図５）

10　Nb-12（第152図12）

11　Nb-13（第152図９）

12　Nb-14（第152図11）

13　Nb-15（第164図７）

14　Nb-16（第164図８）

15　Nb-17（第75図６）

16　Nb-18（第75図７）

17　Nb-19（第71図８）

18　Nb-20（第187図20）

19　Nb-21（第187図22）

20　Nb-23（第170図６）

②

①

21　Nb-31（第187図21）

433　出土遺物（100）

報告書抄録

ふりがな	もとぶくろいせき
書名	元袋遺跡
副書名	都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ
巻次	2
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第272集
編著者名	主浜　光朗
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１　　TEL　022-214-8894
発行年月日	平成16年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
もとぶくろいせき 元袋遺跡	せんだいし 仙台市 たいはくく 太白区 おおのだあざ 大野田字 もとぶくろ 元袋	04100	01179	38° 12′ 57″	140° 52′ 51″	1993.04.07 ～ 1995.10.13	3,380㎡	都市計画道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元袋遺跡	集落跡	弥生時代	水田跡	弥生土器・石器	
		古墳時代 （前期）	土坑	土師器	
		奈良・ 平安時代	竪穴住居跡・土坑・ 溝跡	土師器・須恵器	
		中世・ 近世	屋敷跡・堀跡・井戸跡	陶磁器・木製品・ 石製品	

仙台市文化財調査報告書第272集

元 袋 遺 跡

—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—
発掘調査報告書Ⅱ

2004年3月

発行　仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022（214）8894

印刷　株式会社 東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24－24　TEL263-1166